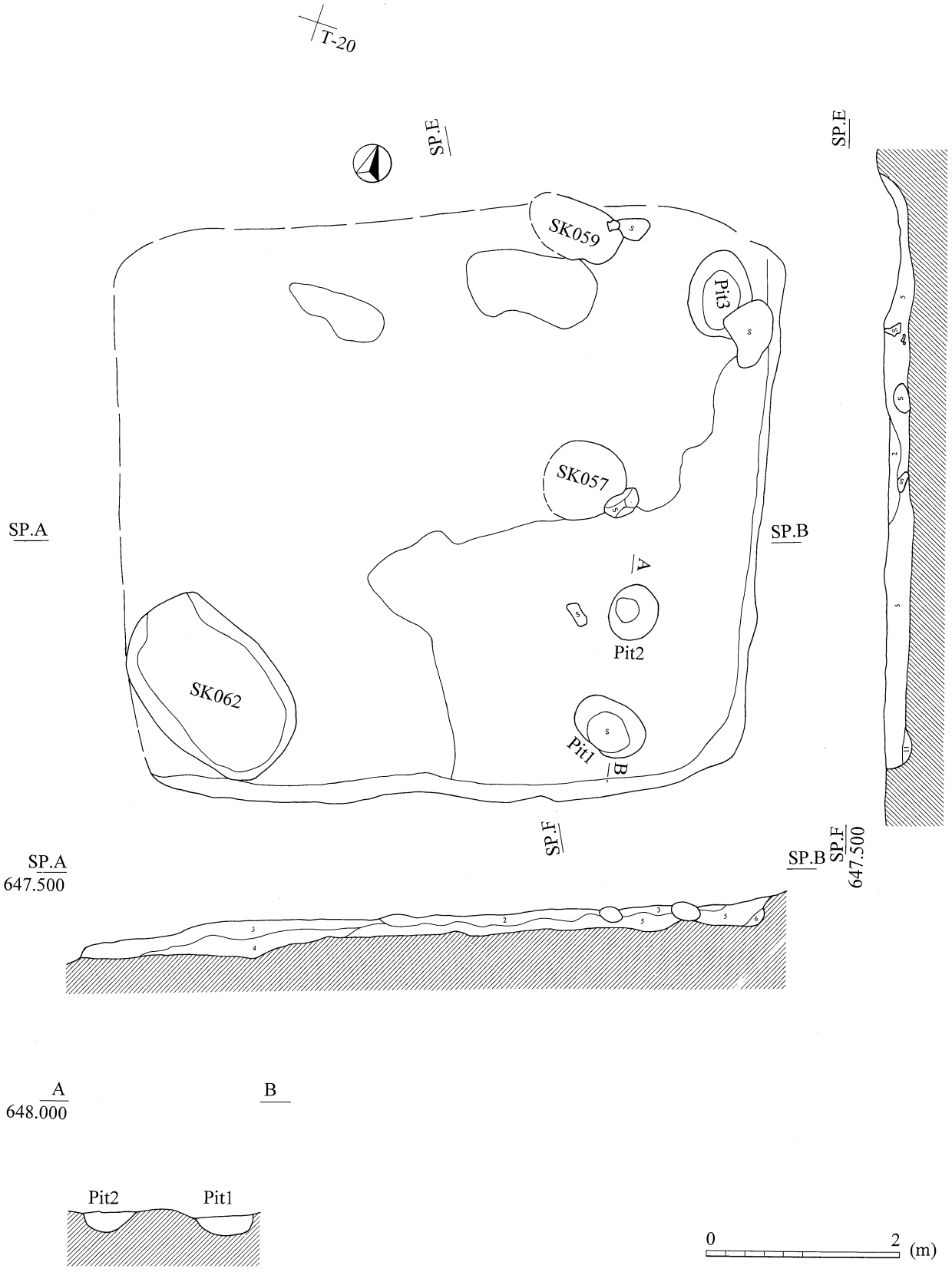
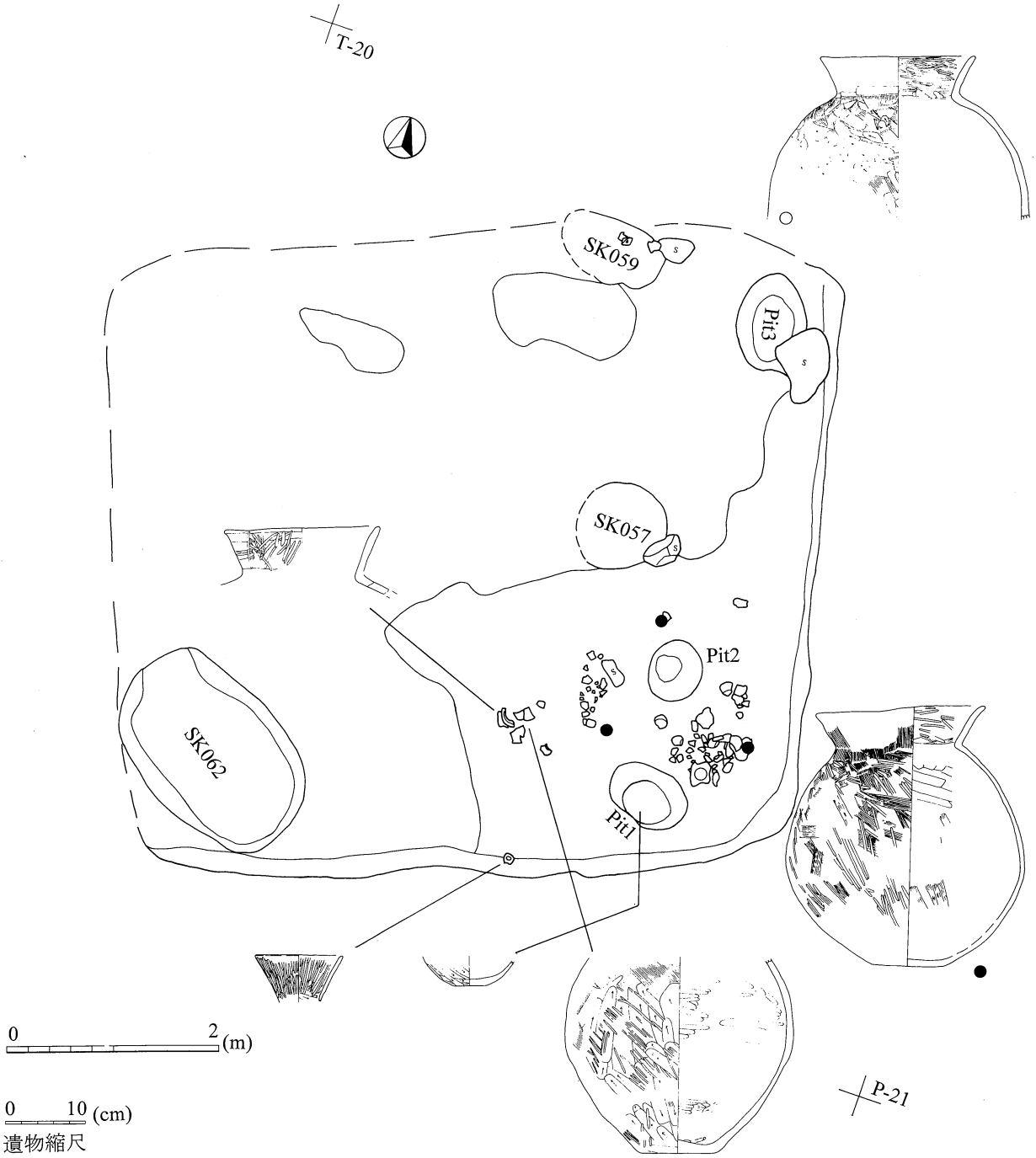
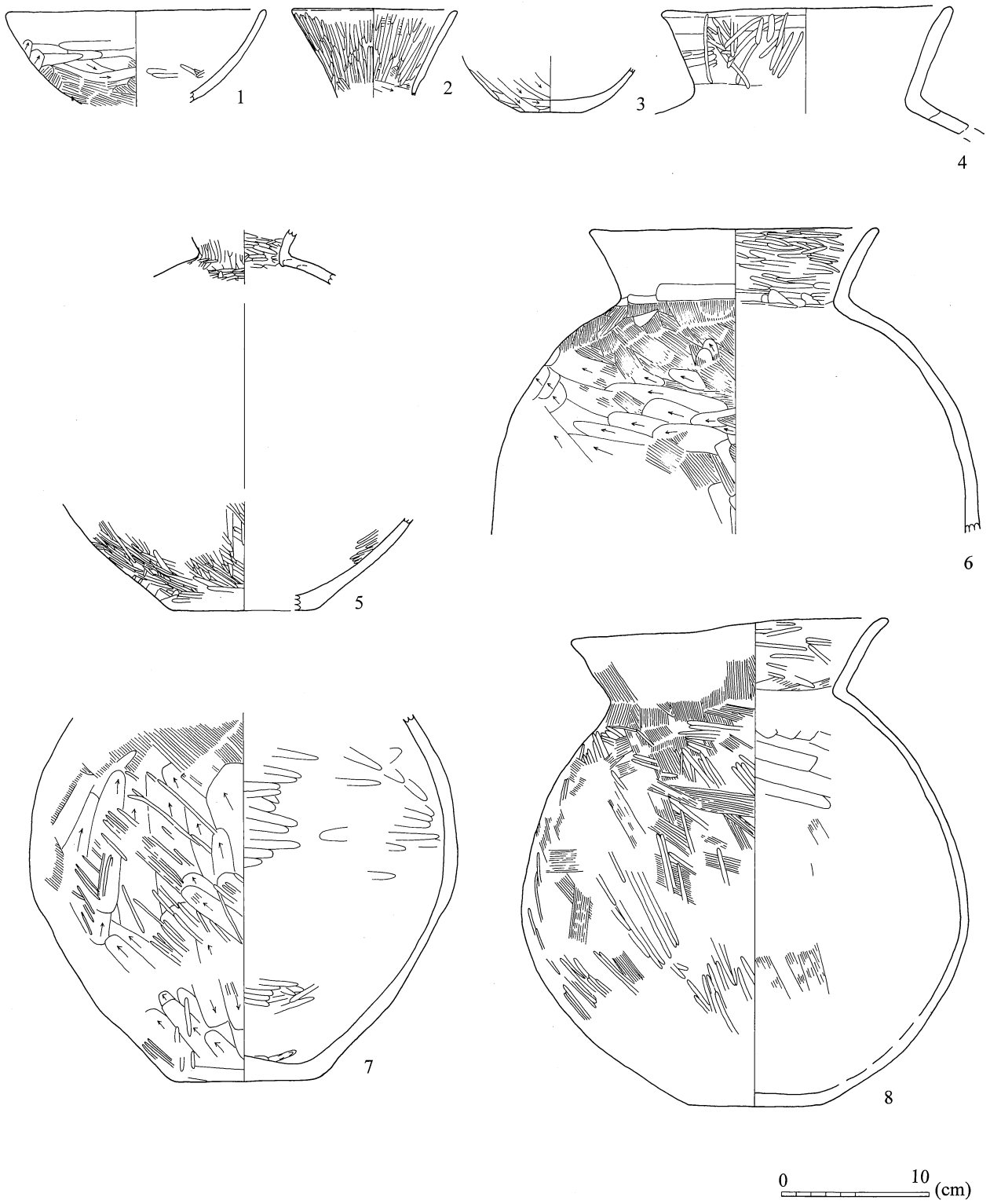


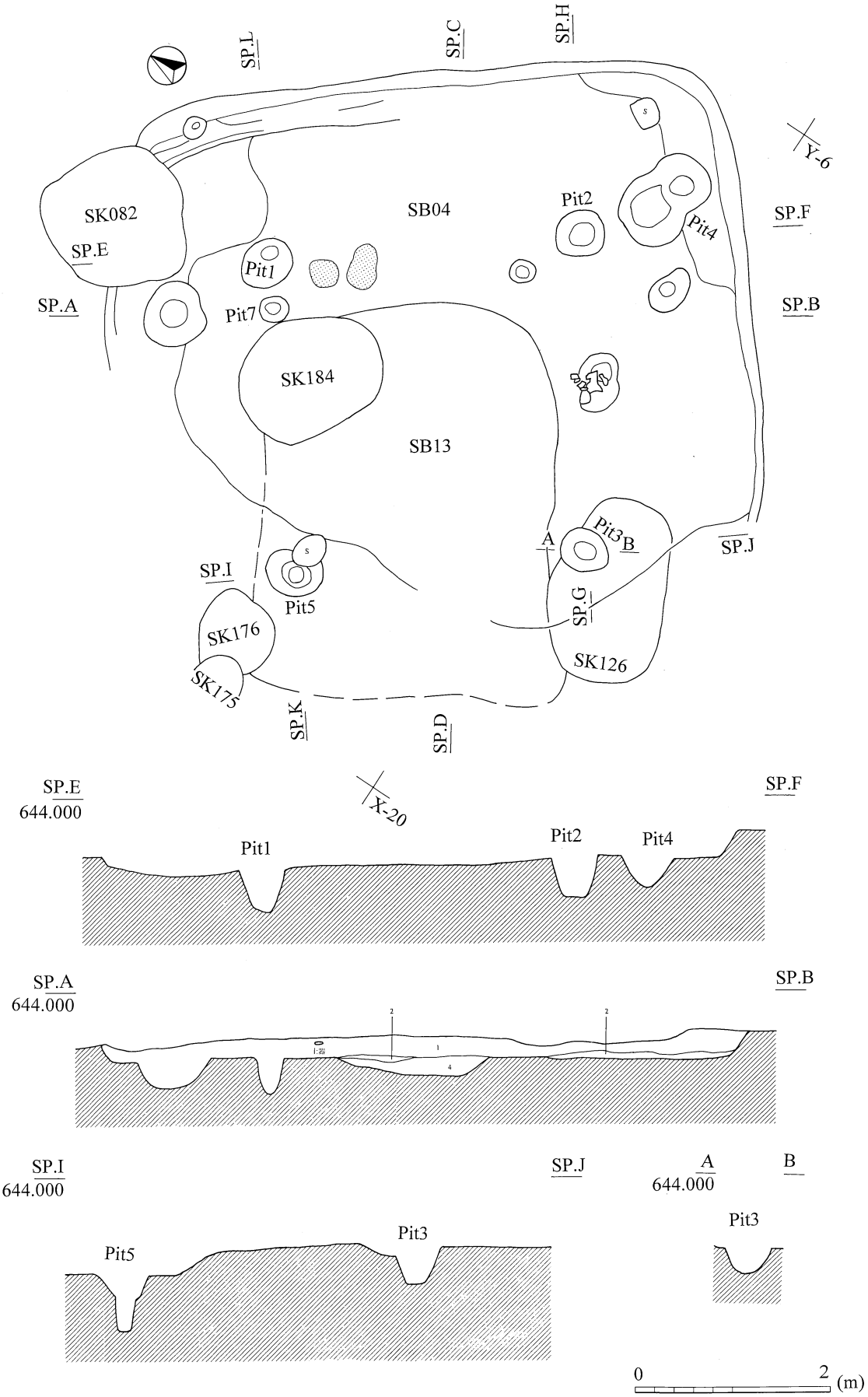
第90図　竪穴住居跡　ＳＢ01



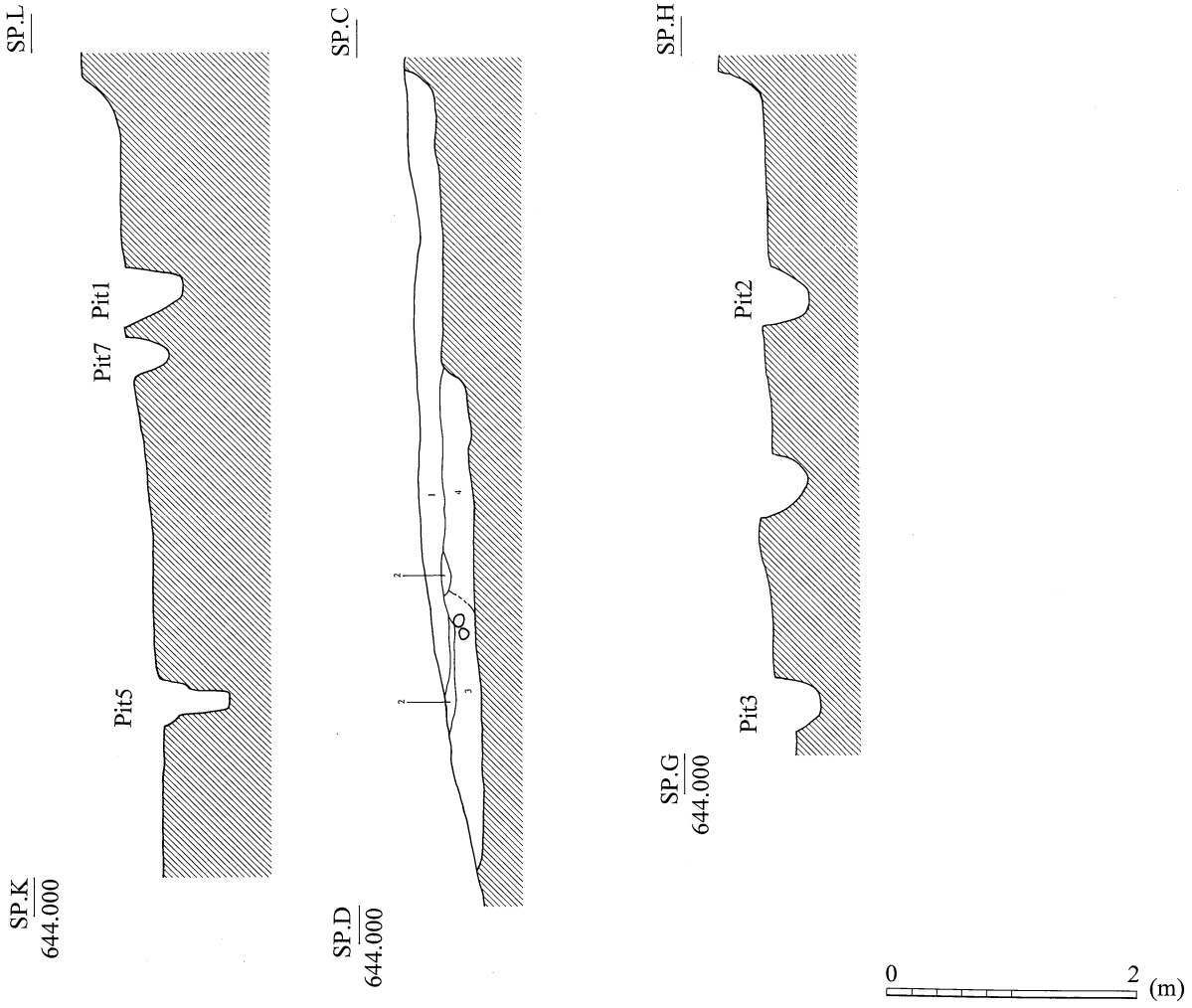
第91図　竪穴住居跡　ＳＢ01土器出土状況



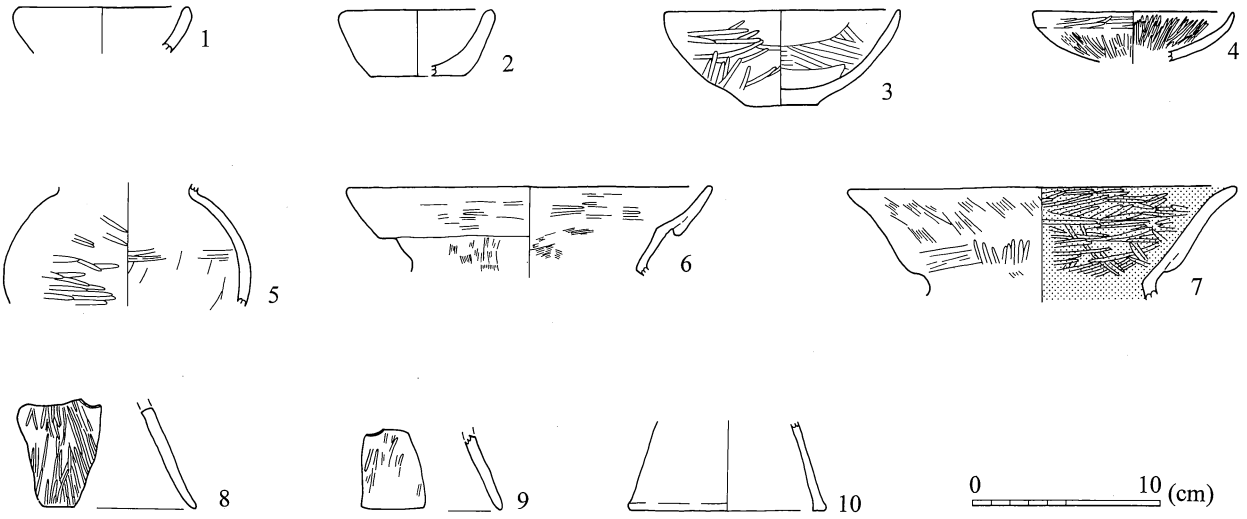
第92図　竪穴住居跡　ＳＢ01出土土器



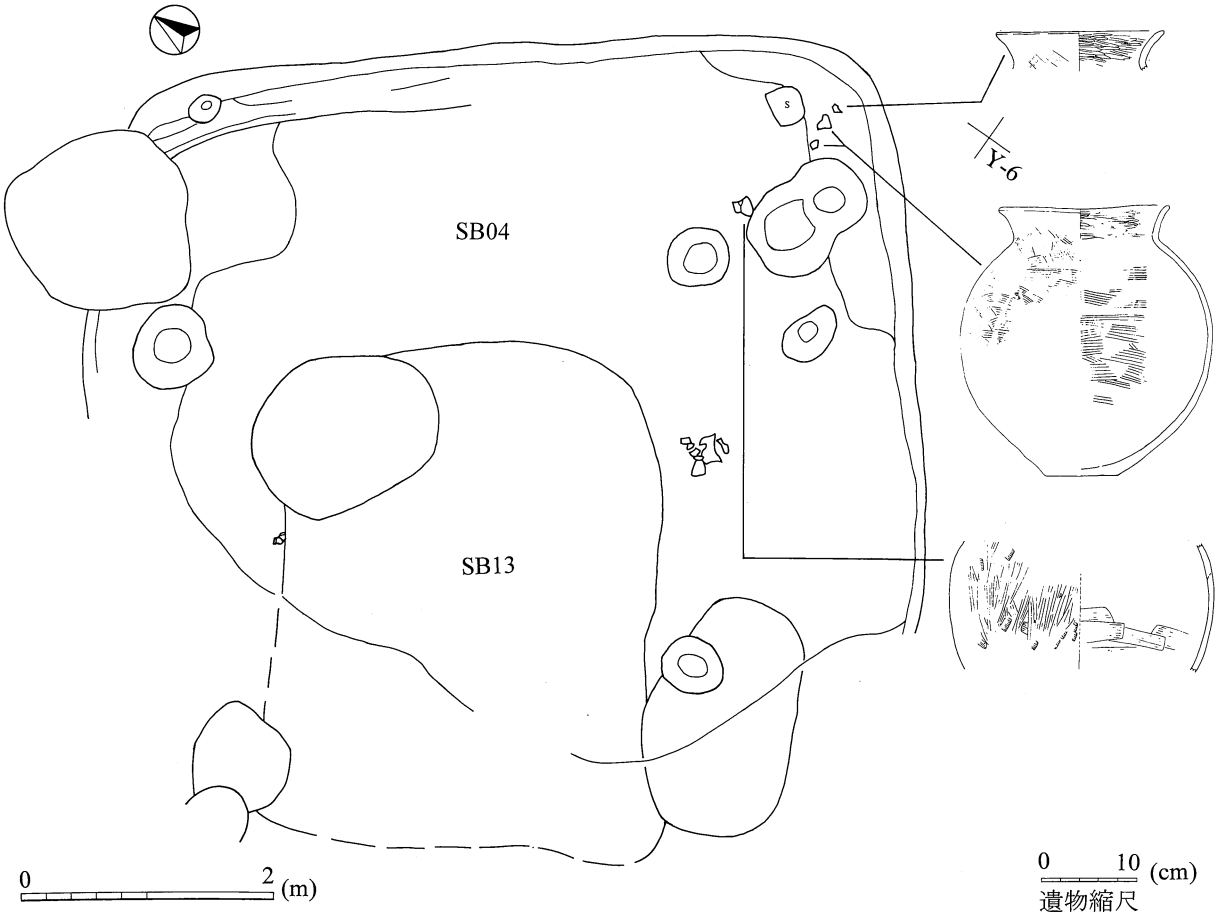
第93図　竪穴住居跡　ＳＢ04(1)



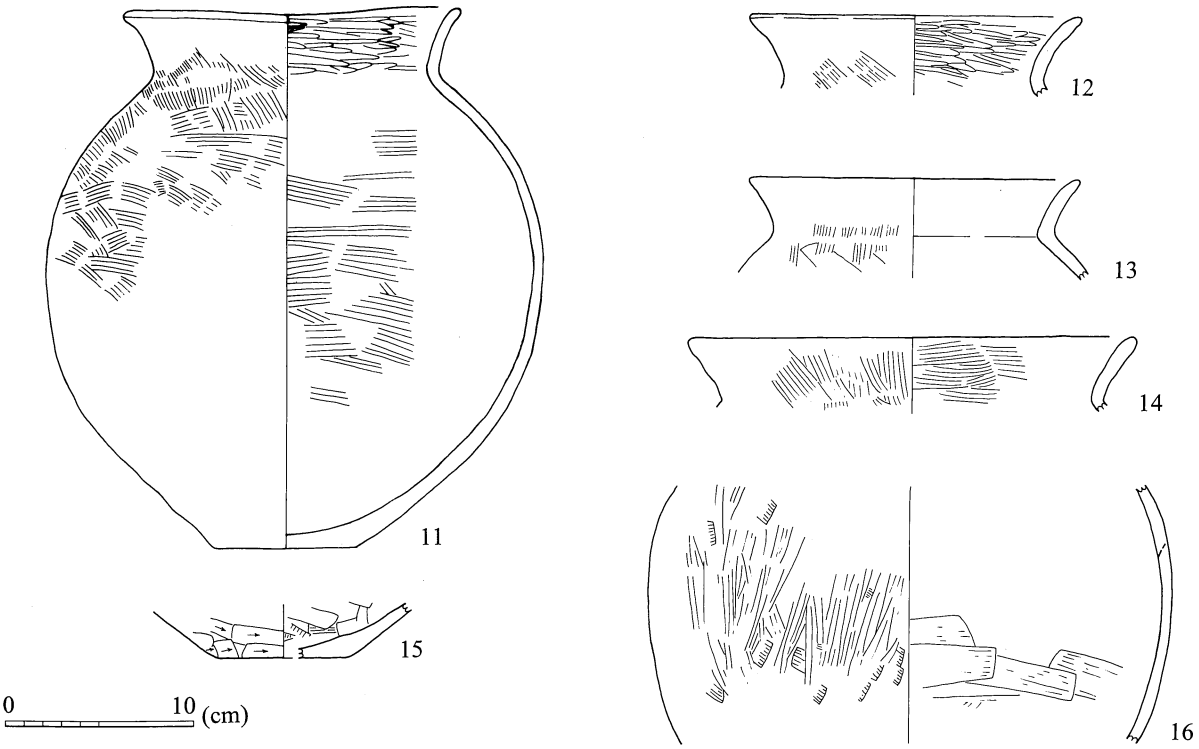
第94図　竪穴住居跡　ＳＢ04(2)



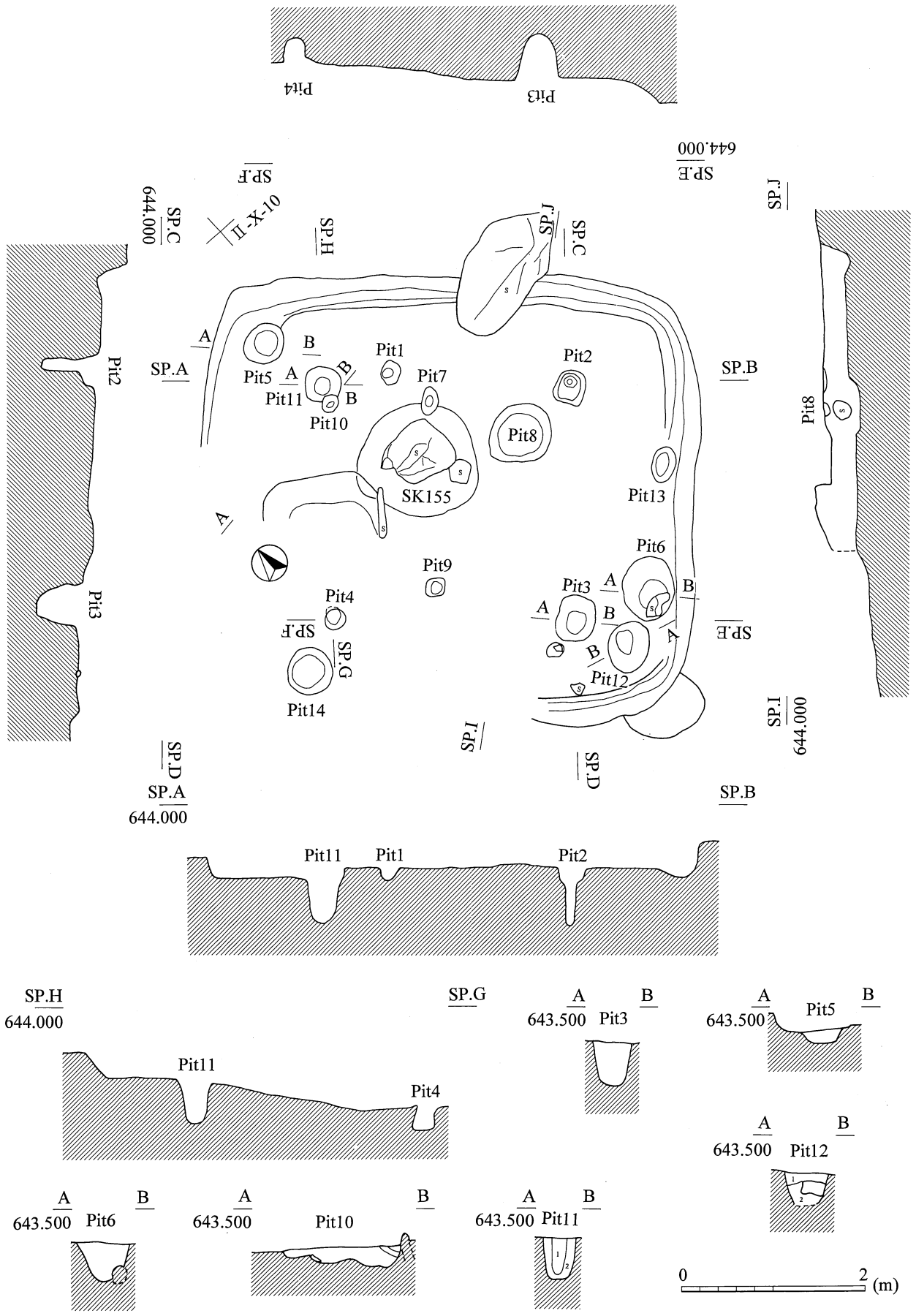
第95図　竪穴住居跡　ＳＢ04出土土器(1)



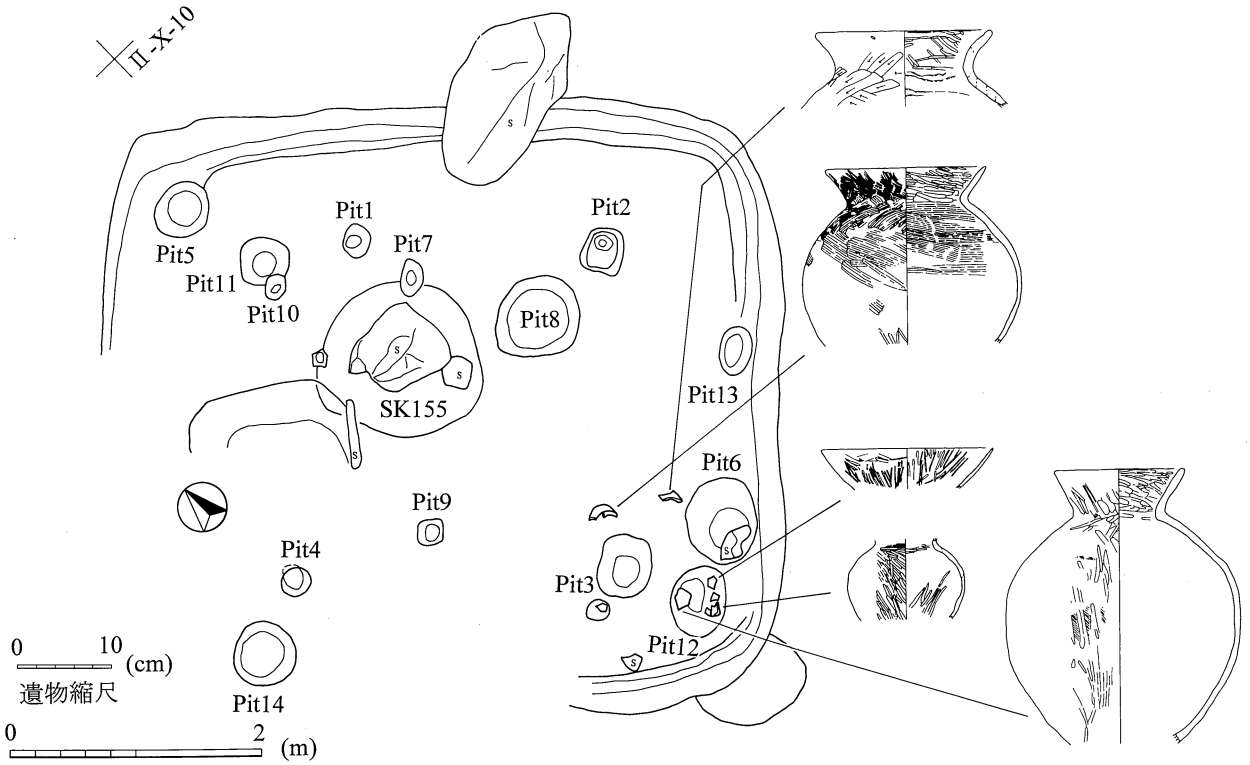
第96図　竪穴住居跡　ＳＢ04土器出土状況



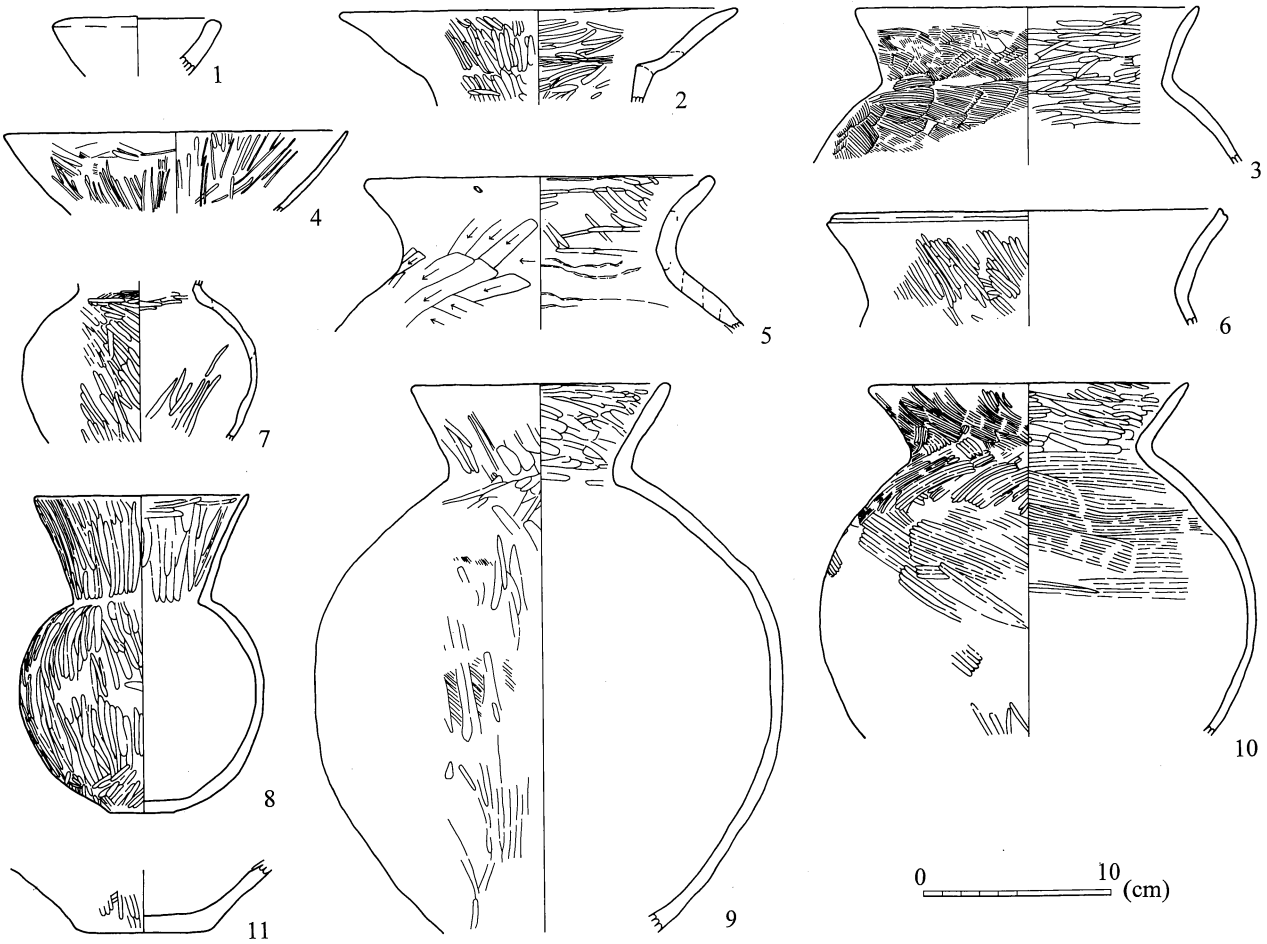
第97図　竪穴住居跡　ＳＢ04出土土器(2)



第98図　竪穴住居跡　ＳＢ05



第99図　竪穴住居跡　ＳＢ05土器出土状況



第100図　竪穴住居跡　ＳＢ05出土土器

ＳＢ07（第101図）　　位置　①区Ⅱ－Ｘ－13・14

検　出　表土を剝いだところ、黒褐色土の落ち込みが認められたので、先行トレンチを設定して、掘り下げたところ土器が多量に出土し、床面と思われる平坦面が確認され、平面形も方形を呈することが判明したので、竪穴住居跡と想定した。また、溝ＳＤ03に切られることも土層断面から確認された。

構　造　現存する大きさは6.7×5.2ｍ。方形だが西側の過半が溝ＳＤ03と切り合い、後代の削平により平面形全体は確認できない。

遺　物　１～８土師器。１壺、２器台、３・４有段壺、５・６壺、７甑。

時　期　古墳時代前期後半か

(3)　古代

ＳＢ09（第102図）　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－８

検　出　表土除去後、柔らかな暗褐色土の広がる部分が見られた。精査したところ調査区の境界に石垣があり全形は不明だが、方形を呈していることが分かった。さらに掘り下げて見ると床面と考えられる平坦面が検出された。

構　造　北西―南東に軸をもつと考えられる。全体の規模は不明だが北西から南東辺の長さは4.2ｍ。立ち上がりは緩やか。床面もとくに堅緻な部分はないが、平坦である。柱穴と考えられるピットが２基検出されている。

遺　物　１須恵器坏、２土師器甕。須恵器坏はやや軟質で少し「赤焼」、土師器甕は胴部にケズリ調整を施すいわゆる「武蔵型」甕。口縁が「く」字状に屈曲する。

時　期　平安時代前半　佐久編年５～７段階前後か

ＳＢ11（第103～105図）　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－11

検　出　表土除去後、暗褐色土の落ち込みが見られ精査し略方形の平面形を確認、軸に沿って先行トレンチを十字に設定した。堅くはないが平坦面と立ち上がりが検出された。

構　造　北より僅かに西に傾く主軸をもつ3.6×3.0ｍの略方形。床面は堅くはないが平坦。

カマド　北壁の中央やや東寄りにあり、構築材の石材および支脚石が検出された。

遺　物　１・６・７土師器甕、２・３・４須恵器坏、８須恵器甕が出土。

時　期　平安時代前半

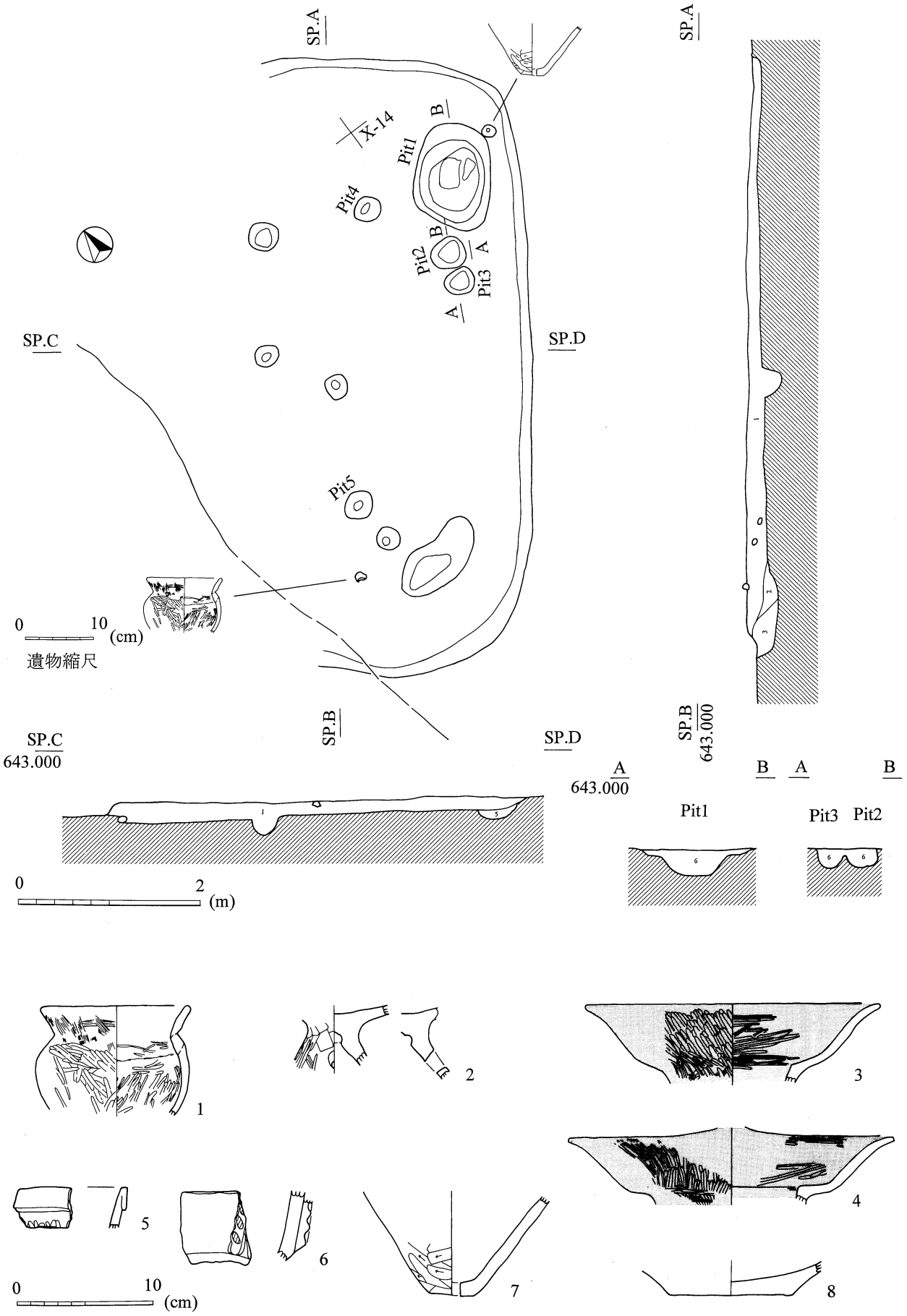
ＳＢ14（第106～108図）　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－18

検　出　表土除去後、焼土の集中部分と土師器片が多く出土。カマドの可能性を考え精査した。にぶい黄褐色の略方形の落ち込みが認められたので、軸にそった形で先行トレンチを十字に設定した。

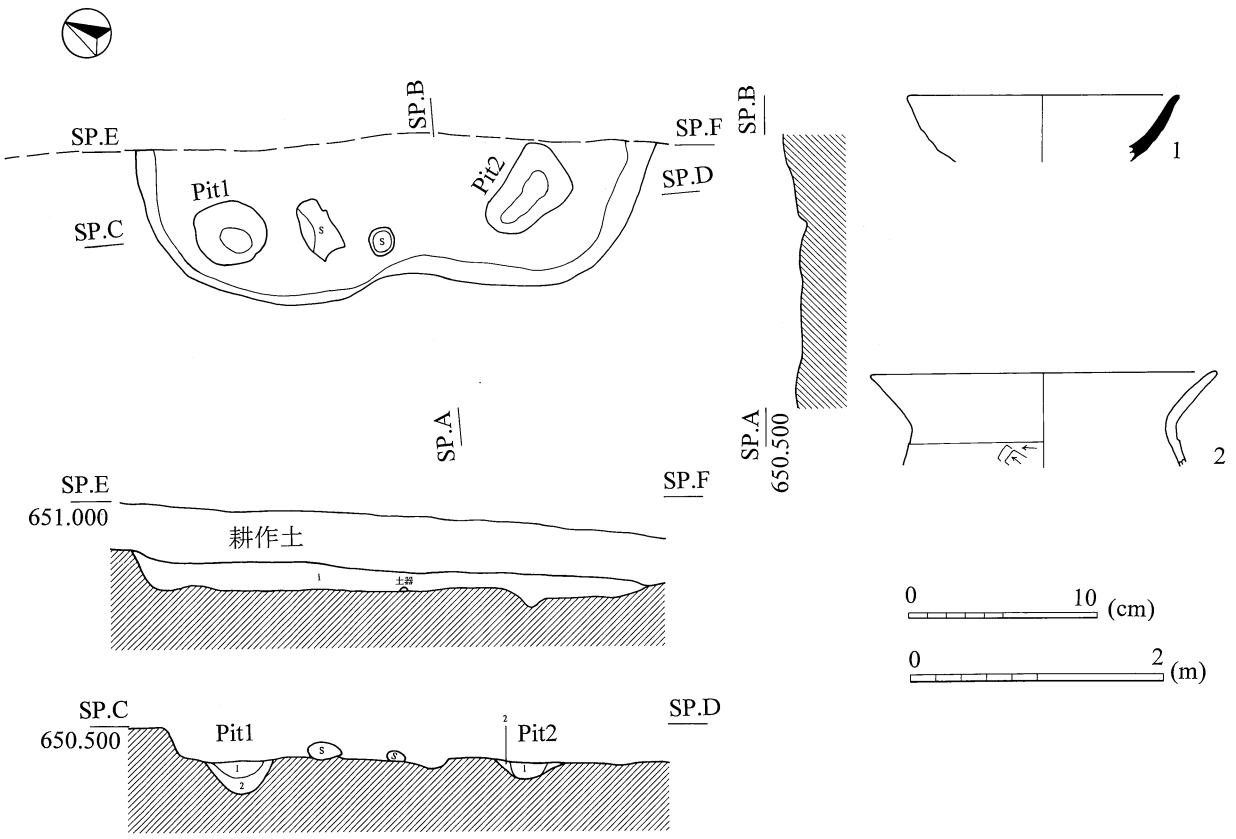
構　造　ほぼ東西に軸をもち、5.2×4.6ｍの略方形。しかし、住居跡自体が耕作による削平でかなり痛んでおり、カマド付近以外ははっきりした床面は分からなかった。北辺に浅く帯状にくぼむ部分があり、おそらく周溝と考えられる。

カマド　東辺中央にカマドの跡と考えられる焼土と土器が集中する部分がある。焼土層の下位から小穴が２基検出されたが、カマド構築材を抜いた跡と思われる。よって住居廃絶当時にカマドも破壊されたものと考えられる。

遺　物　１・５・９土師器坏、２・３・６・７・10・11須恵器坏、４・８・12黒色土器坏、13・14土師器甕、15土師器鉢が出土。８「収」という墨書がある。11内外面に光沢脂質感のあるススが付着しており、



第101図　竪穴住居跡　ＳＢ07・土器出土状況・出土土器



第102図　竪穴住居跡　ＳＢ09・出土土器

灯明皿に転用されたものと思われる。土師器甕は口縁部断面形が「コ」字状を呈しているいわゆる「武蔵型」甕である。15土師器鉢。胴部上半は回転ナデ調整が施されるが、胴部下半は手持ちヘラケズリが施される。

時　期　平安時代前期　佐久編年５～７段階か

ＳＢ15（第109・110図）　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－９

検　出　表土除去後、暗褐色土の方形の落ち込みが認められたので、軸に沿うように十字に先行トレンチを設定して掘り下げ、床面と考えられる平坦面と立ち上がり、焼土集中部分などが検出された。

構　造　北西―南東に軸をもつ5.1×5.1ｍの方形。床面は貼床ではないが、比較的堅く平坦で認識しやすかった。また周溝が西のカマド部分？以外巡っている。柱穴は主柱穴と思われるものが3基検出されたが、北西隅のものは中世ＳＫ131に切られているためか分からなかった。

カマド　西辺中央に焼土集中部分および掘りくぼめられた部分が存在するが、カマドの構築材と思われる石材などはなかった。また、東辺中央にも焼土集中部分がある。西側に比べ焼土は少なく、周溝が焼土の下位を巡っていたが、焼土付近にカマドの構築材と考えられる石材が散乱し、構築材が抜き取られたような痕跡のピットも検出されているので、最終的なカマドは東側だろう。

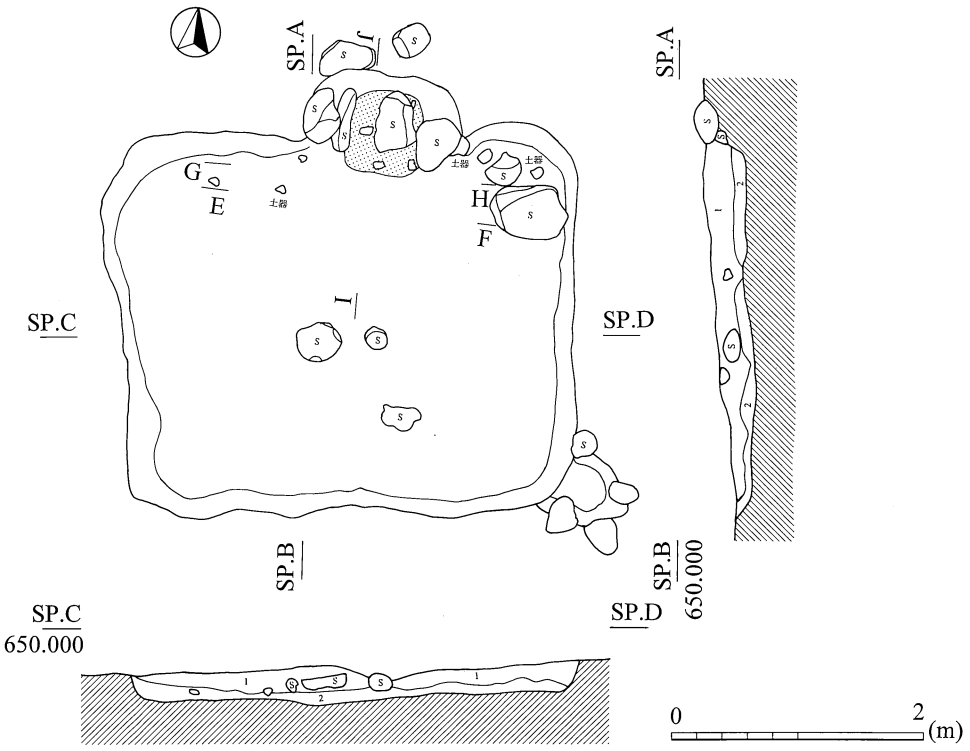
遺　物　１土製の玉、２須恵器坏、３・４黒色土器坏、５土師器甕。

時　期　平安時代前半か

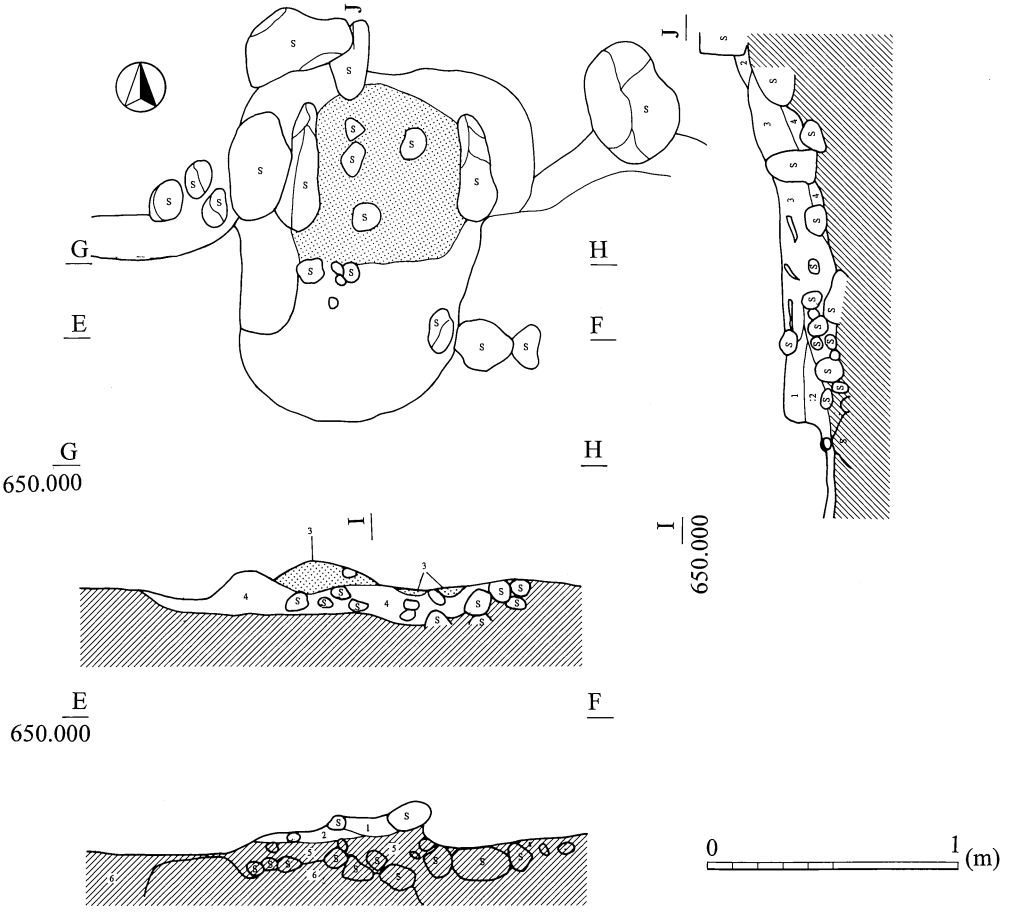
ＳＢ16（第111・112図）　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－18

検　出　表土および畑潅漑用の塩化ビニール管除去後、床面と考えられる平坦面、立ち上がり、焼土の集中が検出されたので、土層観察用ベルトを残し掘り下げた。

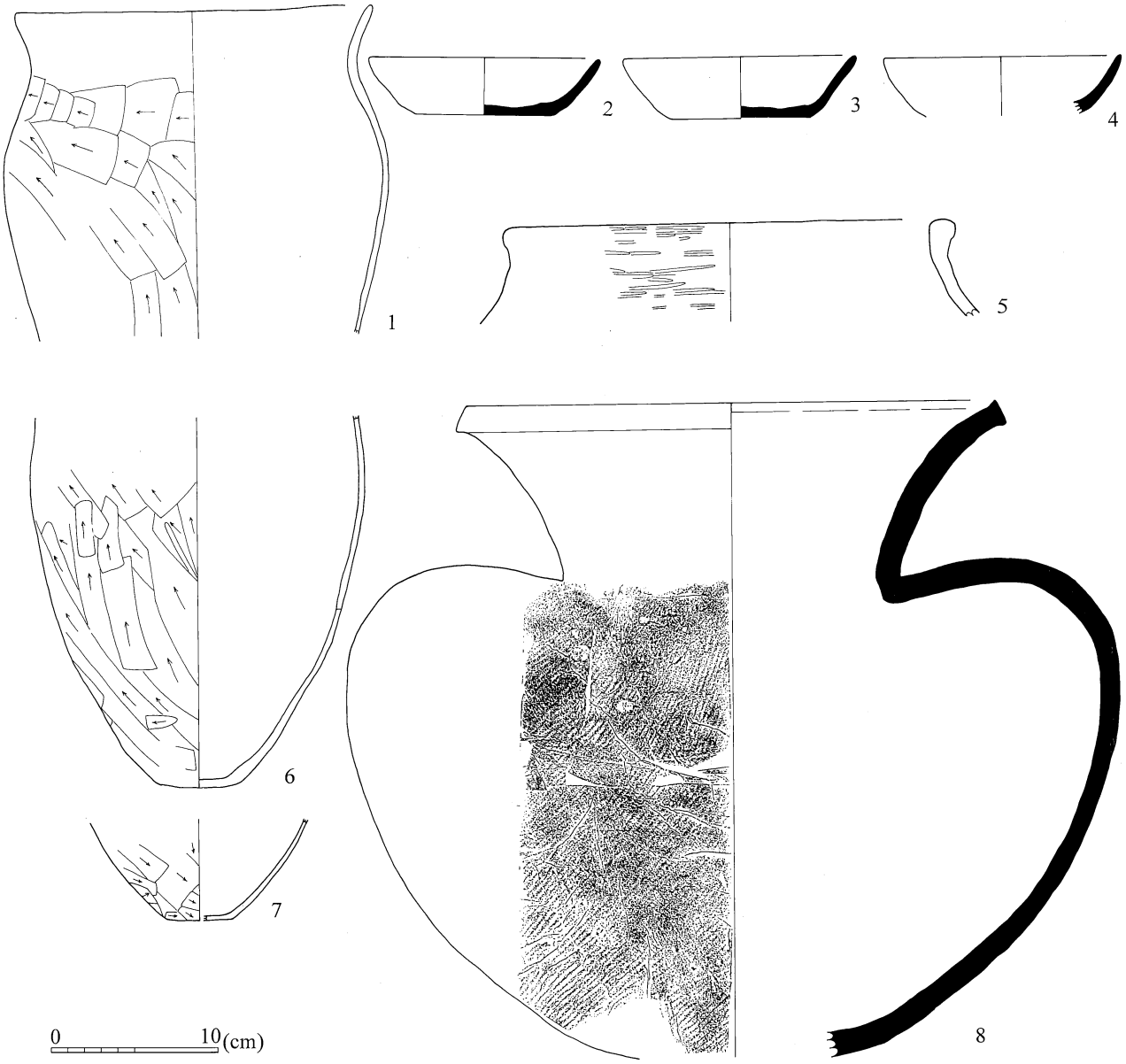
構　造　北西―南東に軸を持つ3.9×4.6ｍの略長方形。堅緻ではないが、はっきりした平坦面があり容易



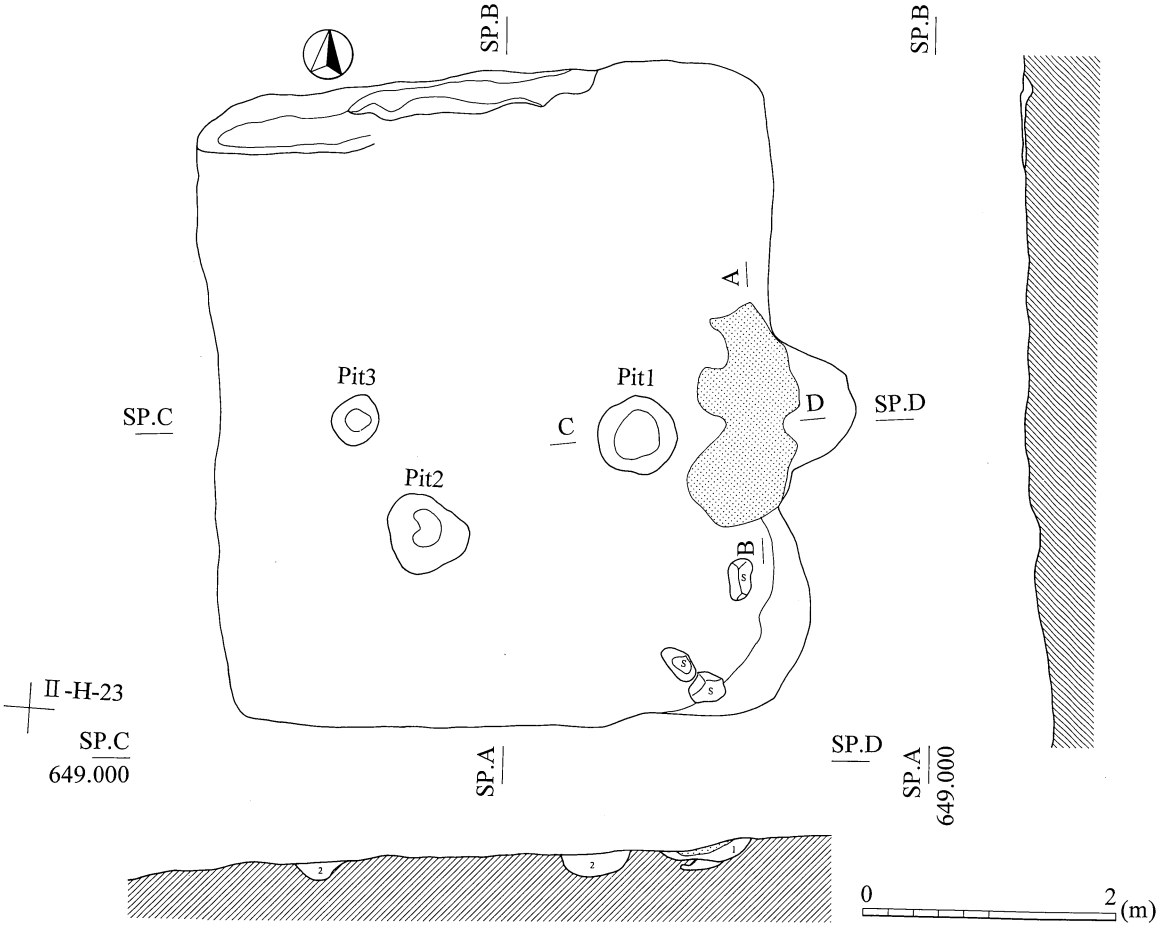
第103図　竪穴住居跡　ＳＢ11



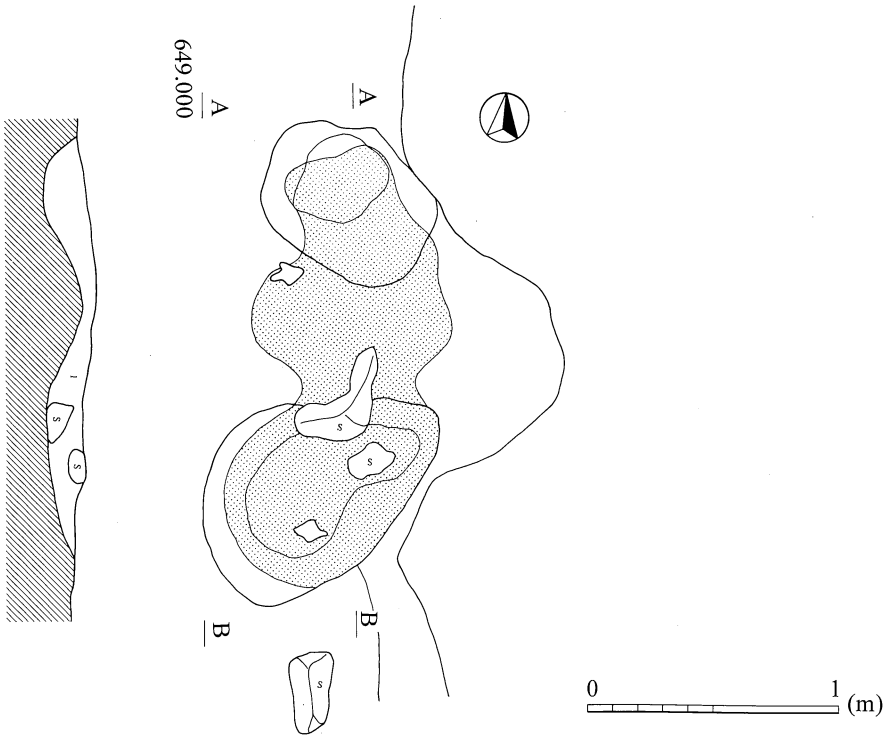
第104図　竪穴住居跡　ＳＢ11カマド



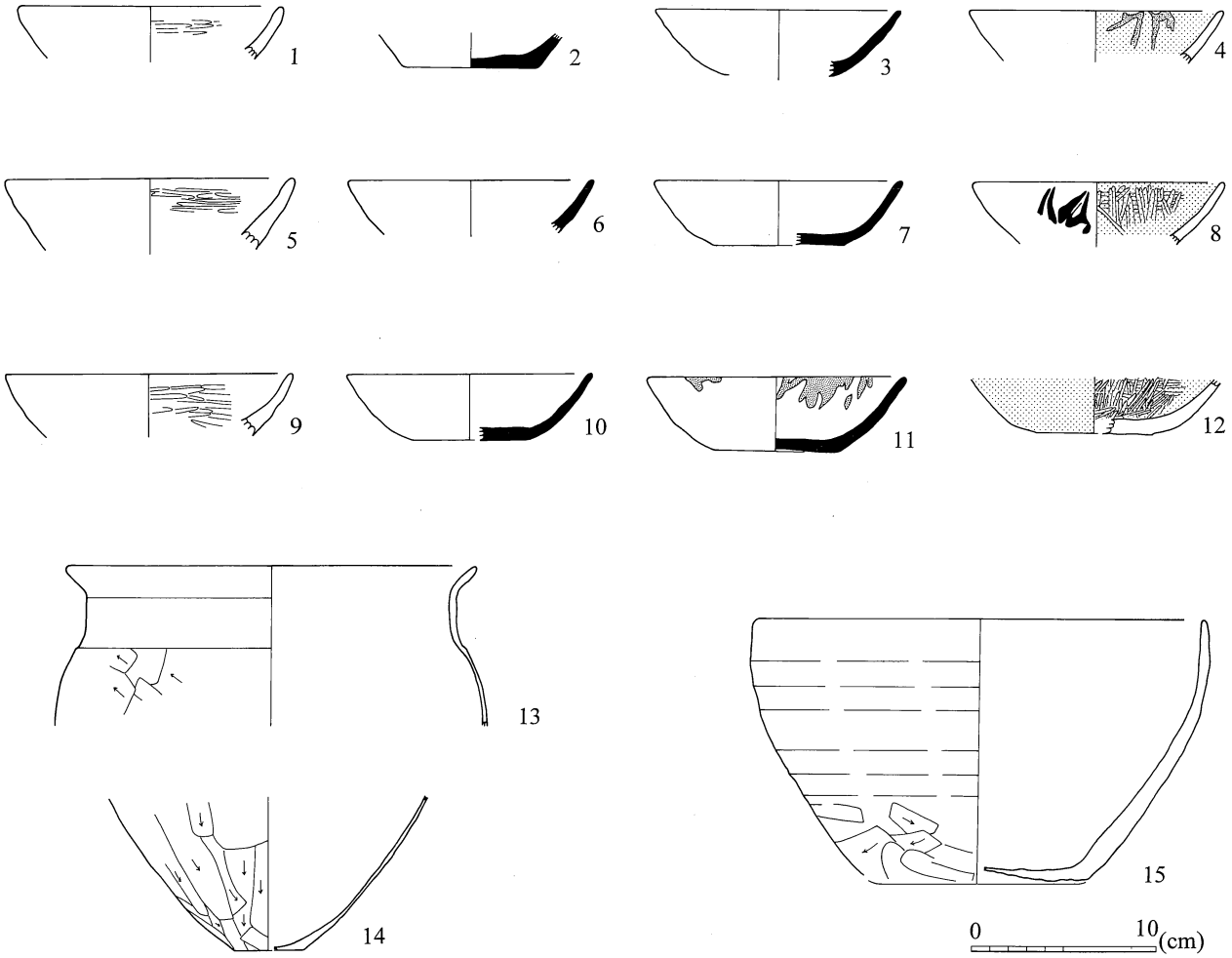
第105図　竪穴住居跡　ＳＢ11出土土器



第106図　竪穴住居跡　ＳＢ14



第107図　竪穴住居跡　ＳＢ14カマド



第108図　竪穴住居跡　ＳＢ14出土土器

に床面と判断できた。柱穴と考えられるような小土坑は検出できなかった。

カマド　東辺中央にくぼんで焼土が集中する部分があり、袖の一部と考えられる帯状の盛り上がりが残ることからカマドと考えた。

遺　物　１須恵器横瓶。

時　期　③区には古代の住居跡が集中しており、この本遺構周辺から古代土師器片が検出されているので、当該期のものと考えた。

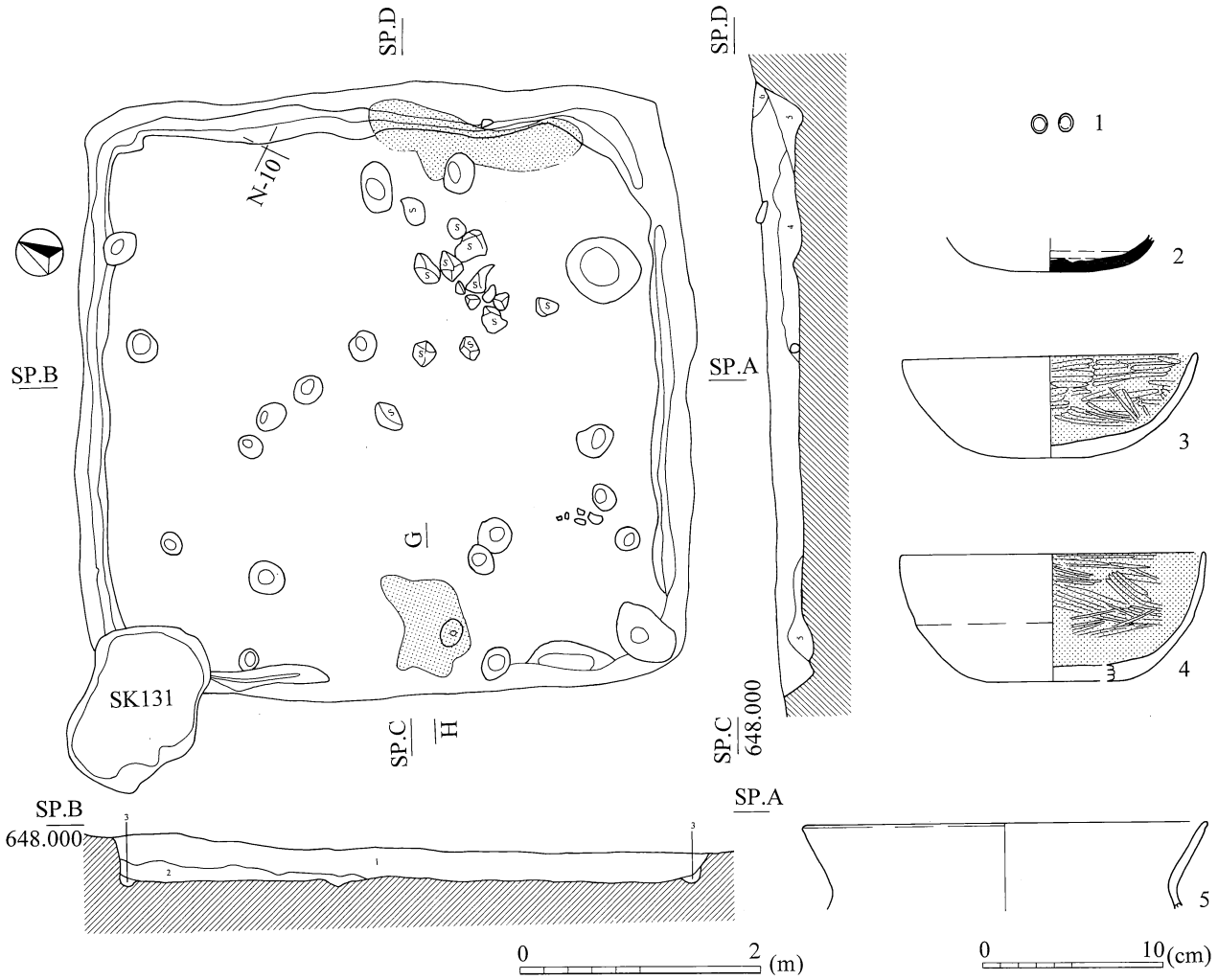
ＳＢ17（第113・114図）　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－16

検　出　表土除去後、地山直上を精査。暗褐色土の略方形の落ち込みが認められた。軸に沿う先行トレンチで、床面と考えられる平坦面と立ち上がりが検出された。

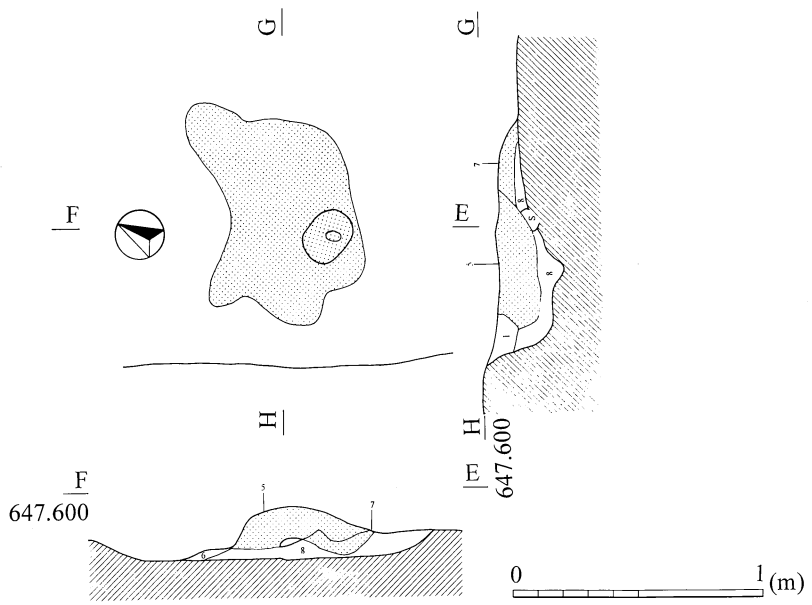
構　造　北東―南西に軸を持つ5.0×6.0ｍの略長方形。床面は平坦だが、あまりしっかりはしていない。西隅に検出されたPit１が柱穴の可能性があるが、他に柱穴らしい小土坑は検出されなかった。

カマド　住居跡北東側に礫が集中する部分があるが、これはカマドの構築材が廃棄されたものとすれば、住居跡の北東側（調査区外）にカマドが存在したのだろうか。

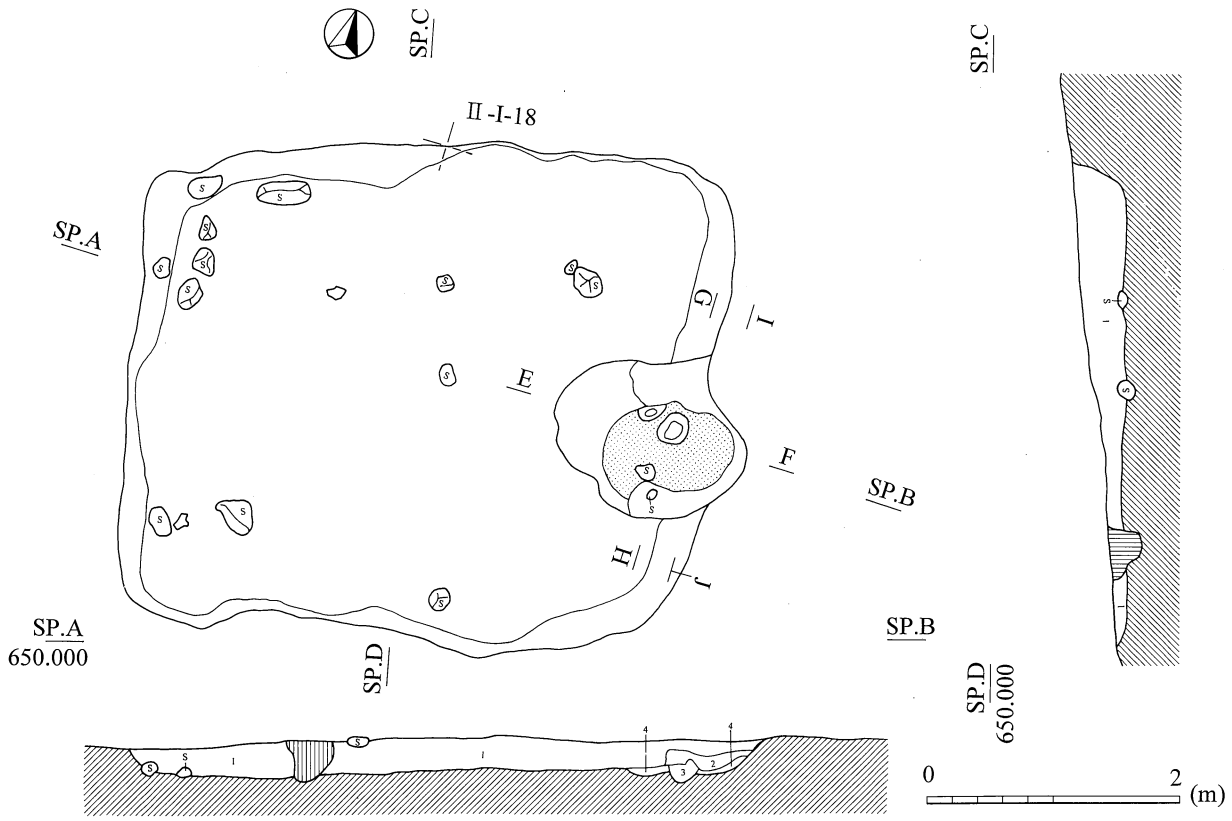
遺　物　１～３・６須恵器坏、４蓋、５「□荒」と墨書された黒色土器坏。



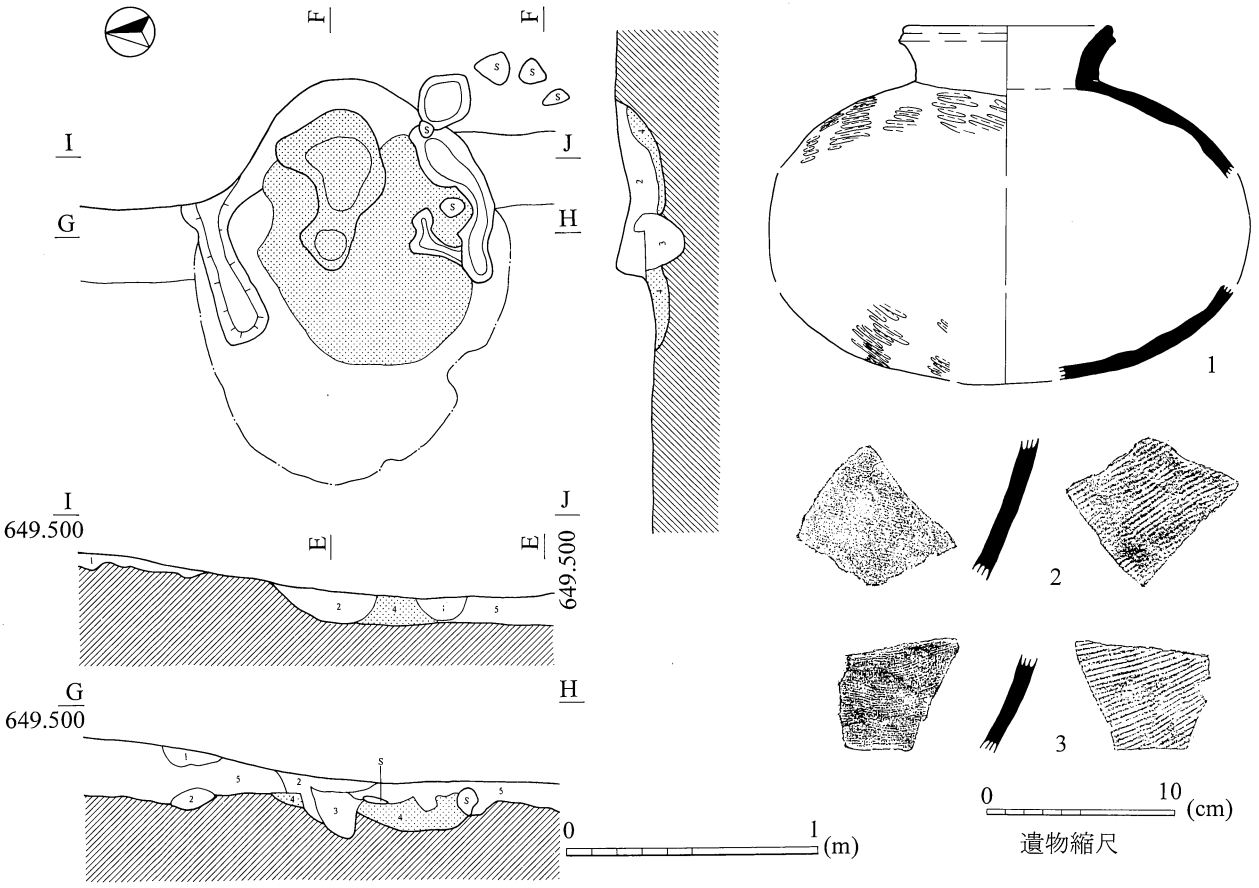
第109図　竪穴住居跡　ＳＢ15・出土土器



第110図　竪穴住居跡　ＳＢ15カマド



第111図　竪穴住居跡　ＳＢ16



第112図　竪穴住居跡　ＳＢ16カマド・出土土器

時　期　平安時代前半

ＳＢ18（第115・116図）　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－16

検　出　表土除去後、地山直上を精査。暗褐色土の略方形の落ち込みが検出された。先行トレンチを設定し、床面と考えられる平坦面と立ち上がりや焼土集中部分が検出された。

構　造　ほぼ北―南に軸をもつ2.9×3.5ｍの略方形。比較的直に立ち上がる。柱穴と考えられる小土坑は２基検出されている。

カマド　塩化ビニール管に切られて不明瞭ではあるが、東辺にかすかに右袖部分と焼土集中部分が残る。

切り合い　ＳＫ243に切られる。

遺　物　１～７須恵器坏、８蓋、９・10壺、11～14黒色土器坏、15椀、16・17・20～22土師器甕。16・17はいわゆる武蔵型、20～22は粗いハケ目を全面に施すもの。18土師器坏。黒色土器12・14・15には墨書（字は不明）が見られる。鍛造釘（第162図１）も出土。坏は須恵器の比率が高く、土師器甕の口縁部の屈曲は弱く外反するに留まる。

時　期　平安時代前半　佐久編年５～７段階か

ＳＢ25（第117・118図）　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－21

検　出　ＳＫ177などの調査後、土坑周辺を精査していたところ、土器などを含む暗褐色土の落ち込みが認められた。ＳＫ177に並行するような土坑を想定し、先行トレンチを設定して掘り下げたところ、床面と考えられる平坦面や、立ち上がりが検出され竪穴建物跡と判明した。

構　造　北―南に軸を持つ2.8×2.8ｍの方形。堅緻ではないが、平坦な床面が認められる。立ち上がりは比較的緩やかである。小土坑は４基検出されたがそのうちPit１・２は浅いながらも柱穴であろう。覆土中から焼土、灰、炭が大量に出土しているが、床面直上ではないことや焼土などの量がかなり多い。また炭化材の樹種分析で当該地域では一般にクヌギ節が多いのに対し、このＳＢ25ではクリ材ほかヤナギ属、ヒノキ属、ケヤキなどが同定されていて、これらの材がむしろ建築材以外の用途で用いられたことを裏付けているのかもしれない（第５節参照）。以上のことからＳＢ25は焼失家屋ではなく、住居廃絶後、材が焼かれたり、遺物がまとまって廃棄されたのか。ただ、遺物にそれほどの時間幅があるとは思われないので、こうした廃棄行為は比較的短時間で終了し、遺構自体も埋積したと考えられる。

カマド　北東隅から検出されたPit３が焼土の集中部などが顕著に見られる訳ではないが、位置的にカマドの痕跡かと思われる。

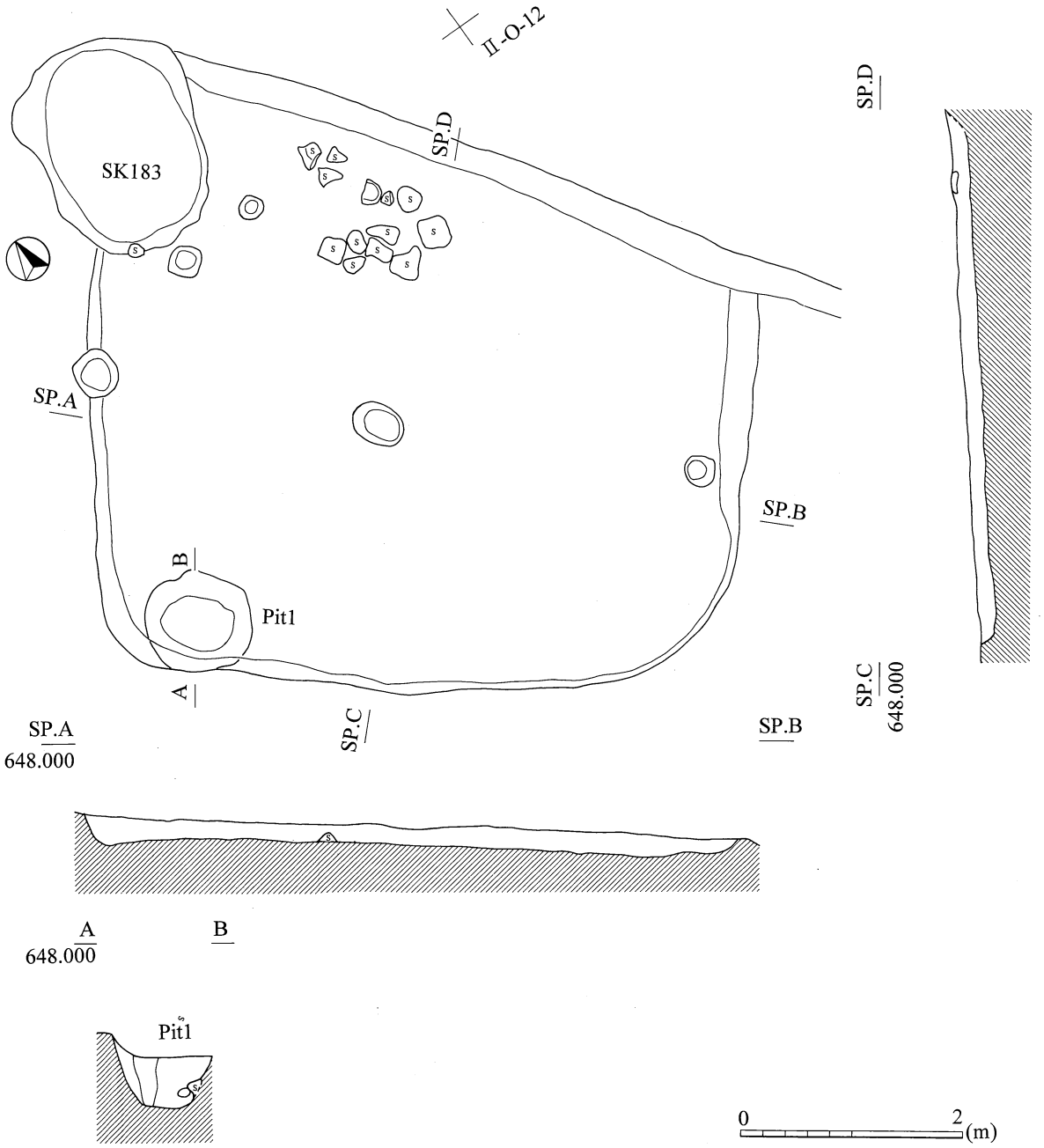
遺　物　１～７、９～14黒色土器の坏が卓越する。うち９～14には墨書がある。９「□本」、10「舘」か、11「貴」、14「□都」。８内面にミガキ調整を施す土師器坏、15～17須恵器坏、18・19壺、20盤、21～25土師器甕。鍛造釘（第162図６）が出土。黒色土器坏が卓越すること、大型の盤の存在、土師器甕の口縁部がコ字状を呈するものが含まれる。

時　期　平安時代前半　佐久編年の９段階前後

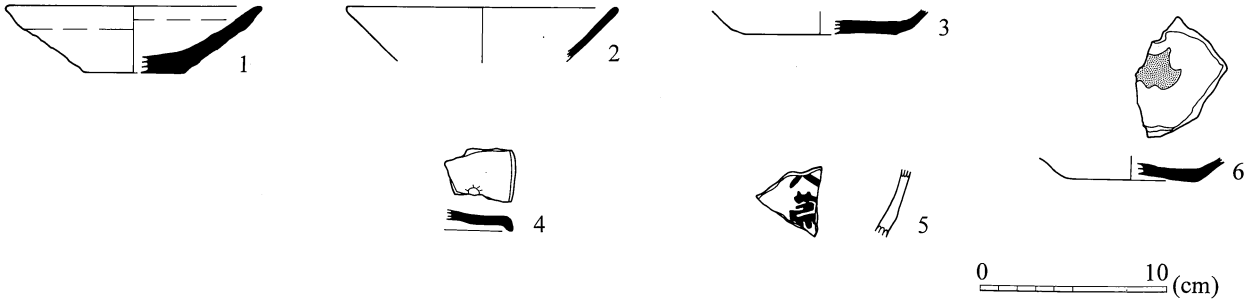
ＳＢ26（第119～121図）　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－５

検　出　表土除去後、不明瞭ながら黒褐色シルトの落ち込みを認め、先行トレンチを設定したところ床面および立ち上がりが確認できた。

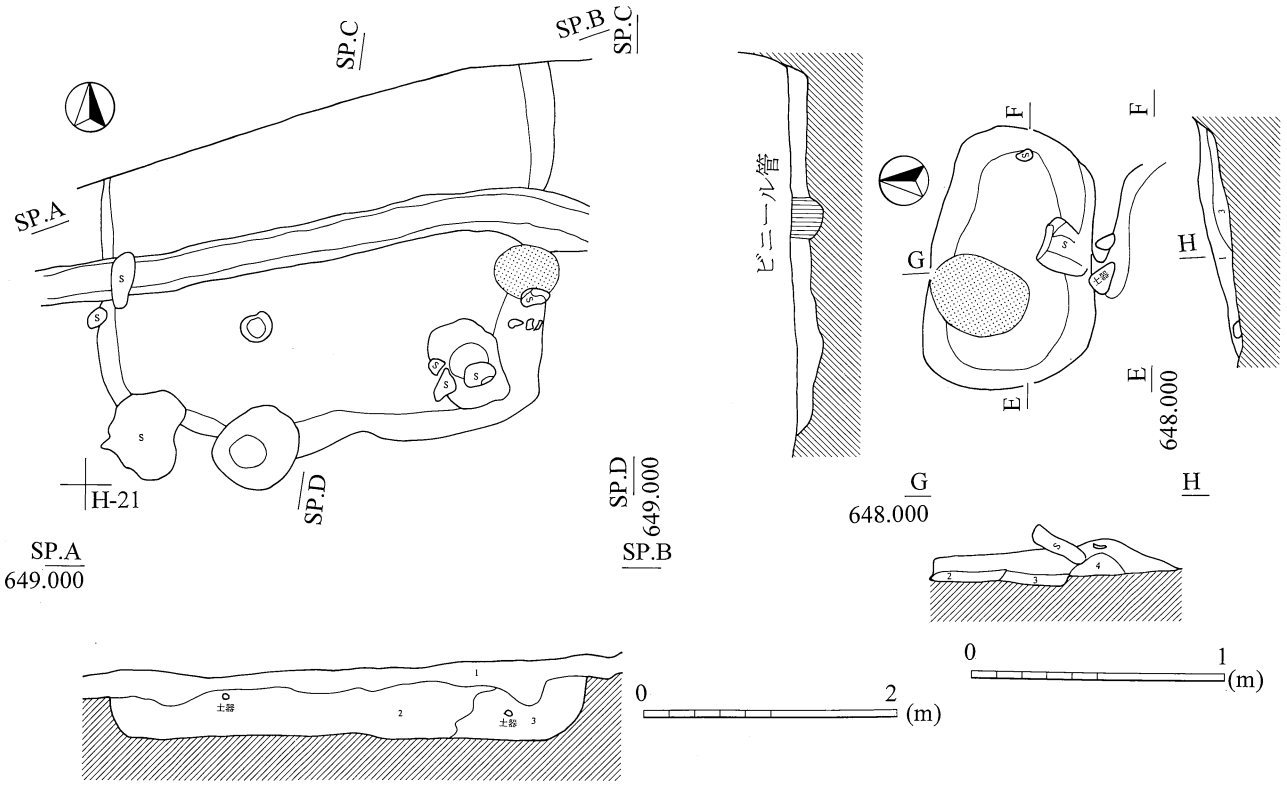
構　造　北西―南東に軸を持つ4.1×3.8ｍの略方形。東辺のカマド周辺に堅い床面が残存する。径１ｍ、深さ30cmのPit１は貯蔵穴か。それ以外の小土坑Pit２～９は柱穴。



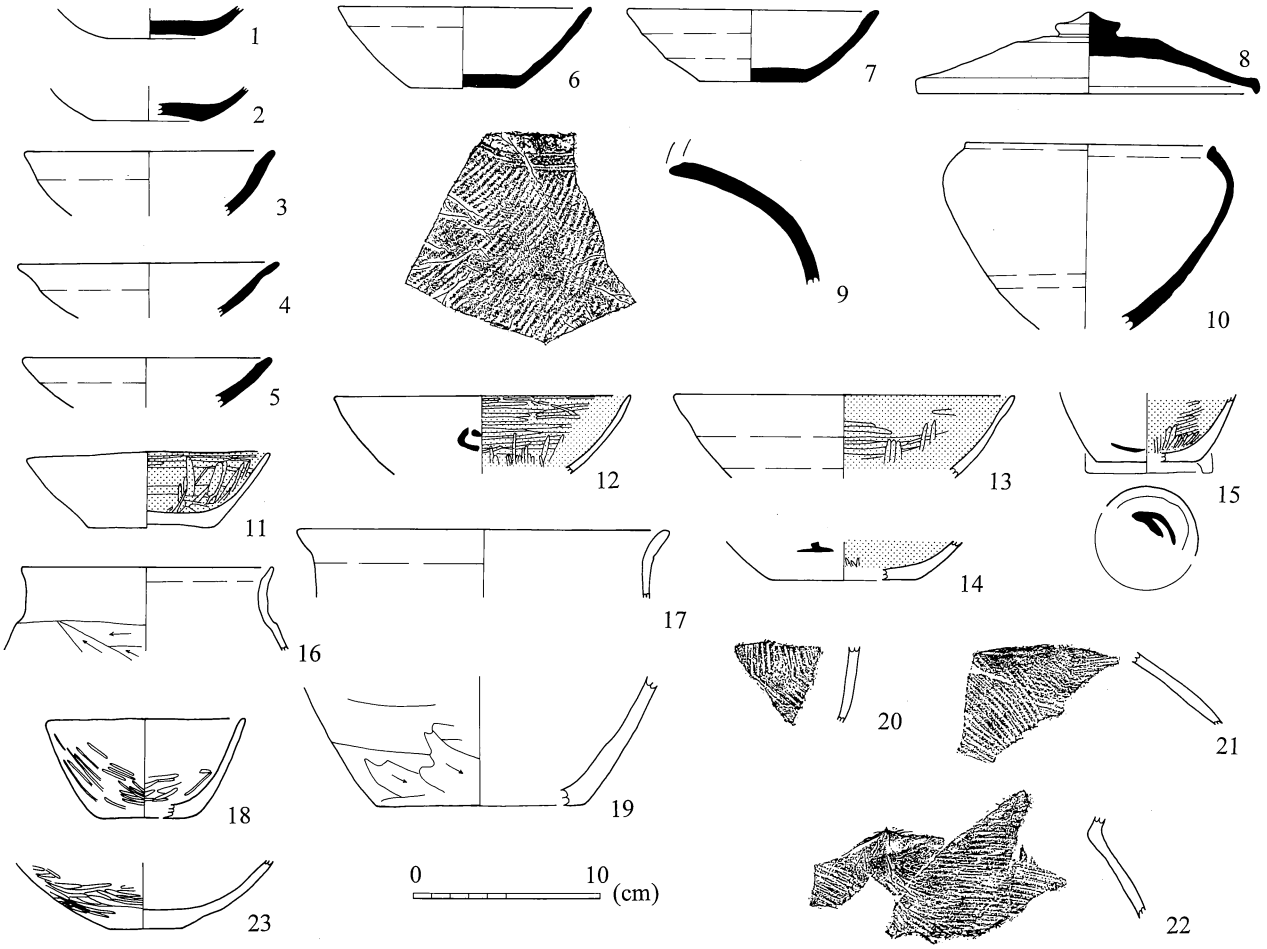
第113図　竪穴住居跡　ＳＢ17



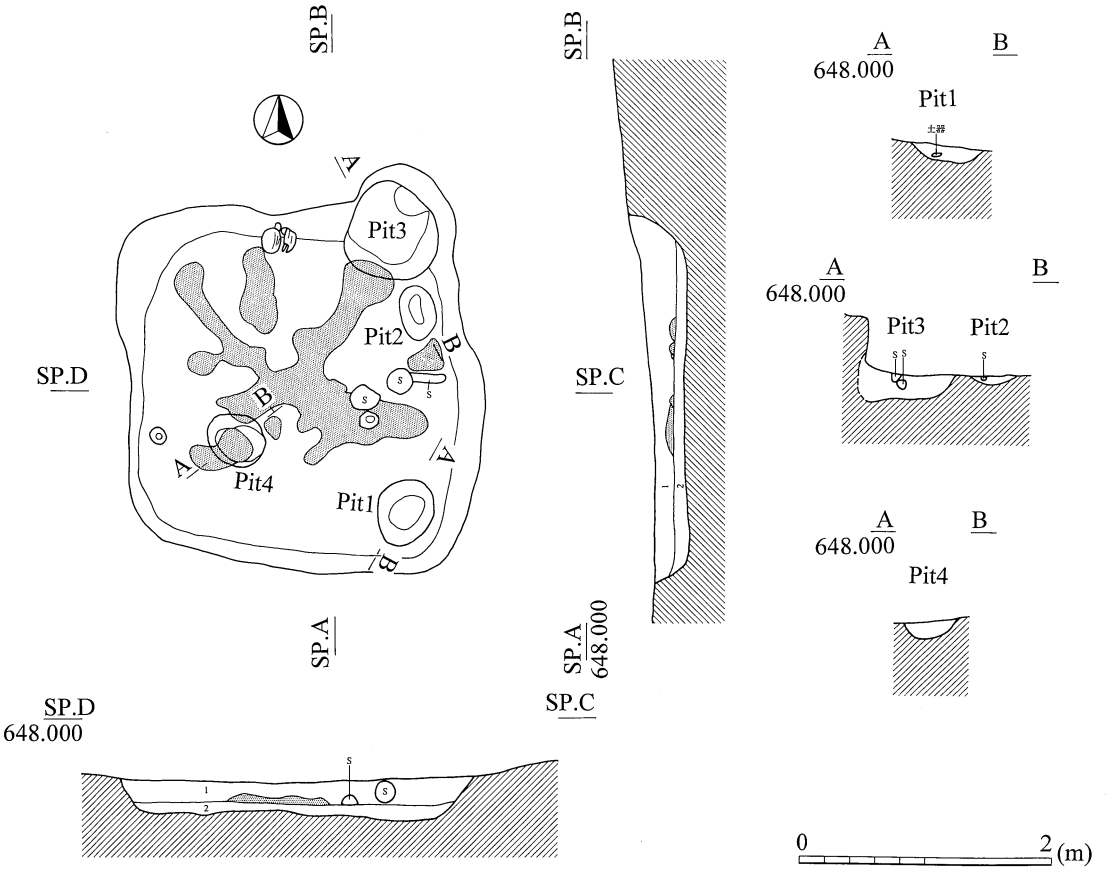
第114図　竪穴住居跡　ＳＢ17出土土器

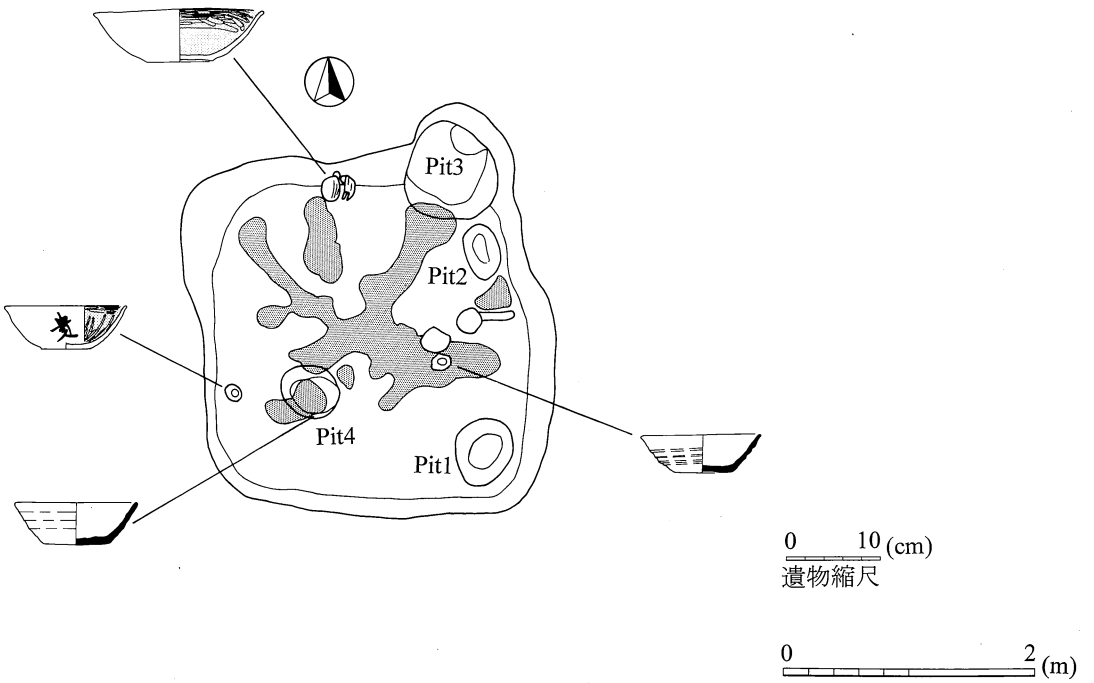


第115図　竪穴住居跡　ＳＢ18・カマド

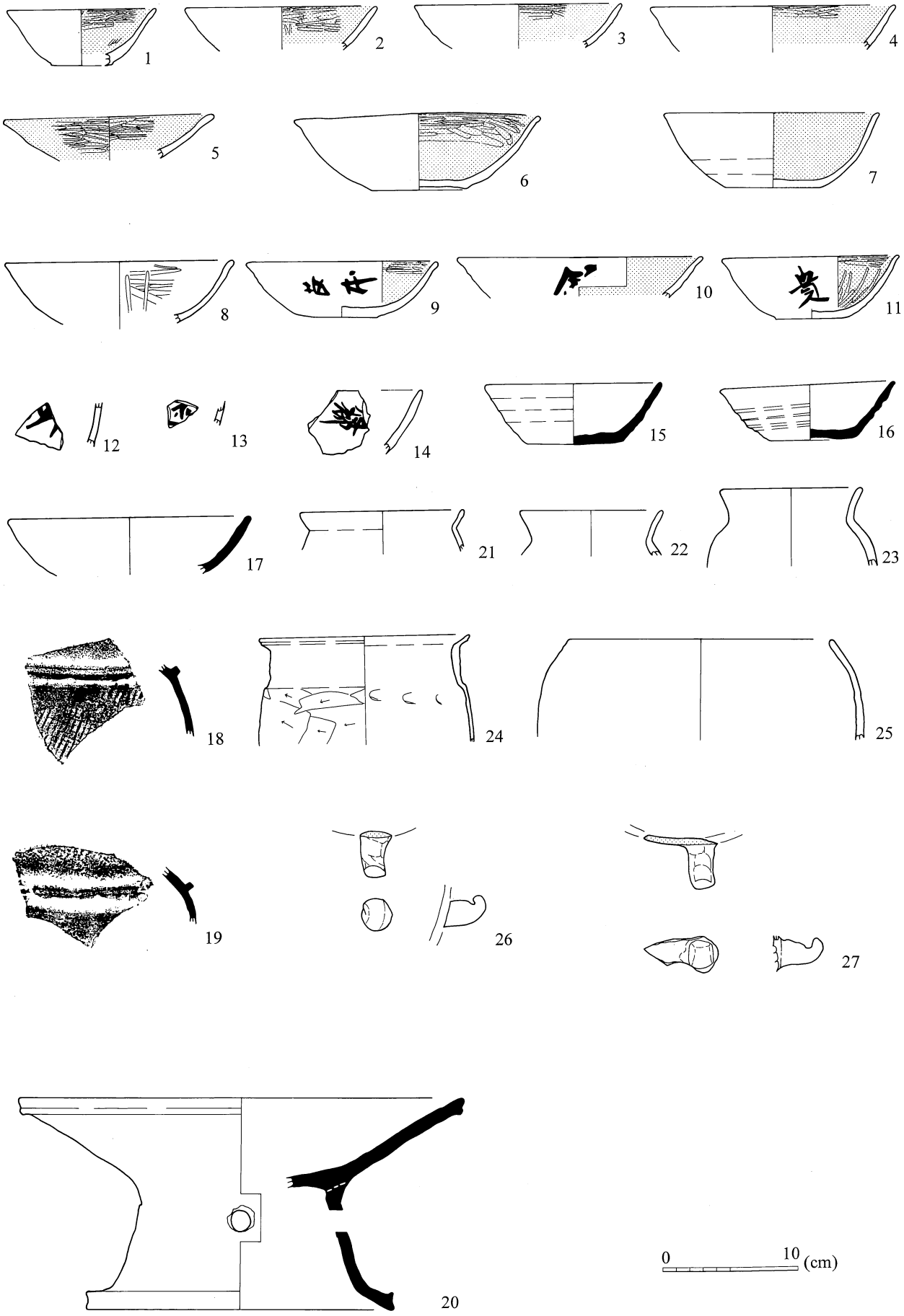


第116図　竪穴住居跡　ＳＢ18出土土器





第117図　竪穴住居跡　ＳＢ25・土器出土状況



第118図　竪穴住居跡　ＳＢ25出土土器

カマド　支脚石と袖石といった石が残る。煙道の下底もはっきりしていた。出土土器の大半がカマド内もしくはその周辺である。

遺　物　１須恵器坏、２・３小型の土師器甕、４・６胴部にヘラケズリを施す土師器甕、５外面には並行タタキ、内面にも円礫？による当具痕を残す土師器甕。鉄製の鎌（第162図21）、鍬刃先（23）も出土。小型の土師器甕は底部付近にヘラケズリを施す。胴部ヘラケズリの土師器甕の口縁部は「く」字状を呈す。

時　期　平安時代前半　佐久編年の９段階か

(4)　中世

ＳＢ02（第122図）　　位置　①区Ⅱ－Ｙ－６

検　出　表土除去後、検出面黄褐色ローム層中に、やや暗い褐色土の落ち込みとして認められた。平面形を確定するために、精査したところ、床面と思われる平坦面が露出。

構　造　北東―南西に軸をもつ3.3×3.0ｍの略方形。柱穴も北側から４基検出され、浅い周溝が巡るが、南側はかなり削平されていて、周溝、柱穴、床面は確認できなかった。カマドがなく中世ＳＴ01やＳＴ02と軸が揃う。

炉　図化されていないが中央にはっきりしない焼土の集中部分があり、これが炉と考えられる。

遺　物　土師器片があるが、図化できるものはない。天聖元宝（第163図１）、天祐通宝（２）が出土。

時　期　中世

ＳＢ03（第123図）　　位置　①区Ⅱ－Ｙ－７

検　出　表土除去後、地山の黄褐色土の中に、やや暗褐色土の落ち込みとして認められた。平面形を探るために精査したところ、まず竪穴建物跡の床面を思わせる平坦面が検出された（ＳＢ06）。中世ＳＢ06を調査後、床面を剝ぎ、方形のやや暗い褐色土の落ち込みが認められた。軸に沿うように先行トレンチを設定したところ、周溝検出された。

構　造　北東―南西に軸をもつ4.0×3.0ｍの略方形。周溝が巡り、北東隅の小土坑は柱穴と思われる。しかしＳＢ01同様南側の削平が著しく、南半の周溝、柱穴、床面は確認できなかった。調査の過程より中世ＳＢ06に切られていると考えられる。カマドがなく、中世ＳＴ01やＳＴ02と軸が揃う。

遺　物　図化できるようなものはない。

時　期　中世

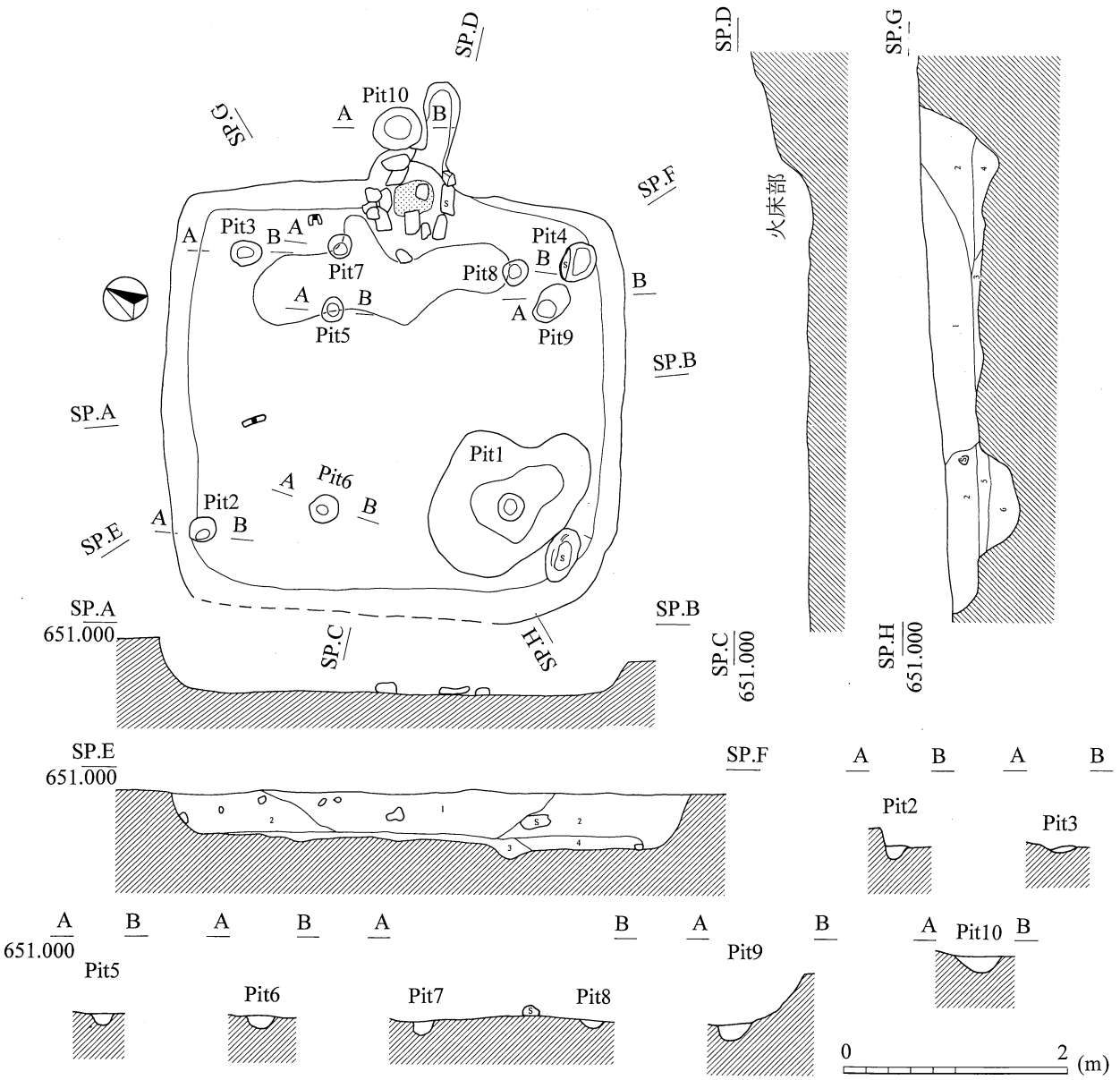
ＳＢ06（第124図）　　位置　①区Ⅱ－Ｙ－６

検　出　覆土除去後、地山の黄褐色土の中に、やや暗い褐色土の落ち込みが認められた。精査したところ、床面と考えられる平坦な面が検出された。削平が著しく、平面形がとらえられたのは、東隅だけであるが、これに伴う柱穴と考えられる小土坑も検出され、削平の著しい竪穴建物跡と判断した。

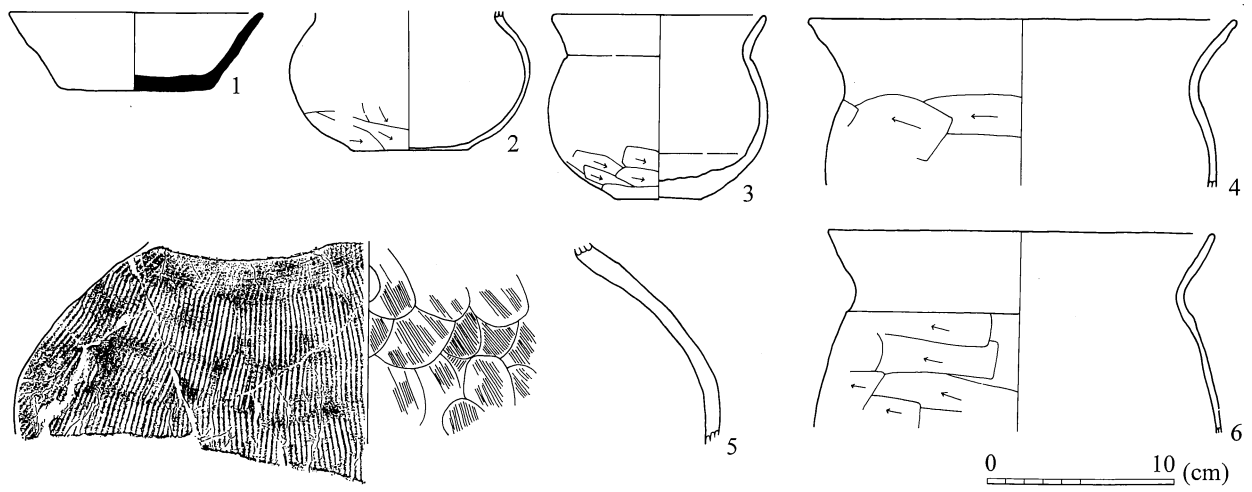
構　造　北東―南西に軸をもつ3.3×3.0ｍの略方形。床面は一部確認できたが、全体に削平が著しく、覆土はほとんど残っていない。柱穴と考えられる小土坑は７基検出された。また、この床面の下位からＳＢ03が検出された。中世ＳＢ03を切っている。カマドがなく、中世ＳＴ01やＳＴ02と軸がＳＢ02、ＳＢ03同様に揃う。

遺　物　図化できるようなものはない。

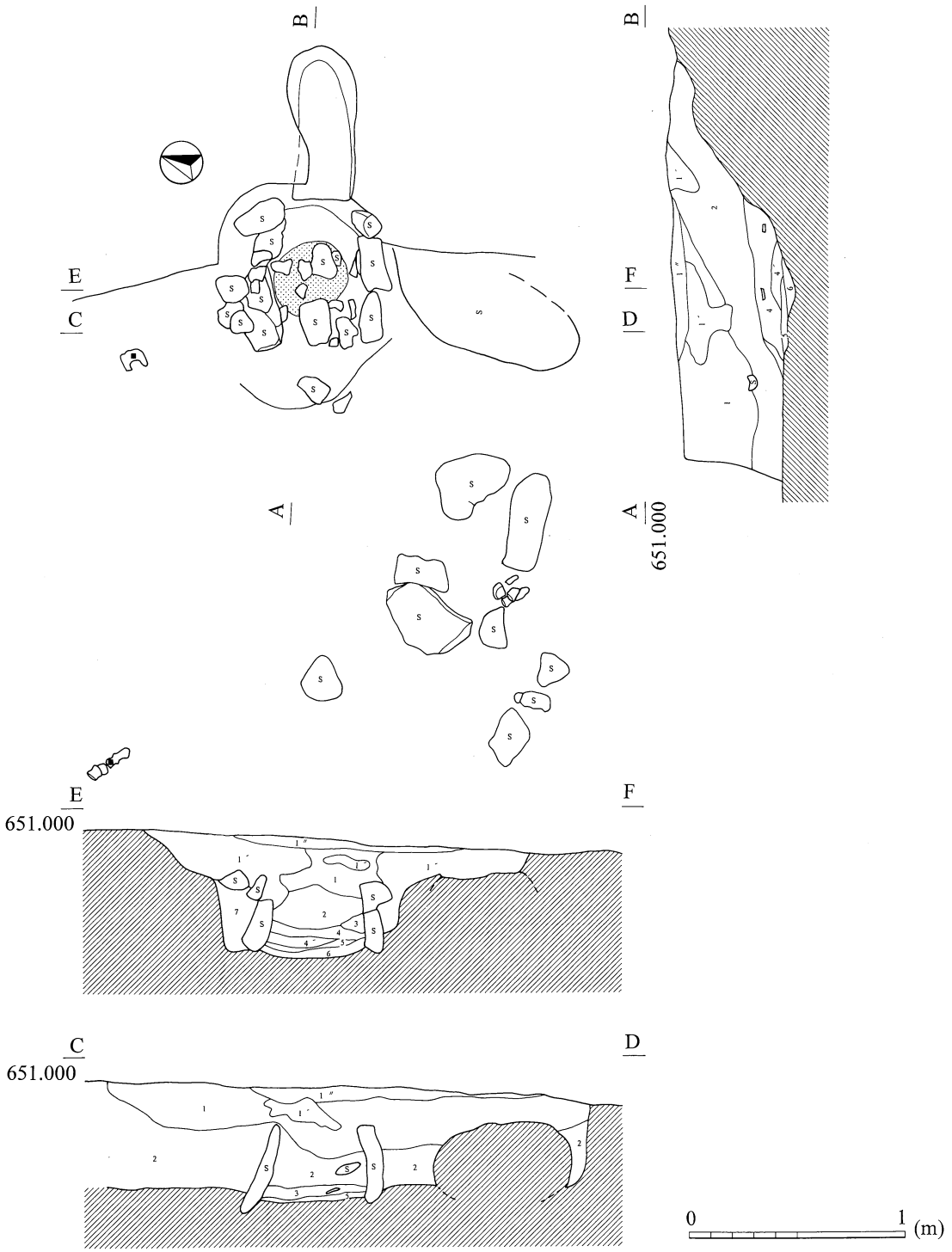
時　期　中世



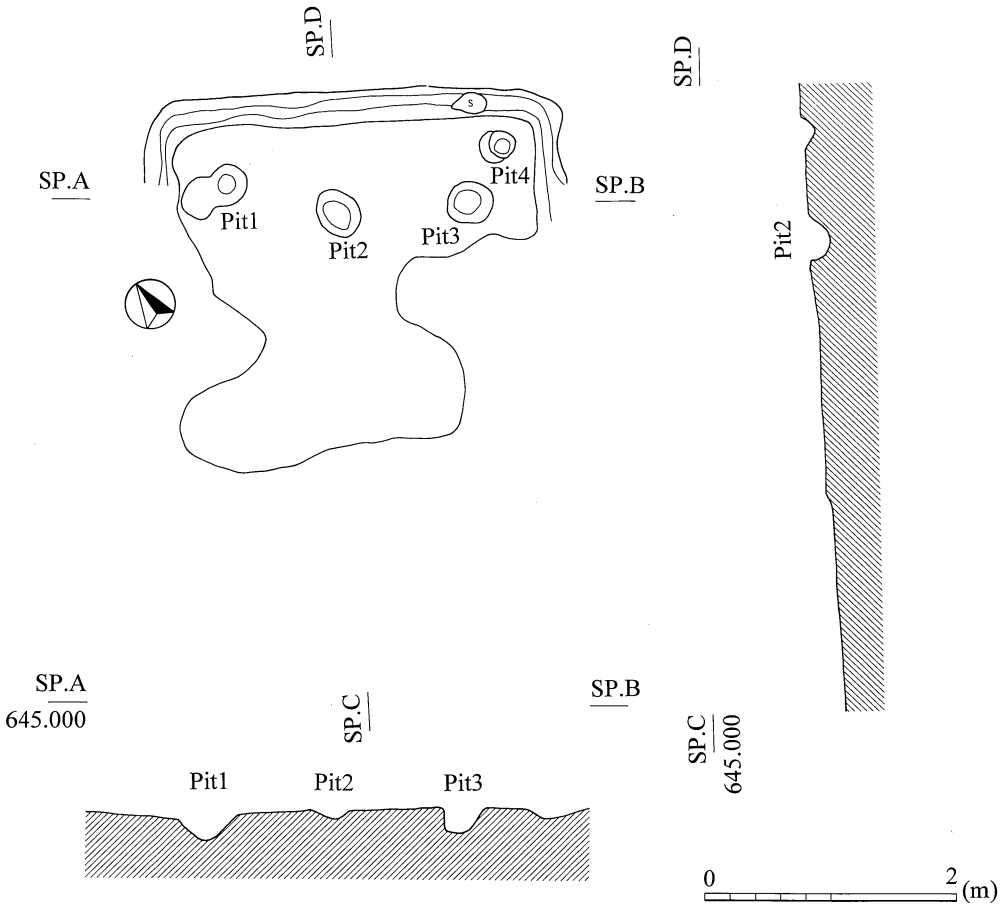
第119図　竪穴住居跡　ＳＢ26



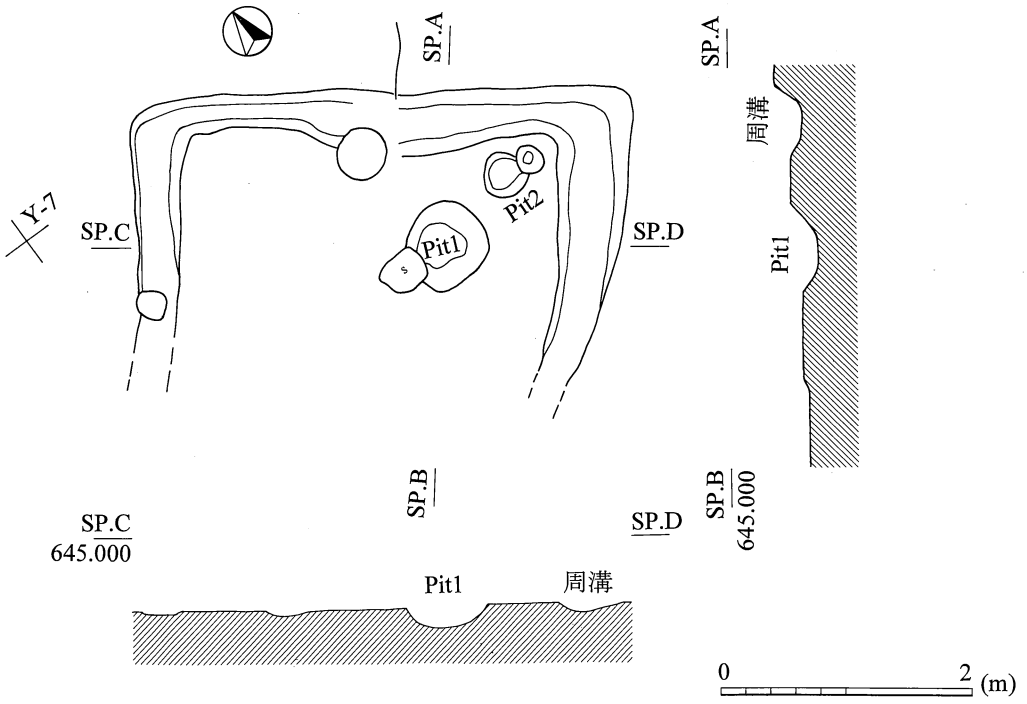
第120図　竪穴住居跡　ＳＢ26出土土器



第121図　竪穴住居跡　ＳＢ26カマド



第122図　竪穴建物跡　ＳＢ02



第123図　竪穴建物跡　ＳＢ03

ＳＢ19（第125図）　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－４

検　出　地山直上の精査で、暗褐色土の略方形の落ち込みが見られた。軸に沿って十字に先行トレンチを設定、平坦な床面並びに立ち上がりが検出された。規模なども勘案し、竪穴住居跡と想定した。

構　造　ほぼ北―南に軸をもつ3.8×3.2ｍの略方形。北側に階段状の段がある。柱穴、カマドは検出されなかったので、住居跡かどうかは疑問。平坦な床面が広がることや規模から竪穴建物跡と考えた。

遺　物　土師器片が出土したが細片で、図化できるようなものはなかったが、胎土の様相から中世土師質土器（いわゆるカワラケ）と思われる。また蓋のつまみ様の鉄製品が出土している（第162図16）。

時　期　中世

ＳＢ20（第126図）　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－20

検　出　地山直上の精査で黒褐色土の方形の落ち込みが見られた。軸に沿うように先行トレンチを設定し、床面と思われる平坦面、北側の直立した立ち上がりが検出された。

構　造　北東―南西に軸をもつ3.0×7.8ｍの略方形を呈す。南側はかなり削平され、残存していない。炉・カマドに類するものは検出できなかった。精査時の平面形の観察から中世ＳＢ21と縄文時代ＳＢ24を切るものと判断される。

遺　物　図化できるようなものはなかったが土師質のものが多く、内耳鍋片が含まれていた。鍛造釘（第162図７）も出土。

時　期　中世後期

ＳＢ21（第127図）　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－20

検　出　地山直上の精査で黒褐色土の方形の落ち込みが見られた。軸に沿うように十字に先行トレンチを設定し、床面と思われる平坦面、北側の比較的直な立ち上がりが検出された。南北の先行トレンチの土層断面からＳＫ251に切られること、中世ＳＫ236、縄文時代ＳＢ24を切ることが分かった。

構　造　北東―南西に軸をもつ3.4×6.5ｍの略方形。中世ＳＢ20同様南側がかなり削平され残存していなかった。床面は比較的堅緻である。小土坑が多く検出され、ほとんどが柱穴と思われる。炉・カマドは検出されなかった。中世後期ＳＢ20に切られる。

遺　物　１土師器皿、２盤？、３龍泉窯系蓮弁文青磁碗（13世紀）。

時　期　中世前期

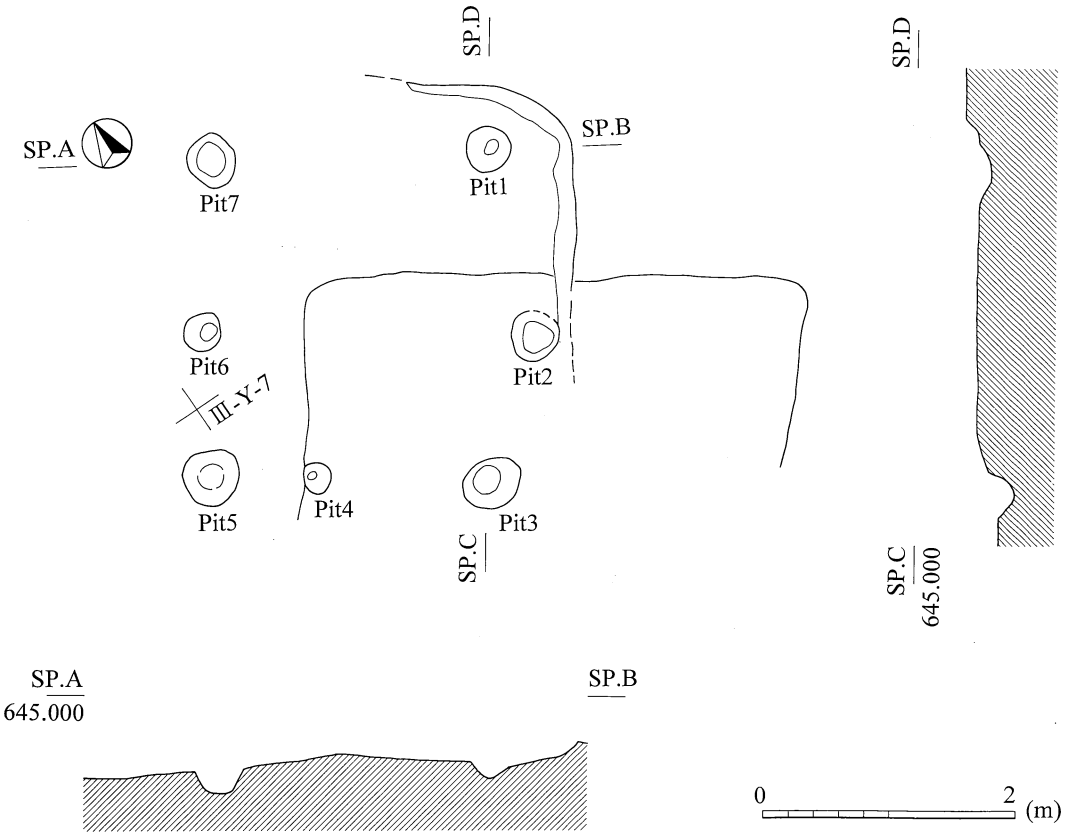
ＳＢ22（第128図）　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－19

検　出　地山直上の精査で黒褐色土の方形の落ち込みが見られた。軸に沿うように十字に先行トレンチを設定、床面と思われる平坦面、北側の直な立ち上がりが検出された。規模などを勘案して竪穴建物跡と考えた。南側は削平され、立ち上がりは検出できなかった。

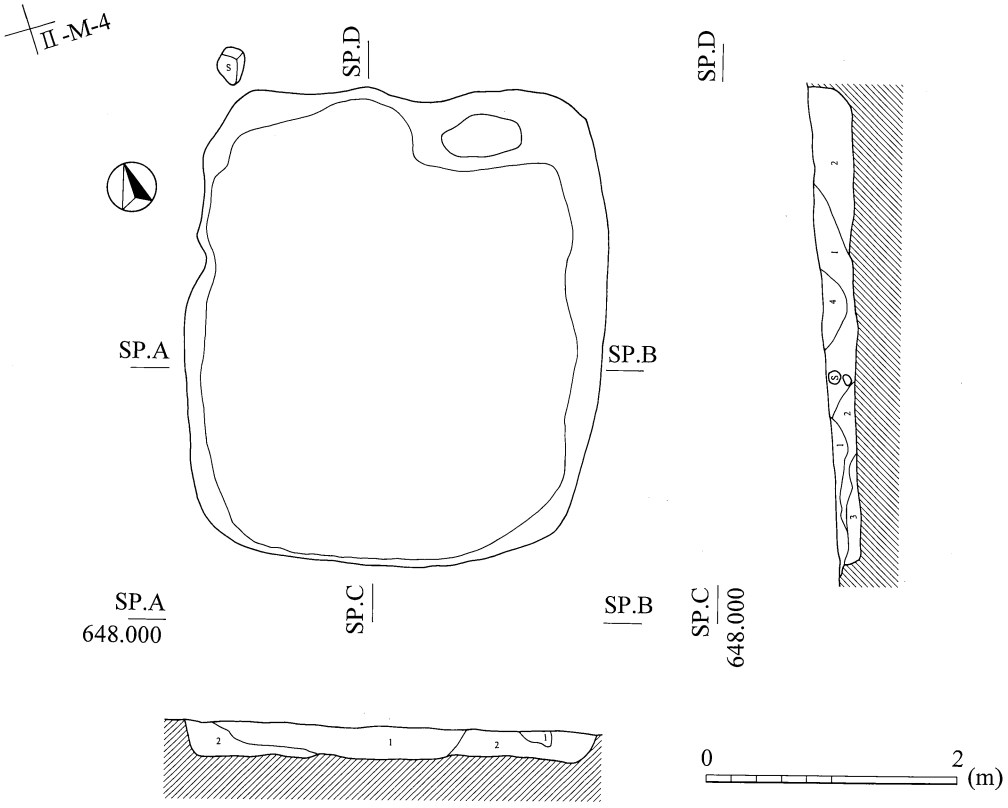
構　造　ほぼ北―南に軸をもつ3.3×4.4ｍの略方形。ＳＫ246との切り合いは土層断面では明確ではなかったが、検出段階ですでにＳＫ246の外形が判別できたことからＳＫ246が本跡を切っていると考えた。小土坑が９基検出され、柱穴と考えられる。小柱穴を多くもつ特徴は中世前期と想定されたＳＢ21と共通する。

遺　物　１～３土師器皿、４土師器底部、６須恵質擂鉢。

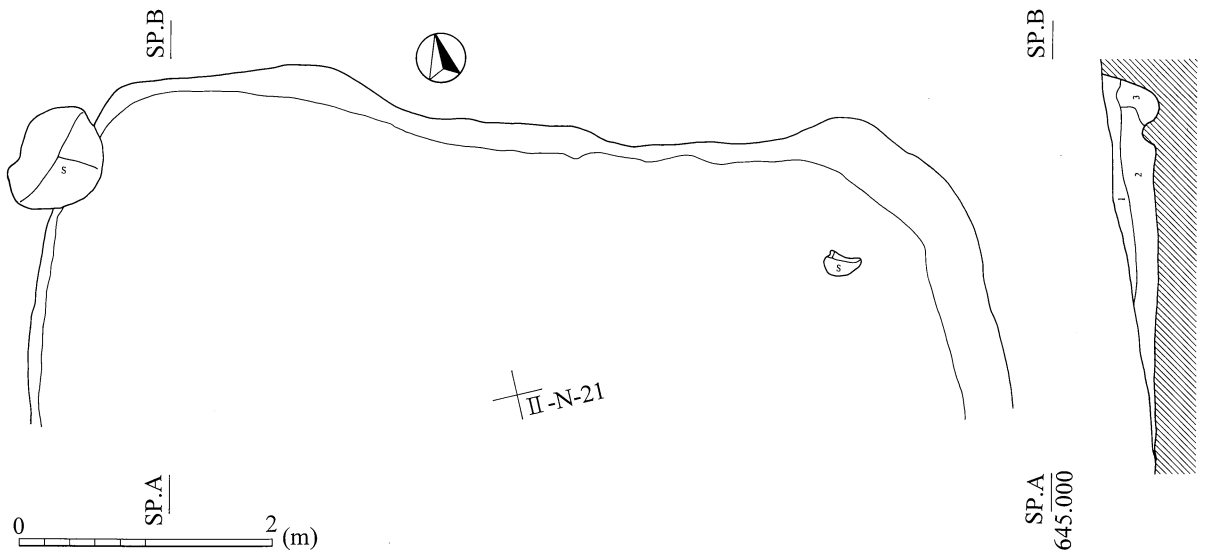
時　期　中世前期か



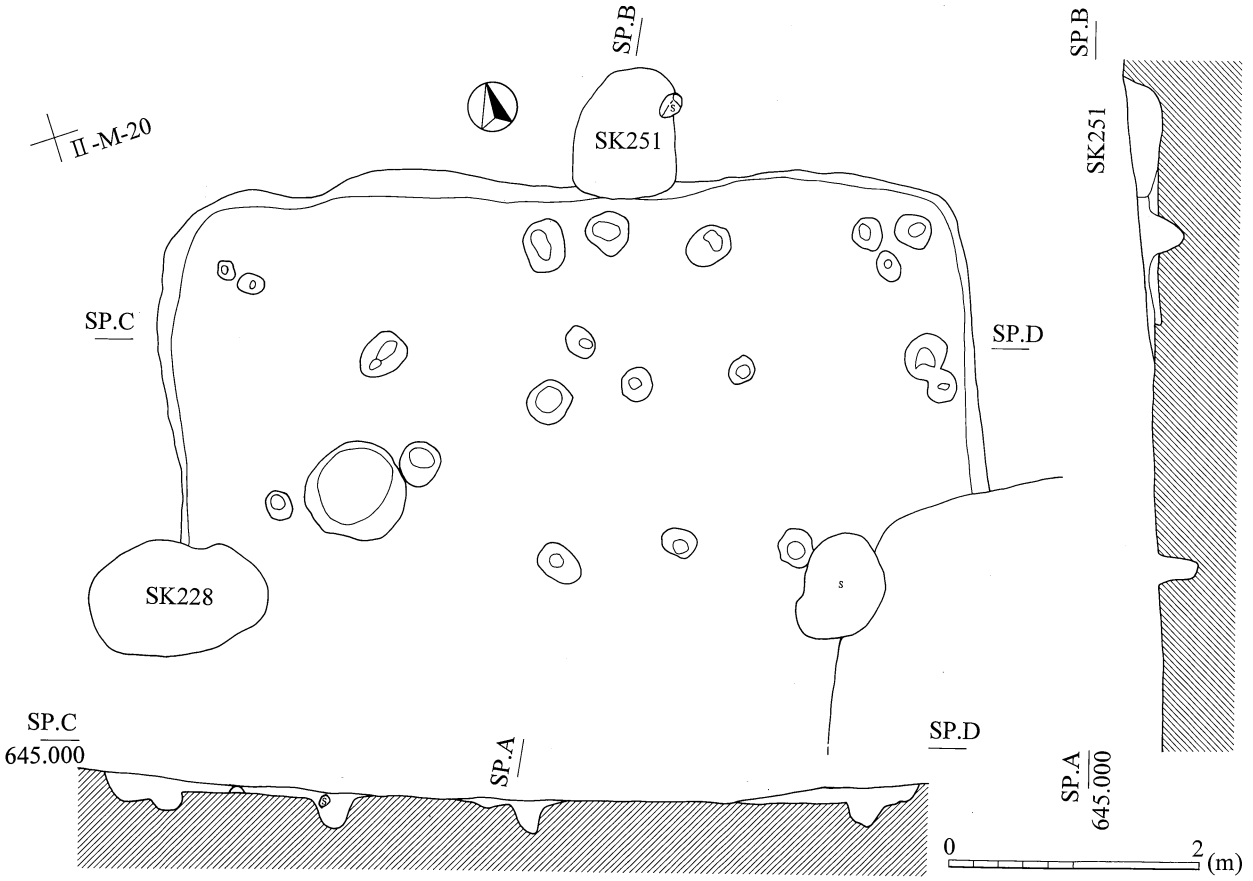
第124図　竪穴建物跡　ＳＢ06

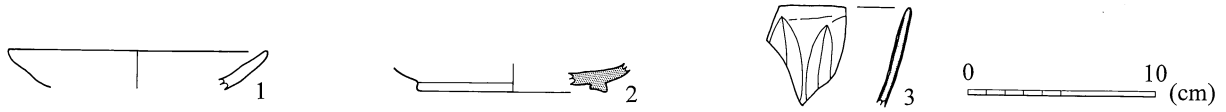


第125図　竪穴建物跡　ＳＢ19



第126図　竪穴建物跡　ＳＢ20





第127図　竪穴建物跡　ＳＢ21・出土土器

ＳＢ27（第129図）　　位置　③区Ⅱ－Ｃ－17

検　出　表土除去後の精査で、方形を呈する黒褐色土の落ち込みが見られた。床面と思われる堅緻な平坦面も一部露出していたので、竪穴建物跡と考え、軸に沿うように先行トレンチを設定した。北側と東側に立ち上がりとほぼ全面に床面が検出された。

構　造　北―南に軸をもつ4.5×3.2ｍの略方形。立ち上がりは東側と北側で確認されたが、この遺構上部に現代の物置小屋があったためか、削平が著しく平面形をおおよそとらえたにすぎない。しかし、床面は平坦かつ堅緻で判別しやすい。西側に少し傾斜する。小土坑がいくつか検出されたが、うちPit１～７が柱穴と考えられる。とくにPit７では柱痕と土坑底部に板状の石が埋設されていた（礎石）。明確なカマドや炉は検出されなかった。

遺　物　底部にヘラケズリを施すロクロ成形の施釉（灰釉）陶器。13世紀代の東海系施釉陶器か。

時　期　中世前期

２　掘立柱建物跡と土器・陶磁器

ＳＴ02（第130図）　　位置　①区Ⅱ－Ｙ－11

検　出　表土を剥ぎ、遺構検出面を精査したところ、ほぼ同質の黒褐色土の小土坑が検出され、これらのうち規則的な方向性をみせたものを掘立柱建物跡と考えた。

構　造　Pit１～５はいずれも方形で１辺が25cm前後、検出面からの深さも20～30cmを測る。柱穴の中に柱痕が認められるものはない。覆土の状況も似ていて、一連の柱穴と考えられる。さらに柱穴の規模、形状（方形）から考えて打ち込み式の柱かもしれない。この掘立柱建物跡自体の軸は北東―南西で4.0×2.2ｍの２×１柱間。カマド、炉といったものは検出されなかった。

遺　物　１土師器皿、小土坑Pit２出土。図化できなかったがPit１および２からも土師器片が出土。柱穴からは小破片しか出土していないが、遺構検出面でＳＴ02周辺では多くの土師器内耳鍋片が検出されている。

時　期　中世後期か

ＳＴ03（第131図）　　位置　①区Ⅱ－Ｙ－11

検　出　ＳＴ02と同様。

構　造　Pit１～７は方形を呈するものが多く、深さは20～50cmを測る。いずれも覆土の状況も似ていて一連の柱穴と考えられる。軸は北東―南西の4.3×4.2ｍの２×２柱間か。

遺　物　１・２土師器皿。１Pit７、２Pit２から出土。遺構検出面で本遺構周辺より土師器内耳鍋片が検出される。

時　期　中世後期か

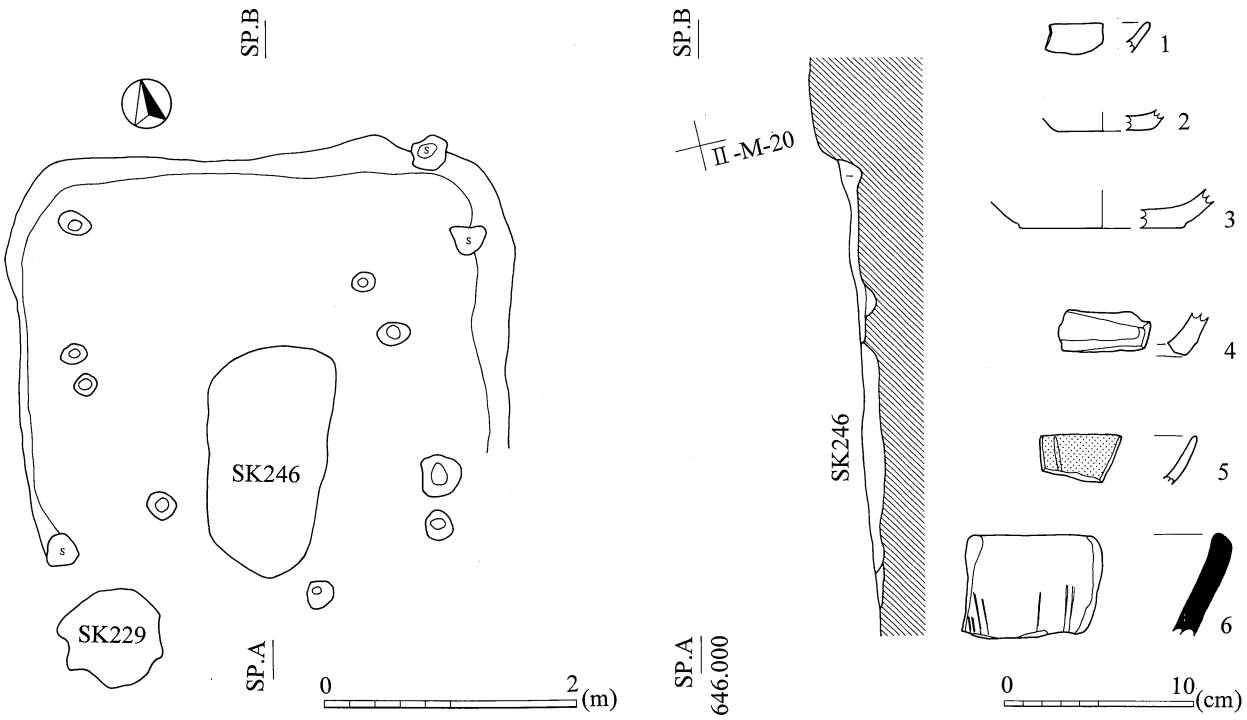
ＳＴ04（第132図）　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－25

検　出　ＳＴ02と同様。

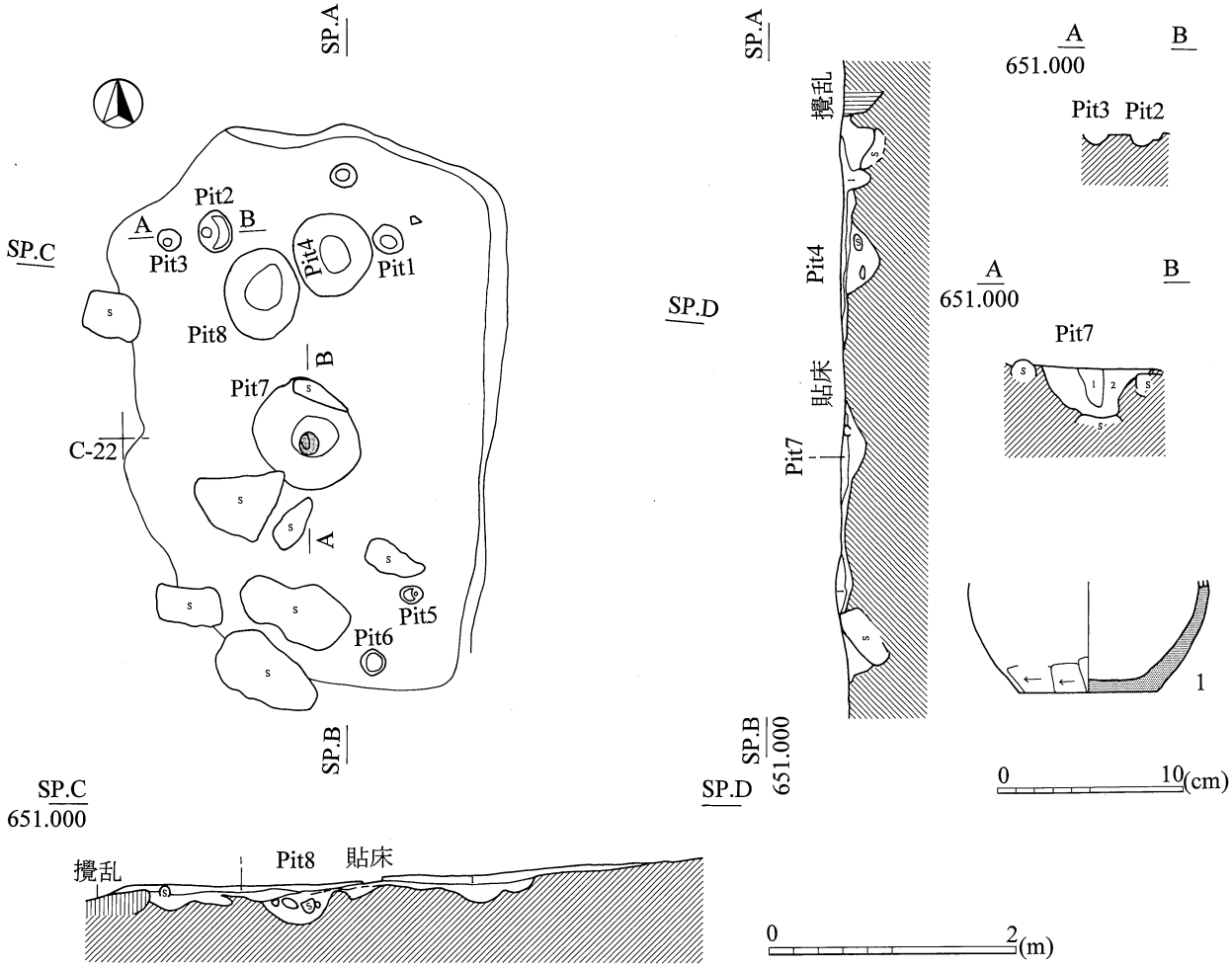
構　造　Pit１～９はいずれも覆土の状況も似ており、一連の柱穴と考えられる。とくにPit８には柱痕も認められた。軸はほぼ東―西で、3.8×2.7ｍの２×２柱間。

遺　物　Pit２より銅銭景徳元宝（第163図29）、Pit８から土師器・須恵器片が出土。

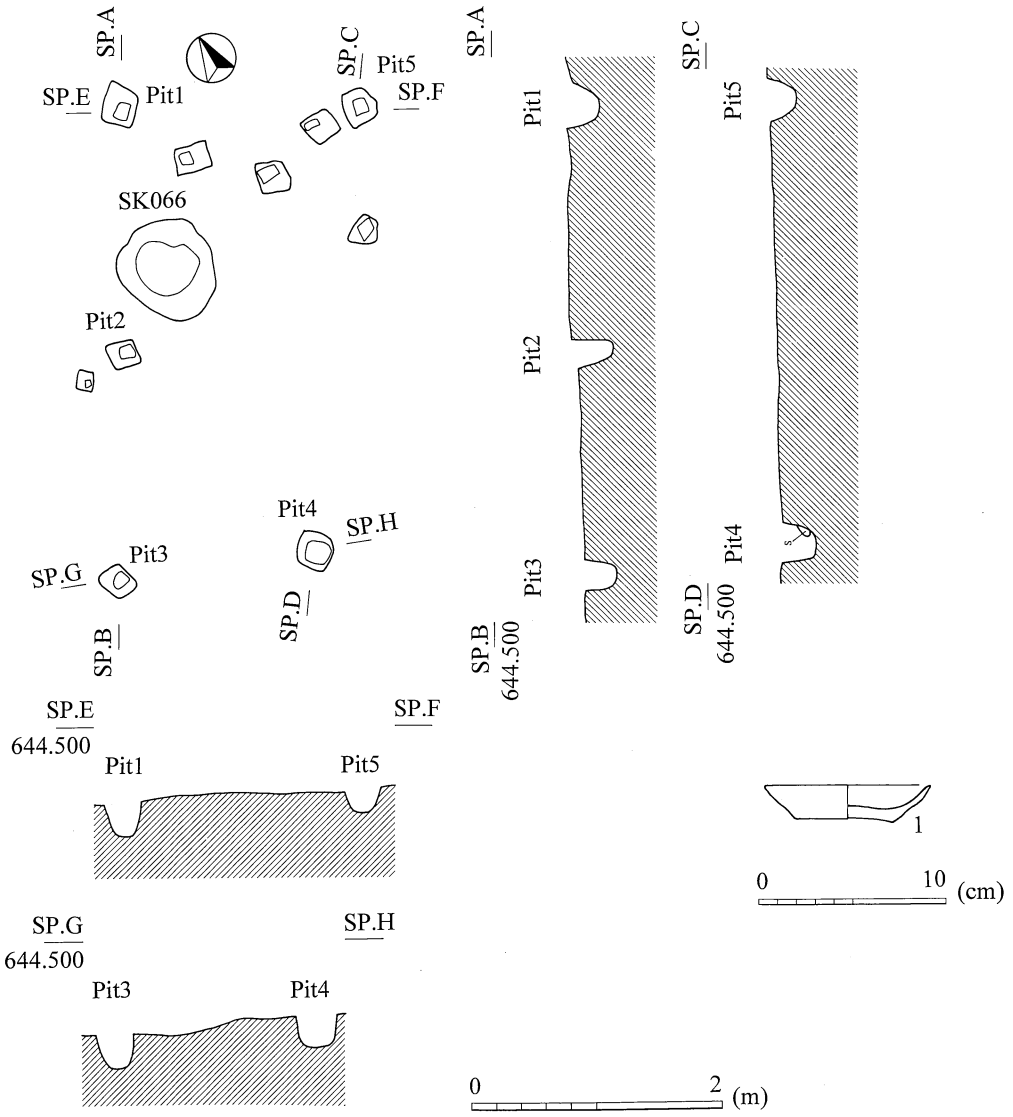
時　期　中世



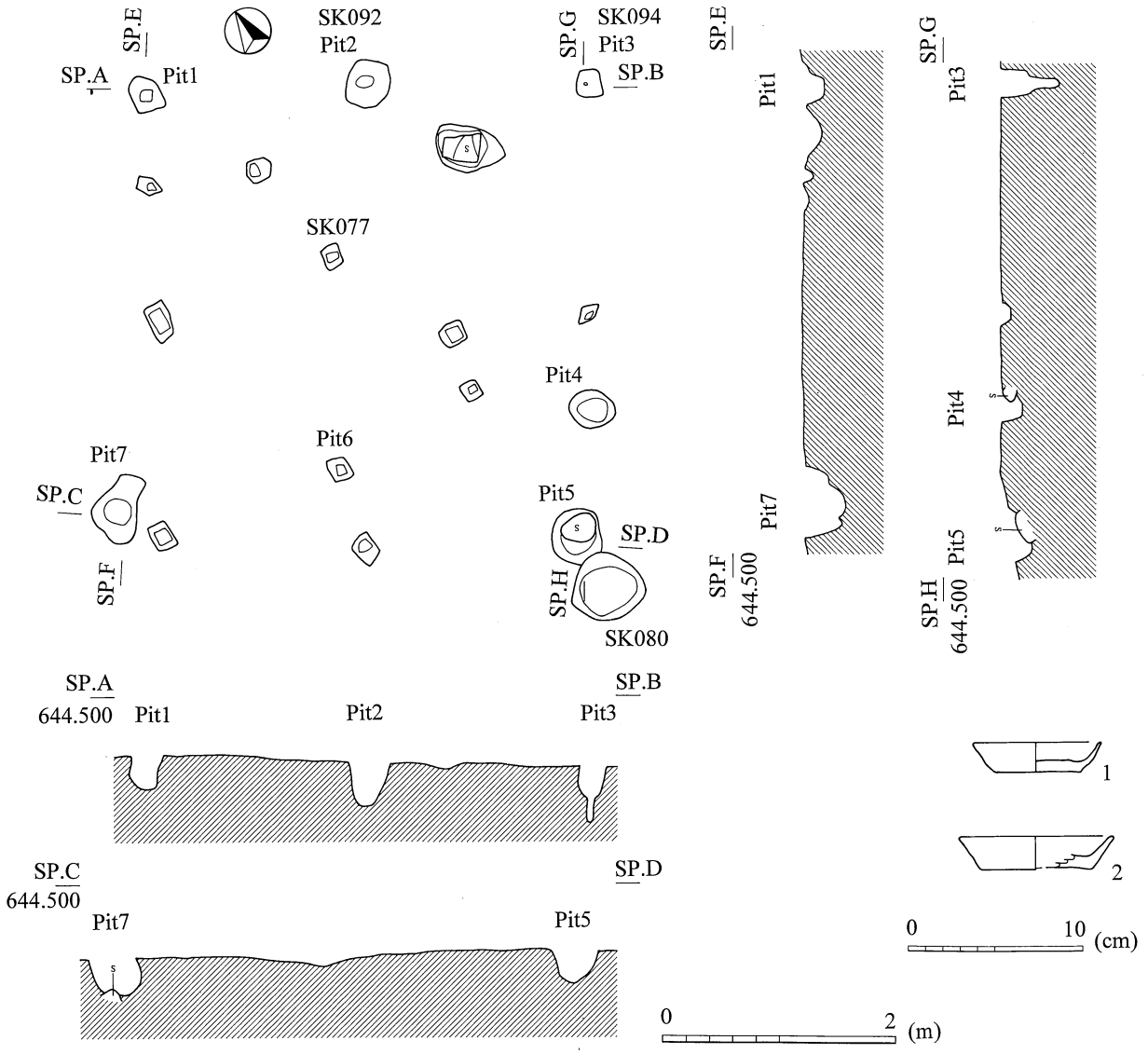
第128図　竪穴建物跡　ＳＢ22・出土土器



第129図　竪穴住居跡　ＳＢ27・出土土器



第130図　掘立柱建物跡　ＳＴ02・出土土器



第131図　掘立柱建物跡　ＳＴ03・出土土器

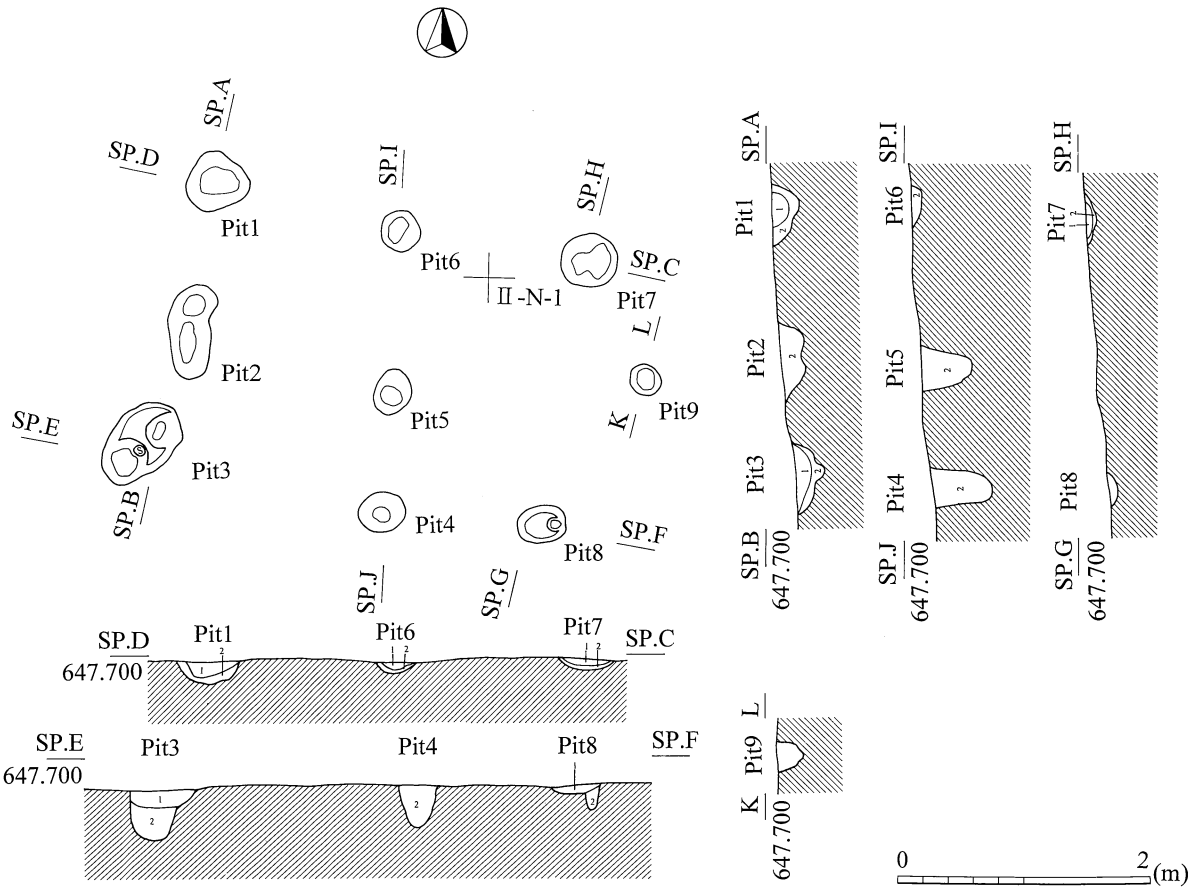
ＳＴ05（第133図）　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－17

検　出　表土除去後、帯状の落ち込みの周辺から規則的に小土坑が検出された。

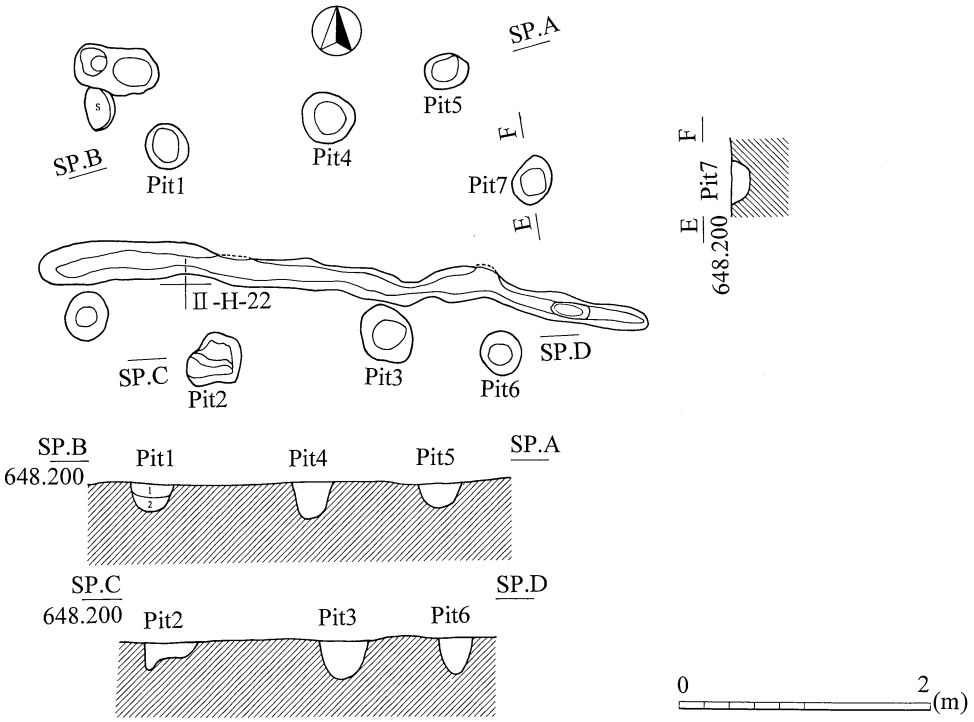
構　造　Pit１～７はいずれも覆土の状況も似ており、一連の柱穴と考えられる。軸はほぼ東―西で3.1×2.6ｍの２×１柱間。

遺　物　図化できるようなものはない。

時　期　中世か



第132図　掘立柱建物跡　ＳＴ04



第133図　掘立柱建物跡　ＳＴ05

３　土坑と土器・陶磁器

(1)　縄文時代

ＳＫ190（第134図）　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－17

径1.1～1.2ｍの歪な円形。１・２縄文ＬＲを斜位回転施文、半截竹管状工具で区画し、区画外をナデ消した木の葉文の土器。前期後葉の諸磯ａ式。

ＳＫ250（第135図）　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－12

北東―南西に長軸を持つ1.9×1.1ｍの楕円形。１胴部全面に縄文ＬＲ・ＲＬを交互に横位回転し、羽状構成を地文とする。口縁直下に波状隆帯を貼付する。隆帯の波頂部の下部に爪形の刻みを有す略完形土器。前期末か。略完形土器が出土し、土坑の形状から墓穴の可能性も考え理化学的な分析（リン酸・カルシウム・炭素分析）を行ったが、肯定するような結果は得られなかった（第４節参照）。

(2)　古墳時代

ＳＫ059（第136図）　　位置　①区Ⅱ－Ｔ－20

ほぼ東―西に長軸を持つ現存1.2×0.6ｍの楕円形。１土師器器台、２壺？が出土。古墳時代前期。

ＳＫ085（第137図）　　位置　①区Ⅱ－Ｘ－19

北東―南西に長軸を持つ1.3×0.9ｍの歪な楕円形。３～５土師器甕、６高坏の脚？が出土。

(3)　古代（第138～140図）

ＳＫ096　　位置　③区Ⅱ－Ｉ－８

北西―南東に長軸を持つ2.3×1.2ｍの略楕円形。１胴部ヘラケズリの土師器甕出土。

ＳＫ123　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－５

現存2.0×1.6ｍ。ＳＫ249に切られる。２須恵器甕底部、鍛造釘（第162図11）出土。

ＳＫ191　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－１

長軸を北西―南東にもつ4.2×2.8ｍのやや不整形な方形。３須恵器坏、４胴部ヘラケズリの土師器甕出土。

ＳＫ192　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－21

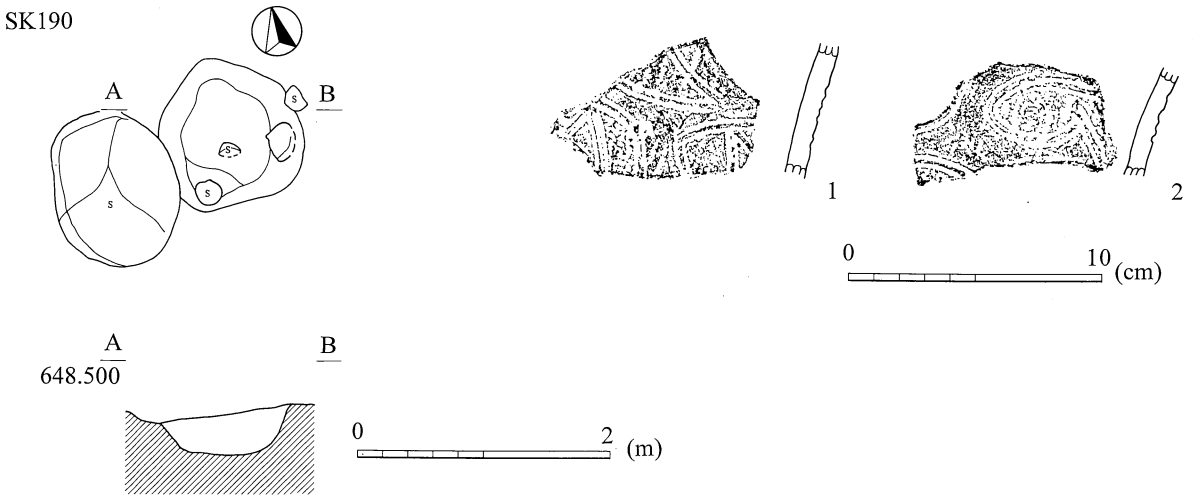
やや不整形な円形。径1.8～2.0ｍ。５・６黒色土器椀出土。

ＳＫ218　　位置　③区Ⅱ－Ｉ－25

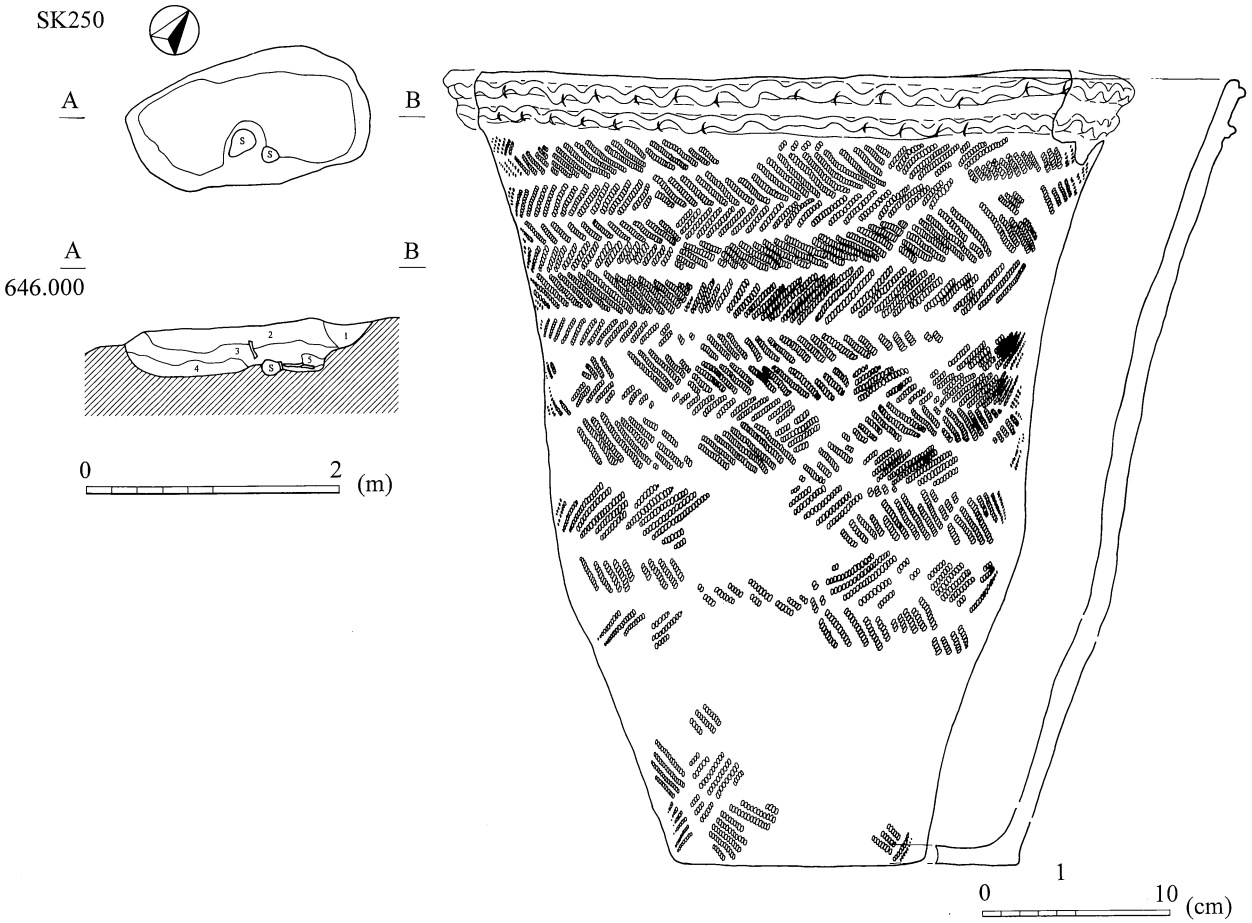
現存3.6×1.7ｍだが、本来円形を呈すか。７黒色土器坏、８土師器坏、用途不明の骨製品（第165図３）が出土。

ＳＫ233　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－10

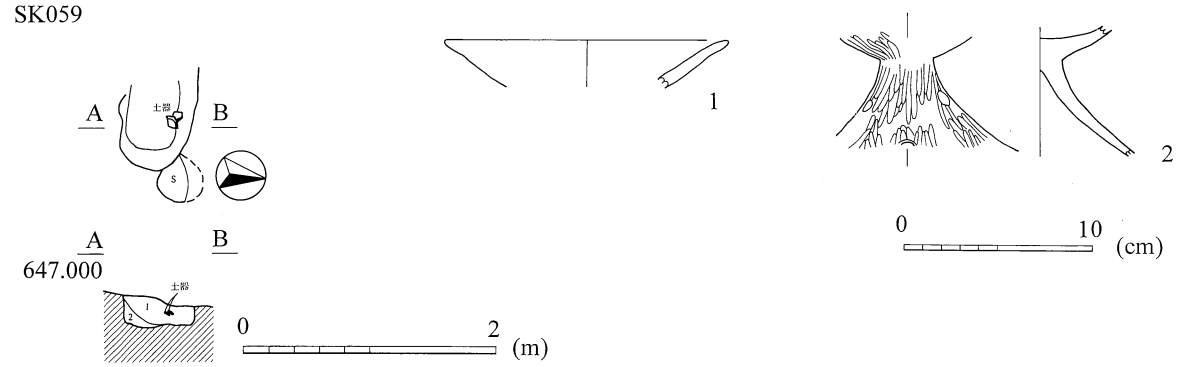
長軸をほぼ東―西にもつ、2.4×1.8ｍの方形。９黒色土器底、10坏、11灰釉陶器皿、光ヶ丘窯式。鉄製蓋（第162図25）が出土。



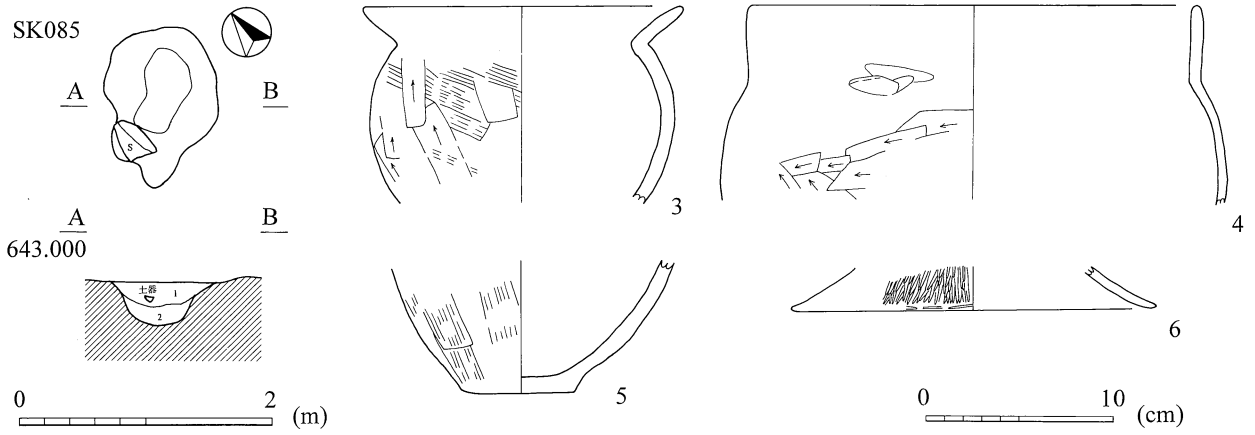
第134図　縄文時代土坑　ＳＫ190・出土土器



第135図　縄文時代土坑　ＳＫ250・出土土器



第136図　古墳時代土坑　ＳＫ059・出土土器



第137図　古墳時代土坑　ＳＫ085・出土土器

ＳＫ235　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－14

北東―南西に長軸をもつ1.6×0.9ｍの楕円形。12土師器坏が出土。

ＳＫ255　　位置　③区Ⅱ－Ｉ－25

１辺0.5ｍの隅丸方形。13須恵器坏が出土。古墳時代ＳＫ218を切る。

ＳＫ269　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－16

ほぼ東―西に長軸をもつ3.3×2.7ｍの楕円形。14・15外面に並行タタキが施された須恵器甕が出土。

ＳＫ298　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－24

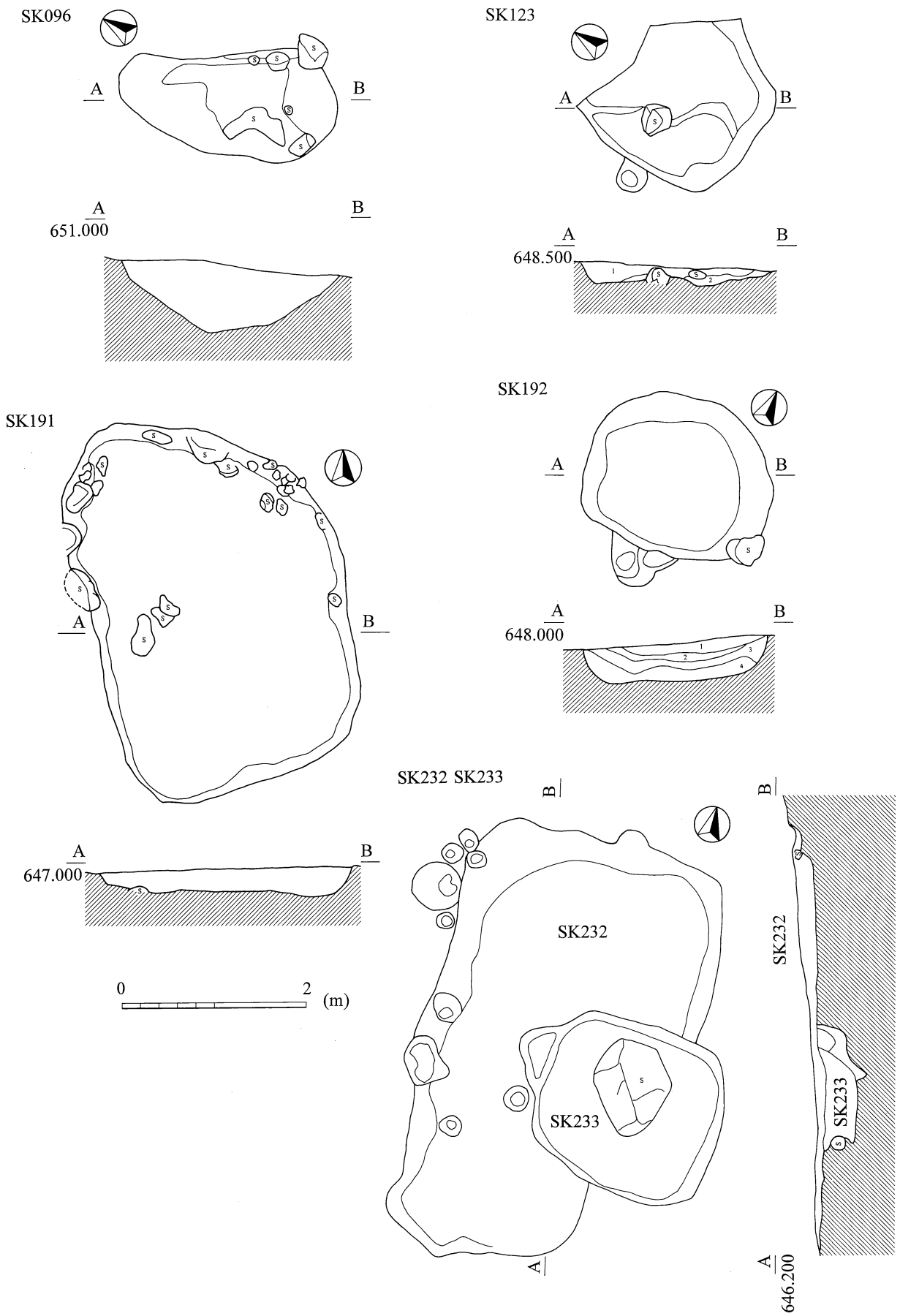
ほぼ北―南に軸をもつ１辺2.3ｍの略方形。16内外面丁寧にミガキ調整が施された土師器椀が出土。

ＳＫ300　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－12

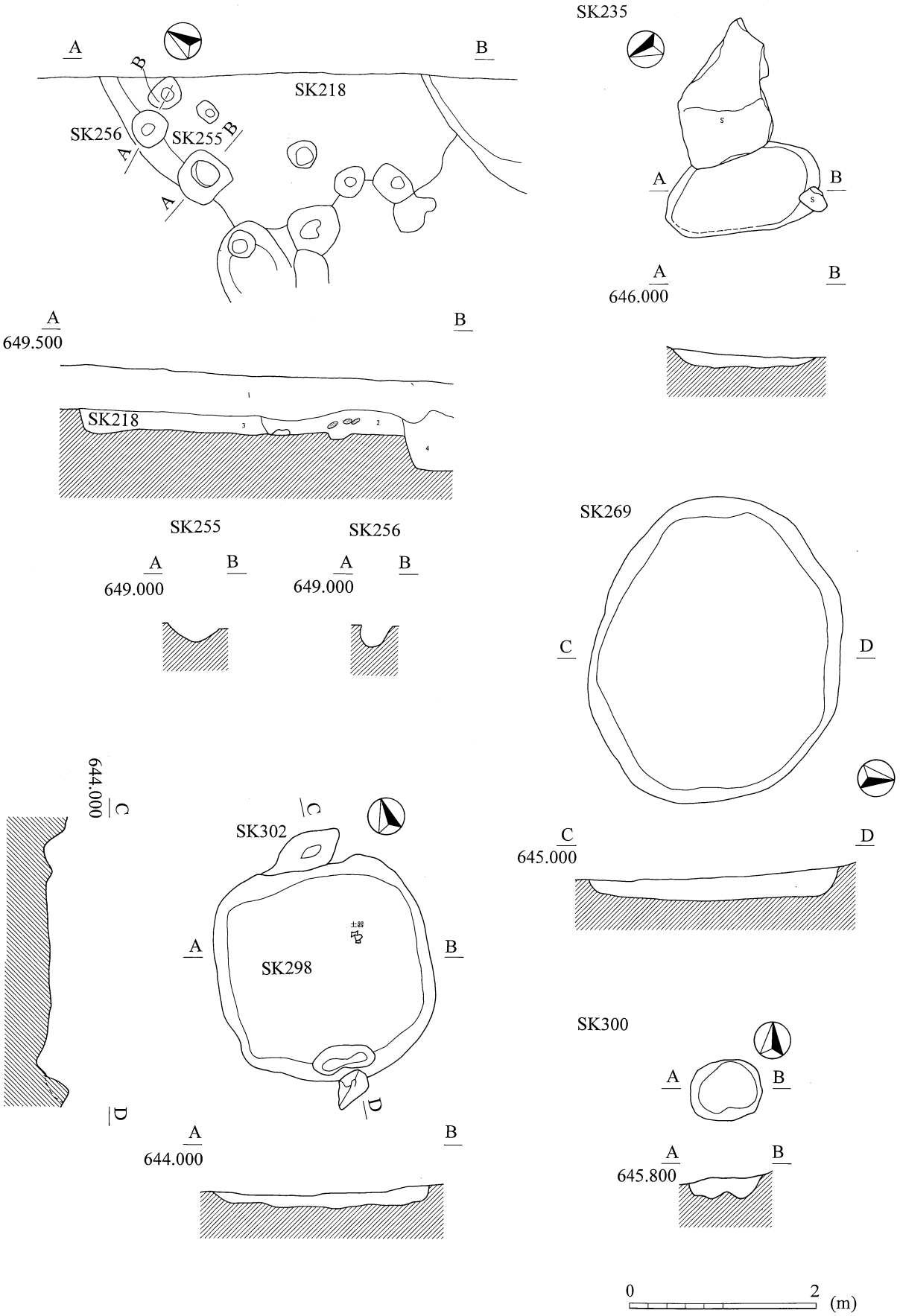
径0.7～0.8ｍを測る。17須恵器蓋が出土。

(4)　中世（遺構図第141～145図・土器・陶磁器第146図）

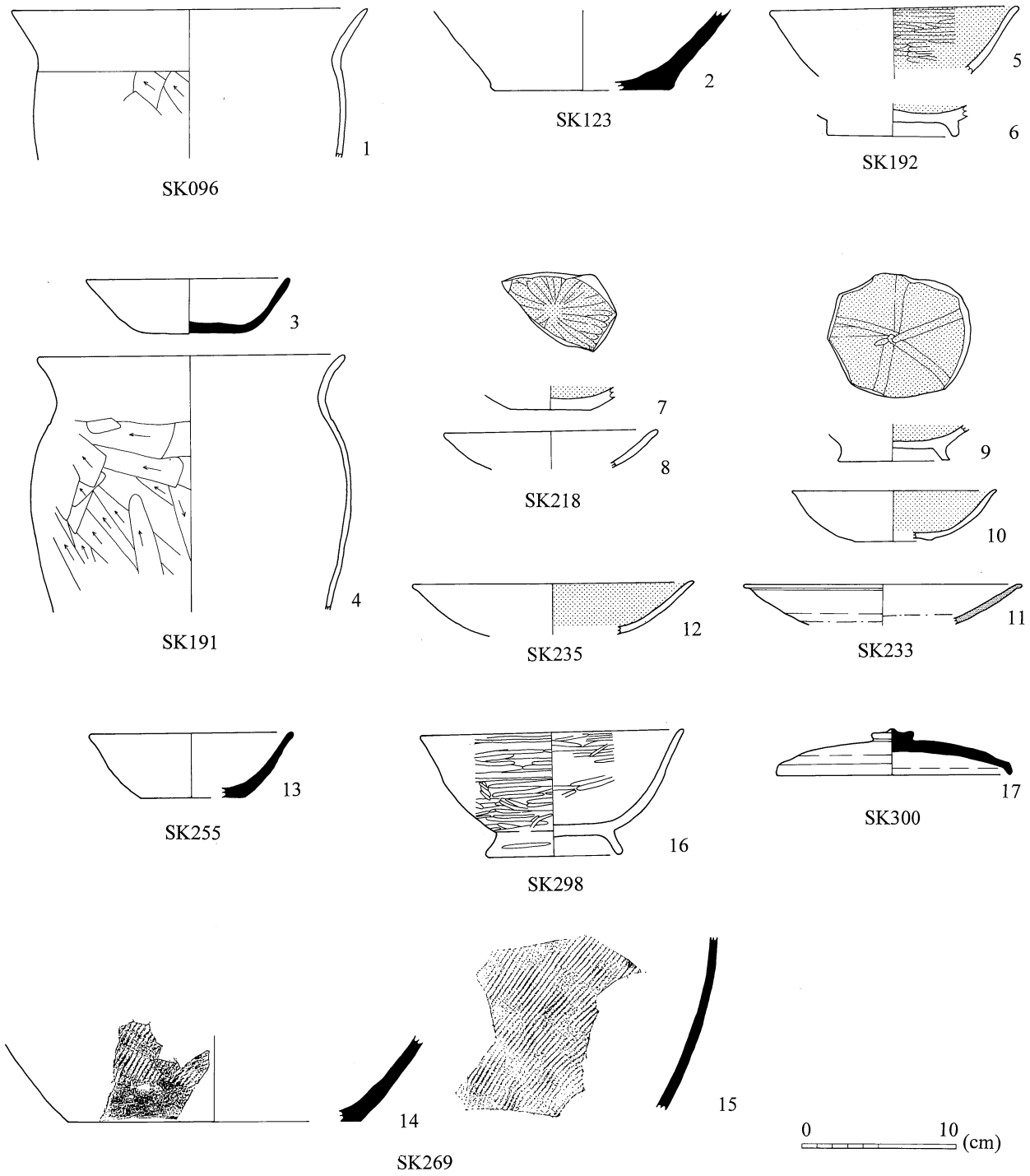
ＳＫ011　　位置　①区Ⅱ－Ｔ－25



第138図　古代の土坑(1)



第139図　古代の土坑(2)



第140図　古代の土坑出土土器

北東―南西に長軸をもつ1.9×1.2ｍの略長方形。１龍泉窯系青磁碗の底部が出土。

ＳＫ037　　位置　①区Ⅱ－Ｔ－14

北東―南西に長軸をもつ0.9×0.7ｍの略楕円形。２土師器皿が出土。

ＳＫ044　　位置　①区Ⅱ－Ｔ－８

北西―南東に長軸をもつ2.6×1.5ｍのやや歪んだ長方形。３土師器皿、４内耳鍋が出土。

ＳＫ053　　位置　①区Ⅱ－Ｔ－25

径0.2ｍの略円形。５龍泉窯系蓮弁文青磁碗が出土。

ＳＫ060・061　　位置　①区Ⅱ－Ｔ－23

ＳＫ060は現存1.4×0.9ｍ、不整形。ＳＫ061は1.3×0.8ｍの楕円形。平面形を精査している段階では異なる土坑どうしの切り合いと判断したが、土層断面でも切り合いなどは区別できなかったため、遺物などは一括して扱わざるを得なかった。銅銭開元通宝（第163図３）と淳化元宝（４）が出土。図化できるような土器はなかった。ウマの歯（切歯片）出土。

ＳＫ075　　位置　①区Ⅱ－Ｘ－20

北東―南西に長軸をもつ0.4×0.3ｍの略楕円形。６土師器皿が出土。

ＳＫ083　　位置　①区Ⅱ－Ｔ－14

北東―南西に長軸をもつ3.6×1.9ｍのやや歪んだ長方形。７～９土師器皿、軽石製品（第158図65）、銅銭嘉祐元宝（第163図５）が出土。

ＳＫ087　　位置　①区Ⅱ－Ｘ－５

長軸は北東―南西、1.7×1.0ｍを測り、やや不整形な卵形。10は15世紀代の古瀬戸灰釉香炉、11は15世紀前半の古瀬戸天目茶碗。いずれも中世後期。

ＳＫ100　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－８

北東―南西に長軸をもつ1.8×1.6ｍの方形。12土師器皿、ほかに図化できなかったが内耳鍋片が出土。中世後期。咬痕あるイノシシ肩甲骨が共伴。

ＳＫ101　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－９

北東―南西に長軸をもつ2.9×2.1ｍの長方形。13～15土師器皿、16は15世紀前半の古瀬戸天目茶碗。中世後期。小型哺乳類の脛骨、シカの指骨が共伴。

ＳＫ108　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－９・14

北東―南西に長軸をもつ1.2×1.0ｍの略長方形。17土師器皿出土。

ＳＫ111　　位置　③区Ⅱ－Ｉ－23

北―南に長軸をもつ4.3×2.6ｍの長方形。18・19土師器皿出土。

ＳＫ122　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－15ほか

ほぼ北―南に長軸をもつ2.7×1.7ｍの略長方形。20は15～16世紀代の在地系瓦質火鉢、鍛造釘（第162図10）。中世後期か。

ＳＫ127　　位置　③区Ⅱ－Ｉ－13

東―西に長軸をもつ3.7×2.2ｍの略方形。21・22土師器皿、23・24内耳鍋、銅銭開元通宝（第163図６）、鍛造釘（第162図９）が出土。中世後期。

ＳＫ128　　位置　③区Ⅱ－Ｉ－18

ほぼ東―西に長軸をもつ2.2×1.9ｍの卵形。鉄釘（第162図４）、砥石（第157図57）、図化できなかったが土師器皿、陶器片、骨片が出土。墓穴か。

ＳＫ129　　位置　③区Ⅱ－Ｉ－18

北西―南東に軸をもつ1.3×1.2ｍの方形の石組みを有する土坑。図化できなかったが、須恵質擂鉢と甕、また用途不明の骨角製品とシカ角片が出土。中世前期か。

ＳＫ131　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－９

ほぼ東―西に軸をもつ1.3×1.1ｍの長方形の平石を敷く土坑。石は河原石で、煤けたり焼けて赤化している。図化できなかったが土師器皿が出土。古代ＳＢ15を切る。

ＳＫ157　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－１・２

ほぼ東―西に軸をもつ1.4×0.5ｍの略長方形。25須恵質擂鉢が出土。

ＳＫ158　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－10

北東―南西に長軸をもつ1.2×1.1ｍのいびつな方形。26土師器皿が出土。焼土、炭を含む。中世ＳＫ241を切る。

ＳＫ160　　位置　③区Ⅱ－Ｉ－24

ほぼ東―西に軸をもつ1.7×1.1ｍの長方形。27土師器皿、28青磁碗底部、鍛造釘？（第162図８）が出土。

ＳＫ163　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－４

径0.3ｍの円形。銅銭景徳元宝（第163図７）が出土。

ＳＫ165　　位置　③区Ⅱ－Ｉ－24

北西―南東に軸をもつ1.0×0.7ｍの長方形。平石で四角く組んでおり、この土坑のすぐ間近から用途不明の骨製品が出土（第165図２）。類品は中世ＳＫ166や古代ＳＫ218からも出土。ＳＫ218は古代と考えられることから、本資料も古代に属する可能性はある。しかし、覆土や周辺に中世の土坑や遺物が多いことから、この土坑自体は中世に属すると考えた。

ＳＫ166　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－24

北西―南東に軸をもつ径0.5ｍの円形。この土坑からも用途不明の骨製品（第165図１）が出土。覆土の土色・土性はＳＫ165と同じ。

ＳＫ169　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－10

北―南に長軸をもつ1.2×0.9ｍの台形。29土師器皿、砥石（第158図59）、台石（第160図79）が出土。図化できなかったが、黒色処理した土師器片、無釉の陶器片、内耳鍋片も伴うことから中世後期だろう。中世ＳＫ170に切られる。

ＳＫ170　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－10

北東―南西に長軸をもつ0.7～0.8ｍの略円形。図化できなかったが土師器皿や内耳鍋片が出土。中世後期。中世ＳＫ169・187を切る。

ＳＫ171　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－10

北―南に長軸をもつ1.6×1.4ｍの略長方形。30土師器皿、石臼（第161図90）。図化できなかったが、他にも土師器皿、内耳鍋、青磁片、台石、石鉢が出土。中世後期。中世ＳＫ187を切る。

ＳＫ172　　位置　③区Ⅱ－Ｇ－５

北西―南東に軸をもつ2.0×1.3ｍの楕円形。須恵質の陶器片、土師器片が出土。頭蓋骨（人骨）が共伴。

ＳＫ173　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－10

ほぼ東―西に長軸をもつ1.5×1.1ｍの楕円形。銅銭至道元宝（第163図８）、図化できなかったが、土師器片が多数出土。

ＳＫ177　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－21

ほぼ東―西に長軸をもつ2.2×0.9ｍの楕円形。ほぼ全身の人骨が出土したが、非常に脆く歯などの一部しか取り上げることができなかった。土師器片が出土しているものの時期を決定できる資料に欠ける。骨を含む遺構の多くが中世と考えられ、本土坑も中世に含めた。出土人骨は当初１個体と想定していたが、歯の分析から２個体（Ｂ－７・Ｂ－８）あったと想定される。出土人骨の特徴は京都大学霊長類研究所茂原信生氏によると下記のとおり。

ＳＫ177出土人骨Ｂ－７：歯冠の表面はあれている。上顎骨は左第２大臼歯、下顎骨は左犬歯の合計２本が出土している。第２大臼歯に象牙質の露出はない。したがってさほど高齢ではないと推測される。Ｂ－８（もう一つの個体の歯）とさほどかわっておらず20歳代の可能性が高い。性別は不明である。歯の大きさでは性別は判定できなかった。

ＳＫ177出土人骨Ｂ－８：上顎の左大臼歯３本、右第３臼歯と下顎の第２・第３大臼歯の合計６本が出土している。第３大臼歯は上下とも咬耗がほとんどなく萌出してからさほど年月が経過していない。20歳代であろう。第３大臼歯の退化的な傾向が強い。歯の大きさでは性別は判定できなかった。

ＳＫ185　　位置　③区Ⅱ－Ｏ－６

現存0.7×0.4ｍ不整形。ＳＫ170などを切る。31・32土師器内耳鍋が出土。中世後期。

ＳＫ186　　位置　③区Ⅱ－Ｏ－６

径0.7ｍの円形。図化できなかったが土師器皿、須恵質陶器が出土。中世ＳＫ187を切る。

ＳＫ187　　位置　③区Ⅱ－Ｏ－６

現存1.2×0.7ｍの歪んだ楕円形。図化できなかったが無釉陶器片、土師器片が出土。中世ＳＫ171・186に切られる。覆土に焼土・炭を多く含む。

ＳＫ193　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－23

北東―南西に長軸をもつ現存3.8×2.3ｍの土坑、中央に小土坑がある。土層断面では明確ではなかったが平面形から中世ＳＫ111に切られると思われる。33須恵質擂鉢、石鉢（第161図84）、図化できなかったが、土師器皿、内耳鍋が出土。中世後期か。イノシシ（ブタ）脛骨が共伴。

ＳＫ197　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－19・24

北―南に長軸をもつ3.9×2.1ｍの楕円形。34土師器内耳鍋、図化できなかったが土師器皿、須恵質陶器が出土。中世後期か。中世ＳＫ240を切る。

ＳＫ200　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－13

ほぼ東―西に長軸をもつ1.8×1.3ｍの楕円形。銅銭皇宋通宝（第163図９）、図化できなかったが、鉄釉陶器片、土師器皿が出土。

ＳＫ201　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－８

北東―南西に長軸をもつ1.9×1.2ｍの楕円形。35は13世紀代の龍泉窯系青磁蓮弁文碗。中世前期。

ＳＫ222　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－４

北西―南東に長軸をもつ0.7×0.5ｍの楕円形。銅銭宣和通宝（第163図10）が出土。

ＳＫ223　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－４

0.5×0.3ｍ、不整形。36印花文が施された瓦質香炉が出土、中世ＳＫ122出土の火鉢に胎土がよく似る。在地系の土器か。

ＳＫ229　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－19

径0.8ｍの円形で、周囲に石組みをする。井戸か。

ＳＫ230　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－24・25

北西―南東に長軸をもつ1.1×0.9ｍのいびつな方形。銅銭至道元宝（第163図11）、熙寧元宝２枚（12・13）、元豊通宝２枚（14・15）、元祐通宝２枚（16・17）の計７枚出土。

ＳＫ232　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－10

北東―南西に長軸をもつ5.1×3.1ｍの不整形。銅銭淳化元宝２枚（第163図18・19）、□祐通宝（元祐通宝？）(20) １枚、元豊通宝４枚（21～24）、元祐通宝１枚（25）、採拓できなかったが皇宋通宝が１枚の計８枚、

鉄製蓋（第162図24）が出土。古代ＳＫ233を切る。

ＳＫ236　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－19・20

ほぼ東―西に長軸をもつ2.0×1.8ｍの卵形。37非ロクロ成形の土師器皿、図化できなかったがロクロ成形の土師器皿、鉄滓も出土。

ＳＫ240　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－19・24

北東―南西に長軸をもつ現存1.9×1.5ｍの方形。38のロクロ成形の土師器皿、鍛造釘（第162図３）、図化できなかったが、非ロクロ成形の土師器皿や灯明皿として利用されたロクロ成形の土師器皿が数点出土している。焼土、炭、灰を多く含む。中世後期ＳＫ197に切られる。

ＳＫ241　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－10

径1.2～1.3ｍ、円形。中世ＳＫ158に切られる。

ＳＫ244　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－13・18

ほぼ北―南に長軸をもつ1.3×1.1ｍの楕円形。39土師器皿、図化できなかったが内耳鍋が出土。中世後期か。中世ＳＫ247を切る。

ＳＫ247　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－13

現存1.4×1.0ｍの略円形。中世後期ＳＫ244に切られる。

ＳＫ252　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－11・12

北西―南東に長軸をもつ4.0×2.1ｍの不整形。銅銭元豊通宝（第163図26）が出土。

ＳＫ259　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－６

北西―南東に長軸をもつ2.8×2.0ｍの不整形。40土師器内耳鍋が出土。

ＳＫ260　　位置　③区Ⅱ－Ｍ－15

北西―南東に軸をもつ現存4.0×2.0ｍの略長方形。小土坑を伴い、底部は比較的平坦なので、竪穴建物跡の可能性もある。41土師器皿、銅銭元豊通宝（第163図27）が出土。

ＳＫ266　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－22

径1.3ｍの円形。42土師器皿、図化できなかったが内耳鍋、無釉陶器片（常滑？）が出土。中世後期。

ＳＫ268　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－１

ほぼ北―南に長軸をもつ2.4×1.8ｍの略長方形。鍛造釘（第162図12）、図化できなかったが白磁片、施釉陶器、土師器皿、内耳鍋が出土。ＳＫ273に切られる。

ＳＫ272　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－21

北西―南東に長軸をもつ1.7×1.6ｍの卵形。44土師器皿が出土。

ＳＫ275　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－４

0.9×0.4ｍ、不整形。銅銭治平元宝（第163図28）、□和□□の計２枚出土。

ＳＫ283　　位置　③区Ⅱ－Ｒ－４

ほぼ北―南に長軸をもつ1.3×0.8ｍの不整形。45土師器皿、台石（第159図74）が出土。

ＳＫ285　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－５

北西―南東に長軸をもつ0.4×0.3ｍの方形。46土師器皿が出土。

ＳＫ287　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－５

0.2～0.3ｍの略円形。47は13世紀代の龍泉窯系青磁蓮弁文碗。

ＳＫ299　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－25

1.2×1.2ｍの不整形な石組み。

ＳＫ334　　位置　③区Ⅱ－Ｄ－16

ほぼ北―南に軸をもつ1.7×1.6ｍの方形。遺物は出土していないが、土層が中世の骨などを含む土坑特有の土層であったので、リン酸カルシウム分析を行った。

４　溝と土器・陶磁器

ＳＤ01・ＳＤ03（遺構図第80図、土器・陶磁器第147図）　　位置　③区Ⅱ－Ⅰ－23、Ｘ－13・18ほか

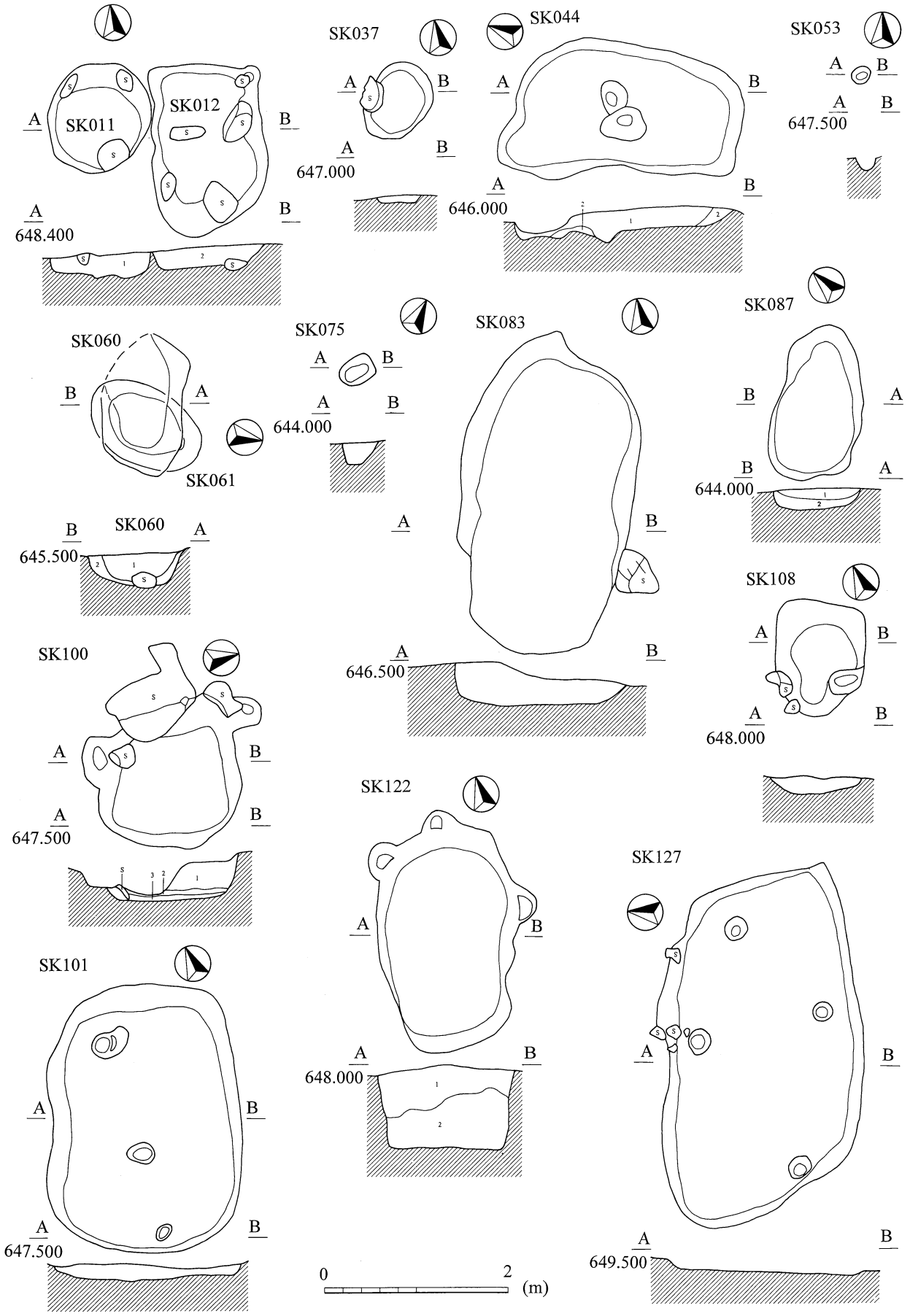
１土師器台付甕。２・３・６・７、ハケ目調整。４二重口縁の小型甕、底部は焼成後穿孔。５器台。１～５古墳時代前期。８～10土師器皿、11刷毛掛けの瀬戸美濃鉄釉碗（近世）、12・13龍泉窯系青磁蓮弁文碗（13世紀代）、14龍泉窯系青磁雷文碗（15世紀代）、15～18土師器内耳鍋。８～18中世から近世。

ＳＤ04（遺構図第81図、土器・陶磁器第149図）　　位置　③区Ⅱ－Ｎ－２・３ほか

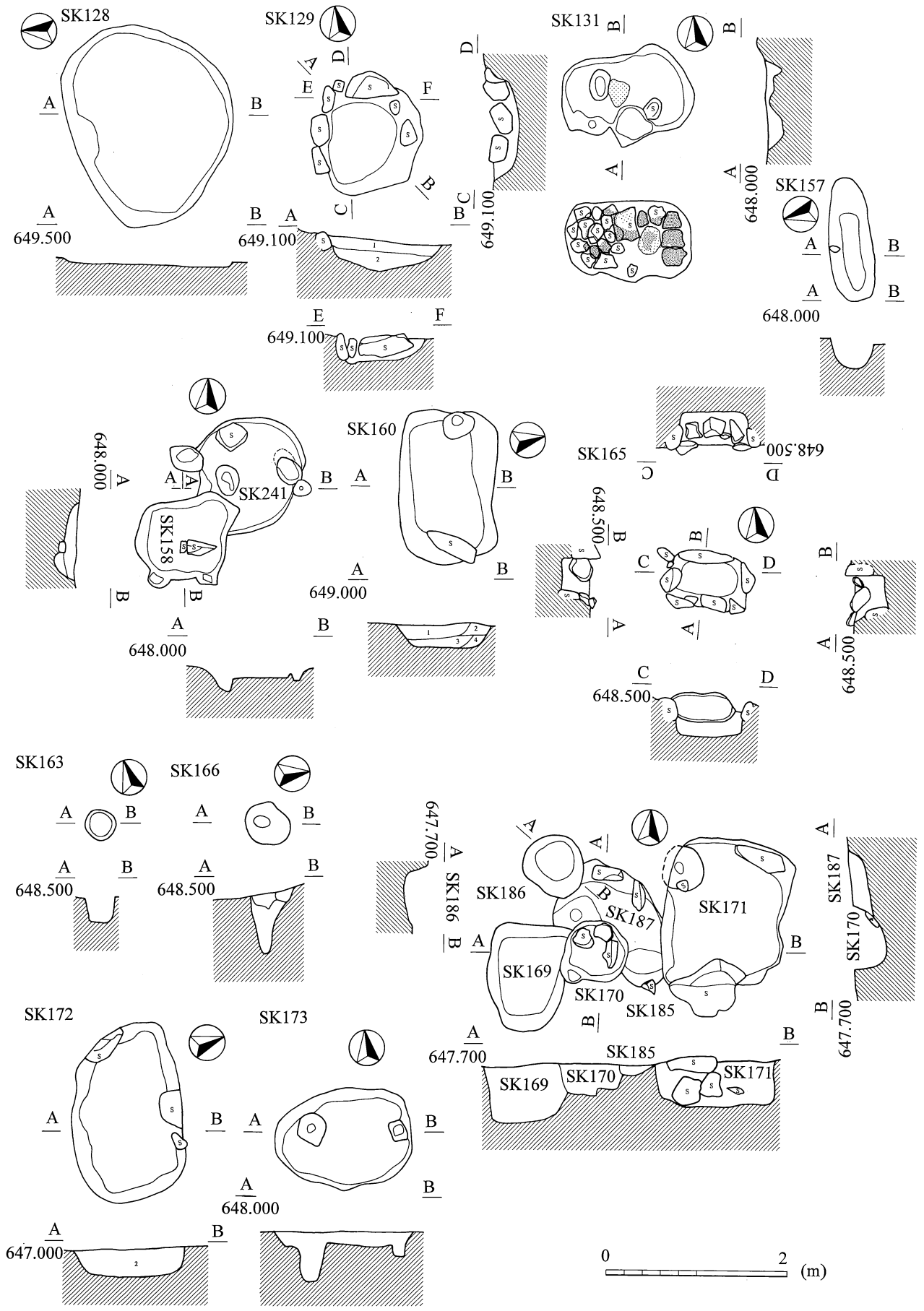
１～８土師器皿、９土師器内耳鍋、10土師質擂鉢、11～19須恵質擂鉢、20灰釉陶器皿、21須恵器？、22山茶碗コネ鉢（13世紀前半）、23古瀬戸鉄釉碗（14世紀後半）、24古瀬戸折縁深皿（14世紀後半）、25～27常滑甕、28・29中津川甕、30・31白磁皿、30口ハゲ。32龍泉窯系青磁蓮弁文碗（13世紀前半）、33～35青磁碗底部。９内耳鍋は中世後期の所産だが、全体として中世前期の遺物が多い。銭貨は北宋銭を中心に出土（第163図30～第164図42）。シカ５点（歯３、肩甲骨１、中足骨１）ウマ３点（歯２、頭蓋骨１、同一個体）、イノシシ（ブタ）１点（上腕骨）といった獣骨も出土。

ＳＤ05・06（遺構図第80図、土器・陶磁器第148図）　　位置　③区Ⅱ－Ｈ－25ほか

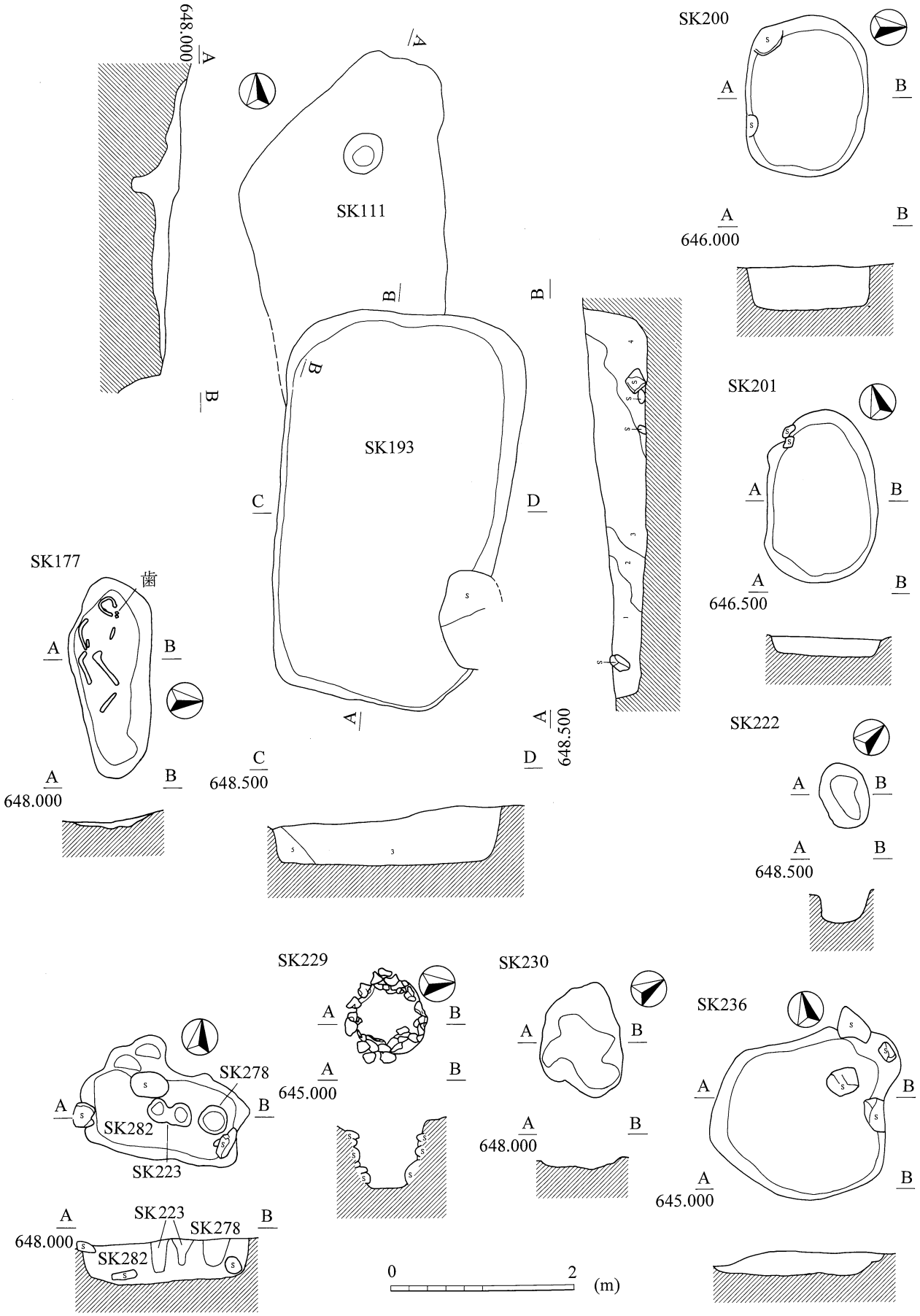
１内外面黒色処理の皿、２染付小碗、３～７土師器皿、８在地系の鉄釉碗、９瀬戸大窯鉄釉稜皿（16世紀中頃）、10瀬戸美濃鉄釉鎧手茶碗（18世紀後半から19世紀初頭）、11古瀬戸鉄釉香炉（15世紀後半）、12鉄釉行平鍋（19世紀後半）、13瀬戸美濃染付皿（19世紀後半）、14～15鞴羽口、16瓦。中世からさらに近世の遺物が多い。鍛造釘（第162図13）鉄製楔（14）、銭貨は北宋銭（第164図43～45）出土。獣骨が含まれておりシカ・ウマの歯が各１点ずつ。



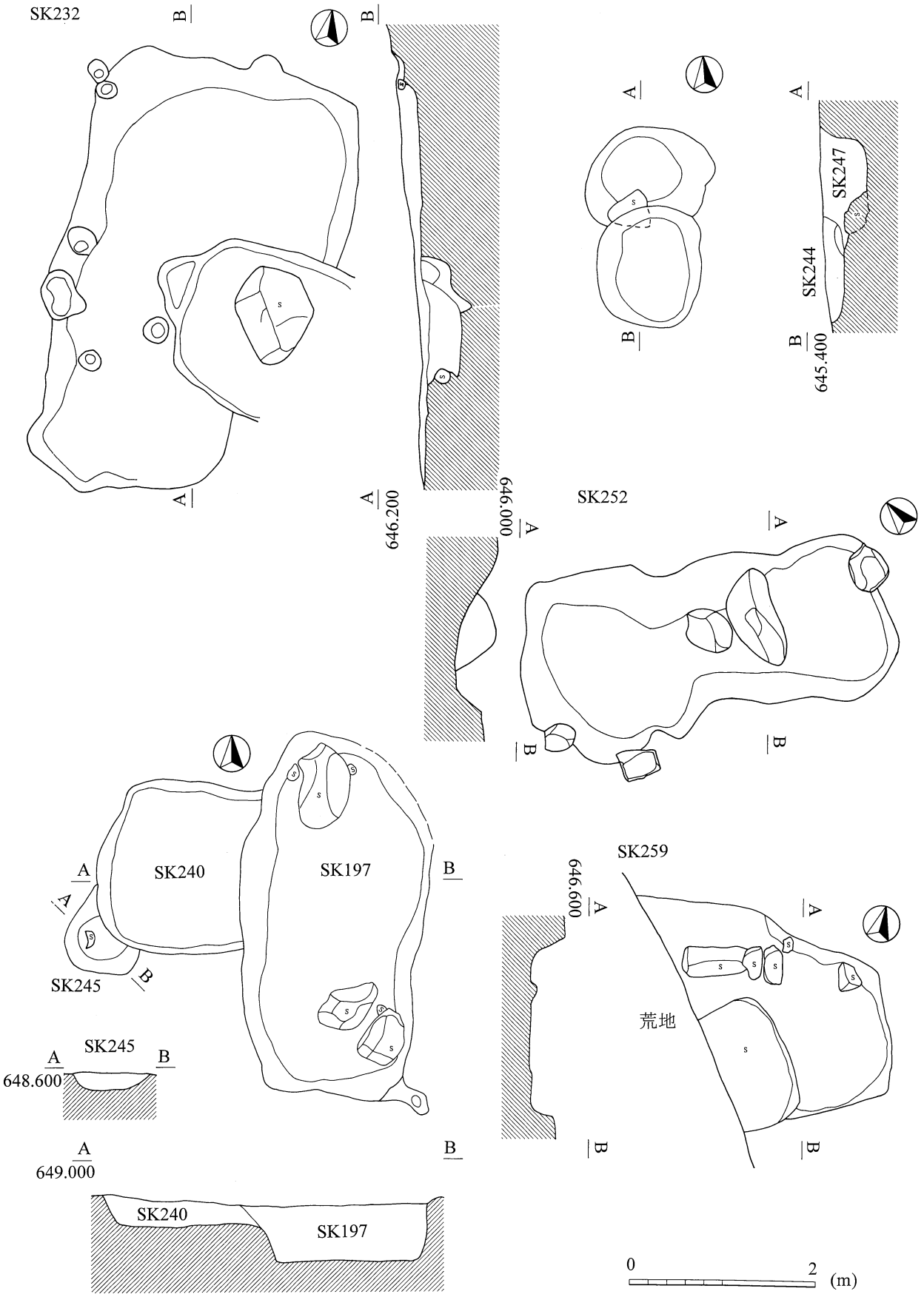
第141図　中世の土坑(1)



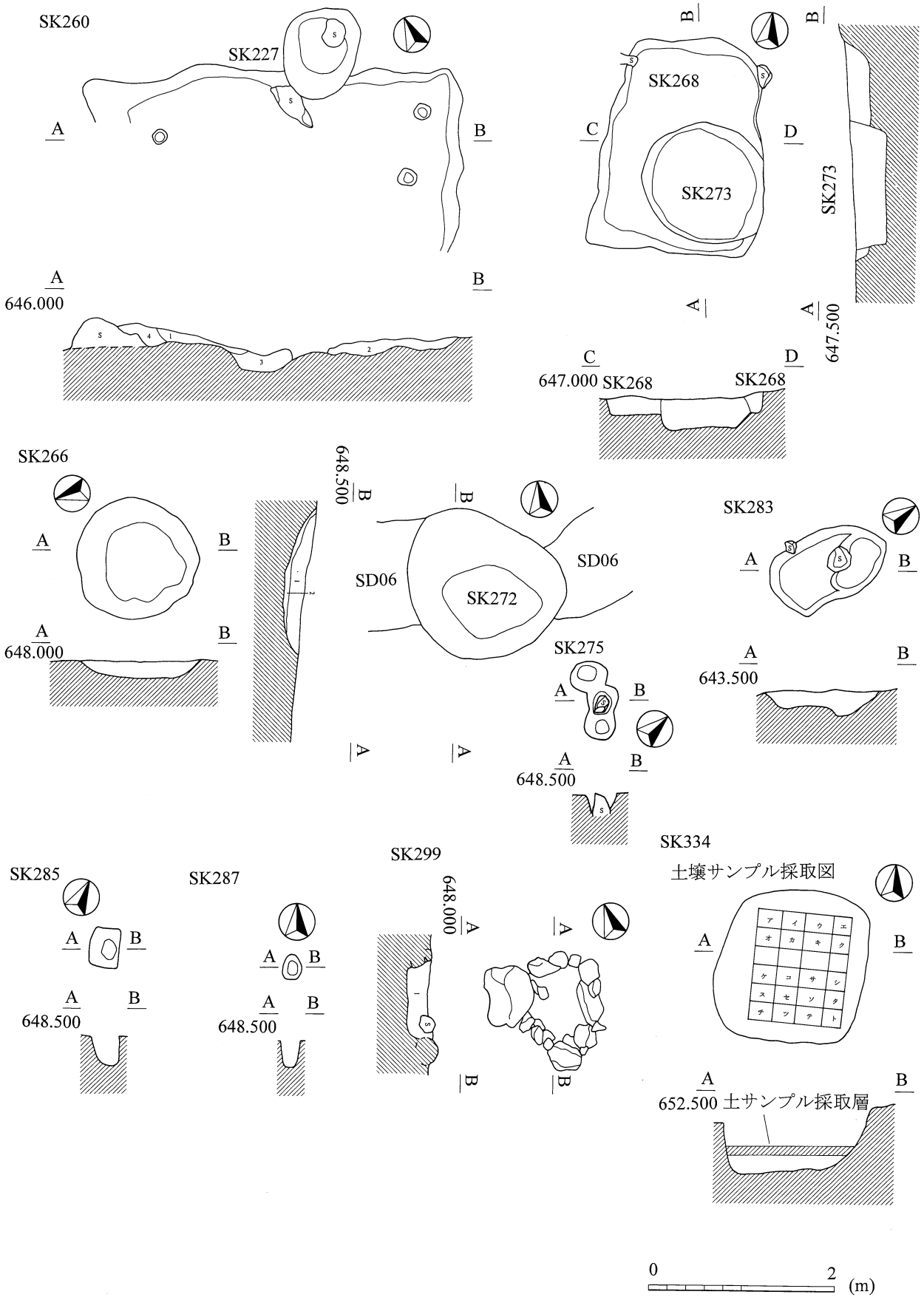
第142図　中世の土坑(2)



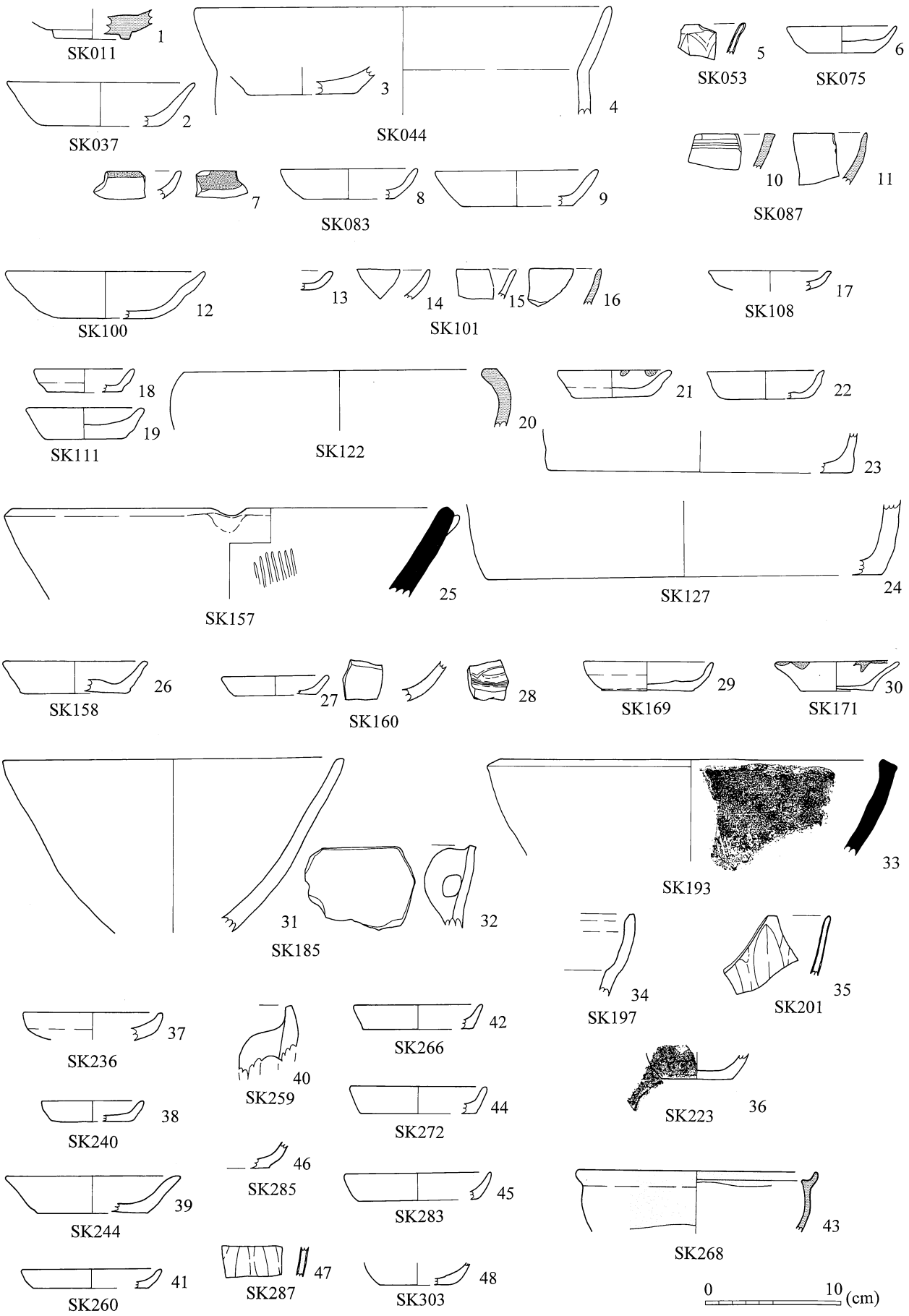
第143図　中世の土坑(3)



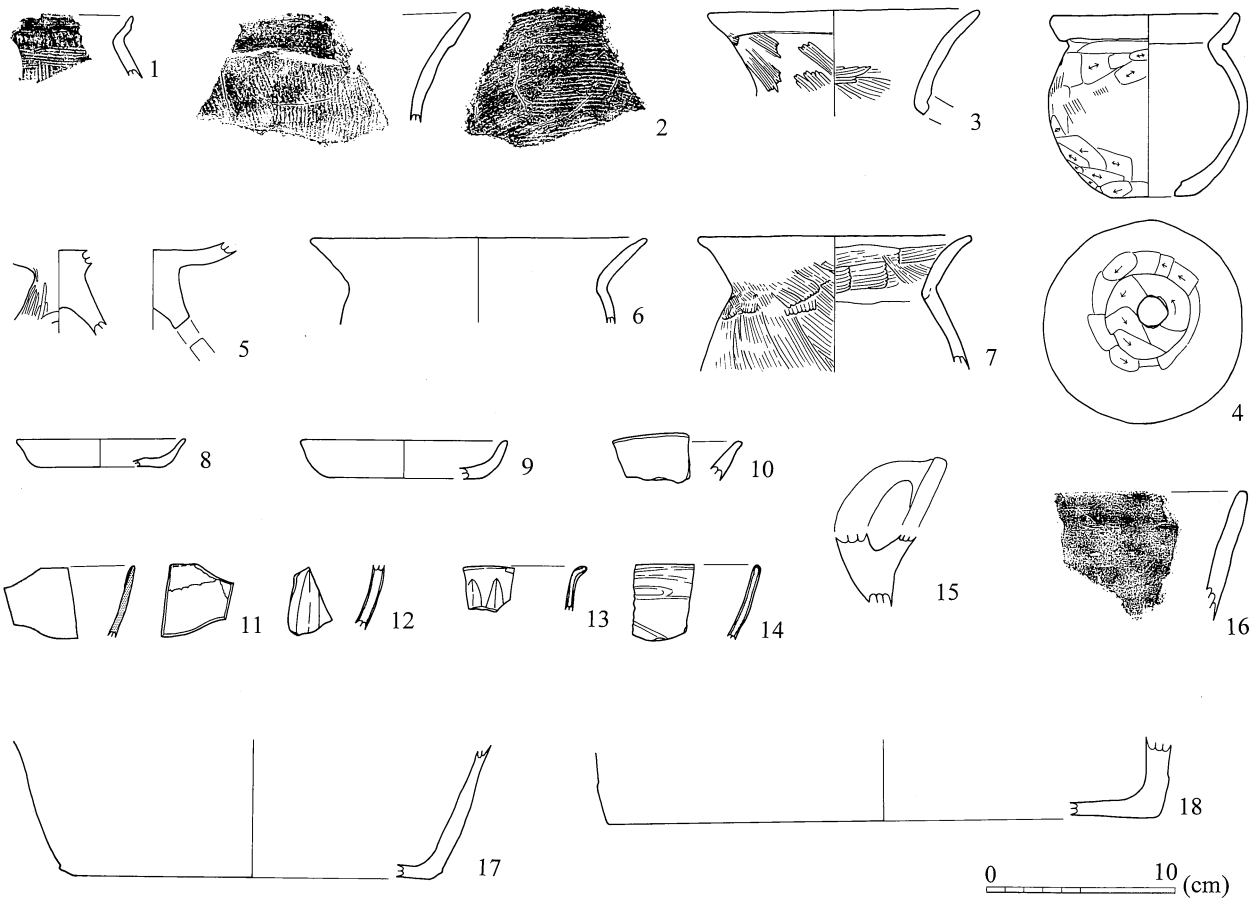
第144図　中世の土坑(4)



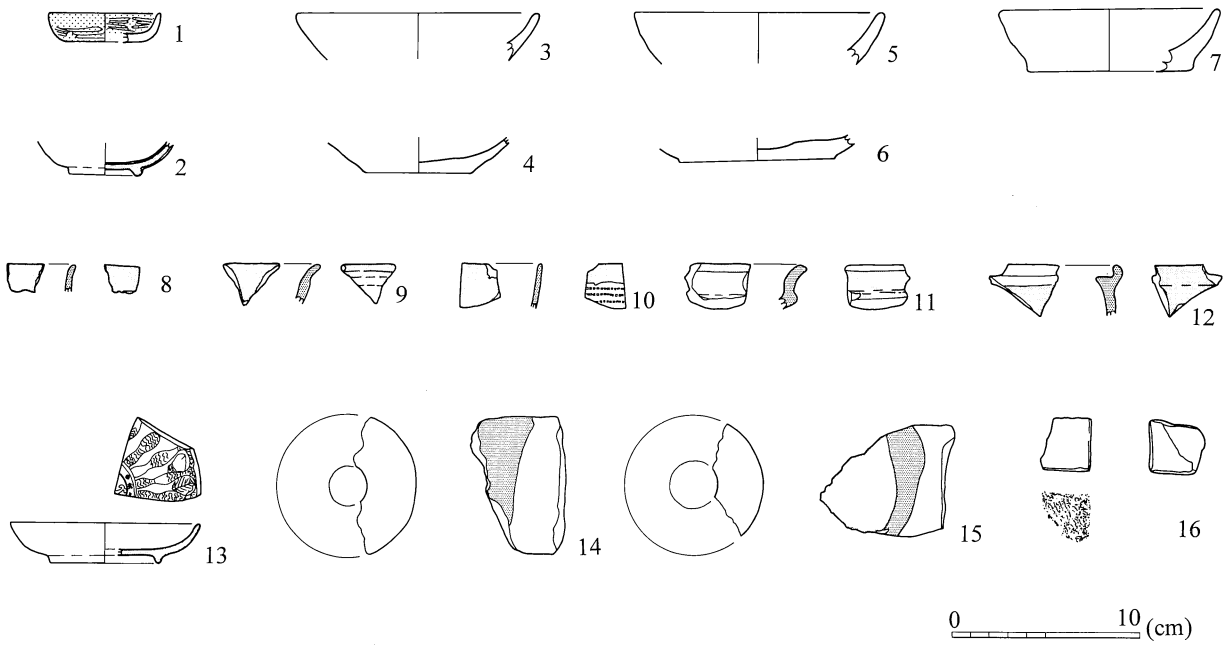
第145図　中世の土坑(5)



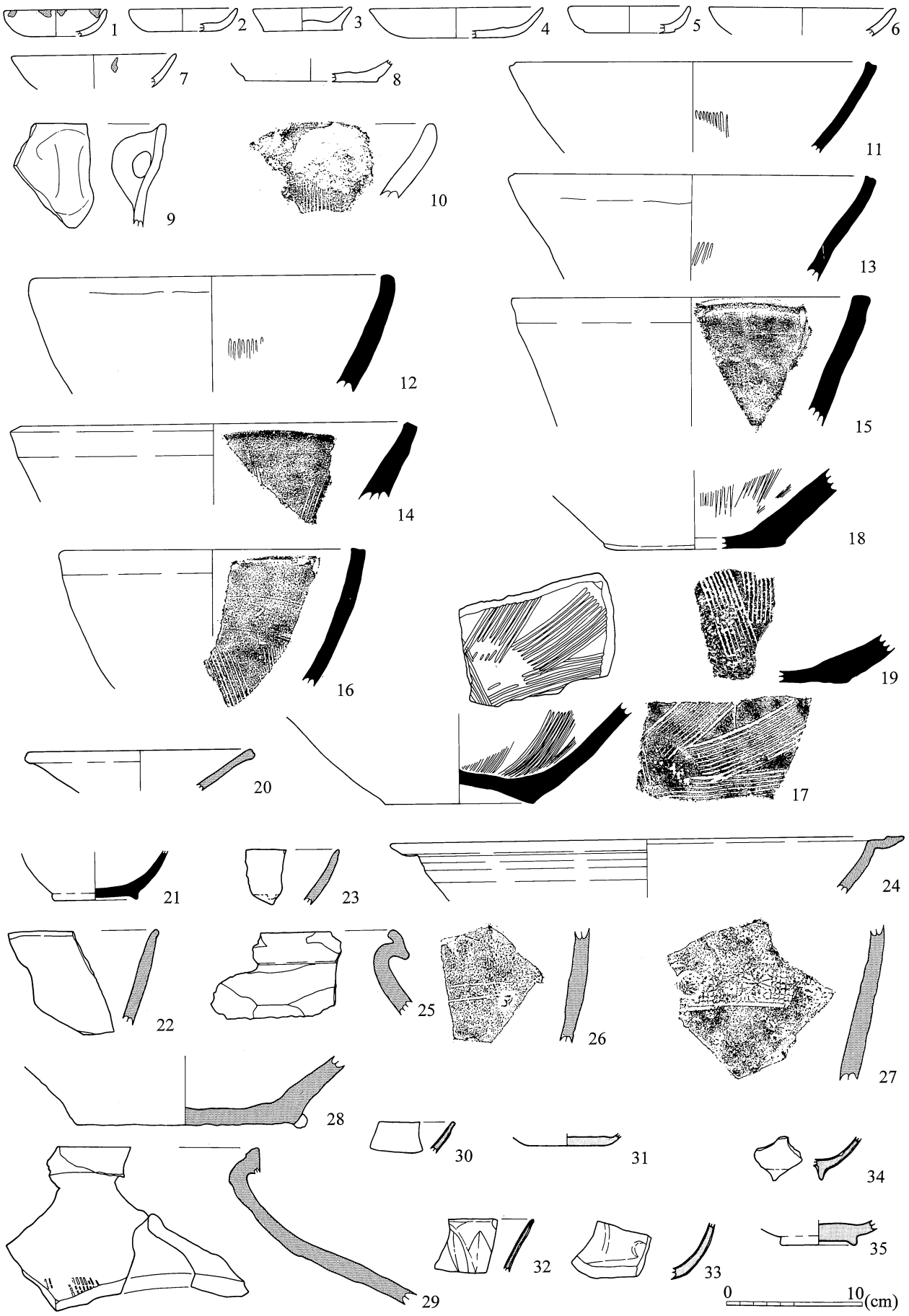
第146図　中近世の土坑出土土器・陶磁器



第147図　溝ＳＤ01・03　出土土器・陶磁器



第148図　溝ＳＤ05・06　出土土器・陶磁器



第149図　溝ＳＤ04　出土土器・陶磁器

5　遺構に伴わない土器・陶磁器

(1)　縄文土器（第150図）

１・２縄文原体の側面圧痕が施される。前期初頭花積下層式。３編目状撚糸文と回転縄文ＲＬが併用。４断面三角形の隆帯が貼付される。５網目状撚糸文。６～17胎土に繊維を含む縄文ＲＬないしＬＲの横位回転施文、羽状構成。18撚糸文？19・20半截竹管状工具による沈線文、21半截竹管状工具による押引文。１～20縄文時代前期初頭から中葉。21後葉か。

22中空の口縁部の突起、23・24縄文横位回転施文、ヘラ状工具沈線文、27・28半截竹管状工具による押引文、29微隆帯貼付の後、横位ミガキ調整。22～29中期後葉。

30・31磨消縄文。30～36後期前葉か。37玉抱三叉文の精製の鉢。晩期初頭。38・39底部、いずれも後期？。40匙形土製品。

(2)　古墳時代の土師器（第151図）

１器台、２壺、３・４手捏土器、５二重口縁の壺、８・12有段口縁の壺、９～11台付甕、16小型の甕。いずれも竪穴住居跡ＳＢ01・04・05・07とほぼ同時期の前期後半の資料。

(3)　古代の土師器・須恵器（第152図）

１・２・６須恵器坏。３土師器坏。４黒色土器坏、７椀、10坏、墨書「朝」の旁か、11皿。５須恵器壺？底部。８・９灰釉陶器。12・13須恵器蓋。14～16・18・19土師器甕。17・21須恵器壺。

(4)　中近世

1.土師器（第153図）

１非ロクロ成形の皿。２～16ロクロ成形の皿。５・７・10・15内外面に灯心の痕跡と思われるススが付着する。19瓦質香炉印花文（菊花文）が連続刺突される。20～22甕。23～26内耳鍋。27擂鉢。28鞴羽口。中世以前に遡る可能性もある。

2.須恵質・陶磁器（第154図）

１須恵質擂鉢、内面にススが付着し転用されたもの。２～４古瀬戸卸皿、14～15世紀。５・６古瀬戸印花文瓶子、７古瀬戸印花文梅瓶、いずれも14世紀代。８～10・13天目茶碗で、８・10古瀬戸、15世紀。９瀬戸美濃、16世紀。11肥前系輪ハゲ皿。12瀬戸美濃大窯小皿。16常滑甕。17中津川甕。以上陶器。

18・19・28白磁。20～32・39～41・43～46青磁碗、うち22～26・29～32・39～41龍泉窯系蓮弁文碗、13世紀。27同安窯系碗、12世紀。43細線蓮弁文碗の底部。44雷文の底部か。33明染付（青花）皿、16世紀前半。35青白磁合子蓋。34染付小皿。36～38・42青白磁梅瓶。47白磁碗底部。以上磁器。国産陶器に対応する年代の貿易磁器は少ない。

6　石器（第155～161図）

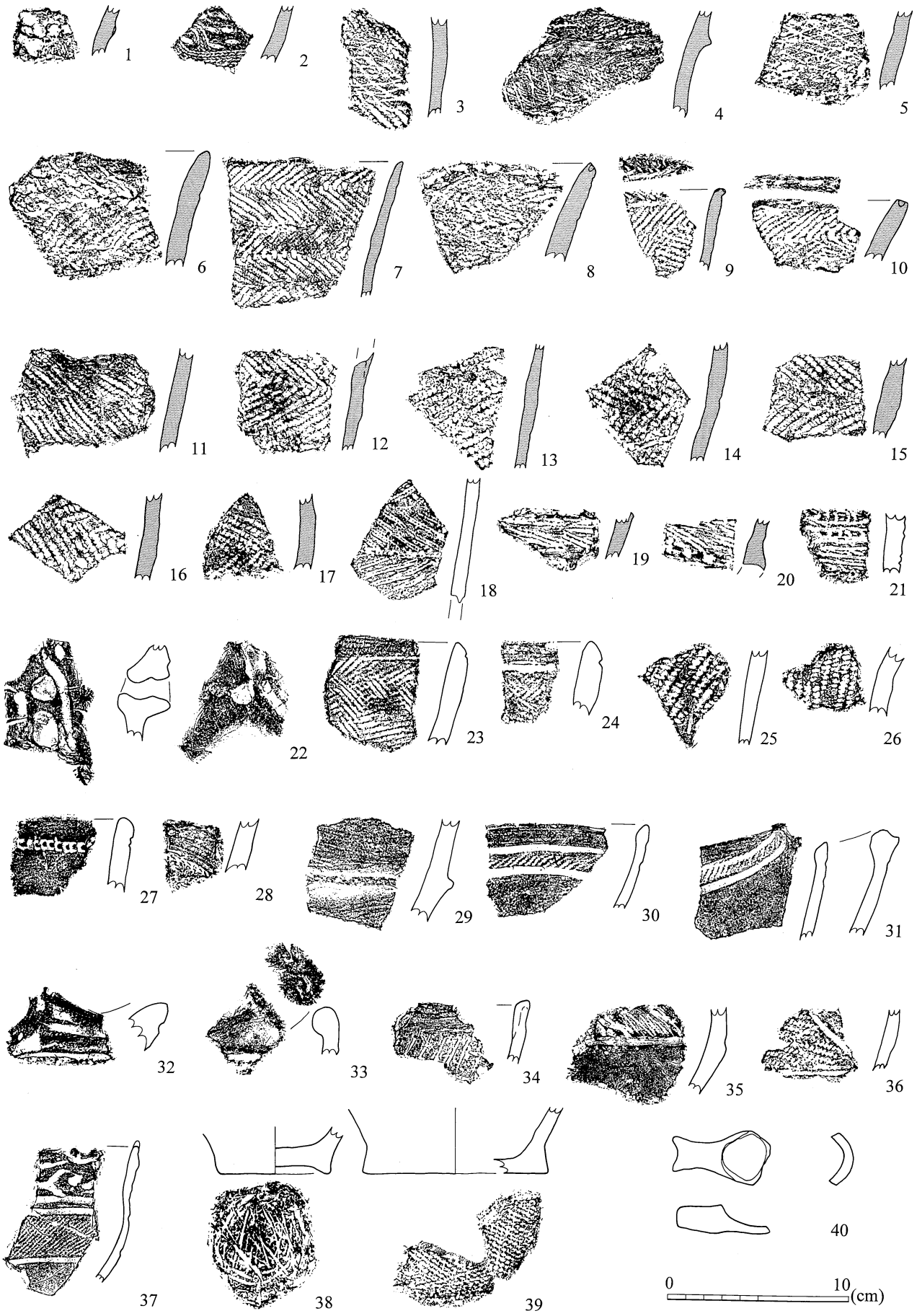
１～24石鏃。８～11有茎式。25～27石錐。28・29・31石匙。30スクレイパー片か。小形の剝片石器は黒曜石が卓越する。黒曜石以外の石材は先第３系の石材が多い。１珪質粘板岩、８チャート、15千枚岩質粘板岩、28珪質頁岩、29チャート、31珪質粘板岩。32～37スクレイパー。以上縄文時代に属する。

38～40・44打製石斧。いずれも千枚岩質粘板岩など先第３系の石材。41～43磨製石斧片。41透閃石。45凹石。46～54磨石。安山岩製。以上縄文時代に属する。

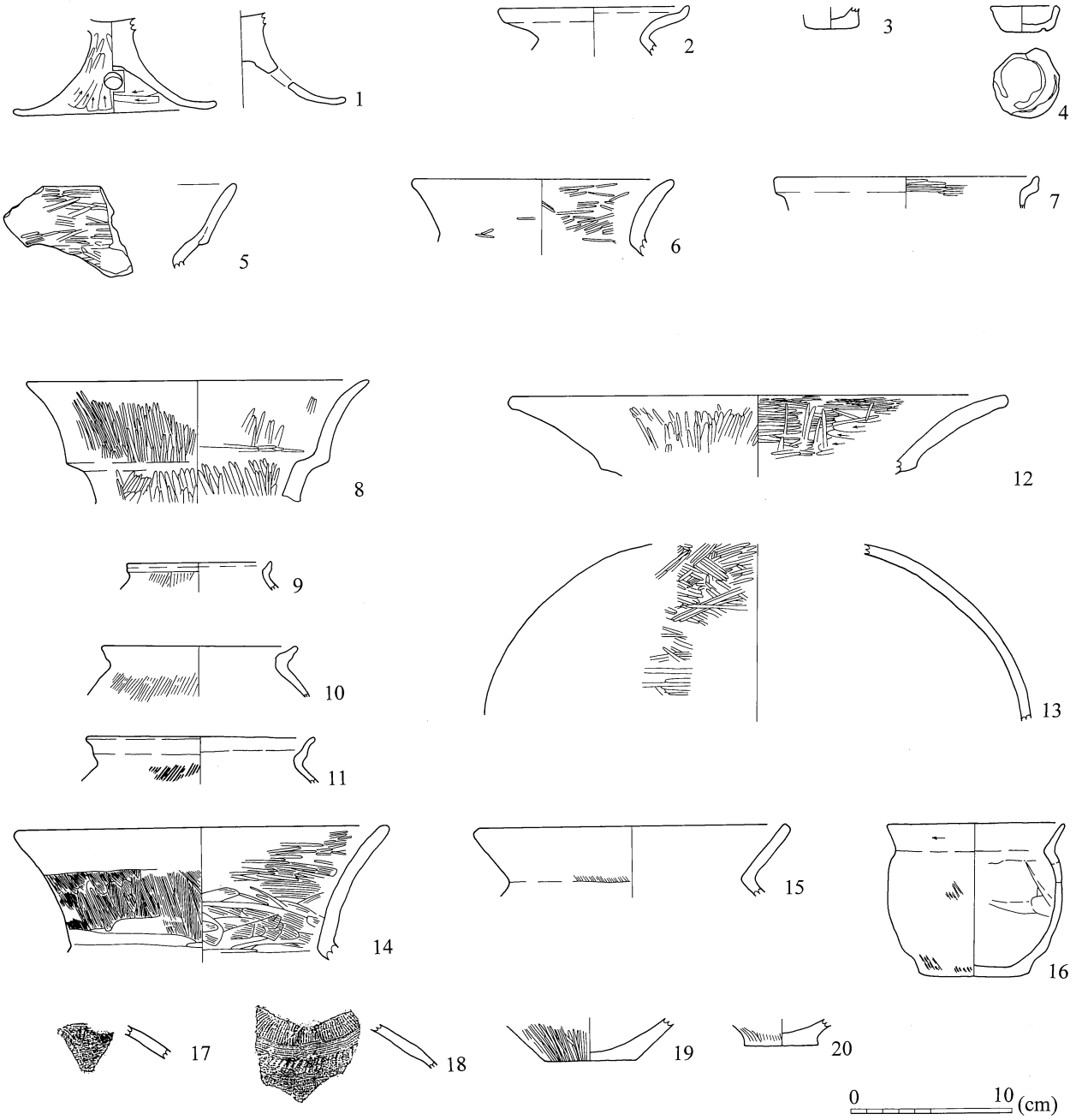
55～62・66・67砥石、いわゆるもち砥。60安山岩？製だが、それ以外は堅緻な凝灰岩製。古代から中世に属するものと思われる。

63千枚岩製石剣？縄文時代か。64石製円盤。65軽石製品。

68砂岩製、69硬砂岩製の砥石（置き砥）。70～80やや斑晶質の輝石安山岩製台石。縄文時代の台石とそれ

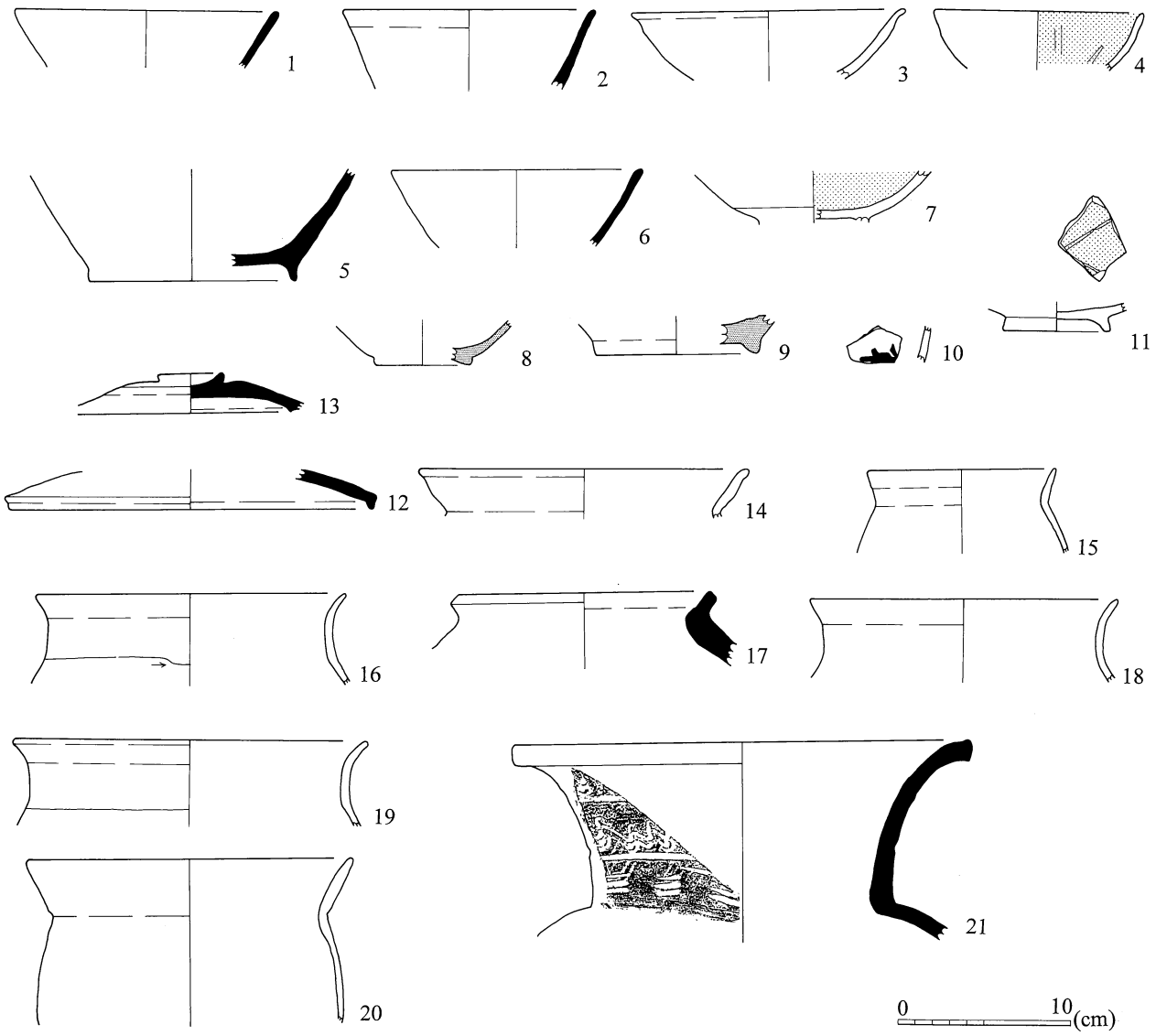

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
10
(cm)

第150図　縄文土器



第151図　古墳時代の土師器

以降の時代のものと区別はできなかったが、古墳時代、中世の遺構から多く出土するので、この時期の産物が大半であろう。81・82多孔質黒色安山岩製五輪塔（空風輪）。83～88やや多孔質安山岩製石鉢。84片口を作る。87面取りをする。90・91石臼。石鉢、石臼は大半が中世のものか。



第152図　古代の土師器・須恵器・陶器

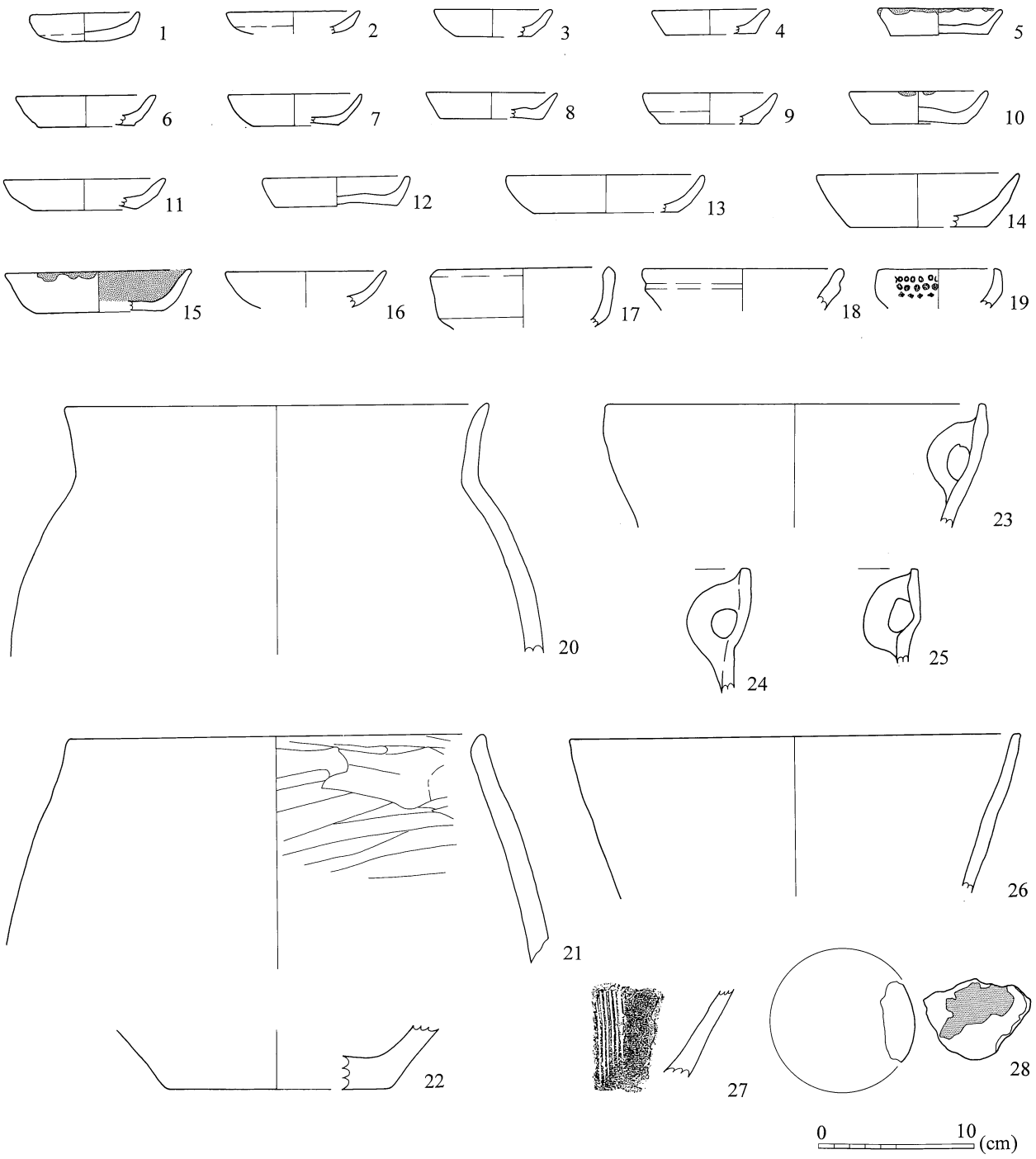
7　金属製品（第162図）・銭貨（第163・164図）

金属製品

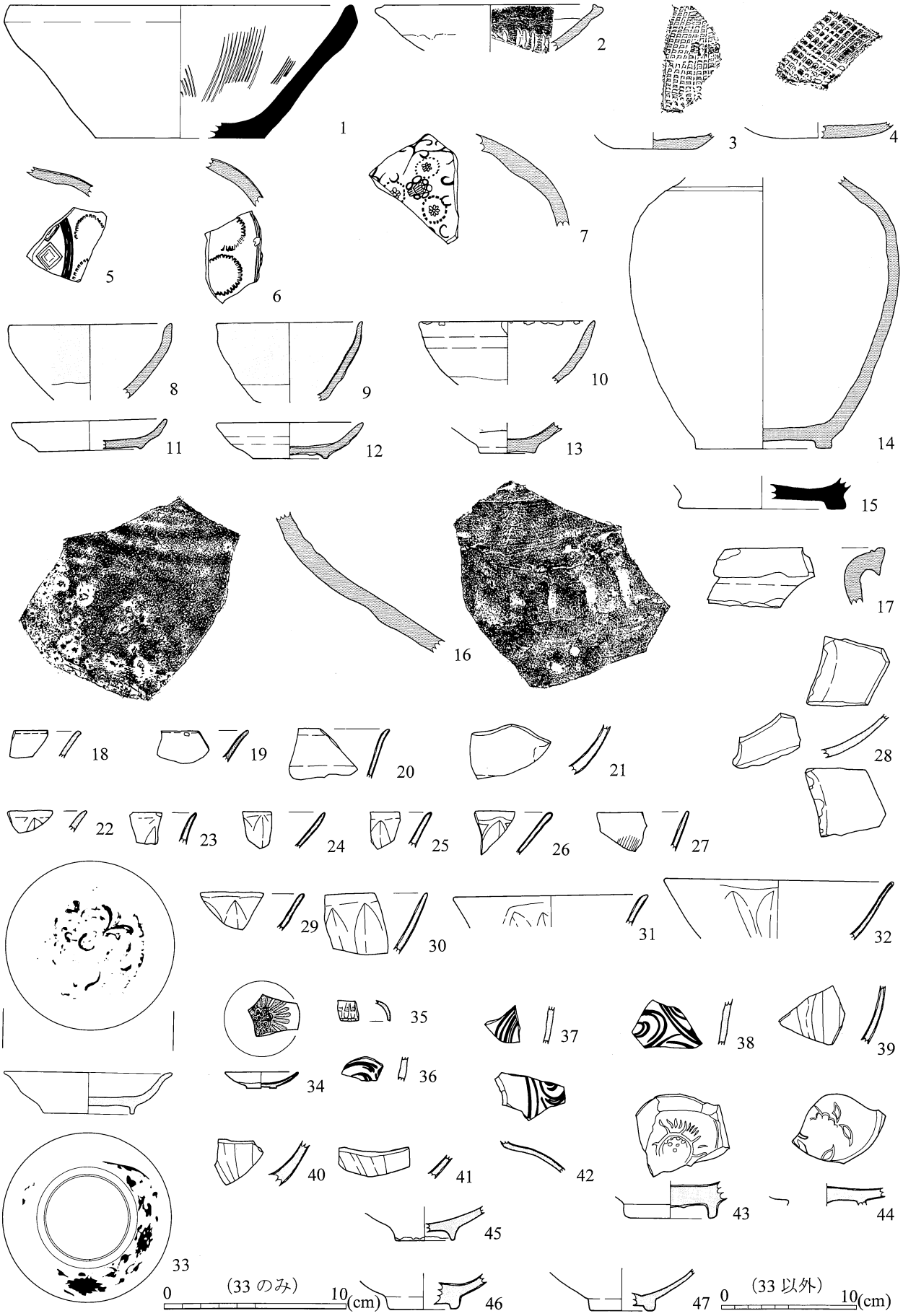
19以外はすべて鉄製品。１～13鍛造釘。１はＳＢ18、11はＳＫ123、ともに古代。それ以外は中世の遺構ないし遺構外から出土しているが、形態上の分別はできない。14楔。17紡錘車、中世ＳＫ107出土。19キセル受け口、近世か。銅製品。21鎌、23鋤鍬先ともに古代ＳＢ26出土。22バックル・咬具（馬具か）古代ないし中世ＳＫ262出土。24・25鉄製蓋。24中世ＳＫ232、25古代ＳＫ233出土。

銭貨

１～28中世土坑、29中世ＳＴ04の柱穴、30～42ＳＤ04、43～45ＳＤ05から出土。開元通宝は唐銭だが残りは北宋銭。46～74遺構外出土。46～68北宋銭。69淳熙元宝と70正隆元宝は南宋銭。71永楽通宝は明銭。72寛永通宝は江戸時代。

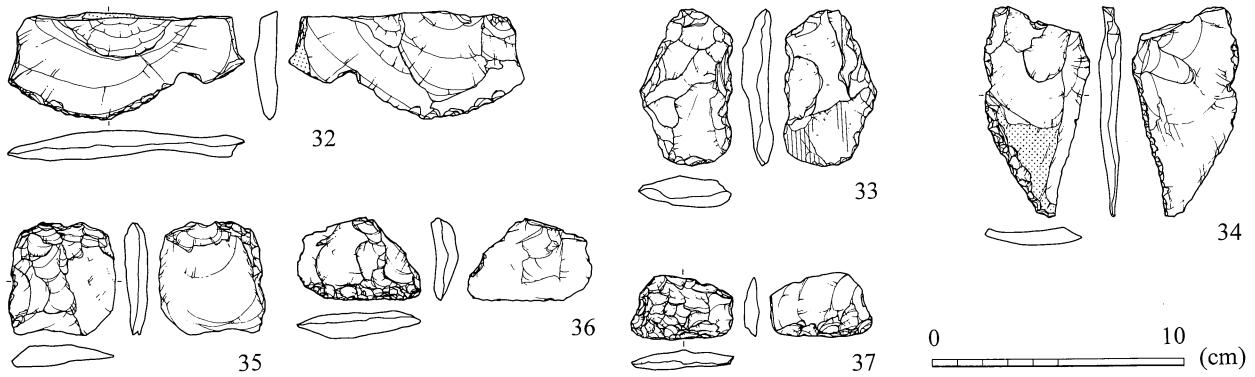


第153図　中世以降の土師器・土製品

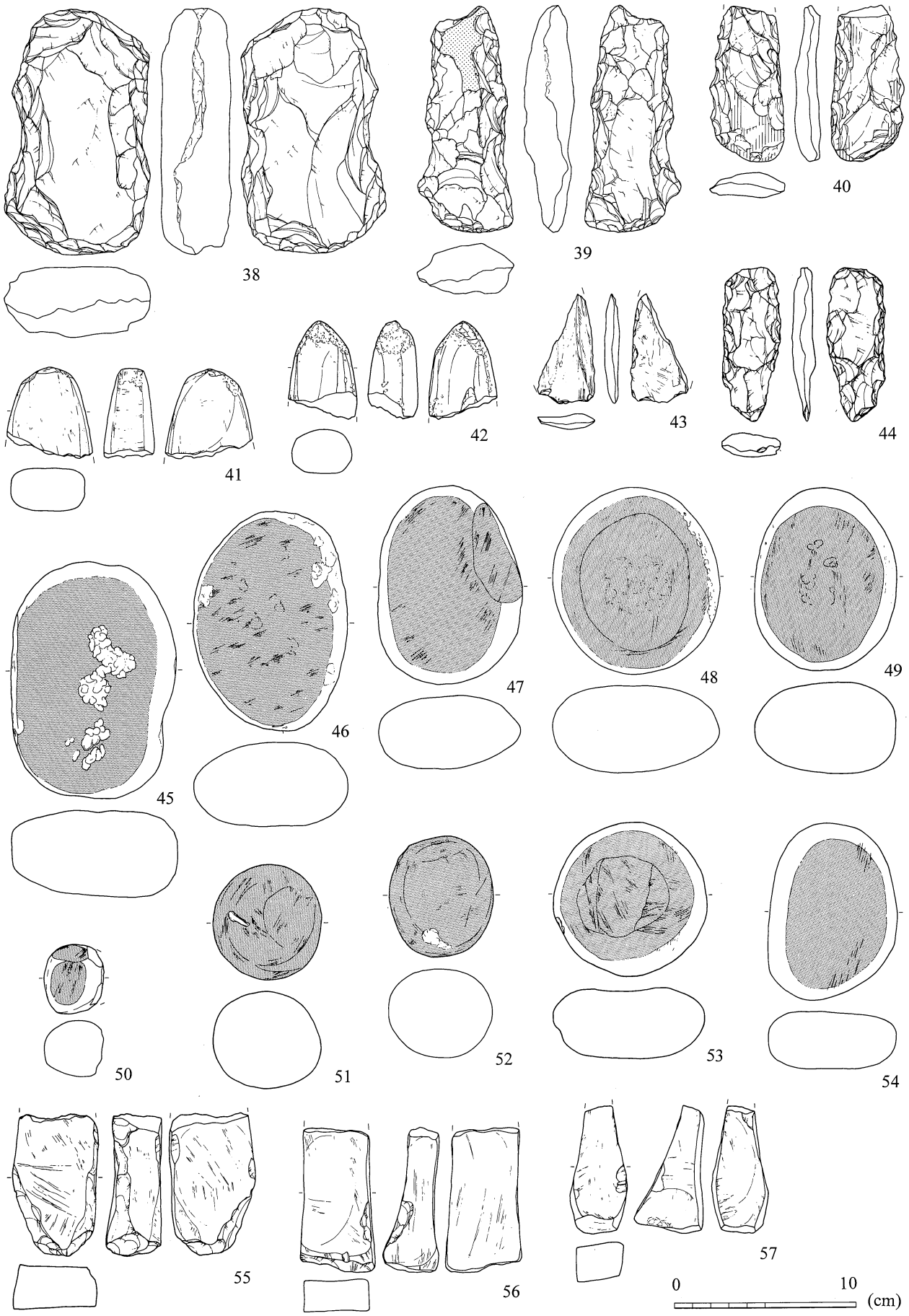


第154図　中世以降の陶磁器

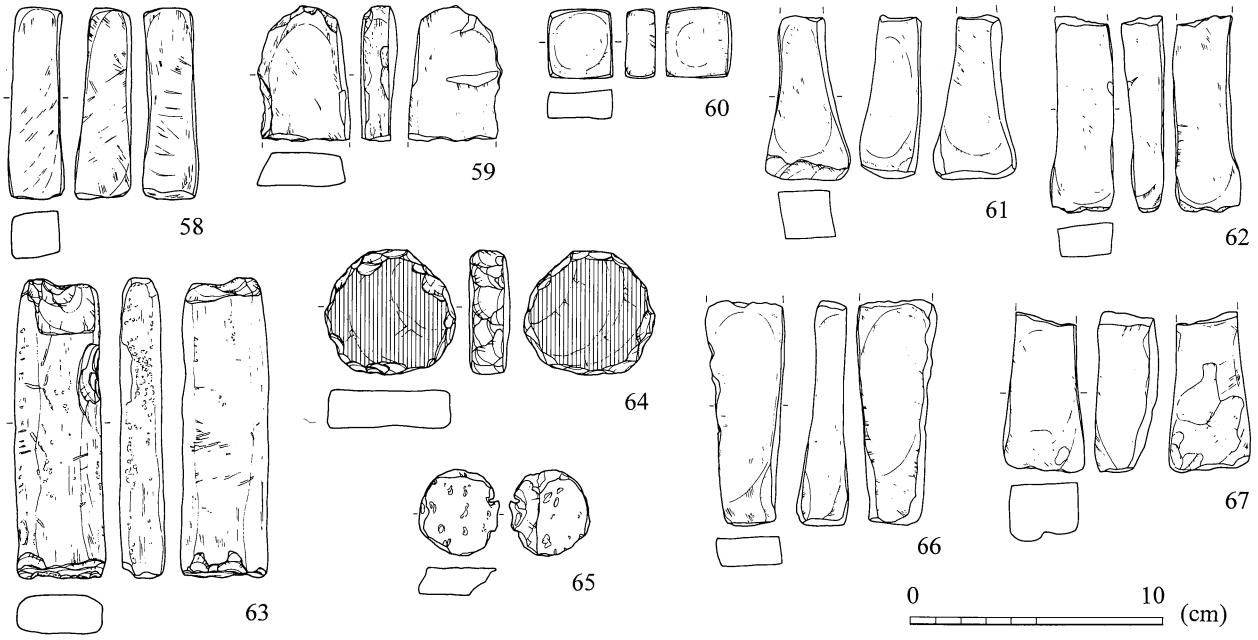
第155図　石器(1)（石鏃・石錐・石匙）



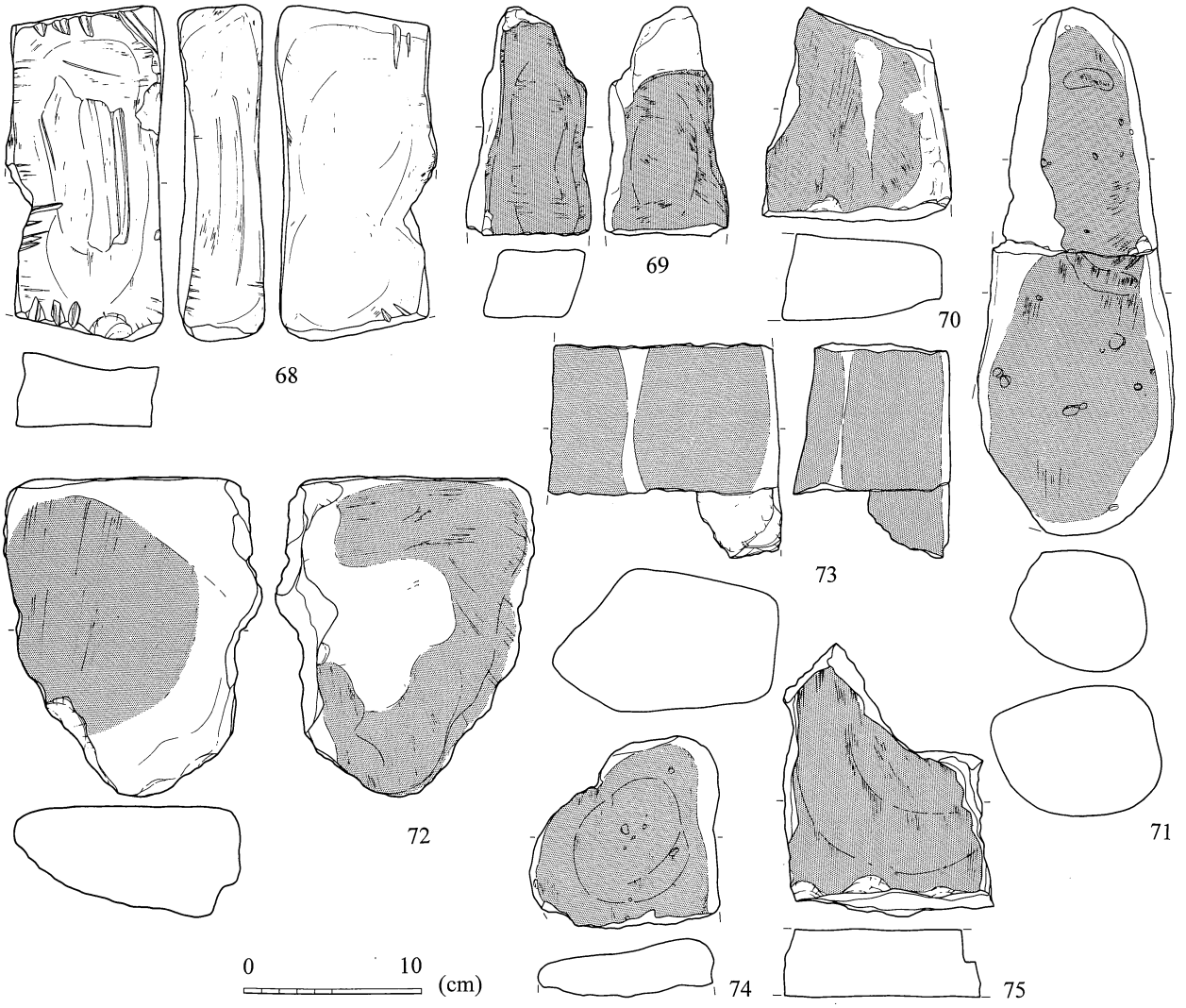
第156図　石器(2)（スクレイパー）



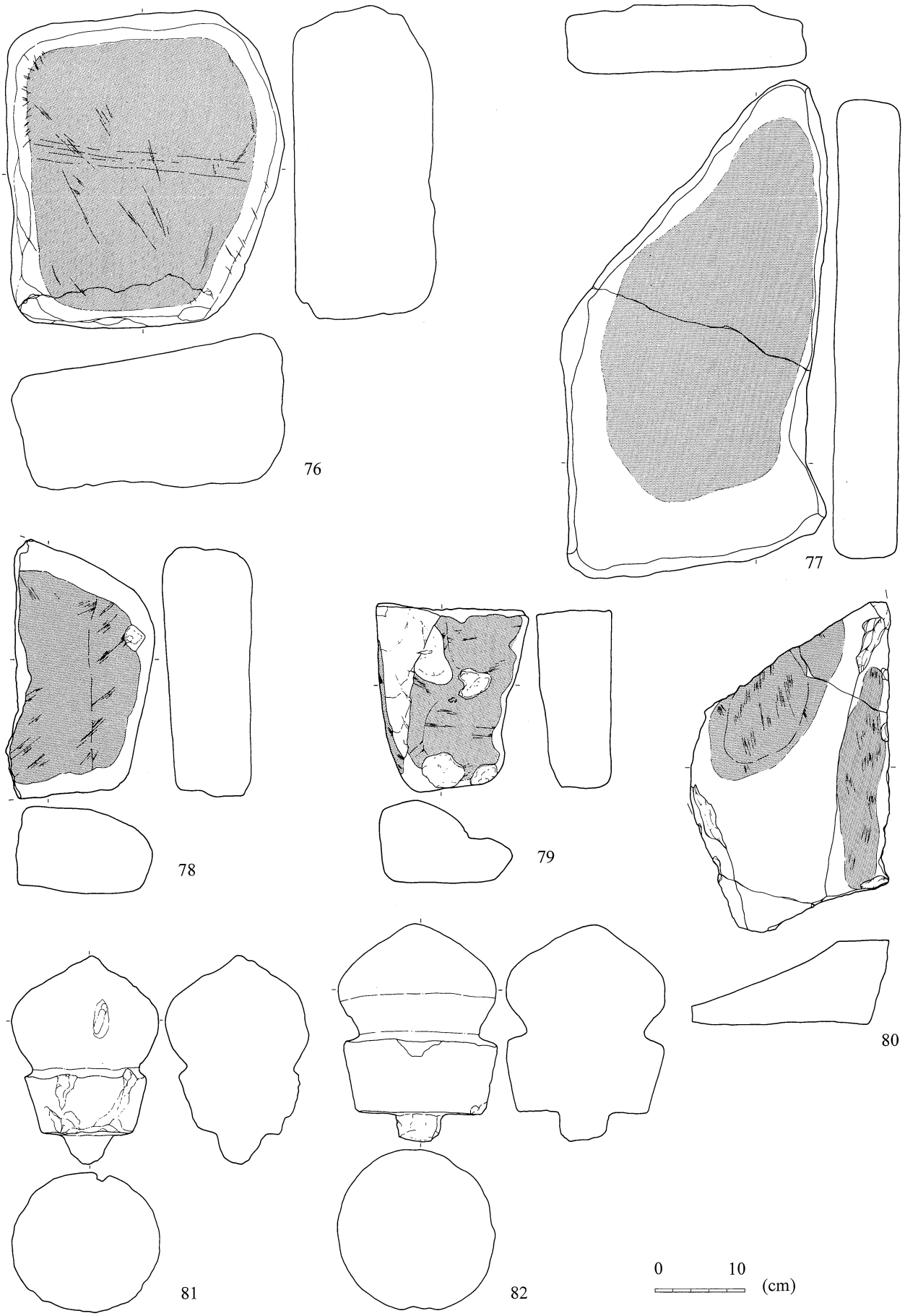
第157図　石器(3)（打製石斧・磨製石斧・磨石・砥石）



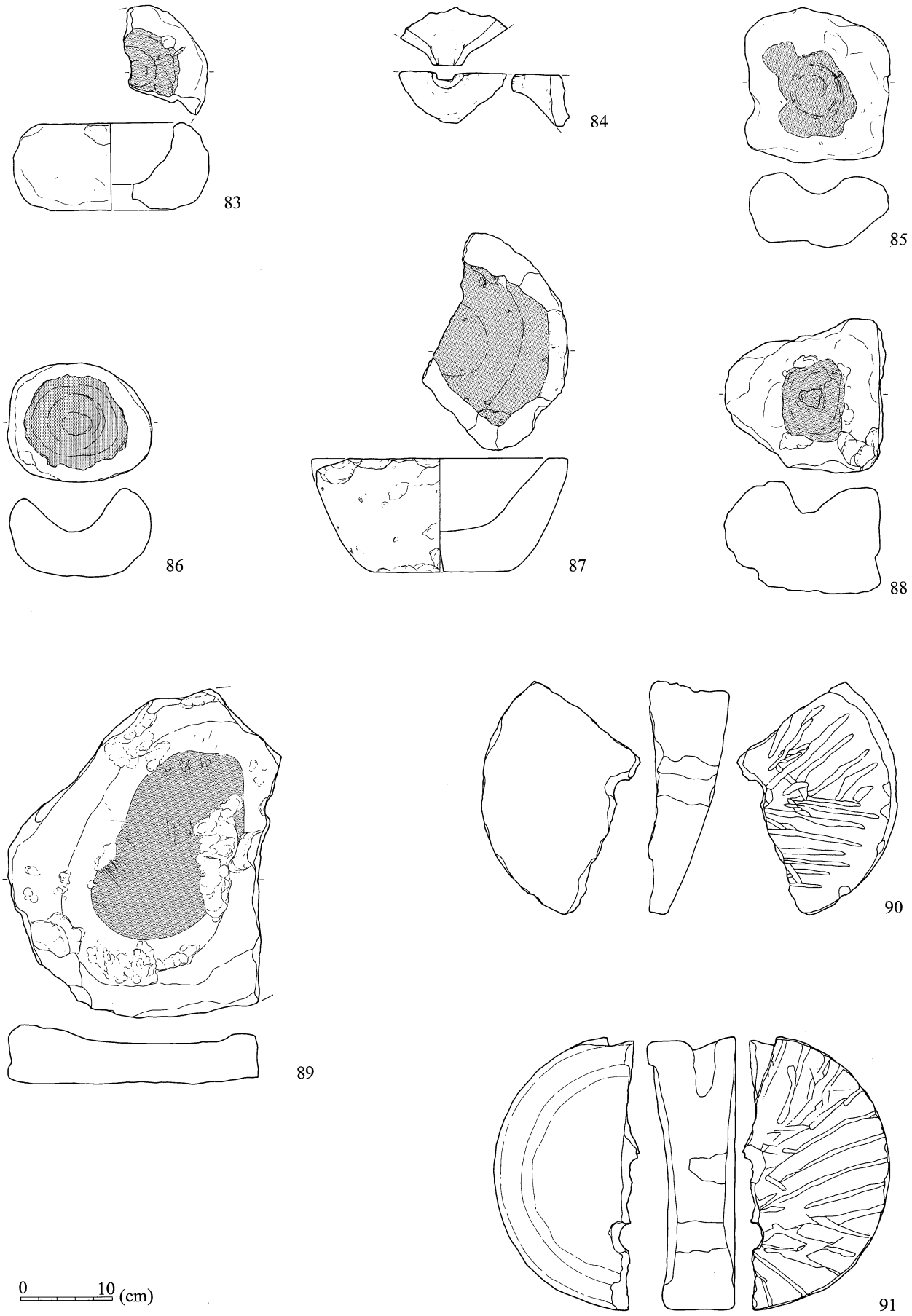
第158図　石器(4)（砥石・石剣・円盤など）



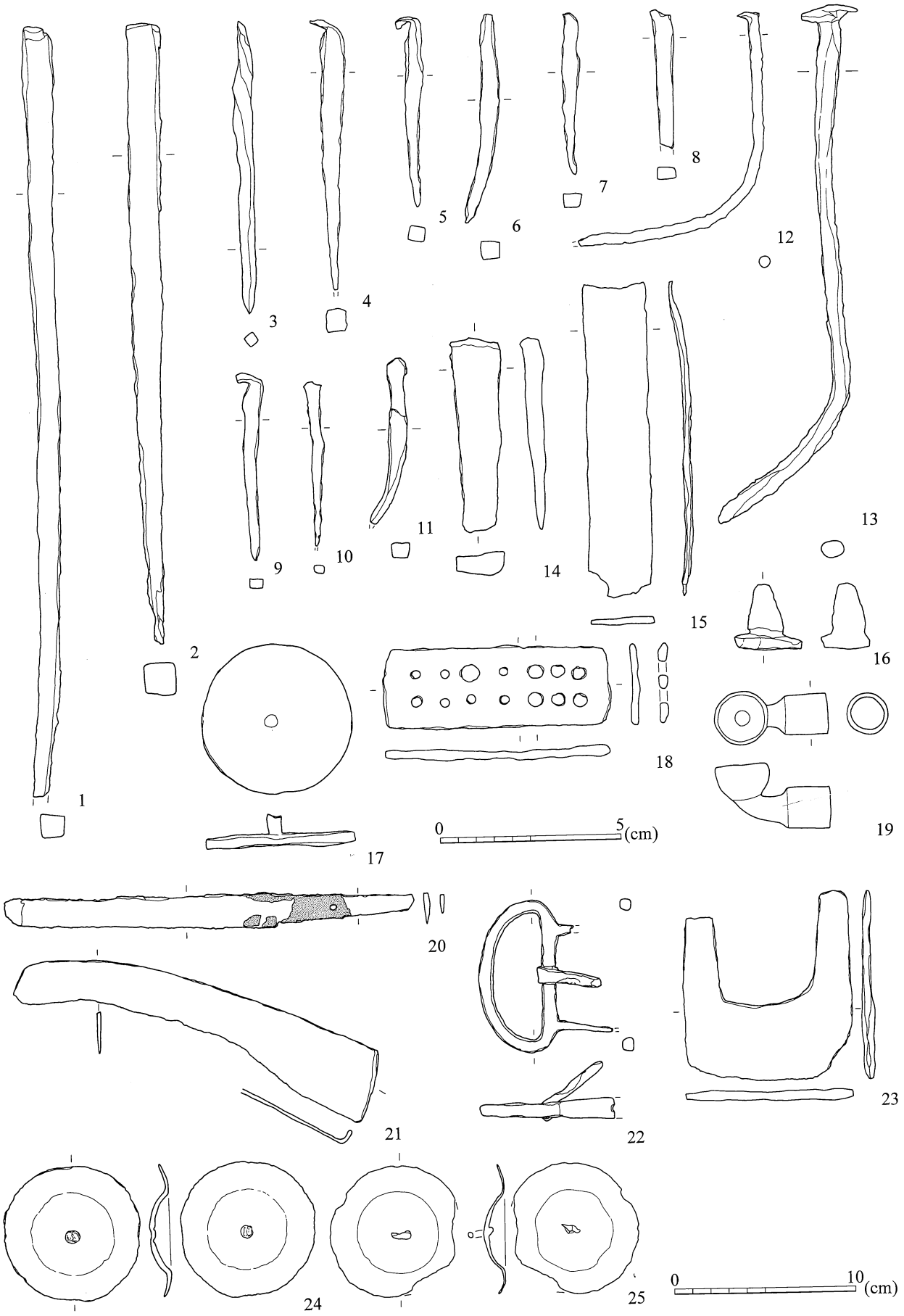
第159図　石器(5)（砥石・磨石・台石）



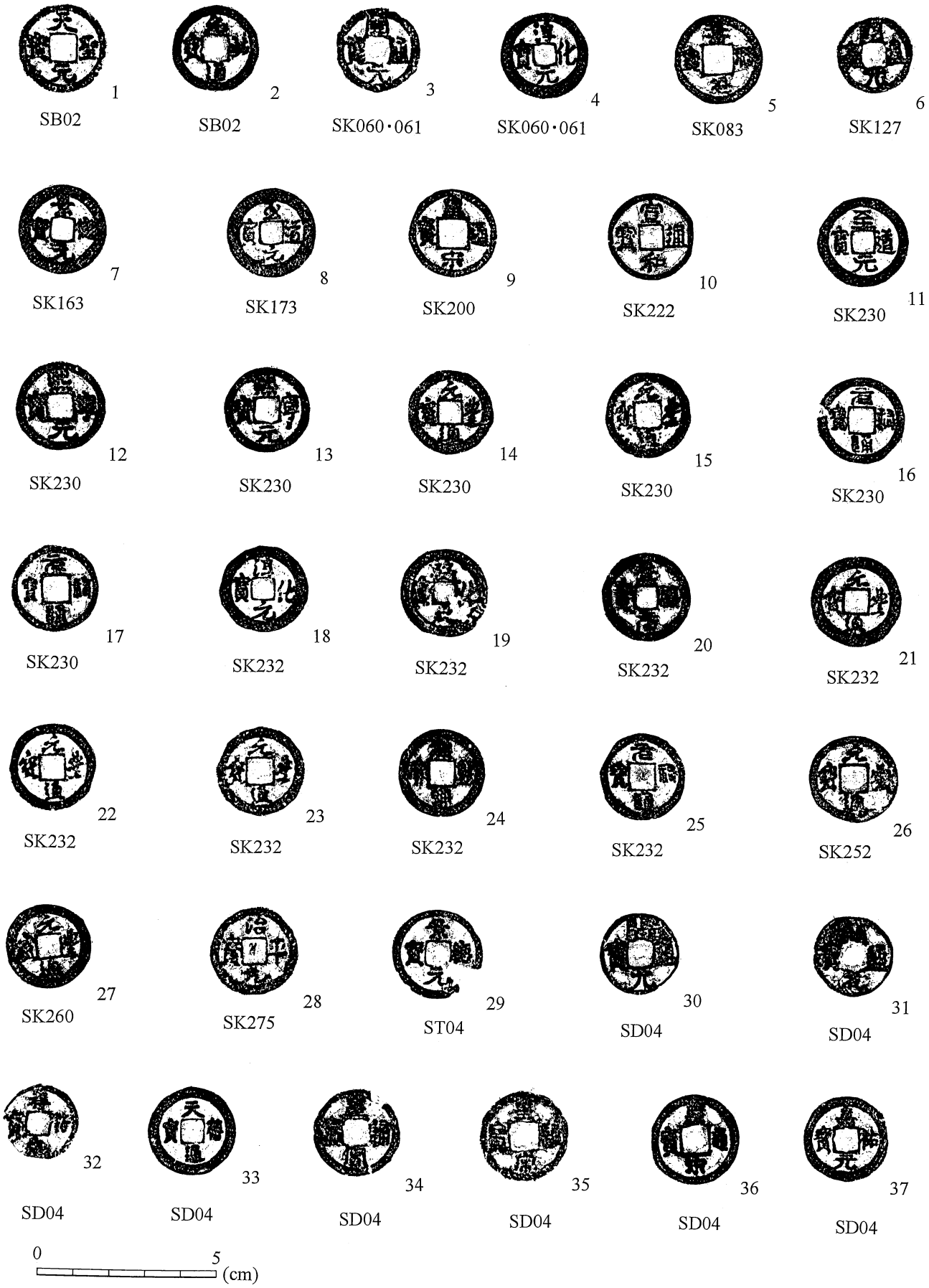
第160図　石器(6)（台石・五輪塔）



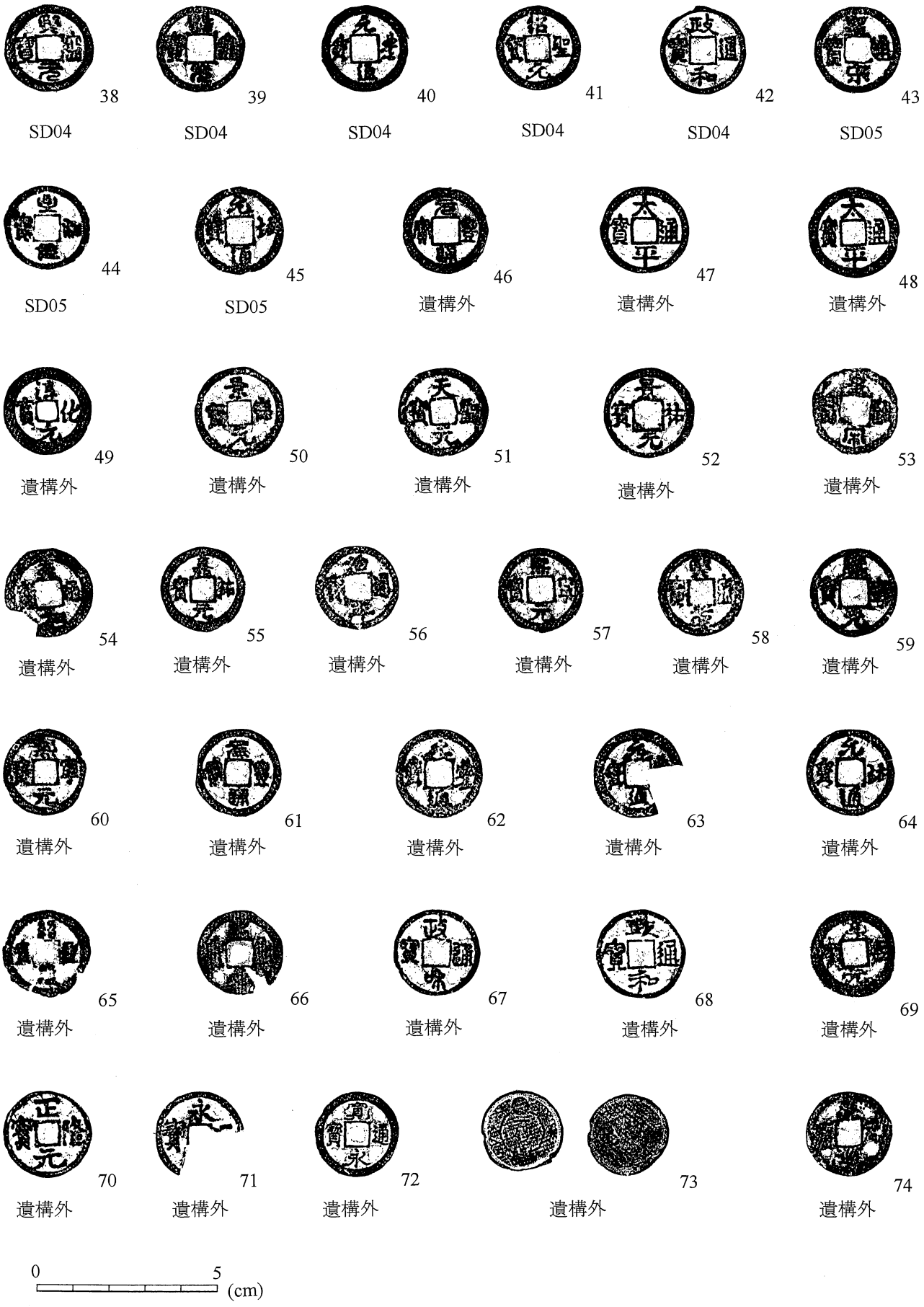
第161図　石器(7)（石鉢・石皿・石臼）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
0
5
(cm)
0
10
(cm)

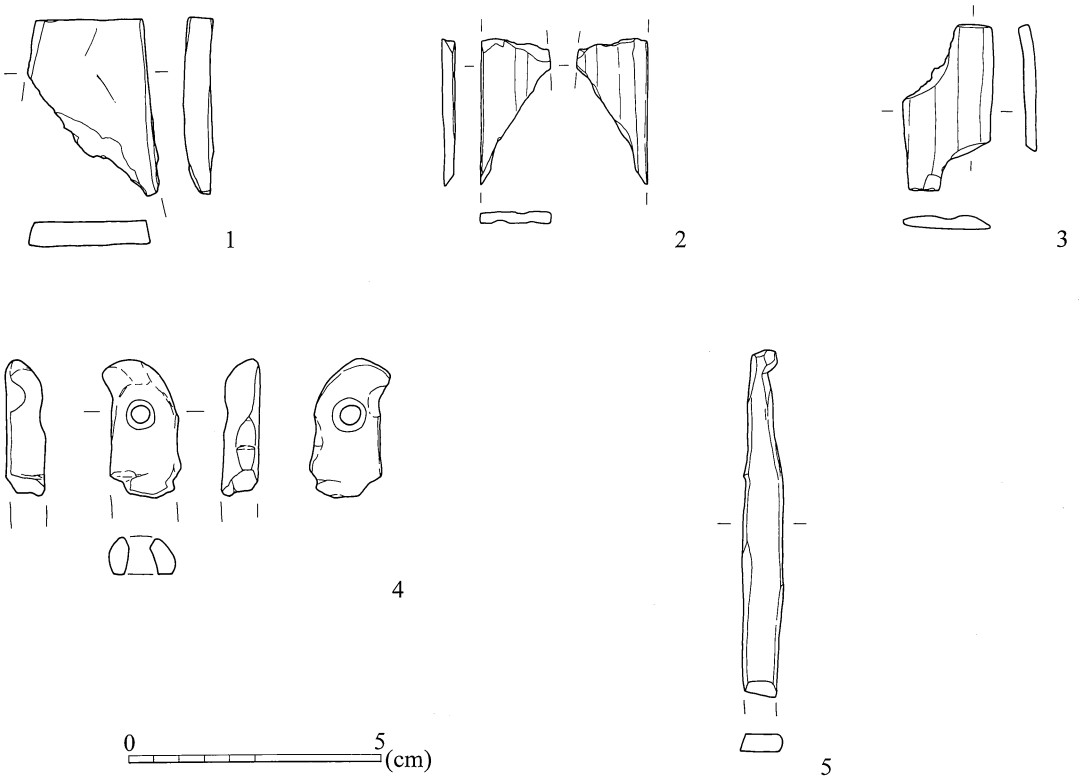
第162図　金属製品


1 SB02
2 SB02
3 SK060・061
4 SK060・061
5 SK083
6 SK127
7 SK163
8 SK173
9 SK200
10 SK222
11 SK230
12 SK230
13 SK230
14 SK230
15 SK230
16 SK230
17 SK230
18 SK232
19 SK232
20 SK232
21 SK232
22 SK232
23 SK232
24 SK232
25 SK232
26 SK252
27 SK260
28 SK275
29 ST04
30 SD04
31 SD04
32 SD04
33 SD04
34 SD04
35 SD04
36 SD04
37 SD04
0
5
(cm)

第163図　銭貨(1)


38
SD04
39
SD04
40
SD04
41
SD04
42
SD04
43
SD05
44
SD05
45
SD05
46
遺構外
47
遺構外
48
遺構外
49
遺構外
50
遺構外
51
遺構外
52
遺構外
53
遺構外
54
遺構外
55
遺構外
56
遺構外
57
遺構外
58
遺構外
59
遺構外
60
遺構外
61
遺構外
62
遺構外
63
遺構外
64
遺構外
65
遺構外
66
遺構外
67
遺構外
68
遺構外
69
遺構外
70
遺構外
71
遺構外
72
遺構外
73
遺構外
74
遺構外
0
5
(cm)

第164図　銭貨(2)



第165図　骨角製品

８　骨製品（第165図）

１～３骨を加工したもの。いずれも側片を面取りしている。用途など不明。１中世ＳＫ166、２中世ＳＫ165付近、３古代ＳＫ218出土。

第４節　縄文時代土坑ＳＫ250の遺体埋納の可能性

パリノ・サーヴェイ社

１　はじめに

③区西側では縄文時代前期末の土坑ＳＫ250は、規模および完形の土器が出土したことから墓坑の可能性が考えられた。

そこで、遺体埋納の可能性を検討するために、リン・カルシウム分析を行うこととした。なお、これまでの土坑調査では、リン酸およびカルシウム含量の局部的濃集の有無だけでは十分な検証に至らないこともあった。しかし、これらの成分に加え炭素含量を考慮することで検討が可能になる場合がある。たとえば、東京都北区の豊島馬場遺跡では古墳時代初頭の方形周溝墓を対象として、この方法で遺体の埋納位置が推定されている（辻本・小林1995）。今回も、炭素含量もあわせて測量し、埋納位置を検証することとした。

２　縄文時代土坑ＳＫ250の遺体埋納の可能性

今回、測定する成分は、リン酸、カルシウム、炭素である。

リン酸は、人体とくに人骨に多量に含まれ、遺構内での特徴的な濃集状態から遺体の痕跡を定性的に推定できる（竹迫ほか1980など）。分解したリン酸は土壌中に含まれるアルミや鉄と結合して難溶性のリン酸化合物を形成するために、濃集状態が比較的確認しやすい。とくに、黒ボク土やローム土のようにリン酸と結合しやすいアルミや鉄が多い土壌では、遺体の痕跡を検証する際に成果が大きい。土坑ＳＫ250の覆土や地山の土壌は、室内での土性や土色の観察、活性アルミニウム反応テストなどの判断から、黒ボク土またはローム土と判別でき、リン酸と結合しやすい土壌と見ることができる。

また、リン酸とともに人骨に多量に含まれるカルシウムについても分析を行い、人骨の痕跡を確認する。なお、分解が進んでいる場合のカルシウムはリン酸よりも土壌中での拡散移動が大きく、特徴的な濃集を確認することは難しいことから、リン酸の補助的項目として結果をとらえることにする。

さらに、黒ボク土では土壌形成の過程で混入した植物遺体からリン酸が供給され、その影響により遺体に由来するリン酸含量が数値として把握しにくくなることが予想される。そのため、土壌中の炭素含量も測定し、リン酸含量との相関関係を見ることとした。

以下に、分析結果と考察を述べる。

(1)　試料

土坑ＳＫ250は楕円プランを呈し、底部は平坦であり、縄文時代前期末の略完形土器が出土しているが、人骨などは認められない。覆土は、層相などから１層～４層に区分されている。

試料は、覆土断面より垂直方向に土坑底部まで、試料番号２（上部）、試料番号３（中部）、試料番号４（下部）の３点が採取された。また、対照試料として、土坑確認面の地山土壌（試料番号１）１点が採取された。

以上、４点の試料について分析を行った。これらの土質については、各成分の測定結果とともに示した（第５表）。

(2)　分析方法

分析は、土壌標準分析・測定法委員会編（1986）、土壌養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペトロジスト懇談会（1984）などを参考にし

た。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。

リン・カルシウム分析では、風乾細土試料2.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）５㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100㎖に定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P_2O_5）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5 mg/ｇ）とカルシウム含量（CaOmg/ｇ）を求める。

炭素含量測定は、風乾細土試料の一部を微粉砕し、0.5㎜篩を全通させた微粉砕試料を用いる。微粉砕試料1000mg前後を精秤し、助燃剤（酸化コバルト）5.0ｇと混合する。混合試料をサンプルボードに乗せ、ＣＮコーダー（柳本製作所製・MT-600）に挿入する。挿入された混合試料をキャリアガス（He）気流中で950℃に加熱燃焼する。発生した燃焼ガスを純化させ、CO_2およびN_2の組成にする。次いで希釈、分取の工程を経て、TCD検出器により炭素および窒素の濃度を測定する。この測定値から、乾土あたり炭素量（T-C%）を求める。

(3)　リン酸・カルシウム・炭素含量

結果を第５表に示す。

第５表　土坑ＳＫ250のリン・カルシウム分析および炭素含量測定結果

試料番号	試料位置	炭素含量 C％	リン酸含量 P_2O_5mg/ｇ	カルシウム含量 CaOmg/ｇ	土色・土性
1（対照試料）	土坑外地山	0.48	2.02	9.19	10YR3/3.5暗褐・L
2（土坑試料）	土坑内上部	0.78	1.99	9.10	10YR2/3黒褐・L
3（土坑試料）	土坑内中部	0.65	1.59	8.89	10YR3/2黒褐・L
4（土坑試料）	土坑内下部	0.62	1.57	11.49	10YR2/3黒褐・L

1）炭素の単位は乾土１ｇあたりの％、リン酸・カルシウムの単位はともに乾土１ｇあたりのmgで表示。
2）土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修1967）による。
3）土性の判定は、土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペトロジスト懇談会編1984）による。
Ｌ・・壌土（ある程度砂を感じ、粘り気もある。砂と粘土を同じ位に感じられる。）

リン酸含量は４試料中で対照試料（試料番号１）が最も高い値を示す。土坑内覆土では上部（試料番号２）が高く、対照試料と比較的近似した値を示す。以下、中部（試料番号３）、下部（試料番号４）になるにしたがい含量が低くなるが、試料番号３、４については、ほぼ同じ含量である。したがって、試料番号１、２と試料番号３、４の間に含量の差異が認められる。

カルシウム含量は、リン酸含量より５倍近い値を示す。また、カルシウムで最も高い値を示す試料は、土坑下部の試料番号４であり、リン酸含量とは全く反対の傾向である。ただし、地山の試料番号１と土坑上部の試料番号２については、比較的近似した値を示し、リン酸と同じ傾向である。

なお、炭素含量とリン酸含量の相関関係をみると、点数が少ないこともあるが、値のバラツキが大きい。また、対照試料は炭素含量が少ないものの、リン酸含量が他の試料より高い。しかし、土坑内にはそのような傾向は認められない。

(4)　考察

土壌に通常含有される天然賦存量の調査例（Bowen1983、Bolt・Bruggenwert1980、川崎ほか1991、天野ほか

1991）では上限が約3.0P_2O_5mg/ｇ程度、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P_2O_5mg/ｇ（黒ボク土の平均値、川崎ほか1991）という報告例がある。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP_2O_5mg/ｇで統一した。これらの値を著しく越える土壌では外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸の富化とみなすことができる。

土坑内は、この天然賦存量よりも低い含量を示す。また、とくに高い値はみられず、特定の層位に濃集しているとはいえない。また、炭素含量との相関関係をみるとバラツキが大きく、植物あるいは動物遺体の混入によるリン酸の富化の有無は明確でない。

一方、カルシウム含量は普通１～50CaOmg/ｇ（藤貫1979）といわれ、外的要因による富化の区別をすることは難しいが、今回の結果をみる限り土坑下部にカルシウムの特徴的な濃集があるように思われる。この要因としていくつかのことが考えられる。一つはカルシウムが土壌中を比較的拡散しやすいことから、土壌中の一次鉱物のカルシウム成分が溶出して土坑下部に集積したことが考えられる。また、土坑内には土器や石が埋積していたが、試料採取場所は土器にも石にも近い場所である。これらに含まれていたカルシウム成分が溶出し、影響を及ぼしたことも考えられる。さらに、遺体とは異なる物質、たとえば植物を燃焼させて残った灰やカルシウムに富むもの（種実や貝類など）が混入していたことも考えられる。現段階では要因を特定できないが、いずれにしても土坑底の中央部は土坑内の他の場所とはやや異なると言える。

このような土坑内のカルシウム含量の高さは、大室山南西麓の求女沢川と大星川に挟まれた複合扇状地上に立地する山の越遺跡で、検出された縄文時代後期初頭の土坑でも認められた現象である。しかし、その要因は明確になっていない。

ところで、今回の調査では１カ所の層位的なリン酸含量の分布を調べた。しかし、リン酸は遺体が埋納された場所を中心として局部的に濃集する。そのため、底部では平面的に試料を採取したり、層位的な試料採取箇所を複数設けることにより、リン酸含量の分布状態を立体的に検討することが望まれる。また、今後カルシウム成分以外の成分、たとえば人体に含まれ、遺体の分解・焼失後には土壌中に残留しやすいと予想されるマンガンやストロンチウムなどの重金属元素の含量の測定を試みて、その偏在の状態を調べてみたい

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信1991「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水産省農林水産技術会議事務局編p.28-36

Bowen,H.J.M.（浅見輝男・茅野充男訳）1983『環境無機化学－元素の循環と生化学－』297p.博友社（原著H.J.M.Bowen1979『Enviromental Cemistry of Elements』）

Bolt,H.G.・Bruggenwert,M.G.M.（岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳）1980『土壌の化学』309p.学会出版センター（原著H.G.Bolt and M.G.M.Bruggenwert1976『SOIL CHEMISTRY』）p.235-236

土壌標準分析・測定法委員会編1986『土壌標準分析・測定法』354p.博友社

土壌養分測定法委員会編1981『土壌養分分析法』440p.養賢堂

藤貫　正1979「カルシウム」『地質調査所化学分析法』50地質調査所p.57-61

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久1991「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』149p.農林水産省農林水産技術会議事務局編p.23-27

京都大学農学部農芸化学教室編1957『農芸化学実験書』第１巻411p.産業図書

ペトロジスト懇談会編1984『土壌調査ハンドブック』156p.博友社

竹迫　紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部　隆1980「神谷原遺跡への土壌学的アプローチ」『神谷原』Ⅰ八王子市椚田遺跡調査会p.412-416

第５節　平安時代竪穴住居跡ＳＢ25の構築材推定

パリノ・ザーヴェイ社

１　はじめに

真行寺遺跡群③区西側では、平安時代竪穴住居跡ＳＢ25が検出され、床面に炭化した住居構築材が認められた。本地域では、これまでにも多くの遺跡で住居構築材の用材選択に関する調査が行われている。そこで、検出された構築材の樹種を調べ、用材選択の有無などについての類例との比較を通して検討する。

２　試料

試料は、平安時代竪穴住居跡ＳＢ25から出土した炭化材13点（試料番号１～13）である。

３　分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する（第166～168図）。

４　結果

同定結果を第４表に示す。針葉樹２種類（カラマツまたはトウヒ属・ヒノキ属）、広葉樹５種類（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・トネリコ属）に同定された。

第６表　平安時代竪穴住居跡ＳＢ25出土炭化材樹種同定結果

番号	取上No.	遺構名	採取土層	時代	用途	樹種
1	①	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	トネリコ属
2	②	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	カラマツまたはトウヒ属
3	③	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	クリ
4	④	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	クリ
5	⑤	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	クリ
6	⑥	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	クリ
7	⑦	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	ヒノキ属
8	⑧	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	クリ
9	⑨	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
10	⑩	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	ヤナギ属
11	⑪	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	クリ
12	⑫	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	ヒノキ属
13	⑬	ＳＢ25	住居跡覆土	平安時代	住居構築材	ケヤキ

各種類の解剖学的特徴を以下に記す。

・カラマツまたはトウヒ属（*Larix kaempferi*(Lamb.)Carrire or *Picea* sp.）　**マツ科**

早材部から晩材部への移行は急からやや緩やか、晩材部の幅は狭い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞壁にはじゅず状末端壁が認められる。分野壁孔は破損が激しく観察できないが、その状態から窓状壁孔ではない。放射組織は単列、１～20細胞高。

・ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.）　**ヒノキ科**

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、放射柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型で１～４個。放

射組織は単列、１～15細胞高。

・ヤナギ属（*Salix* sp.）　**ヤナギ科**

散孔材で、道管は年輪全体にほぼ一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、１～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）　**ブナ科**

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高ものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　**ブナ科クリ属**

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～10細胞幅、１～30細胞高であるが、時に60細胞高を越える。しばしば結晶を含む。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*(Thunb.)Makino）　**ニレ科ケヤキ属**

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～10細胞幅、１～10細胞高であるが、時に60細胞高を越える。しばしば結晶を含む。

・トネリコ属（*Fraxinus* sp.）　**モクセイ科**

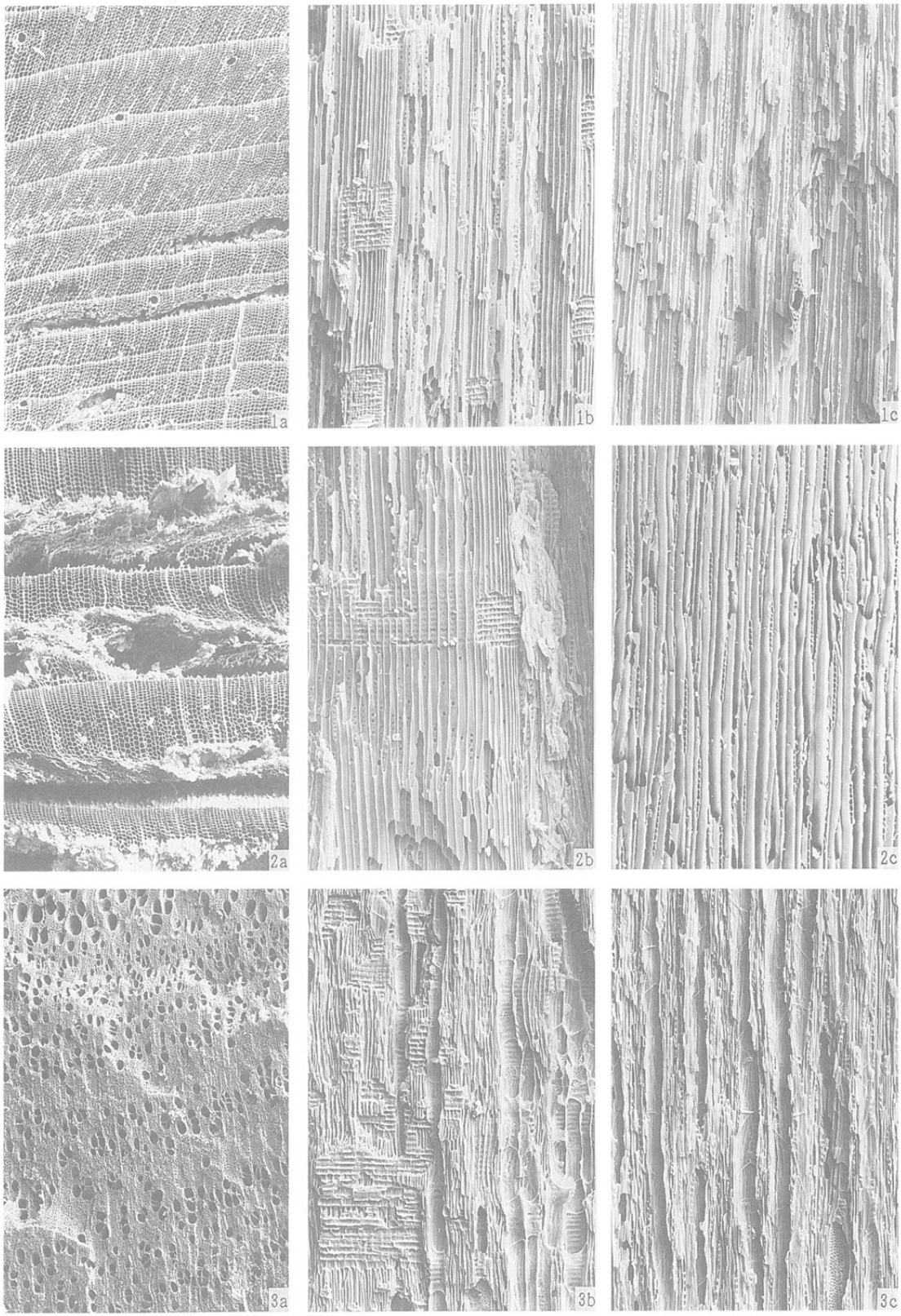
環孔材で孔圏部は２～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。

5　考察

住居構築材には合計７種類の木材が確認され、クリが最も多い。本地域では、これまでにも縄文時代から平安時代までの住居から出土した、構築材と考えられる炭化材の樹種同定が行われている。平安時代では、御代田町根岸遺跡で調査された例があり、クヌギ節が多い樹種構成が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社1989）。今回の結果は根岸遺跡の結果とは異なった結果であり、同時代であっても樹種構成が異なっていることが推定される。この背景として、遺跡周辺の地形や人間活動の程度などの立地環境の違いによる植生の差異などが考えられるが、現時点では詳細は不明である。今後、さらに多くの遺跡で試料を蓄積することが必要である。

引用文献

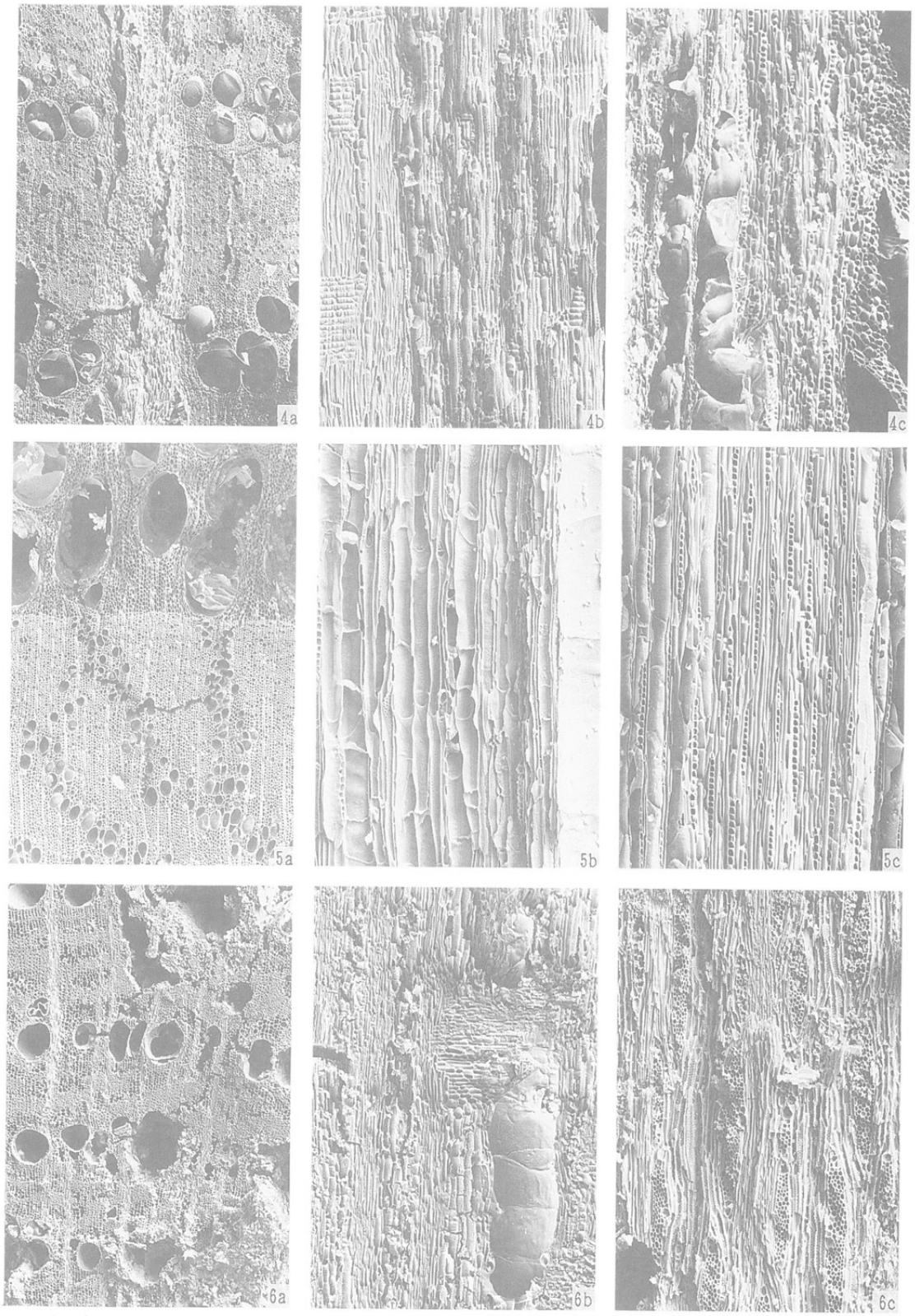
パリノ・サーヴェイ株式会社1989「根岸遺跡出土炭化材の樹種同定」『鋳師屋遺跡群　根岸遺跡発掘調査報告書』御代田町教育委員会p.291-293



1.カラマツまたはトウヒ属(試料番号2)
2.ヒノキ属(試料番号12)
3.ヤナギ属(試料番号10)
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

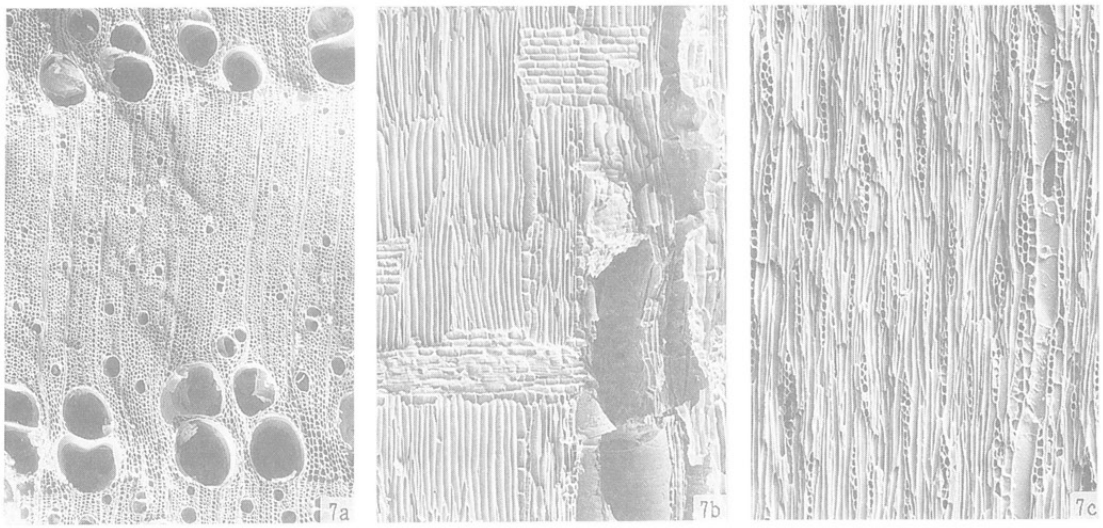
第166図　炭化材(1)



4.コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号9)
5.クリ(試料番号3)
6.ケヤキ(試料番号13)
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

第167図　炭化材(2)



7.トネリコ属(試料番号1)
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

第168図　炭化材(3)

第６節　中世土坑群周辺の灰の材質分析

パリノ・サーヴェイ社

１　はじめに

中世の火葬に関連すると思われる土坑ＳＫ037・ＳＫ083の周囲（グリッドⅡ－Ｔ－14）からは、灰の集中が認められた。そこで、当該遺構との関連、さらには中世土坑群の性格を探るためにも、灰の材質を調べ、灰像分析を行うこととした。

２　試料

試料は、灰混じりの土壌１点である。肉眼観察したところ、白色物質が多数認められた。

３　分析方法

試料中の白色物質を少量採取し、光学顕微鏡下で観察した（第169図）。

４　結果

白色物質中には、いくつかの植物珪酸体が数多く認められる。これらを近藤・佐瀬（1986）の分類に従って、同定した。

検出される植物珪酸体の形態のひとつは、二重亜鈴型を呈する。両端は側面の湾曲が大きい。また、中央部のくびれが顕著である。縦長は10～20μm程度である。これらの点は、イネ属の葉部短細胞珪酸体の特徴である。この珪酸体の中には、植物体内に存在するときのようにいくつかが集まって列を形成しているものが認められる。

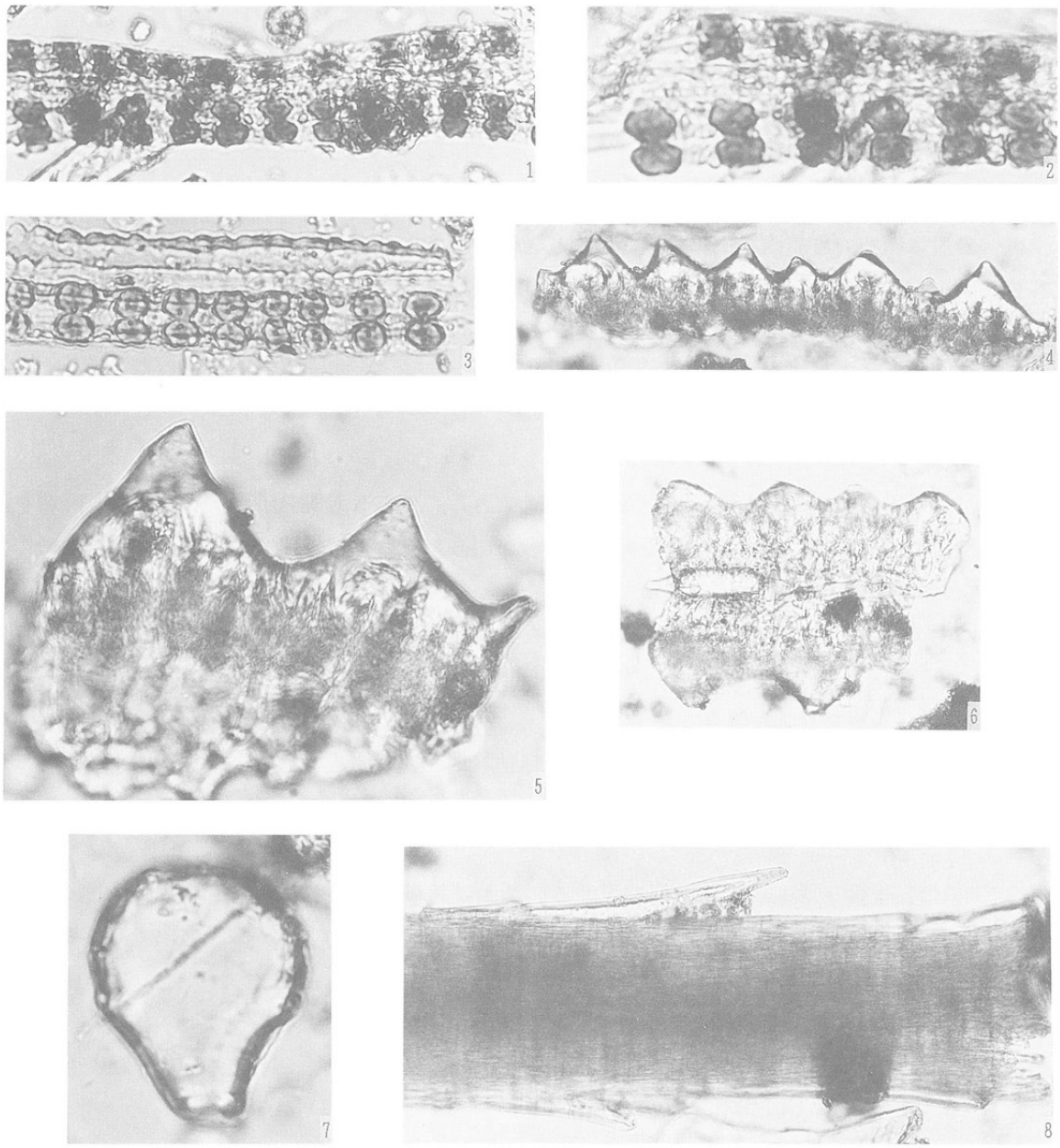
また、扇あるいはイチョウ葉型を呈し、亀甲模様が明確に現れるものも認められる。縦長は30～50μm程度である。これらの点はイネ属の葉身機動細胞珪酸体の特徴である。この珪酸体もいくつかが集まって列を形成している。

さらに、稲籾殻に特徴的な山形の珪酸体が連なる列も認められる。また、おそらくイネ属に由来すると思われるポイント型の植物珪酸体も認められる。

５　考察

白色物質中には、イネ属に由来する珪酸体列（組織片）が多数認められた。これより、中世土坑群周囲の灰にはイナワラや籾殻が含まれていたことと思われる。

これらは火力は弱いが、他の樹木などの焚き付けには有効であると思われる。したがって、イナワラなどの焚き付け材のような形で利用されたと考えられる。



(1,3,5)　50μm　(2,7)　50μm　(4,6,8)　100μm

1.イネ属短細胞列(SK058とSK063のまわり)
2.イネ属短細胞列(SK058とSK063のまわり)
3.イネ属短細胞珪酸体(SK058とSK063のまわり)
4.イネ属穎珪酸体(SK058とSK063のまわり)
5.イネ属穎珪酸体(SK058とSK063のまわり)
6.イネ属穎珪酸体(SK058とSK063のまわり)
7.イネ属機動細胞珪酸体(SK058とSK063のまわり)
8.ポイント型(SK058とSK063のまわり)

第169図　灰像

第７節　中世土坑のリン酸・炭素分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

中世の墓穴と考えられる土坑が検出されたが、骨などの遺体ははっきりとは認められなかった。そこで、土坑への遺体埋納の可能性を検討するためにリン酸と有機炭素の含量を調べることとした。縄文時代土坑ＳＫ250を対象に、東京都北区の豊島馬場遺跡の調査例（辻本・小林1995）を参考にして調査を試みているが、今回は動物遺体成分の残留を反映しやすいと考えられるリン酸とリン酸含量を相対的に評価しやすい有機炭素に絞って含量を測定する。

２　試料

調査対象は土坑ＳＫ331、ＳＫ334、ＳＫ344の３基である。土坑ＳＫ331は平面プランが楕円形を呈する。覆土は黒褐色シルトで、ローム粒子や劣化した礫が混在し、厚さ10cm程度である。試料採取の際は、覆土上面の全体が採取されるように、長軸方向で２本、短軸方向に３本の測線が設けられた。埋積の状態を観察するためのトレンチを除いて、測線で囲まれた12カ所から土壌が採取され、試料番号ア～シが付けられた。

土坑ＳＫ334は、平面プランが隅丸方形を呈する。覆土はＳＫ331と同質な黒褐色シルトである。試料採取の際は、覆土中位に測線が設けられた。測線は、埋積状態を観察するためのトレンチに平行して５本、それに直交する方向で５本が設けられ、測線で囲まれた20カ所から土壌が採取され試料番号ア～トが付けられた。

土坑ＳＫ344は、平面プランが隅丸方形を呈する。覆土は黒褐色シルトだが、土坑ＳＫ331やＳＫ334と異なり、ロームブロックを含む。試料採取の際は底面直上に長軸方向で２本、短軸方向で５本の測線が設けられ、測線の交点10カ所から土壌が採取され、試料番号１～10が付けられた。

また、土坑試料に対する対照試料としてII－Ｃ－24グリッド付近の表土１点が採取された。

分析試料として、土坑ＳＫ331の12点、ＳＫ334の20点、ＳＫ344の10点、対照試料の１点の合計43点を選択した。

３　分析方法

分析は、土壌標準分析・測定法委員会編（1986）、土壌養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペトロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）５mℓを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10mℓを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mℓに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P_2O_5）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/ｇ）を求める。

有機炭素量については、風乾細土試料の一部を微粉砕し、0.5mm篩を全通させた微粉砕試料を用いる。微粉砕試料1000mg前後を精秤し、助燃剤（酸化コバルト）5.0ｇと混合する。混合試料をサンプルボードに

乗せ、ＣＮコーダー（柳本製作所製・MT-600）に挿入する。挿入された混合試料をキャリアガス（He）気流中で950℃に加熱燃焼する。発生した燃焼ガスを純化させ、CO_2およびN_2の組成にする。次いで希釈、分取の工程を経て、TCD検出器により炭素および窒素の濃度を測定する。この測定値から、乾土あたり炭素量（T-C%）を求める。

4　結果

結果を第７表、第170図に示す。調査した土坑のリン酸含量と有機炭素含量は、それぞれ一定の範囲内に集中する。このうち、土坑ＳＫ331はリン酸含量5.0P_2O_5mg/ｇ前後、有機炭素含量3.0%前後と他の土坑よりも高い含量である。対照試料は土坑試料より高いリン酸含量だが、土坑ＳＫ331の試料番号キは対照試料に比較的近い含量である。

第７表　中世土坑のリン酸・炭素分析結果

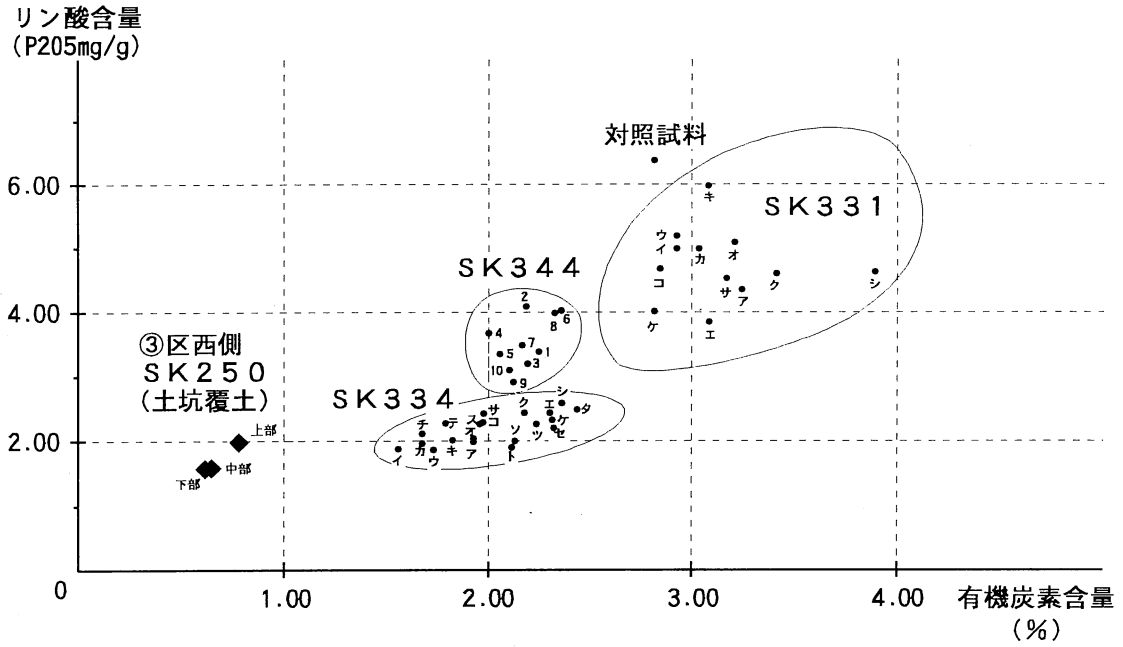
試料名	リン酸含量 P_2O_5mg/ｇ	有機炭素 C%	土色・土性	試料名	リン酸含量 P_2O_5mg/ｇ	有機炭素 C%	土色・土性
対照試料表土	6.37	2.81	7.5YR2/2黒褐・L	ケ	2.30	2.31	10YR3/3暗褐・L
土坑ＳＫ331				コ	2.41	1.98	7.5YR2/3極暗褐・L
ア	4.35	3.25	7.5YR2/2黒褐・L	サ	2.33	1.98	7.5YR2/3極暗褐・L
イ	5.01	2.92	7.5YR2/2黒褐・L	シ	2.58	2.35	7.5TR3/2黒褐・L
ウ	5.17	2.92	7.5YR2/2黒褐・L	ス	2.28	1.96	7.5YR3/2黒褐・L
エ	3.85	3.08	7.5YR2/2極黒褐・L	セ	2.20	2.32	7.5YR3/2黒褐・L
オ	5.09	3.21	7.5YR2/2黒褐・L	ソ	2.00	2.12	10YR3/3暗褐・L
カ	4.98	3.03	7.5YR2/2極黒褐・L	タ	2.50	2.44	7.5YR3/2黒褐・L
キ	5.96	3.08	7.5YR2/2黒褐・L	チ	2.10	1.68	10YR3/3暗褐・L
ク	4.60	3.41	7.5YR2/2黒褐・L	ツ	2.26	2.23	10YR2/3黒褐・L
ケ	4.02	2.81	10YR3/2黒褐・L	テ	2.28	1.79	10YR2/3黒褐・L
コ	4.68	2.84	10YR3/2黒褐・L	ト	1.91	2.11	10YR3/4暗褐・L
サ	4.52	3.17	10YR2/2黒褐・L	土坑ＳＫ344			
シ	4.62	3.89	10YR2/3黒褐・L	1	3.40	2.25	10YR3/4暗褐・L
土坑ＳＫ334				2	4.09	2.19	10YR3/2黒褐・L
ア	1.98	1.92	10YR3/2黒褐・L	3	3.21	2.19	10YR3/3暗褐・L
イ	1.88	1.56	10YR3/2黒褐・L	4	3.68	2.00	10YR3/3暗褐・L
ウ	1.88	1.73	10YR3/2黒褐・L	5	3.35	2.05	10YR3/2黒褐・L
エ	2.44	2.30	10YR2/3黒褐・L	6	4.02	2.35	10YR2/3黒褐・L
オ	2.02	1.92	10YR3/4暗褐・L	7	3.50	2.16	10YR3/2黒褐・L
カ	1.96	1.67	10YR3/4暗褐・L	8	3.99	2.32	10YR3/2黒褐・L
キ	2.02	1.82	10YR3/4暗褐・L	9	2.91	2.12	10YR3/2黒褐・L
ク	2.44	2.18	10YR3/3暗褐・L	10	3.09	2.10	10YR3/2黒褐・L

土性：土壌調査ハンドブック（ペトロジスト懇談会編1984）の野外土性の判定法による。
L：壌土（砂と粘土を半々に感じる）
土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修1967）による。

なお、参考のために③区縄文時代土坑ＳＫ250の調査結果も示す。中世土坑はいずれも土坑ＳＫ250よりリン酸含量、有機炭素含量が高い。

5　考察

土壌中に自然に存在するリン酸含量、すなわち天然賦与量は3.0P_2O_5mg/ｇで、最大でも5.0P_2O_5mg/ｇと推定される（Bowen1983、Bolt・Bruggenwert1980、川崎ほか1991、天野ほか1991）。今回は、対照試料とした表土とともに、土坑ＳＫ331で天然賦与量の最大値よりも高い値を示した。とくに、試料番号キは他の試



第170図　中世土坑のリン酸・有機炭素含量
今回調査した中世土坑の調査結果（●）とともに、参考として前回調査した
③区西側の縄文時代土坑ＳＫ250の調査結果（◆）も示す。

料と比較すると、相対的にリン酸含量が高い。これより、試料番号キ付近の土壌にリン酸の富化が指摘できる。また、土坑ＳＫ331の他試料も土坑ＳＫ334やＳＫ344と比較してリン酸含量が高く、土坑ＳＫ331内全体にリン酸が拡散していることが考えられる。これらの点から、土坑ＳＫ331についてはリン酸を含む動物遺体などの埋納があった可能性が考えられる。また、他の中世土坑についてはリン酸の顕著な富化を指摘することはできなかった。本結果から見る限り、動物遺体の埋納の可能性は小さい。

なお、縄文時代ＳＫ250と今回の中世土坑の覆土は分析時の所見ではともに黒褐色の壌土であるが、土坑ＳＫ334やＳＫ344はＳＫ250よりリン酸含量が高い傾向が見られる。この点は、立地や土坑の埋積過程の違いなどが要因と考えられるが、現段階では不明である。

今回の調査では、土坑覆土の残存状態に応じて面的に試料が採取され、リン酸の富化された場所を指摘することができた。今後、土坑に関する調査の際も同様な方法で試料採取することが望まれる。また、面的な試料採取とともに層位的に試料が採取できれば、リン酸の分布状態を立体的に検討できよう。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信1991「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水産省農林水産技術会議事務局編p.28-36

Bowen,H.J.M.（浅見輝男・茅野充男訳）1983『環境無機化学－元素の循環と生化学－』297p.博友社（原著H.J.M.Bowen1979『Enviromental Cemistry of Elements』）

Bolt,H.G.・Bruggenwert,M.G.M.（岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳）1980『土壌の化学』309p.学会出版センター（原著H.G.Bolt and M.G.M.Bruggenwert1976『SOIL CHEMISTRY』）p.235-236

土壌標準分析・測定法委員会編1986『土壌標準分析・測定法』354p.博友社

土壌養分測定法委員会編1981『土壌養分分析法』440p.養賢堂

藤貫　正1979「カルシウム」『地質調査所化学分析法』50地質調査所p.57-61

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久1991「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』149p.農林水産省農林水産技術会議事務局編p.23-27

ペトロジスト懇談会編1984『土壌調査ハンドブック』156p.博友社

辻本崇夫・小林　高1995「豊島馬場遺跡における周溝内埋葬について―土壌分析結果を中心として―」『北区埋蔵文化財調査報告16集　豊島馬場遺跡』東京都北区教育委員会p.368-371

第８節　小結

以下、真行寺遺跡群を時期ごとに概観し小結とする。

縄文時代：本遺跡の縄文時代の資料は前期初頭（ＳＢ29）、前期中葉（ＳＢ13）、前期後葉（ＳＢ24）の竪穴住居跡が各１軒、前期後葉（ＳＫ190）、前期末（ＳＫ250）の土坑が土器を伴って検出されている。概ね遺構外などから出土した資料も遺構の時期とだいたい対応しているが、後期や晩期の資料も散見される。

東部町の烏帽子岳西南麓の縄文時代の集落遺跡は、今のところ前期から発達すると見られているが、本遺跡もその例に漏れず、前期初頭の花積下層式段階の住居跡が検出されている。平面形や床面など不明確な部分も存在したが、中央に埋設された土器、柱穴、焼土集中部分などが見られ、住居跡と考えられる。本遺跡群では、この元会下地籍付近ではなく、祢津小学校の校地より中道式期の住居跡が３軒検出されており、やや地点が異なるが、集落としては一連のものである可能性が高い。

花積下層式並行期の資料は千曲川中上流域の東信地方でも近年長門町中道遺跡、御代田町塚田遺跡や真田町四日市遺跡などで出土しているが、花積下層式自体の出土は珍しい。共伴する土器が少ないのが惜しまれる。花積下層式でも新しい段階の資料という[註1]。

前期中葉以降も、資料が豊富ではないが、散見される。前期後葉のＳＢ24出土の土器は、半截竹管状工具を束ねて波状文を口縁部文様帯に描いている点、胴部下半が単節の縄文が横位に施される特徴から諸磯ｂ式に並行するものと考えた。床面直上からこの土器だけの出土で、時期が特定できるようなほかの共伴遺物がないので、時間的な位置づけに多少不安を残す。

その後前期末と考えられるＳＫ250がある。これは略完形の土器で、土坑の形状や完形土器の出土ということもあり、墓穴の可能性も考え、リン酸カルシウムの分析などを行ったが、墓穴を推測させるような結果は出ていない。土器は口縁部直下に隆帯を波状に貼付し、隆帯波頂部の下方に爪形の刻みを施す。類例としては、新潟県鍋屋町遺跡などで前期末の土器と共伴しており、これも前期末（諸磯ｃ式以降五領ヶ台式以前）と考えた。以上の状況からおおよそ縄文時代前期の間、小規模な集落が続いていたことは間違い無いようである。

中期以降の資料も散見されるが、これらの時期と確定できる遺構は検出されていない。ただ、特筆すべきは晩期初頭の資料（第150図37）がある。烏帽子岳西南麓の晩期の状況はほとんど分かっていないので、遺構に伴わないとはいえ、重要な資料である。

古墳時代：本遺跡のＳＢ01・04・05に伴う土師器は、箱清水式以降の須恵器出現以前の古墳時代の土師器におおよそ該当する。さて、まず詳細な時期推定の前に、土師器研究の前提である器種の認定であるが、二重口縁の壺形土器はともかく、口縁断面が「く」の字形の甕形土器と壺形土器の峻別は難しい。本遺跡の資料に限っては口縁付近の断面形は同じ「く」の字形だが、ＳＢ05の９などは外面を縦位にミガキ調整を施しており、器形もやや細長い。ススの付着は認められなかった。実際ＳＢ05内のPit12において粘土を貯蔵した状況で出土している。それに対し竪穴住居ＳＢ01の６や８、ＳＢ05の10はやや器形も寸詰まりで、胴部が球形に張り、器面調整はミガキ調整も施されるがハケ目調整がはっきり残っている。また、器面にもススの付着が明らかに残っている。よって本稿では前者を壺形土器とし、後者を甕形土器とする。

実際の研究では器形と機能が厳密には一致しない例がいくつか指摘されているが、竪穴住居跡ＳＢ05の５・９などの壺形土器に籾痕が視認される。この籾痕はたまたま器壁に付着したような性格のものでなく、土器の胎土の中に練り込まれていたらしいことが推察される（ＳＢ05の11の土師器底部）ことから、お

そらく製作時から、ある意味ではこうした微妙な器形差ではあっても用途が異なることが意識されて、作られていたかもしれない。

さて、真行寺遺跡群の古墳時代土師器は組成の特徴として、

(1)　いわゆる箱清水式の系統を引く櫛描波状文の甕形土器や壺形土器は含まない。また須恵器も含まれない。

(2)　精製小型土器はあまり多くなく、かろうじて器台や鉢が散見される。

(3)　高坏が少しある。

(4)　坏がほとんどない。

形態的な特徴としては

(1)　壺形土器　二重口縁、大型の「く」の字口縁球形胴、小型の精製球形胴のものがある

(2)　甕形土器　「く」の字形口縁球形胴のものが大半

技法上の特徴としては

(1)　壺形土器、高坏形土器、精製小型土器（鉢・器台など）はミガキ調整が全面に施される。

(2)　甕形土器はかなり粗いハケ目調整ないし条痕調整が施された後、口縁部内面および胴部の一部にミガキ調整が施される点が共通している。

以上のような特徴に近いものとして、石川条里遺跡の臼居編年のII期２段階（臼居1998）、宇賀神編年II期新段階（宇賀神1989）が該当しよう。古墳時代前期の終わりくらいか。

遺跡内の土地利用は①区に集中している。後続する古墳時代の土器資料はなく、古代（平安時代）まで、人間が定住的な生活を本遺跡では行ってはいなかったと考えられる。

古代：古代はＳＢ09・11・14・15・16・17・18・25・26の９軒を数える。組成の面からは須恵器の坏も見られるが、いずれも黒色土器の坏が一定量含まれる。甕は胴部にヘラケズリを施すいわゆる武蔵型の甕が主体である。平安時代の中にいずれも収まると考えられる。しかし、土器の組成や形態的特徴から、土器の出土数が極めて少ない住居跡の厳密な時期否定は難しいが、大きく新旧２時期に分けることができよう。

まずＳＢ11・14・18などは須恵器の坏の割合が高く、須恵器蓋も存在している。また胴部ヘラケズリの甕は、口縁部が「く」字状に屈曲するものが主体で、「コ」字状のものは見られない。佐久編年の５～７段階に属すると思われる。

これに対しＳＢ25・26は坏は黒色土器が卓越し、胴部ヘラケズリの甕は口縁部が「コ」字状を呈するものが含まれる。ＳＢ25は大型の盤、土師器坏も含まれる。佐久編年の９段階前後と思われる。

竪穴住居跡は平安時代一定規模の集落として継続していたと思われるが、これらに対応する掘立柱建物跡は特定できなかったし、古代の土坑と認定できたものは少ない。

特筆すべき遺物としてはＳＢ25からは墨書土器「□本」「舘」「貴」「□都」などが出土している。またＳＢ26からは鉄鎌、鉄鋤鍬先が出土している。

中世：中世はＳＢ02・03・06・19・20・21・22・27の８軒、ＳＴ02・03・04・05の４棟を数える。

時期的な問題については、中世の土器・陶磁器の編年は、まだ在地系のものについては確立していない部分もあるので、少なからず誤認を含んでいる可能性はある[註2]。しかし、土器や陶磁器の組成からこれらの遺構のおおまかな変遷を追ってみた。

まず変遷を追う前に、基本的な遺構の認識について確認しておく。竪穴建物跡についてであるが、カマドがなく、柱穴もほとんどないか、あっても非常に小さい柱穴が多いものは古代の竪穴住居跡とは構造や性格が異なるものと思われる。また、カマドのみならず、炉跡も検出できなかった。よって住居跡と断定

せず、竪穴建物跡と呼称している。共伴する遺物の量も極めて少なく、土師器皿、内耳鍋、須恵質・土師質擂鉢・鉄釘などが見られる程度である。

また、当該期の遺構としては、多くの土坑が検出されている。理化学的な分析では、ＳＫ331がリン酸の含量が高くかろうじて墓の可能性が指摘されたが、他の遺構では肯定的な結果は出ていない。しかし、覆土の多くから、骨片（同定不能）や、焼土、炭、銅銭が出土しているものが、少なくないことから、これらの土坑の中には墓穴が少なからず含まれていると考えたい。いずれにせよ、遺物は少なく、土層も中世以降のものと古代以前のものの違いはかなり認識できたが、中世の遺構内での区別は分からなかったので、以下述べる遺跡内での変遷もおおまかな傾向と考えていただければ幸いである。

中世前期：ＳＢ21・27が土師器内耳鍋を含まず、それぞれ13世紀代の青磁ないしは国産施釉陶器が出土していて、遺構の切り合いから、中世前期に属すると考えた。またＳＤ04は国産陶器である古瀬戸や須恵質擂鉢（珠洲系）、さらに貿易磁器の龍泉窯系の青磁碗など13世紀から14世紀代のものが多い。この溝ＳＤ04は、③区の中央を南北に走り、③区東側の斜面とあわせるとちょうどＬ字形に土坑群を区画しているようになる。墓穴と考えられる土坑群が、いずれもこの区画内にあることも、この溝が意図的に墓域を区画するものと推測する裏付けになろうか。ＳＢ21・27・ＳＤ04はいずれも③区であり、遺構外の遺物も③区に多い。

よって、古代末の遺構（11世紀から12世紀）は検出されていないので、古代は佐久編年の９段階前後（10世紀代？）[註3]で一旦とぎれた後、中世13世紀代にまた、③区に竪穴建物跡や土坑が作られ、ＳＤ04もこの時期の所産か。

しかし、青磁や擂鉢などの一部の陶磁器と銅銭は多いが、煮沸具や他の器種が見あたらないこと、竪穴建物跡が少ないことから、定住的な集落というよりは、非集落的な利用（とくに墓域）が考えられる。

また、銅銭しか出土しない土坑がいくつも検出された。これらは墓であると思われるが、遺構の性格以外に、遺構自体の年代であるが、これら渡来銭とされる銅銭は最も古い初鋳年は開元通宝の621年、最も新しいのは淳熙元宝の1174年である。これらの銅銭の出土は、その遺構がその銅銭の初鋳年より後にできたものであるとしか言えない。

本遺跡において、古代の遺構からは１枚もこうした銅銭は出土せず、中世の遺構のみから出土しているので、銅銭のみしか出土しない遺構も中世の所産と考えた。土坑の土層の観察からも銅銭のみの出土土坑の土層は、中世の土坑の土層の類型に属する。さらに、淳熙元宝以降鋳造の渡来銭が永楽通宝１枚（遺構外）のみで遺構内からは全く検出されていないことから、その土坑の多くは中世後期には降らないと考えたいが、銭の流通年代は想像以上に長いので、そうしたことが考えられるという点を指摘するに留まらざるを得ないであろう。

中世後期：中世後期の遺物は、真行寺遺跡群全体にまんべんなく広がっている。とくに貿易陶磁器は中世前期に比べると少ないが、逆に土師器皿、内耳鍋の量はかなり多い。竪穴建物跡、掘立柱建物跡の多くは中世後期の所産と考えられ、以上の点から当該期の本遺跡は定住的な生活に利用されていたものと考えられる。ＳＤ05は中世後期の国産陶器や近世国産陶磁器が包含されており、ＳＤ04に平行しているところから、ＳＤ04の機能をＳＤ05が受け継いだものだろう。

近世以降：遺物としては近世の国産陶磁器、キセル、銭貨としては寛永通宝などが検出されているが、確実に近世の遺構（建物跡、土坑）は見つかっていない。おそらく墓域としても集落としても利用されていなかったものと思われる。

以上、時代順に今回調査した範囲の遺跡（土地利用）の変遷や出土遺物などについて概観したが、最後に祢津地区における今回調査した真行寺遺跡群の意味を考えてみたい。

真行寺遺跡群には、油田、桜畑、元会下、五輪原などの寺院・墓域に関連する地字が残されている（五十嵐1986）。中世前期にはあるいは、今回発掘した範囲の一部が墓域であった可能性はあるが、古代や中世後期以降の状況は、集落域であり、近世には遺構自体がないので、考古学的には別段こうした地字に関連しているとは言えない。真行寺ないし、それに関する地字と今回調査した遺跡の範囲が何らかの関係を有していたとすれば、中世前期の状況（13世紀から14世紀代）がポイントになろう。ただ五十嵐幹雄によると真行寺の伝承には、近世まで降るものもあるという。

「真行寺」が仮に存在したとすれば、その成立年代と廃絶年代が問題になる。室町時代の宝徳元年（1449）に定津院が城下に開設されたことが『信州臨川山定津院年表』と題する定津院所蔵の旧記にあるという（桜井ほか1991）。年代的に本遺跡調査範囲の墓域消滅時期に相応していることは注目される。祢津城下の寺院はその後も継続した一方で、こうした周辺地域の寺院は中世後期以降は廃絶したのかもしれない。

ただ、以上本遺跡を含めた真行寺遺跡群自体の様相が明らかにならない限り、以上述べたことは現段階では憶測にしかすぎない。よって、本遺跡周辺および祢津地区の遺跡の性格が年代的にも解明されることによって、こうした問題にも接近できることと思われる。また中世以前の古代にも「舘」の墨書[註4]などが出土していることにも見られるように、これらが祢津氏に関係する資料である可能性はあり、さらに今後遺跡の実態から祢津の歴史が明らかにされることが望まれよう。

註１　贄田明氏のご教示による。

註２　中近世の陶磁器などの編年などについては市川隆之氏にひとかたならぬご教示とご指導を得た。しかし、本稿では報告書担当者が理解できる範囲で記述が行われているので、少なからず市川氏の所見を誤認している可能性はあるが、その文責は報告書作成担当者にある。

註３　古代の土器編年年代は寺島の佐久編年（寺島1991）による。

註４　本遺跡をはじめ本報告書の墨書の釈読は国立歴史民俗博物館の平川南氏による。

引用参考文献

五十嵐幹雄1986『東部町の遺跡と文化財』

下平・贄田明ほか『塚田遺跡』御代田町教育委員会

児玉卓文ほか『真行寺遺跡』東部町教育委員会

宇賀神誠司1989「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』２

臼居直之1998「古墳時代前期の土器群の分類」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15―長野市内その３―石川条里遺跡第２分冊』㈶長野県埋蔵文化財センター

国立歴史民俗博物館1997『国立歴史民俗博物館研究報告第71集　中世食文化の基礎的研究』

笹沢　浩1988「古墳時代の土器」『長野県史考古資料編全１巻（四）遺構・遺物』長野県史刊行会

桜井松夫・竜野敬一郎・川上　元「中世」『東部町誌歴史編（上）』東部町誌刊行会

寺島俊郎1991「古墳時代末から平安時代の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２―佐久市内その２―』長野県埋蔵文化財センター

深沢敦仁1994『行力春名社遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

第７章　桜畑遺跡

第１節　遺跡の概要

本遺跡は、東部町祢津字五輪原1200ほかに位置する。地形的には、東信火山帯の一つ烏帽子岳西南麓、求女沢川の左岸に立地する（第２・171図）。標高は645～652ｍを測る。

『小県郡石器時代地名表』（五十嵐1949）に記載され、遺跡として周知されていた。その後、菅平有料道路建設用地内に遺跡がかかることが判明したので、昭和44年（1969）に緊急発掘調査が行われた。竪穴住居跡９軒（うち縄文２軒、平安３軒）、小形竪穴状遺構14基、石囲い状遺構４基、掘立柱建物跡、土坑墓９基などが検出された。縄文土器は早期押型文土器なども出土しているが、住居跡に伴うものは前期の関山式とされた（東部町誌1990）。古代の住居跡からは土師器の坏や甕が出土。土坑墓からは、骨片のほか擂鉢、刀子が、石囲い状遺構からは石鉢、石臼が出土（長野県企業局1969・佐藤1982）。昭和50年（1975）にも岩佐今朝人氏らによって発掘調査が行われ、旧祢津小学校校庭から縄文時代中期後葉の竪穴住居跡２軒が検出された。

引用参考文献

岩佐今朝人1975「祢津小学校北庭発見の縄文時代の住居跡」『上田・小県』22

岩佐今朝人1976ａ「祢津小学校北庭の調査」『信濃考古』33

岩佐今朝人1976ｂ「長野県小県郡東部町祢津小学校敷地遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24

岩佐今朝人1977「祢津小学校内敷地遺跡」『日本考古学年報』28

佐藤　攻1982「桜畑遺跡・油田遺跡」『長野県史考古資料編全１巻(2)主要遺跡（北・東信）』長野県史刊行会

東部町誌編纂委員会編1990『東部町誌歴史編（上）』東部町誌刊行会

長野県企業局1969『桜畑等埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』

第２節　調査の概要

１　調査範囲と経過

調査範囲を確定するために、平成４年12月15日に、試掘調査70㎡を行い、調査範囲を確定した。よって、平成５年７月28日に建設用重機を搬入、８月５日より発掘調査を開始し、11月12日に終了した。平成５年度の発掘調査面積は5400㎡。平成６年11月１日から発掘調査を開始し、12月１日に終了した。平成６年度の調査面積は1200㎡で、桜畑遺跡全体ののべ調査面積は6600㎡を測る。

平成５年７月28日　建設用重機搬入および発掘調査用駐車場・プレハブ造成開始。
８月５日　発掘調査開始。
11月３日　現地説明会（見学者92名参加）。
11月９日　航空測量および航空撮影。
11月12日　発掘調査作業終了。
平成６年11月１日　発掘調査開始。
11月28日　航空測量および航空撮影終了。
12月１日　発掘調査作業終了。
12月５日　終了式。発掘機材の撤収。

2　基本層序

求女沢川と祢津東川が合流する地点の山側で、ちょうど両河川に挟まれた形になる。基本土層は完新世に堆積したと考えられる再堆積黄褐色ローム層（礫混砂質シルト～粘土質シルト・Ⅴ層）が基盤をなし、その上に黒色礫混粘土層（径20～50cmの亜円礫を多く含むガレキ層・Ⅳ層）、暗褐色～黒褐色の遺物包含層（粘土質シルト・Ⅲ層）、灰褐色～褐色土層（砂混～砂質シルト・Ⅱ層）、現耕作土（水田土壌および畑土・Ⅰ層）が堆積している。基盤層までの深さは約0.5～0.8ｍを測り、遺物包含層（Ⅲ層）やⅣ層は川際や遺跡中央を走る埋没流路には比較的厚く残存していたが、部分的にかなり薄い地点もあった（第172図）。

第３節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡・建物跡と土器・陶磁器

(1)　縄文時代

ＳＢ07（第173・174図）　　位置　Ｉ－Ｓ－22

検　出　ローム層直上のローム漸移層で落ち込みが見られた。精査を繰り返したが平面形が明確に検出できず、直交する土層観察用ベルトを設定して掘り下げた。一旦覆土中でロームブロックが多くなり堅くなった部分が検出され、これを床面と想定したが、土層断面からその下位に覆土が認められたので、さらに掘り下げたところ、ローム層の床面が検出された。

構　造　北東―南西に長軸を持つ現存3.6×2.0ｍの方形。立ち上がりはそれほど明瞭ではない。床面は最終的に検出されたローム層であるが、とくに堅緻な部分は存在しなかった。住居跡隅から２基小土坑が検出されたが柱穴と考えられる。焼土は検出されたが、炉は不明である。

切り合い　ＳＫ207を切る。

遺　物　２～４・６繊維を含む回転縄文施文。５結節半截竹管文。１～６縄文時代前期。７・９半截竹管の格子目文、８・10～12胎土に繊維を含まず、雲母が目立つ回転縄文施文。７～12縄文時代中期初頭。混入か。

時　期　縄文時代前期

ＳＢ12（第175図）　　位置　Ｉ－Ｍ－18

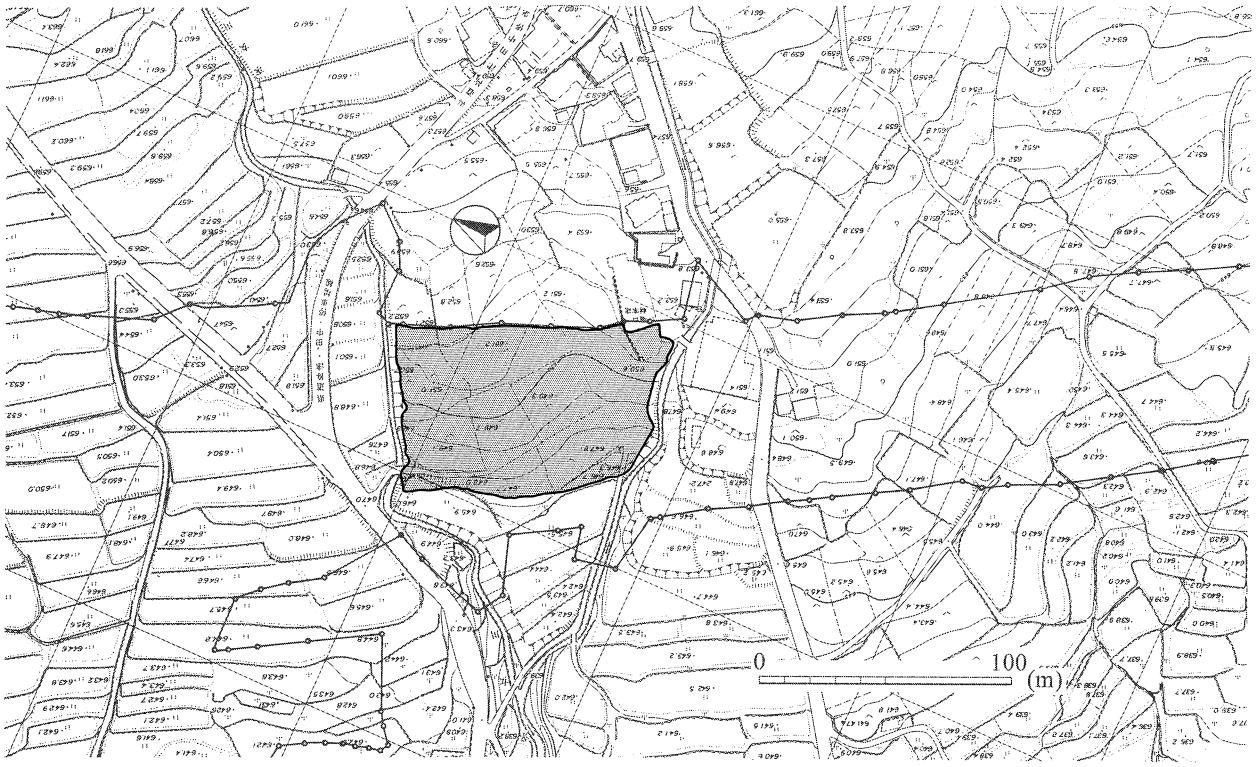
検　出　ローム層まで下げたところで、黒褐色土の落ち込みが見られた。複数の落ち込みが重なっているように検出された。立ち上がりが確認された辺に直交して土層観察用のベルトを設定し、掘り下げた。床面が検出され、古墳時代ＳＢ10に切られていることも確認された。

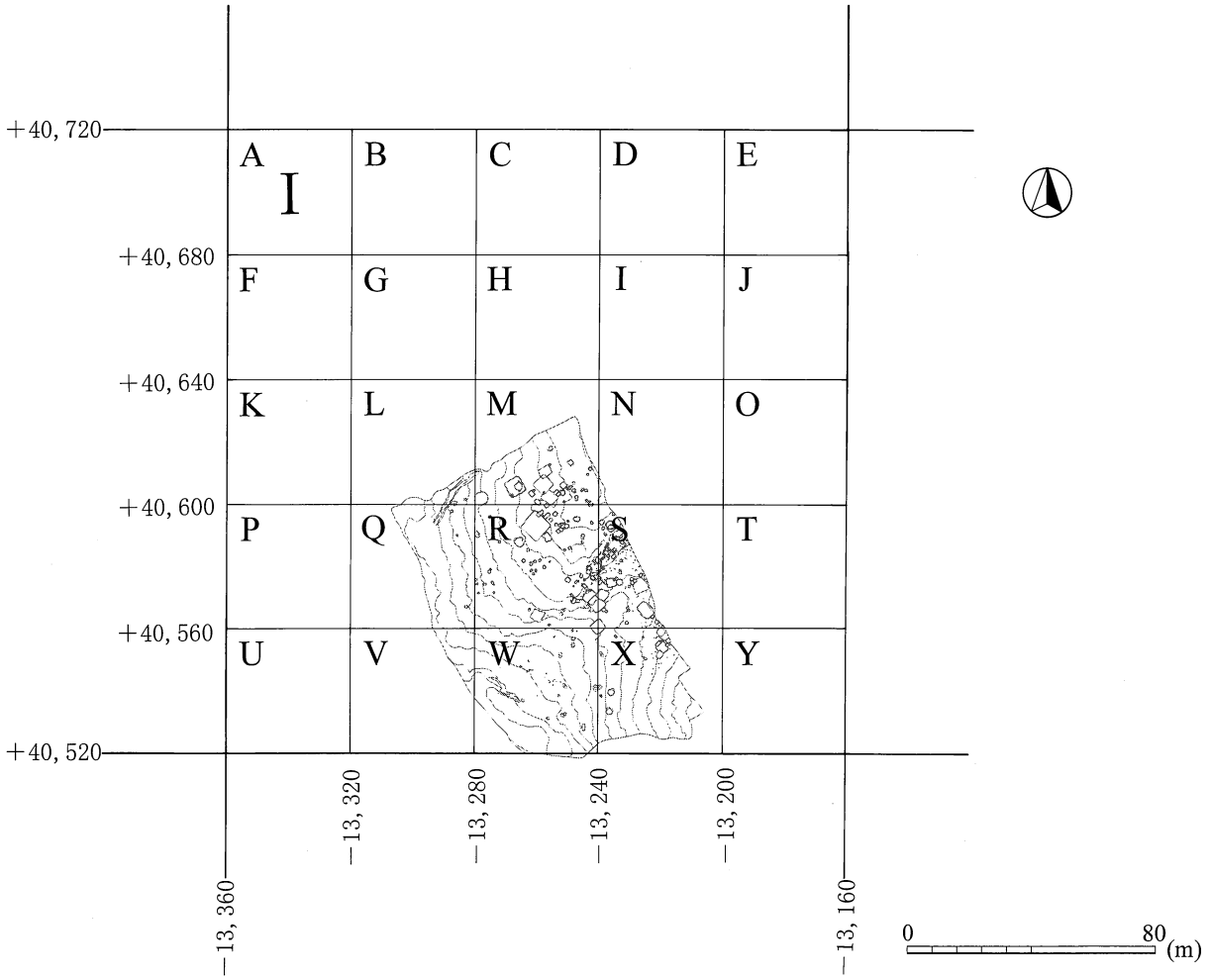
構　造　北東―南西に軸を持つ現存で4.0×3.1ｍの長方形。北側から東側の立ち上がりははっきりしていたが、ほかは平面形すら確認できない状態である。床面はローム層で、大きな礫が一部露出していた。小土坑が隅から４基検出され柱穴と考えられる。炉はわからなかった。

切り合い　古墳時代ＳＢ10に切られる。

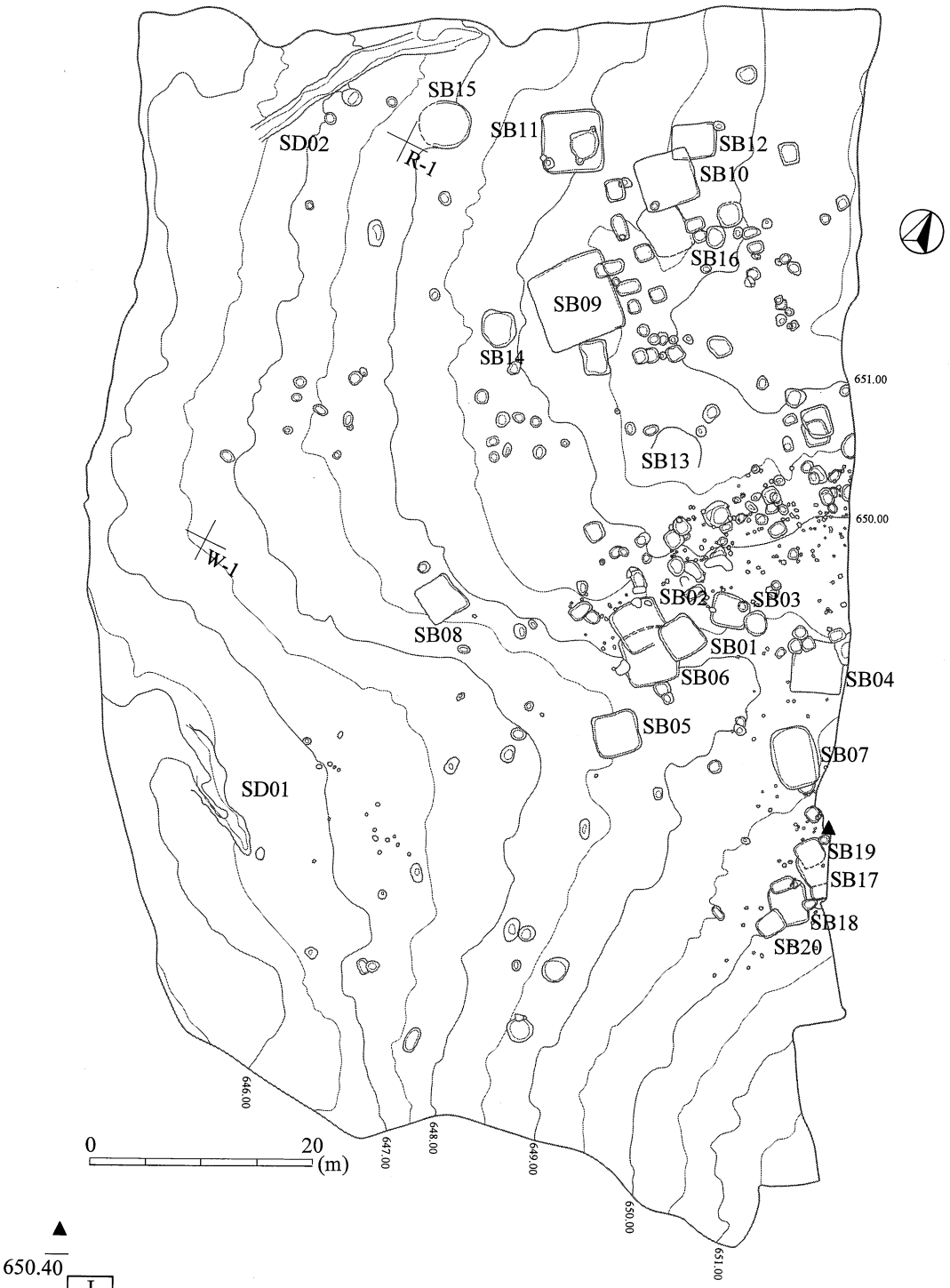
遺　物　１・２・４～７繊維を含む回転縄文施文。１口縁部を肥厚し、撚糸文の羽状構成。３外面に並行条線が施される薄手の繊維を含まない土器。中越式。

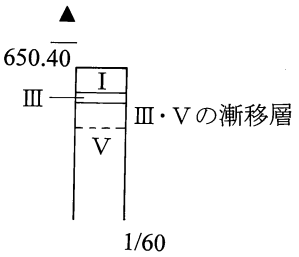
時　期　縄文時代前期前葉　関山式期か





第171図　桜畑遺跡調査範囲・グリット





Ⅰ層　現耕土

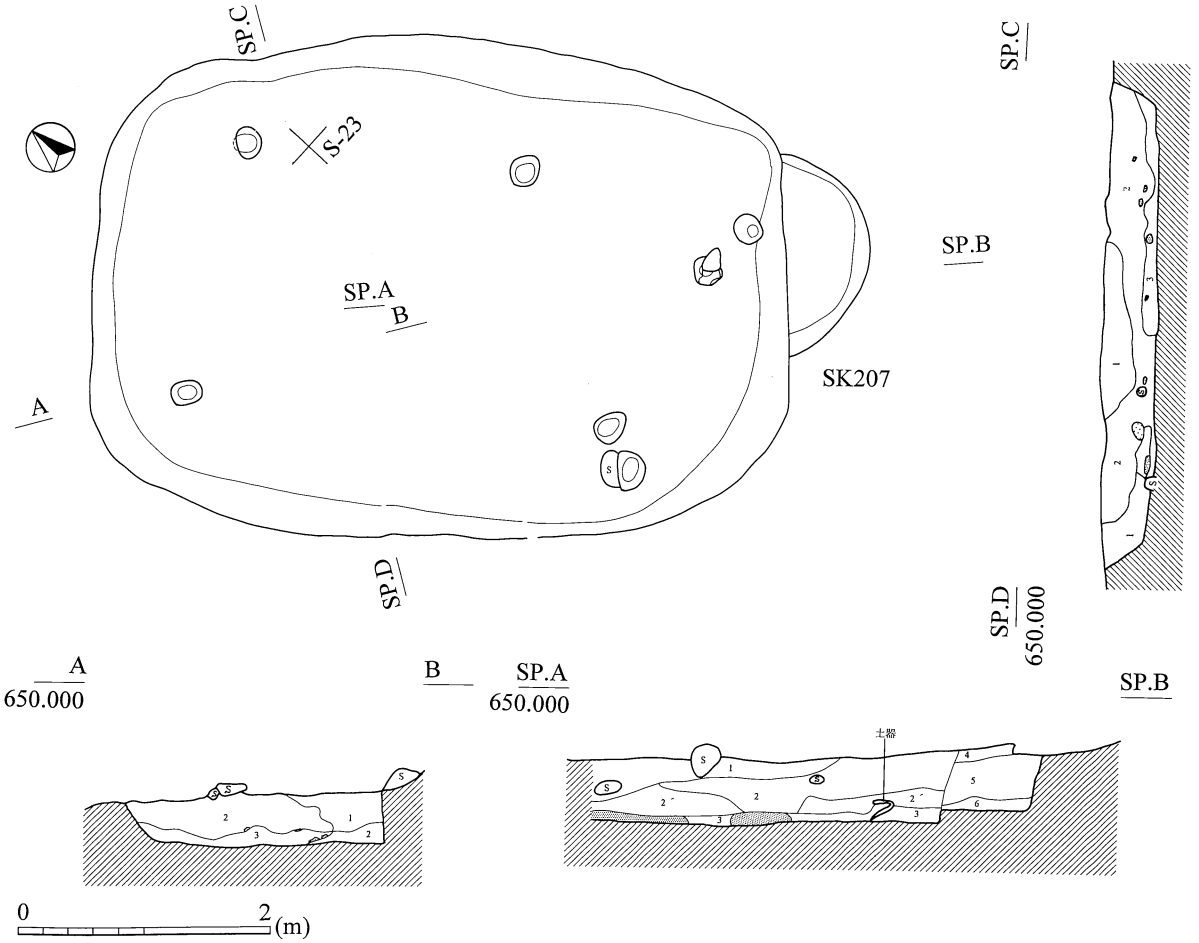
Ⅱ層　灰褐色～褐色の砂混～砂質シルト

Ⅲ層　遺物包含層

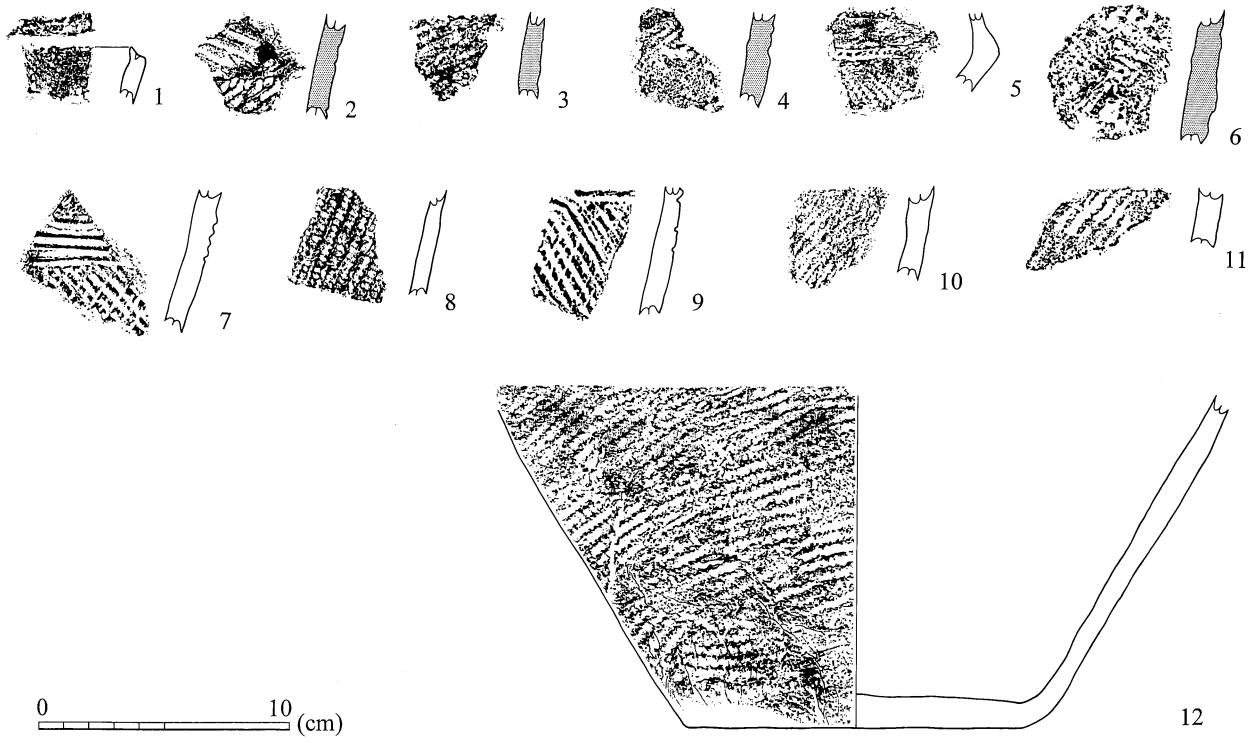
Ⅳ層　ガレキ層

Ⅴ層　ローム層

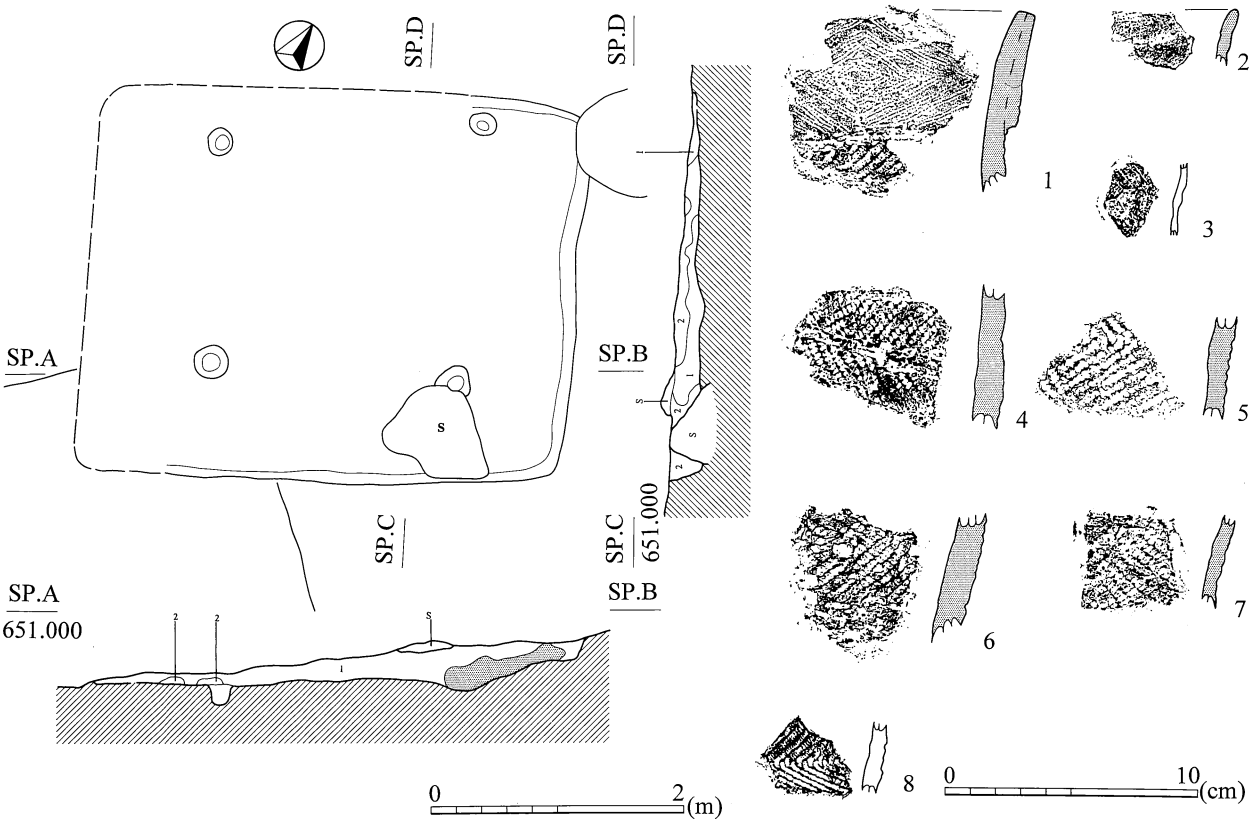
第172図　桜畑遺跡遺構配置・基本土層



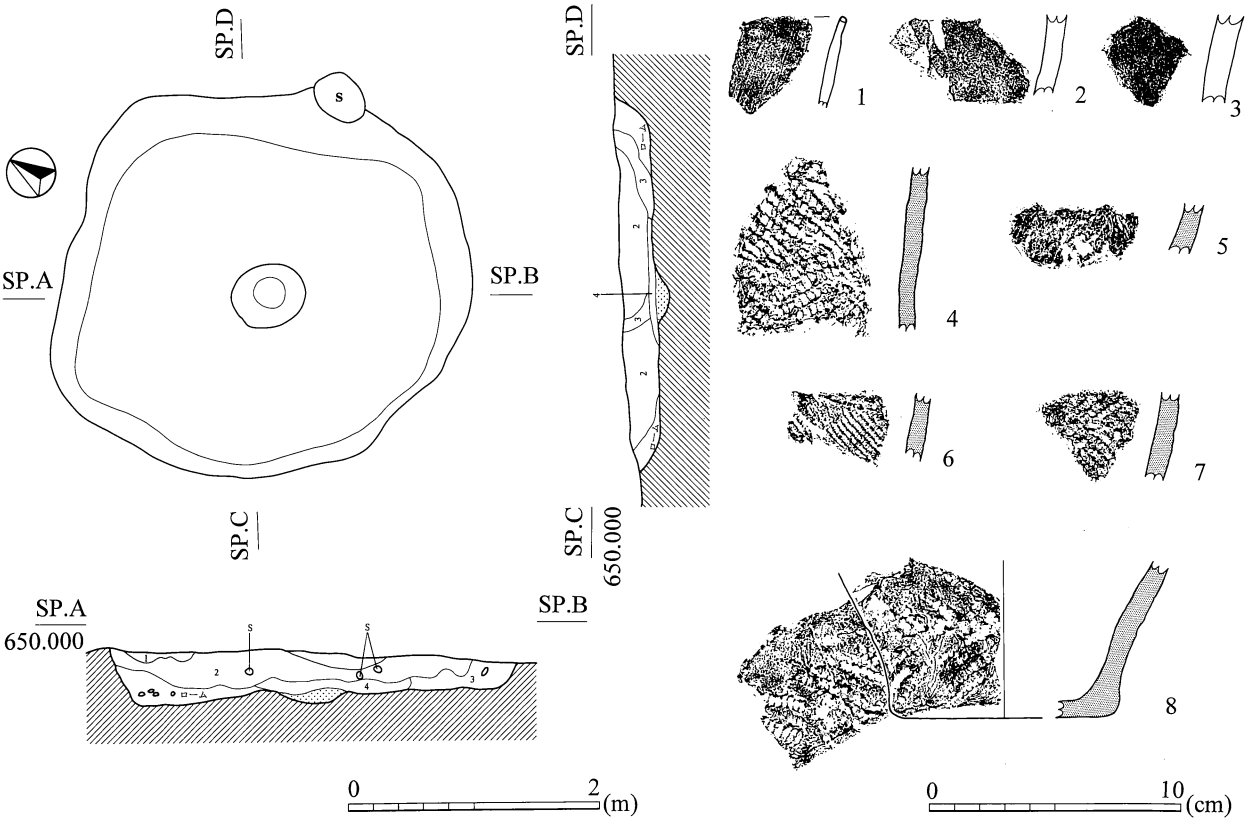
第173図　竪穴住居跡　ＳＢ07



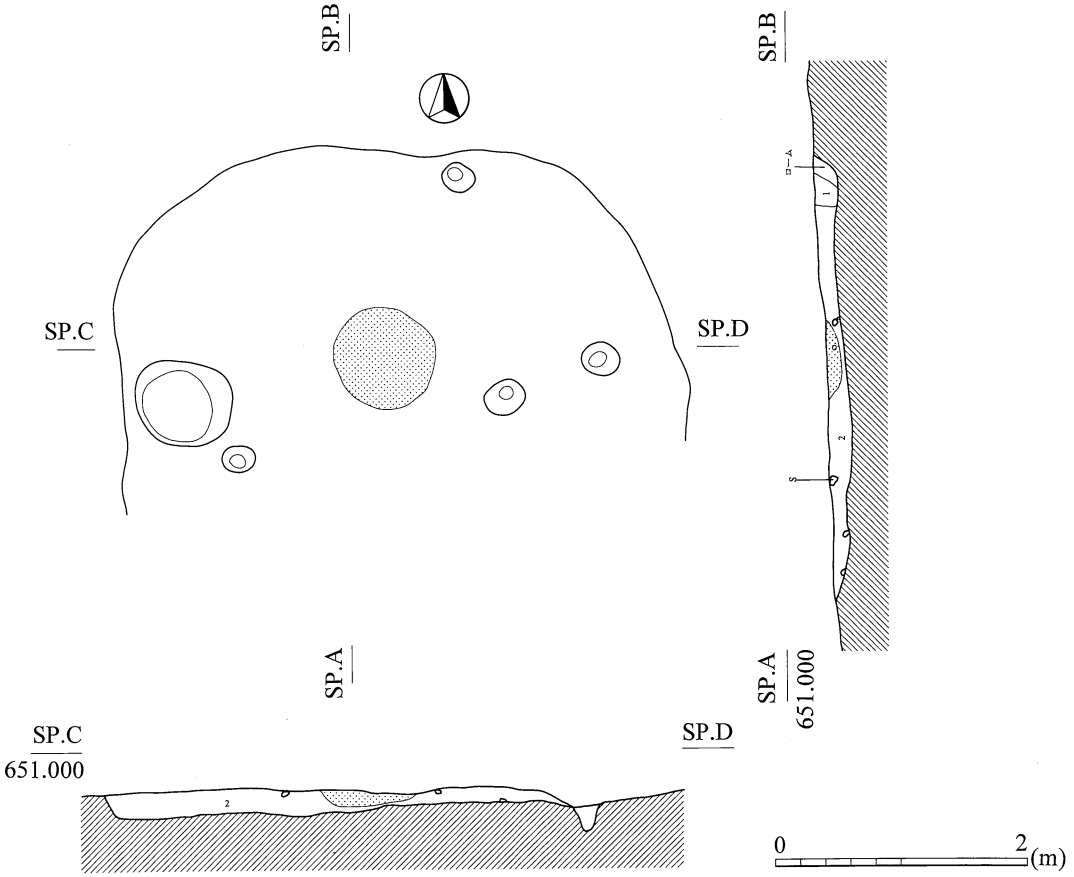
第174図　竪穴住居跡　ＳＢ07出土土器

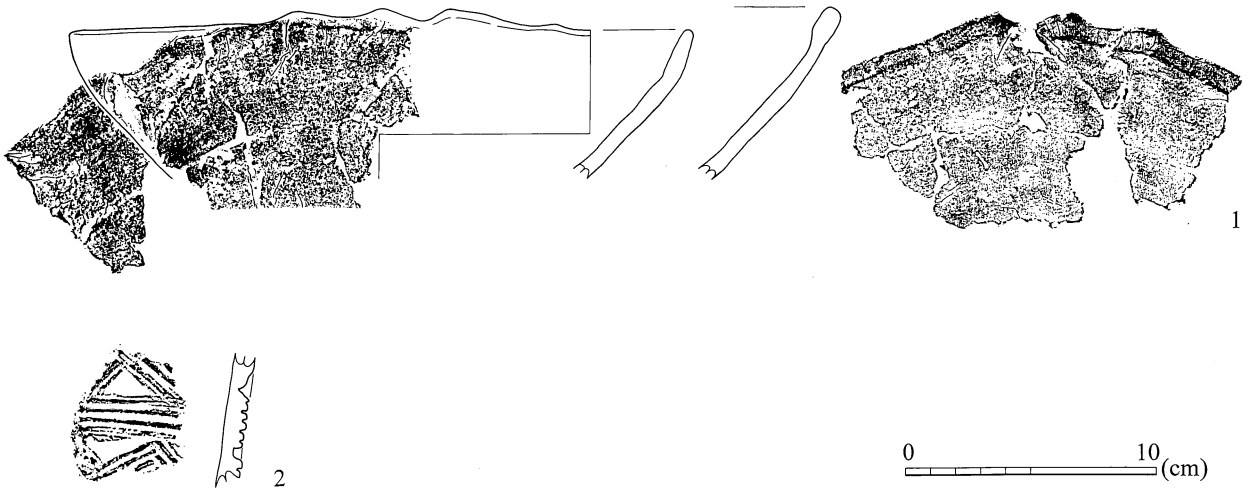


第175図　竪穴住居跡　ＳＢ12・出土土器



第176図　竪穴住居跡　ＳＢ14・出土土器





第177図　竪穴住居跡　ＳＢ13・出土土器

ＳＢ13（第177図）　　位置　Ｉ－Ｒ－10

検　出　尾根から斜面に移行する地点にあたり、遺物包含層はほとんど残っていなかった。土坑などの調査終了後地山のローム層よりややくすんでいた部分が認められたので、精査したところ焼土や縄文土器が出土し住居跡と判断した。

構　造　ほぼ東西に長軸を持つ現存で4.7×4.5ｍの略楕円形。小土坑が４基検出されたが、柱穴というよりは、地山の礫を抜き取った痕跡とも考えられる。中央に焼土が集中している部分が存在し、掘り込みの深さは15cmを測り、炉と考えられる。

遺　物　１背向する三角形陰刻文。２口縁部内面が若干肥厚する無文の浅鉢。炉から出土。

時　期　縄文時代中期初頭から前葉か

ＳＢ14（第176図）　　位置　Ｉ－Ｒ－７

検　出　ローム層直上のローム漸移層で落ち込みが認められた。土層観察用の先行トレンチを設定して掘り下げたところ、遺構の中央に焼土の集中と床面が認められたので、竪穴住居跡と判断した。

構　造　3.3×3.1ｍの略円形。立ち上がりは緩やかで、床面も堅緻な部分は認められなかったが、中央の床面よりやや低い部分に焼土の集中があり、炉と考えられる。柱穴らしい小土坑は検出されなかった。

遺　物　１口唇を刻み、外面には条線が施され、薄手の内面に指頭圧痕を残す。胎土に繊維を含まない木島式。２・３無文ナデ調整、繊維はほとんど含まれない。中越式並行の在地系土器か。４～８回転縄文施文、胎土に繊維を含む。

時　期　縄文時代前期前葉　関山式期

ＳＢ15（第178図）　　位置　Ｉ－Ｍ－21

検　出　ローム層直上のローム漸移層で落ち込みが認められた。土層観察用ベルトを残して掘り下げたところ床面を確認し、床面を追って立ち上がりを検出した。

構　造　径4.3ｍの円形。北東半分の立ち上がりは比較的はっきりしていた。床面も北東半分は堅緻なローム面が残っていたが、南西半分は礫が露出し、床面は明確でなかった。小土坑は２基検出されたが、柱穴かどうかわからない。住居跡中央やや北寄りに埋甕炉がある。炉体土器は胴部下半が欠失した深鉢で、土器はさほど被熱せず、ほとんど焼土も土器内にはなかった。埋設土器の脇の床面に小さな焼土集中が見られた。

遺　物　６炉体土器。横位回転縄文ＲＬを地文とし、やや太めの半截竹管で隆帯脇をなぞり、浮き彫り状の並行沈線文を施す。

時　期　縄文時代中期前葉

ＳＢ16（第179図）　　位置　Ｉ－Ｍ－23・24

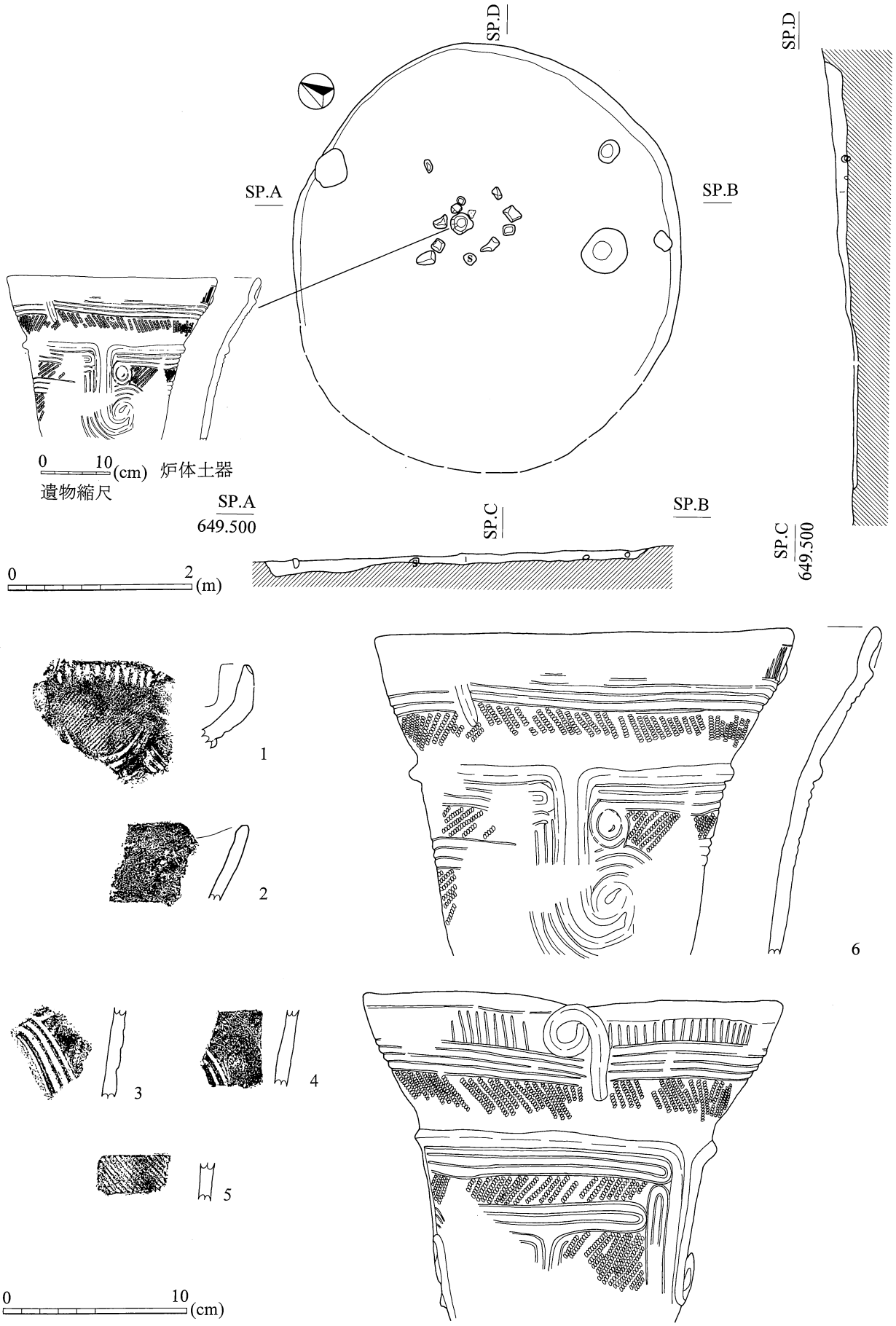
検　出　尾根のほぼ中央に位置し、地山ローム面まで下げたところ付近の遺構とともに検出された。近接する古墳時代以降の遺構と検出面は同じだが、それらに比べて平面形の輪郭ははっきりせず、土壌化がより進んでいたことがわかる。よって、切り合いおよび平面形を確認するために土層観察用のベルトを設定し、掘り下げたところ、古墳時代ＳＢ10およびＳＫ154の間で立ち上がりが確認できた。そこから住居範囲を想定して掘り広げたところ、南側でも立ち上がりが検出できたので、竪穴住居跡と考えた。

構　造　北西一南東に長軸を持つ現存4.6×4.8ｍの長方形。北側の立ち上がりは明確であったが、それ以外は他の遺構との切り合いでほとんど分からなかった。床面は礫が露出してしまい。平坦でなく、生活面はとらえられなかった。小土坑が4基検出されたが、柱穴かどうか不明。

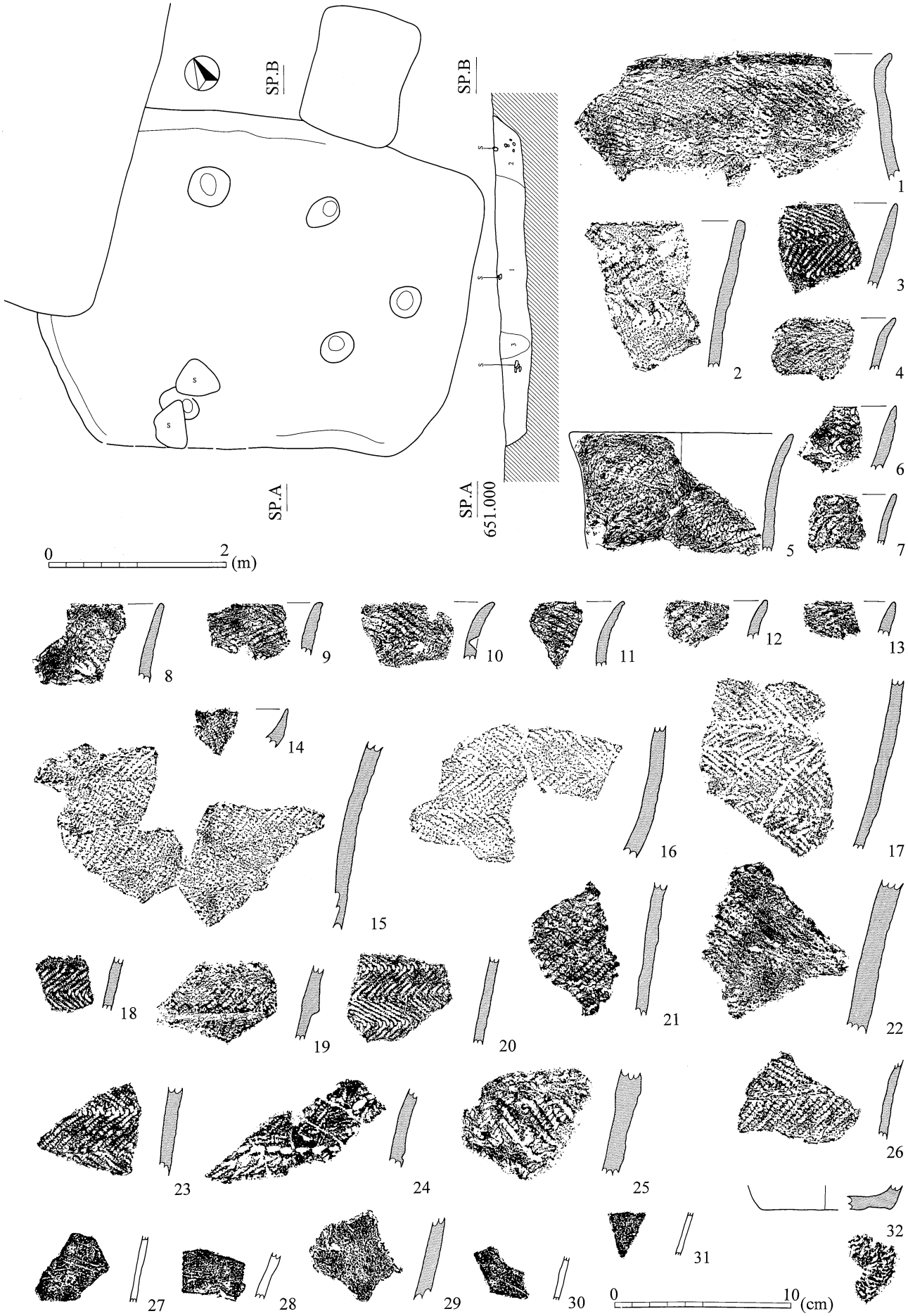
切り合い　ＳＢ16を古代ＳＢ10が切り、さらに中世？ＳＫ092・154が切る。

遺　物　１～26含繊維回転縄文施文。19口縁部を肥厚。27～31繊維をほとんど含まない薄手の土器。27・28・30外面に細条線が施される。木島式。32底部外面に連続した爪形の刺突が施される。胎土に繊維を含む。

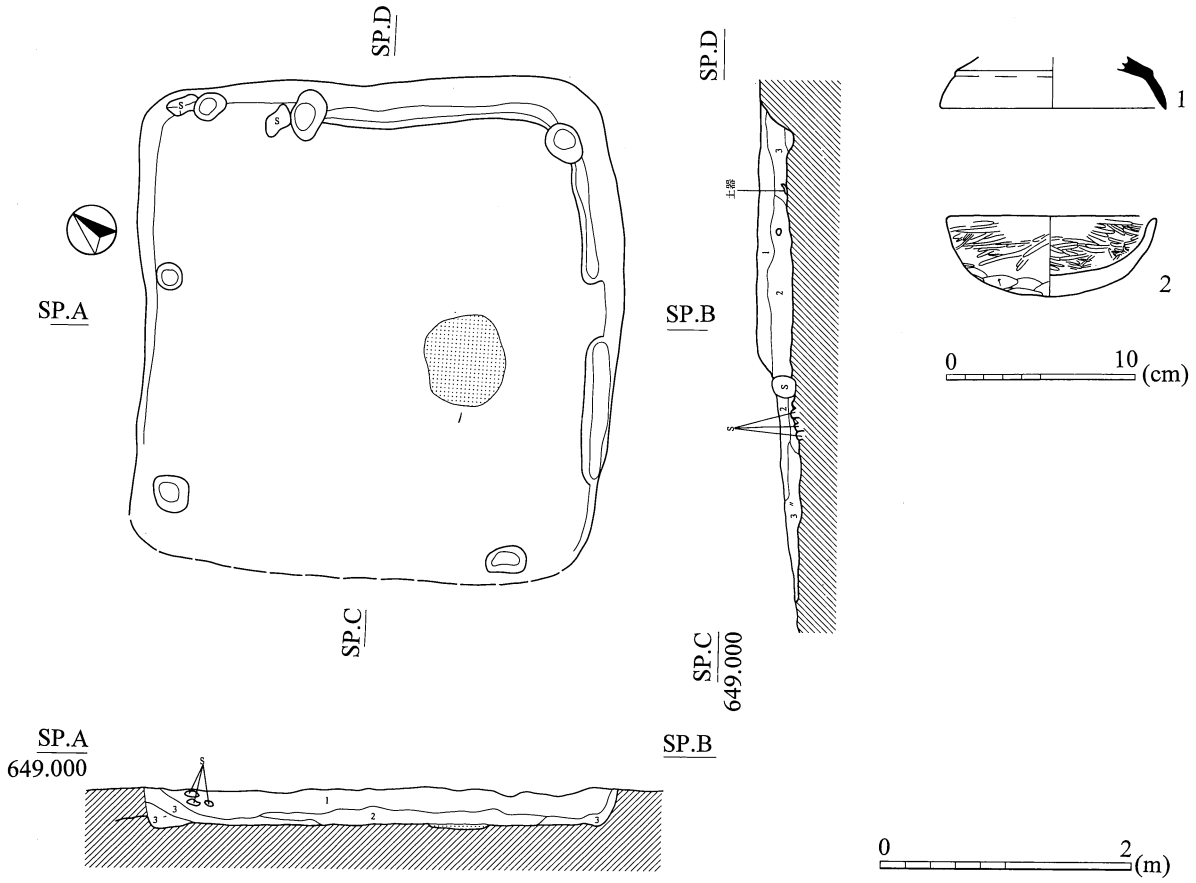
時　期　縄文時代前期前葉　関山式・木島式



第178図　竪穴住居跡　ＳＢ15・出土土器



第179図　竪穴住居跡　ＳＢ16・出土土器



第180図　竪穴住居跡　ＳＢ05・出土土器

(2)　古墳時代

ＳＢ05（第180図）　　位置　Ｉ－Ｓ－21

検　出　地山のローム層直上の暗黄褐色の漸移層で黒褐色土の落ち込みが認められた。尾根から下がった谷部に位置し、表土下位の黒褐色土の堆積が比較的厚いので、この土層中での遺構確認は難しく、遺構検出面においても平面形は不明瞭であった。そこで、立ち上がりを検出するために土層観察用の先行トレンチを設定した。

構　造　北東―南西に軸を持つ4.0×3.9ｍの方形。東側半分は立ち上がりも明瞭であったが、西半分はほとんど分からなかった。床面も堅緻な部分が認められる訳ではないが、遺構外の地山のロームに比べて、床面と想定される部分は多少土壌化がすすんでいた。また住居跡北東から南東にかけて立ち上がりの下に周溝が検出された。住居隅から小土坑が６基検出されたが、いずれも柱穴と考えられる。炉は住居跡中央の赤化面の広がりが、火床と考えられる。

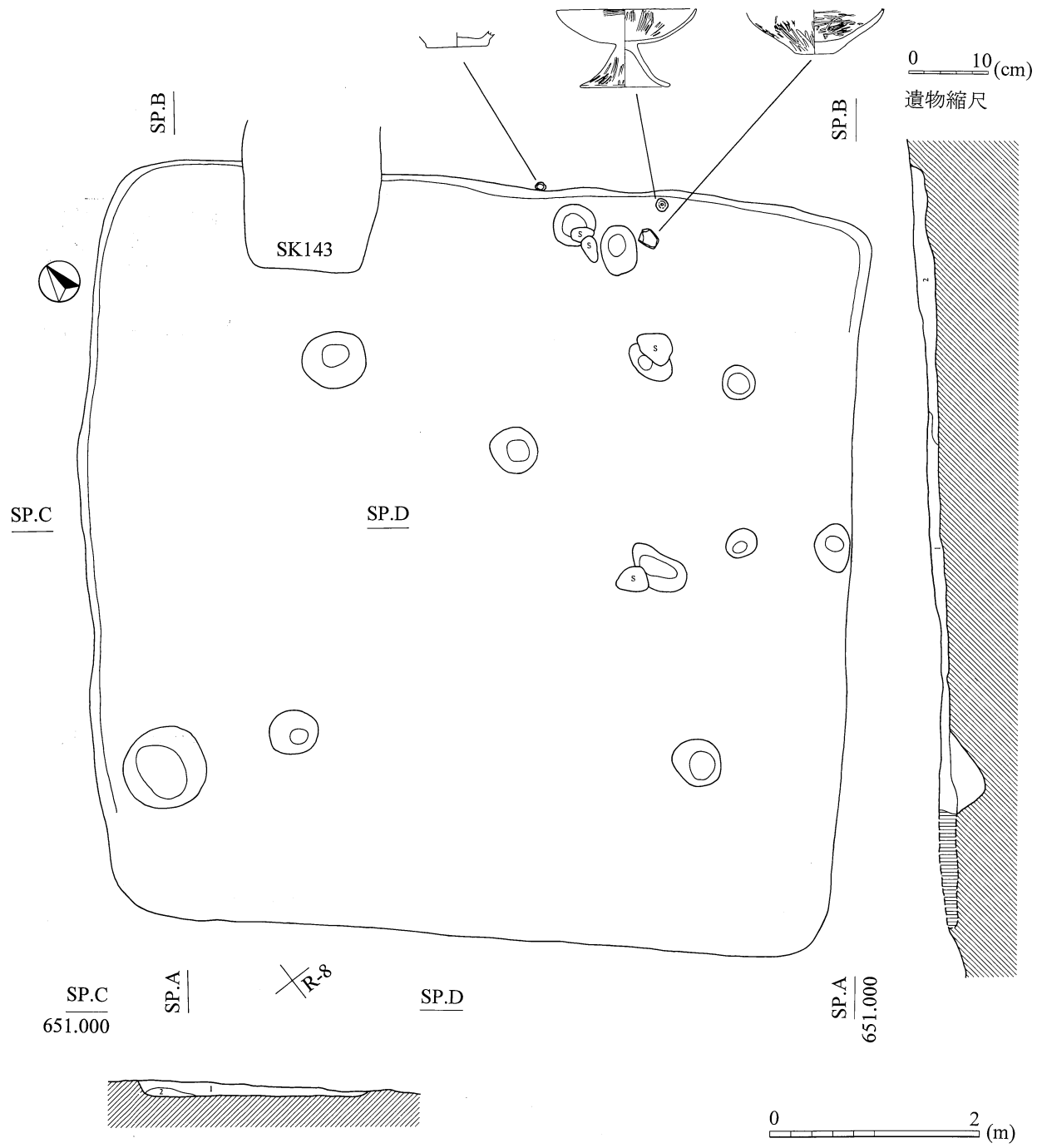
遺　物　１須恵器蓋。２底部へラケズリを施し、さらに内外面ミガキ調整の土師器坏。

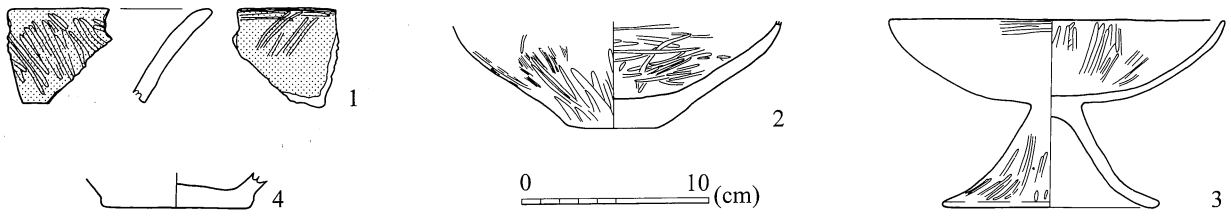
時　期　古墳時代後期前半

ＳＢ09（第181図）　　位置　Ｉ－Ｒ－２・３

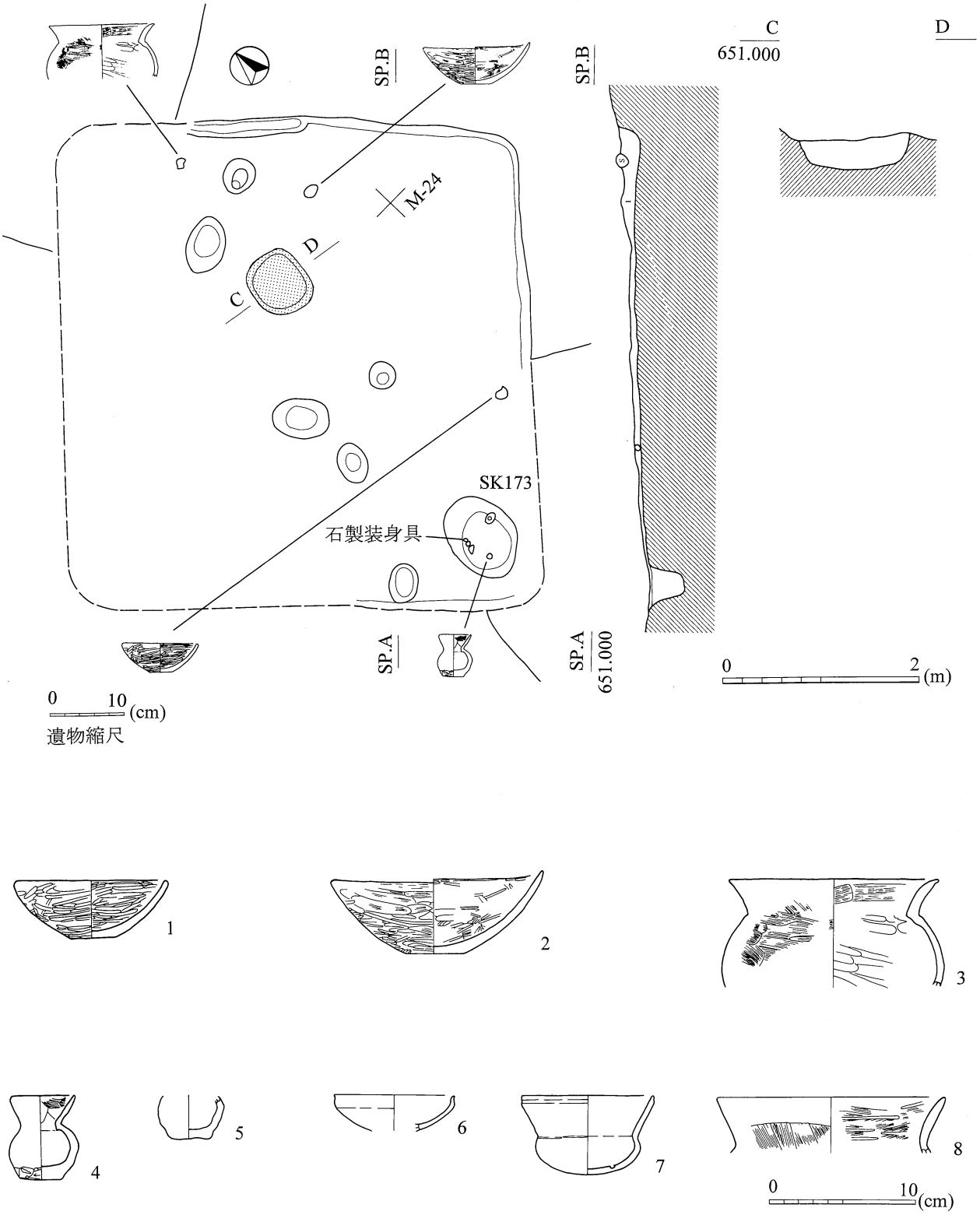
検　出　ローム面で土壌化されたローム質土が認められたので精査したところ、東辺と北辺が検出された。西辺、南辺の立ち上がりは不明瞭であったが、ローム層の土壌化された部分を生活面であったと考え、床面を想定した。

構　造　北西―南東に軸を持つ7.4×7.2ｍの方形。住居跡内から小土坑が12基検出されたが、そのうち方





第181図　竪穴住居跡　ＳＢ09・出土土器



第182図　竪穴住居跡　ＳＢ10・土器出土状況・出土土器

形に組める４基が主柱穴で、のこりは補助的な柱穴か。炉やカマドは検出できなかった。

切り合い　ＳＫ142・143に切られる。

遺　物　１～４土師器。３高坏。

時　期　古墳時代後期前半

ＳＢ10（第182図）　　位置　Ｉ－Ｍ－18・23

検　出　遺物包含層はほとんど残存しておらず、地山ローム層直上で黒褐色土の落ち込みを認めた。複数の遺構が切り合っていることが推測されたので、土層観察用のベルトと先行トレンチを設定し掘り下げ、北辺および東辺では立ち上がりが検出された。

構　造　北東―南西に軸を持つ現存5.0×4.8ｍの方形。床面は地山の礫を含んだローム層が露出している。北壁の一部で周溝が検出されたが、全周するかどうかは分からない。住居跡内から小土坑が６基検出されたが柱穴か不明。中央よりやや北側に焼土の集中する部分が炉と考えられる。また、南隅にＳＫ173が検出され、当初別時期の遺構とも考えたが、土層が極めて似ていること、ハケ目調整の土師器甕、手捏土器がＳＫ173とＳＢ10からともに出土しているので、本住居跡に含めることとする。

切り合い　縄文時代ＳＢ12・16を切る。

遺　物　１～８土師器。１・２内外面ミガキ調整が施された坏。３・８ハケ目調整の甕。４・５手捏土器。６器台。７小形丸底壺。外面に籾痕がつく。４ＳＫ173直上の床と同じレベルから、５～８とさらに滑石製垂飾（第203図23）がＳＫ173から出土。

時　期　古墳時代前期後葉か

ＳＢ11（第183図）　　位置　Ｉ－Ｍ－22

検　出　ローム直上のローム漸移層の遺構検出面で茶褐色土の落ち込みが認められた。中央部には黒色土の落ち込み（ＳＫ157）が見られたので、ＳＫ157を切るようにトレンチを設定し掘り下げた。そして、ＳＢ11の立ち上がりとＳＫ157に切られていることが確認された。

構　造　北西―南東に軸を持つ5.6×5.6ｍの方形。立ち上がりは全周したが、南西側の残りが良くなかった。住居内から小土坑が12基検出されたが、明確な柱穴は不明。カマドや炉は検出されなかった。

切り合い　ＳＫ157に切られる。

遺　物　１～５土師器。１器台か。３～５甕。３ケズリ調整。４・５ハケ目調整が施される。

時　期　古墳時代前期後葉か

(3)　古代

ＳＢ03（第184図）　　位置　Ｉ－Ｓ－11・16

検　出　尾根から斜面にかかる地点に位置し、尾根側（北側）はローム層に黒褐色土の落ち込みが認められた。遺構の立ち上がりを確認するために土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、立ち上がりと床面と考えられる堅緻な平坦面が検出された。

構　造　東西に長軸を持つ3.3×2.8ｍの略方形。住居跡の西半分は堅緻面が検出できたが、東半分は不明瞭であった。柱穴と思われる小土坑が１基検出されたほか、北東隅（カマドの北側）にこの住居跡に伴う径80～90cmの土坑があった。東辺中央に焼土を伴うくぼみがあり、カマドの掘り方か。

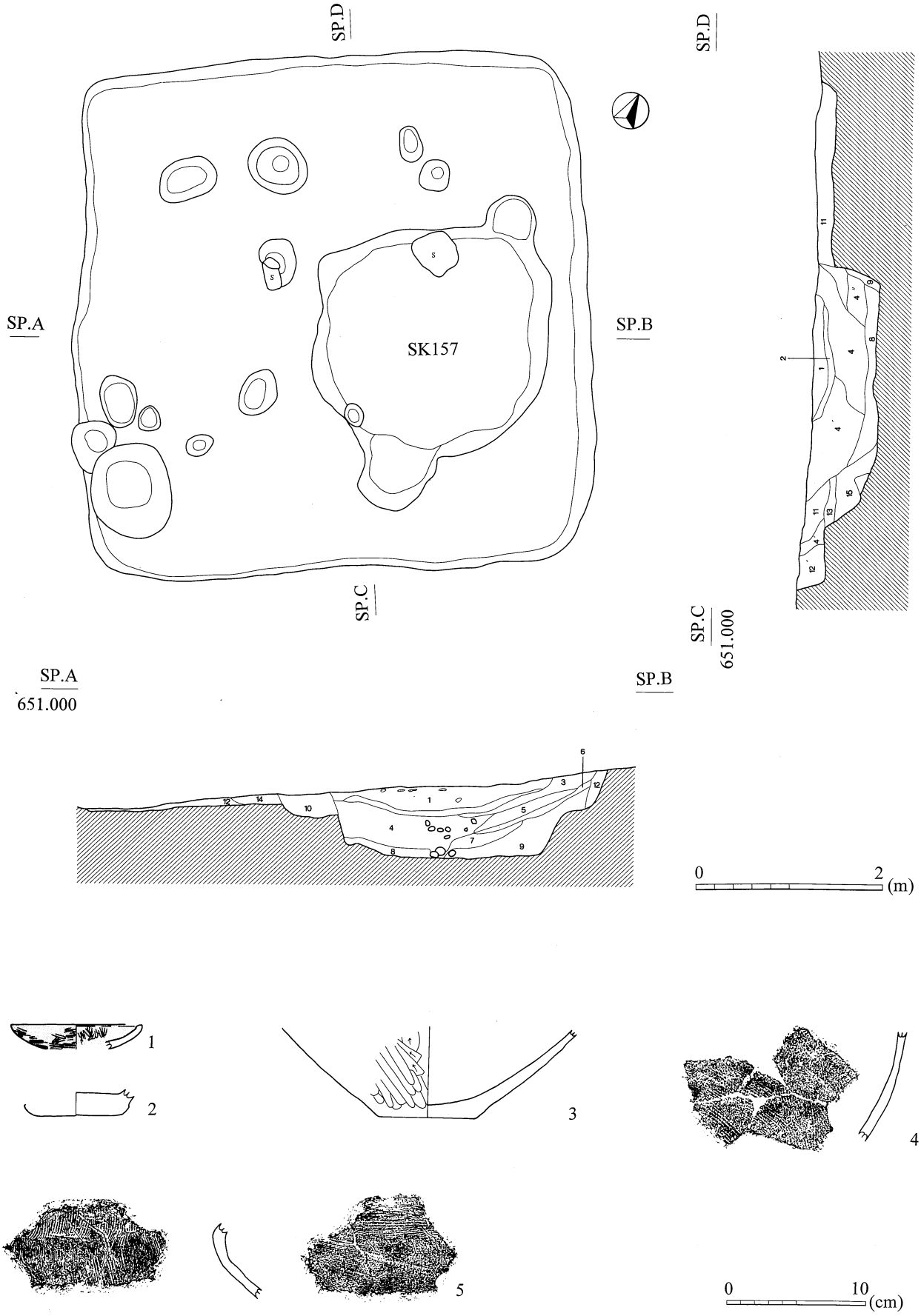
切り合い　古代以降の土坑ＳＫ004・006に切られている。

遺　物　１・２土師器坏。３黒色土器坏。４土師器椀。５・７土師器甕。５ロクロ成形。７縦位にハケ目を施す。６・８須恵器。６突帯付四耳壺。

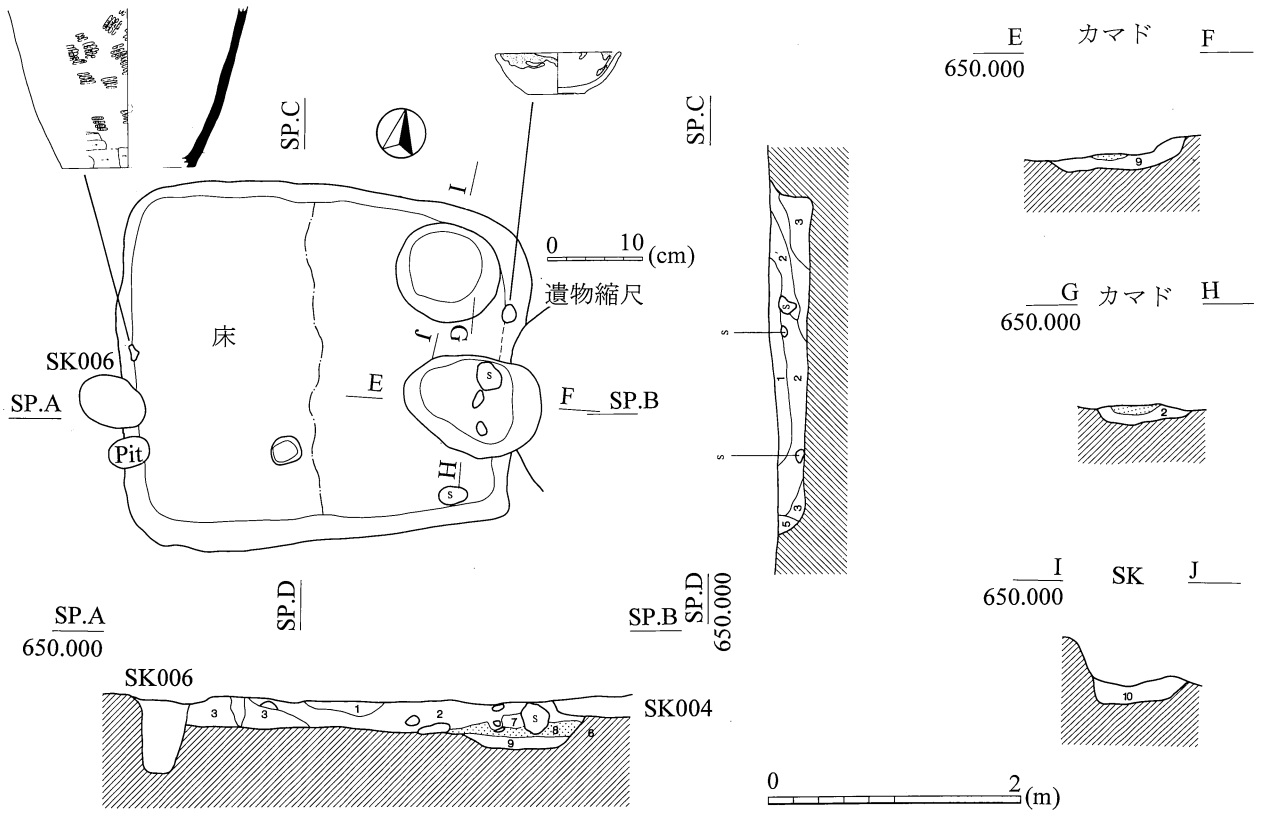
時　期　平安時代前半　佐久編年８・９段階前後か

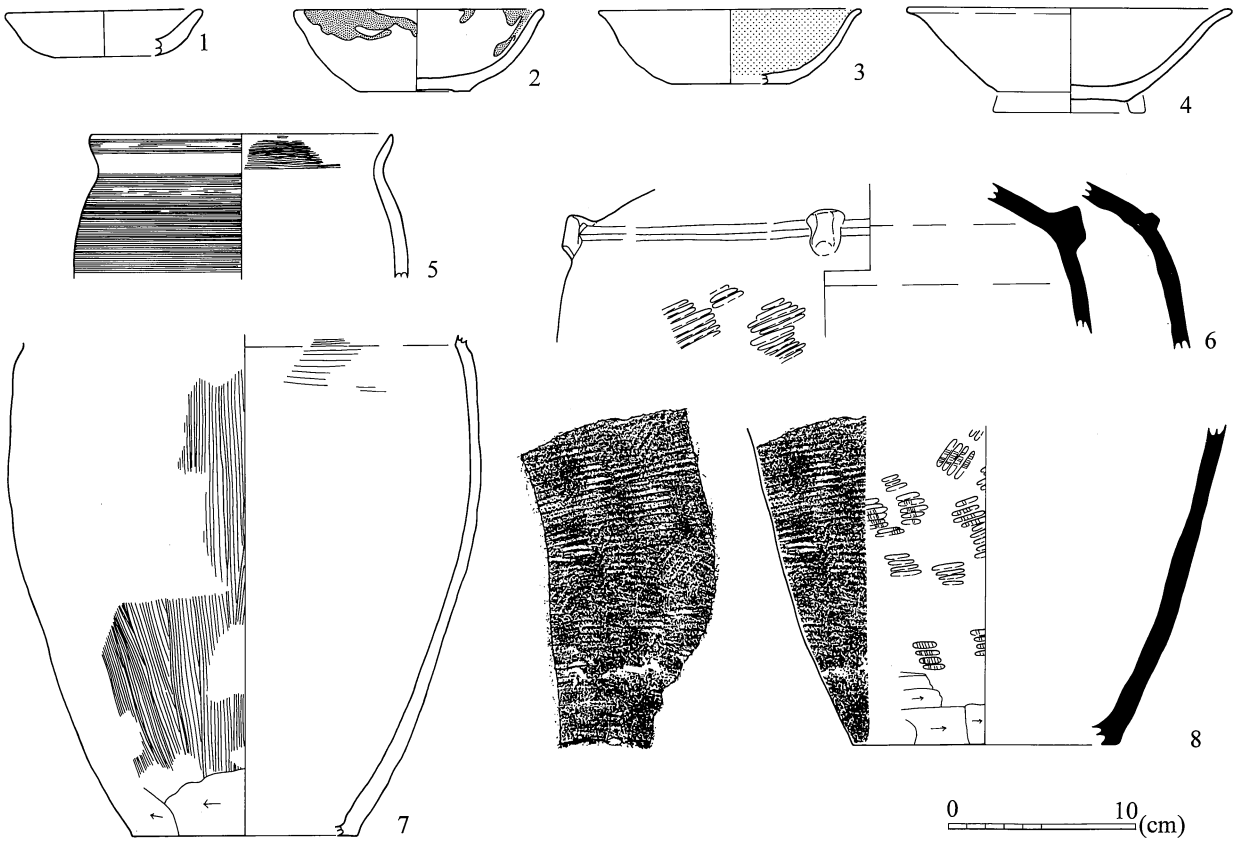
ＳＢ04（第185・186図）　　位置　Ｉ－Ｓ－17

検　出　尾根から下った谷部に位置していて、精査時には全く平面形は分からず、床面が露出して、住居

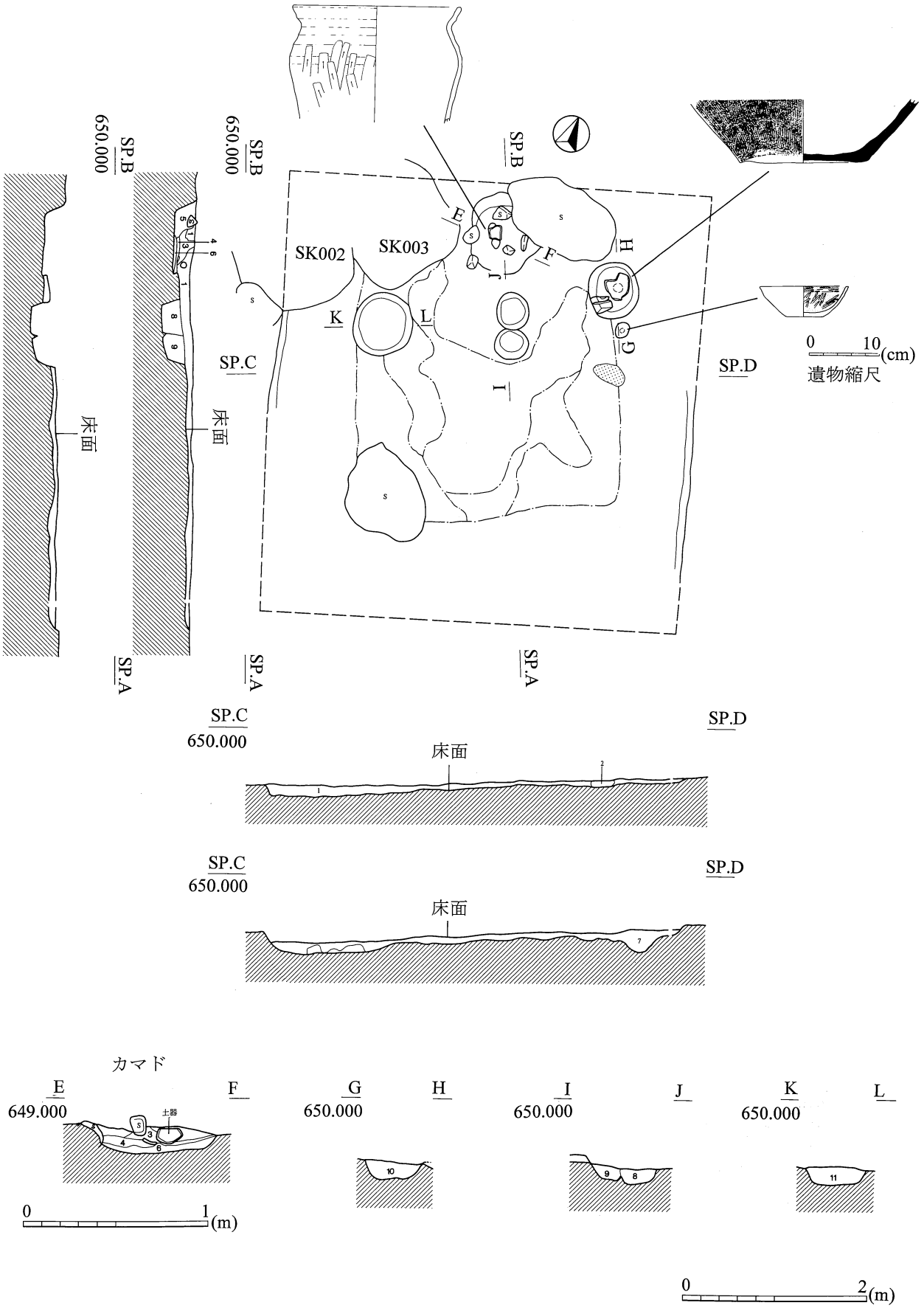


第183図　竪穴住居跡　ＳＢ11・出土土器

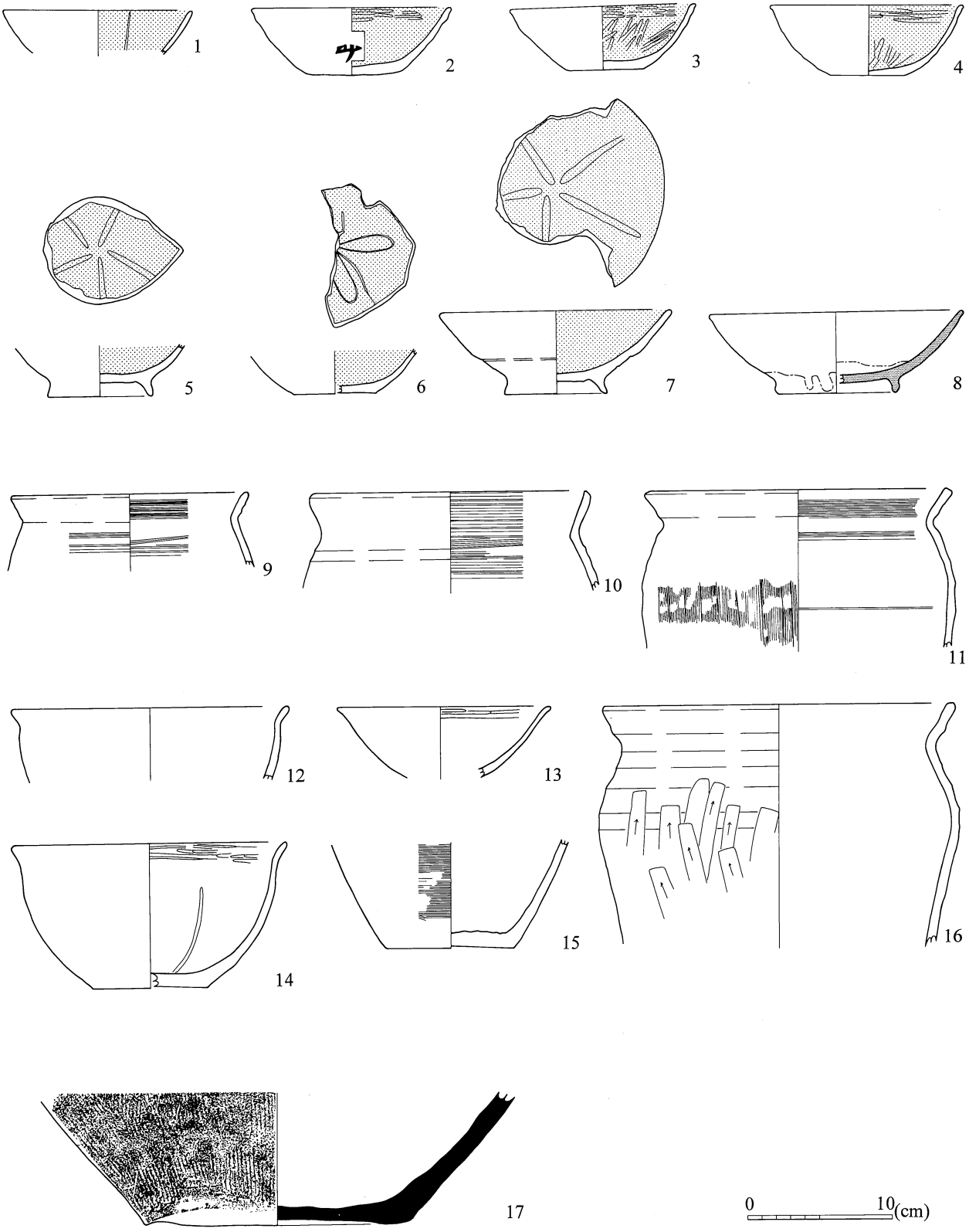




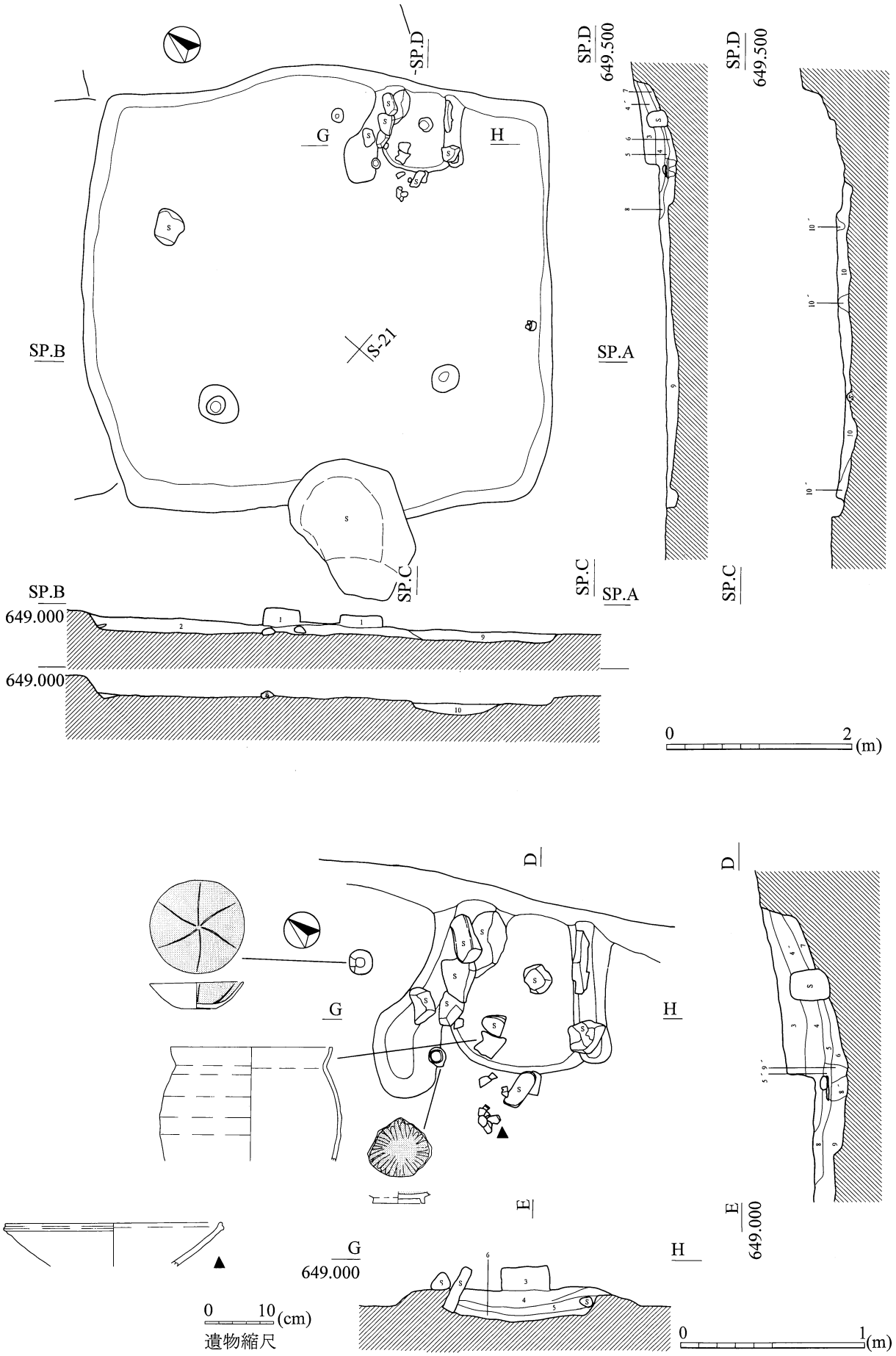
第184図　竪穴住居跡　ＳＢ03出土状況・出土土器



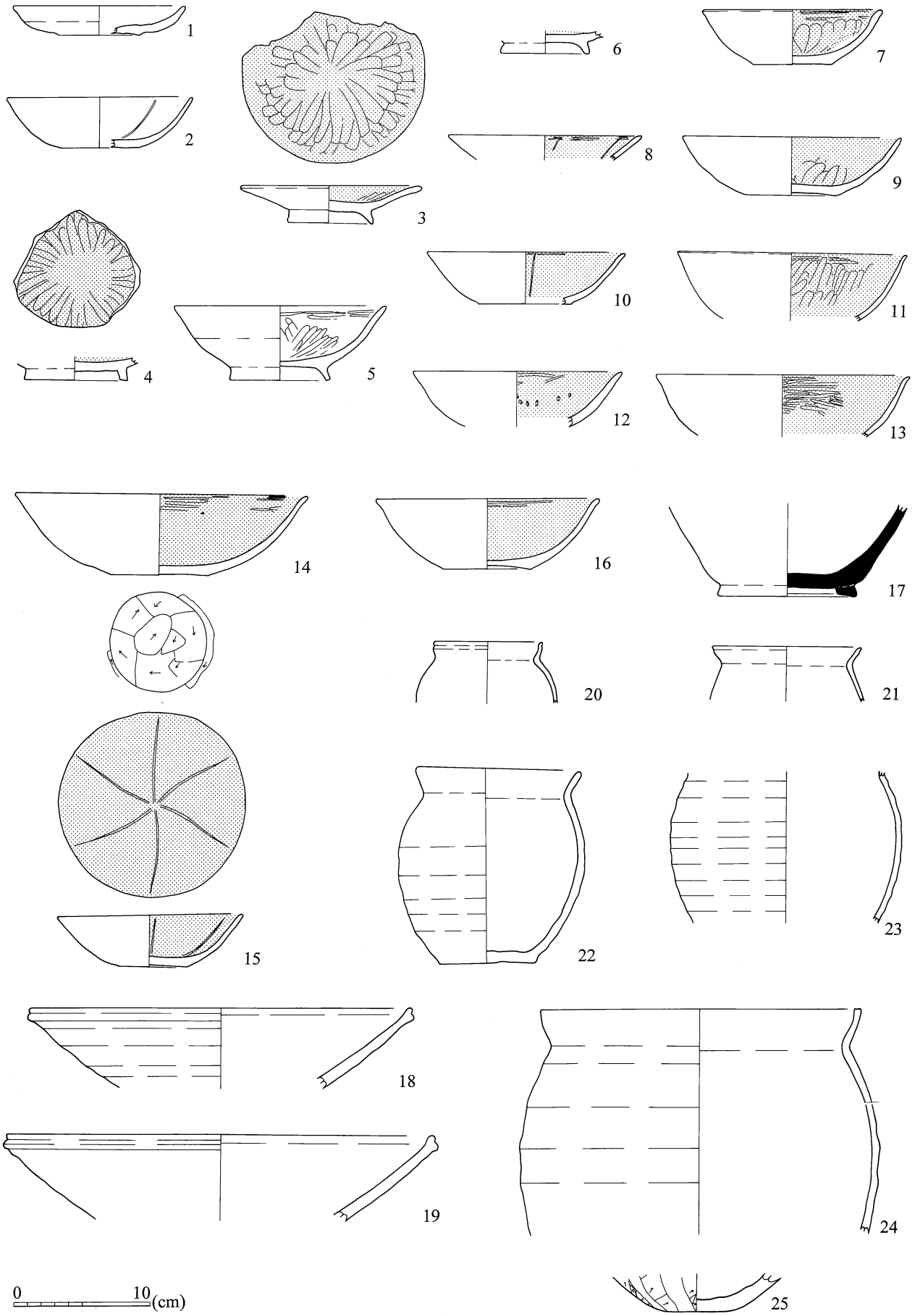
第185図　竪穴住居跡　ＳＢ04・土器出土状況



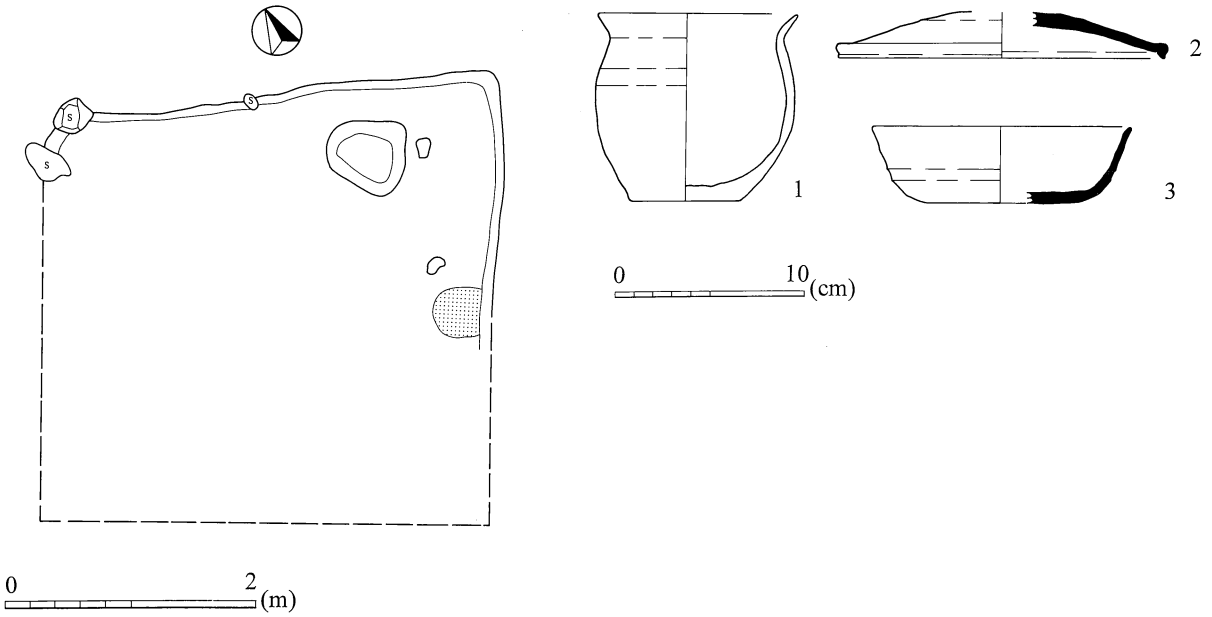
第186図　竪穴住居跡　ＳＢ04出土土器



第187図　竪穴住居跡　ＳＢ06・カマド



第188図　竪穴住居跡　ＳＢ06出土土器



第189図　竪穴住居跡　ＳＢ08・出土土器

跡と判明した。僅かに残った浅い覆土を土層観察用ベルトとして残し、床面の広がりから住居跡の範囲を確認した。硬化した床面の東端と西端からわずかに立ち上がりも検出され、それぞれ東壁、西壁と考えた。

構　造　遺存状況が極めて悪いが、おそらく軸を北西―南東に持ち、現存4.6×3.7ｍの長方形を呈すると思われる。立ち上がりは東辺と北辺をわずかに検出できた。床面は住居跡中央に非常に堅緻な黒色土の貼床（ローム粒を含む）となり、その外側にロームブロックを含むやや堅い黒色土の貼床が広がり、さらにその外側は黒色土が混じるローム面が床面になっている。中央部北側に径50～60㎝の小土坑があるが、土器片を含んでいたり、深さも10～20㎝と浅く、柱穴かどうかは分からない。北壁中央に焼土の広がり、火床の掘り込み、土器がまとまって検出され、カマドの掘り方と推定される。

切り合い　中世のＳＫ002・003に切られる。

遺　物　１～７黒色土器。２～４・６坏。５・７椀。２墨書がある。８灰釉陶器椀。９～17土師器。９～11・15・16ロクロ成形の甕。12・14鉢。13坏。17須恵器甕。

時　期　平安時代前半　佐久編年10段階前後

ＳＢ06（第187・188図）　　位置　Ｉ－Ｓ－16・Ｒ－20

検　出　中世ＳＢ01・02調査後、それらの貼床の下位に、遺構の覆土が認められたので、土層観察用に先行トレンチを設定した。土層による観察では、ＳＢ01・ＳＢ02の重複部を含めて北側では比較的明瞭に平面形が確認できたが、南側は谷部の黒色土堆積部分に隣接して土坑が構築されていたこともあり、平面形はつかみにくかった。

構　造　北西―南東に軸を持つ現存で5.0×4.7ｍの略方形。立ち上がりは北側で検出できたが、南側はわずかに土層観察で認められただけである。床面は土層断面では認められたが、面的な掘り下げではわからなかった。西側半分で検出された小土坑２基が柱穴と思われる。東隅に板状ないし円礫を構築材とするカマドが検出された。カマド中央部には支脚に用いられたと思われる石があり、その周辺は被熱のため著し

く赤化している。

切り合い　中世ＳＢ01・02に切られる。

遺　物　１～５土師器。１皿、２坏、３盤、５椀。１は回転ナデ調整のみだが、他はミガキ調整が施されている。６～16黒色土器。７～16坏か。14底部に手持ちヘラケズリ調整が施される。17須恵器壺か。20～25土師器。20～24ロクロ成形の甕。18・19盤。鉄製紡錘車（第207図２）出土。

時　期　平安時代前半　佐久編年９ないし10段階か

ＳＢ08（第189図）　　位置　Ｉ－Ｒ－23

検　出　ローム層直上の遺構検出面で、ローム層がやや土壌化した明褐色土の落ち込みが認められ、遺物も精査の段階で出土したので、土層観察用のベルトを残し、掘り下げたところ、焼土集中や立ち上がりも検出されたので、住居跡と判断した。

構　造　立ち上がりは北辺が検出され、残存部分からの推定だが、軸を北東―南西に持つ現存で3.6×3.6ｍの方形。明確な柱穴や床面は分からなかったが、東辺の中央に焼土集中部分があり、カマドの痕跡と思われる。

遺　物　１ロクロ成形の土師器甕。２須恵器蓋。３坏。

時　期　平安時代初頭か

ＳＢ18（第190図）　　位置　Ｉ－Ｘ－３

検　出　遺物包含層（Ⅲ層）内を精査したところⅢ層よりさらに暗い黒褐色土の方形の落ち込みと焼土が認められ、いくつかの遺構の切り合いも推測されたので、これらの遺構にかかるように軸にそって十字に土層観察用の先行トレンチを設定した。この先行トレンチで硬い貼床が検出され、竪穴住居跡と判断した。

構　造　北西―南東に軸を持つ3.8×3.3ｍの長方形。中央を中心に堅緻な貼床が存在する。この住居跡に伴うと思われる土坑が４基（Pit１～４）検出され、Pit２～４には土器が多く含まれていた。柱穴と考えられる略方形の小土坑も３基検出されている。いずれも底部が堅くしまっている。北辺の東よりにカマドが検出されたが、中世ＳＫ175に切られていて、ほとんど原形を留めておらず、火床が確認されたのみである。検出された石はカマドの構築材と考えられる。この付近からも土器が多く出土している。

切り合い　中世ＳＢ20・ＳＫ174・175・193に切られる。

遺　物　１須恵器坏。２土師器坏、「十十万」の墨書あり。Pit２より出土。３土師器甕、刻書あり。４～７・14黒色土器。４・６・７坏。５・14盤。８～13土師器甕。８ロクロ成形。11縦位ヘラケズリ調整が施される。

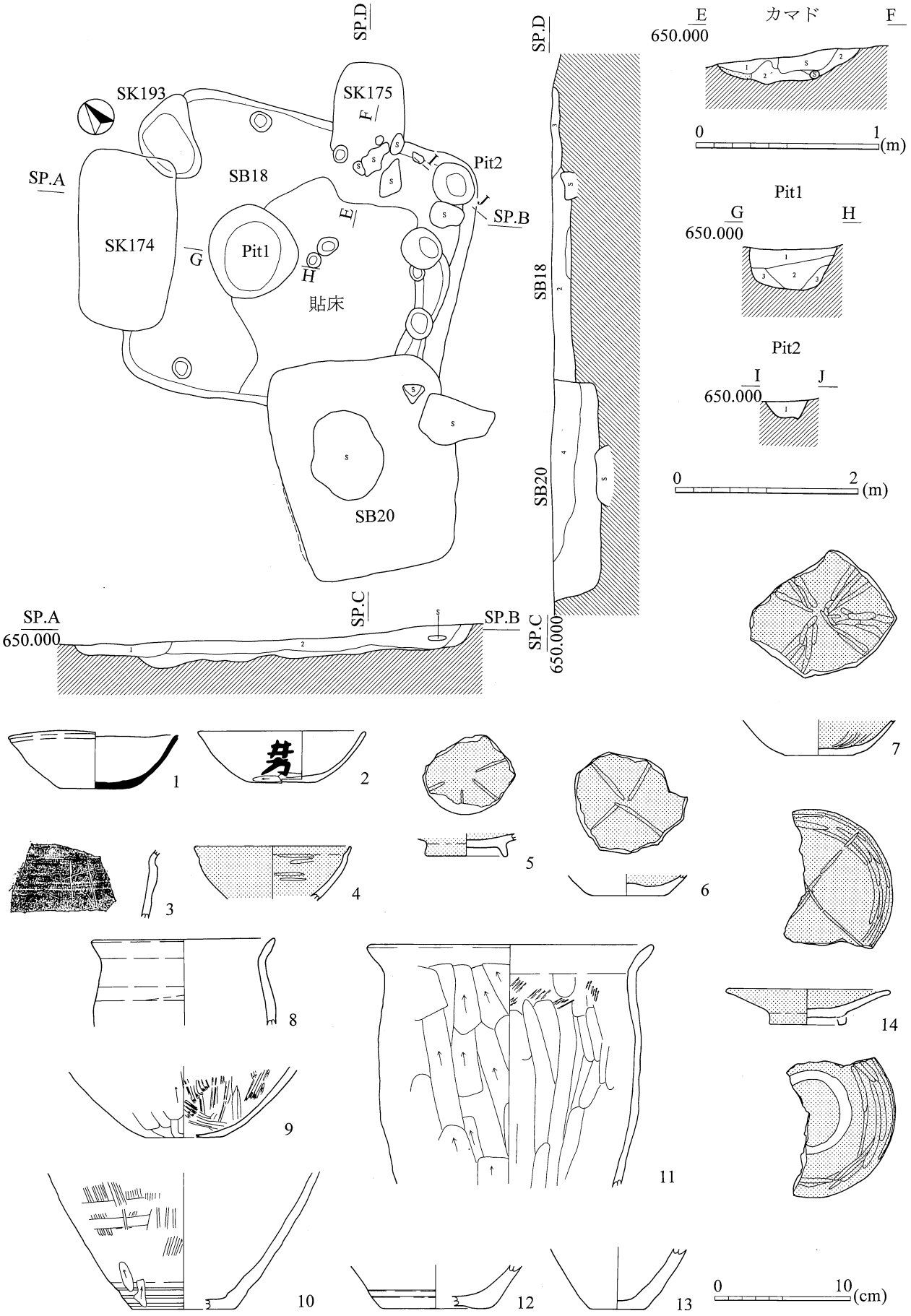
時　期　平安時代前半　佐久編年９段階

(4)　中世

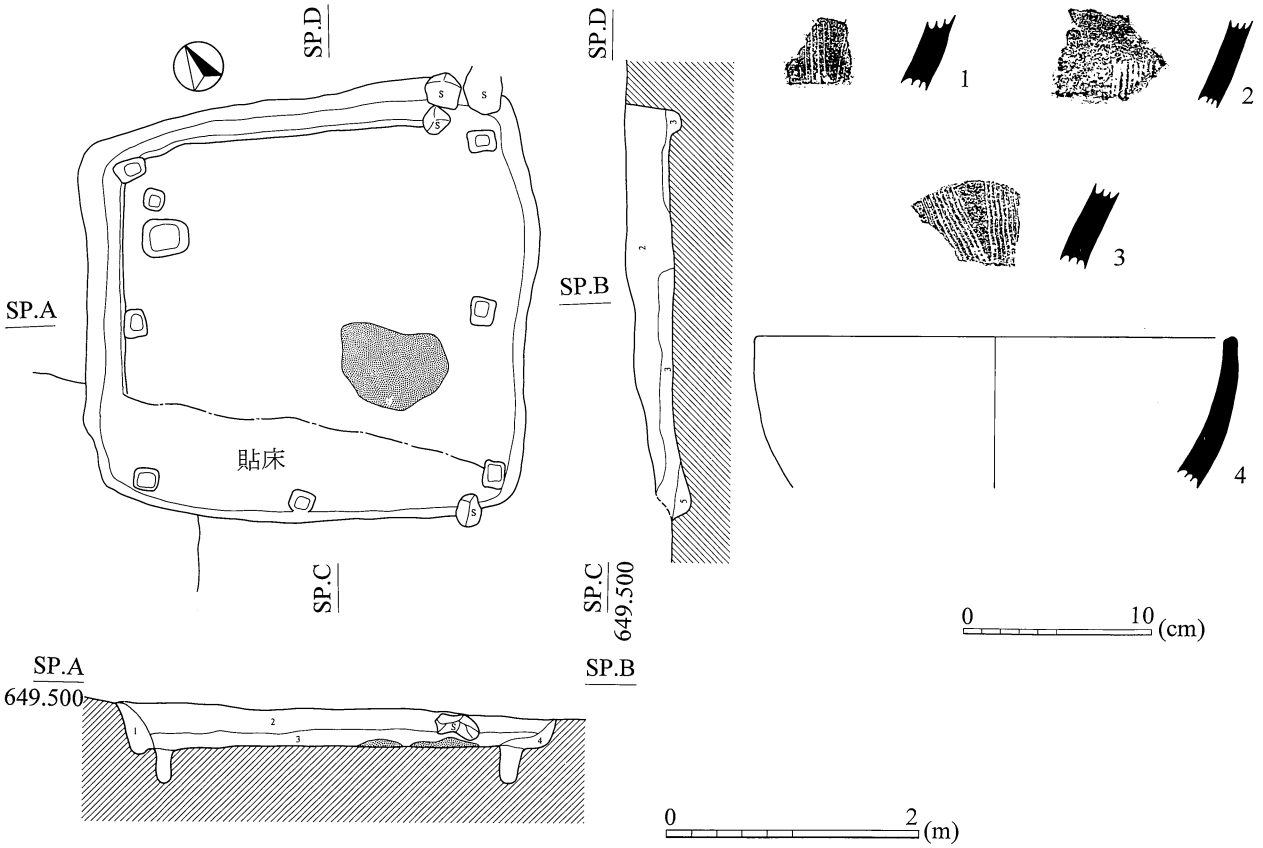
ＳＢ01（第191図）　　位置　Ｉ－Ｓ－16

検　出　ローム層上面で黒褐色土の落ち込みが認められたので、精査して平面形を確認した。

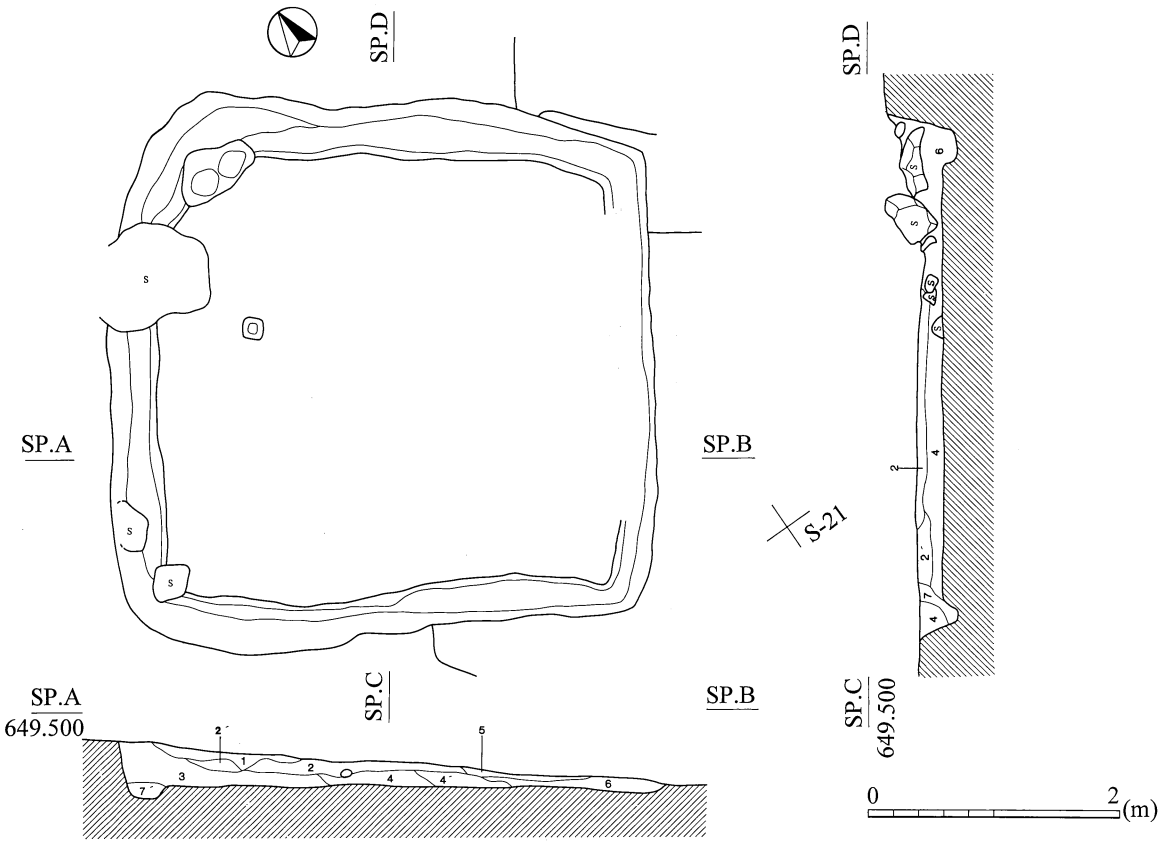
構　造　北西―南東に軸を持つ3.5×3.3ｍの方形。立ち上がりは明瞭でほぼ垂直。床面は平坦で、南西にやや傾斜している。北辺ならびに西辺に周溝がめぐっている。柱穴は各辺に沿って７基検出されている。また、建物跡中央部よりやや南東よりに60×80cmの範囲で灰層の広がりを床面直上で検出した。炉やカマドはないが、柱穴の存在や規模から建物跡と考えた。以下炉やカマドがないが、一定以上の規模、平坦な



第190図　竪穴住居跡　ＳＢ18・出土土器



第191図　竪穴建物跡　ＳＢ01・出土土器



第192図　竪穴建物跡　ＳＢ02

床面、立ち上がり、柱穴や周溝を有する遺構は建物跡とした。

切り合い　古代ＳＢ06、中世ＳＢ02を切る。

遺　物　１～４須恵質擂鉢。ウマの歯（上顎の第１切歯）も出土。

時　期　中世前半

ＳＢ02（第192図）　　位置　Ｉ－Ｒ－20

検　出　ＳＢ01と同じ。

構　造　北東―南西に軸を持つ4.4×4.4ｍの方形。立ち上がりは明瞭でほぼ垂直。床面はほぼ平坦で、古代ＳＢ06との重複部は貼床である。ＳＢ06との重複部以外は周溝がめぐる。柱穴と考えられる小土坑は１基しか検出されなかった。炉やカマドは検出されていない。

切り合い　古代ＳＢ06を切り、中世ＳＢ01に切られる。

遺　物　銅銭紹聖元宝（第208図１）

時　期　中世前半

ＳＢ17（第193図）　　位置　Ｉ－Ｘ－３

検　出　遺物包含層の暗褐色土層（Ⅲ層）中を精査で掘り下げていたところ、コーナーを伴うⅢ層よりさらに暗いロームを含む黒褐色土層の落ち込みが認められた。よって、先行トレンチを設定し土層を観察したところ、床面とＳＫ197に切られていることが確認された。

構　造　北西―南東に軸を持つ3.2×2.6ｍの長方形。立ち上がりは南辺だけ検出できたのだが、緩やかな傾斜である。床面は平坦だが、ローム層が露出している。炉やカマドは検出されていない。

切り合い　ＳＫ197に切られる。ＳＢ19との切り合い関係は不明。

遺　物　１土師器皿。２須恵質擂鉢。銅銭淳化元宝（第208図２）、景徳元宝（同３）が出土。

時　期　中世前半

ＳＢ19（第193図）　　位置　Ｉ－Ｘ－３

検　出　中世ＳＢ17を調査区境まで完掘し、さらに掘り下げたところ、ＳＢ17のものとして不自然な北辺と東隅のコーナーが検出された。平面形からＳＢ17とは別遺構と考えた。

構　造　北西―南東に軸を持つ現存で2.3×2.3ｍの方形。立ち上がりは緩やかである。床面は比較的平坦。柱穴は北辺に１基あるが、この遺構に伴うか不明。

切り合い　ＳＢ17との切り合い関係不明。

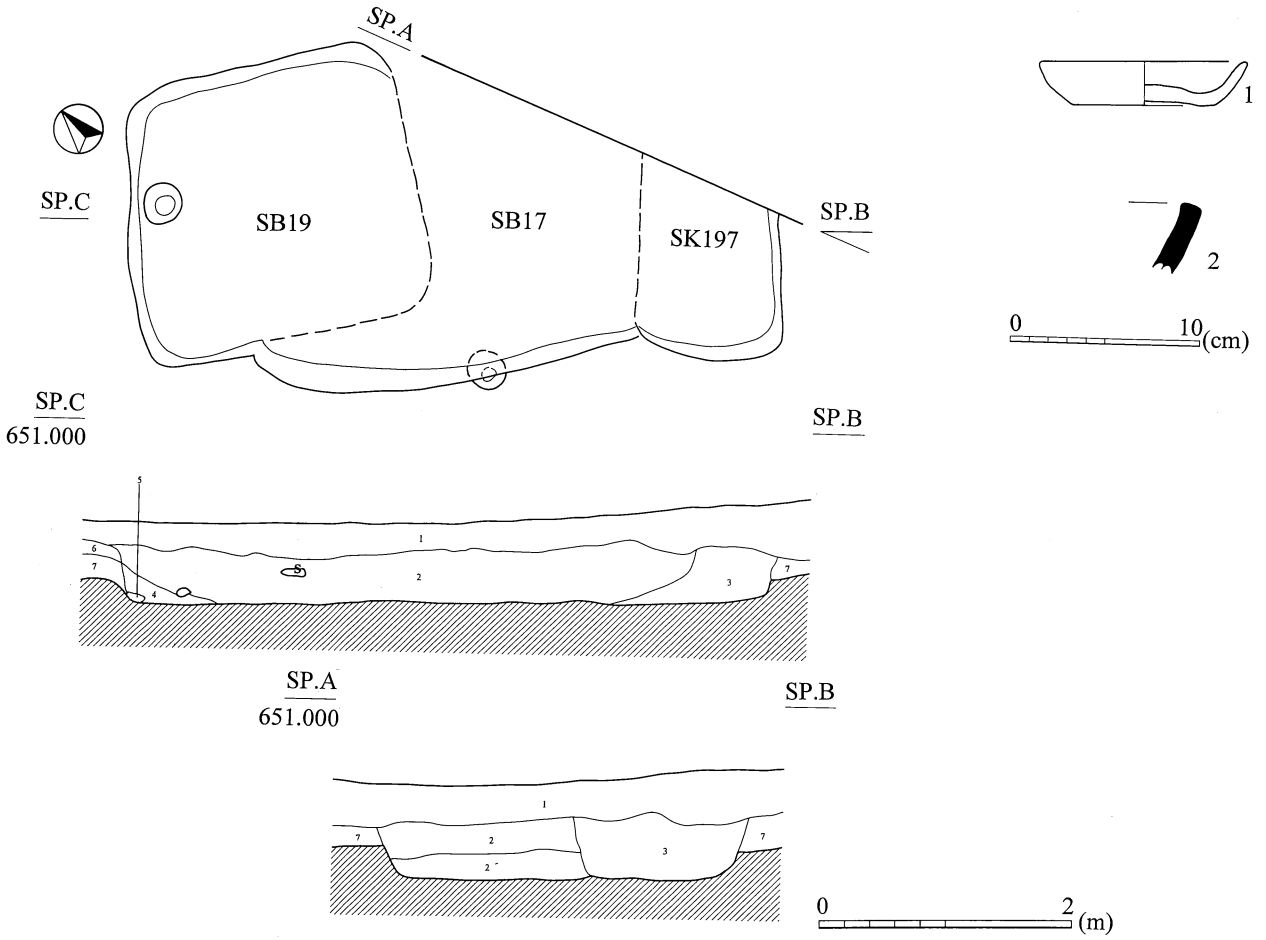
遺　物　図化できるようなものはない。

時　期　ＳＢ17と似た時期の中世前半か

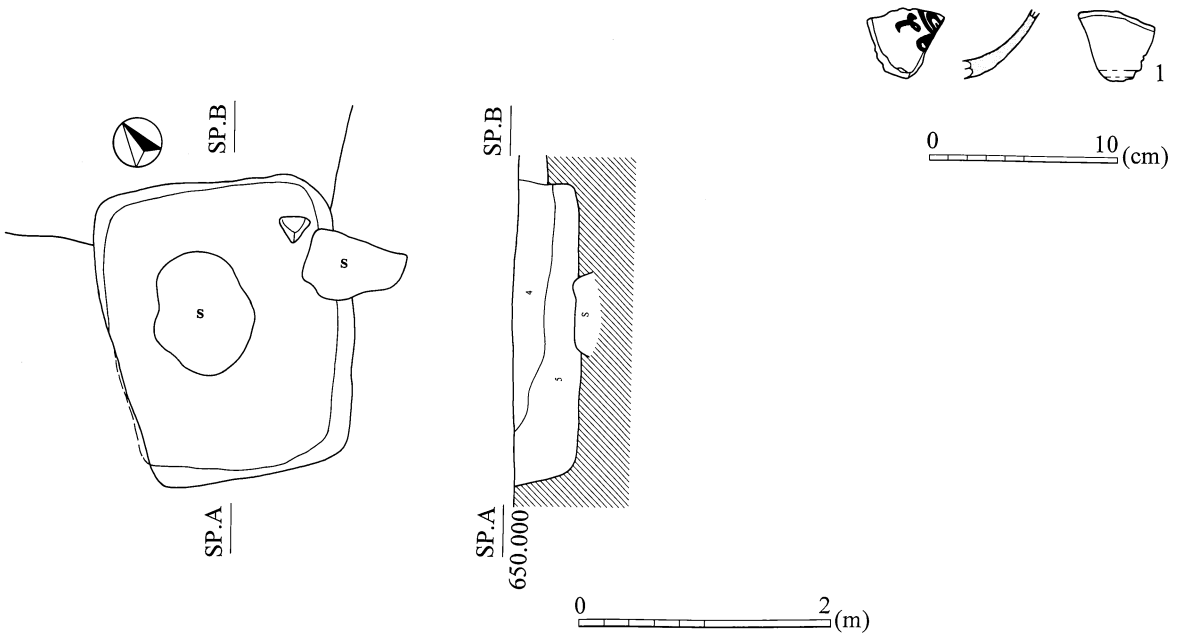
ＳＢ20（第194図）　　位置　Ｉ－Ｘ－３・８

検　出　遺物包含層の暗褐色土（Ⅲ層）を掘り下げ精査していたところ、ロームブロックが混じった暗褐色土が認められた。検出された平面形から古代ＳＢ20を切ることが視認されたので、両者を切るように土層観察用の先行トレンチを設定した。土層観察からＳＢ20を切ることが確認され、さらに床面と立ち上がりを検出した。

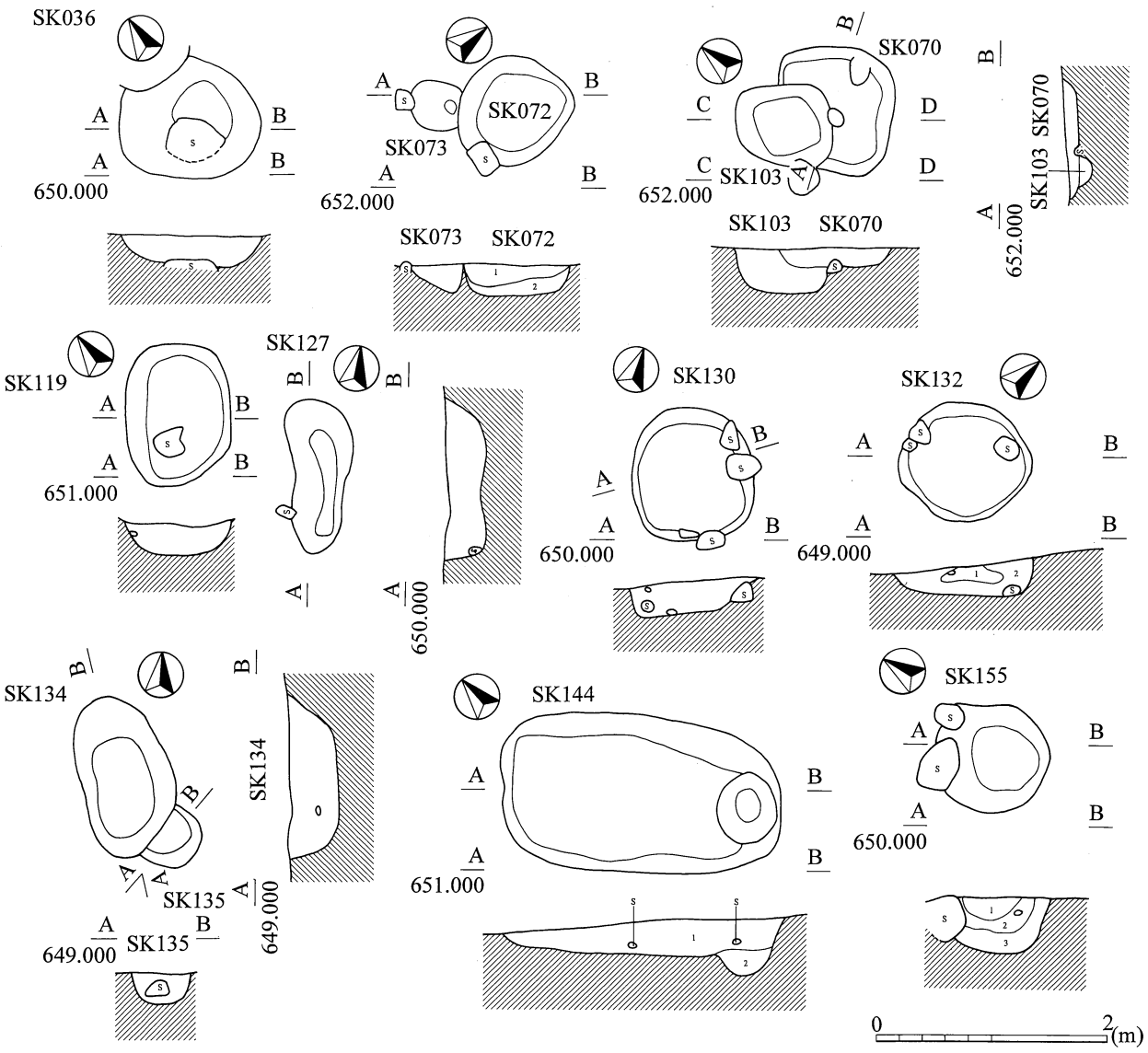
構　造　北東―南西に軸を持つ現存で2.4×1.9ｍの長方形。南辺以外は立ち上がりはオーバーハングしていて、とくに西辺は顕著である。床面は非常に平坦。



第193図　竪穴建物跡　ＳＢ17・19・ＳＢ17出土土器



第194図　竪穴建物跡　ＳＢ20・出土磁器



第195図　縄文時代の土坑

切り合い　ＳＢ20を切る。

遺　物　１龍泉窯系画花文青磁碗。

時　期　中世前半

2　土坑と土器・陶磁器

(1)　縄文時代（遺構図第195図・土器第201図）

ＳＫ036　　位置　Ｉ－Ｓ－11

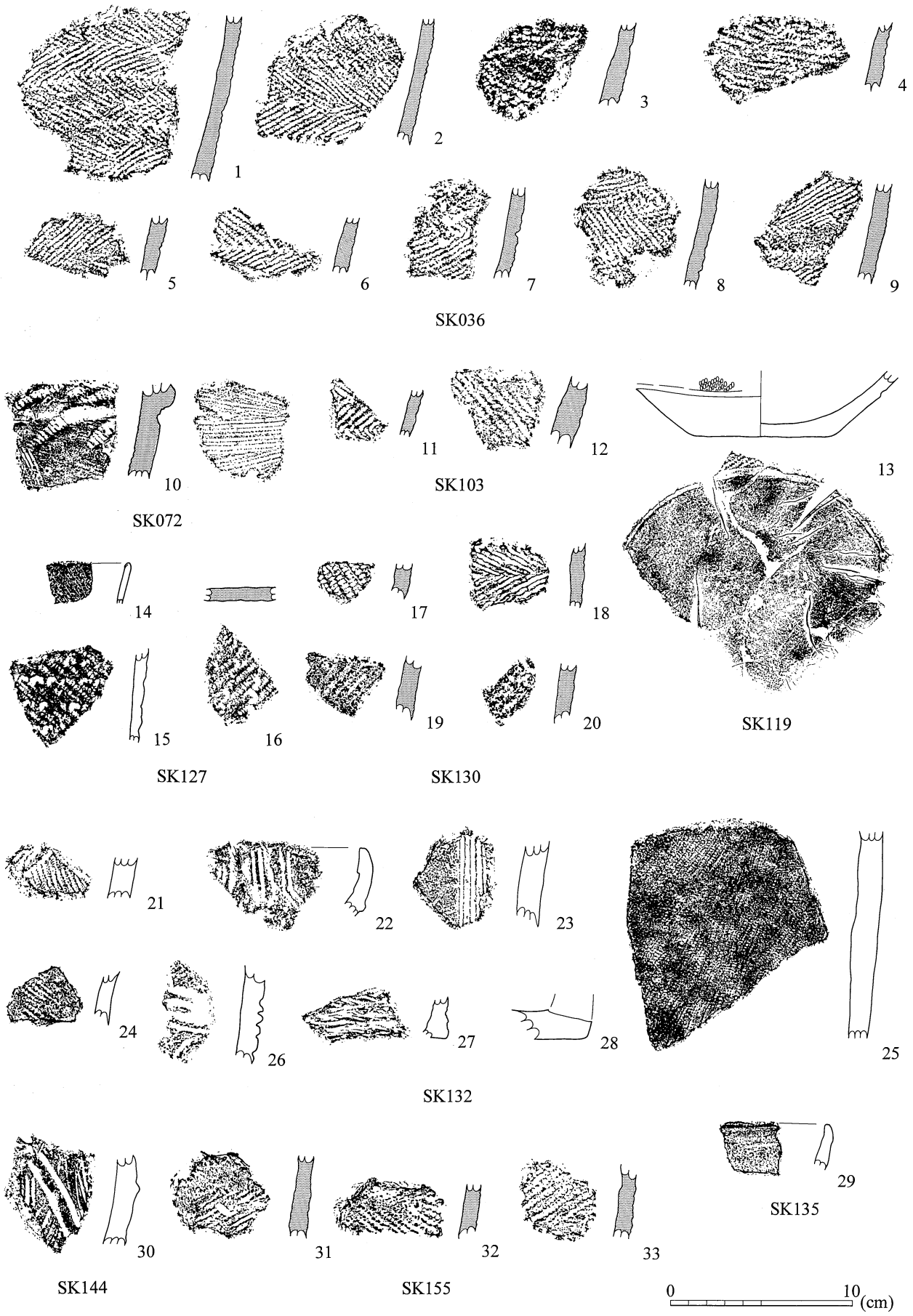
径1.4ｍの不整形な円形。ＳＫ035に切られる。１～９含繊維回転縄文施文。縄文時代前期前葉から中葉。

ＳＫ072　　位置　Ｉ－Ｍ－25

1.0×0.9ｍの不整形な土坑。10含繊維絡条体条痕・圧痕を施す。縄文時代早期末葉。

ＳＫ103　　位置　Ｉ－Ｍ－25

北西―南東に軸を持つ0.8×0.7ｍの略長方形。11・12含繊維回転縄文施文。縄文時代前期前葉から中葉。



第196図　縄文時代の土坑出土土器

ＳＫ119　　位置　Ｉ－Ｒ－９

北東―南西に軸を持つ1.3×0.9ｍの略方形。13磨消縄文土器の底部。縄文時代後期。

ＳＫ127　　位置　Ｉ－Ｒ－13

南北に軸を持つ1.3×0.6ｍの不整形な土坑。14外面に細条線が施される。15ループ文、回転縄文施文。16底部外面に回転縄文施文。縄文時代前期前葉。

ＳＫ130　　位置　Ｉ－Ｒ－13

北西―南東に軸を持つ1.2×1.1ｍの隅丸方形。17～20含繊維回転縄文施文。縄文時代前期前葉から中葉。

ＳＫ132　　位置　Ｉ－Ｒ－11

1.0～1.2ｍのゆがんだ円形。21半截竹管状工具による押し引き、単節縄文ＲＬを横位回転施文。22隆帯貼付、半截竹管状工具による並行沈線施文。23半截竹管による並行沈線文。24・25単節縄文を縦位回転施文。縄文時代中期中葉か。

ＳＫ135　　位置　Ｉ－Ｒ－16

0.4～0.5ｍの略円形。29ナデ調整が施された無文土器。縄文時代後期か。

ＳＫ144　　位置　Ｉ－Ｍ－23

北西―南東に軸を持つ2.4×1.4ｍの略長方形。30隆帯を貼付し、隆帯脇に沈線を施す。縄文時代中期中葉か。

ＳＫ155　　位置　Ｉ－Ｒ－７

北西―南東に軸を持つ1.0×0.9ｍの歪んだ方形。31～32含繊維回転縄文施文。縄文時代前期前葉から中葉。

(2)　古代（遺構図第197図）

ＳＫ019　　位置　Ｉ－Ｓ－７

ほぼ南北に軸を持つ1.2×0.9ｍの略長方形。須恵器壺（第200図１）が出土。

(3)　中世（遺構図第197・198図、土師器・陶磁器第200図）

ＳＫ003　　位置　Ｉ－Ｓ－12・17

北東―南西に軸を持つ１辺1.2ｍの方形。

ＳＫ004　　位置　Ｉ－Ｓ－11ほか

北西―南東に軸を持つ2.2×1.9ｍの隅丸方形。２るつぼ。３無釉陶器のこね鉢か。ほかに図化できなかったが、土師器内耳鍋が出土。

ＳＫ012　　位置　Ｉ－Ｓ－６

ほぼ東西に軸を持つ1.3×0.7ｍの歪んだ楕円形。４古瀬戸鉄釉天目茶碗が出土。

ＳＫ014　　位置　Ｉ－Ｓ－６

北西―南東に軸を持つ0.7×0.6ｍの略方形。５鉄釉碗が出土。

ＳＫ015　　位置　Ｉ－Ｒ－15

北西―南東に軸を持つ2.3×2.2ｍの略方形。６・７土師器皿、図化できなかったが鉄釉碗、るつぼ、無釉陶器片、鉄製品（釘？）が出土。

ＳＫ016　　位置　Ｉ－Ｓ－11

北西―南東に軸を持つ現存0.4×0.3ｍの不整形。銅銭和同開珎（第208図５）出土。土層から中世と考えたが、図化できなかった土師器片は古代のものであり、古代に遡る可能性はある。不明鉄製品も出土。

ＳＫ020　　位置　Ｉ－Ｓ－６

1.3×1.0ｍの歪んだ円形。８土師器皿、砥石（第205図37）が出土。ＳＫ023に切られる。

ＳＫ023　　位置　Ｉ－Ｓ－６

北西―南東に軸を持つ1.7×1.5ｍの略長方形。９・10土師器皿が出土。９内面にススが付着。灯明皿。

ＳＫ026　　位置　Ｉ－Ｓ－11

北東―南西に軸を持つ1.8×1.0ｍの長方形。11土師器皿、12るつぼ、石鉢（第205図46）が出土。

ＳＫ043　　位置　Ｉ－Ｓ－７

径1.5ｍの略円形。13土師器内耳鍋が出土。

ＳＫ060　　位置　Ｉ－Ｒ－15

北西―南東に軸を持つ0.9×0.7ｍの楕円形。銅銭至和元宝（第208図４）が出土。

ＳＫ094・ＳＫ116　　位置　Ｉ－Ｓ－１

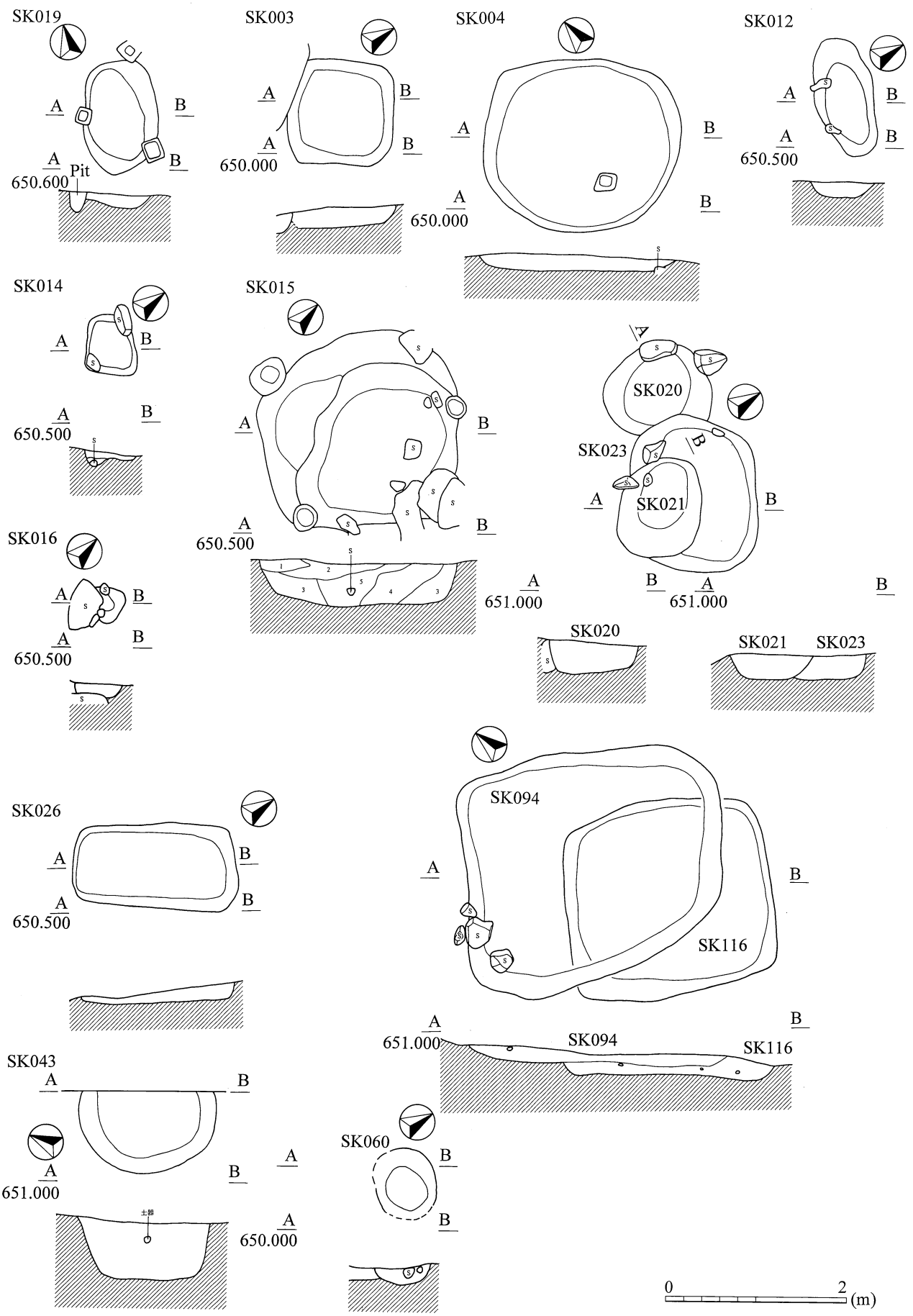
ＳＫ094は2.8×2.6ｍ、ＳＫ116は2.8×2.6ｍを測り、ともに北西―南東に軸を持つ略方形。土層観察からはＳＫ116をＳＫ094が切っていることが分かっているが、実際の発掘調査では一括して遺物が取り上げられている。14内面黒色処理の土師器皿が出土。

ＳＫ095　　位置　Ｉ－Ｒ－20

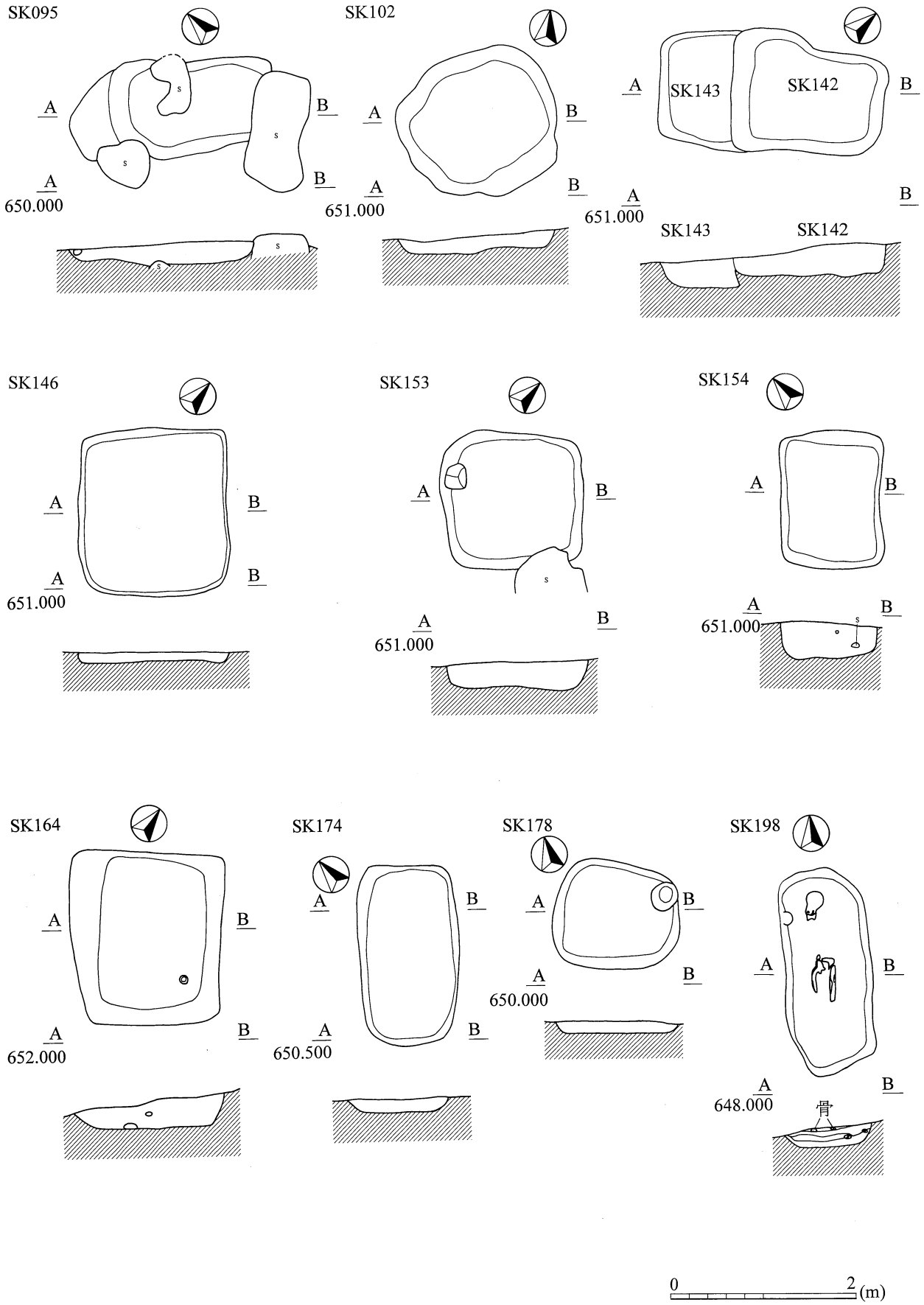
北西―南東に軸を持つ2.0×1.1ｍの略長方形。銅銭開元通宝（第208図６）が出土。

ＳＫ102　　位置　Ｉ－Ｍ－14

北東―南西に軸を持つ1.8×1.7ｍの略長方形。15土師器皿が出土。



第197図　古代・中世の土坑(1)



第198図　古代・中世の土坑(2)

ＳＫ143　　位置　Ｉ－Ｒ－３

北東―南西に軸を持つ1.3×0.8ｍの長方形。16土師器皿が出土。ＳＫ142に切られる。

ＳＫ146　　位置　Ｉ－Ｍ－23

北西―南東に軸を持つ1.8×1.6ｍの長方形。17土師器皿、陶器片が出土。

ＳＫ153　　位置　Ｉ－Ｍ－23

北西―南東に軸を持つ1.5×1.5ｍの方形。18土師器皿、青磁片が出土。

ＳＫ164　　位置　Ｉ－Ｍ－19

北西―南東に軸を持つ2.0×1.7ｍの長方形。19土師器皿が出土。

ＳＫ174　　位置　Ｉ－Ｘ－３

北東―南西に軸を持つ1.9×1.1ｍの長方形。20土師器皿？が出土。

ＳＫ198　　位置　Ｉ－Ｗ－20

ほぼ南北に軸を持つ2.3×0.9ｍの長方形。土師器片と人骨（頭蓋骨と大腿骨）が出土。茂原信生氏による人骨の所見は下記のとおり。時期を決定する遺物を欠くが、土層から古代ないし中世に属すると思われる。

ＳＫ198出土人骨：保存状態は非常に悪く、各骨の表面は脱落しており形態の詳細は観察できない。

頭蓋骨では頭蓋冠の一部が残っている。左右の側頭骨錐体、頭頂部などが確認できる。厚さは普通である。性別、年齢は不明である。四肢骨は残っているが特定できるようなものはない。

歯の表面はあれている。上顎の右の第１・第２大臼歯、左は第１小臼歯から第１大臼歯までの５本、下顎骨は右第１・第２小臼歯と第２大臼歯（あるいは第３大臼歯）、左が犬歯から第１大臼歯までの７本で、合計12本である。

第１・第２大臼歯は象牙質の露出はごく軽度である。さほどの高齢ではなくせいぜい壮年程度であろう。歯の大きさからは性別は判断できない。

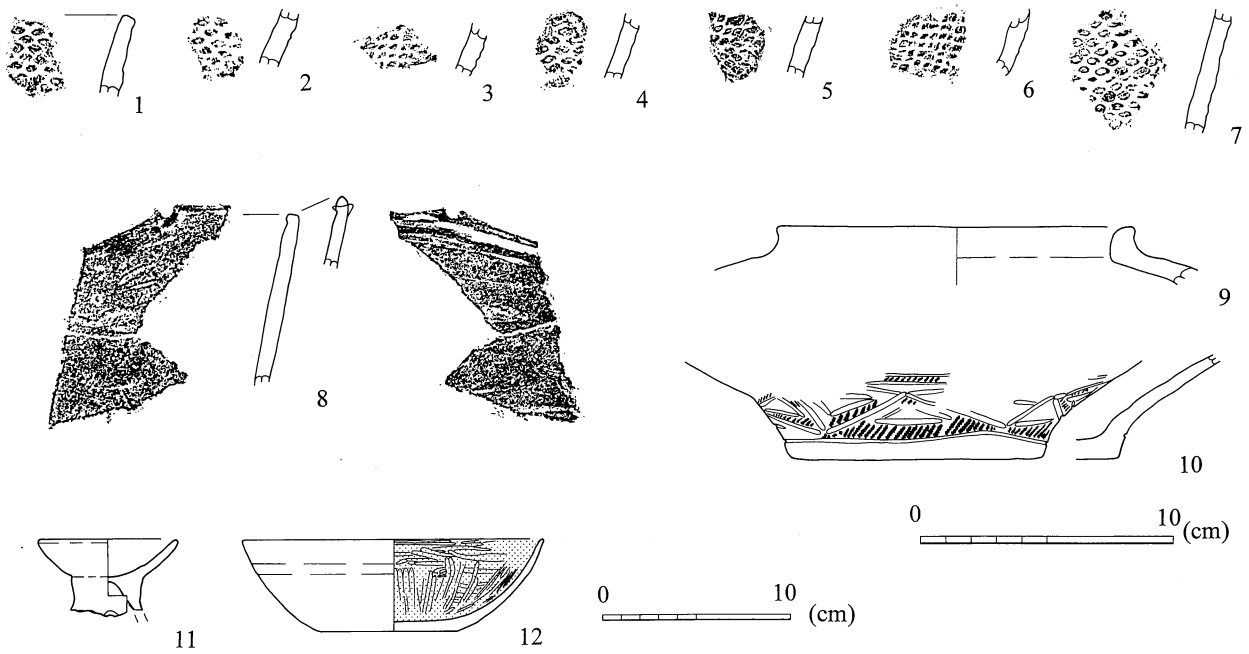
３　溝・流路と土器・陶磁器

ＳＤ01（遺構図第172図、土器第199図）　位置　Ｉ－Ｗ－６・７ほか

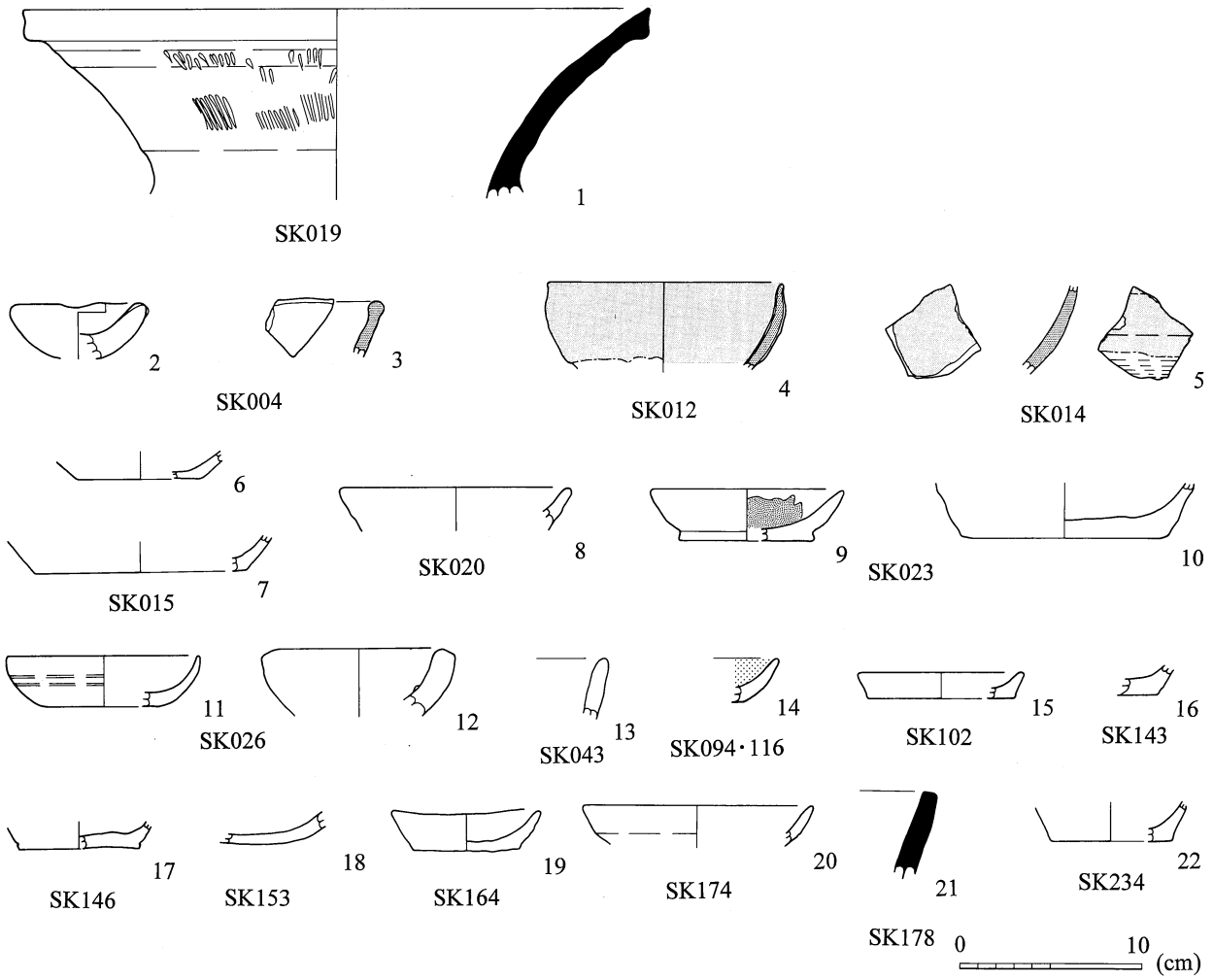
桜畑遺跡のほぼ中央に北東から南西に向かってほぼ等高線にそって走っている埋没自然流路。縄文時代の遺物を中心に、古墳時代や古代の遺物も散見される。１～10縄文土器。１～７縄文時代早期の横位密接施文の押型文土器。細久保式。８緩い波状口縁。波頂部に刻みを持つ。内外面丁寧なナデないしミガキ調整が施される。後期か。９穿孔はないが、器形から前期末の浅鉢形土器か。10縄文ＬＲ回転施文の磨消縄文。縄文時代後期前葉堀之内２式。これら縄文土器に伴うと思われる打製石斧（第204図27・30）、凹石（第206図49）が出土。11古墳時代の土師器器台。12平安時代の黒色土器。

ＳＤ02（遺構図第172図）　　位置　Ｉ－Ｌ－20ほか

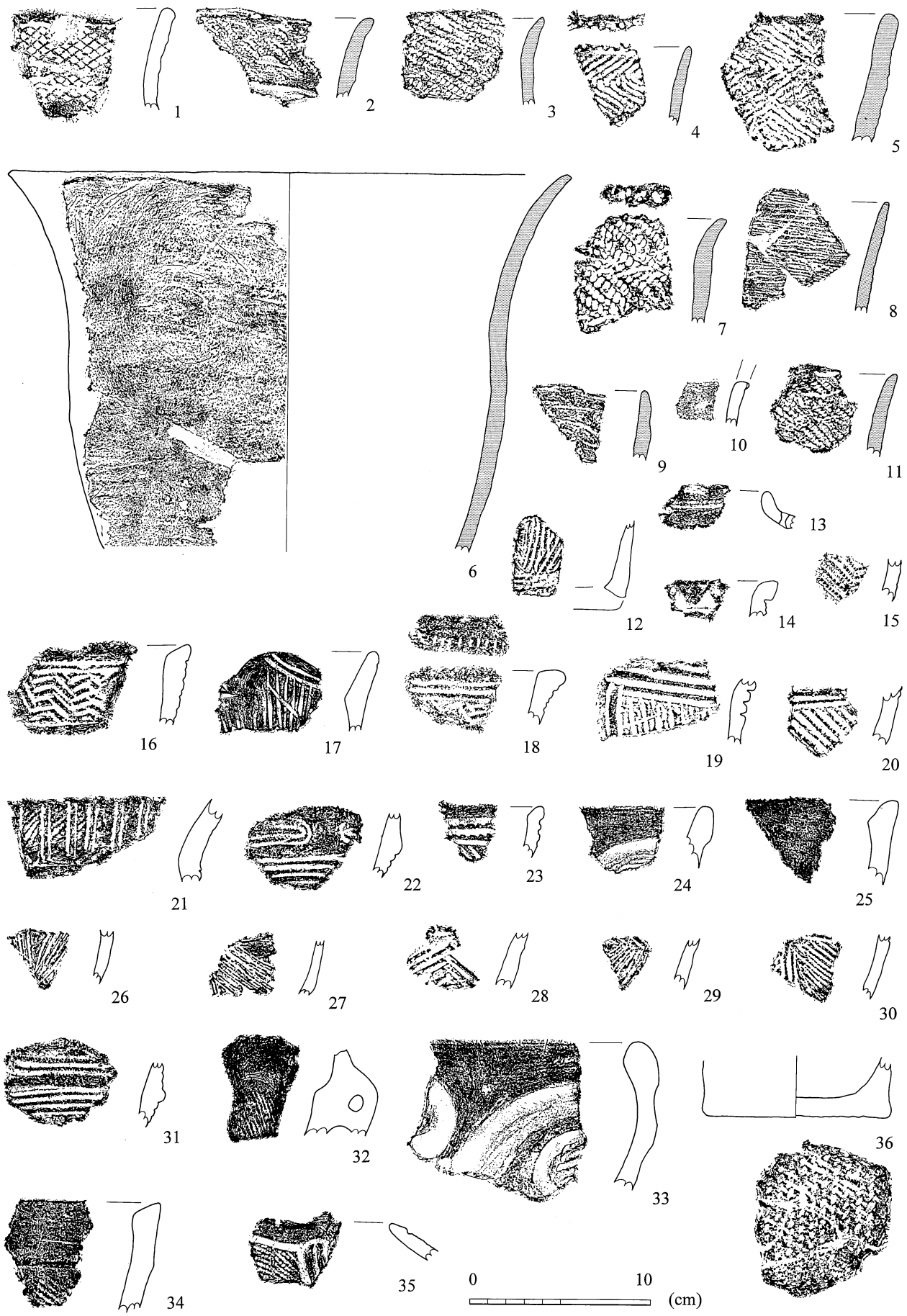
とくに図化できるような遺物はない。調査区の西隅に位置し北から南へ向かって走っている自然流路。



第199図　溝ＳＤ01出土土器



第200図　古代・中世の土坑出土土器・陶磁器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
10
(cm)

第201図　縄文土器

4　遺構に伴わない土器・陶磁器

(1)　縄文時代（第201図）

縄文時代早期から後期前葉の土器が出土。

１横位密接施文の格子目押型文。「立野式」の中では新しい部類。早期前葉末。

２～15縄文時代前期。２～５・７・13胎土に繊維を含む回転縄文施文。前期前葉から中葉。７縄文原体で刻んでいる。６・９無文土器だが胎土に繊維を含む。８撚糸文？胎土に繊維を含む。これらも前期前葉から中葉か。10半截竹管状工具による連続刺突文。12櫛歯状工具縦位条線文。諸磯ｃ式。13内外面ともにミガキ調整が施された有孔浅鉢。14ヘラ状工具による三角形陰刻文。15結節浮線文。10・12～15は諸磯ｃ式とその前後の前期末。

16～34縄文時代中期。16～20半竹沈線の区画文内に短斜行沈線、格子目文などを充填。21縄文地に半竹沈線文を施す。中期前葉。24・32～34中期後葉。

35・36後期。35注口土器か。後期前葉。36網代底。

(2)　古墳時代以降（第202図）

１～４古墳時代。１・２いずれもハケ目調整。１二重口縁の土師器壺。２土師器壺ないし甕。３須恵器蓋。４土師器器台。

５～10古代。５・10土師器坏、６黒色土器椀、７～９須恵器坏、11土師器甕。

12～44古代末から中世。12～26土師器皿、15・16静止糸切底、これ以外は回転糸切底でとくに23・26右回転。それ以外は左回転もしくは回転方向不明のもの。31・32は土器片を円形に成形し？器面に焼成後の小さな未貫通の回転穿孔痕が散見される。用途不明。33～37須恵質擂鉢。珠洲系。38・39土師器（酸化炎焼成）だが、古代の土師器にはあまり見かけない器形をしているので、当該期に属するか。40土師器内耳鍋。41～44龍泉窯系青磁碗。42無文碗。41・43・44ヘラケズリ成形の蓮弁文碗。

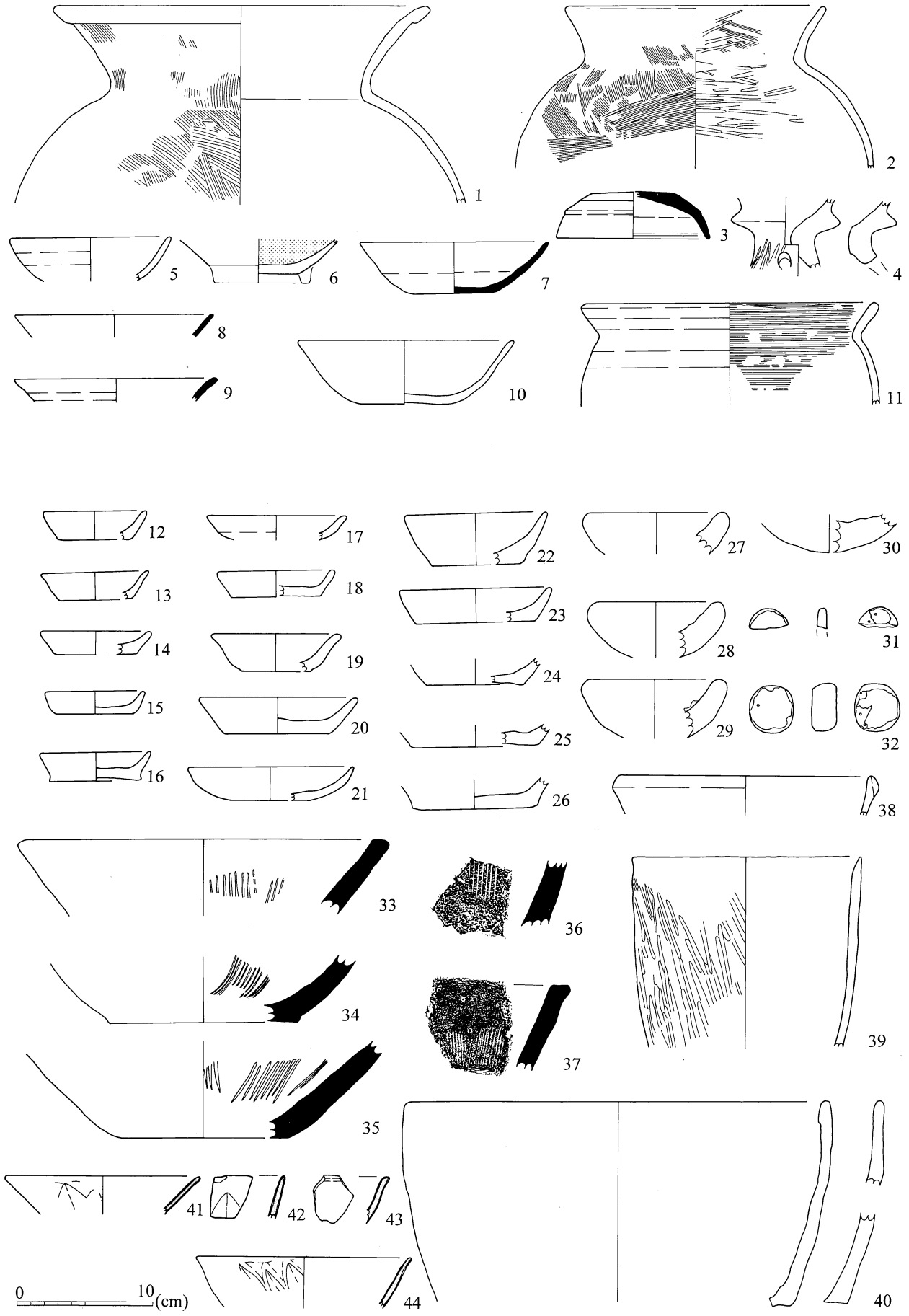
5　石器（第203～206図）

１～23小型の剥片を素材とする石器。黒曜石製が多い。１～14石鏃。１・12有茎式。３珪質頁岩だが、それ以外は黒曜石製。15～17石錐。いずれも黒曜石製。18・19石匙。18粘板岩製。19珪質頁岩製。20微細な剥離が連続する剥片。21剥離が連続する剥片。22平面形が弧を描き、扁平な石器？。装身具か。類例を見ない。23上端に穿孔があり、体部には並行した沈線が施される。滑石製垂飾。小型精製土師器や手捏土器が埋納されていた古墳時代の住居ＳＢ10内土坑ＳＫ173で共伴。

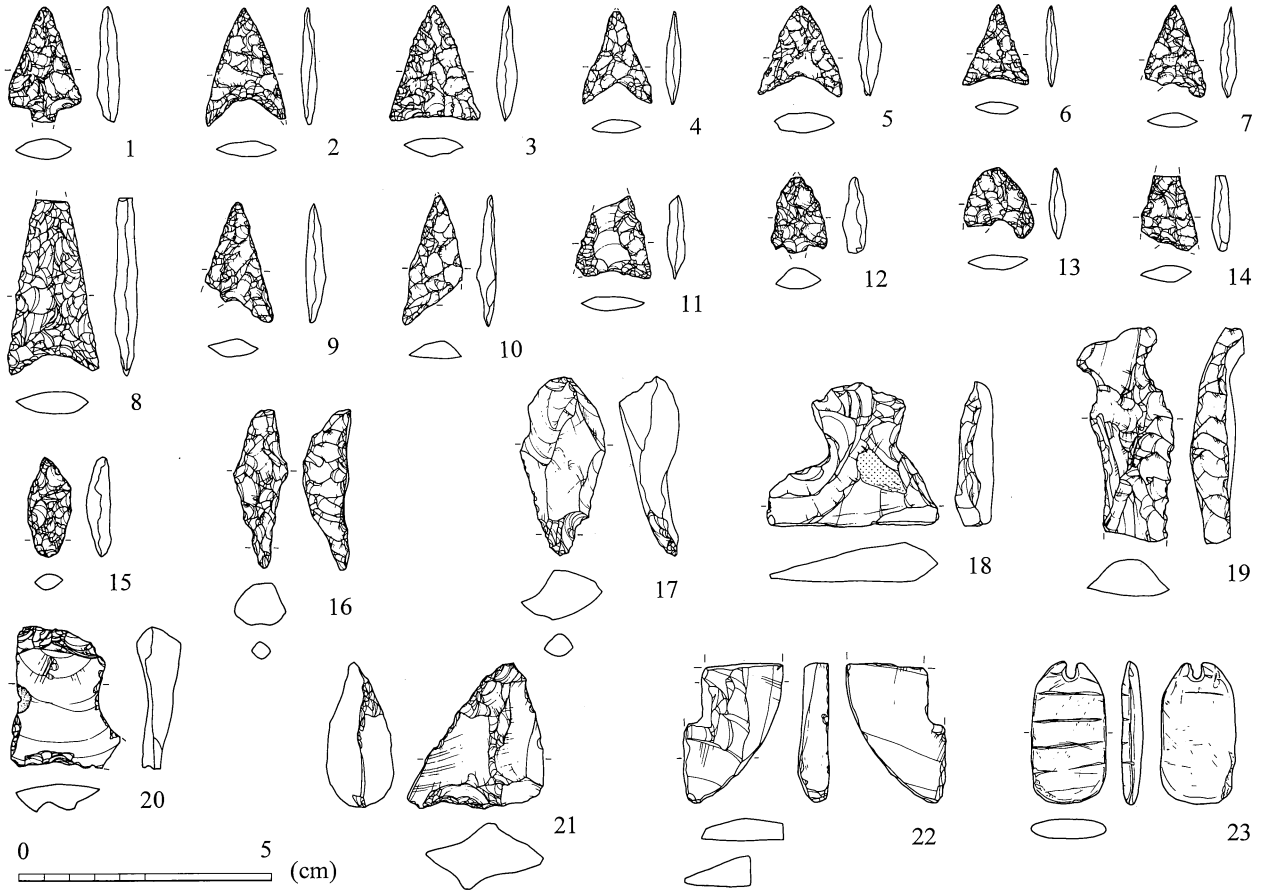
24～33大型の剥片素材を調整した石器。千枚岩質粘板岩が多い。24～32打製石斧。26千枚岩構造が著しくない粘板岩だが、それ以外は片理構造がはっきりした千枚岩質粘板岩製。33ガラス質安山岩製のスクレイパー。

34～53礫素材の石器。34緑泥片岩製磨製石斧。35～44砥石。硬質の凝灰岩が多いが、37安山岩製、40砂岩製。45粘板岩製の硯。46軽石（多孔質流紋岩・浮石）製の小型の石鉢。中世ＳＫ026から出土。47磨石、48・49凹石でいずれも安山岩製。50多孔質の黒色安山岩製の五輪塔空風輪。51・52多孔質安山岩製の石鉢。53石皿。安山岩製。

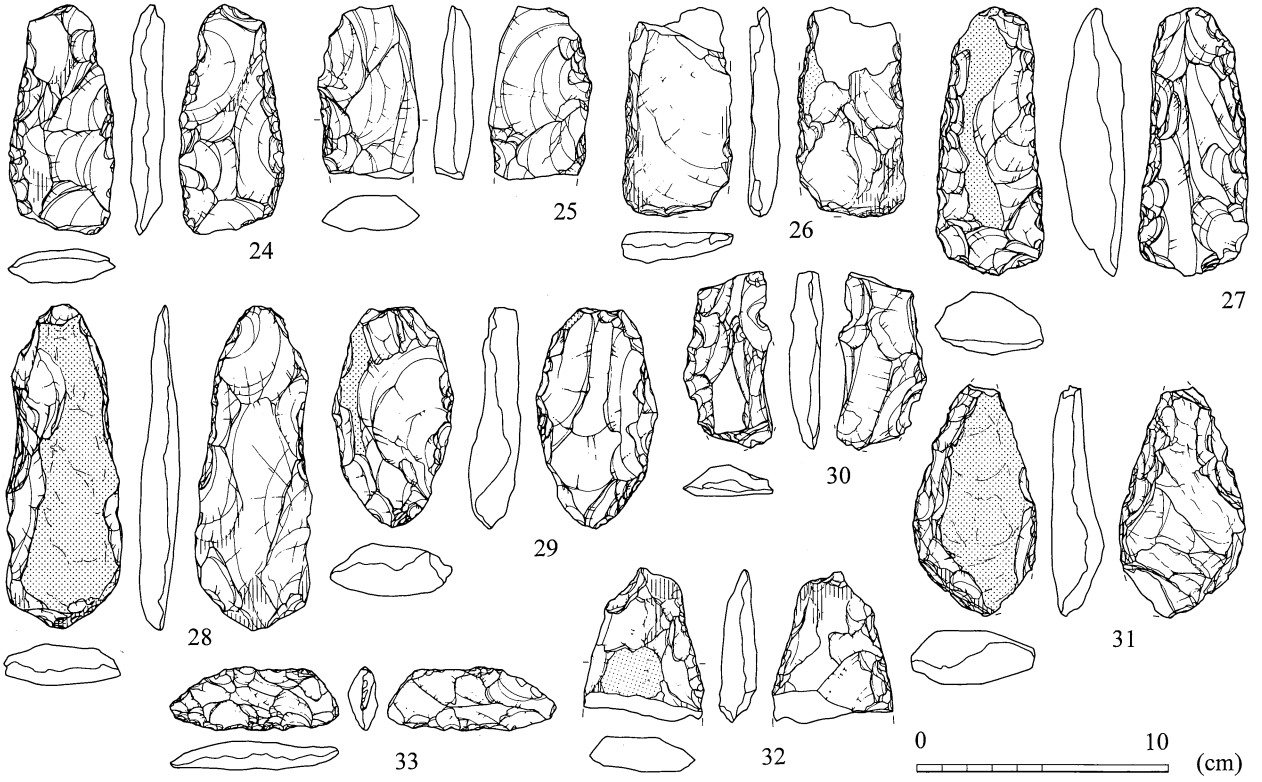
古墳時代の装身具を除く剥片素材の石器の多くは、縄文時代に属す。礫素材の石器は磨製石斧は縄文時代、砥石や石鉢は古代・中世のものと思われる。



第202図　古墳時代・古代・中世の土師器　陶磁器

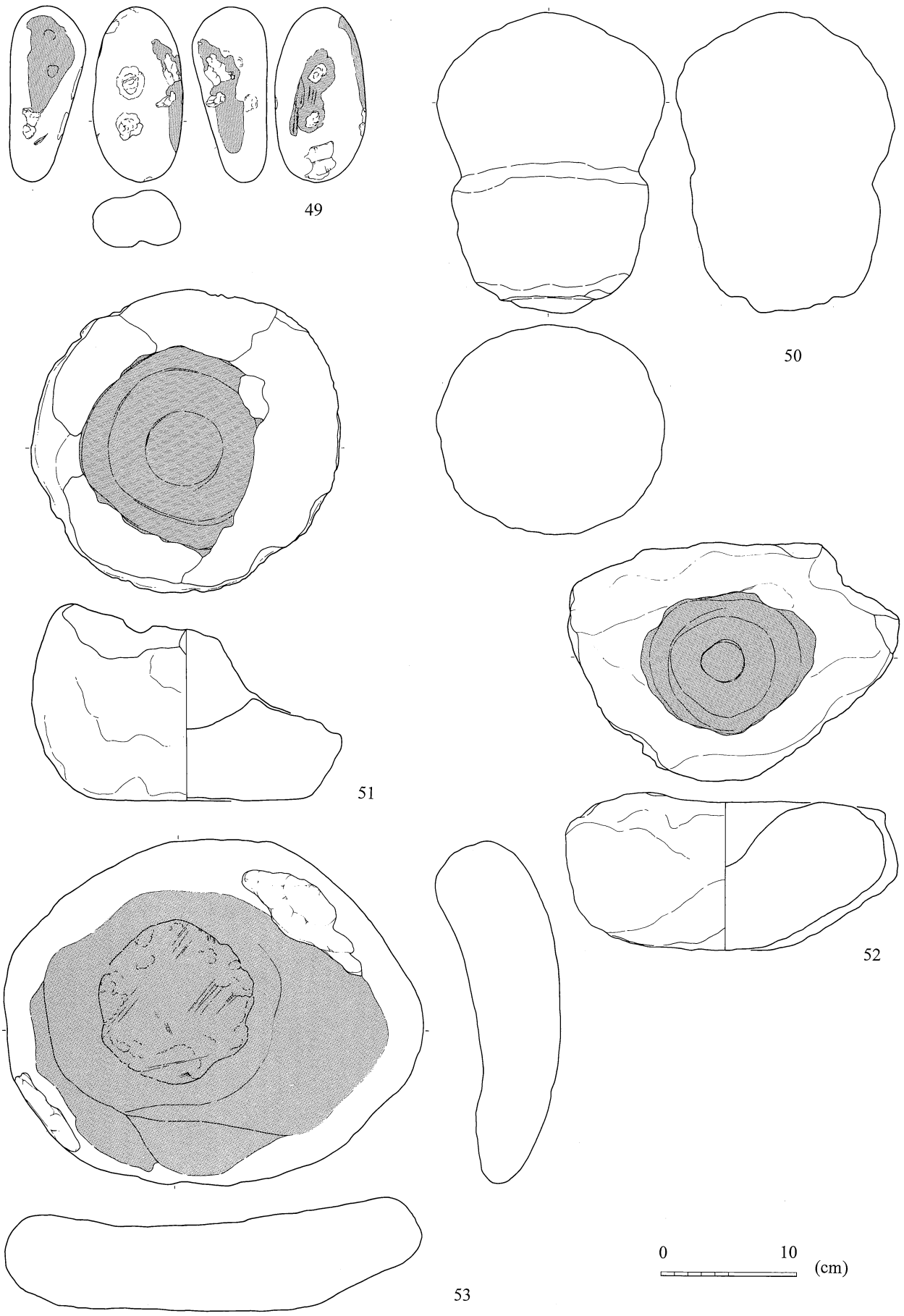


第203図　石器(1)（石鏃・石錐・スクレイパーほか）

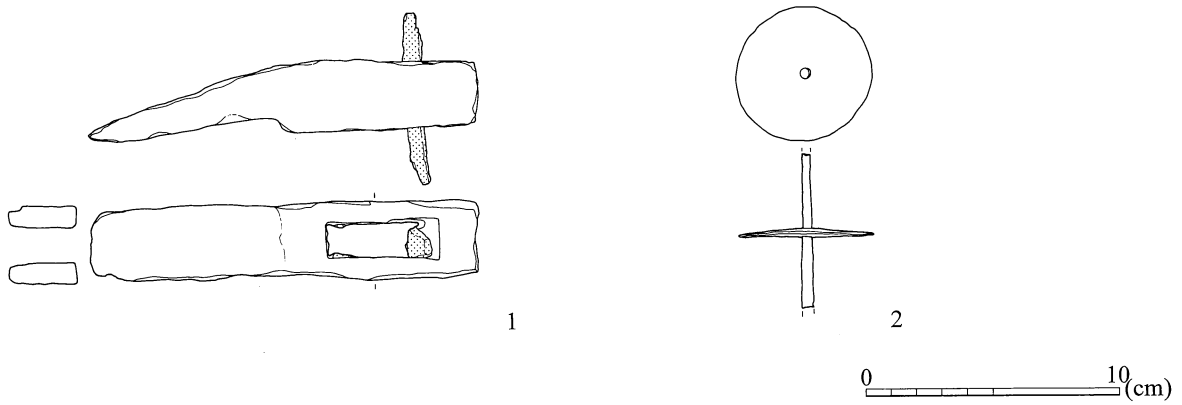


第204図　石器(2)（打製石斧・スクレイパー）

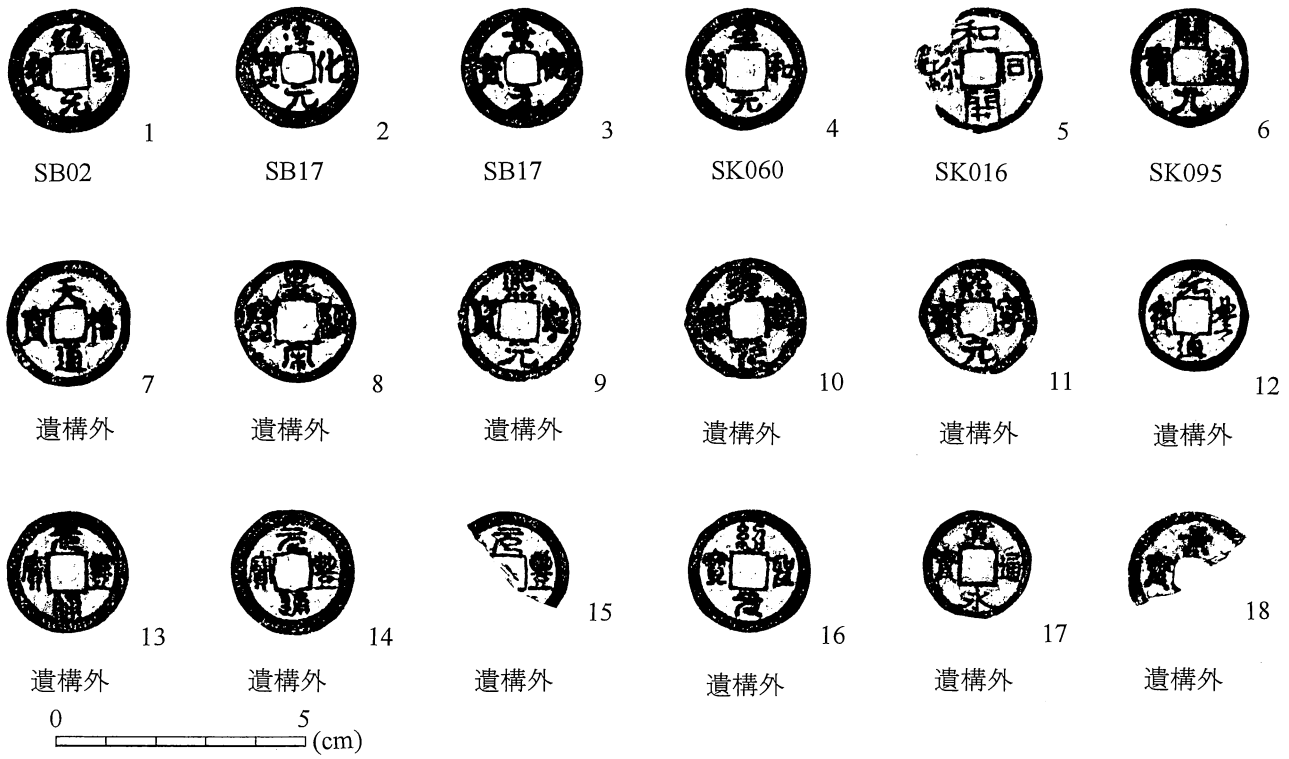
第205図　石器(3)（磨製石斧・砥石・磨石類など）



第206図　石器(4)（凹石・五輪塔・石鉢・石皿）



第207図　鉄製品



第208図　銭貨

6　金属製品・銭貨

(1)　鉄製品（第207図）

１長さ15.5cm、幅3.2cm、厚さ2.8cm、重さ429ｇ。鉄斧。ＳＫ027出土。中世以降か。柄の木質が残存（トーン部分）。２紡錘車。現存軸長6.1cm、軸幅0.5cm、紡錘車径5.4cm、厚さ0.35cm、重さ18.9ｇ。古代ＳＢ06から出土。

(2)　銭貨（第208図）

１紹聖元宝。中世ＳＢ02出土。２淳化元宝。３景徳元宝。ともに中世ＳＢ17出土。４至和元宝。中世ＳＫ060出土。５和同開珎。中世ＳＫ016出土。６開元通宝。中世ＳＫ095出土。７～18遺構外出土。15も元豊通宝とすれば、和同開珎、寛永通宝はもとより開元通宝以外の「渡来銭」は北宋銭だけである。

第４節　小結

桜畑遺跡を時代順に概観する。

縄文時代：早期の押型文土器が遺構外や溝ＳＤ01から出土している。遺構外から出土している格子目押型文土器（第201図１）は、横位密接施文で「立野式」の新しい部類。上小地方では珍しい。溝ＳＤ01から出土している横位密接の楕円押型文土器（第199図１～７）は「細久保式」。しかし、この時期に特定できる遺構はない。

縄文時代前期は前葉のＳＢ12・14・16が検出されている。前期は遺構外から中葉や後葉と思われる土器片も出土。中期では前葉から中葉のＳＢ13・15が検出されている。ＳＢ15は埋甕炉で、炉体土器は縄文地で胴部に水平または垂下する隆帯を貼付し、その隆帯にそって半截竹管でなぞるように並行沈線を施す土器。飯山市深沢遺跡などの千曲川流域で出土している北陸の新崎式系統の土器で「深沢式」か（高橋1989）[註1]。今回の調査範囲の中の集落としてはこの段階までに留まるが、過去の調査では中期後葉の竪穴住居跡も検出されており、求女沢川のより上流の地点へ集落が動いていったのだろうか。後期以降は遺物自体も極めて少ない。

古墳時代：縄文時代後期以降、弥生時代などの遺物は皆無に近い。再び人間の活動の痕跡が見られるのは、古墳時代に入ってからである。古墳時代前期から後期にかけての竪穴住居跡が４軒検出されている。まず前期のＳＢ10内にこれに伴う土坑ＳＫ173があり、滑石製垂飾（第203図23）、手捏土器（第182図４・５）、小型精製壺（７）、器台（６）が出土している。何らかの祭祀に関係する土坑だろうか。古墳時代の竪穴住居跡の遺物量は極めて少ない。

古代：平安時代前半期の竪穴住居跡が５軒検出されている。いずれも食器は黒色土器の坏、椀が多く、煮沸具はロクロ成形の土師器甕が主体である。ほぼ同時期の古代集落が出ている真行寺遺跡群や中田遺跡では胴部ケズリ調整のいわゆる「武蔵型」甕が主体であったのと対照的である。須恵器は大型の甕などが多少あるが、坏などは少ない。ＳＢ08は時期的に多少遡るのかもしれない。

中世：竪穴建物跡が５軒検出されている。周溝がめぐるものもあるが、柱穴は打ち込み式の柱を思わせるように細く四角い。またカマドや地床炉がないことから住居としての性格があったかは断定できない。規模は古代の住居跡をひとまわり小さくした位である。共伴遺物は極めて少ないが、銅銭は北宋銭だけ、焼物は須恵質擂鉢（珠洲系）と龍泉窯系蓮弁文青磁碗（13世紀代）が出土していて、いずれも中世前期の遺構だろう。また、縄文時代の土坑を除けば、本遺跡の土坑の大半はこの時期のものと考えられ、竪穴住居跡同様銭貨は北宋銭に限られ、焼物は土師器皿、精銅用坩堝、古瀬戸天目茶碗などを共伴する。遺構外では銅銭は表採の寛永通宝を除けば北宋銭しかなく、青磁も龍泉窯系細線蓮弁文碗は見あたらない。しかし、土師器皿には右回転ロクロ成形のものから、左回転ロクロ成形、静止糸切痕をのこすものと様々であり、土師器内耳鍋も出土しているので、中世後期に下るものも多少含まれているようだ。石器も少なくなく、凝灰岩製の持ち砥石、多孔質黒色安山岩製の石鉢などは当該期のものだろう。

近世以降：寛永通宝、キセル受け口、硯などがあるが、いずれも表面での採集品であり、人間の定住的な痕跡などは見あたらない。

遺跡の性格：縄文時代はいずれも各時期とも２軒程度と思われ、以前調査された旧菅平有料道路などの本調査範囲の山側に中心があると思われる。古墳時代はカマド導入直前期で、真行寺遺跡群の集落にほぼ後続する集落か。古代も平安時代の住居跡が検出された。

中世は前期に遺構が集中しているようである。定住集落と理解するにしては煮沸具がほとんど見あたら

ない。竪穴建物跡にカマドがないという点が疑問だが、規模としては縄文の竪穴住居跡に匹敵するような大きさであり、柱穴も検出されている。また、るつぼがいくつも検出されており、理化学的な分析によって溶銅したるつぼであることが判明しており（第５章第４節）、遺跡の性格を考える上で参考になろう。また、年代を特定すべき遺物がほとんどなかったがＳＫ198には人骨が埋葬された土葬墓が検出されている。土坑や遺構外の土師器皿、内耳鍋などには中世後期と考えられるものが少なくなく、竪穴建物跡が中世前期に限定されるようなので、中世後期には墓域になっていたとも解釈できる。地名の「桜畑」「五輪原」は五十嵐幹雄によるといずれも「墓地のあったところを示している」（五十嵐1986）とのことで、中世後期以降の土地利用が地名に反映されているのかもしれない。しかし、本遺跡調査範囲内には近世以降の遺物は極めて少なく、近世と特定できる土坑もないので、放置されていたか、畑地や水田に利用されていたものと考えられる。

註１　「深沢式」については寺内隆夫、山下大介両氏から御教示を得た。

引用参考文献

五十嵐幹雄1986『東部町の遺跡と文化財』

高橋　保1989「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟県考古学談話会会報』４

第８章　細田遺跡

第１節　遺跡の概要

本遺跡は東部町祢津字細田1845番地ほかに所在し、地理的には烏帽子岳西南麓の複合扇状地上、千曲川の支流求女沢川右岸に立地する（第２・209図）。今回上信越自動車道建設に伴う緊急発掘調査を行った地点の標高はおおよそ639～670ｍを測る。

細田遺跡は町道の拡幅工事の際に遺物の出土が見られ遺跡登録された。県営圃場整備事業に先立ち東部町教育委員会により平成３年秋に試掘調査と平成４年７月に発掘調査が行われ、縄文土器、土師器、須恵器や土坑が検出された。また、細田遺跡の西側に隣接する求女沢川右岸の横マクリ遺跡も平成４年５月～７月に発掘調査が行われ縄文時代前期の諸磯ｂ式の土器や当該期の竪穴住居跡が検出され、遺構外から玦状耳飾や垂飾といった装身具も出土した。また横マクリ遺跡のさらに西側の七ツ石遺跡でも圃場整備関連事業に伴う発掘調査が平成元年と４年に行われ、縄文時代や平安時代の遺構や遺物が検出されている。

第２節　調査の概要

１　調査範囲と経過

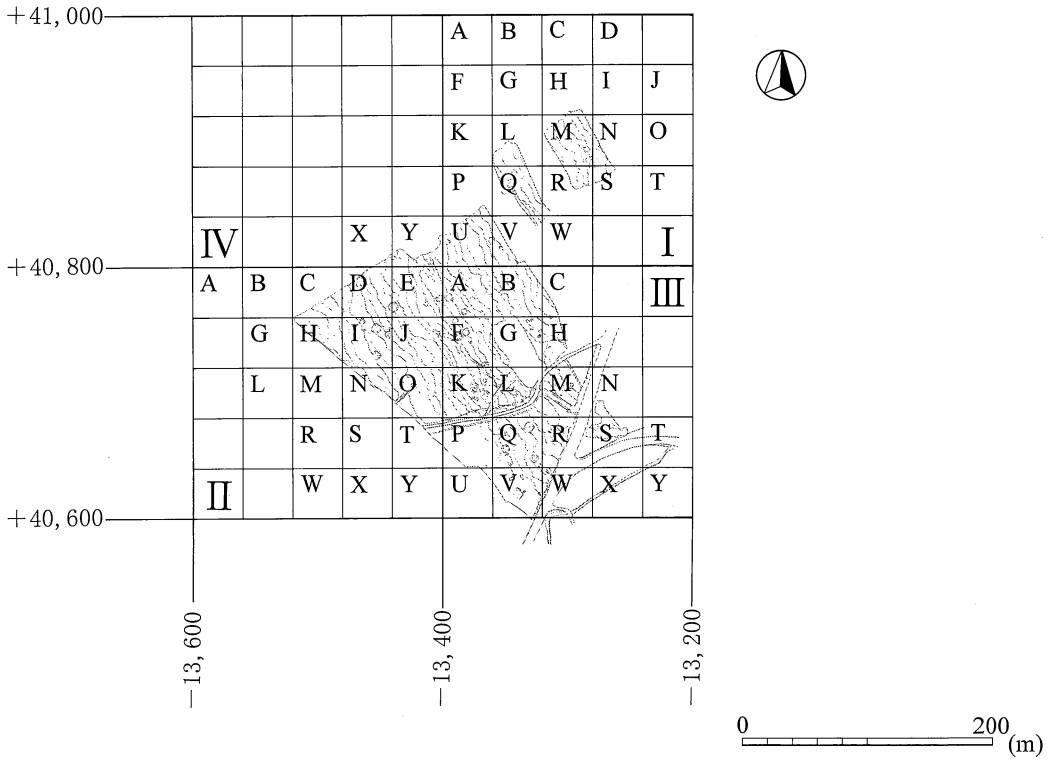
まず、遺跡の調査範囲を確定するために平成４年12月11日～14日にかけて818㎡の試掘調査を行った。翌平成５年７月21日～30日にも試掘調査を行い、基本土層を確認し、調査範囲を確定した（第209図）。試掘調査の所見に基づき調査区およびグリッドを設定した（第210図）。

平成５年９月６日から表土剝ぎを開始し、12月17日に調査を終了した。平成５年度の調査面積は33000㎡。翌平成６年は４月11日～27日にかけて発掘調査を行い、細田遺跡の発掘調査をすべて終了した。平成６年度の調査面積1000㎡で、平成５年度分と合わせてのべ34000㎡に及ぶ。

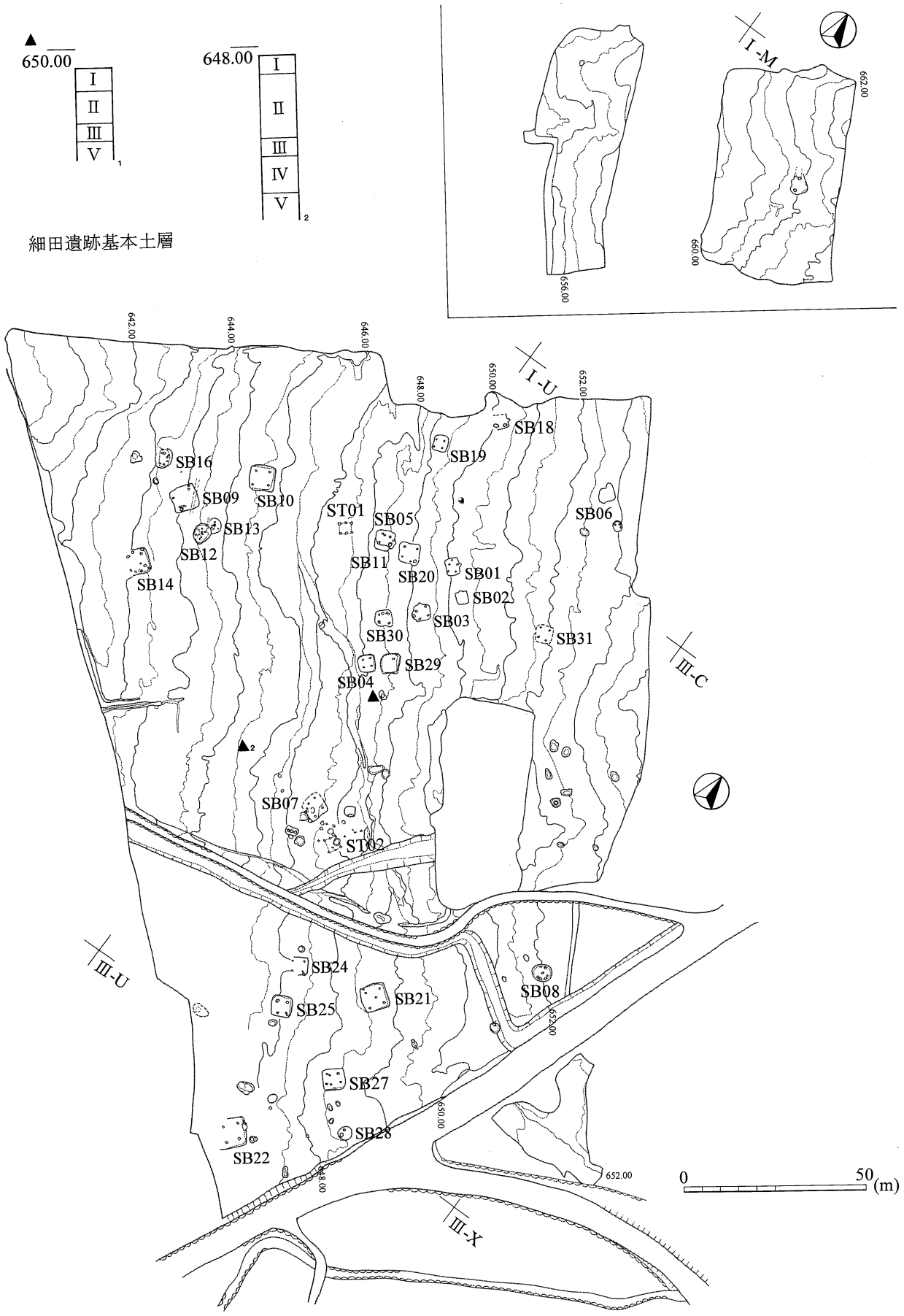
平成５年９月６日　重機搬入と表土剝ぎ開始。
９月13日　開始式、遺構検出開始。
11月５日　県文化課視察。
12月４日～６日　航空測量・航空撮影。
12月８日　県文化課視察。
12月17日　平成５年度分終了、器材撤収。
平成６年３月28日　重機搬入と表土剝ぎ開始。
４月11日　精査開始。
４月13日　全景写真撮影。
４月14日　単点による地形測量。撤収。

２　基本層序

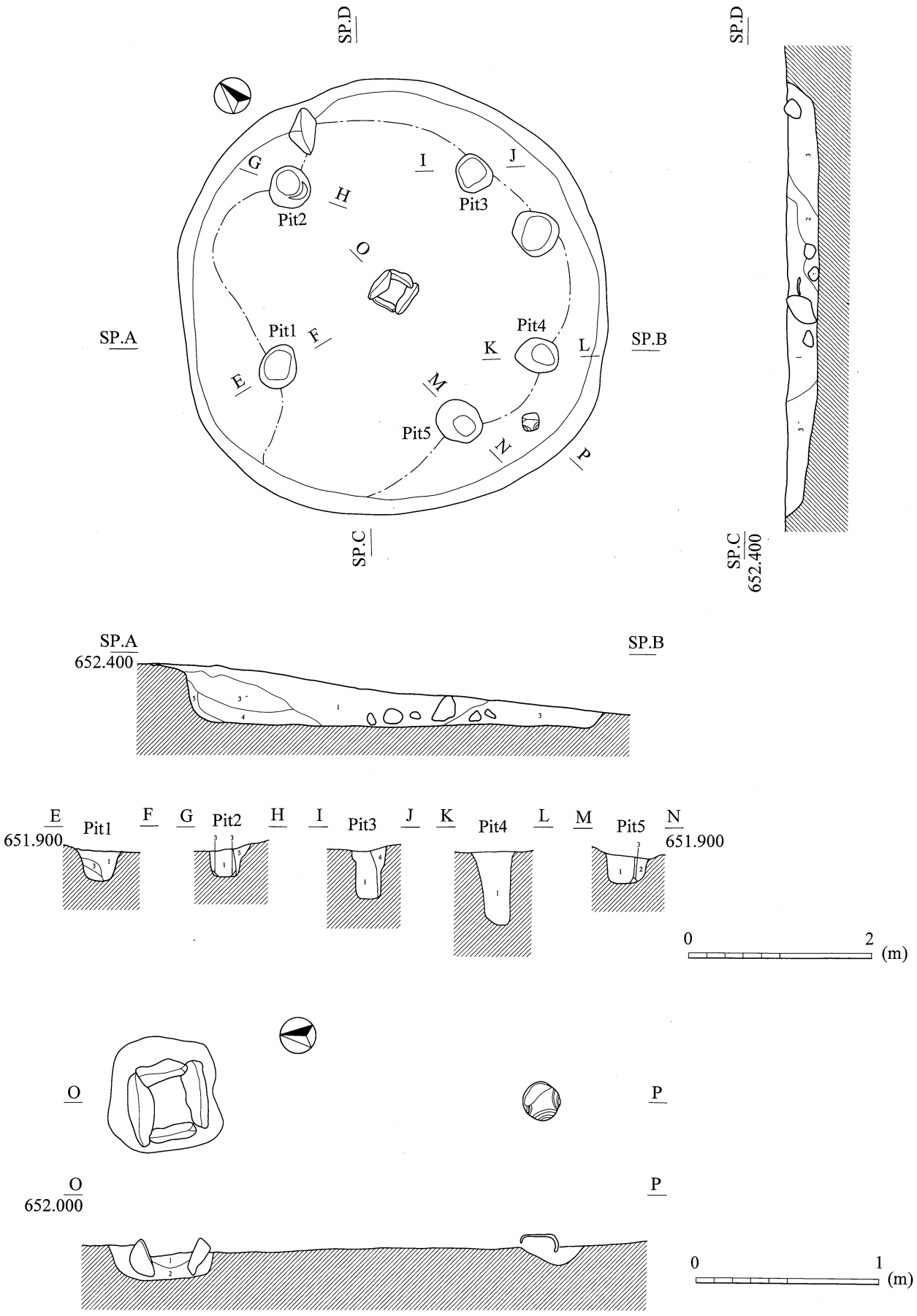
本遺跡の基本層序は上位から耕作土（水田土壌・Ⅰ層）、耕土の母材層である堆積層（Ⅱ層）、さらに暗褐色礫混シルトの遺物包含層（Ⅲ層）となる。Ⅲ層の下位に人頭大の礫を多く含む黒褐色のガレキ層（Ⅳ層）や遺物を含まない礫混じり砂質シルト（再堆積ローム層・Ⅴ層）が基盤をなしていることが確認された（第211図）。



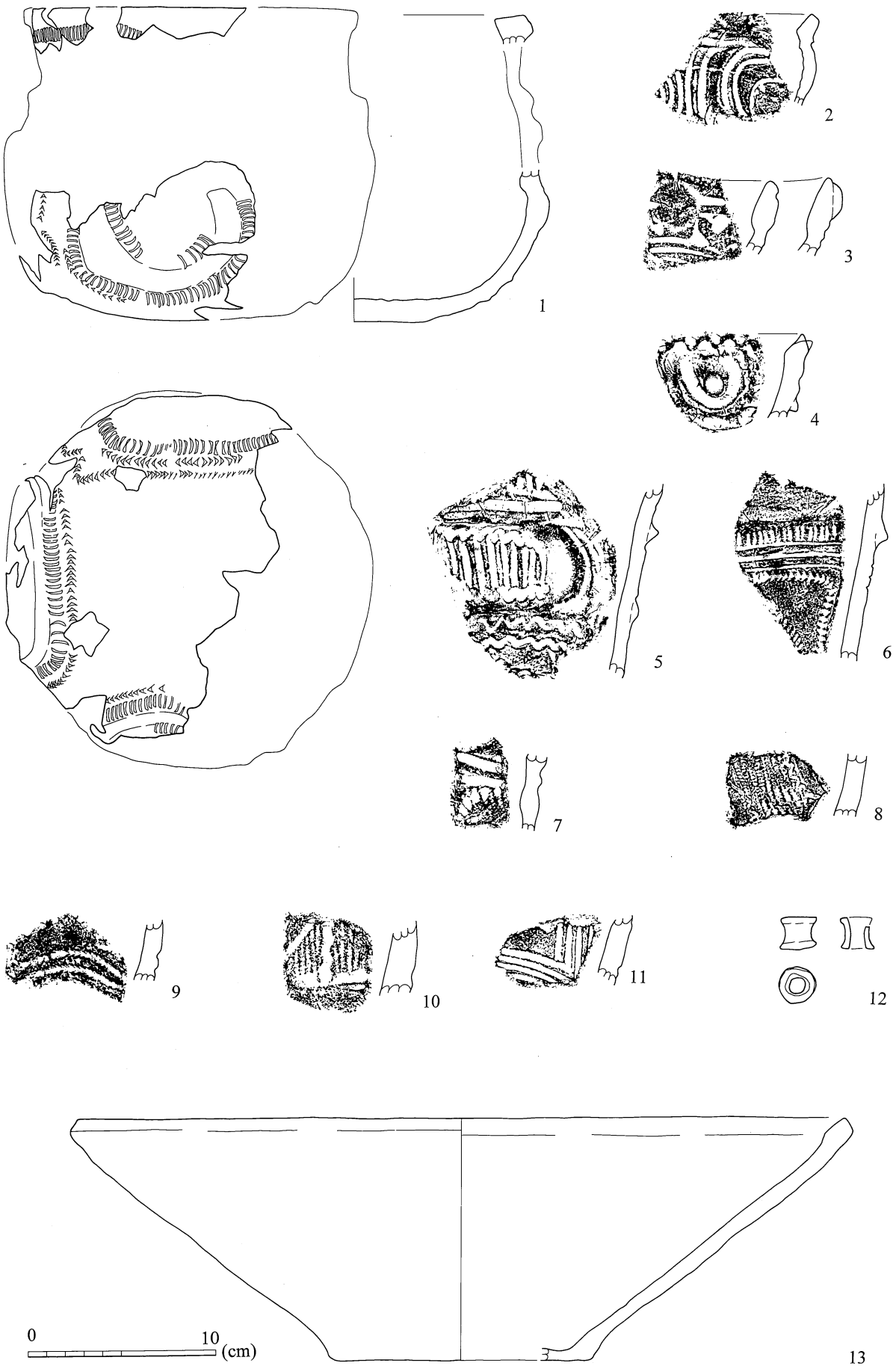
第210図　細田遺跡グリット



第211図　細田遺跡遺構配置・基本土層



第212図　竪穴住居跡　ＳＢ08・炉



第213図　竪穴住居跡　ＳＢ08出土土器

第３節　遺構と遺物

本遺跡の遺構は、扇状地を形成する砂礫混シルト層を基盤として、その直上で検出される。以下竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝の遺構の順に共伴する土器とともに見ていく。

１　竪穴住居跡と土器

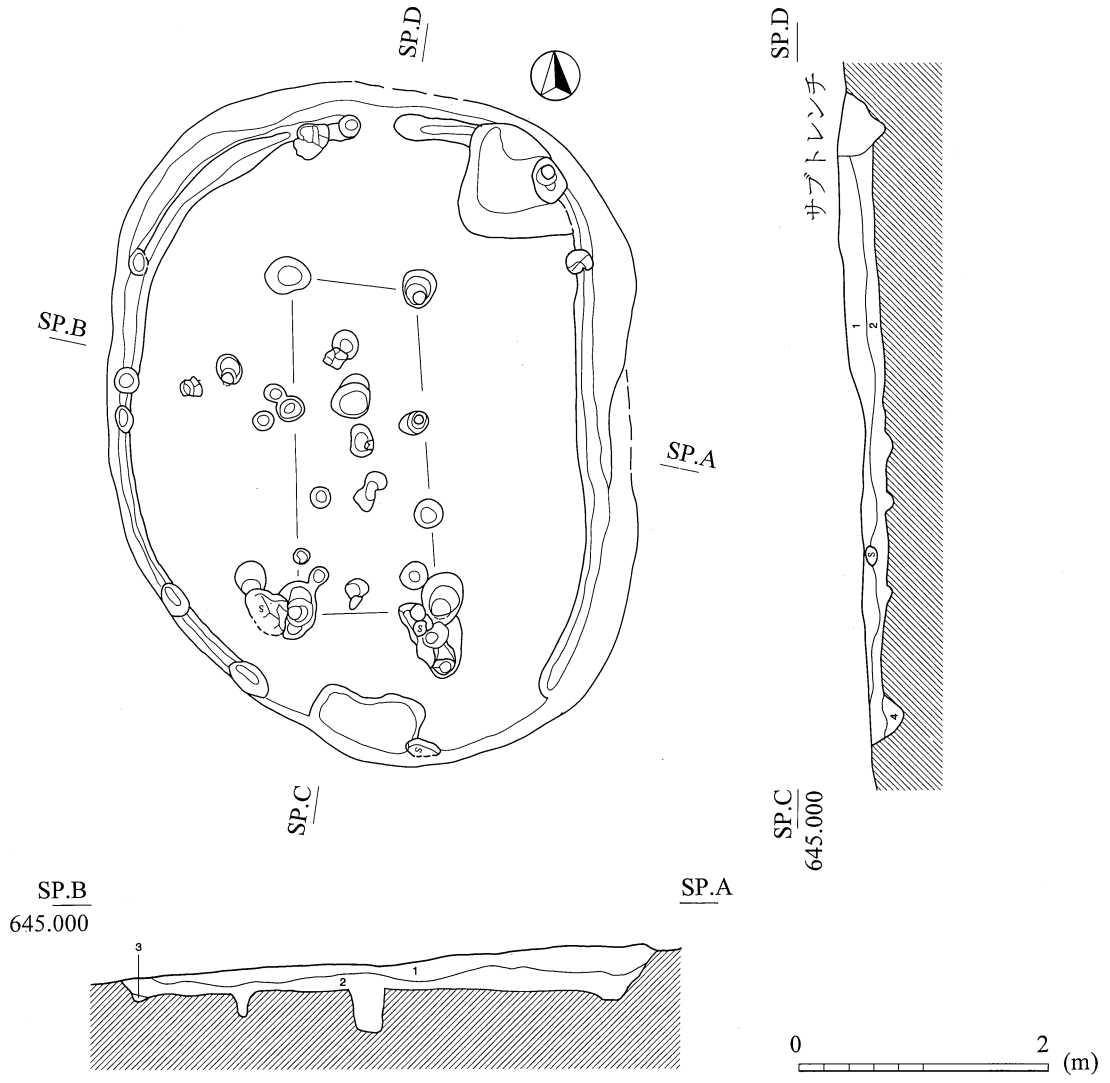
(1)　縄文時代

ＳＢ08（第212・213図）　　位置　Ⅱ－Ｍ－８・13

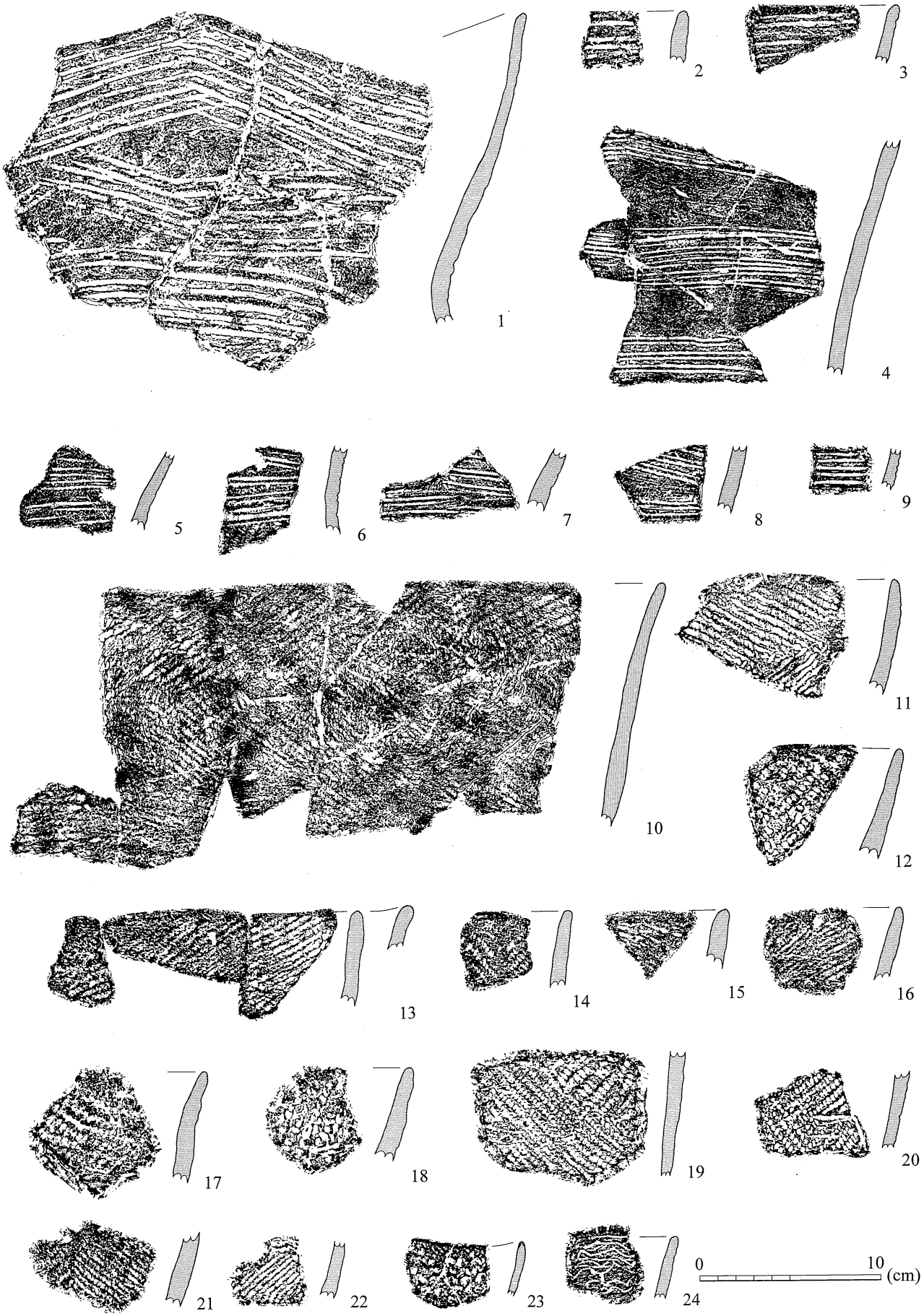
構　造　径4.8ｍの円形。床面は比較的平坦。立ち上がりも南西側は削平されるが、北東側は垂直に立ち上がる。柱穴は６本環状にめぐる。住居跡中央に石囲炉が位置している。

炉　炉の軸はほぼ南北に沿う。

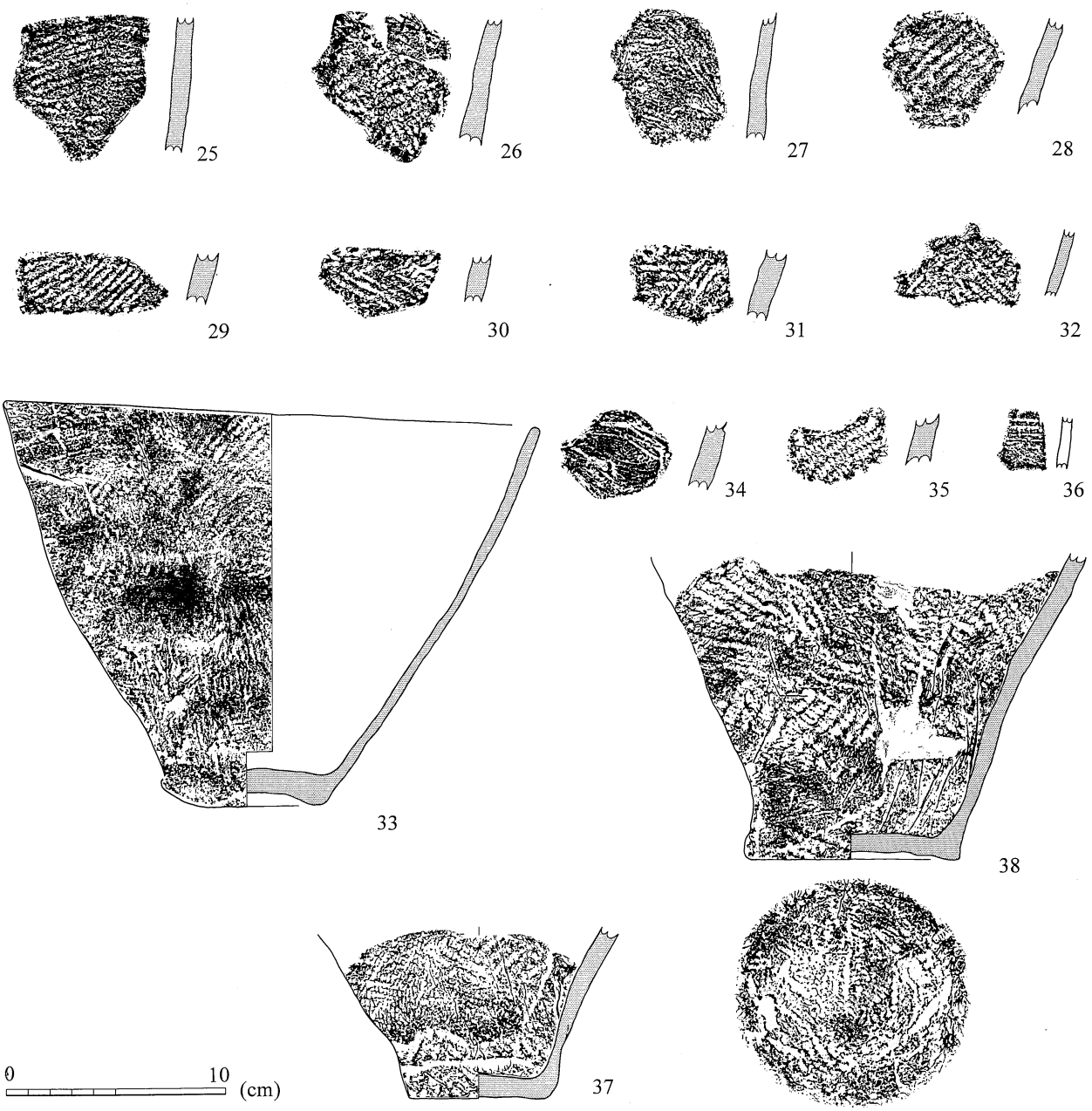
遺　物　１・６隆帯脇を先端角状に加工した工具による連続角押文と先端三角形状工具による連続三角形押引文が併用される。１器高の低い鉢。床面直上から伏せた形で出土。５隆帯による楕円区画内に斜行沈



第214図　竪穴住居跡　ＳＢ12



第215図　竪穴住居跡　ＳＢ12出土土器(1)



第216図　竪穴住居跡　ＳＢ12出土土器(2)

線で充塡した上で、隆帯脇を蛇行沈線でなぞる。12耳栓。

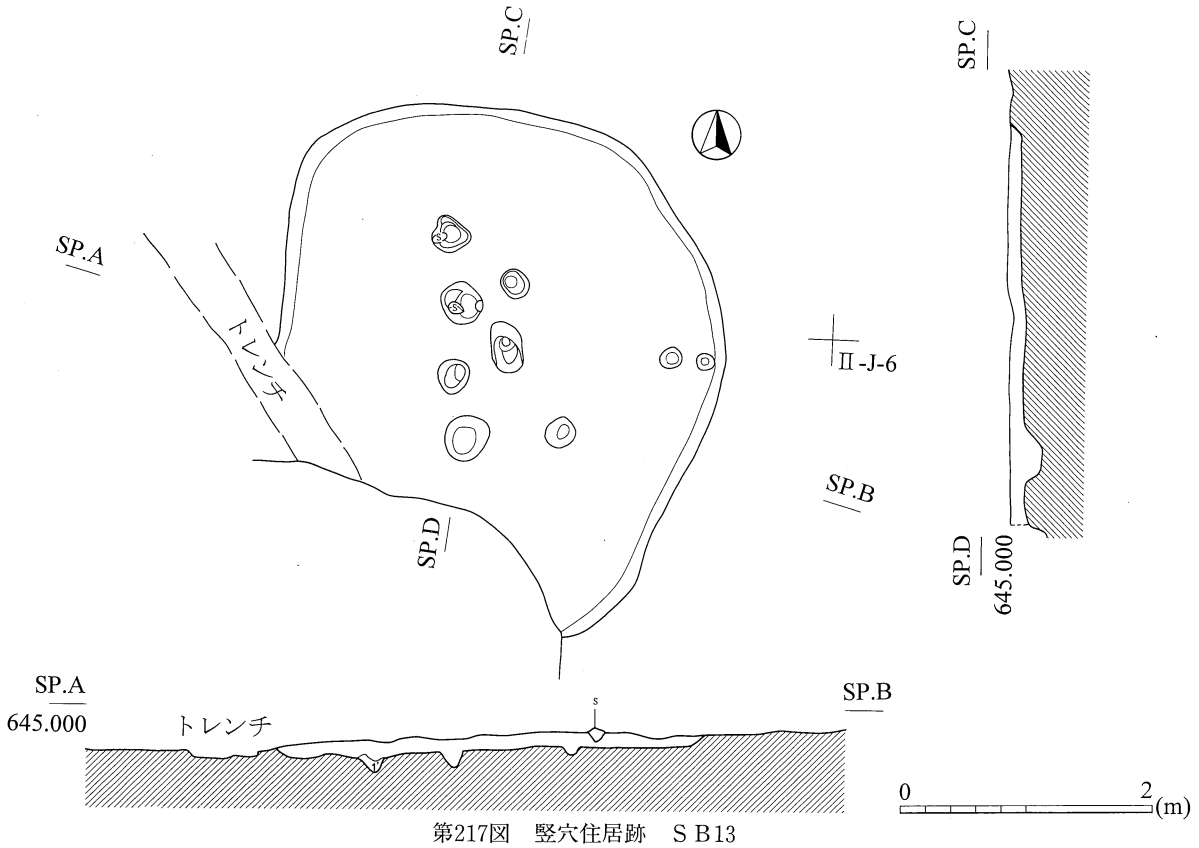
時　期　中期中葉　新道式期か

ＳＢ12（第214～216図）　　位置　Ⅱ－Ⅰ－10

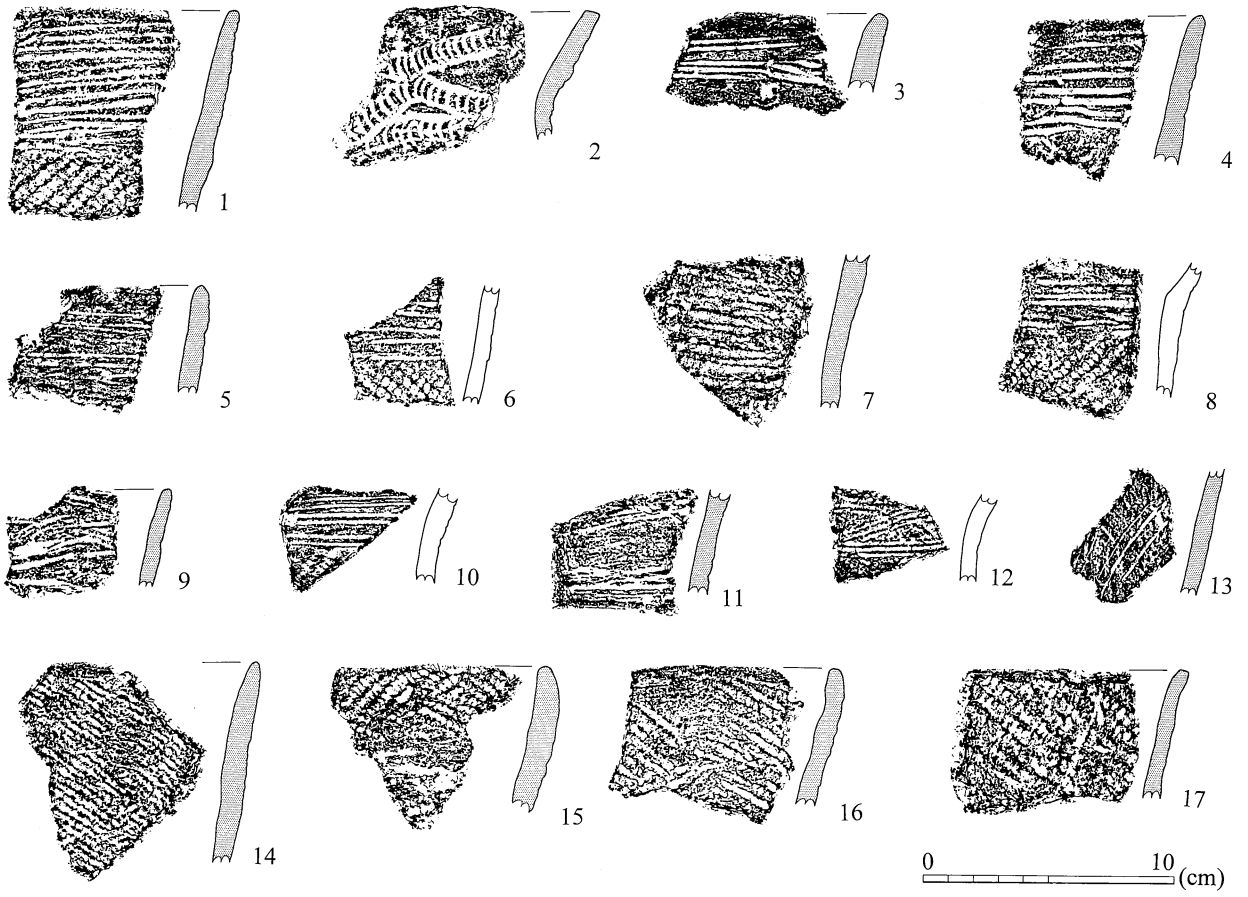
構　造　ほぼ南北に軸をもつ5.5×4.1ｍの楕円形。床面は平坦。立ち上がりは緩やか。柱穴は住居中央に長方形に組めるものが８基。また立ち上がりに沿って周溝がめぐり、周溝の中にも補助的な柱穴がある。炉は確認できなかった。

切り合い　土層断面からは明確ではないが、平面形検出段階では縄文時代ＳＢ13を切るように見えた。

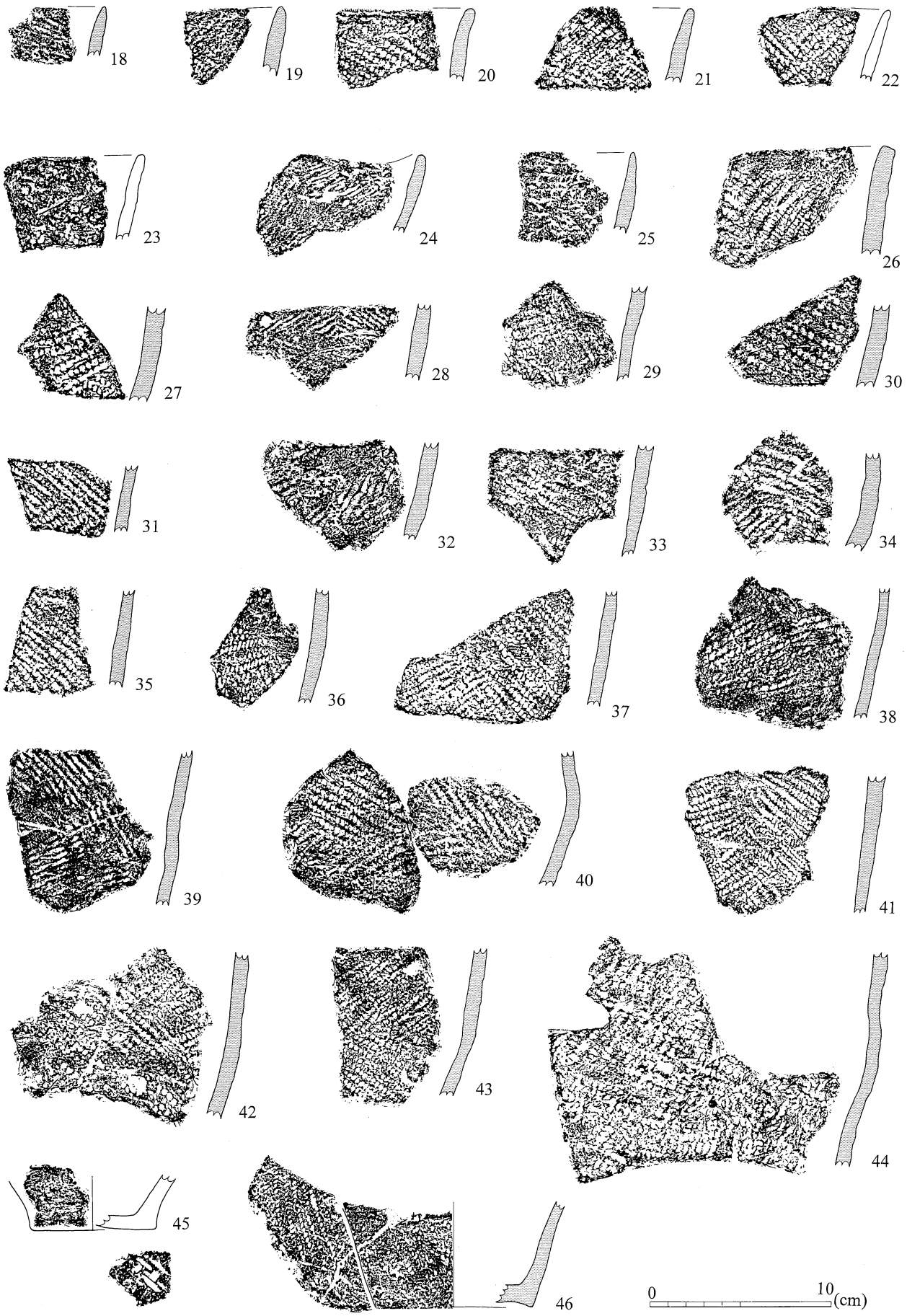
遺　物　１～９太めの半截竹管状工具で並行沈線文を描く。１ゆるい波状口縁を呈し、菱形を描く。10～23・25～33・35・37・38含繊維の回転縄文。23口縁部にループ文を施す。24半截竹管状工具による条線文か。23混入か。



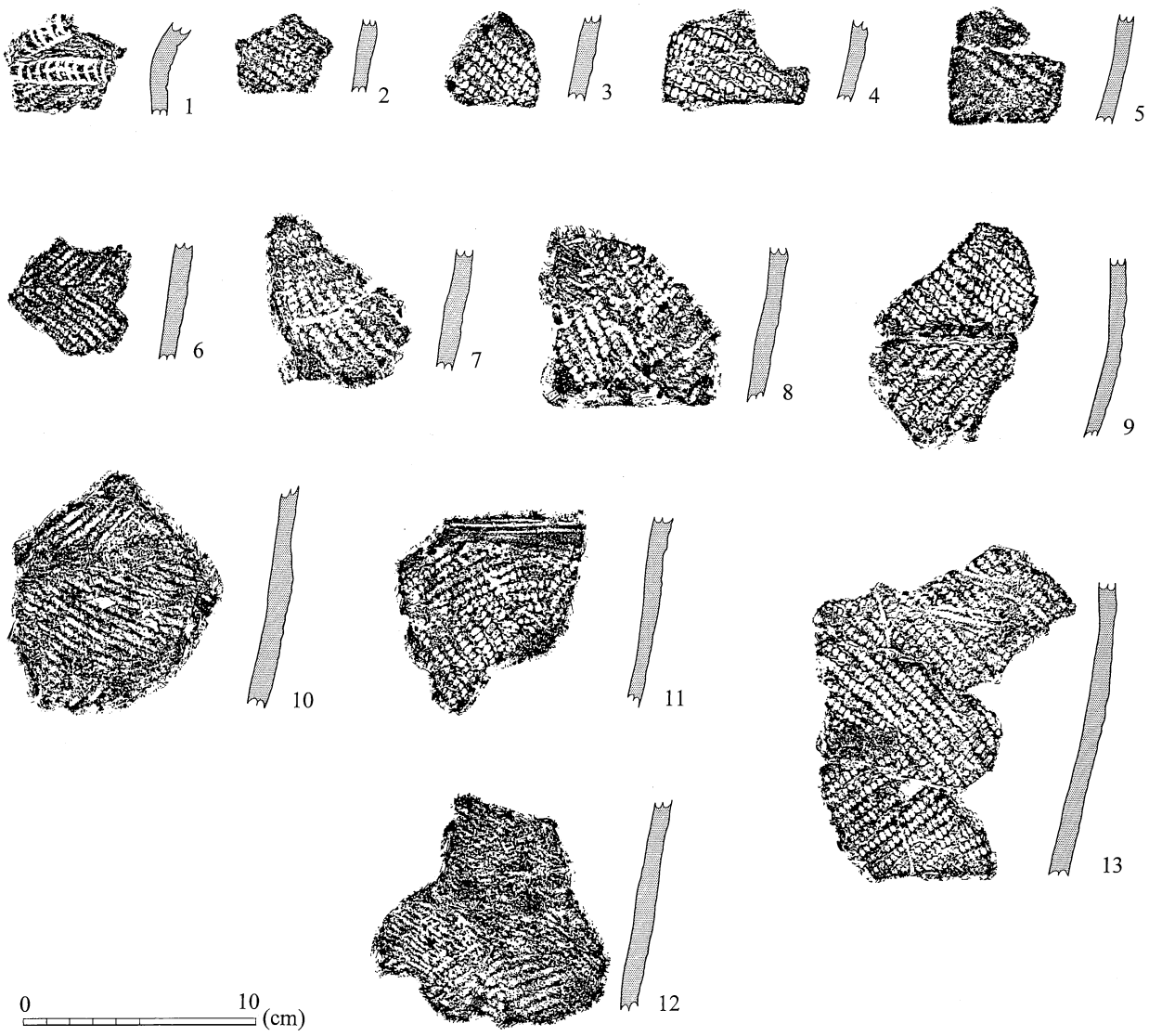
第217図　竪穴住居跡　ＳＢ13



第218図　竪穴住居跡　ＳＢ13出土土器(1)



第219図　竪穴住居跡　ＳＢ13出土土器(2)



第220図　竪穴住居跡　ＳＢ12・13出土土器

時　期　縄文時代前期中葉　有尾式期

ＳＢ13（第217～219図）　　位置　Ⅱ－Ⅰ－５・10

構　造　ほぼ南北に軸を持つ現存3.3×3.8ｍの楕円形。床面は平坦、立ち上がりは緩やか。住居跡中央に一直線に配列される小土坑４基、そのほか小土坑計９基が検出された。柱穴か。炉は確認できなかった。

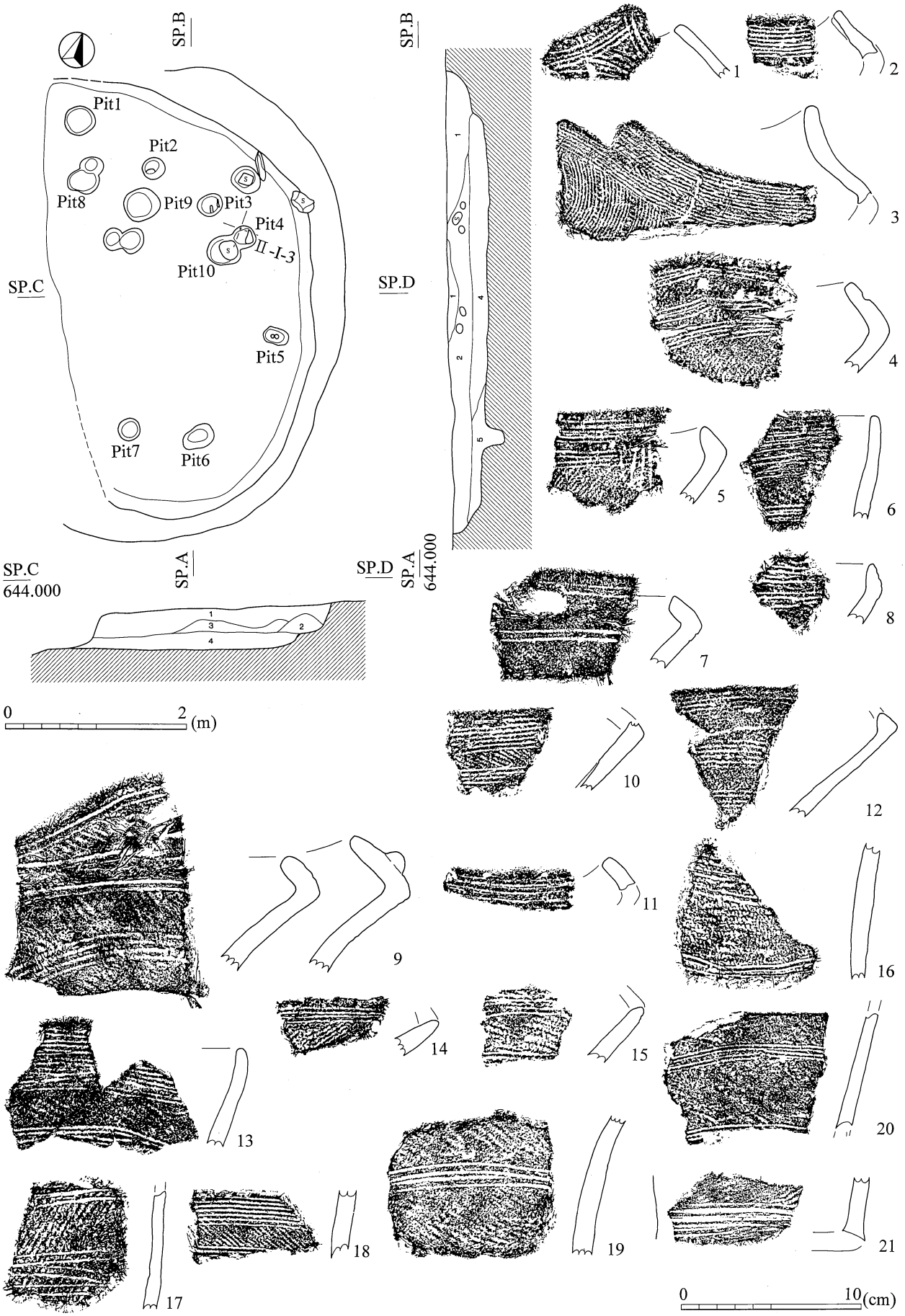
切り合い　縄文時代ＳＢ12に切られる。

遺　物　１・３～11半截竹管状工具を並行に施文。２半截竹管状工具による並行沈線文間に、同工具による連続爪形文が施される。13半截竹管状工具の条線が斜位に格子状に施される。14～46回転縄文。繊維を含むものが多いが、含まれないもの（22・23・45）もある。

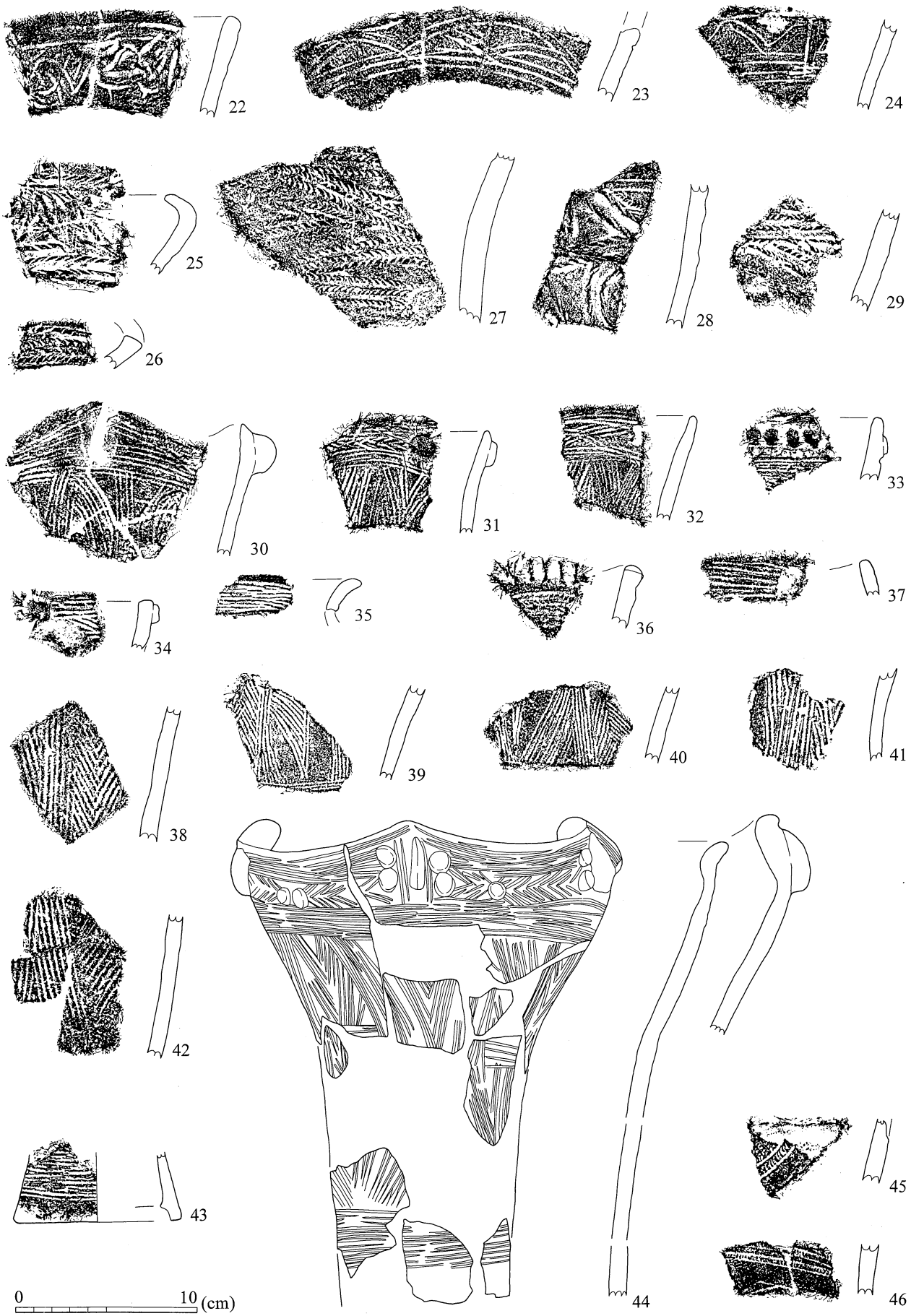
時　期　縄文時代前期中葉　有尾式期

ＳＢ16（第221～223図）　　位置　Ⅱ－Ⅰ－２ほか

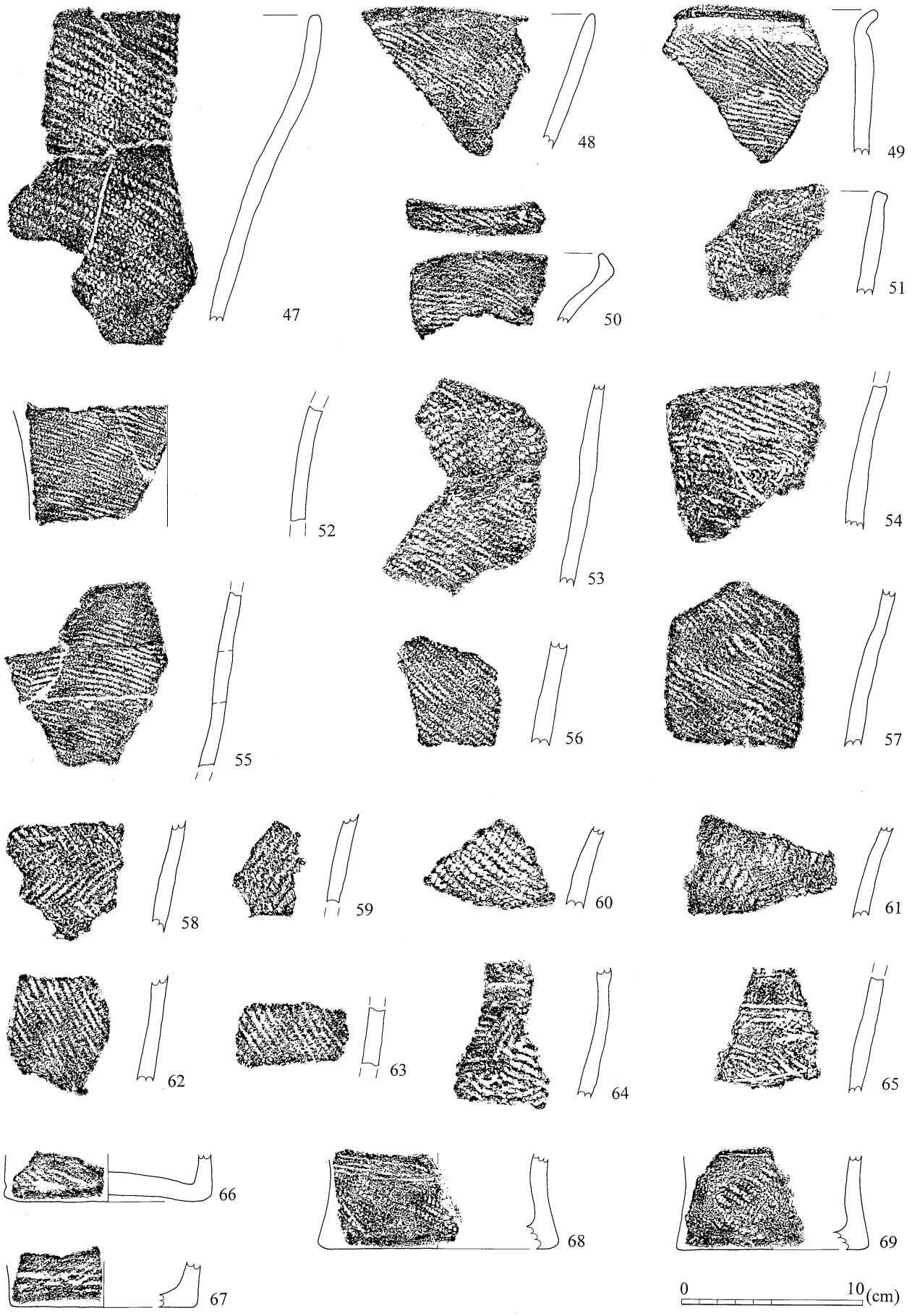
構　造　径現存5.3ｍの不整形な円形。土層断面から床面が２面認められる。本遺構は竪穴住居が外側に拡大されて再構築されたと考えられる。上位の１～３層が新期、下位の４～５層が古期のそれぞれ住居跡



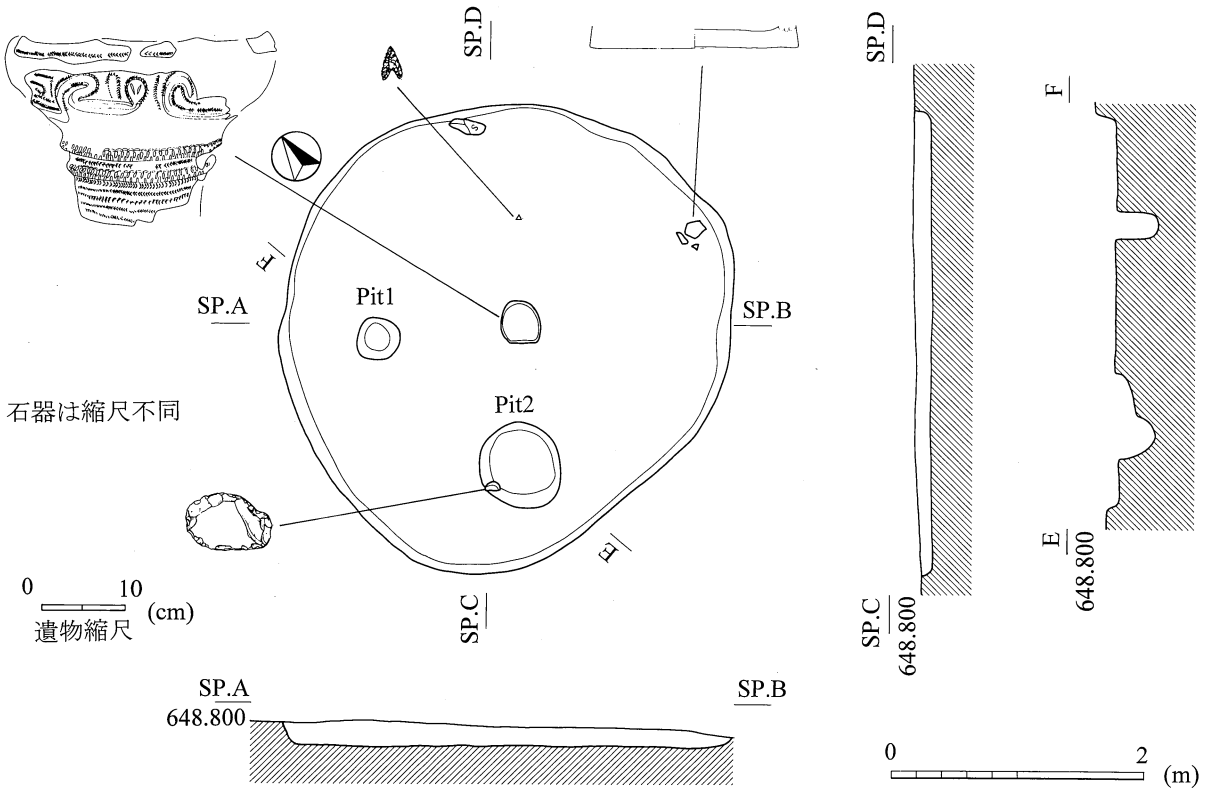
第221図　竪穴住居跡　ＳＢ16・出土土器(1)



第222図　竪穴住居跡　ＳＢ16出土土器(2)



第223図　竪穴住居跡　ＳＢ16出土土器(3)



第224図　竪穴住居跡　ＳＢ28

の覆土と考えられる。床面はいずれも比較的平坦であるが、貼床ではないので、はっきりはしていない。立ち上がりは容易に確認された。また柱穴は環状に10基検出され、内側をめぐるPit５～10と外側をめぐるPit１～７（Pit５～７は共有される）とに分けられる。上位の新期の住居跡が外側に広がっていることから、内側環状柱穴列は古期の住居跡に伴い、外側環状柱穴列は新期の住居跡に伴うものと考えられる。炉は分からなかった。

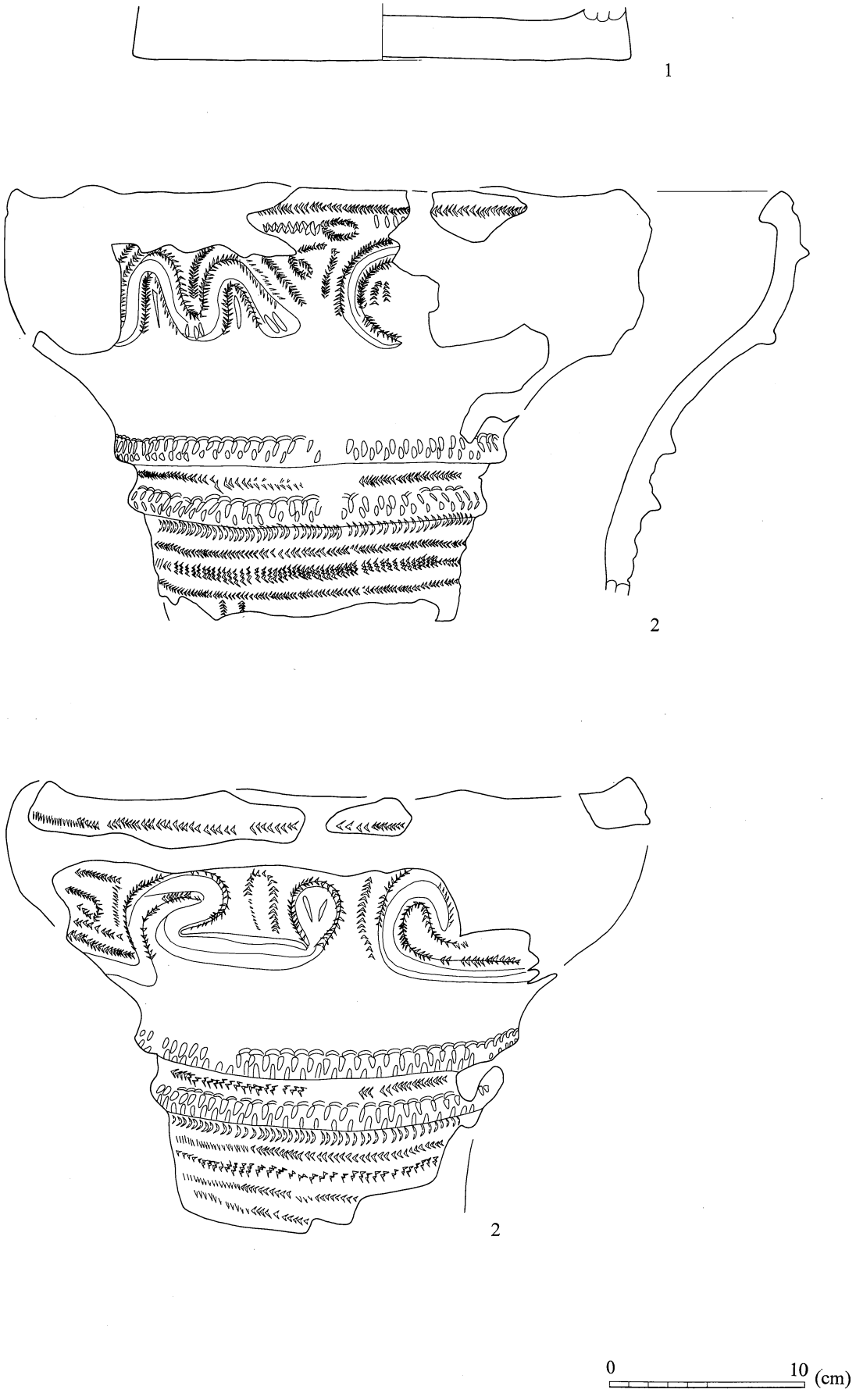
遺　物　１～21縄文地に半截竹管状工具による条線文が施されたもの。諸磯ｂ式。１～９・11「く」字状に屈曲する口縁。10・12・14・15屈曲部の擬口縁で折れたもの。22～24半截竹管状工具による並行沈線文。25～29微隆線上に連続刻みを施す。諸磯ｂ式期の土器か。30～44半截竹管状工具などによる条線文を施した土器。諸磯ｃ式。30貝殻状突起。31・33・34円形浮文。44貝殻状突起と円形浮文が施される。45・46細半截竹管状工具の並行沈線文間に連続刺突が施される。

時　期　下位の古期の住居跡は縄文時代前期後葉の諸磯ｂ式期、新期の住居跡は前期後葉の諸磯ｃ式期か

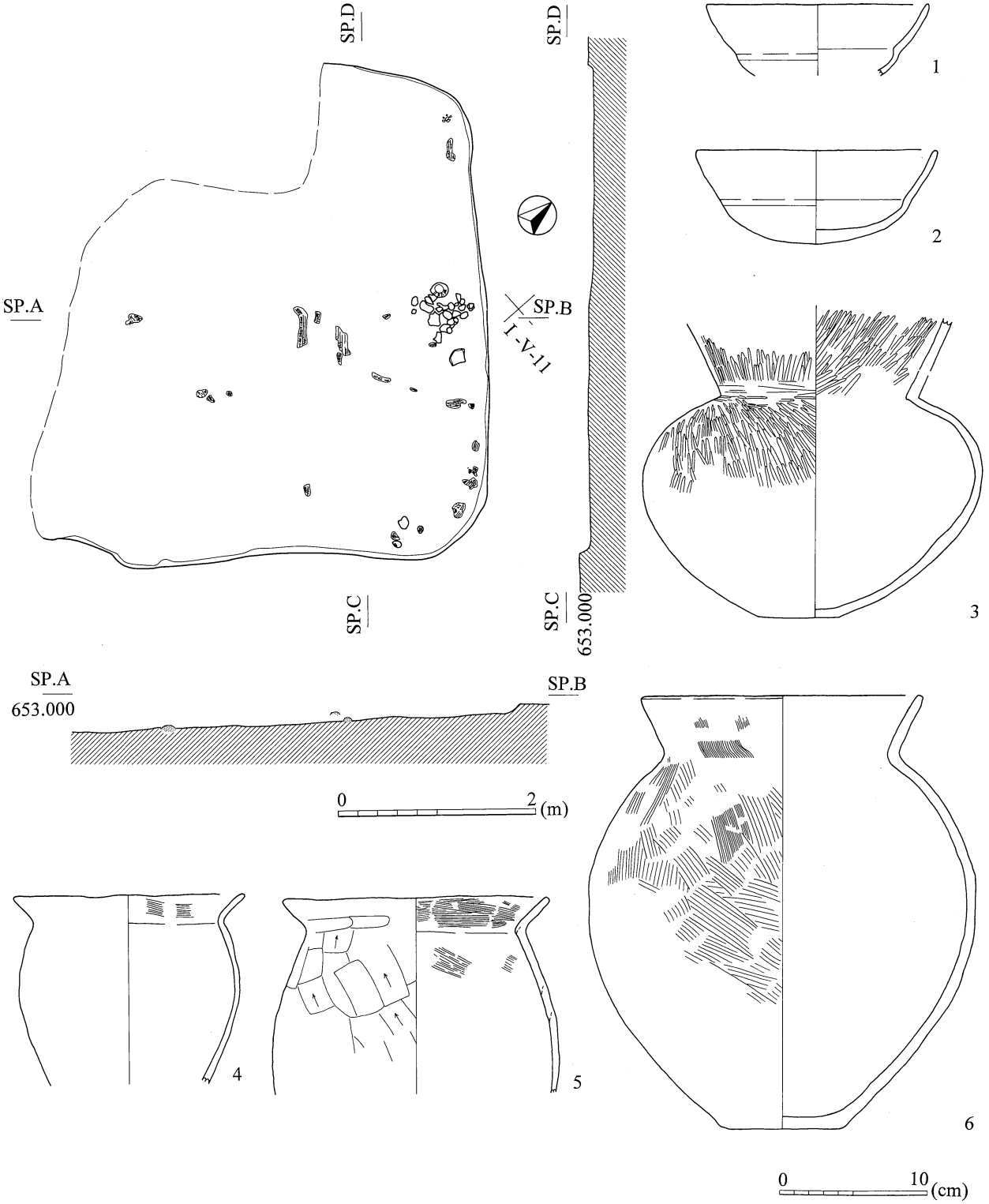
ＳＢ28（第224・225図）　　位置　Ⅲ－Ｗ－１ほか

構　造　3.6～3.7ｍの略円形。床面は平坦。かなり削平されているが、直に立ち上がる。柱穴Pit１は規模、深さ共に適当であるが、組めそうな小土坑は他には検出されなかった。

遺　物　２口縁部文様帯に隆帯でヘビを模したような具象文が施され、隆帯脇には連続三角押文が施される。胴部には連続三角押文や連続爪形文が断面三角形の隆帯の間を並行して施される。断面三角形の隆帯自体には交互刺突と半截竹管状工具による連弧文が施される。また、連続三角形文の一部は原体の先端が割れているために先端が山形にジグザグになっている部分がある。石鏃（第277図２）とスクレイパー（第



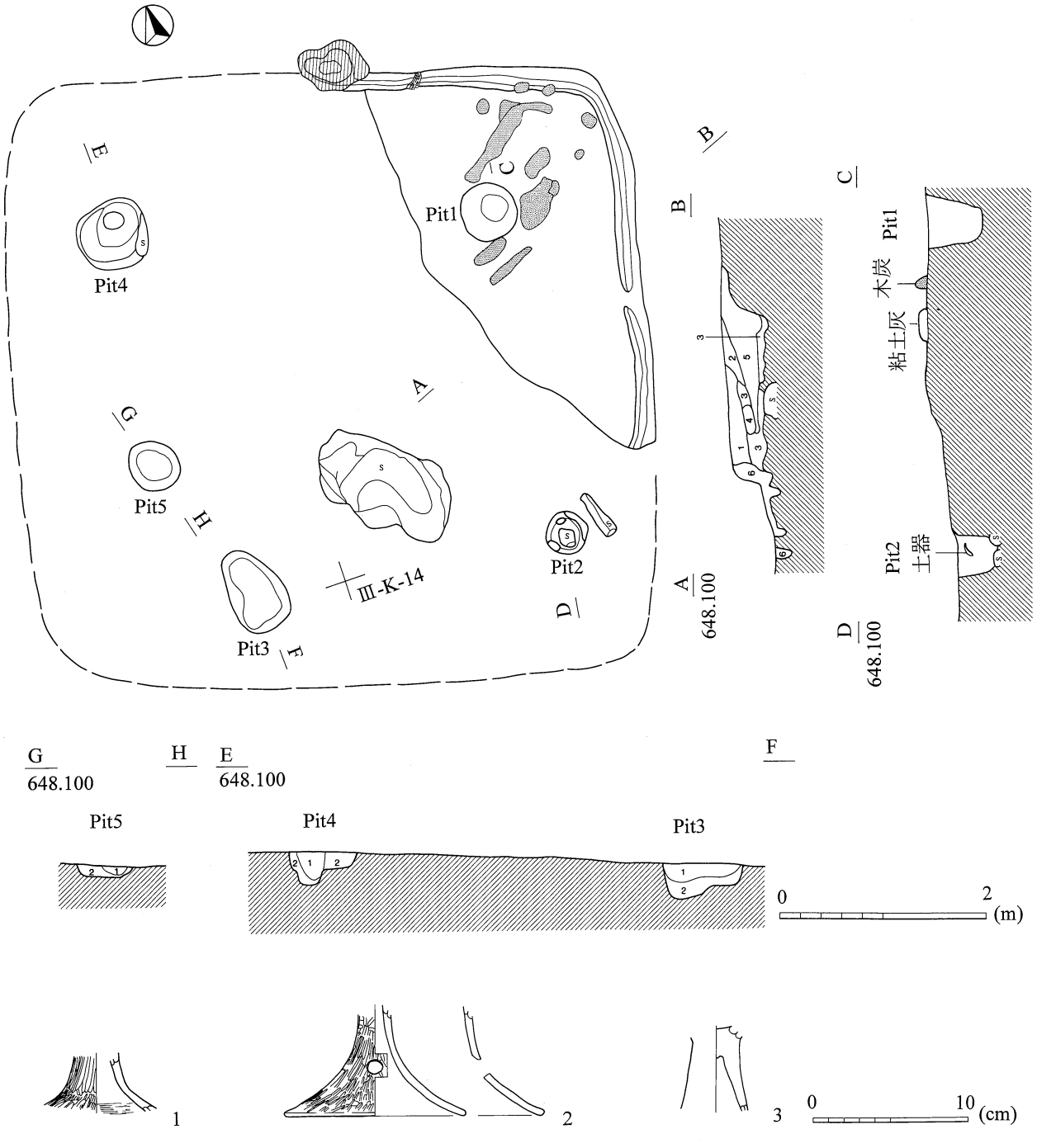
第225図　竪穴住居跡　ＳＢ28出土土器



第226図　竪穴住居跡　ＳＢ06・出土土器

282図107）が出土。

時　期　縄文時代中期中葉　新道式期か



第227図　竪穴住居跡　ＳＢ07・出土土器

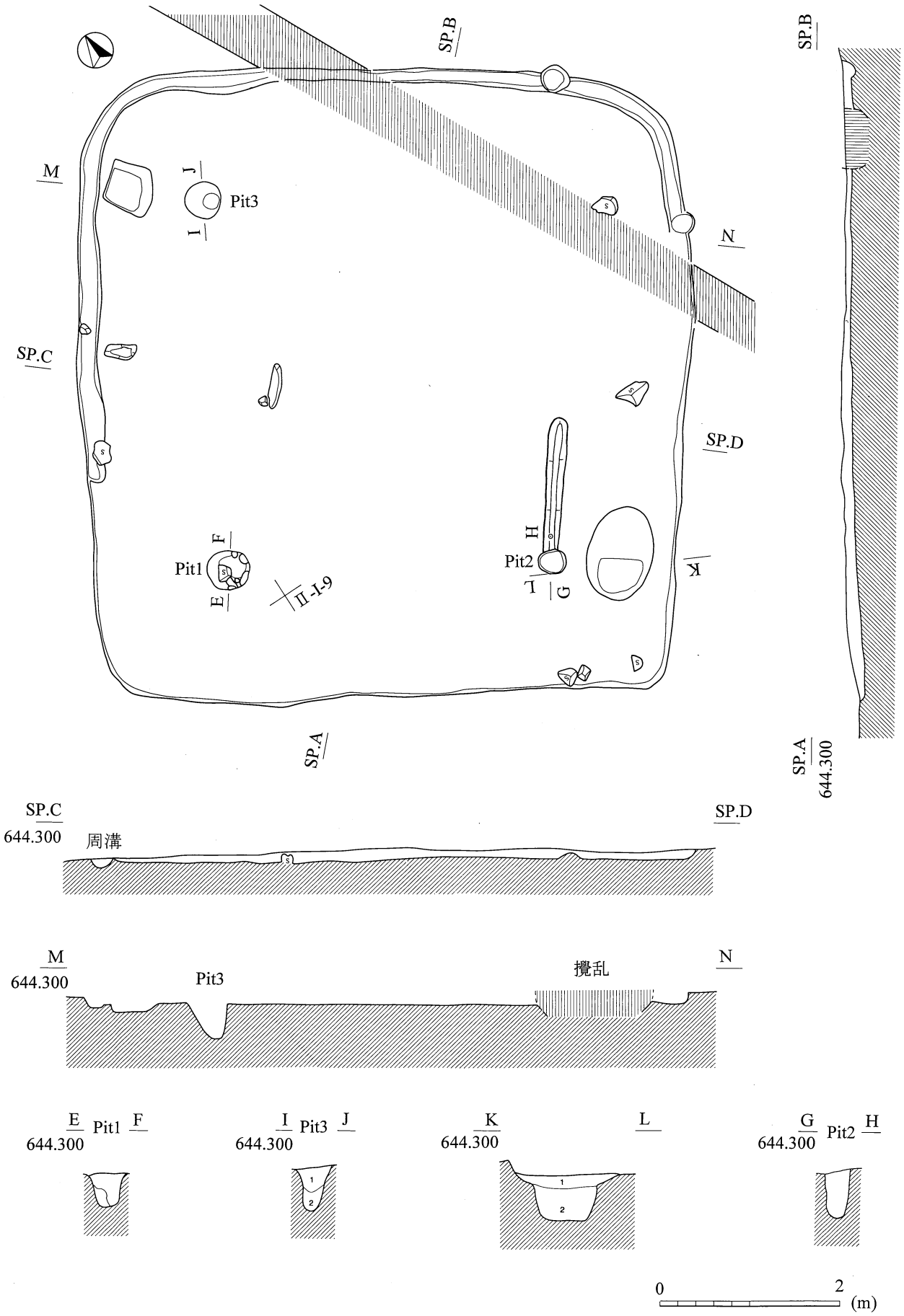
(2)　古墳時代

ＳＢ06（第226図）　　位置　Ⅰ－Ⅴ－11

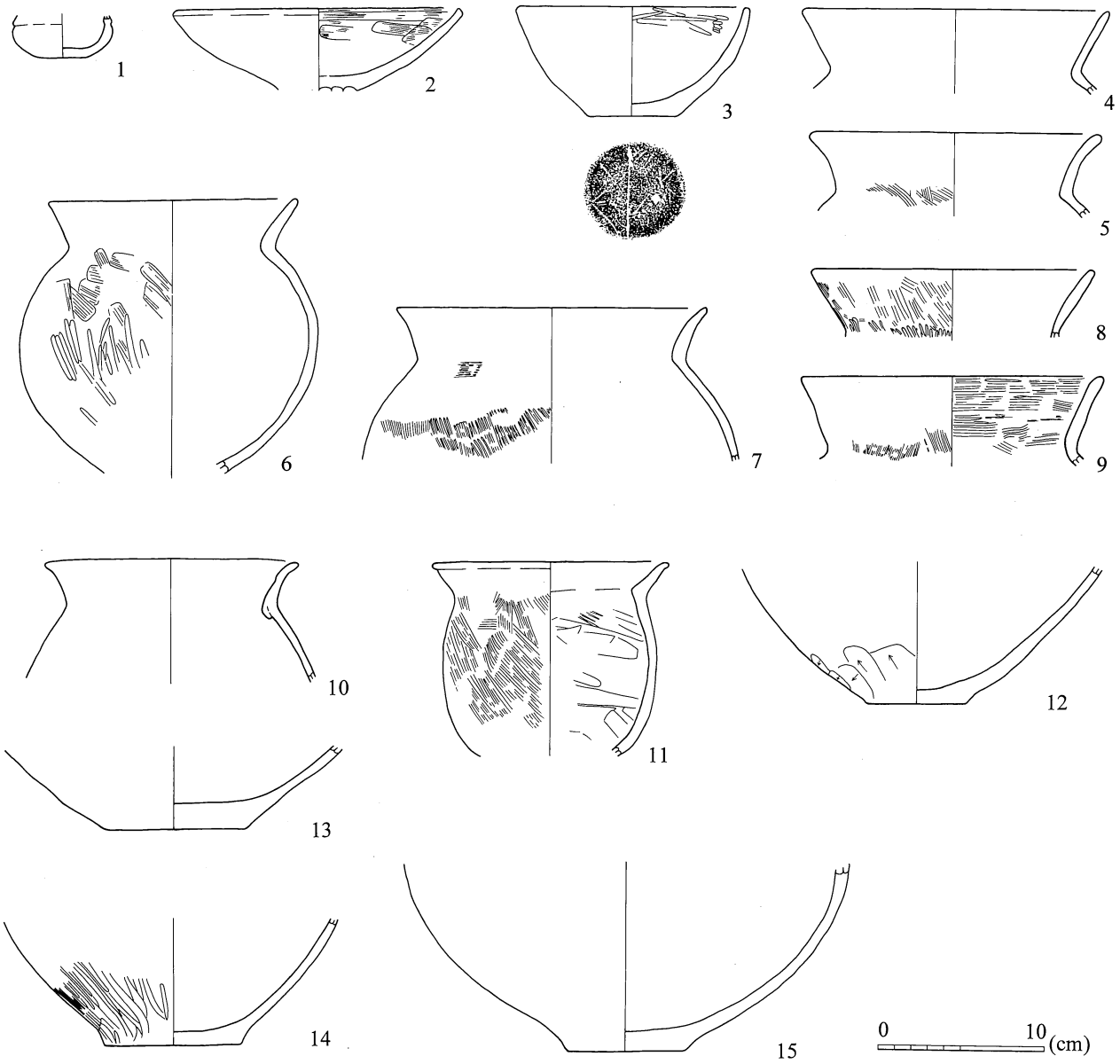
構　造　北西―南東に軸を持つ現存4.6×4.9ｍの方形。柱穴や炉などは検出されなかったが、床面が平坦であることや規模から住居跡と考えた。

遺　物　１～６土師器。１・２口縁が屈曲する坏。３壺。４～６甕。５外面にケズリ調整が、６ハケ目調整が施される。

時　期　古墳時代前期後葉



第228図　竪穴住居跡　ＳＢ09



第229図　竪穴住居跡　ＳＢ09出土土器

ＳＢ07（第227図）　　位置　Ⅲ－Ｋ－14

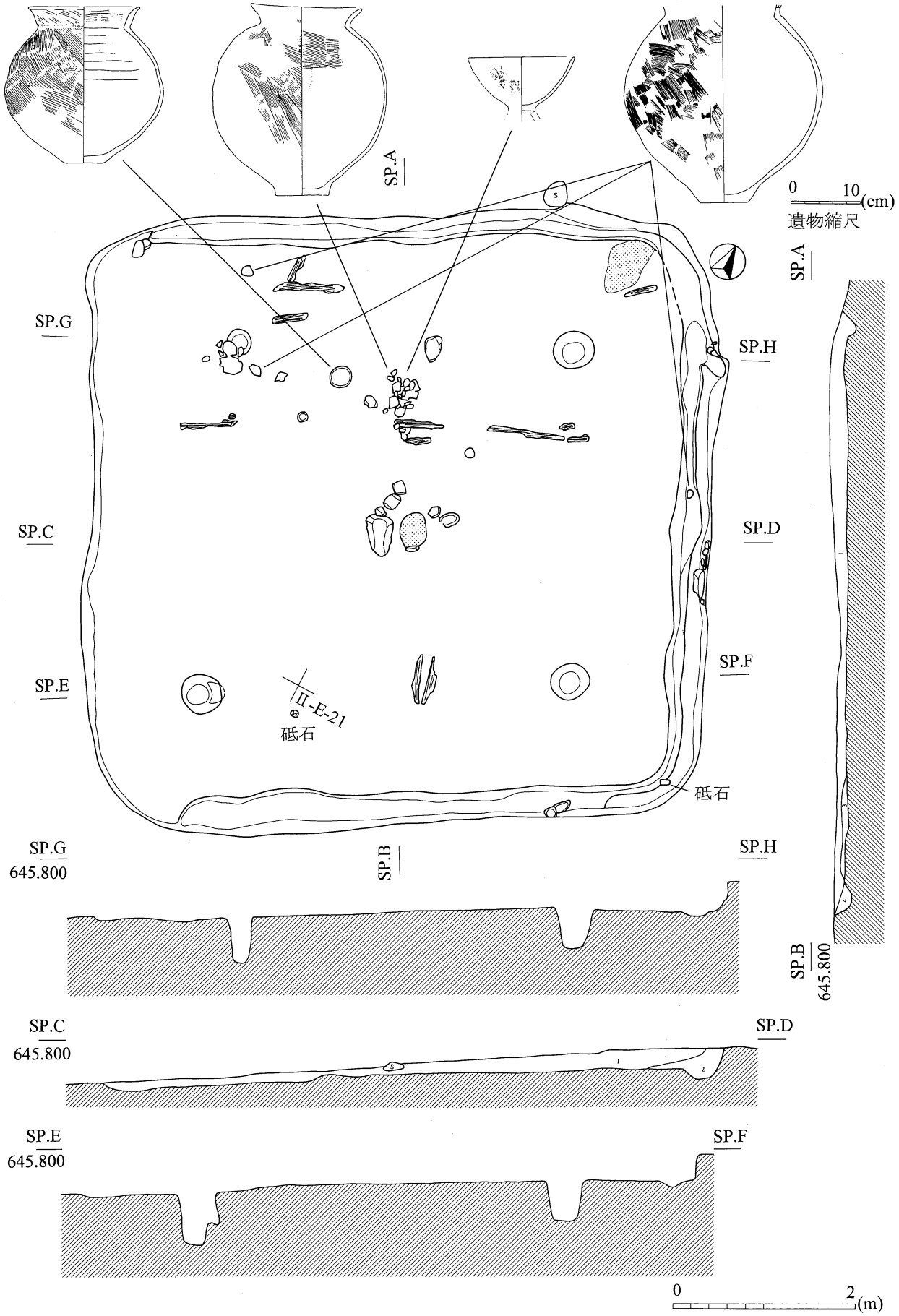
構　造　ほぼ南北に軸を持つ、現存6.0×6.0ｍの方形。削平が著しく床面、周溝の一部が北東隅に認められた。床面は失われていたが土壌化が著しい部分から本遺構の範囲を想定した。本住居跡の推定範囲内から柱穴と考えられる小土坑が４基（Pit１・２・４・５）検出された。炉やカマドは検出されなかった。

遺　物　１～３土師器器台。

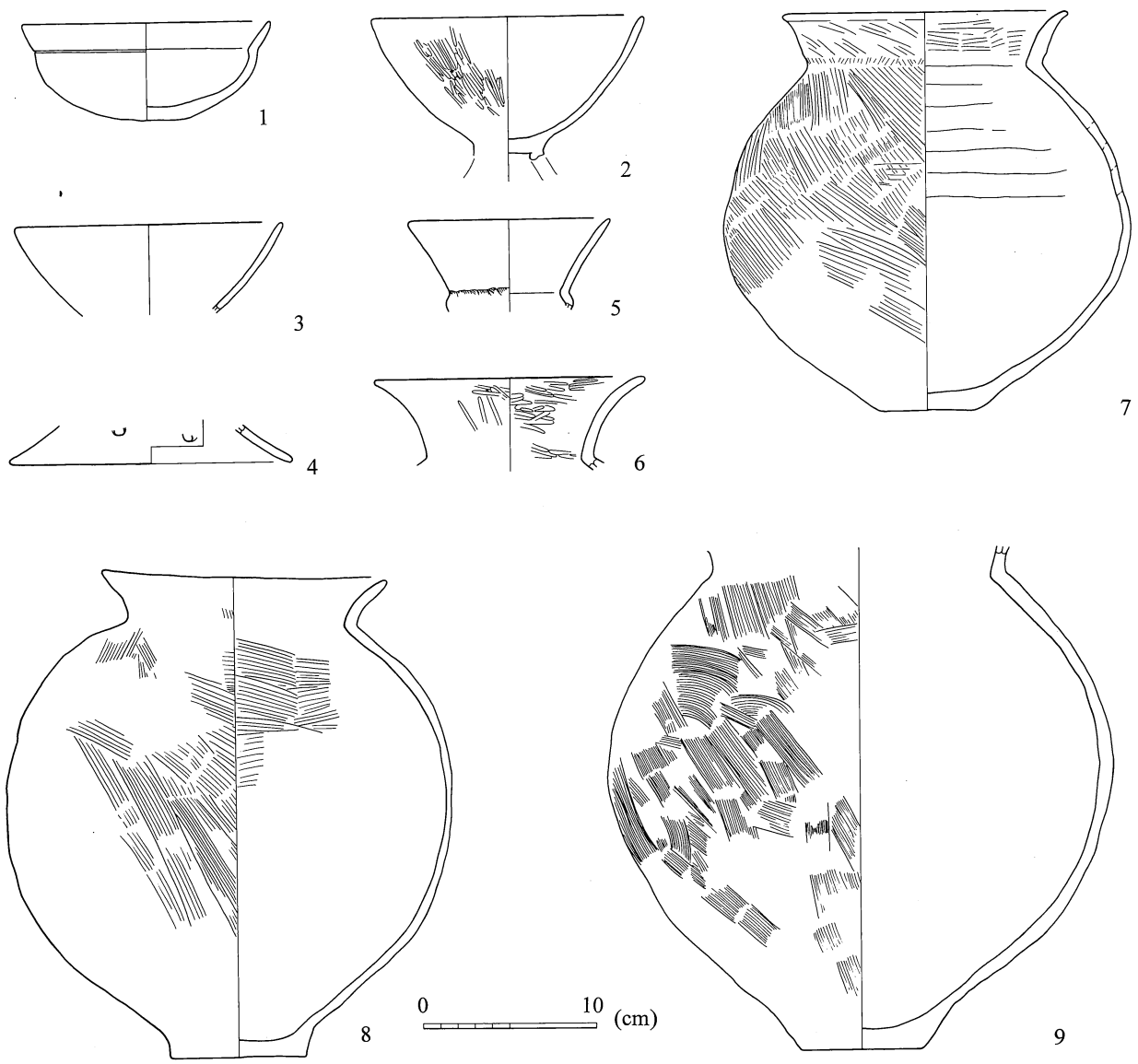
時　期　古墳時代前期後葉か

ＳＢ09（第228・229図）　　位置　Ⅱ－Ⅰ－３・４

構　造　北東―南西に軸を持つ6.9×6.7ｍの方形。床面はかろうじて全面検出されたが、南西側の削平は著しく、周溝は北東側しか検出されなかった。柱穴は北、西、南隅から計３基検出された。東隅の柱穴は



第230図　竪穴住居跡　ＳＢ10・土器出土状況



第231図　竪穴住居跡　ＳＢ10出土土器

暗渠によって切られたため検出できなかったと考えられる。また中央西よりに石を伴った炉跡が検出されている。

遺　物　１～15土師器。１手捏土器。２高坏の坏部。３底部に広葉樹の葉痕が見られる鉢。４～11甕。

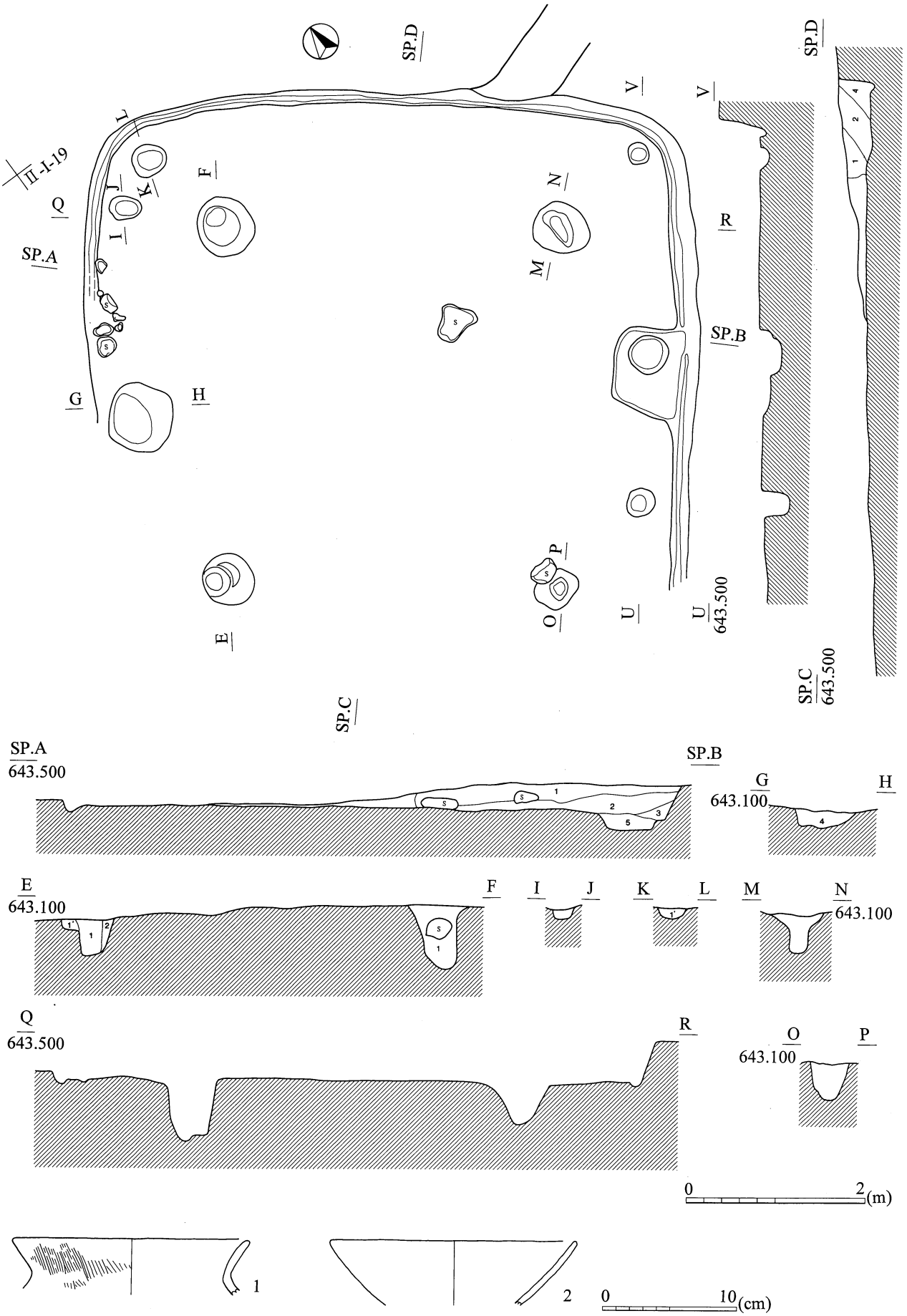
時　期　古墳時代前期後葉

ＳＢ10（第230・231図）　　位置　Ⅱ－Ｄ－20ほか

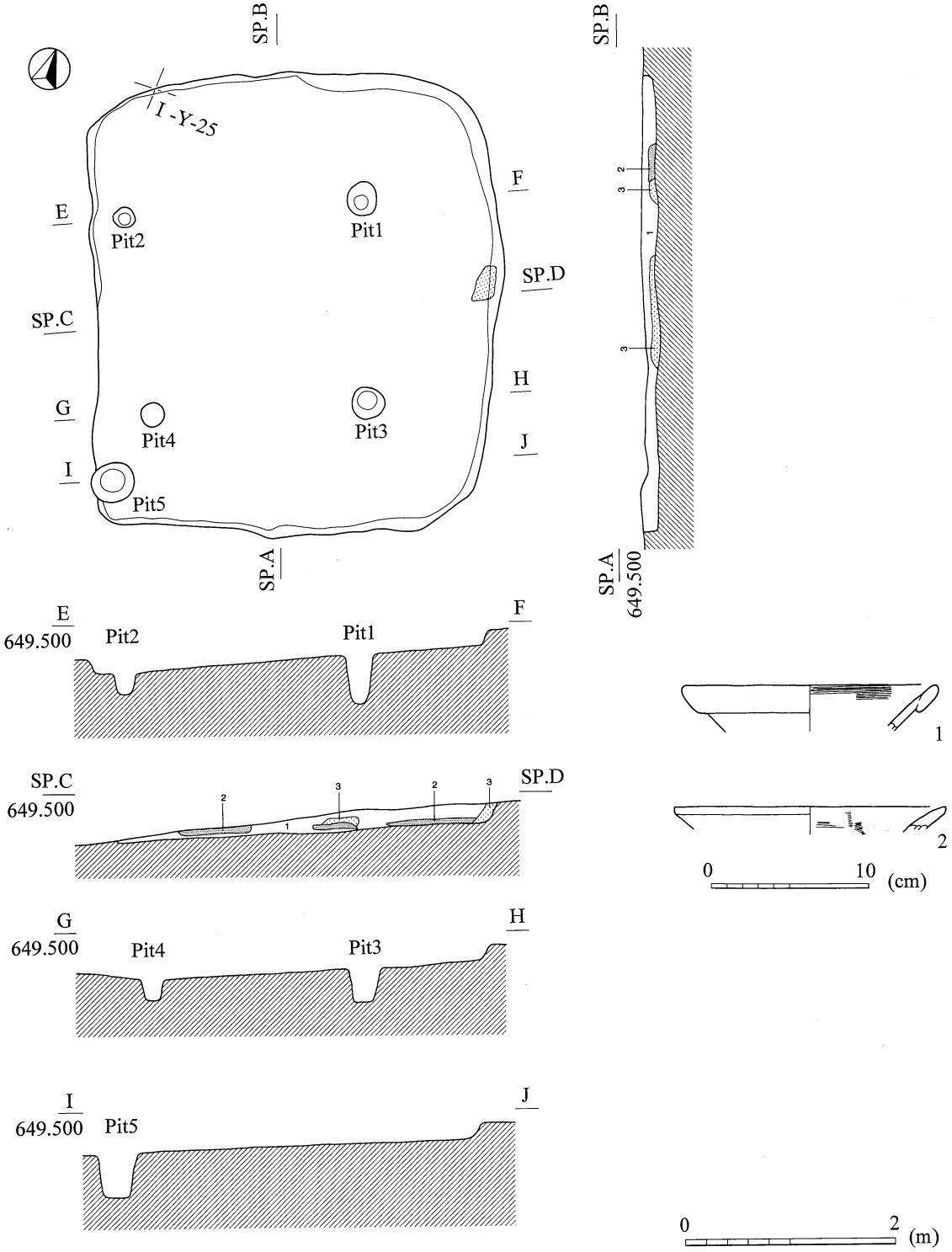
構　造　北西―南東に軸を持つ6.8×6.6ｍの方形。北東側の立ち上がりは明瞭だが、南西側は削平が著しい。周溝も南西辺は不明。柱穴は４基。中央には石を伴った炉が検出されている。

遺　物　１～９土師器。１口縁屈曲の坏（鉢）。２・３高坏の坏部。４高坏の脚か。５小型丸底壺。６壺の口縁か。７～９ハケ目調整甕。

時　期　古墳時代前期後葉



第232図　竪穴住居跡　ＳＢ14・出土土器



第233図　竪穴住居跡　ＳＢ19・出土土器

ＳＢ14（第232図）　　位置　Ⅱ－Ⅰ－19

構　造　北東―南西に軸を持つ現存5.4×6.8ｍの方形。西側の削平が著しく東側の立ち上がりと周溝が検出された。床面は平坦。柱穴は４基。北西辺と南東辺のほぼ中央にそれぞれ土坑が２基検出されたが、貯蔵穴か。

遺　物　１・２土師器。１甕。２高坏の坏部。

時　期　古墳時代前期後葉か

ＳＢ19（第233図）　　位置　Ⅳ－Ｙ－25

構　造　北西―南東に軸を持つ4.4×3.8ｍの方形。北辺・西辺の立ち上がりは明瞭だが、南西側の削平が著しい。床面は部分的にはっきりしていた。Pit１～４は柱穴。面的調査では炉が検出されていないが、土層断面で中央に炭化物、焼土が集中する部分が確認されており、これが炉であったと考えられる。

遺　物　１・２土師器。１二重口縁の壺か。

時　期　古墳時代前期後葉か

ＳＢ20（第234図）　　位置　Ⅲ－Ａ－11ほか

構　造　ほぼ南北に軸を持つ5.7×5.6ｍの方形。西辺がやや削平されていたが、立ち上がりは比較的はっきりしていた。床面も平坦。Pit１～４が柱穴。

遺　物　１～７土師器。１器台の脚か。２壺。３甕。４底部に広葉樹の葉痕。

時　期　古墳時代前期後葉か

ＳＢ21（第235～237図）　　位置　Ⅲ－Ｑ－４・９

構　造　北西―南東に軸を持つ7.4×7.0ｍの方形。東隅に周溝がめぐる。Pit１～４は柱穴。Pit１とPit４のほぼ中央に焼土の集中があり炉と考えられる。床面に炭化材が散在し、焼失住居跡か。

遺　物　１～10土師器。１・２器台。３・６二重口縁の壺。４・５・７ハケ目調整の甕。８壺か。９底部に広葉樹の葉痕。

時　期　古墳時代前期後葉

ＳＢ22（第238・239図）　　位置　Ⅲ－Ｖ－13

構　造　北東―南西に軸を持つ現存7.8×7.6ｍの方形。北東辺は明瞭だが、南西側は削平著しい。柱穴は４基（Pit１～４）。土層断面で住居跡中央に窪む部分があり炉か。床面に垂木と思われる炭化材が放射状に分布。焼失住居跡だろう。

遺　物　１～11土師器。１小型丸底壺。２・３器台の脚か。４鉢。５・７ハケ目調整小型甕。７底部に広葉樹の葉痕。６口唇に複節縄文原体による圧痕（刻み）、外面ハケ目調整、口縁内面に横位ミガキ調整が施された甕。９ハケ目調整の甕。８～11球胴の壺ないし甕。また床面直上から長さ17～20㎝、幅６～８㎝、重さ1100～1400ｇと法量がそろった円礫が出土（第284・285図121～125）。「こも編石」の類か。

時　期　古墳時代前期後葉

ＳＢ24（第240図）　　位置　Ⅲ－Ｑ－６

構　造　北東―南西に軸を持つ現存4.8×4.2ｍの方形。南半分は削平されていて、平面形はわからなかった。柱穴は４基（Pit１～４）。炉は不明。

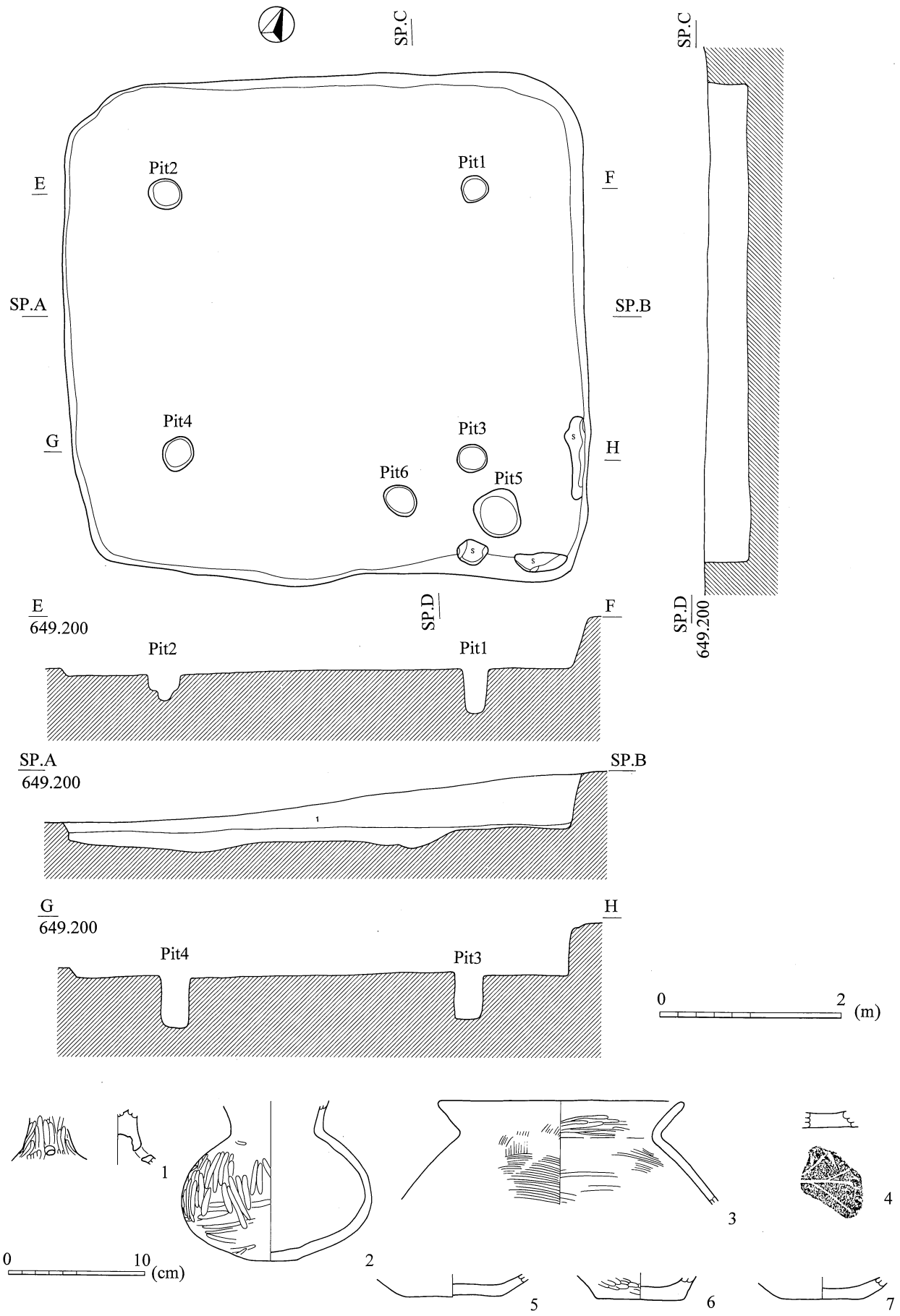
遺　物　１～４土師器。１～３精製小型丸底壺。

時　期　古墳時代前期後葉か

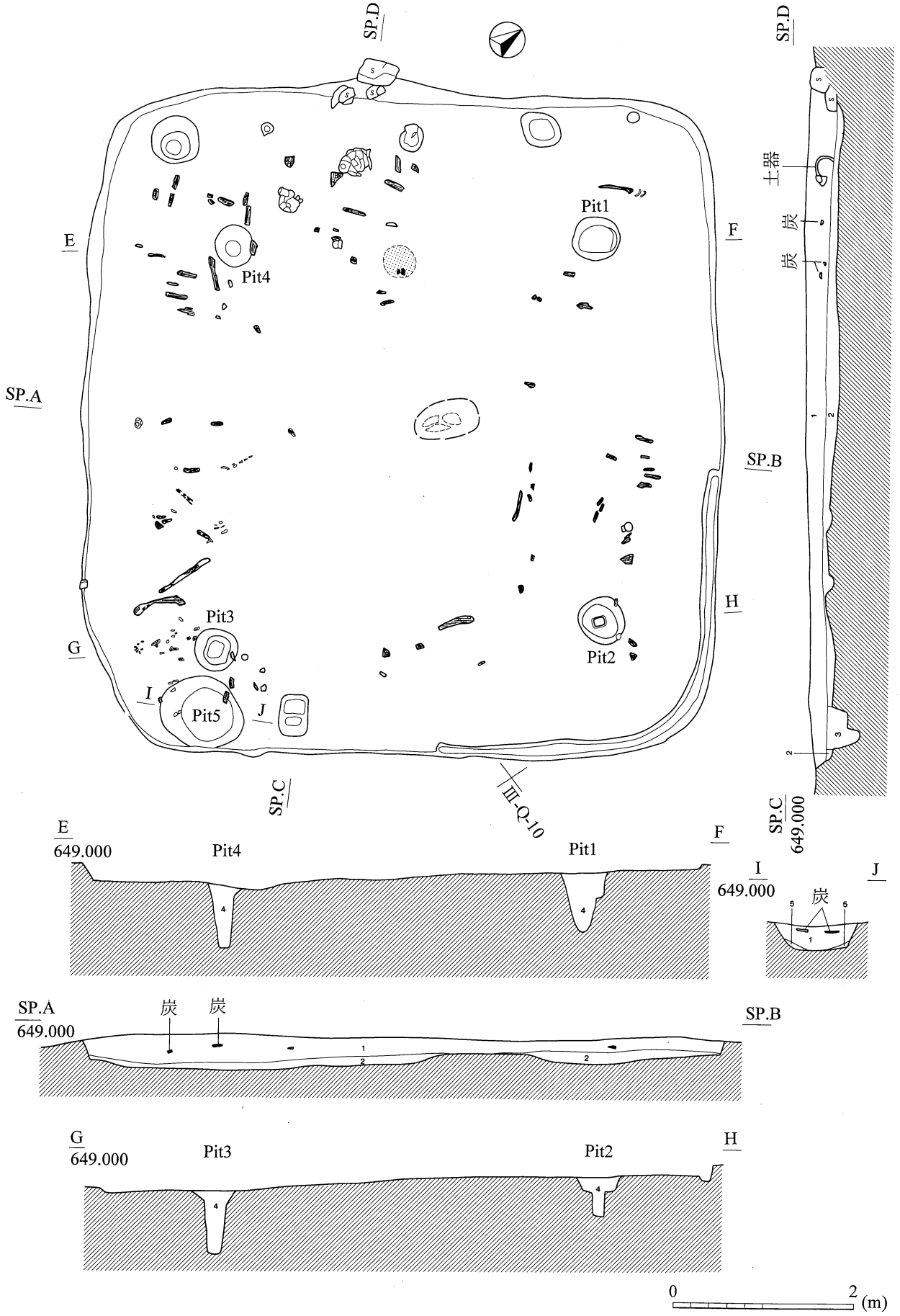
ＳＢ25（第241・242図）　　位置　Ⅲ－Ｑ－17

構　造　北西―南東に軸を持つ5.8×5.5ｍの方形。北辺から東辺にかけて周溝がめぐる。柱穴は４基（Pit１～４）。炉は不明。

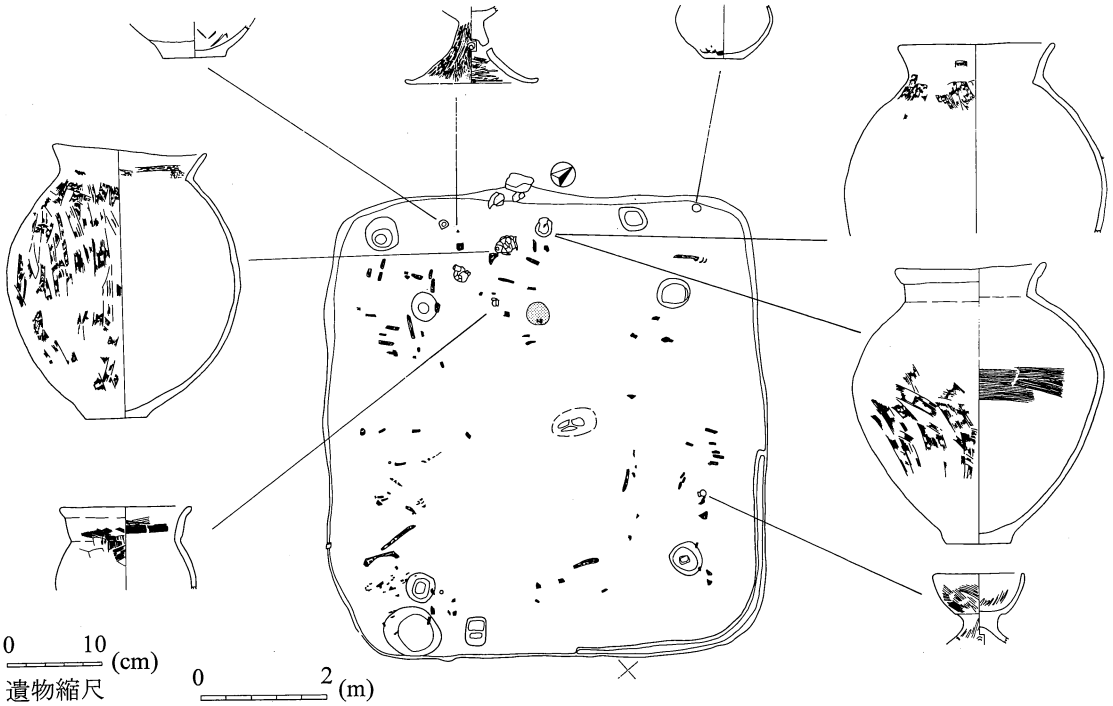
遺　物　１～８土師器。１小型精製鉢。２小型壺。３器台の脚か。４壺ないし器台。５二重口縁の球胴



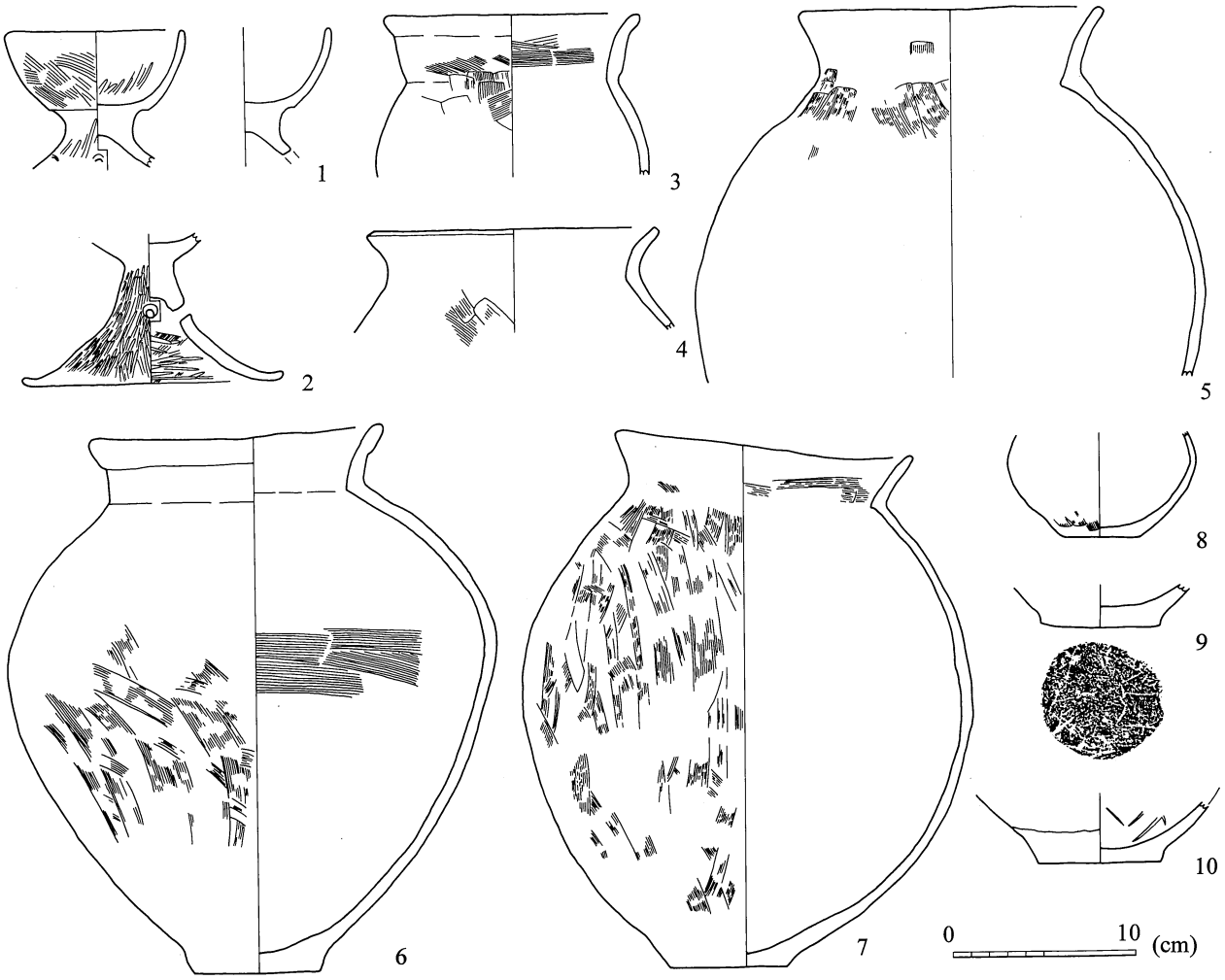
第234図　竪穴住居跡　ＳＢ20・出土土器



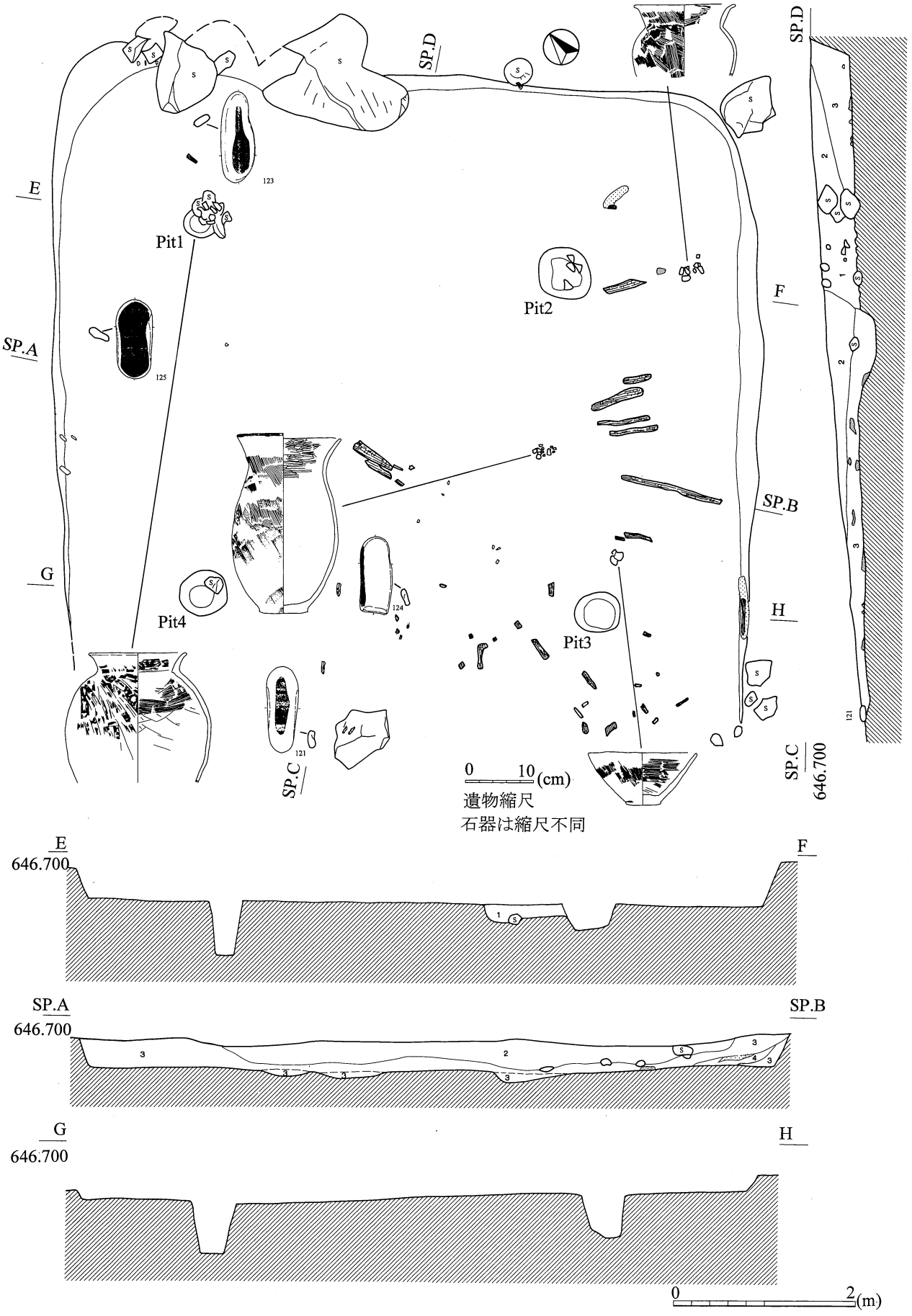
第235図　竪穴住居跡　ＳＢ21



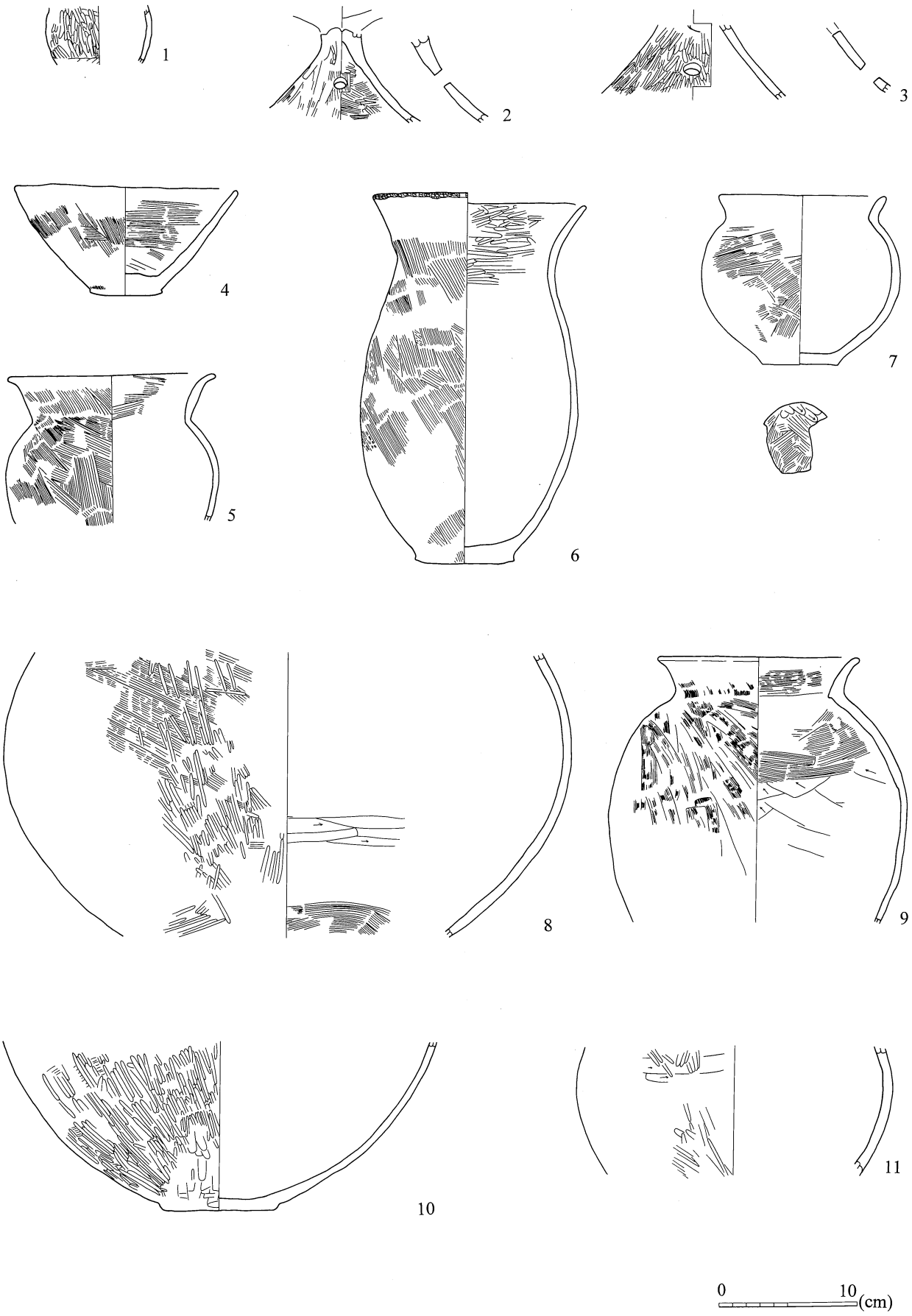
第236図　竪穴住居跡　ＳＢ21土器出土状況



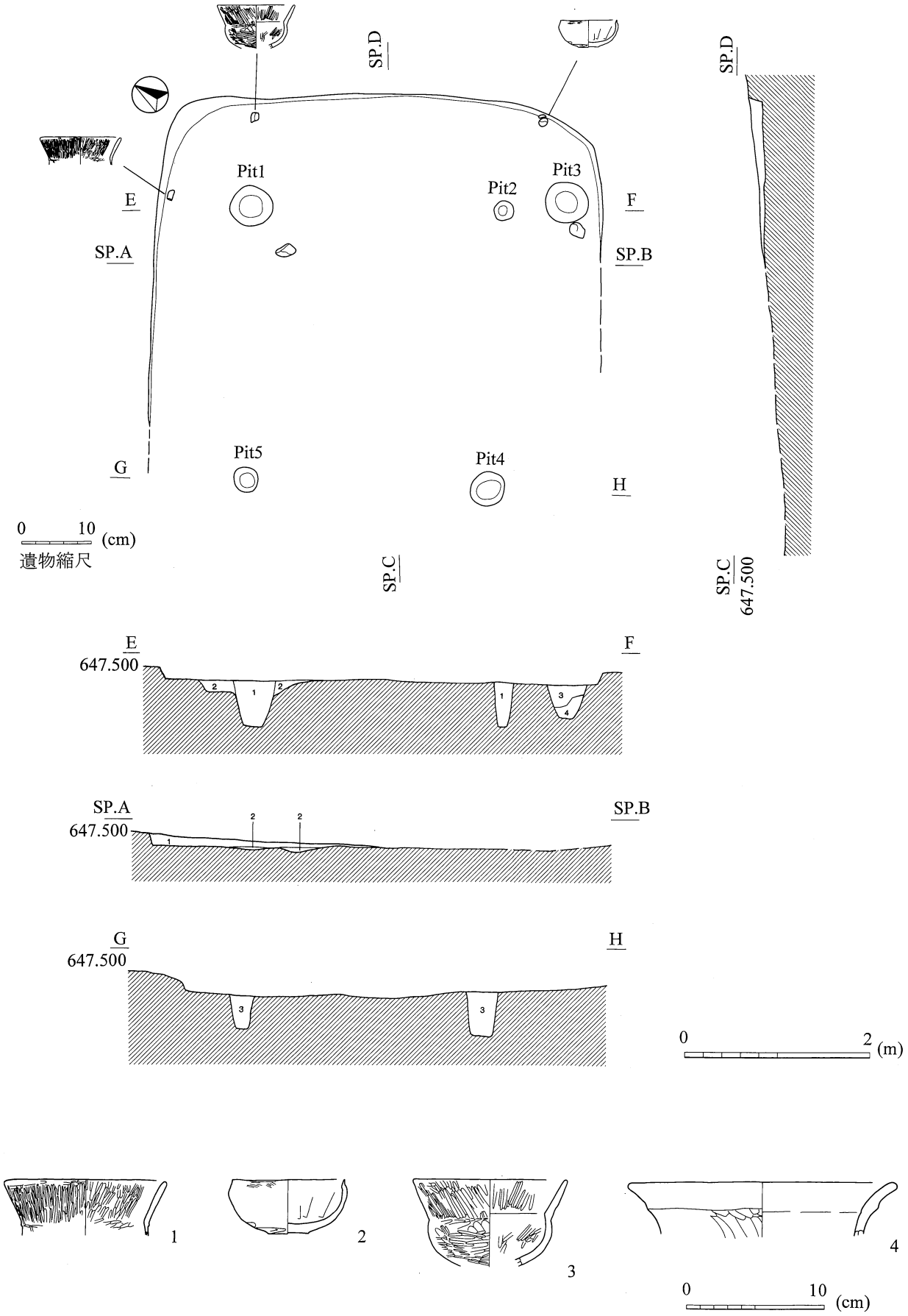
第237図　竪穴住居跡　ＳＢ21出土土器



第238図　竪穴住居跡　ＳＢ22・土器出土状況



第239図　竪穴住居跡　ＳＢ22出土土器



第240図　竪穴住居跡　ＳＢ24・出土土器

壺。６・７球胴壺ないし甕。

時　期　古墳時代前期後葉

ＳＢ27（第243～246図）　　位置　Ⅲ－Ｑ－25

構　造　北東―南西に軸を持つ6.2×5.6ｍの方形。直に立ち上がる。柱穴は４基（Pit１～４）。焼土の集中などは明確ではなかったが、Pit１と２の間に長細い石が床面に位置していて、あるいはこれが炉に伴う石とも考えられる。床下には北西辺、北東辺、南東辺に掘り方が存在する。

遺　物　１～25土師器。１～３器台。４口縁屈曲する小型鉢。５・６二重口縁の壺。７～12甕。９～12外面ハケ目調整の球胴甕。13～15台付甕ないしその脚。16・17ハケ目調整のあとミガキ調整が施された球胴甕ないし壺。18～25底。床直から台石（第285図126）が出土。

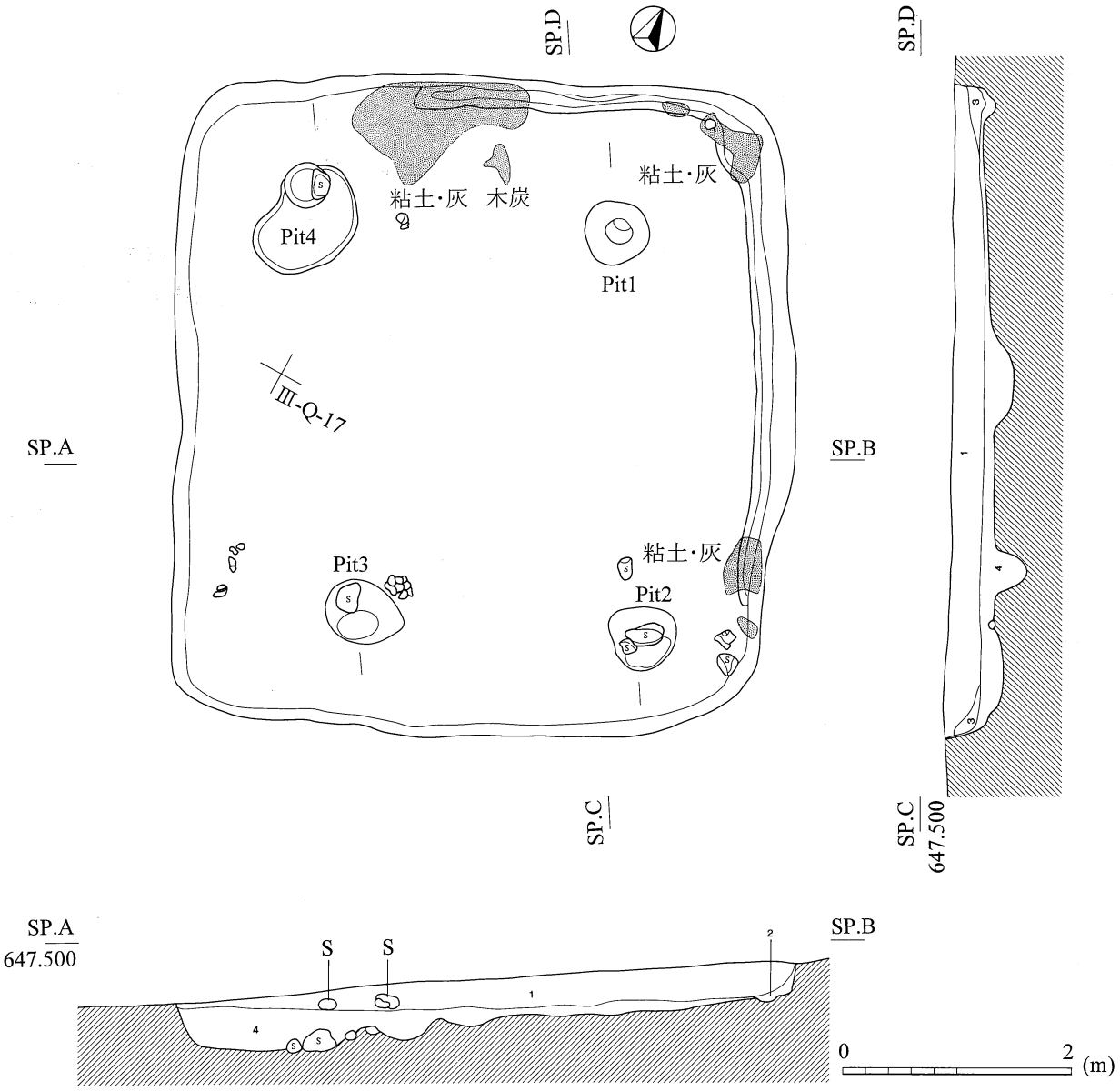
時　期　古墳時代前期後葉

ＳＢ30（第247～248図）　　位置　Ⅲ－Ｆ－１

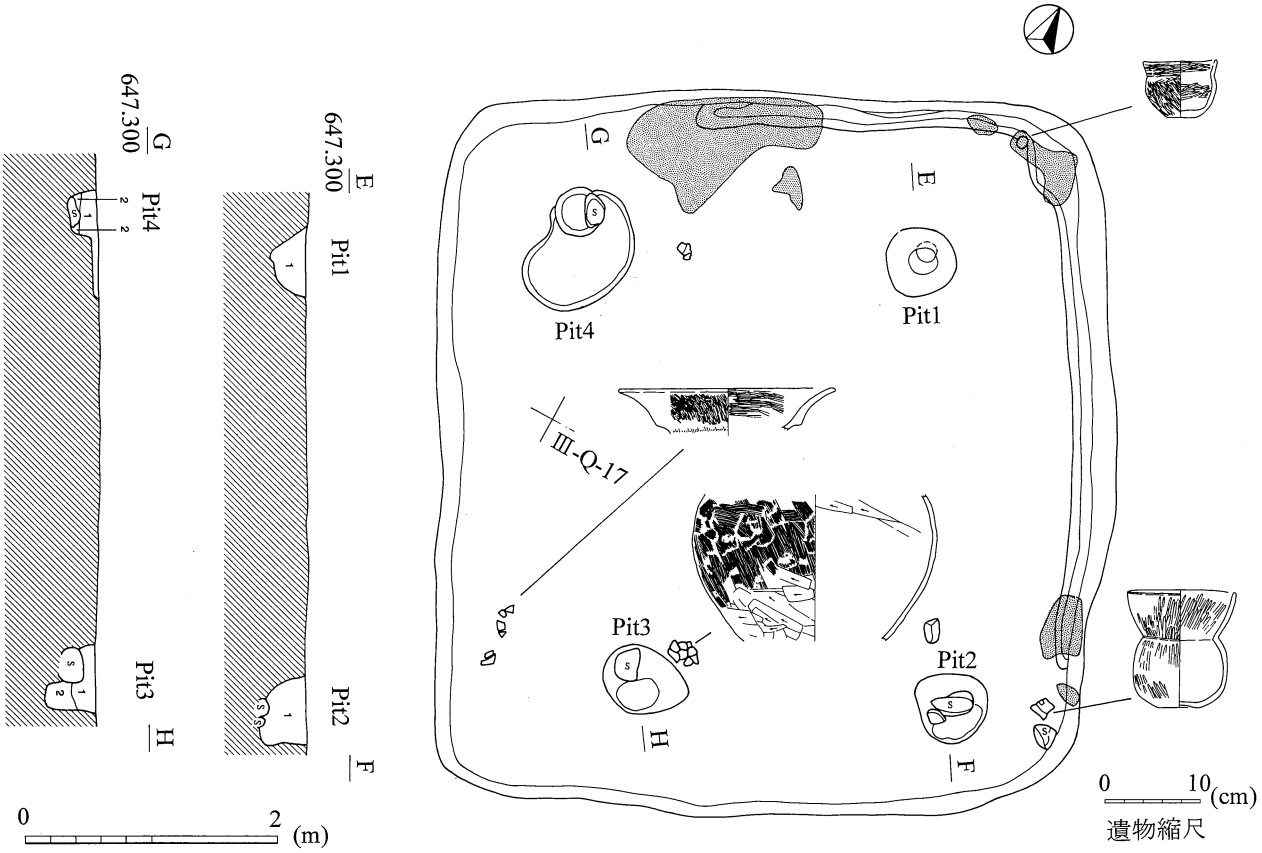
構　造　北東―南西に軸を持つ4.6×4.2ｍの方形。立ち上がりは緩やか。柱穴は４基（Pit１～４）。Pit３とPit４のほぼ中間のやや中央よりに焼土の集中部分があり、炉と考えられる。

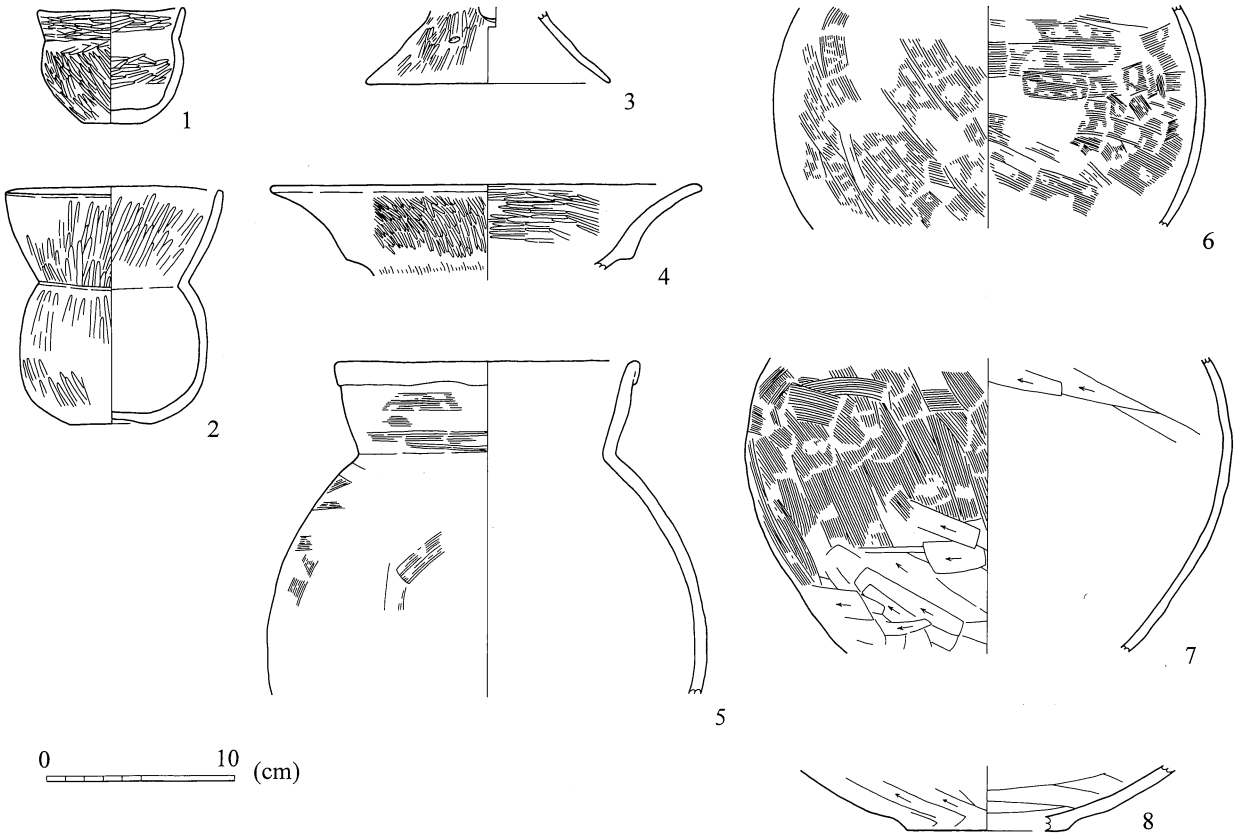
遺　物　１・２土師器。１器台。２外面ミガキ調整の球胴壺か。

時　期　古墳時代前期後葉

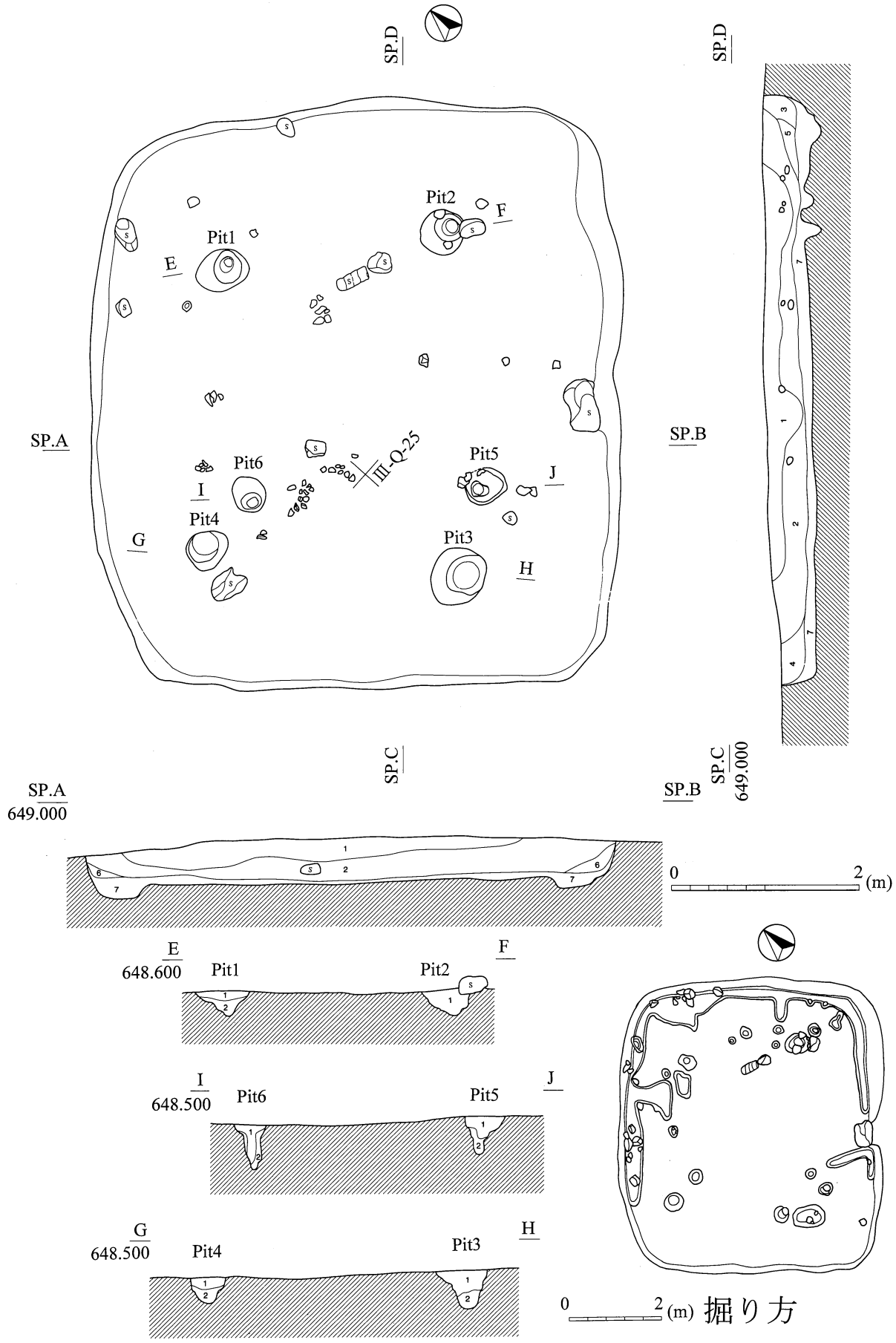


第241図　竪穴住居跡　ＳＢ25

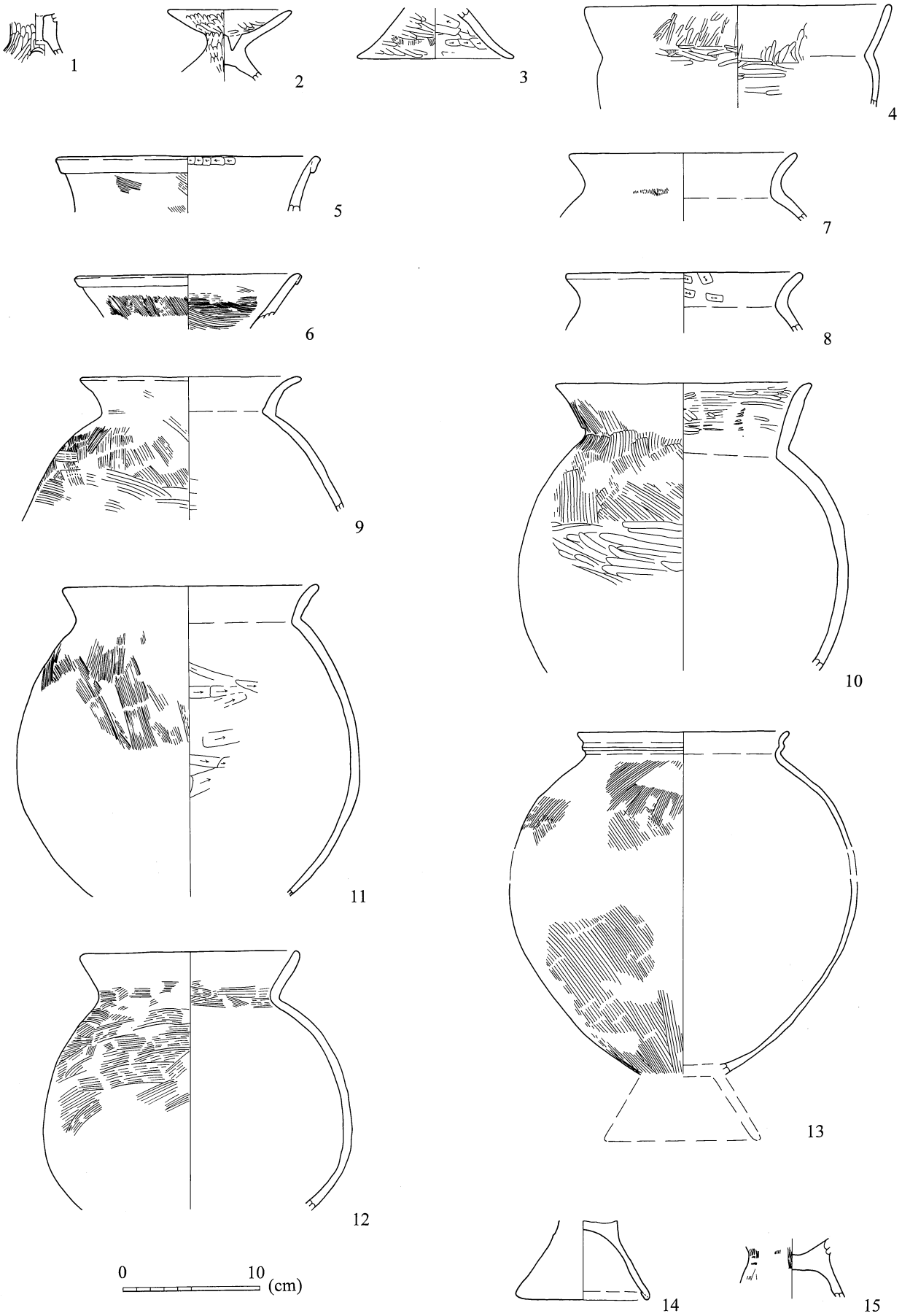




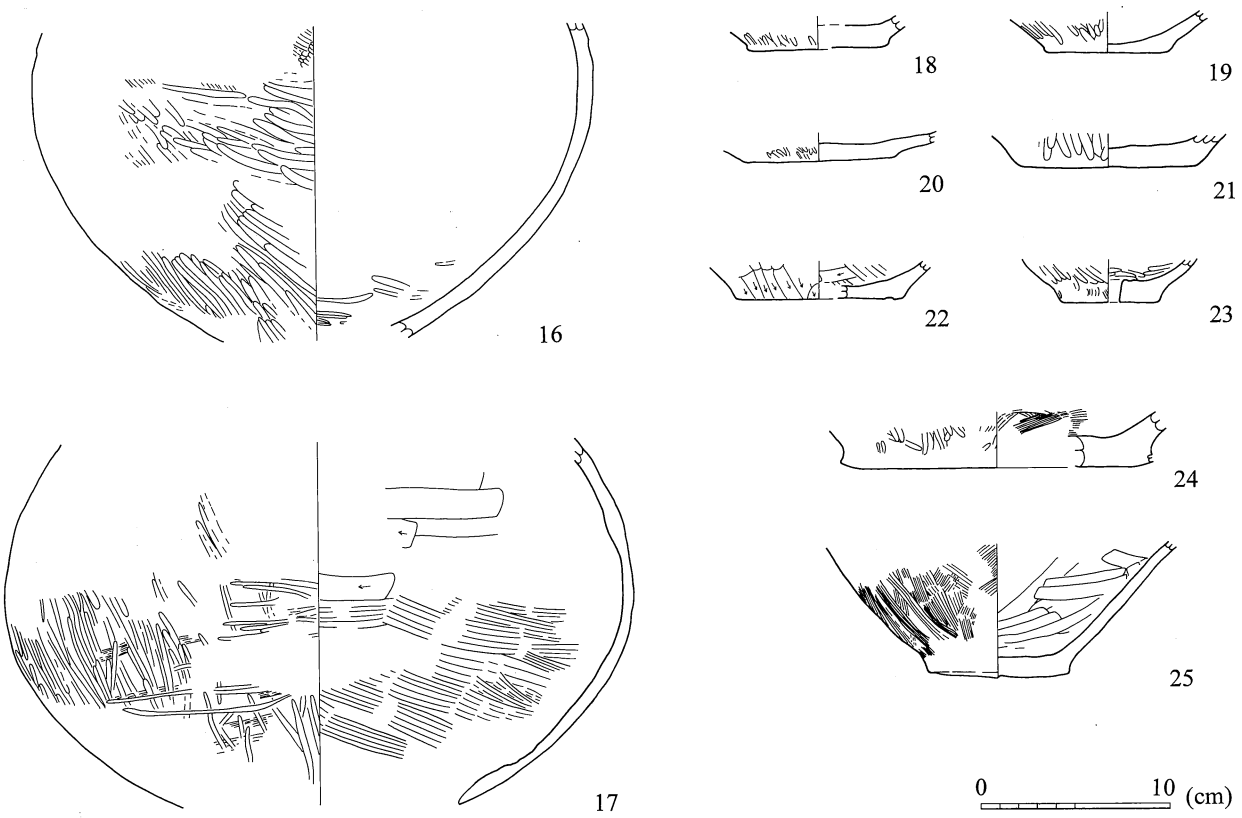
第242図　竪穴住居跡　ＳＢ25・出土土器



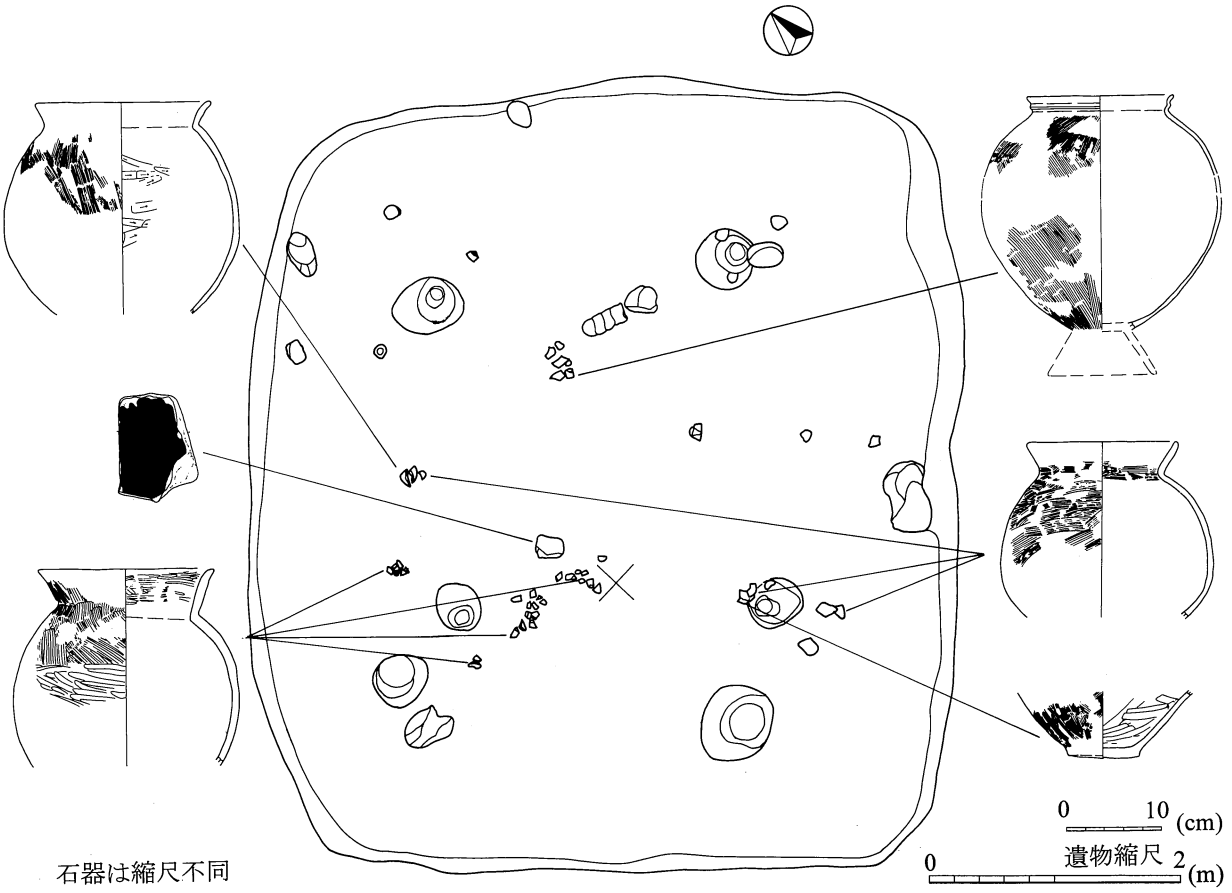
第243図　竪穴住居跡　ＳＢ27



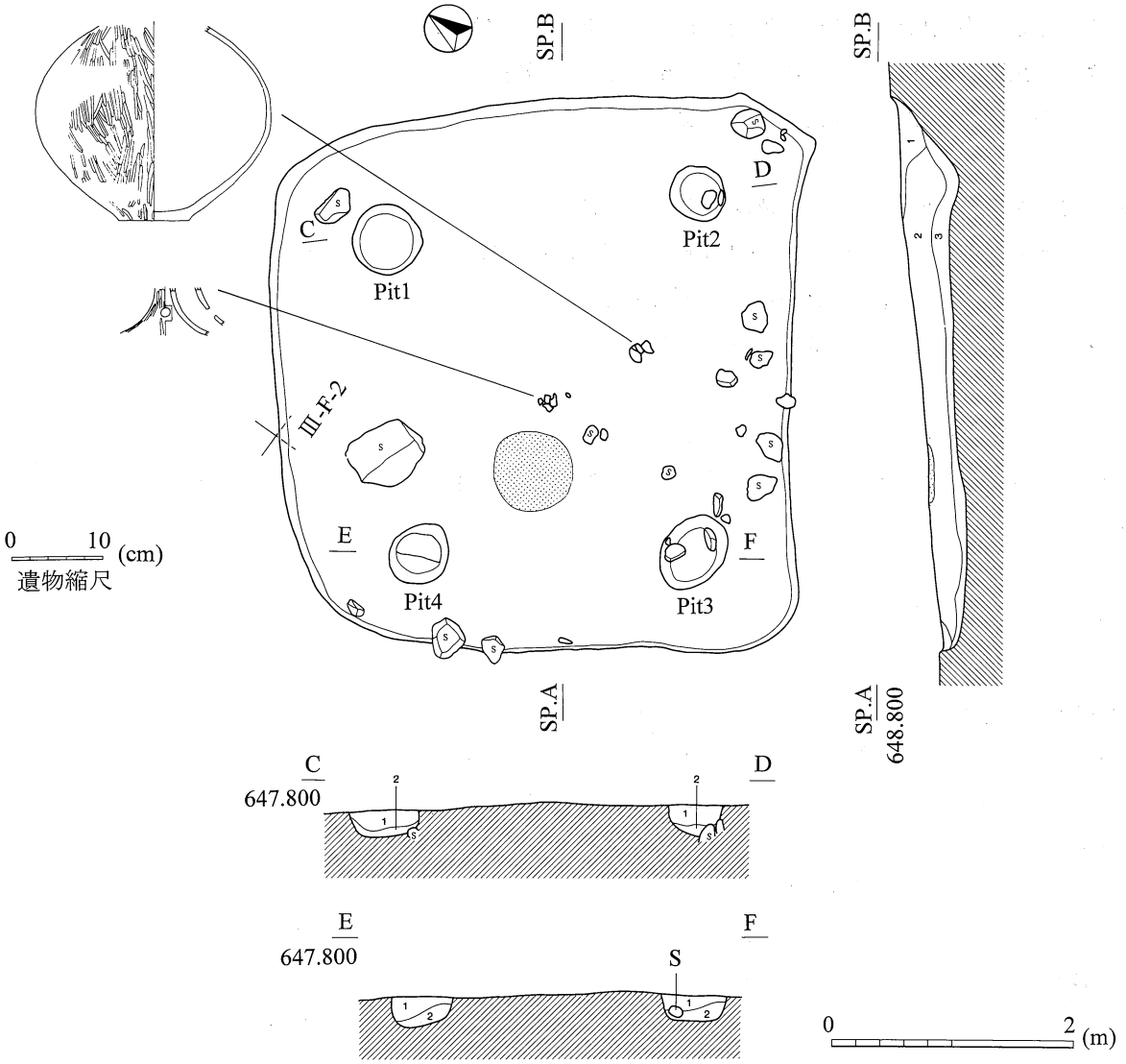
第244図　竪穴住居跡　ＳＢ27出土土器(1)



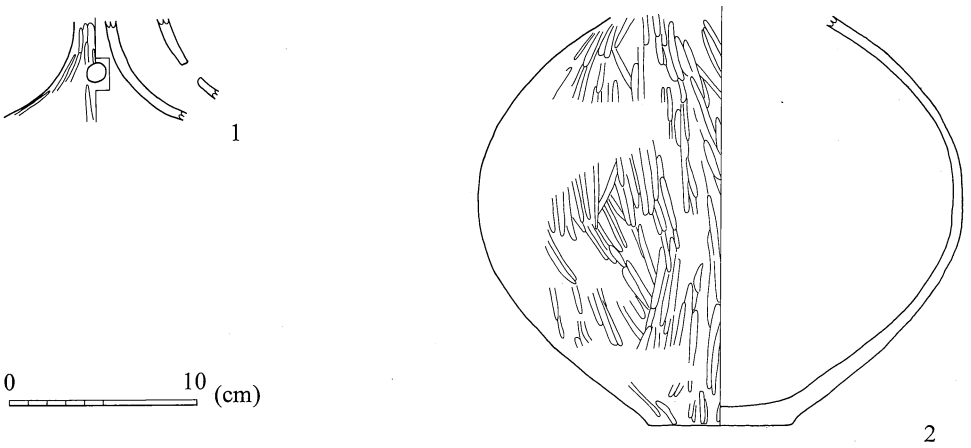
第245図　竪穴住居跡　ＳＢ27出土土器(2)



第246図　竪穴住居跡　ＳＢ27土器出土状況



第247図　竪穴住居跡　ＳＢ30・土器出土状況



第248図　竪穴住居跡　ＳＢ30出土土器

(3) 古代

ＳＢ01（第249・250図）　　位置　Ⅲ－Ａ－13

構　造　北東―南西に軸を持つ4.3×4.6ｍの長方形。柱穴は４基（Pit１～４）。北東辺ほぼ中央にカマド。

遺　物　１黒色土器坏。２～５須恵器坏。６～８土師器甕。９須恵器甕。

時　期　平安時代初頭　佐久編年４～６段階

ＳＢ02（第251・252図）　　位置　Ⅲ－Ａ－17

構　造　北西―南東に軸を持つ3.4×3.4ｍの方形。北西辺ほぼ中央にカマド。

遺　物　１～３須恵器蓋。４土師器坏。５黒色土器坏。６・７土師器甕。

時　期　平安時代初頭　佐久編年４～６段階

ＳＢ03（第253・254図）　　位置　Ⅲ－Ａ－23

構　造　北西―南東に軸を持つ4.4×3.7ｍの長方形。北西辺中央にカマドの痕跡（掘り方？）。柱穴は４基（Pit１～４）。

遺　物　１黒色土器坏。２・３土師器底。４須恵器蓋。

時　期　平安時代前半か

ＳＢ04（第255図）　　位置　Ⅲ－Ｆ－７ほか

構　造　北西―南東に軸を持つ4.8×4.4ｍの方形。柱穴は４基（Pit１～４）。カマド、炉は検出されなかった。住居構築材と考えられる炭化材が検出された。焼失住居であろうか。

遺　物　１須恵器坏。

時　期　奈良時代から平安時代前半か

ＳＢ05（第256・257図）　　位置　Ⅱ－Ｅ－15ほか

構　造　ほぼ東西に軸を持つ5.4×4.2ｍの方形。東辺中央にカマド・小土坑が３基（Pit１～３）検出された。柱穴か。Pit４は貯蔵穴か。調査担当者は２軒の住居跡を想定したが、床面レベルが同一であり、柱穴も対応する点などより１軒の住居跡と判断される。

遺　物　１～11須恵器坏。12黒色土器坏。13～15土師器甕。16～23須恵器。19蓋、20・22壺、21・23鉢。

時　期　平安時代初頭　佐久編年４～６段階

ＳＢ18（第258・259図）　　位置　Ｉ－Ｕ－11

構　造　北東―南西に軸を持つ4.8×4.0ｍの方形。北東辺ほぼ中央にカマド。南東辺に周溝がめぐる。柱穴は検出されなかった。

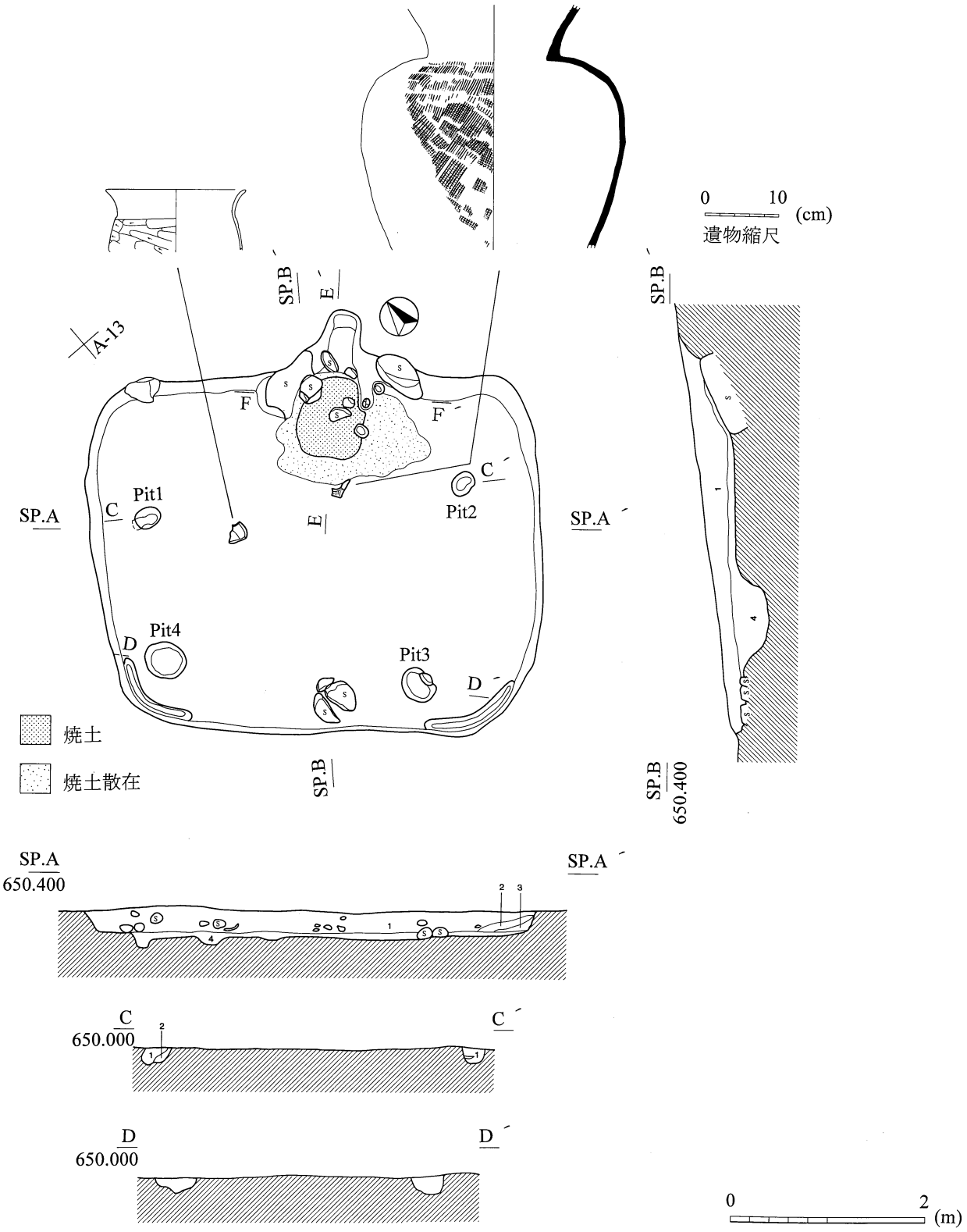
遺　物　１・２須恵器坏。３～９土師器甕。　**時　期**　平安時代初頭か

ＳＢ29（第260図）　　位置　Ⅲ－Ｆ－８ほか

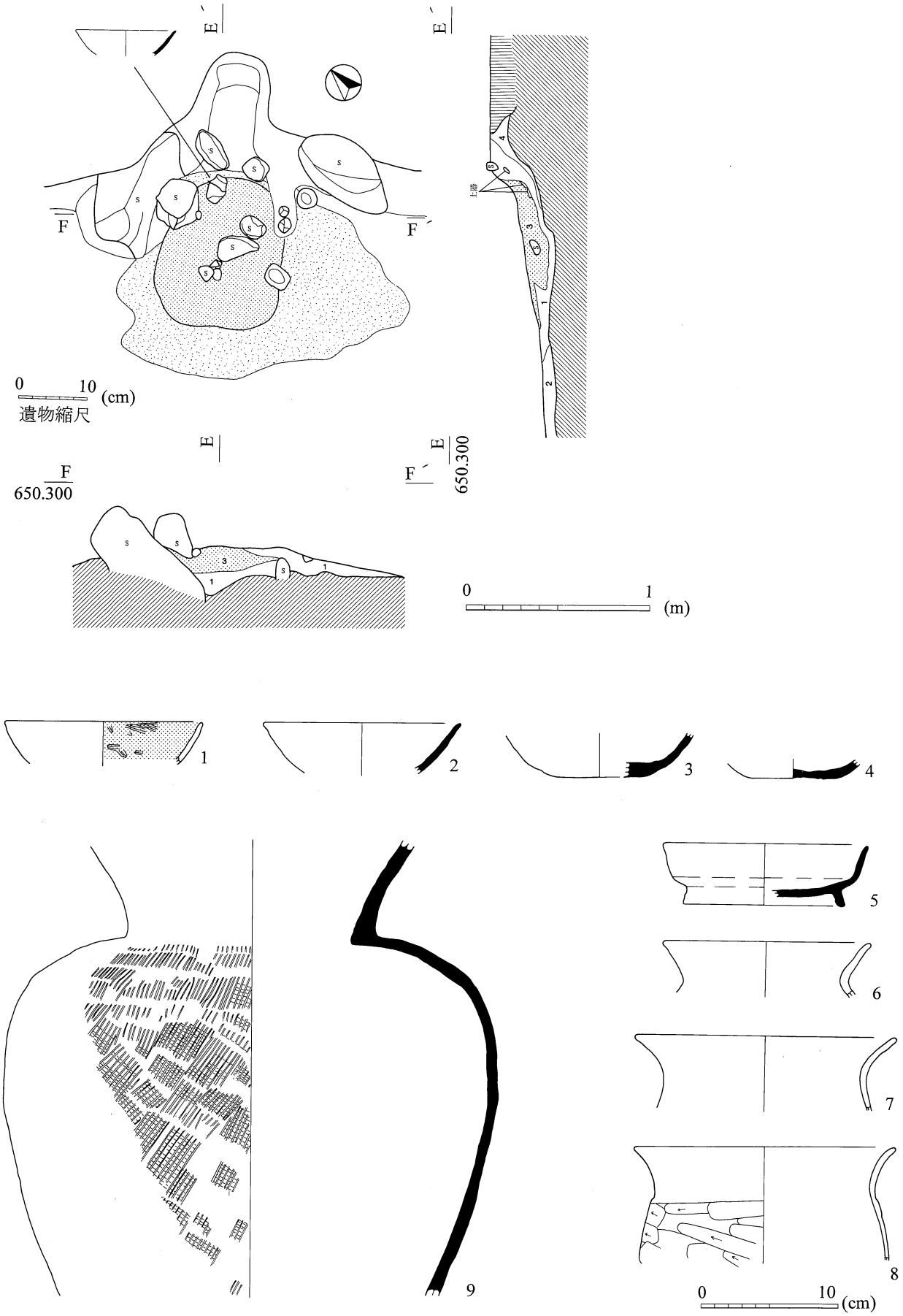
構　造　北西―南東に軸を持つ5.4×4.7ｍの歪んだ長方形。カマドや明確な柱穴もないので、竪穴住居跡かどうか疑問なしとはしないが、立ち上がりと床面が検出されたことと規模から住居跡と考えた。

遺　物　１・２須恵器坏。

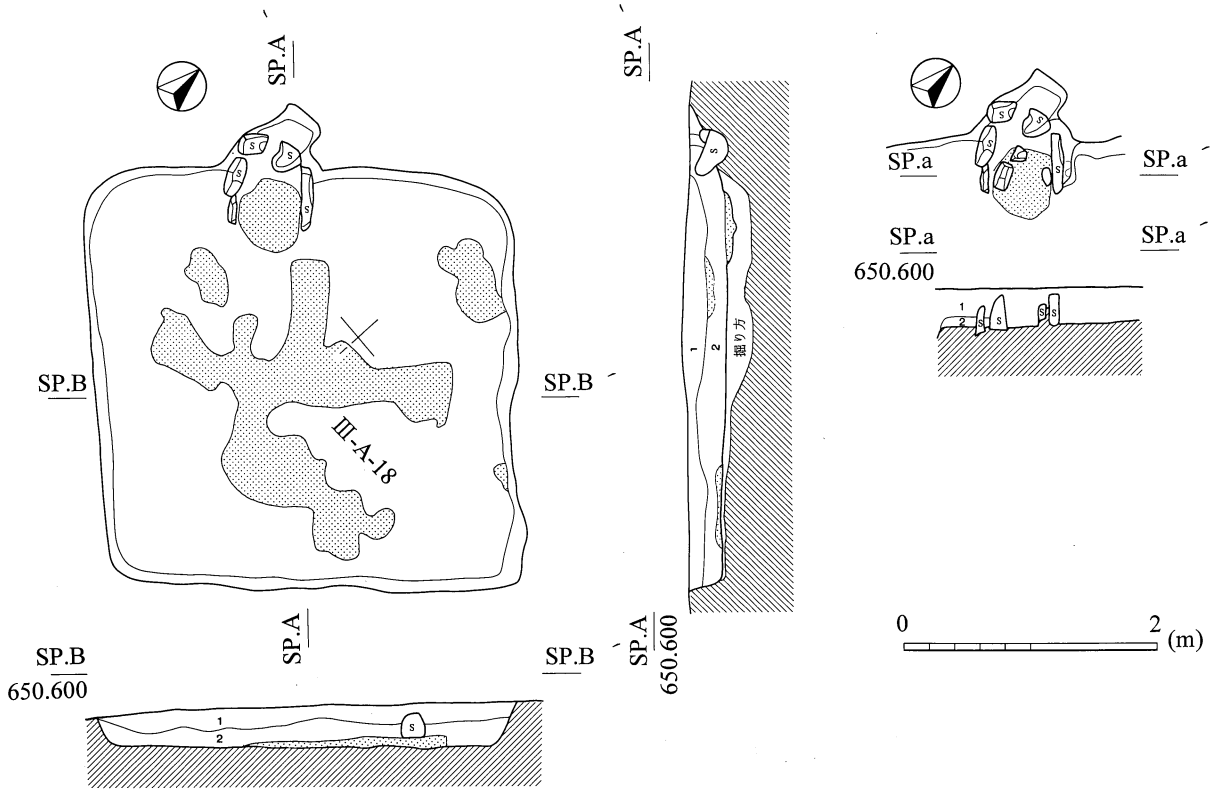
時　期　奈良時代から平安時代初頭か



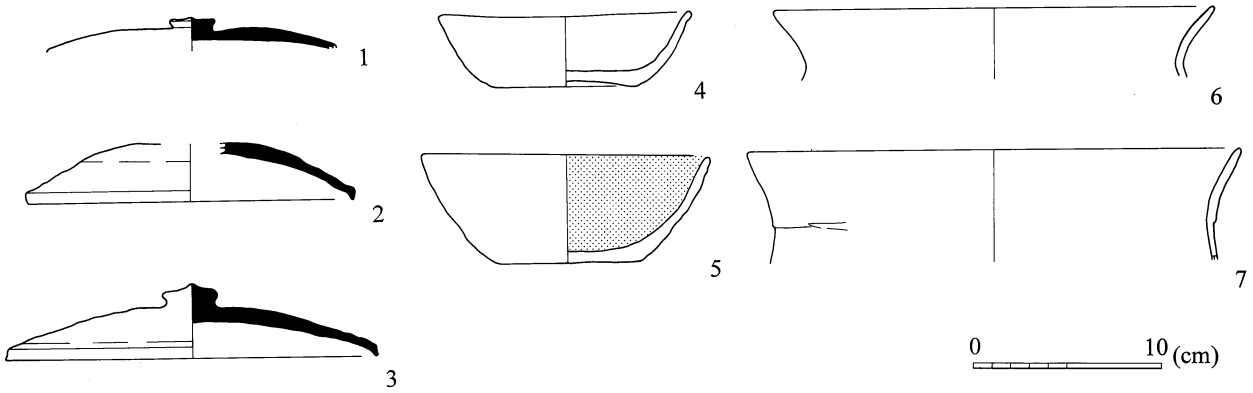
第249図　竪穴住居跡　ＳＢ01・土器出土状況



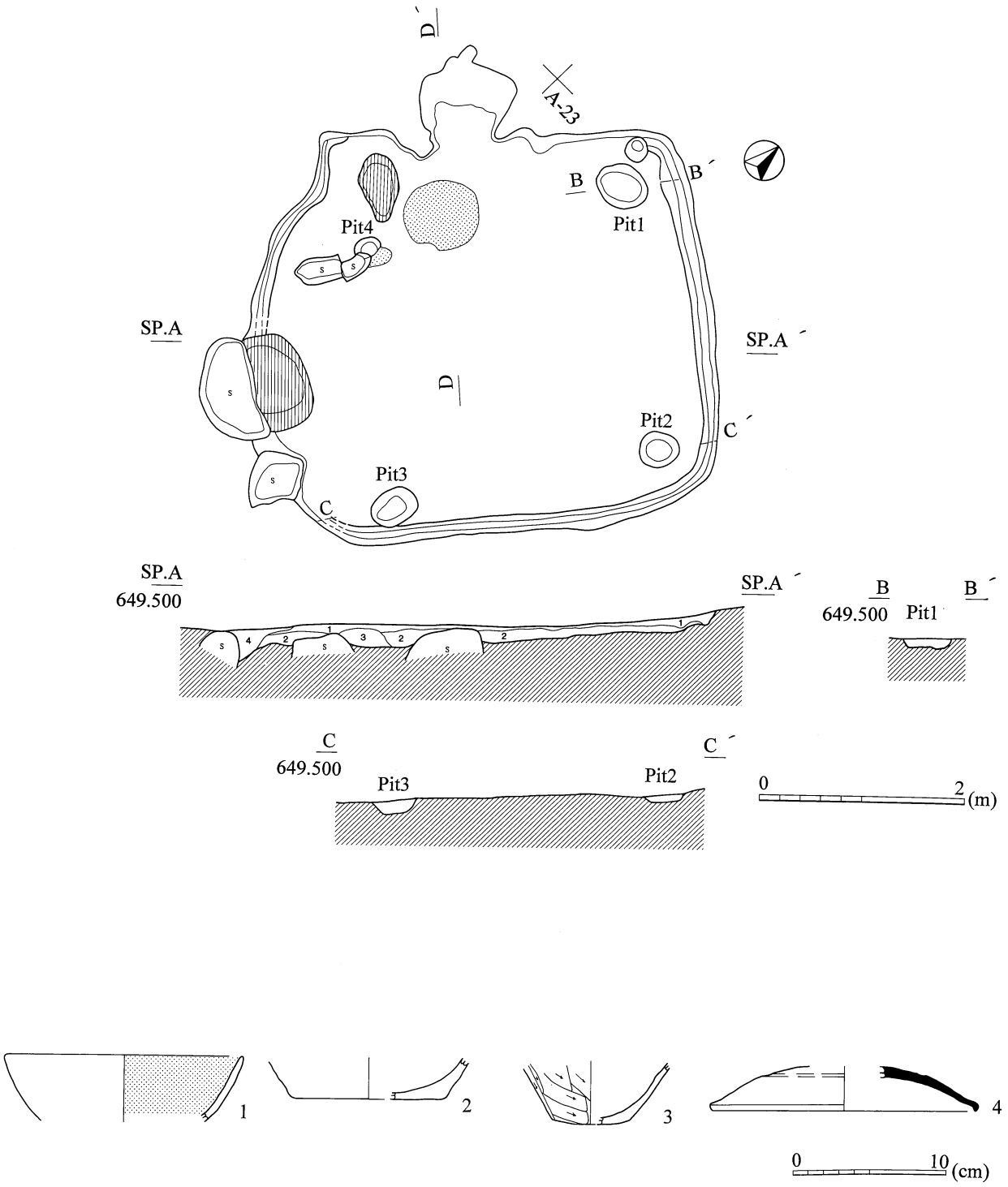
第250図　竪穴住居跡　ＳＢ01カマド・出土土器



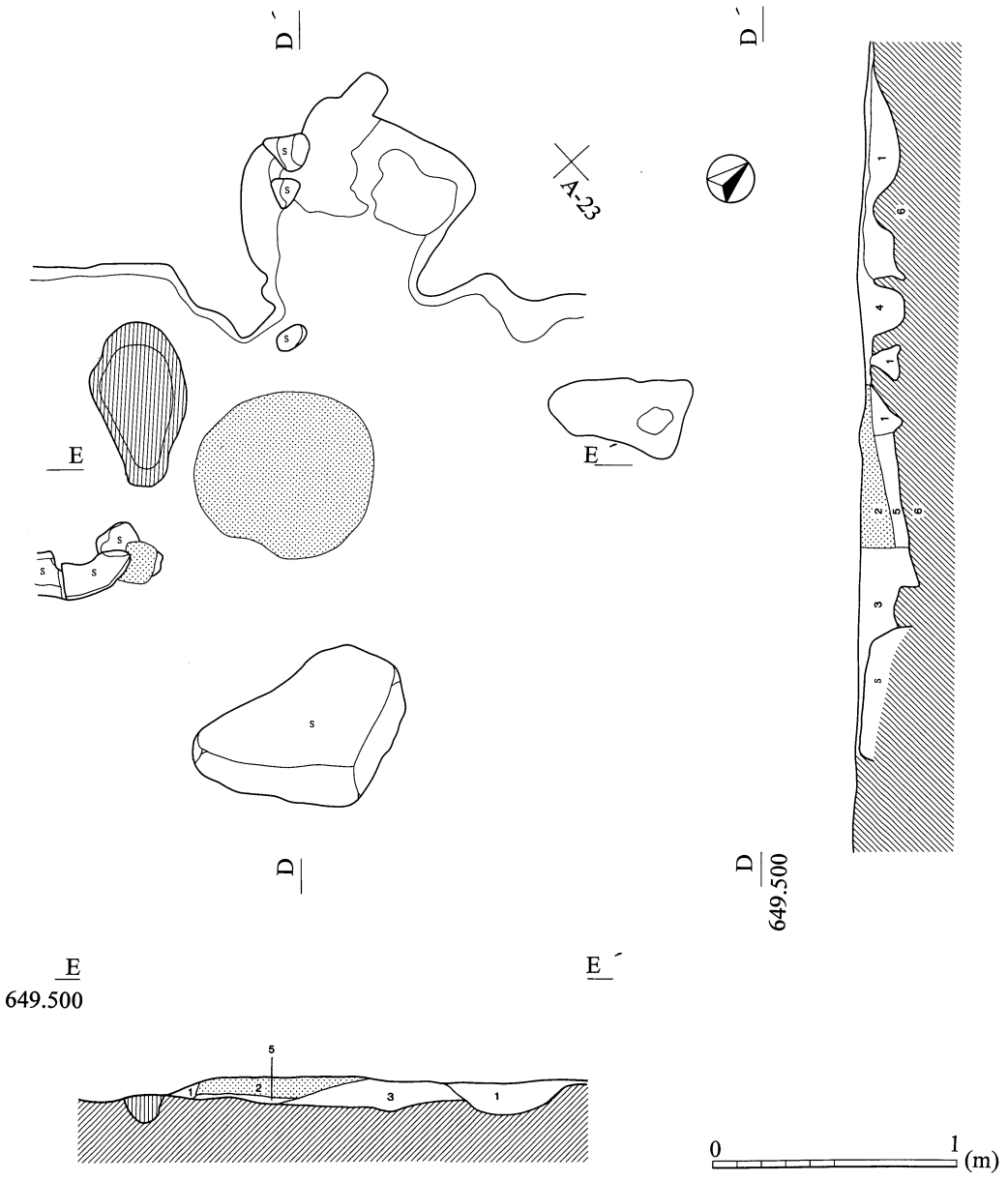
第251図　竪穴住居跡　ＳＢ02・カマド



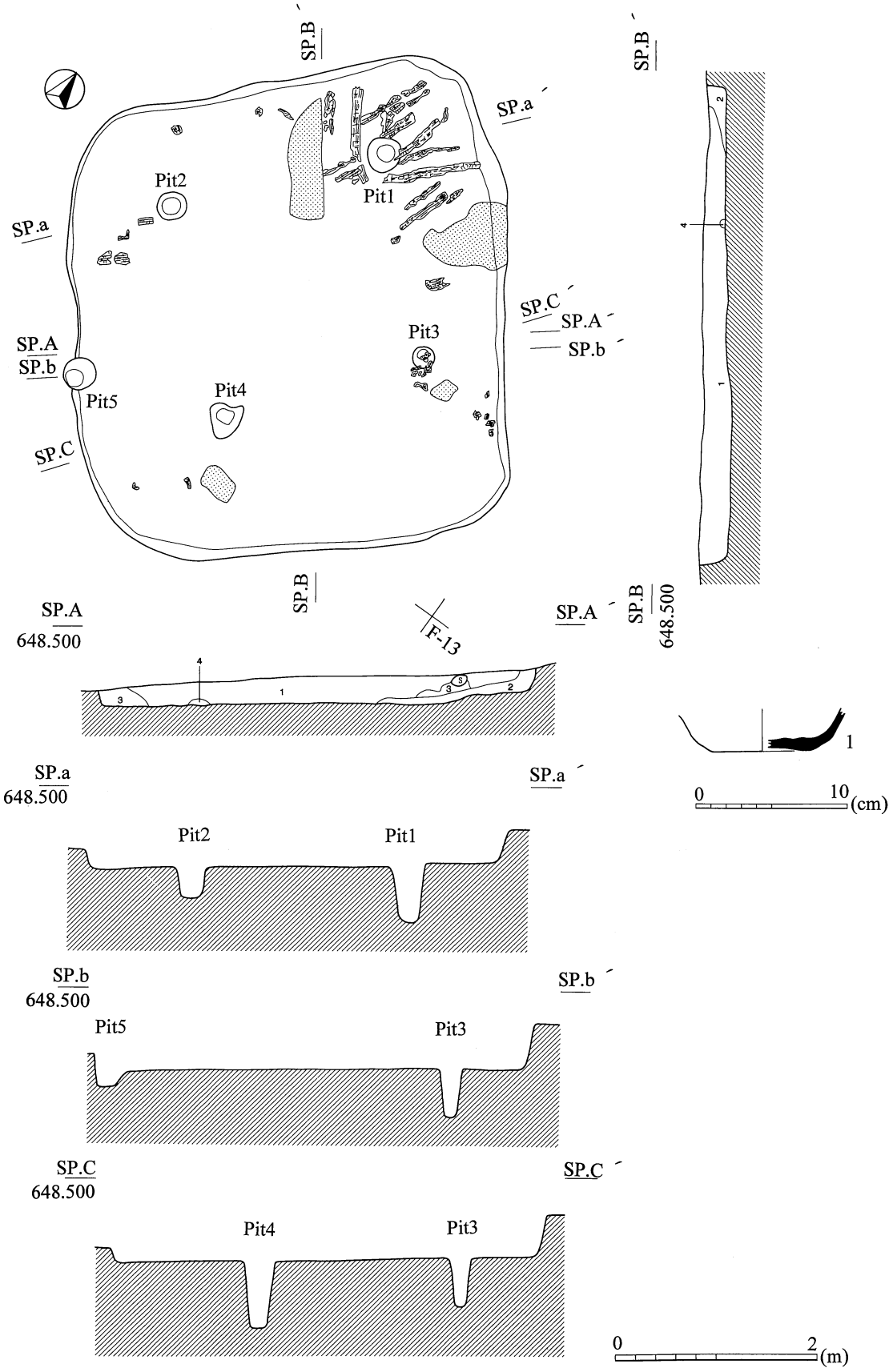
第252図　竪穴住居跡　ＳＢ02出土土器



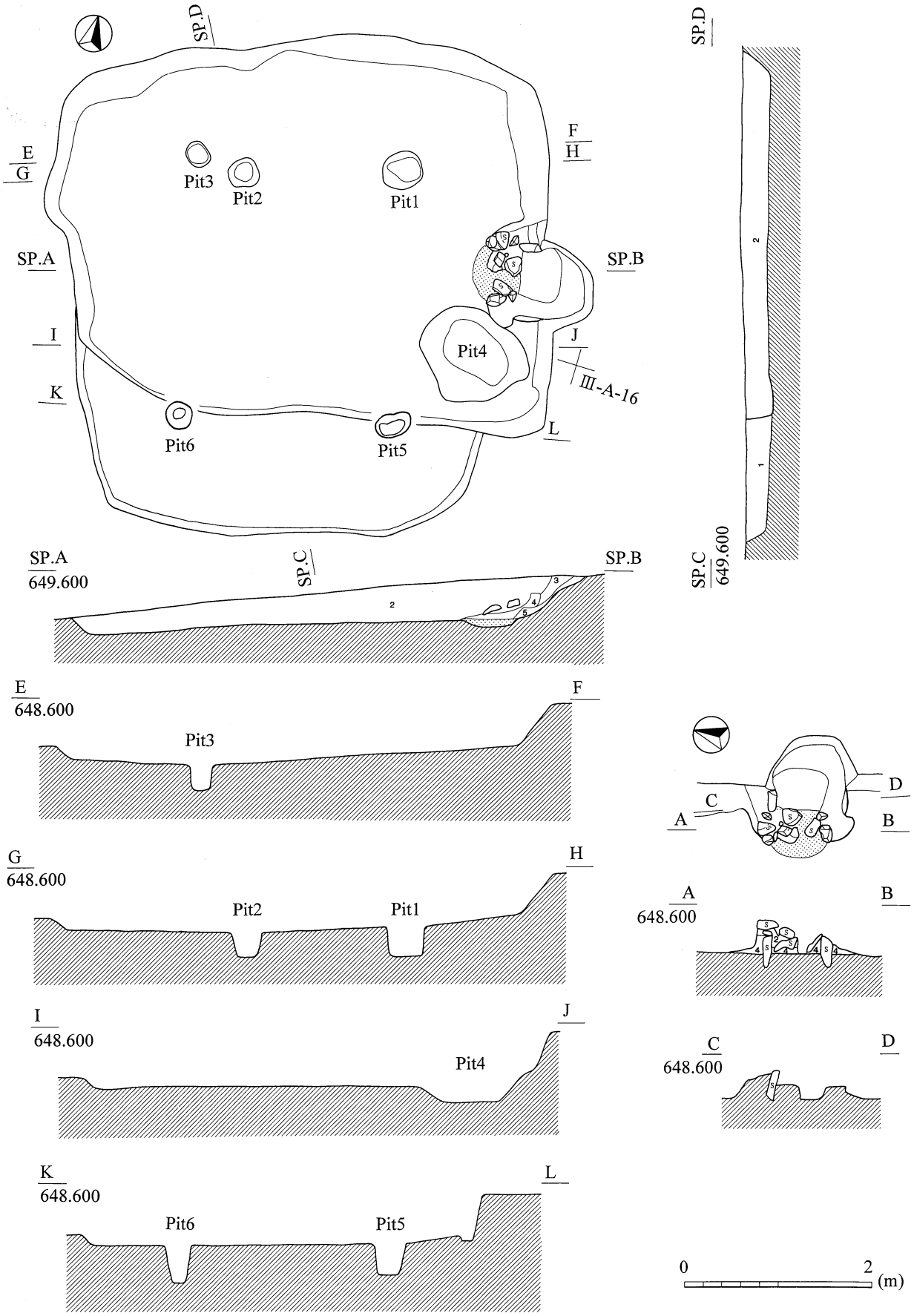
第253図　竪穴住居跡　ＳＢ03・出土土器



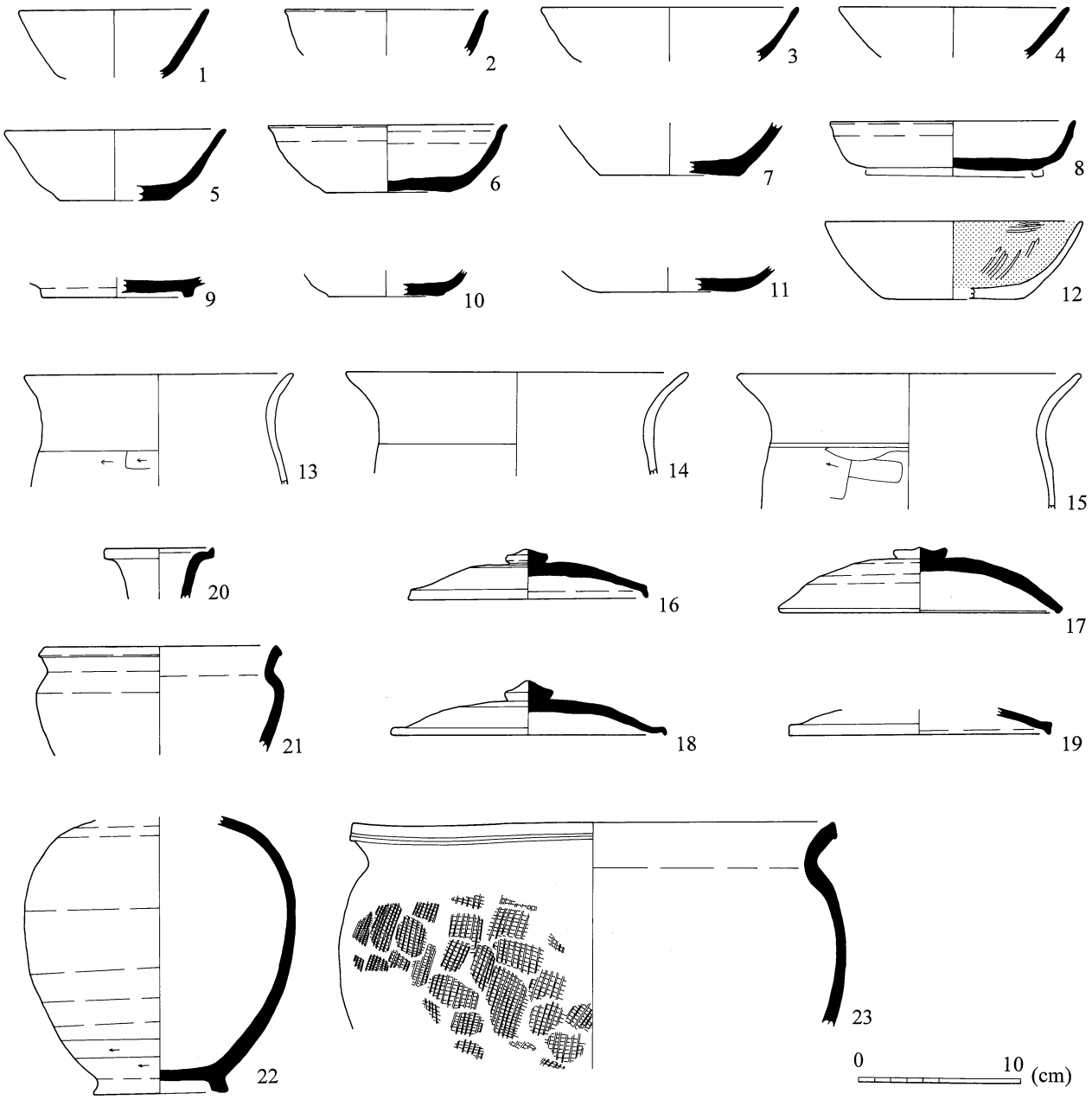
第254図　竪穴住居跡　ＳＢ03カマド



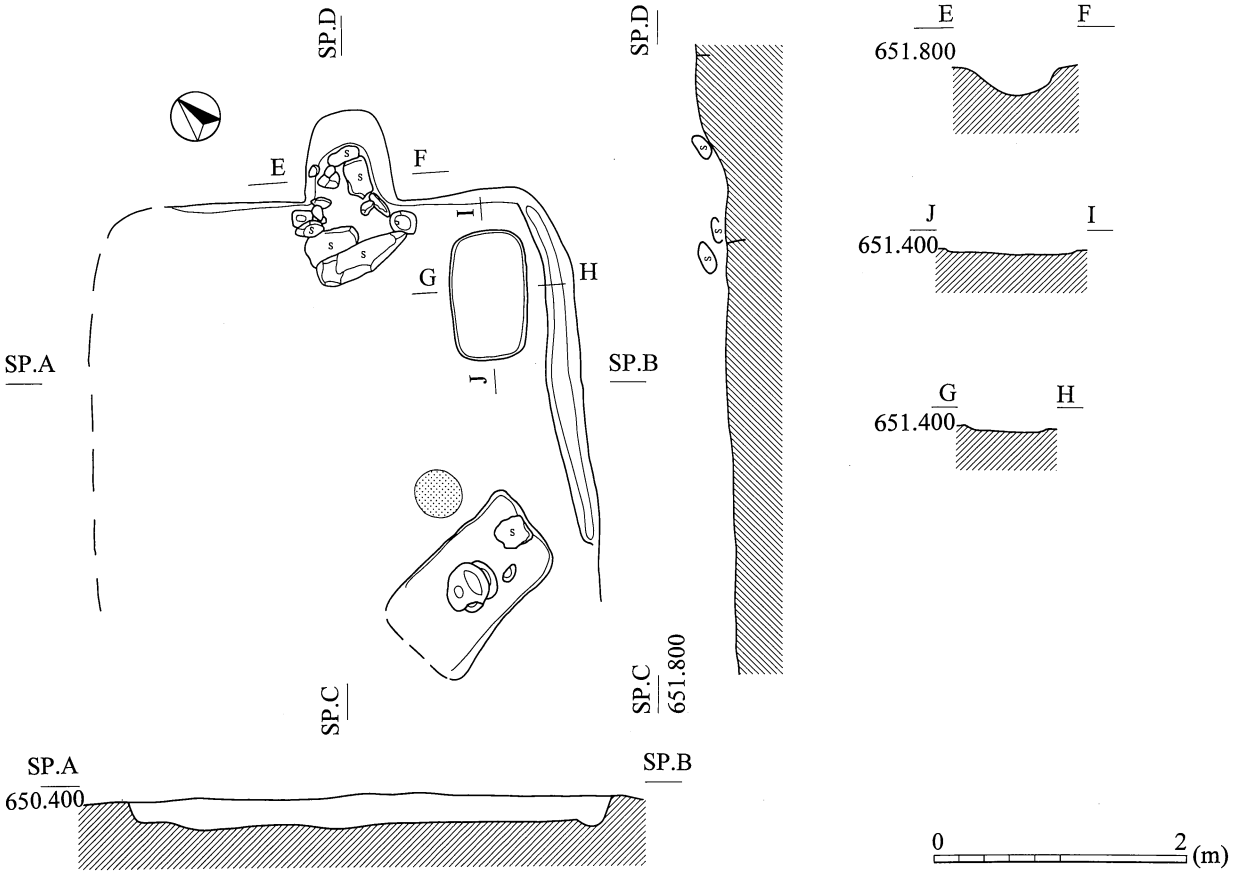
第255図　竪穴住居跡　ＳＢ04・出土土器



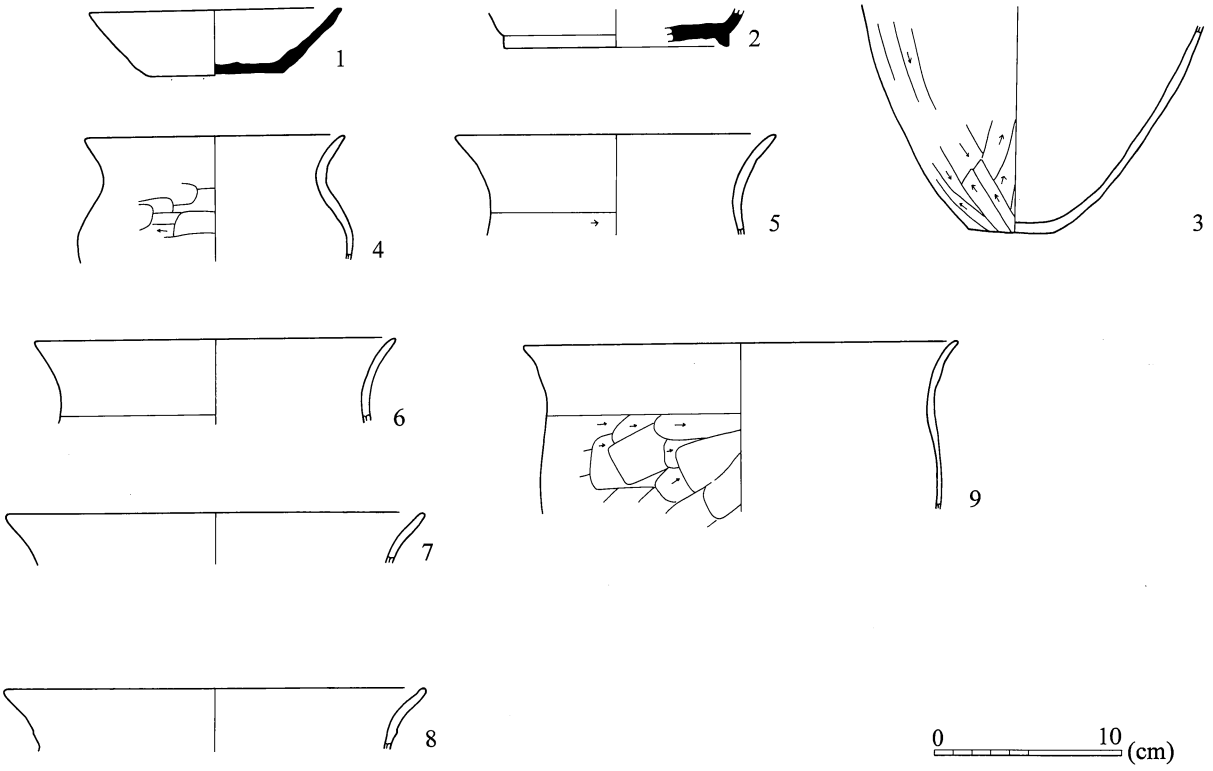
第256図　竪穴住居跡　ＳＢ05・カマド



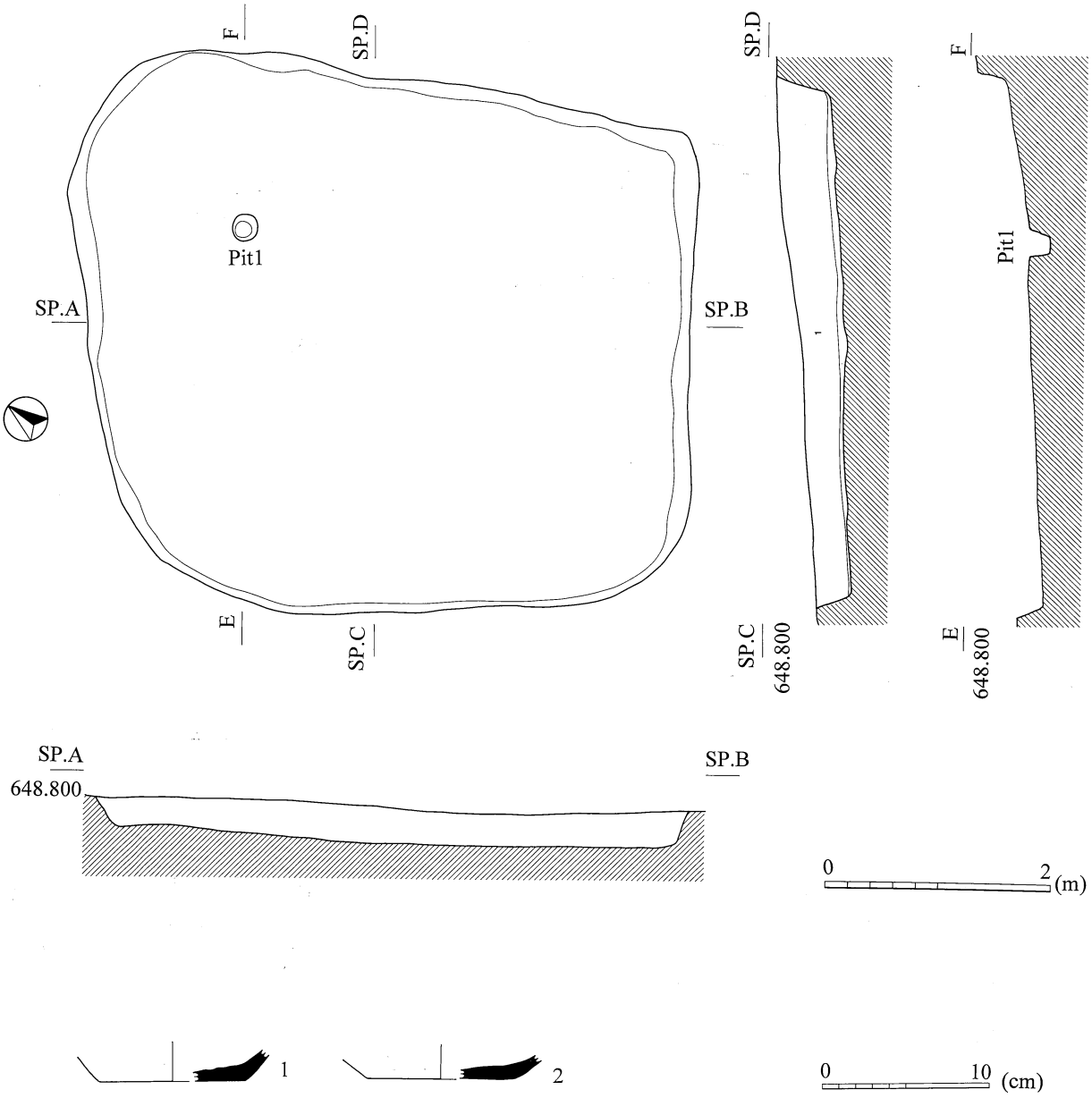
第257図　竪穴住居跡　ＳＢ05出土土器



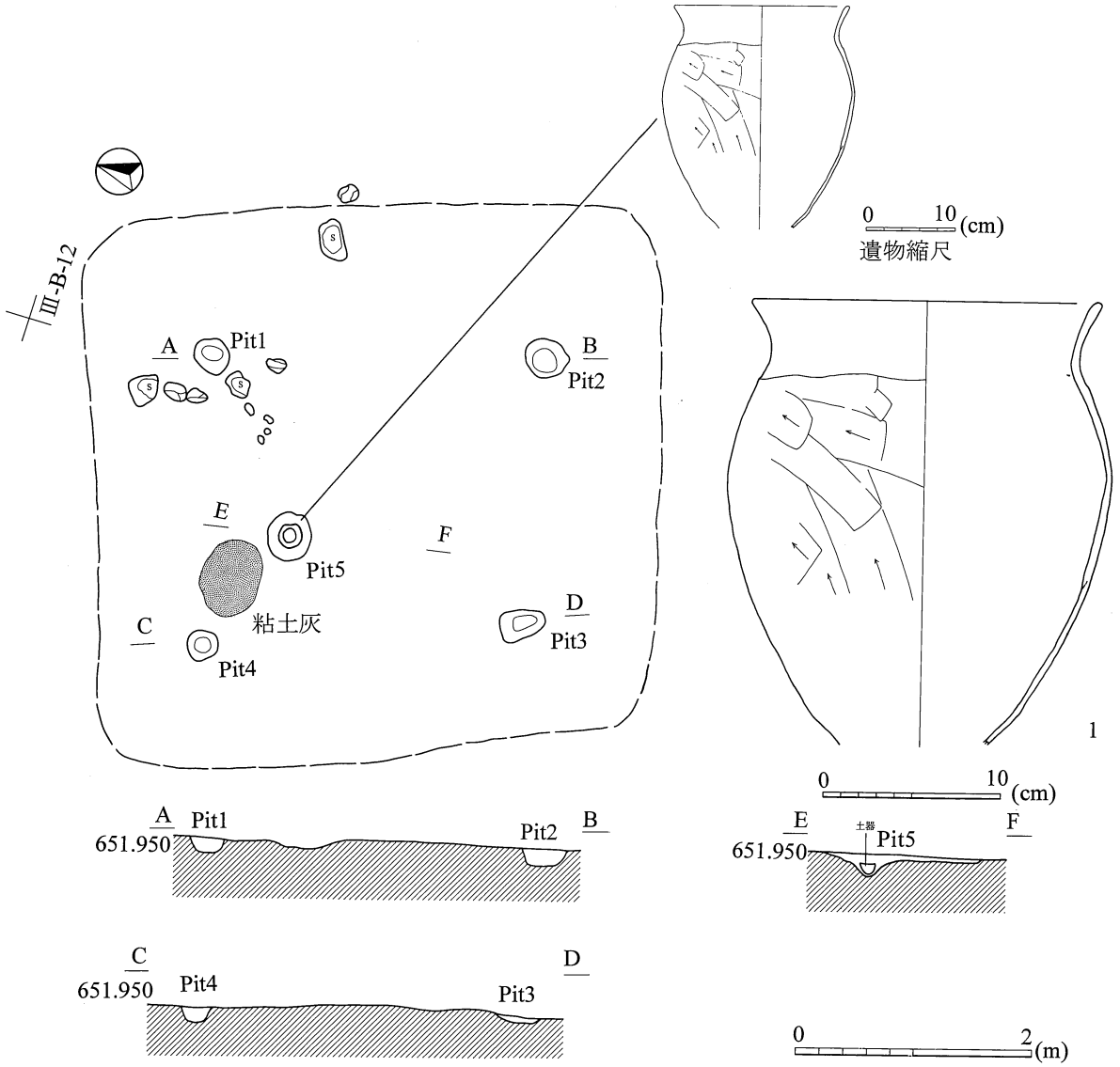
第258図　竪穴住居跡　ＳＢ18



第259図　竪穴住居跡　ＳＢ18出土土器



第260図　竪穴住居跡　ＳＢ29・出土土器



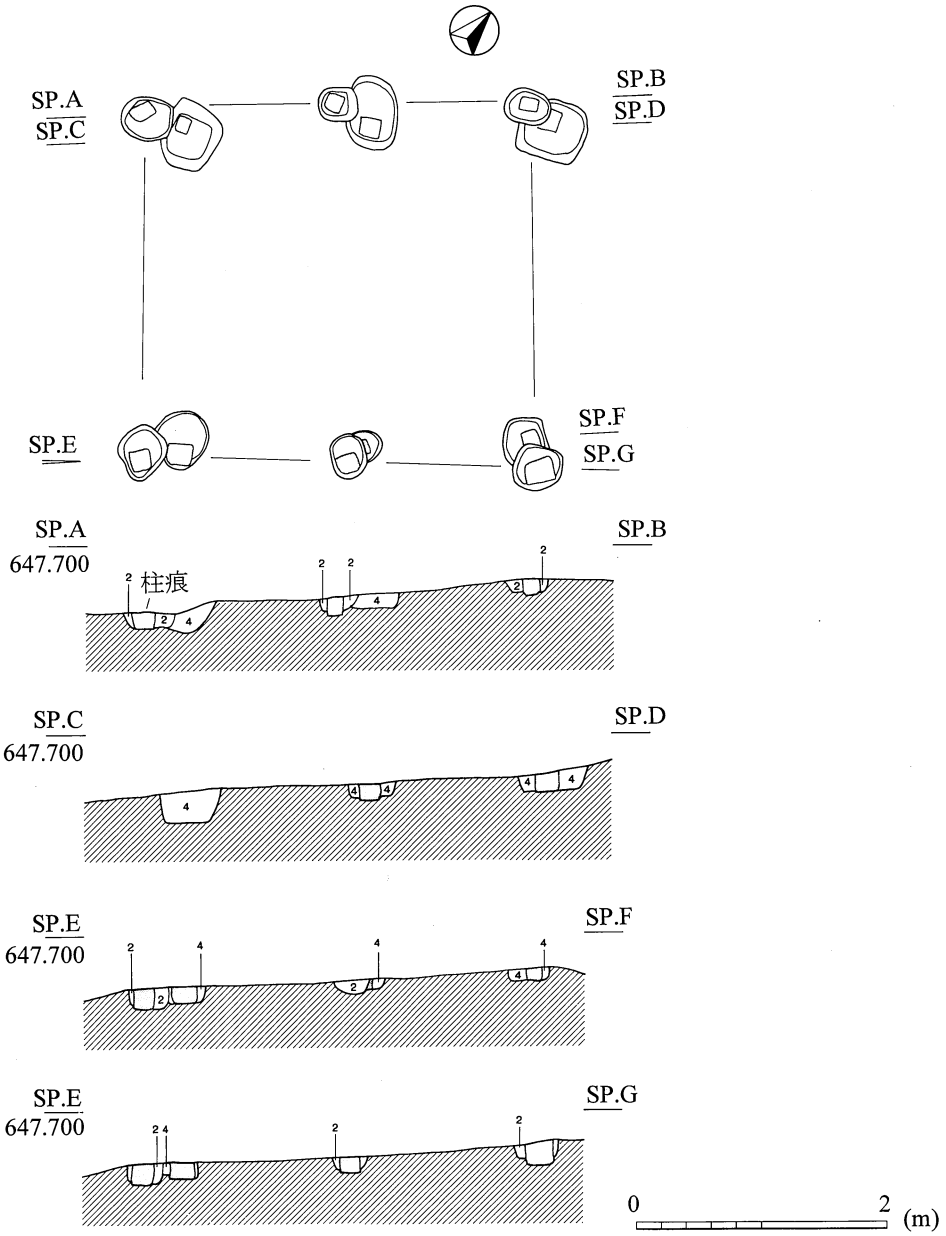
第261図　竪穴住居跡　ＳＢ31・出土土器

ＳＢ31（第261図）　　位置　Ⅲ－Ｂ－11

構　造　北西―南東に軸を持つ4.8×4.6ｍの方形。立ち上がりや床面は検出されなかったが、土壌化が進んだ部分から住居跡の範囲を推定した。柱穴は４基（Pit１～４）。カマドや炉の痕跡は検出されなかった。

遺　物　１土師器甕。住居跡中央やや西側に埋設されていた。

時　期　平安時代か



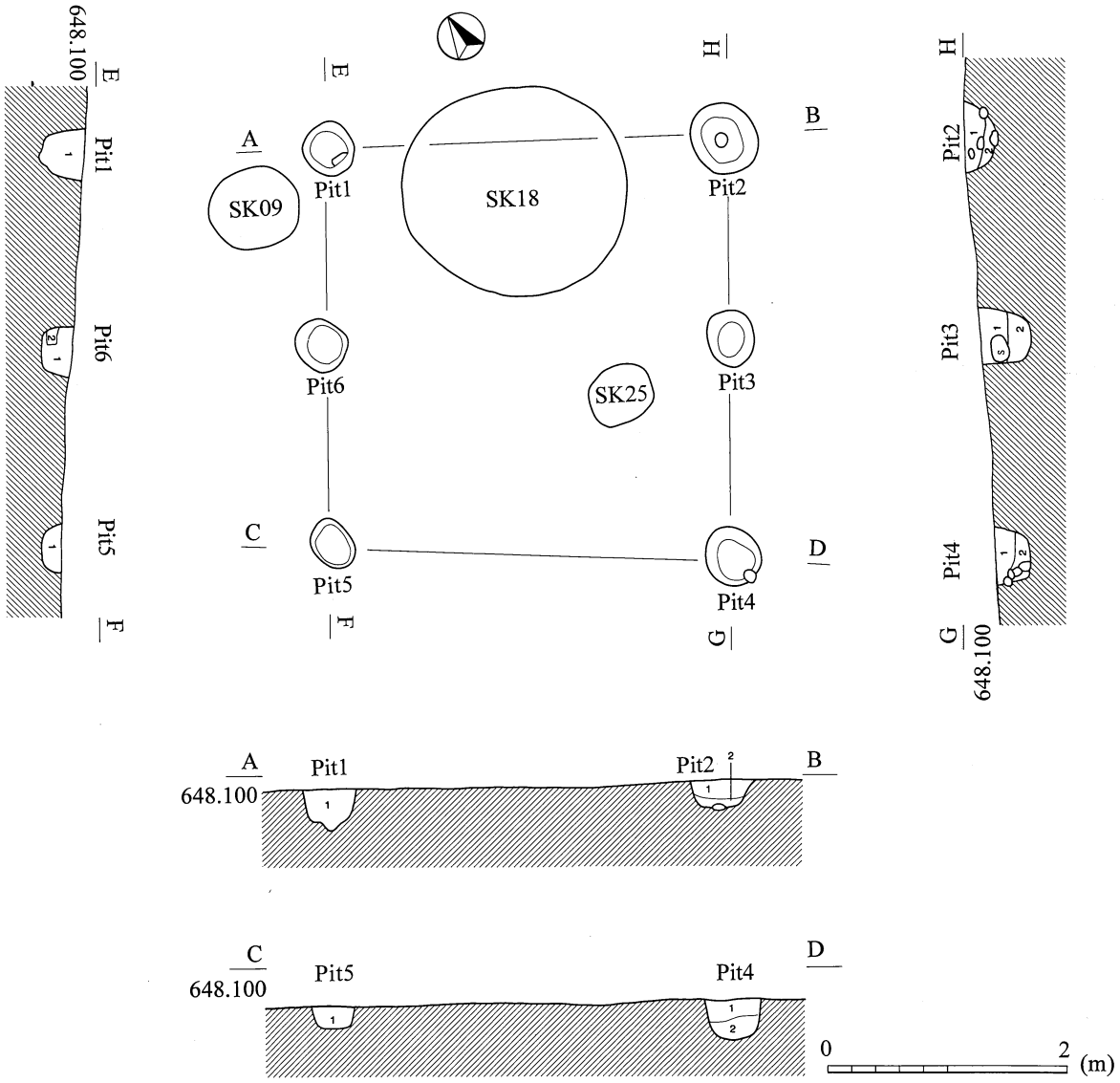
第262図　掘立柱建物跡　ＳＴ01

2　掘立柱建物跡

いずれも共伴遺物はない。本遺跡の竪穴住居跡の所属時期である古墳時代から古代の遺構と考えられる。

ＳＴ01（第262図）　　位置　Ⅱ－Ｅ－19

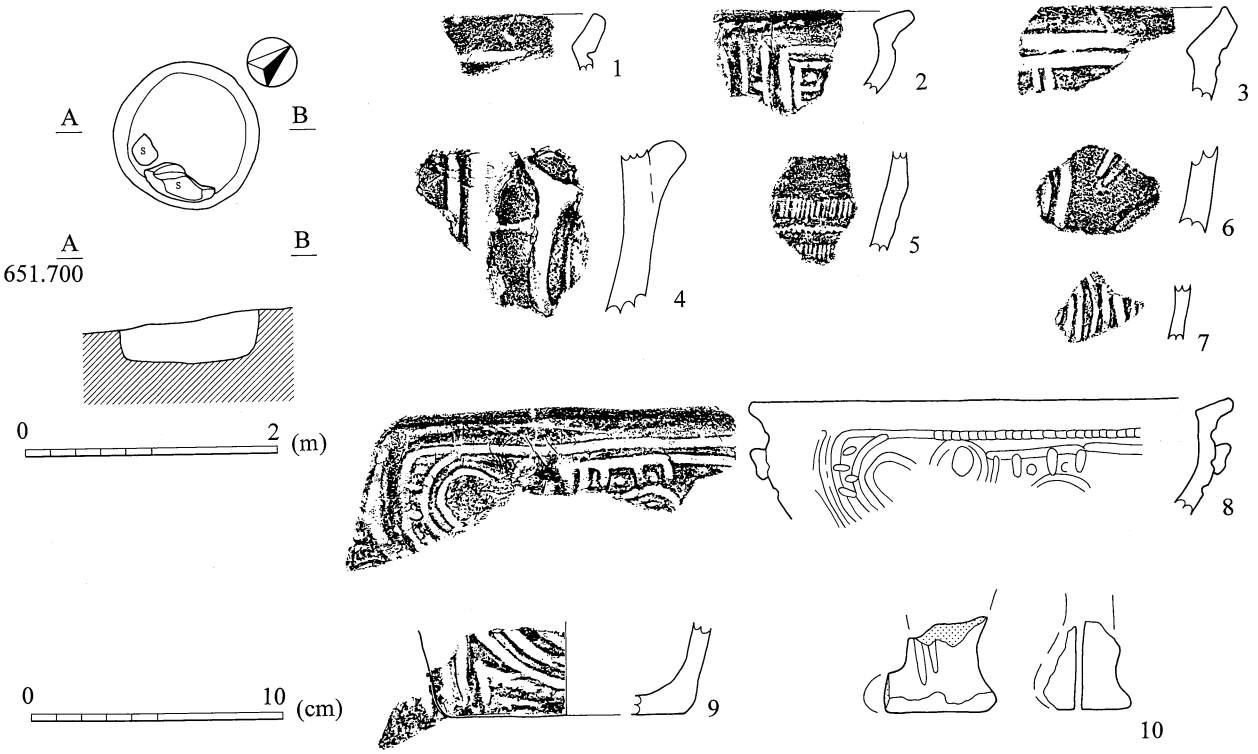
構　造　北東一南西に軸を持つ3.6×3.2ｍ。１×２柱間、６基の柱穴がほぼ同一位置で切り合っていることから、同一の掘立柱建物を立て直したものと考えられる。また、柱穴の中央に方形の柱痕が見られた。



第263図　掘立柱建物跡　ＳＴ02

ＳＴ02（第263図）　　位置　Ⅲ－Ｋ－10ほか

構　造　北東―南西に軸を持つ3.9×3.8ｍ。１×２柱間、６基の柱穴。ＳＴ01と柱間や軸の向きが揃うことから、同一時期の遺構と思われる。



第264図　土坑　ＳＫ01・出土土器

3　土坑と土器

(1)　縄文時代

ＳＫ01（第264図）　　位置　Ⅲ－Ｍ－12

径1.1～1.2ｍの円形。１～９半截竹管状工具による沈線文で、部分的に押引文になっている。10土偶の脚。中期中葉。石鏃（第277図７）、石錐（同20）、千枚岩質粘板岩製打製石斧（第282図101）出土。

ＳＫ04（第265図）　　位置　Ⅲ－Ｌ－17

径0.9～1.0ｍの円形。１～26半截竹管状工具による沈線もしくは隆帯で区画し、斜行沈線文で充塡。沈線脇には半截竹管状工具の連続刺突が施されるもの（４・５・７・20・24）、並行沈線間を交互に刺突するもの（１・21）がある。中期中葉。千枚岩質粘板岩製打製石斧（第282図102）が出土。

ＳＫ34（第266図）　　位置　Ⅱ－Ｉ－23

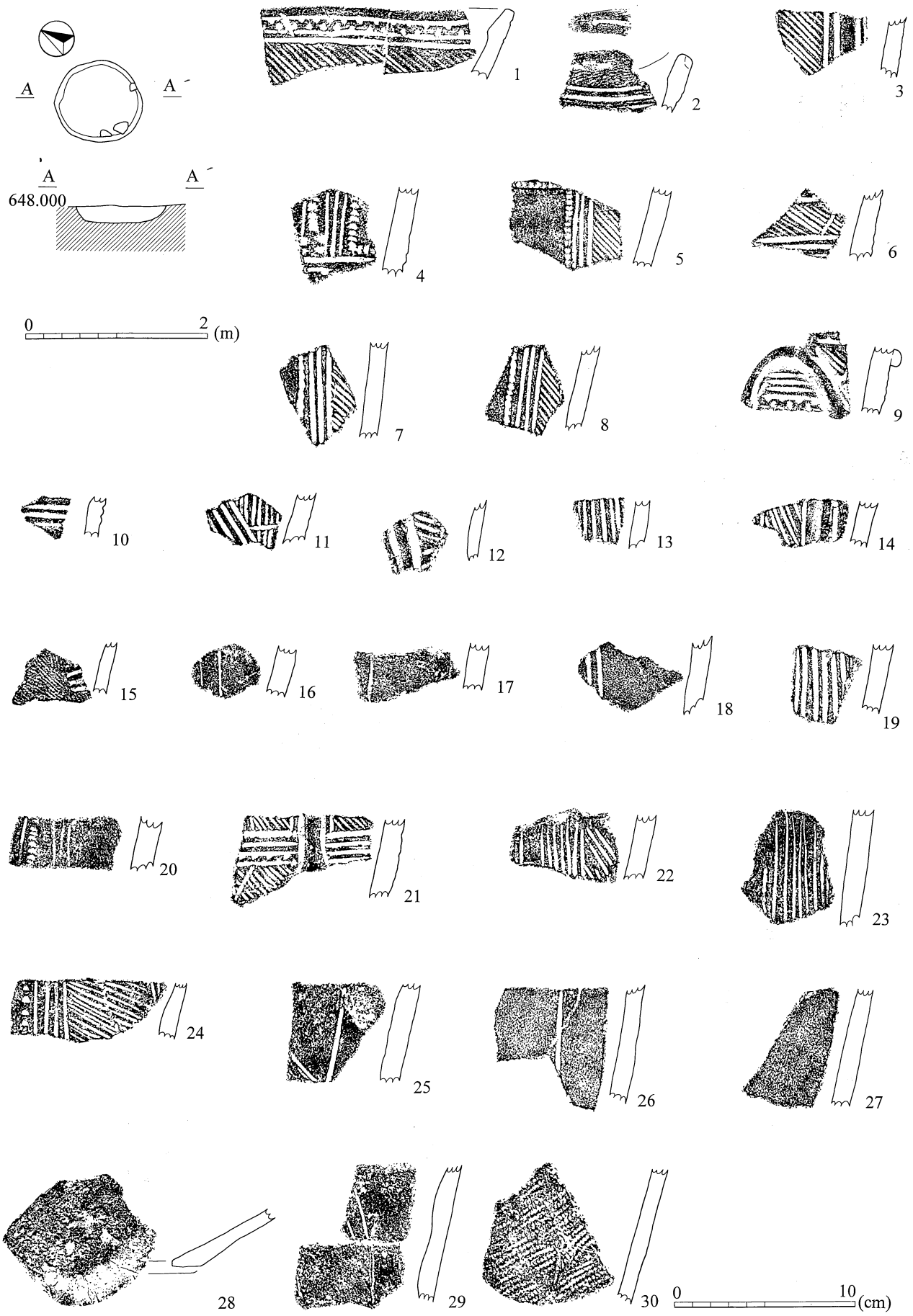
径2.3ｍの円形。３並行沈線で区画し、半截竹管状工具による斜行・格子目沈線文で充塡。沈線脇に連続刺突文が施される。中期前葉。

ＳＫ41（第267図）　　位置　Ⅲ－Ｑ－17

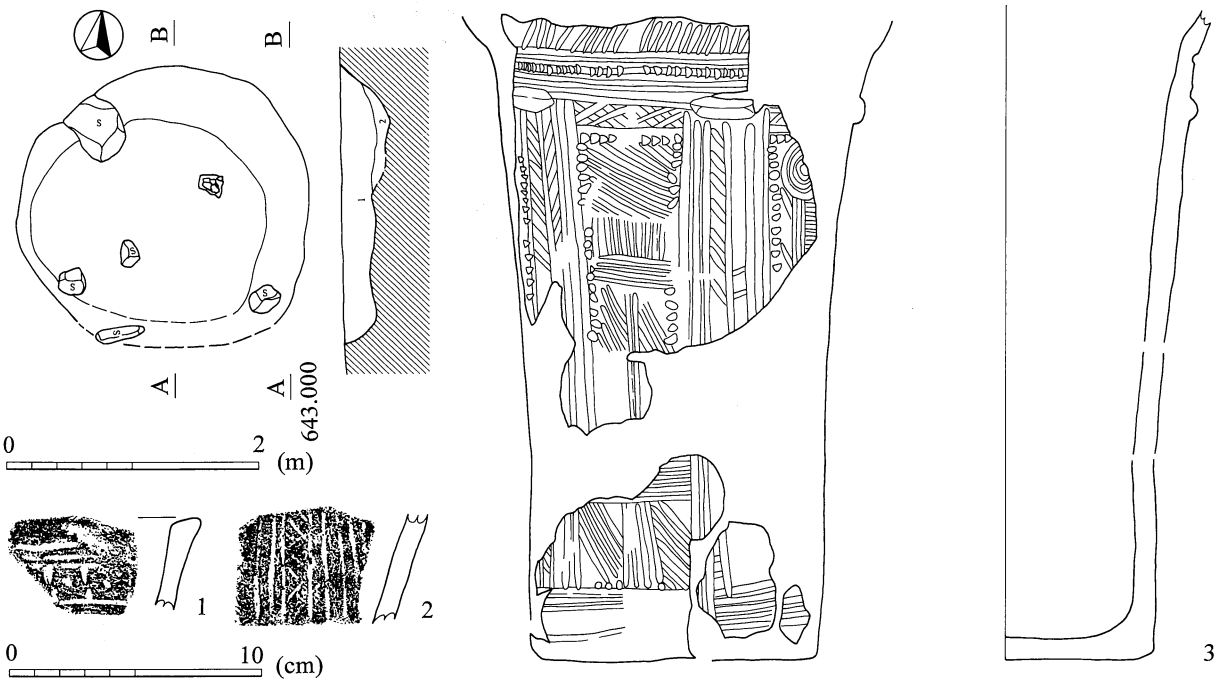
北東―南西に軸を持つ1.9×1.4ｍの楕円形。１～５含繊維の回転縄文。前期前葉から中葉。

ＳＫ54（第269図）　　位置　Ⅲ－Ｖ－２

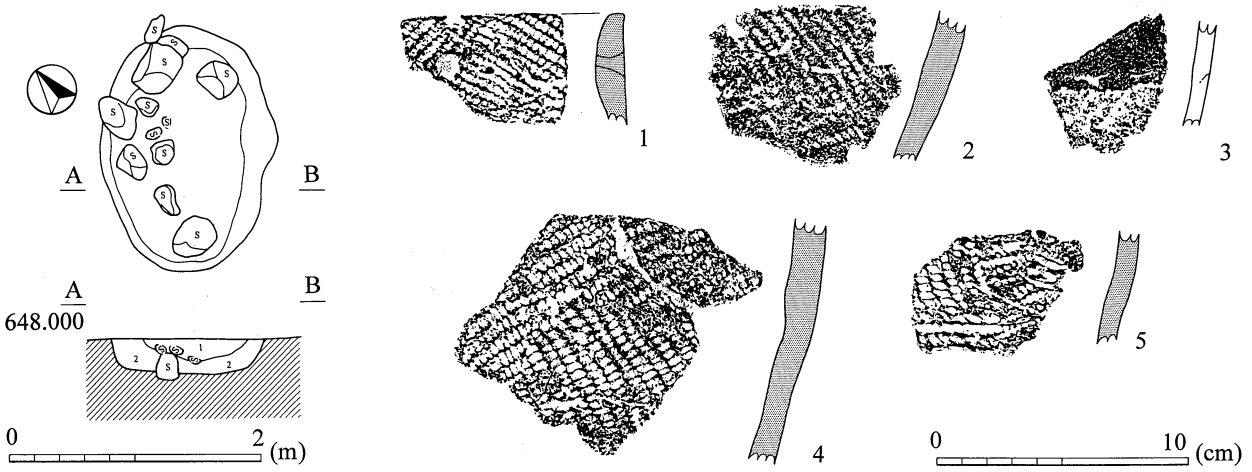
北東―南西に軸を持つ4.3×2.8ｍのやや歪んだ楕円形。１・３口縁部を緩やかに肥厚する含繊維の回転縄文。２隆帯脇に並行沈線を施し、隆帯上を刻む。前期初頭。石核（第278図55）出土。



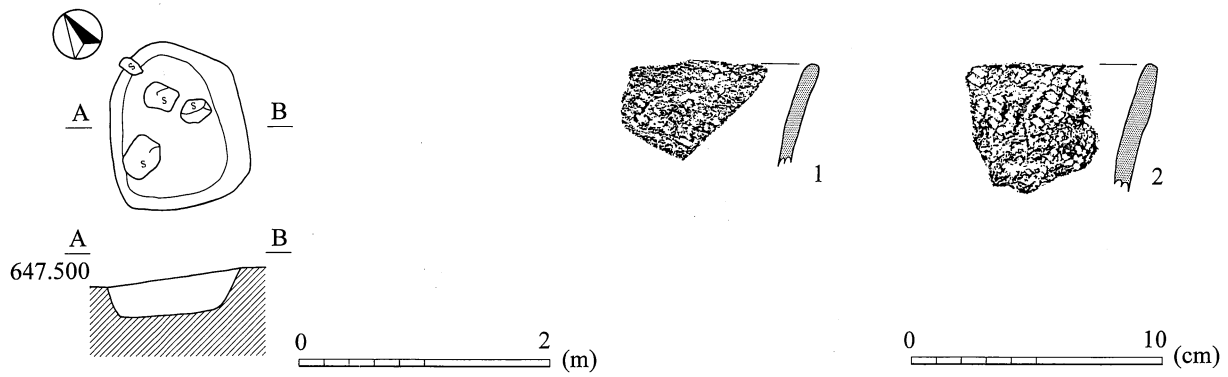
第265図　土坑　ＳＫ04・出土土器



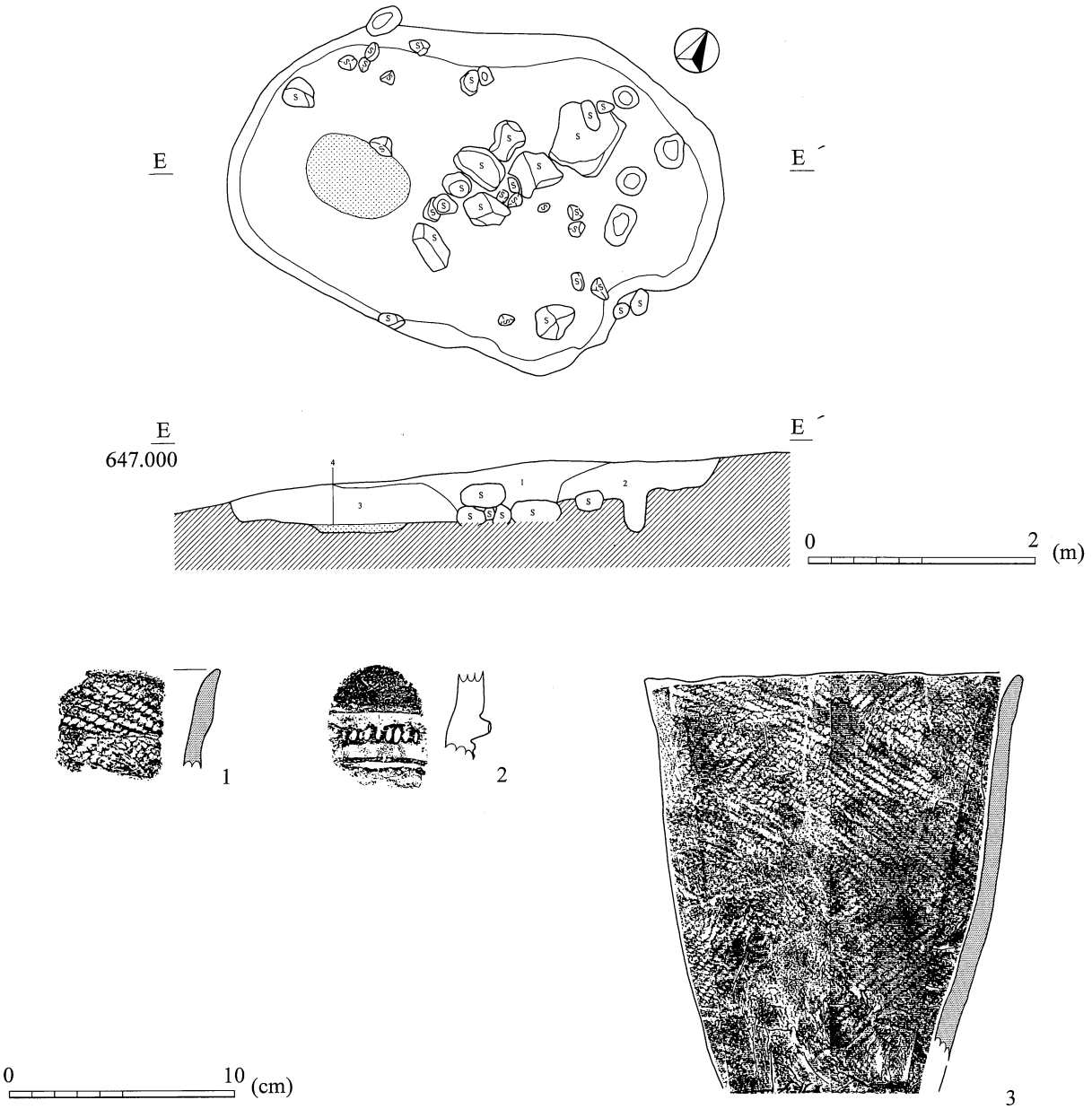
第266図　土坑　ＳＫ34・出土土器



第267図　土坑　ＳＫ41・出土土器



第268図　土坑　ＳＫ56・出土土器



第269図　土坑　ＳＫ54・出土土器

ＳＫ56（第268図）　　位置　Ⅲ－Ｑ－１

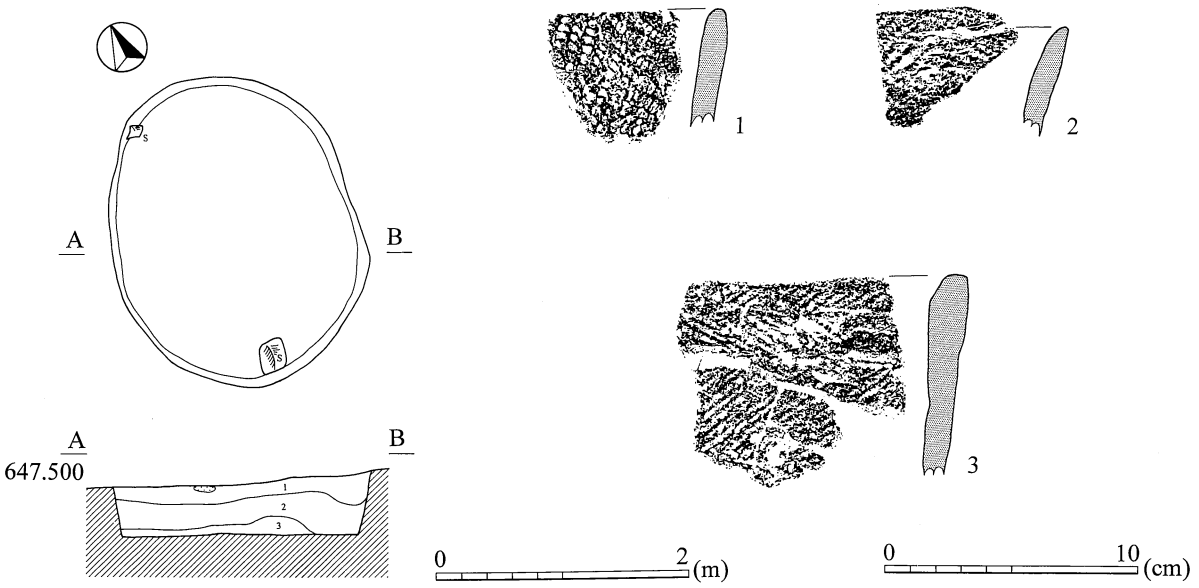
北東―南西に軸を持つ1.3×0.9ｍの不整形な長方形。１・２含繊維の回転縄文。前期前葉から中葉。

ＳＫ58（第270図）　　位置　Ⅲ－Ｖ－３

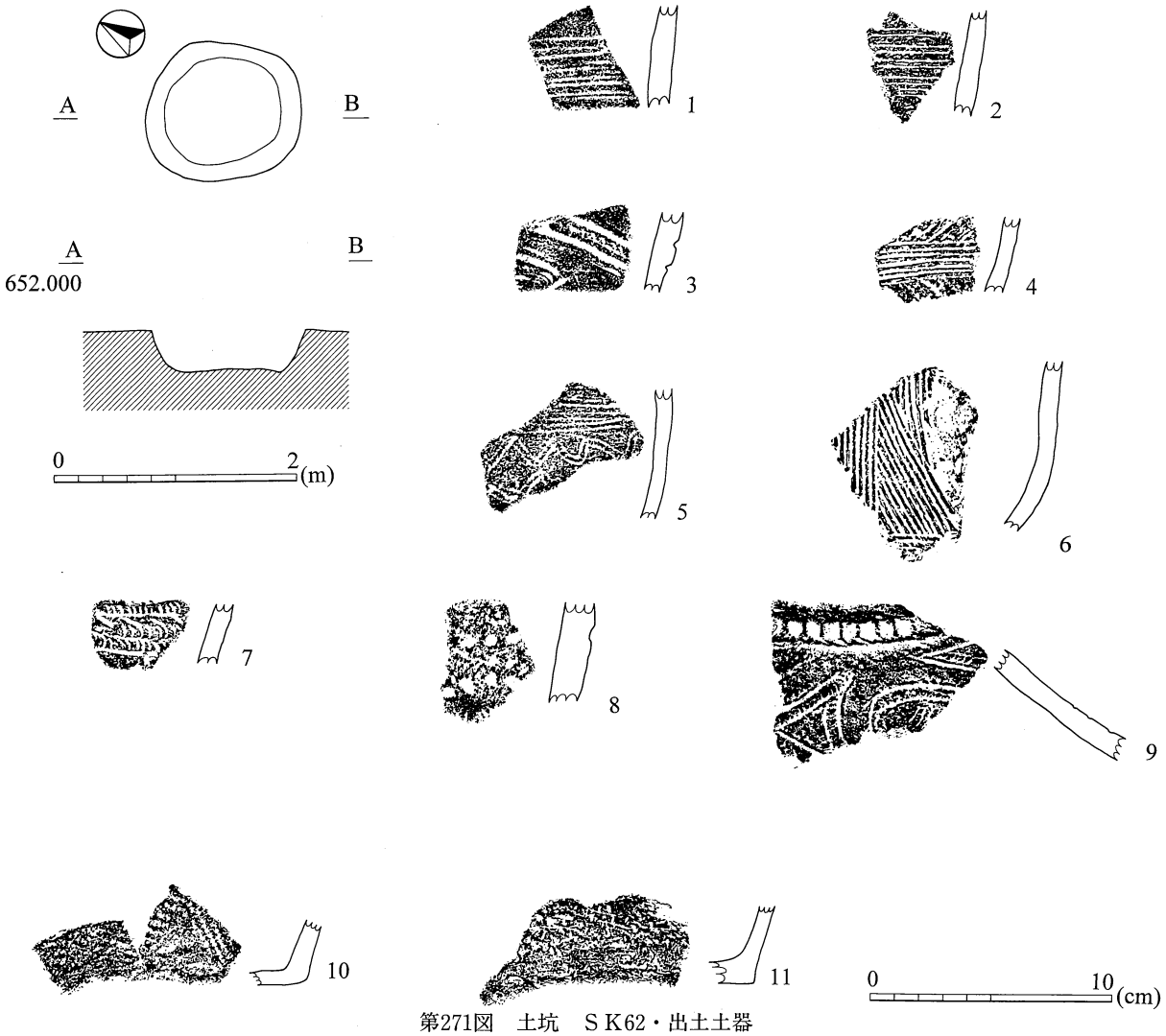
ほぼ南北に軸を持つ2.5×2.0ｍの楕円形。１～３含繊維の回転縄文。前期前葉から中葉。

ＳＫ62（第271図）　　位置　Ⅱ－Ⅰ－３・８

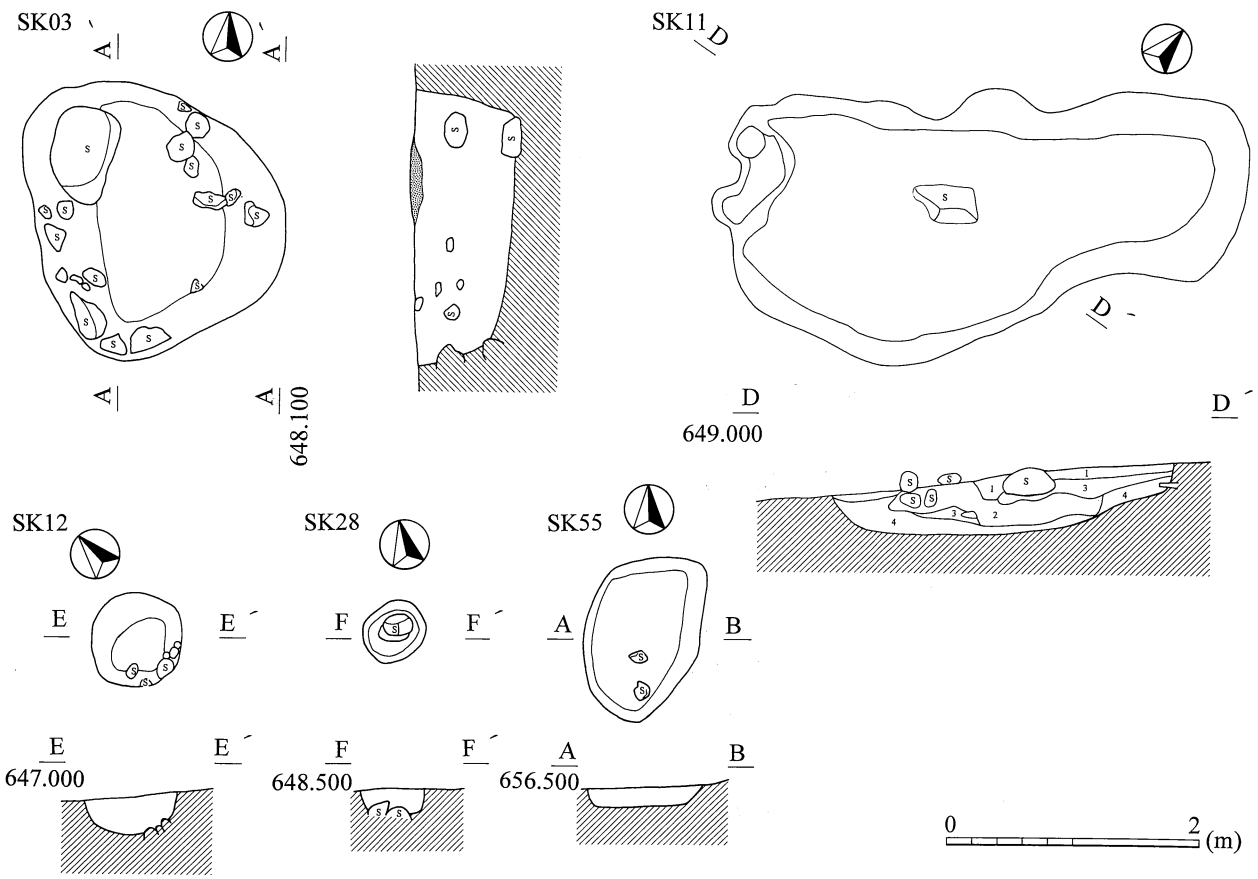
北西―南東に軸を持つ1.3×1.2ｍの隅丸方形。１～５半截竹管状工具による並行沈線文ないし条線文。６は10条前後の櫛歯状工具による条線文。７・９並行沈線文間を半截竹管状工具で連続爪形文を施す。前期後葉諸磯ｃ式か。



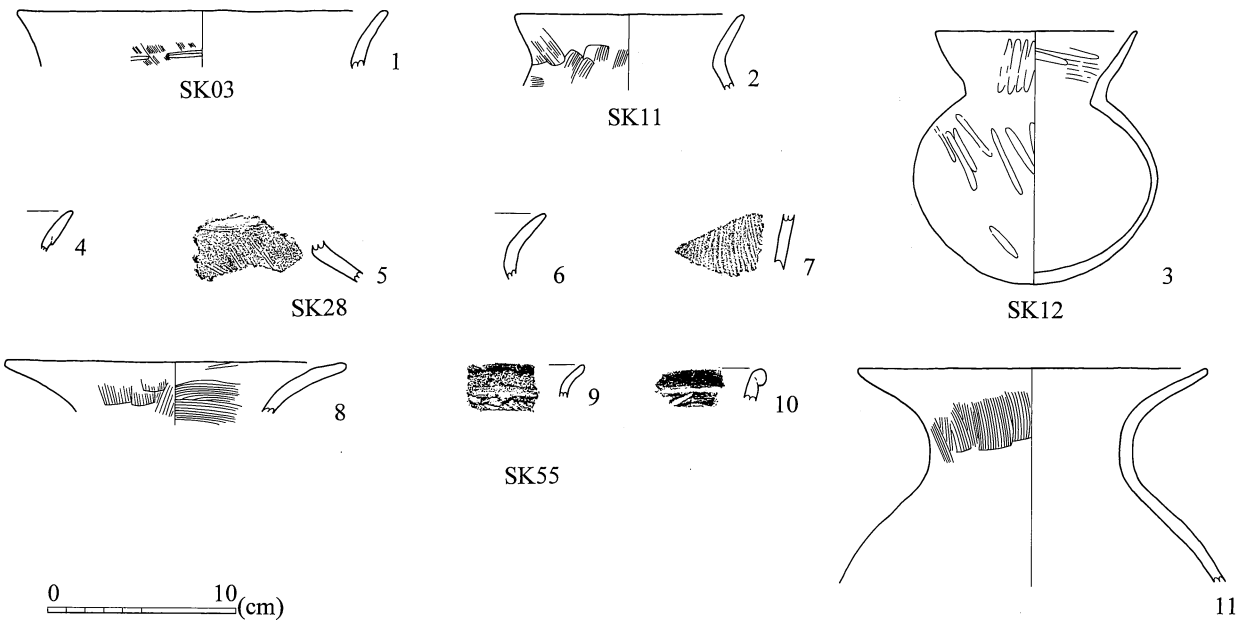
第270図　土坑　ＳＫ58・出土土器



第271図　土坑　ＳＫ62・出土土器



第272図　古墳時代の土坑



第273図　古墳時代の土坑出土土器

(2)　古墳時代（遺構図第272図、土器第273図）

ＳＫ03　　位置　Ⅲ－Ｋ－13・14

ほぼ南北が最大長になる不整形な土坑。直に立ち上がる。１土師器甕出土。

ＳＫ11　　位置　Ⅲ－Ｆ－24・25

北東―南西が最大長になる不整形な土坑。２土師器甕出土。

ＳＫ12　　位置　Ⅲ－Ｋ－７

径0.8ｍの円形。３内外面ミガキ調整の壺出土。

ＳＫ28　　位置　Ⅲ－Ｋ－10

径0.5ｍの円形。４～７土師器甕？破片出土。

ＳＫ55　　位置　Ⅰ－Ｌ－22

南北が最大長になる不整形な土坑。８～11土師器壺？出土。

いずれも、竪穴住居跡の年代、古墳時代前期後半から中期前半に属するものと考えられる。

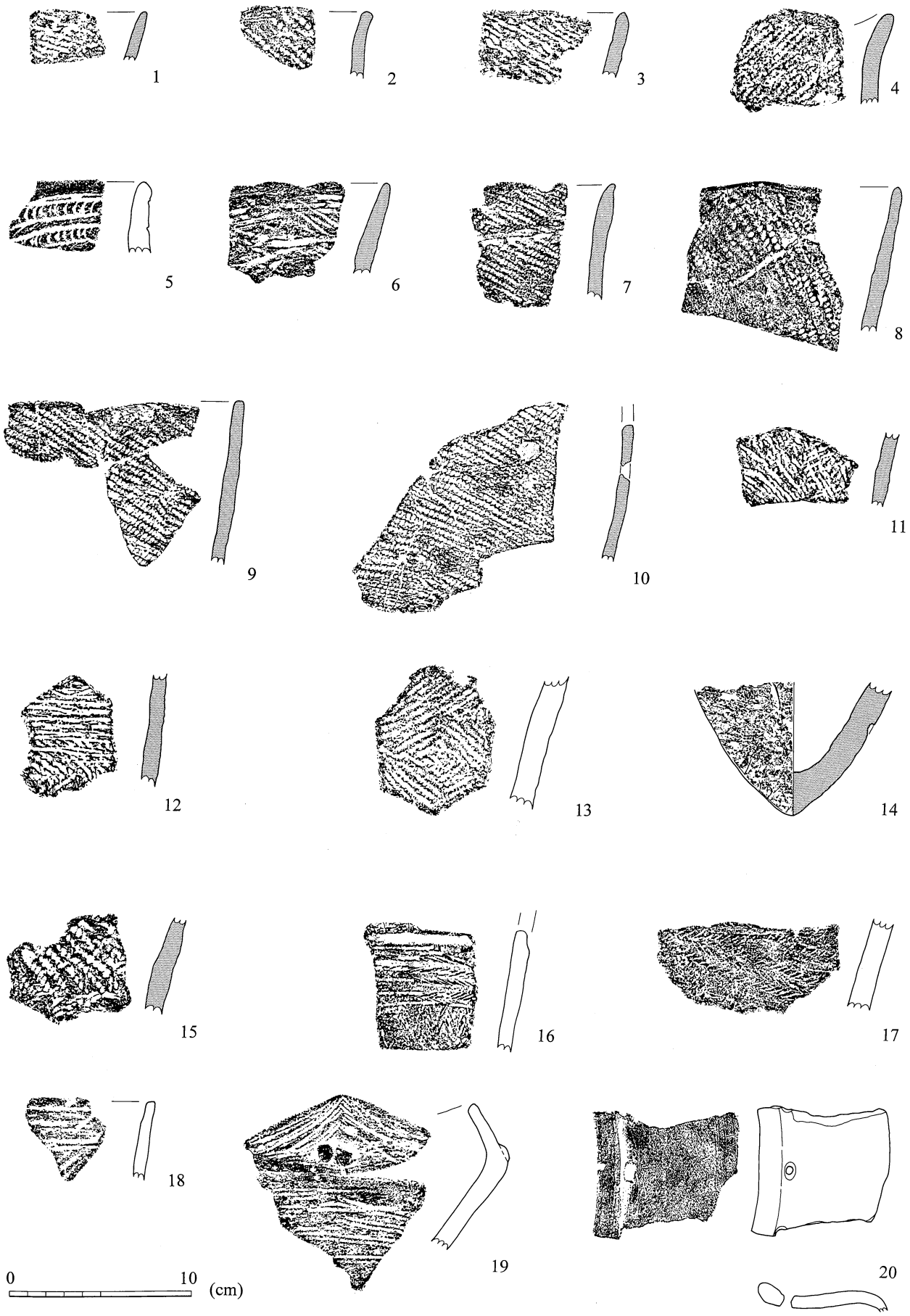
４　遺構に伴わない土器・陶磁器

(1)　縄文時代（第274・275図）

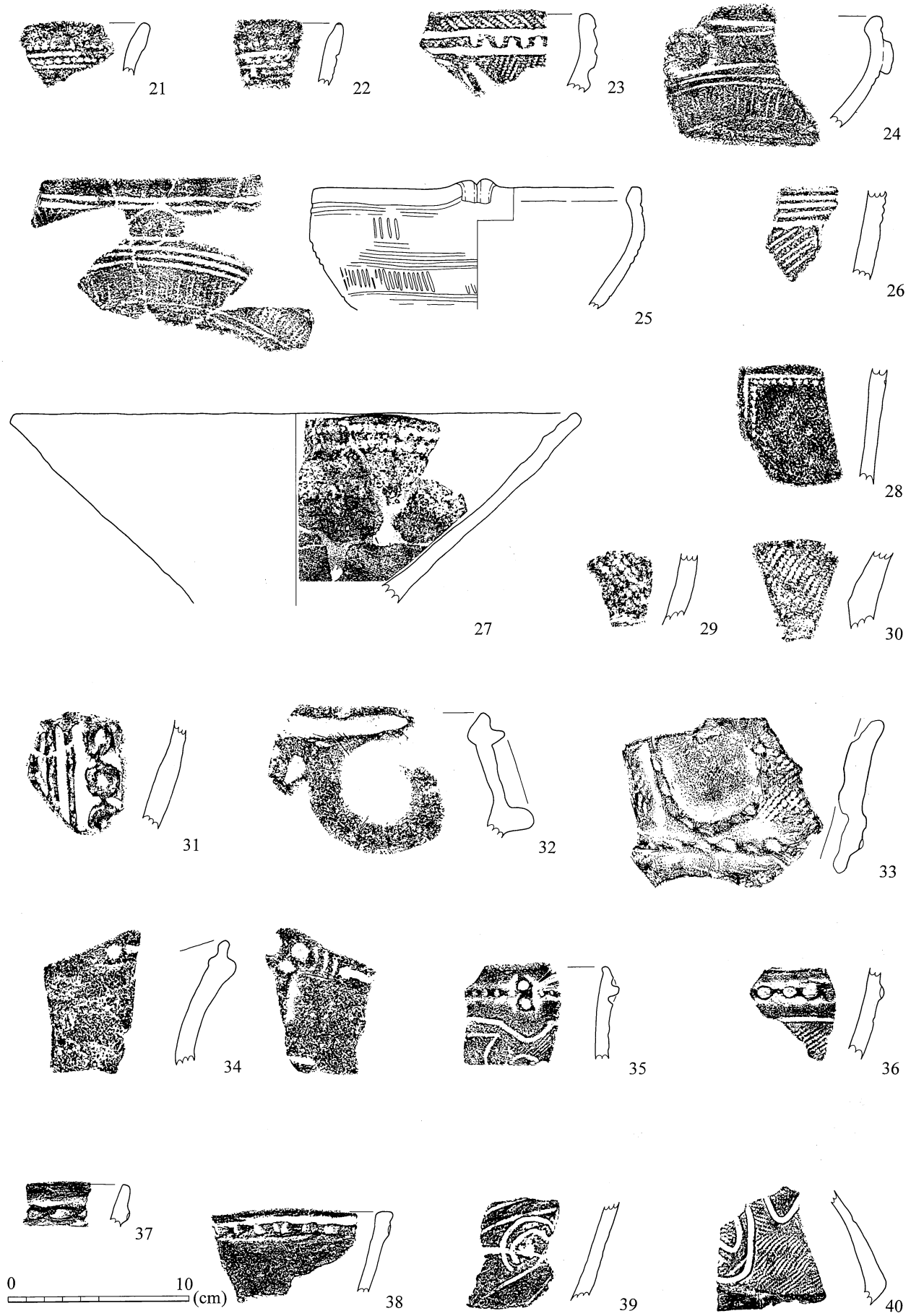
１～20前期。１～４・７～12・14・15含繊維の回転縄文。７口縁部を緩く肥厚するものや14尖底は前期初頭に遡る可能性がある。５半截竹管状工具による並行沈線文間を同工具による連続爪形文が施される。前期中葉有尾式。１～15前期前葉から中葉。16・17微隆線上をヘラ状工具で細かく刻む。18・19半截竹管状工具による並行沈線文。19波頂口縁部に円形浮文が２点貼付される。20有孔浅鉢。16～20縄文前期後葉。

21～33中期。21・22・28並行沈線に沿って連続刺突文。23縄文ＲＬ横位回転を地文に、並行沈線文を施し、さらに交互に短沈線で鋸歯文を描く。24・25口縁に並行する区画線間を短沈線で充塡。25円形浮文を貼付。27口縁内面を肥厚し連続爪形文が施される浅鉢。21～28縄文中期前葉。31・32中葉か。33回転縄文ＬＲを地文とし圧痕隆帯文を貼付。後葉。

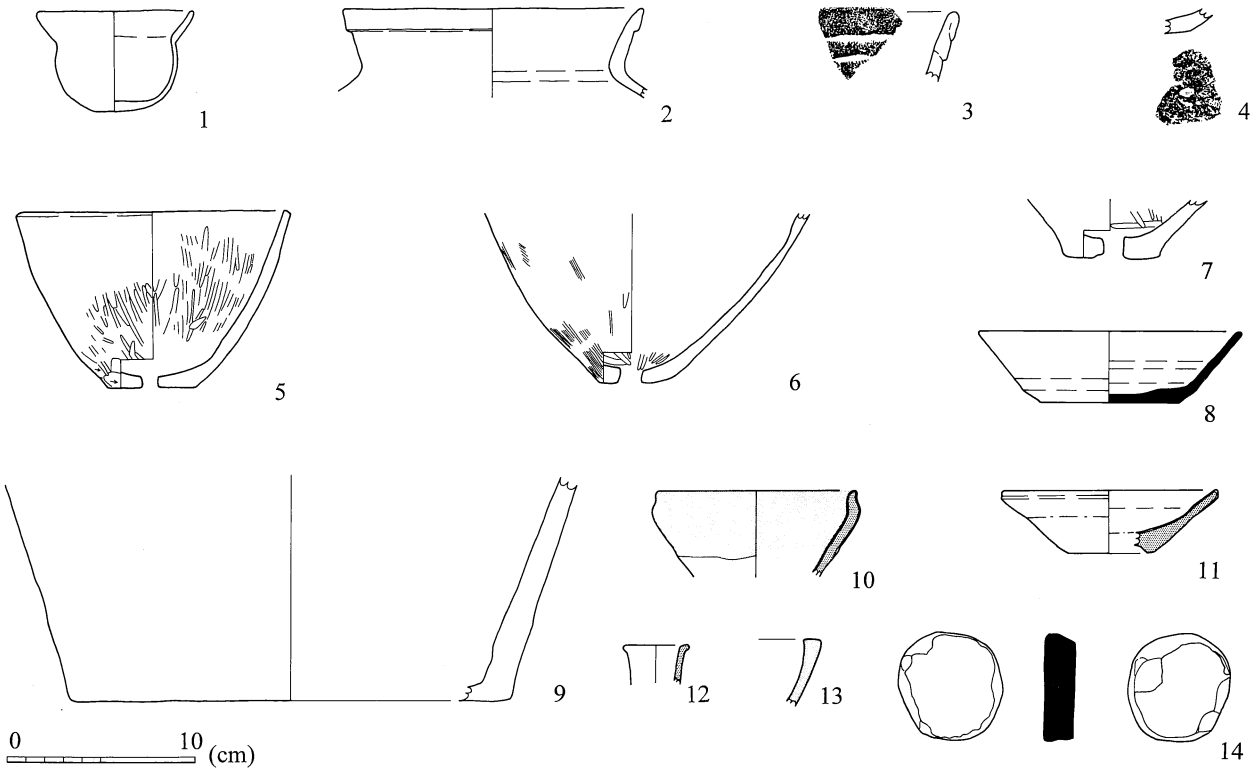
34～40後期前葉。堀之内式。34口縁部が作出され波頂部に穿孔と弧状沈線文、頸部を無文の鉢。堀之内１式。35～38口縁に並行する刻みを有する隆帯をめぐらす。35・36磨消縄文。35「８」字状貼付文を施す。堀之内２式。40注口土器の胴部上半。



第274図　縄文土器(1)



第275図　縄文土器(2)



第276図　土師器・須恵器・陶磁器

(2)　古墳時代以降（第276図）

１～７古墳時代の土師器。１小型精製鉢。２二重口縁壺。４籾痕のある底部。５～７甑。８古代須恵器坏。９土師器内耳鍋。中世後期。10瀬戸美濃大窯の鉄釉天目茶碗。16世紀後半。11砂目ズミ、唐津皿。12・13近世施釉陶器。12は18世紀後半の一輪挿し。14側縁が磨かれた須恵器の円盤。

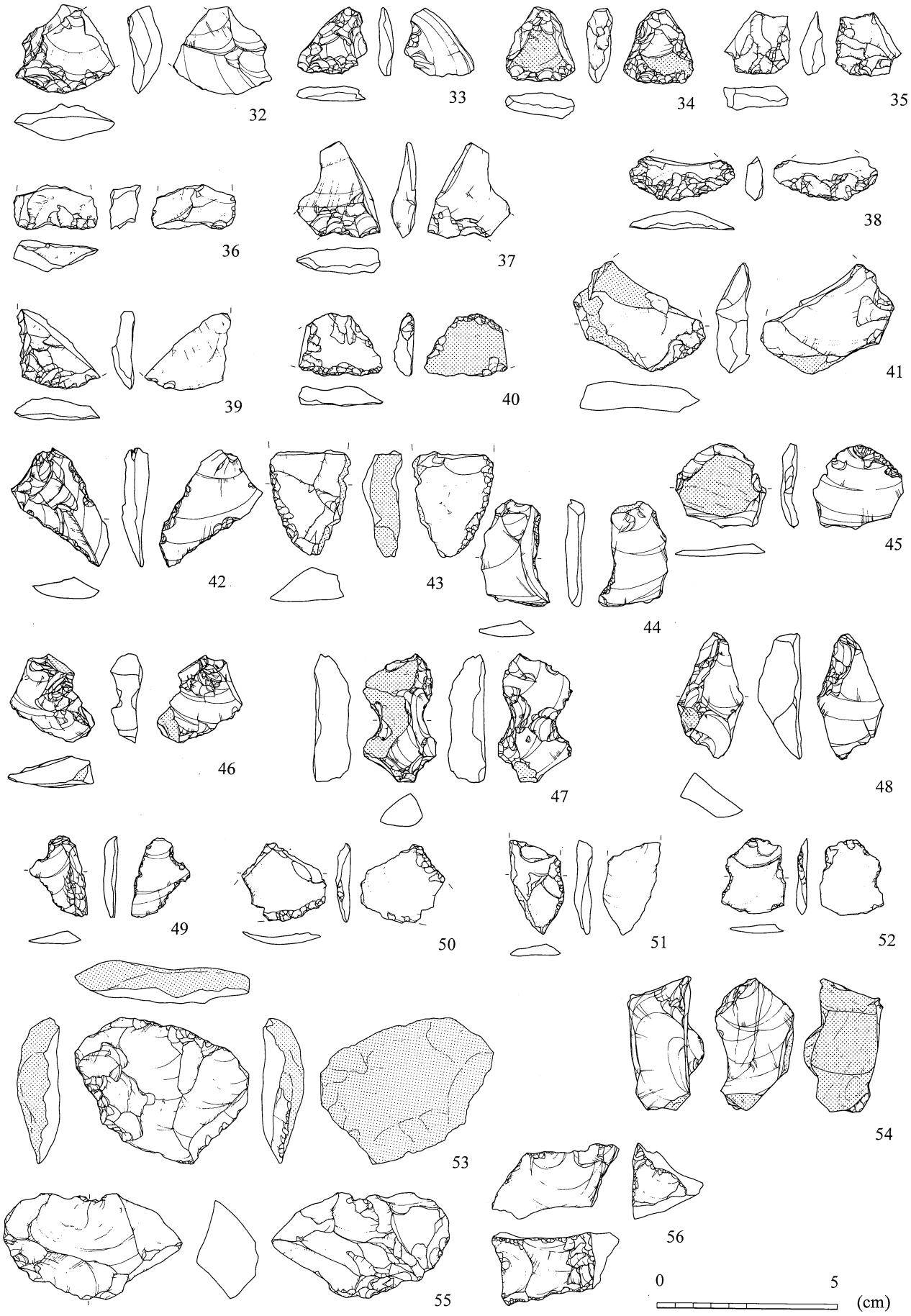
５　石器（第277～287図）

１～52小型の剥片石器。石材はとくに断らないかぎり黒曜石製。１～15打製石鏃。14のみチャート製有茎式。16粘板岩製磨製石鏃。基部に穿孔あり。17～21石錐。17・18チャート製。22～25石匙。23ガラス質安山岩製。24チャート製。26対向する剥片の両辺に微細な剥離が対向する。楔形石器か。27～40剥離が連続して施される剥片。41～52連続する微細な剥離を有する剥片。47とくに抉れている部分に微細な剥離が集中する。縄文時代前期中葉ＳＢ12・前期後葉ＳＢ16から多く出土している。53～56石核。

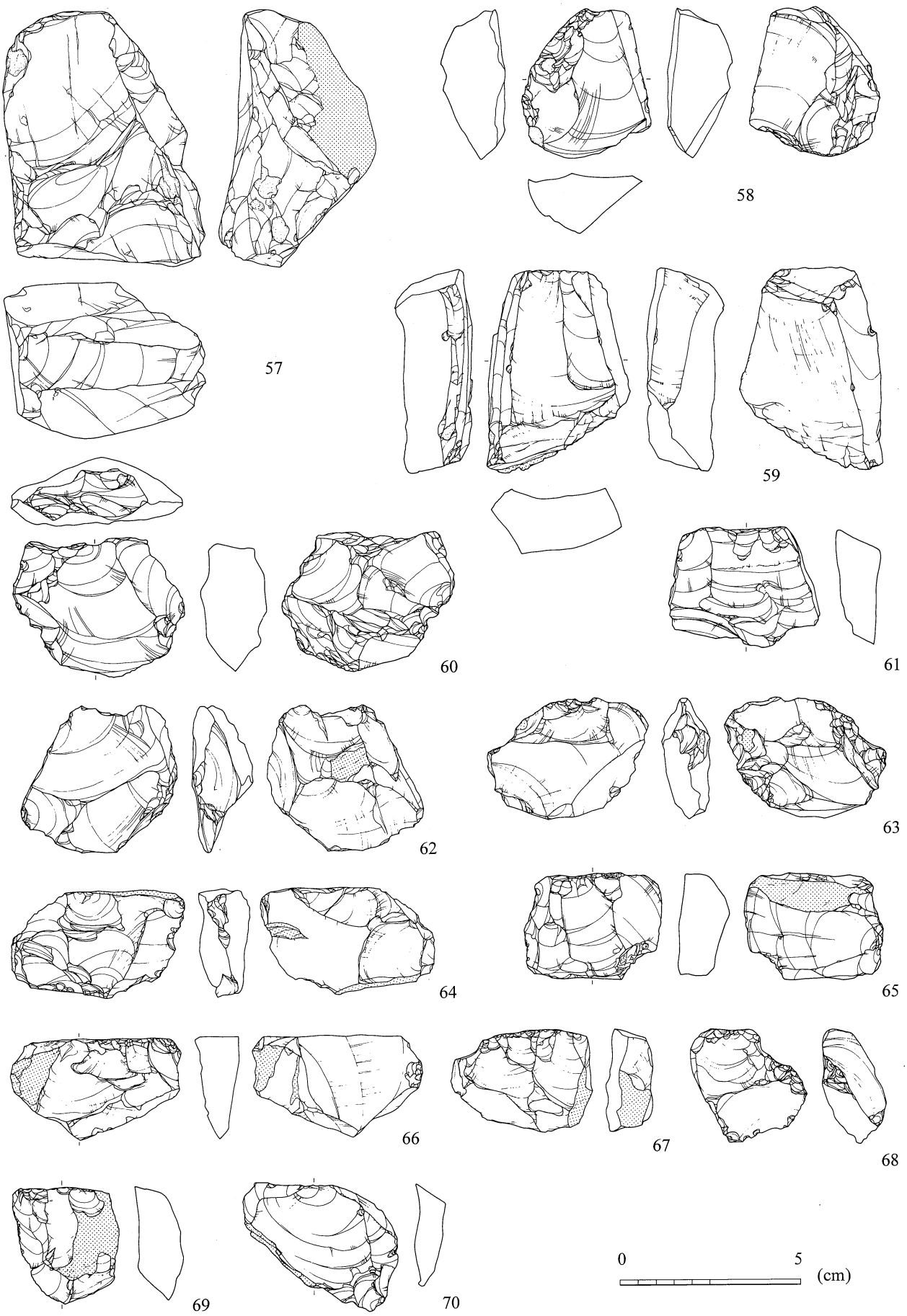
ＳＸ02：57～95遺物集中ＳＸ02およびその付近出土石器。57～76石核（うち71～76は付近出土）。77～95剥離が連続して施される剥片および連続した微細な剥離を有する剥片（うち86～95は付近出土）。83・86抉れた部分に微細な剥離が集中する。すべて黒曜石製。時期を決定できるような土器はＳＸ02およびその付近のグリッドⅢ－Ｕ－５からは出土していない。ほかに98千枚岩質粘板岩製打製石斧がＳＸ02に伴う石器である。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
5
(cm)

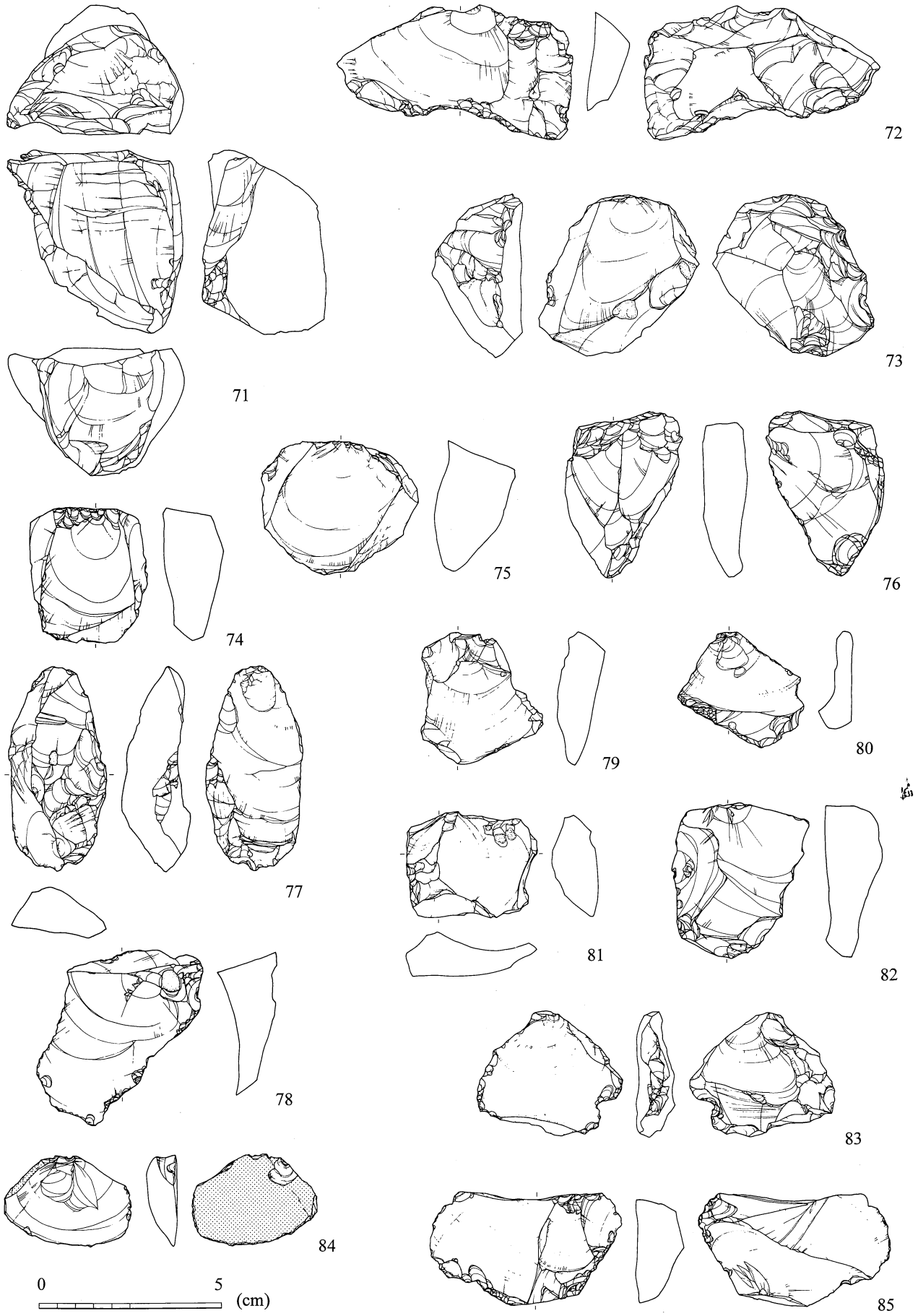
第277図　石器(1)



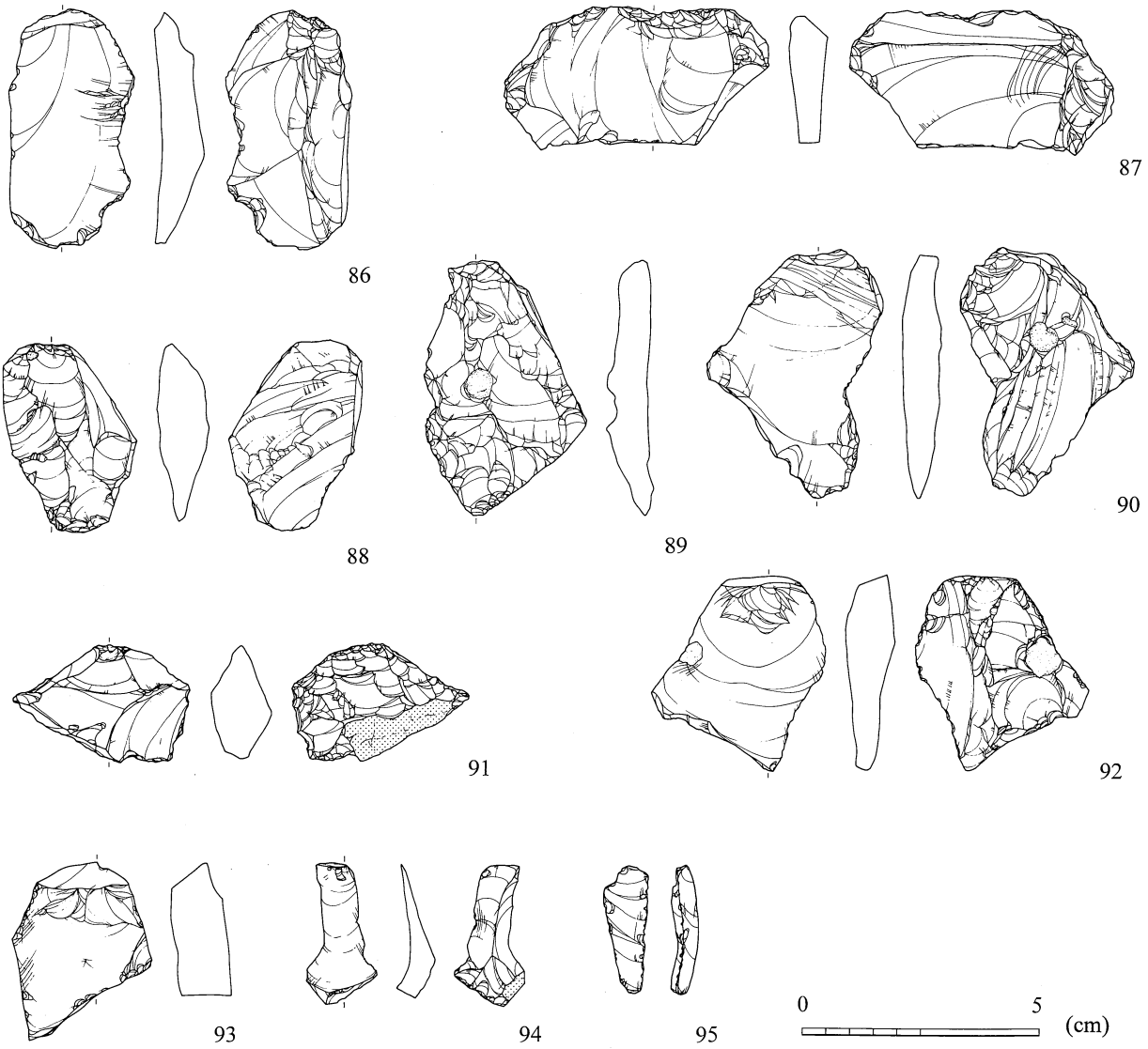
第278図　石器(2)（ＲＦ・ＵＦ・石核）



第279図　石器(3)（ＳＸ02石核）



第280図　石器(4)（ＳＸ02・同付近出土）



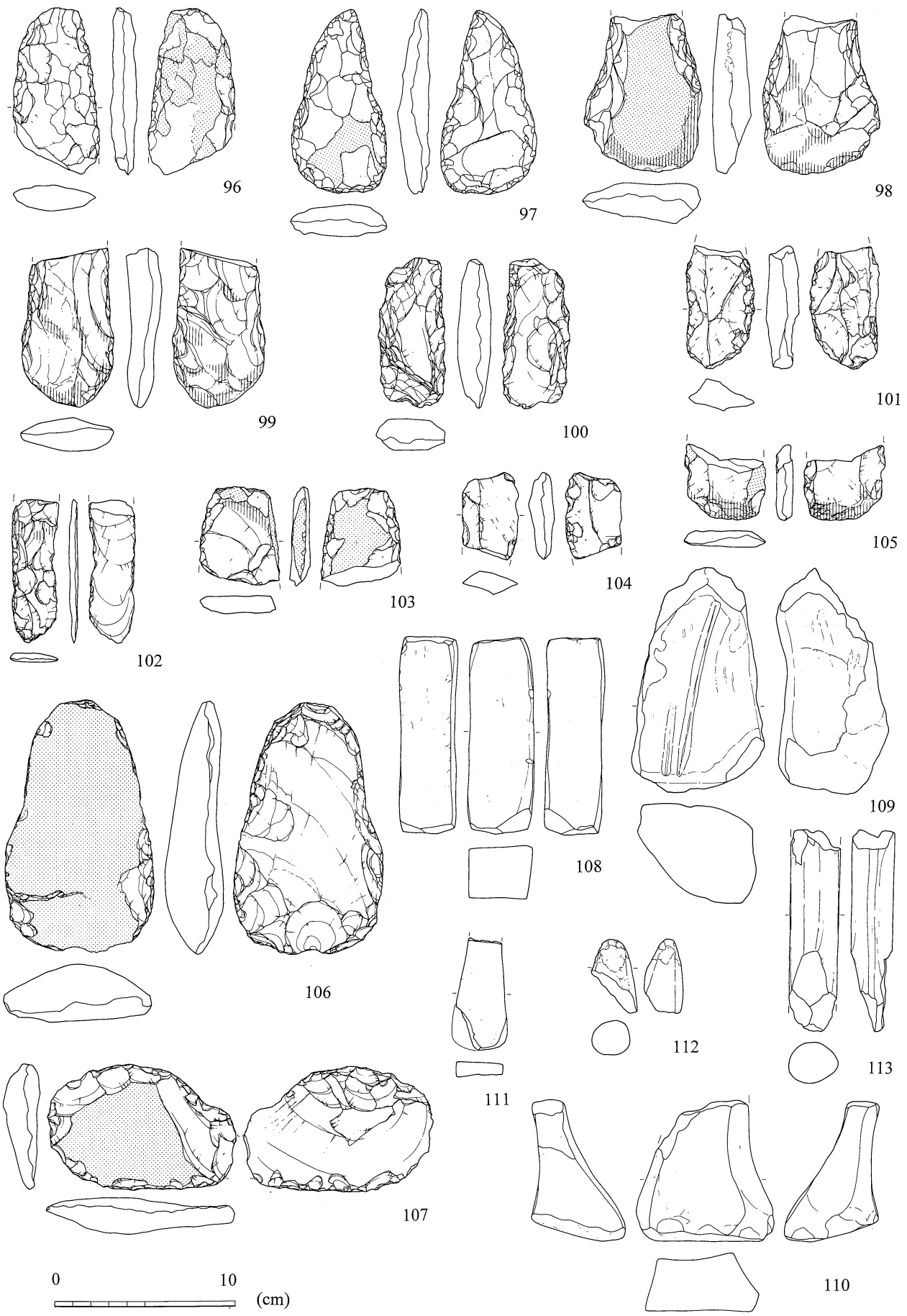
第281図　石器(5)（ＳＸ02付近出土）

96～107大型剝片素材の石器。96～106打製石斧。101ガラス質安山岩製。106比較的堅緻な砂岩製だが、他は千枚岩質粘板岩製。97はＳＫ04、101・102はＳＫ01出土。いずれも縄文時代中期中葉の土坑。106前期初頭ＳＫ54出土。107硬砂岩？製スクレイパー。中期中葉のＳＢ28出土。

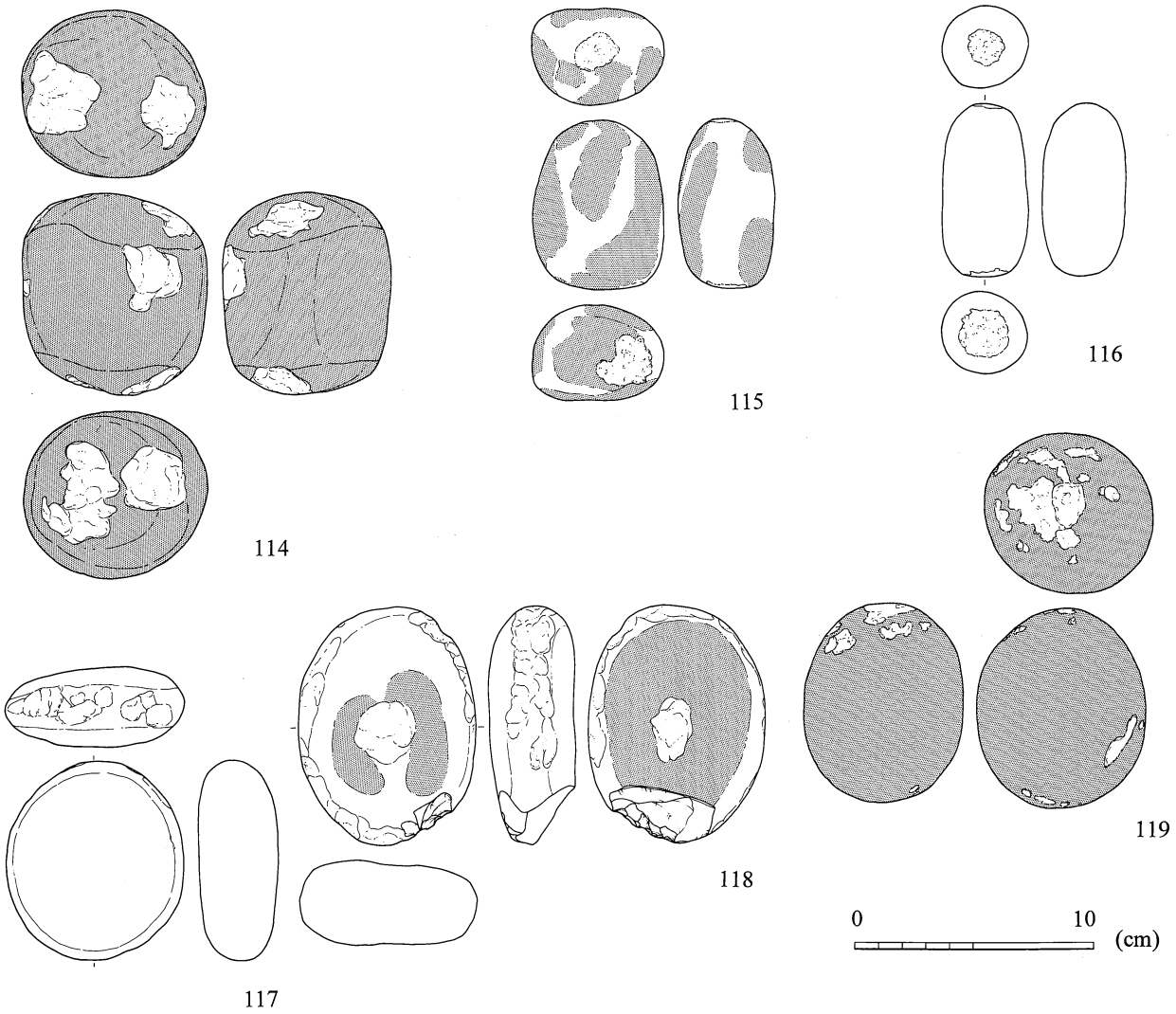
108～134礫素材の石器。108～111砥石。109比較的軟らかい砂岩製。それ以外は凝灰岩製。108はＳＢ10、111はＳＢ14出土。いずれも古墳時代。112磨製石斧の基部破片か。硬砂岩製。113石剣か。粘板岩製。114～116・118～120・123～126・128磨石。120砂岩製だが、それ以外は斑晶の発達した粗粒の安山岩。115縄文時代前期後葉ＳＢ16出土。114・123～126はＳＢ22、116はＳＢ25出土。いずれも古墳時代。118は古代ＳＢ05出土。115～121敲打痕も顕著である。122・127・129・133・134輝石安山岩製台石。古墳時代から古代の竪穴住居跡から出土している。130～132多孔質安山岩製石鉢。

6　鉄製品（第288図）

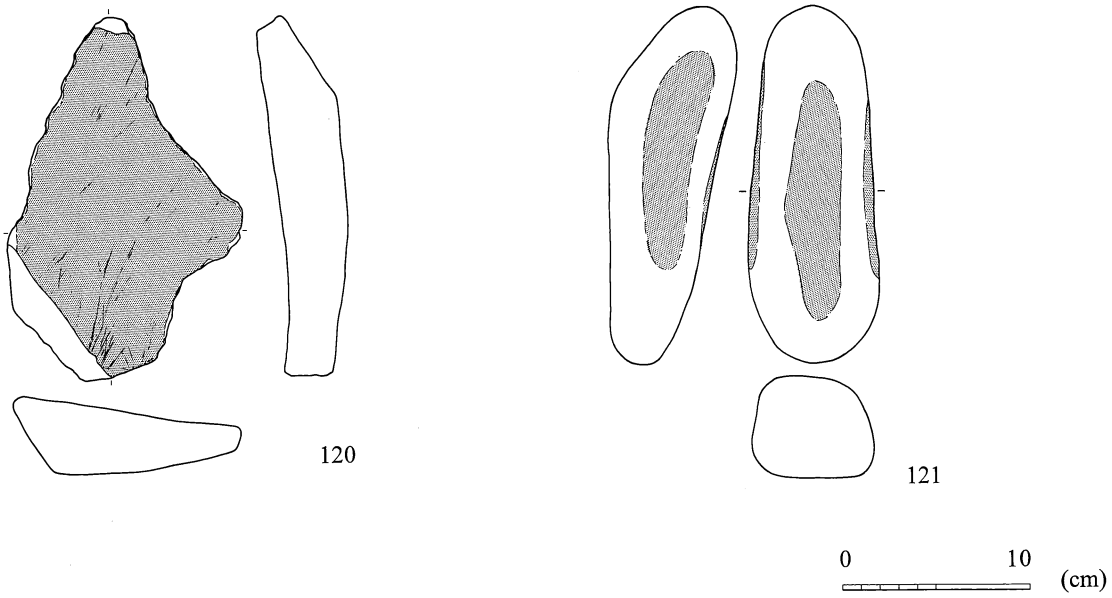
１古代ＳＢ18出土。先端が欠損している鎌。



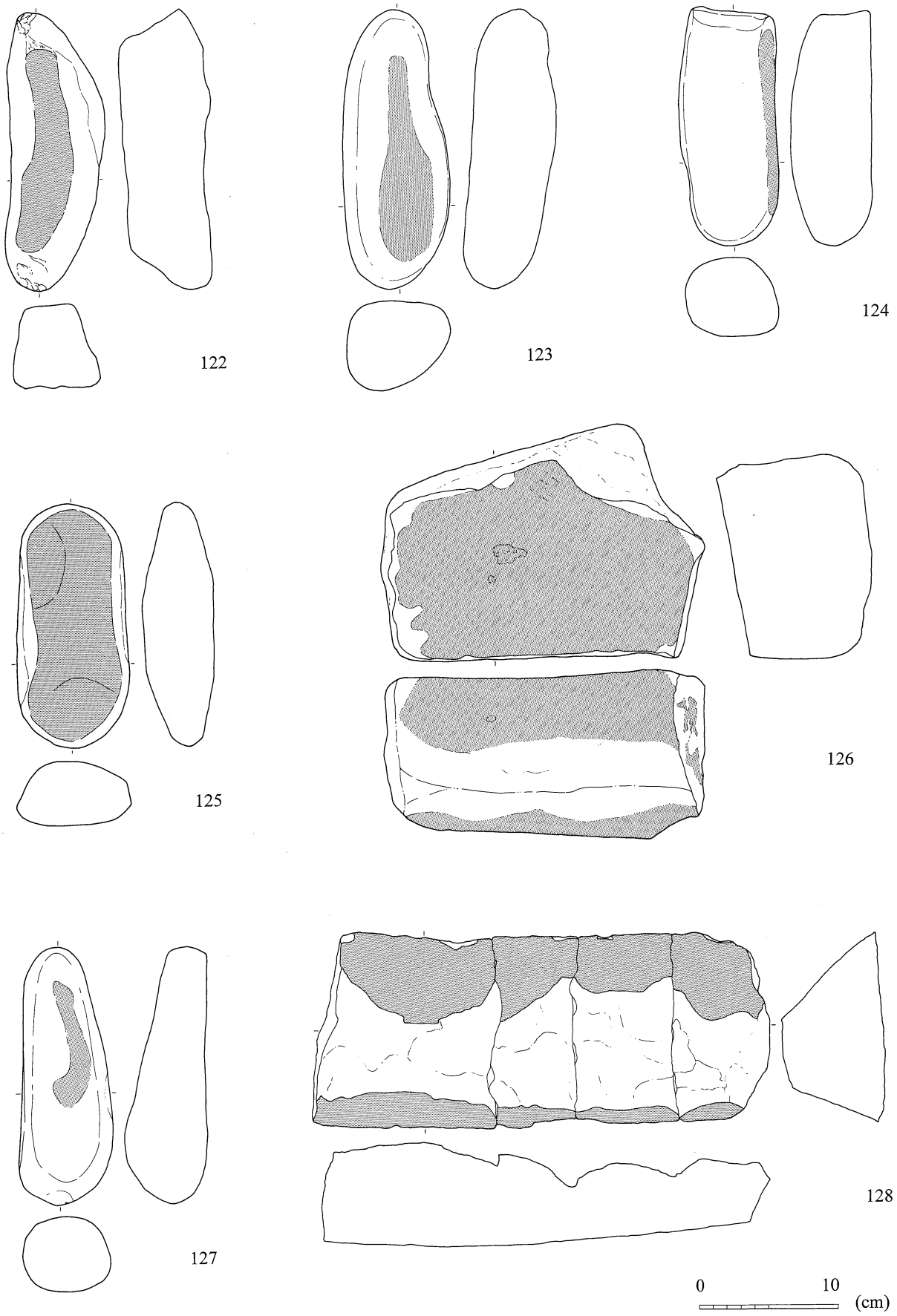
第282図　石器(6)（打製石斧・砥石ほか）



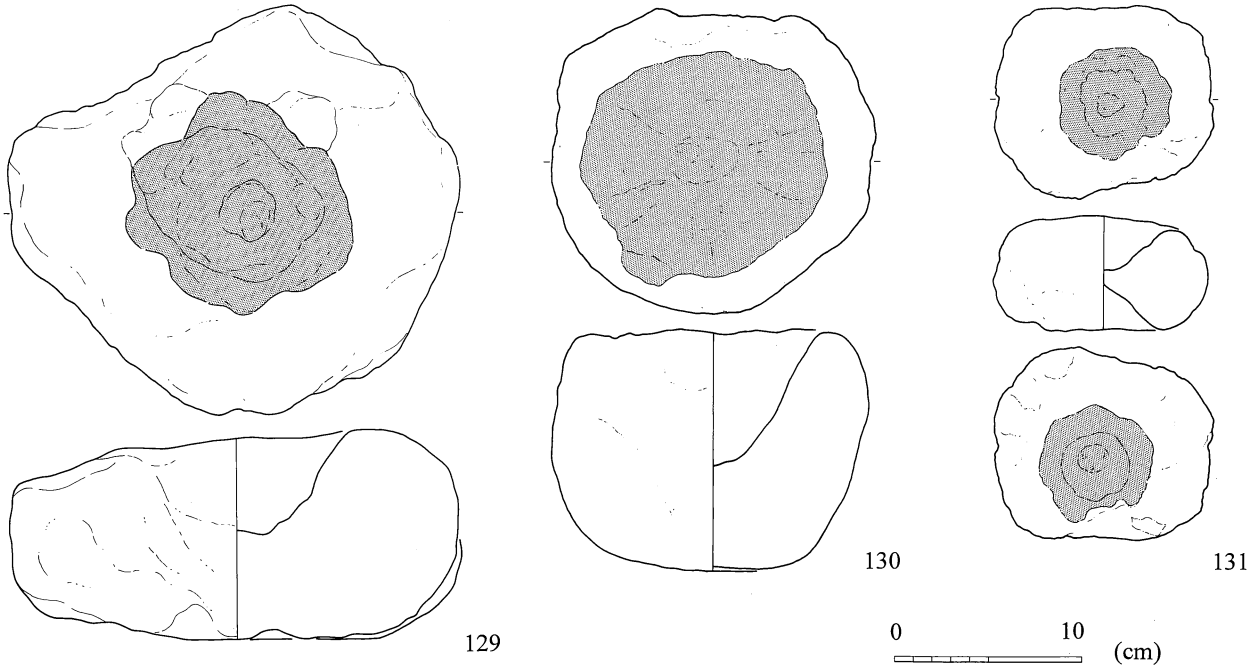
第283図　石器(7)（磨石・敲石）



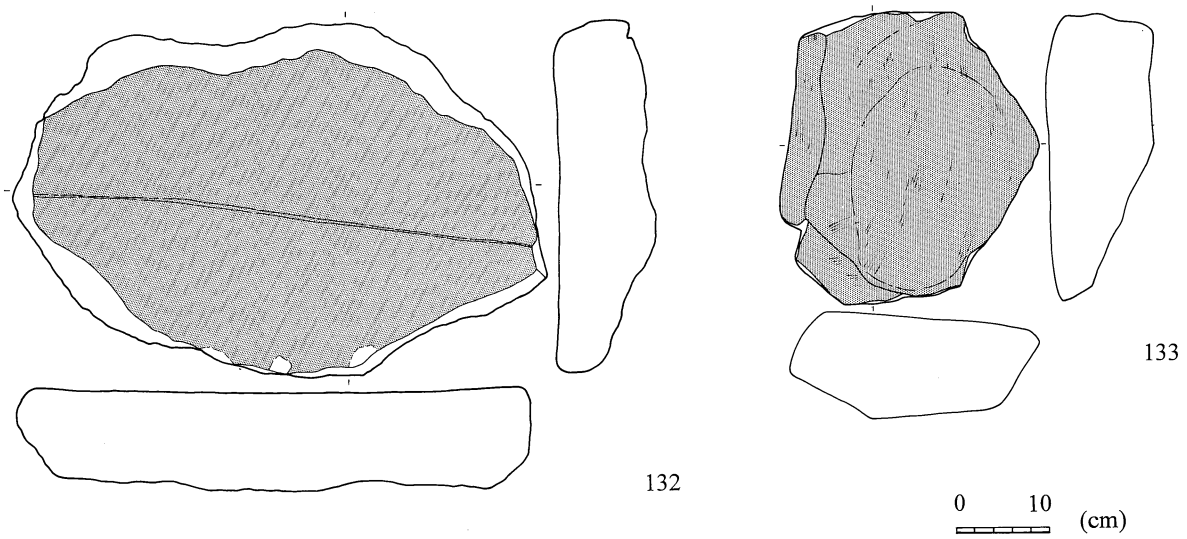
第284図　石器(8)（磨石・台石）



第285図　石器(9)（磨石・台石）



第286図　石器⑽（石鉢・凹石）



第287図　石器⑾（台石）

第288図　鉄製品

第４節　古墳時代住居跡出土炭化材の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

佐久盆地周辺地域では、これまでにも多くの遺跡で住居構築材と考えられる樹種同定が行われている。その結果を見ると、古墳時代以降の遺跡ではコナラ亜属が多く利用されている。古墳時代以前の用材選択については、小諸市郷土遺跡の縄文時代の構築材でクリが多く確認されており、縄文時代と古墳時代以降とでは用材が異なっていた可能性が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社1993）。しかし、御代田町下弥堂遺跡では縄文時代の構築材にもコナラ亜属が多数確認されており（パリノ・サーヴェイ株式会社1994ａ）、用材の違いについてはさらに検討が必要である。

本報告では、住居構築材と考えられる炭化材の樹種同定の種類を明らかにし、既存資料と比較しながら古墳時代の用材について検討する。

２　試料

試料は、焼失住居跡（ＳＢ04・07・10・19・21）から出土した住居構築材と考えられる炭化材31点（試料番号１～31）である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに第８表に記した。

３　方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

４　結果

31点の炭化材は、全て落葉広葉樹で３種類

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.）　**ブナ科**

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）　**ブナ科**

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）　**カツラ科カツラ属**

散孔材で、管孔は単独または２～３個が複合、分布密度は高い。晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、段数は20以上。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～30細胞高。

以上３種類が同定された。コナラ属の解剖学的な所見は第５章中田遺跡第５節炭化材および種実の種類に詳しいので参照されたい。

５　考察

住居構築材と考えられる炭化材には、クヌギ節・コナラ節・カツラが認められ、クヌギ節が最も多い。本地域では、これまでにも多くの遺跡で古墳時代の住居構築材について樹種が明らかにされている（パリノ・サーヴェイ株式会社1989・1992・1994ｂ・1994ｃ）。その結果ではコナラ亜属が多く確認されており、今回の結果とも調和的である。また、同様の傾向は、奈良・平安時代の住居跡から出土した炭化材の樹種同定結果にも認められる（パリノ・サーヴェイ株式会社1988ａ・1989ｂ・1989ｃ・1994・1995）。

今回の調査ではＳＢ07でコナラ節が多い結果が得られ、住居によって樹種構成が異なる可能性がある。これまでの周辺地域で行ってきた調査では、遺跡によって種類構成が異なる結果は得られており、周辺植

生の違いを反映している可能性が指摘されている。同一集落内の住居による用材の差異などを明らかにした例は多くはないが、群馬県渋川市中筋遺跡では古墳時代の隣接する竪穴住居で種類構成に違いが見られる（高橋1988）。また、竪穴住居と平地式建物との間にも用材の差異がある（橋本ほか1993）。このような結果から、竪穴住居において樹種ではなく、強度や形状などに重点が置かれた用材選択が行われていたことや、建物の形態や用途による使用樹種の違いなどが指摘されている（橋本ほか1993・1994）。今回、竪穴住居間で樹種構成が異なることが明らかになったが、これは特に樹種を選択した結果ではないと推定される。

竪穴住居の場合、住居の規模にもよるが垂木の長さは最低でも３～４ｍ程度必要と考えられる。さらに強度が高いことや比較的樹幹が直線であること等も重要な条件であり、使用可能な樹種は限られてくる。住居構築材は、関東地方で行われた結果から遺跡周辺の植生を反映していることが指摘されている（高橋・植木1994）。これらのことを考慮すれば、本遺跡では周辺に生育している中から構築材に適した木材としてクヌギ節やコナラ節が主として利用され、時にはカツラなども利用したことが推定される。

第８表　炭化材の樹種同定結果

番号	遺構名	試料名など	時代・時期	用途	樹　　種
1	ＳＢ04	覆土	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	ＳＢ04	覆土	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	ＳＢ04	No.1	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	ＳＢ04	No.2	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
5	ＳＢ04	No.3	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
6	ＳＢ04	No.4	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
7	ＳＢ04	No.5	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
8	ＳＢ04	No.6	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
9	ＳＢ04	No.7	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
10	ＳＢ04	No.8	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
11	ＳＢ04	No.9	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
12	ＳＢ04	No.10	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
13	ＳＢ07	覆土	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
14	ＳＢ07	覆土	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
15	ＳＢ07	No.1	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
16	ＳＢ07	No.2	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
17	ＳＢ07	No.3	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
18	ＳＢ07	No.4	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
19	ＳＢ07	No.5（地点不明）	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
20	ＳＢ10	覆土（床面直上）	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
21	ＳＢ10	覆土（床面直上）	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
22	ＳＢ10	覆土（散乱）	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
23	ＳＢ10	覆土（散乱）	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
24	ＳＢ21	覆土	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
25	ＳＢ21	覆土	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
26	ＳＢ21	Ｗ－１	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
27	ＳＢ21	Ｗ－２	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
28	ＳＢ21	Ｗ－３	古墳時代前期	住居構築材	カツラ
29	ＳＢ21	Ｗ－４	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
30	ＳＢ21	Ｗ－５	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
31	ＳＢ21	Ｗ－６	古墳時代前期	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

引用文献

橋本真紀夫・馬場健司・田中義文・高橋　敦1993「渋川市中筋遺跡（第７次調査）の自然化学分析調査」『中筋遺跡　第７次発掘調査報告書』群馬県渋川市教育委員会　p.40-60

橋本真紀夫・馬場健司・中根秀二・高橋　敦・田中義文1994「自然科学分析」『半田中原・南原遺跡』群馬県渋川市教育委員会　p.731-753

パリノ・サーヴェイ株式会社1988ａ「十二遺跡出土炭化材の樹種同定」『十二遺跡―長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書―』御代田町教育委員会　p.393-399

パリノ・サーヴェイ株式会社1988ｂ「鋳物師屋遺跡出土炭化材同定」『鋳物師屋―長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書―』小諸市教育委員会　p.116-117

パリノ・サーヴェイ株式会社1989ａ「和田原遺跡出土炭化材同定」『和田原・鎌田原―長野県小諸市和田原・鎌田原遺跡発掘調査報告書―』小諸市教育委員会　p.83-88

パリノ・サーヴェイ株式会社1989ｂ「広畑遺跡出土炭化材の樹種同定」『広畑遺跡―長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書―』御代田町教育委員会　p.35-40

パリノ・サーヴェイ株式会社1989ｃ「根岸遺跡出土炭化材の樹種同定」『根岸遺跡発掘調査報告書』御代田町教育委員会　p.291-293

パリノ・サーヴェイ株式会社1992「下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告」『国道141号線関係遺跡長野県佐久市長土呂国道141号線関係遺跡発掘調査報告書（本文編）』佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター　p.355-391

パリノ・サーヴェイ株式会社1993「郷土遺跡出土炭化材の同定」『郷土―長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書―』小諸市教育委員会　p.52-57

パリノ・サーヴェイ株式会社1994ａ「炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定報告」『下弥堂―縄文前期初頭の集落遺跡調査―』御代田町教育委員会　p.146-150

パリノ・サーヴェイ株式会社1994ｂ「過去の植物利用について」『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原―長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書―』小諸市教育委員会　p.613-624

パリノ・サーヴェイ株式会社1994ｃ「Ｈ－４号住居址から出土した炭化構築材の樹種」『塚田遺跡―長野県北佐久郡御代田町塚田遺跡発掘調査報告書―』御代田町教育委員会　p.344-353

パリノ・サーヴェイ株式会社1994ｄ「大塚原遺跡における平安時代の住居構築材」『大塚原（第二次）―長野県小諸市大塚原遺跡発掘調査報告書―』小諸市教育委員会　p.81-84

パリノ・サーヴェイ株式会社1995「第１号住居址出土の炭化材の樹種」『十石坂上―長野県小諸市十石坂上遺跡発掘調査報告書―』小諸市教育委員会　p.12-13

高橋利彦1988「中筋遺跡出土炭化材の樹種」『中筋遺跡第２次発掘調査報告書』群馬県渋川市教育委員会　p.42-47

高橋　敦・植木真吾1994「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」『PAYNO』２　p.5-18

第５節　小結

細田遺跡を時代順に概観する。

縄文時代：前期の住居跡や土坑といった遺構、遺物が検出されている。ＳＫ54出土の口縁部が若干肥厚する含繊維の回転縄文の土器は前期前葉に遡る可能性があるが、確実に前期初頭の花積下層式期の土器はない。ＳＢ12およびＳＢ13が中葉の有尾式の住居跡で土器も多量に包含している。ＳＢ12がＳＢ13を切っていることが検出時に視認されたが、遺物包含層の区別は非常に難しく、厳密に遺物を新旧の遺構に対応させて取り上げることはできなかった。なおＳＫ41・56・58の含繊維の回転縄文の土器もこの時期のものとすべきだろう。またＳＢ16・ＳＫ62が前期後葉、諸磯ｂ式からｃ式。ＳＢ16も１軒として検出された。土層断面や平面形から建て直しが想定されているが、これも遺物包含層の区別が非常に困難で、出土遺物を新旧の遺構に対応するように取り上げることはできなかった。

中期は前葉のＳＫ04・34の土器がある。並行沈線区画内を短斜行沈線などで充填するという千曲川流域には多い手法である。遺構外からもこれに対応するような資料（第275図21～28）が出土している。わずかに沈線間を短沈線で鋸歯状の文様を描く。中葉は隆帯脇に連続三角押文と連続角押文が併用される鉢が出土したＳＢ08と、口縁部にはヘビを模した具象文があり、その隆帯脇を連続三角押文が施され、胴部には交互刺突と半截竹管による連弧文が施された断面三角形隆帯があり、それに並行して連続三角押文、連続爪形文が施される土器が出土したＳＢ28がある。器形、手法ともにあまり類例を見ない土器であり、胎土もとくに外来的な要素が見られる訳ではないので、当地域の中葉の在地系土器と考えられる。ＳＫ01も中葉。中期後葉以降は土器が多少出土しているが遺構はない。

石器・細田遺跡も他の烏帽子西南麓の遺跡と同様小型剥片素材の石器は黒曜石が卓越している。とくに原石、分割礫、石核、剥離が連続し調整された剥片や連続した微細な剥離を有する剥片が集中したＳＸ02はとくに顕著である。時期を決定できるような土器が共伴しなかったが、遺構の存在している前期中葉から中期中葉までのものと推測される。打製石斧や大型のスクレーパーには千枚岩質粘板岩が卓越し、ガラス質安山岩はほどんどない。

弥生時代：遺構や土器は特定できなかったが、磨製石鏃が一点出土。

古墳時代：ＳＢ06・07・09・10・14・20・21・22・24・25・27・30の12軒の竪穴住居跡、ＳＫ03・11・12・28・55の土坑が古墳時代に属する。これらの遺構から出土した土師器は箱清水式の系統を引く赤彩・櫛描波状文の土器はなく、須恵器も共伴しない。

所属時期を検討する前に器種の認定であるが、真行寺遺跡群における器種分類にならっている（第６章第８節小結参照）。

細田遺跡の古墳時代土師器組成の特徴は

(1)弥生時代の箱清水式の系統を引く櫛描波状文や赤彩の土器を含まない。また、須恵器も含まれない。

(2)精製小型土器は器台、壺、鉢が散見される。

(3)有段坏（鉢）がある（ＳＢ06）

(4)台付甕がある。

形態的な特徴は

(1)壺形土器　二重口縁、大型「く」の字形口縁球形胴が大半をしめる。小型の精製球形胴のものもある。

(2)甕形土器　「く」の字形口縁球形胴のものが大半。

技法上の特徴としては

(1)壺形土器、高坏形土器、精製小型土器（壺、器台、鉢）はミガキ調整が全面に施される。なお「く」字状の口縁ではあるが、口縁端部が折り返し状に二重になっているものは、本稿では壺形土器としたが、器面調整自体はハケ目調整が全面に施されていて、甕形土器と峻別が難しいものがある。
(2)甕形土器はかなり粗いハケ目調整ないしは条痕調整が施される。また口縁端部に縄文原体の刻みを縦位に押圧して、刻みを施すものもある（ＳＢ22）。

以上のような特徴に近いものとして、笹沢編年のII期（笹沢1988）、宇賀神編年のII期新段階（宇賀神1989）、臼居編年のII期２段階（臼居1998）が該当しよう。烏帽子岳西南麓の遺跡群では、東部町真行寺遺跡群（第６章）、高呂添遺跡（西沢ほか1989）に当該期の資料がある。

高呂添遺跡のように後続する古墳時代中期から後期の遺構は検出されていない。

古代：ＳＢ01・02・03・04・05・29・31が古代の遺構である。出土遺物が極めて少なく厳密な時期比定が難しいものを除くと、出土土器（須恵器、土師器、黒色土器）はいずれも以下のような特徴をもつ。

古代土器の組成の特徴
(1)坏は須恵器の坏の割合が非常に高い。
(2)黒色土器の坏が少数ある。
(3)煮沸具は胴部ヘラケズリの甕。
(4)須恵器蓋がある。
(5)貯蔵具として須恵器の壺、甕が見られる。

技法・形態的な特徴
(1)須恵器・黒色土器坏はすべて回転糸切底。
(2)須恵器坏には高台付のものがある。
(3)胴部ヘラケズリの甕の口縁は「く」字状を呈す。
(4)須恵器壺は二段成形。

といった点が指摘できる。

これらは寺島俊郎の編年（1991）に従えば、佐久編年の４・５段階８世紀末から９世紀初頭（奈良時代末から平安時代初頭）に対応する内容といえよう。

古代以降：細田遺跡ではこの古代の竪穴住居跡に後続する遺構は検出されてはいない。しかし、遺構外から中世後期の瀬戸美濃天目茶碗や土師器内耳鍋、さらに国産磁器である唐津皿などが出土しているので、何らかの人間の活動の痕跡を留めているが、居住域ないしは墓域などの遺構を留めるような活動は見られない。

引用参考文献

宇賀神誠司1989「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』２

臼居直之1998「古墳時代前期の土器群の分類」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15―長野市内その３―石川条里遺跡第２分冊』㈶長野県埋蔵文化財センター

笹沢　浩1988「古墳時代の土器」『長野県史考古資料編全１巻（四）遺構・遺物』長野県史刊行会

寺島俊郎1991「古墳時代末から平安時代の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２―佐久市内その２―』長野県埋蔵文化財センター

西沢　浩ほか1989『高呂添遺跡　井高遺跡―緊急発掘調査報告書―』東部町教育委員会

深沢敦仁1994『行力春名社遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

第９章　森下遺跡

第１節　遺跡の概要

本遺跡は、東部町祢津字滝畑2069番地ほかに所在し、地理的には東信火山帯の烏帽子岳西南麓、大室山南麓で、千曲川の支流、大星川（下流で三分川に合す）と求女沢川に挟まれた複合扇状地上に位置している（第２・289図）。今回調査を行った地点は標高約640～670ｍを測る。

東部町教育委員会作成の『東部町遺跡分布図』によれば、縄文土器、土師器、須恵器の散布地となっている。過去に発掘調査歴は無い。

第２節　調査の概要

１　調査範囲と経過

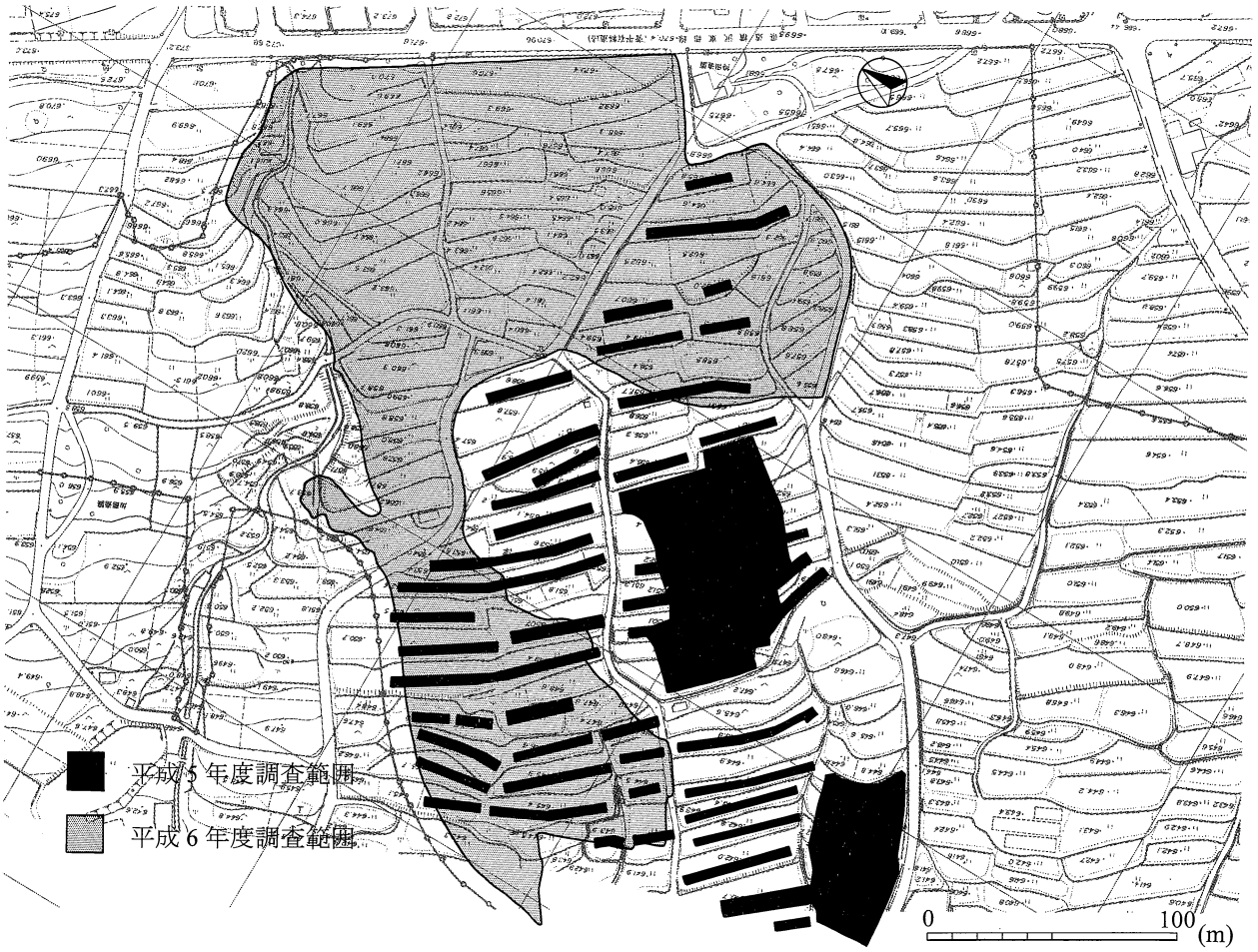
まず、調査範囲を確定するために、平成４年12月８日～11日に対象面積45000㎡に対してトレンチ24本（1632㎡）の試掘調査を行い、おおまかな調査範囲を確定した。さらに平成５年にもトレンチおよび一部面的な調査（12500㎡）を11月８日～12月９日に行い、遺構検出のための調査範囲を絞り込み、平成６年度に面的な発掘調査を行った（第289・290図）。同調査は４月18日～５月18日（1100㎡）、６月13日～10月７日、12月７日（33700㎡）にわたり、同年の調査面積は34800㎡、平成５年度調査と合わせのべ調査面積は47300㎡に及ぶ。

平成５年11月８日　重機によるトレンチ掘り開始。
12月９日　航空測量、平成５年度調査終了。
平成６年４月18日　進入路部分表土剝ぎ開始。
４月22日　精査および遺構検出開始。
４月26日　測量杭打設開始。
４月27日　県文化課現地指導。
５月16日　航空測量・航空撮影。
５月18日　第１次調査終了。
６月13日　開始式、プレハブ整備。
６月16日　遺構検出開始。
６月21日　測量杭打設開始。
８月31日　①区②区航空測量・航空撮影。
９月22日　③区航空測量・航空撮影。
10月５日　④区航空測量・航空撮影。
10月７日　第２次調査終了。
12月７日　第３次調査。

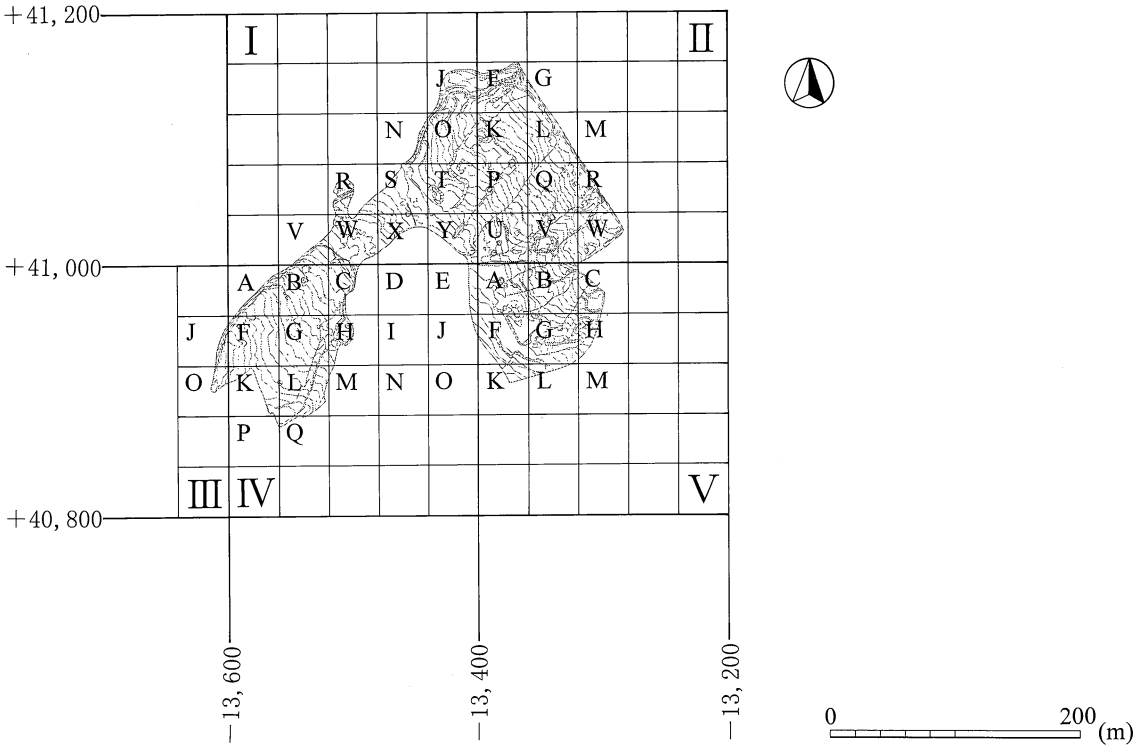
２　基本層序

本遺跡の基本層序は、試掘調査で上位からグライ化した粘土質シルトの現耕作土（水田土壌・Ⅰ層）、灰褐色～褐色の砂混～砂質シルト（Ⅱ層）、炭や土器を含む暗褐色～黒褐色粘土質シルト（遺物包含層・Ⅲ層）、径20～50㎝の亜円礫を多く含む黒色粘土層（ガレキ層・Ⅳ層）、土壌化した火山灰層が径50～100㎝の礫を含んで再堆積した黄褐色砂質～粘土質シルト層（ローム層・Ⅴ層）の存在が確認されている。

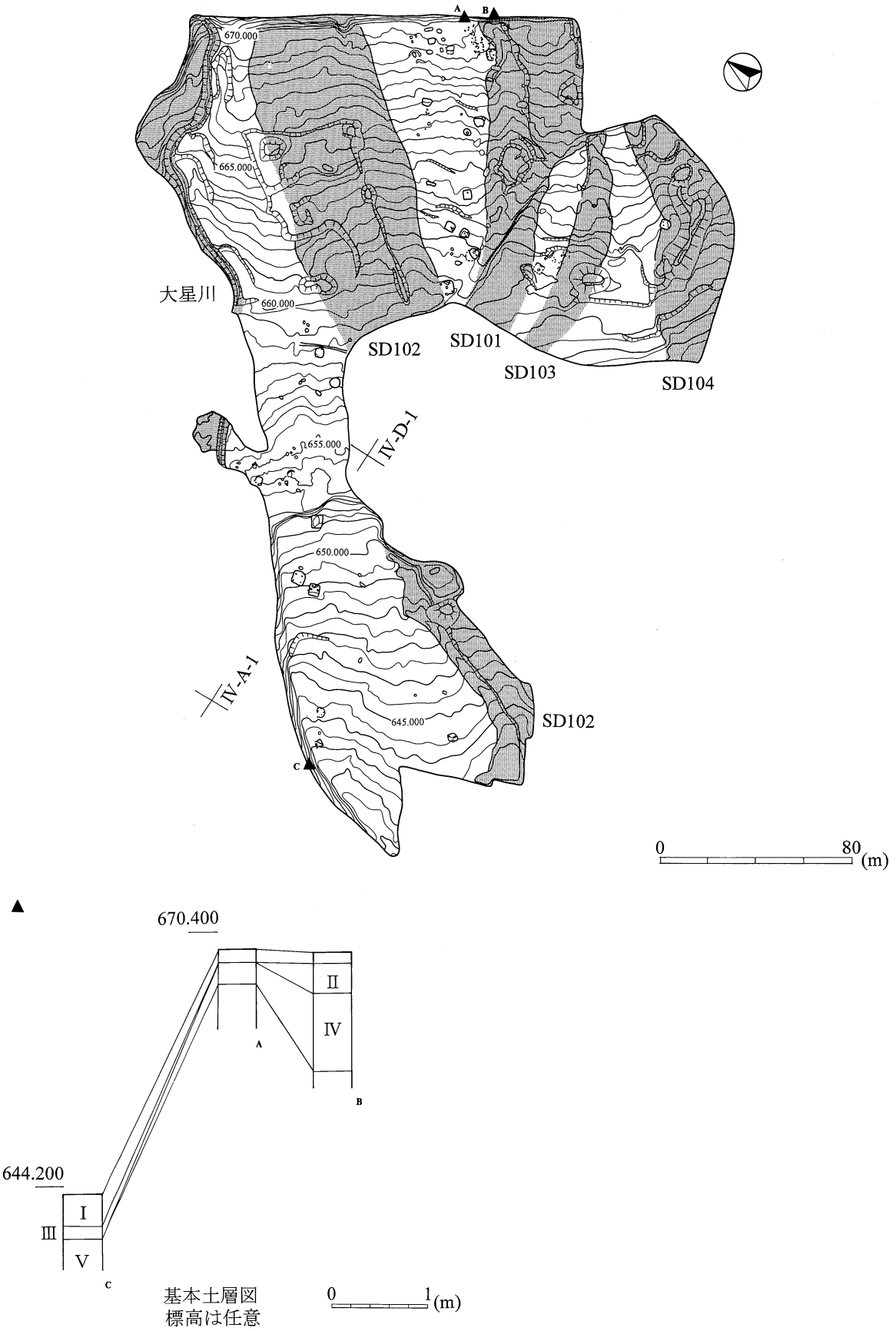
また調査範囲内を横断するように自然流路が３本（ＳＤ101・102・103）、西端は大星川、東端にＳＤ104が検出されるので、計５本の現流路および埋没流路によって区切られている（第291図）。



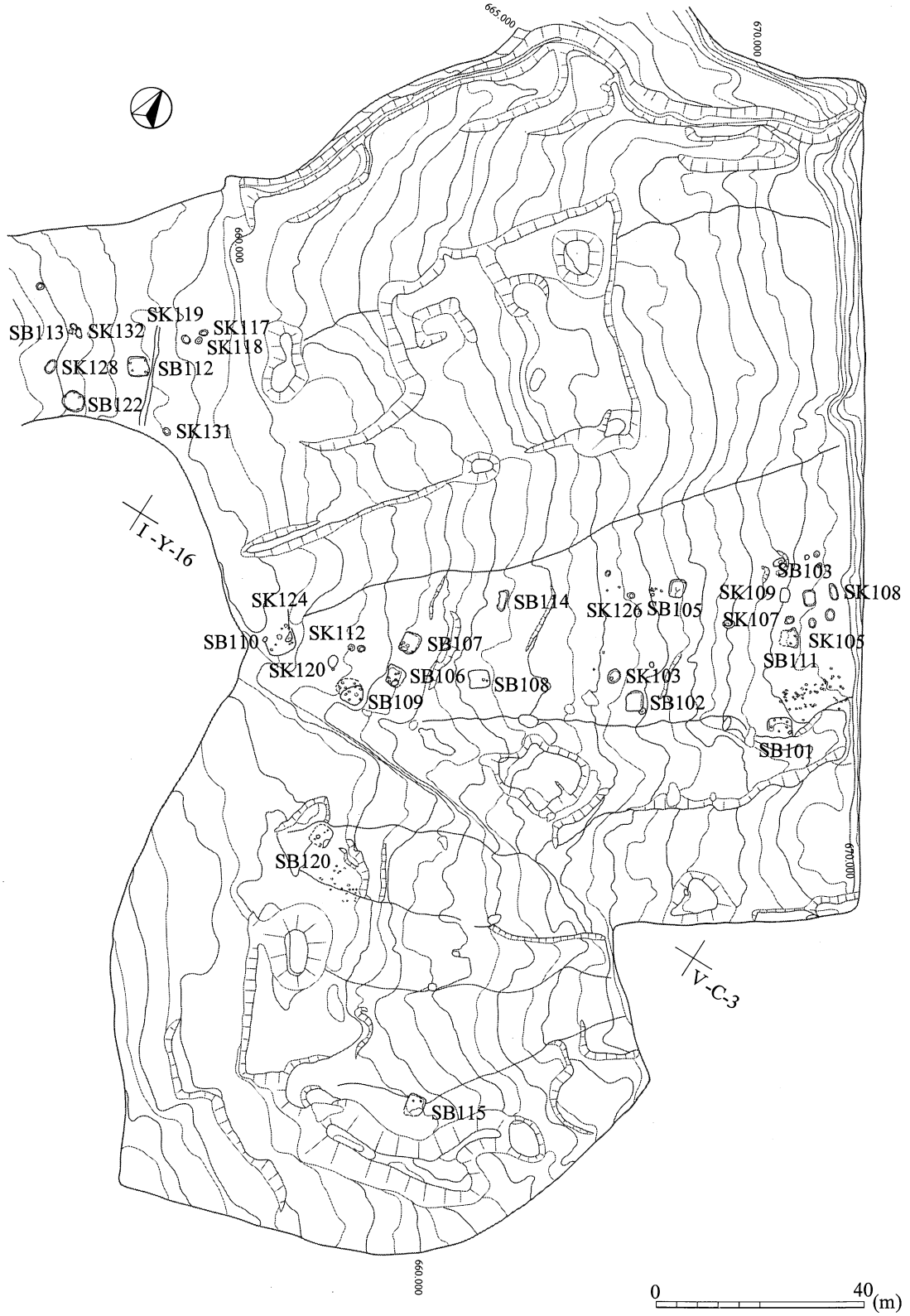
第289図　森下遺跡調査範囲



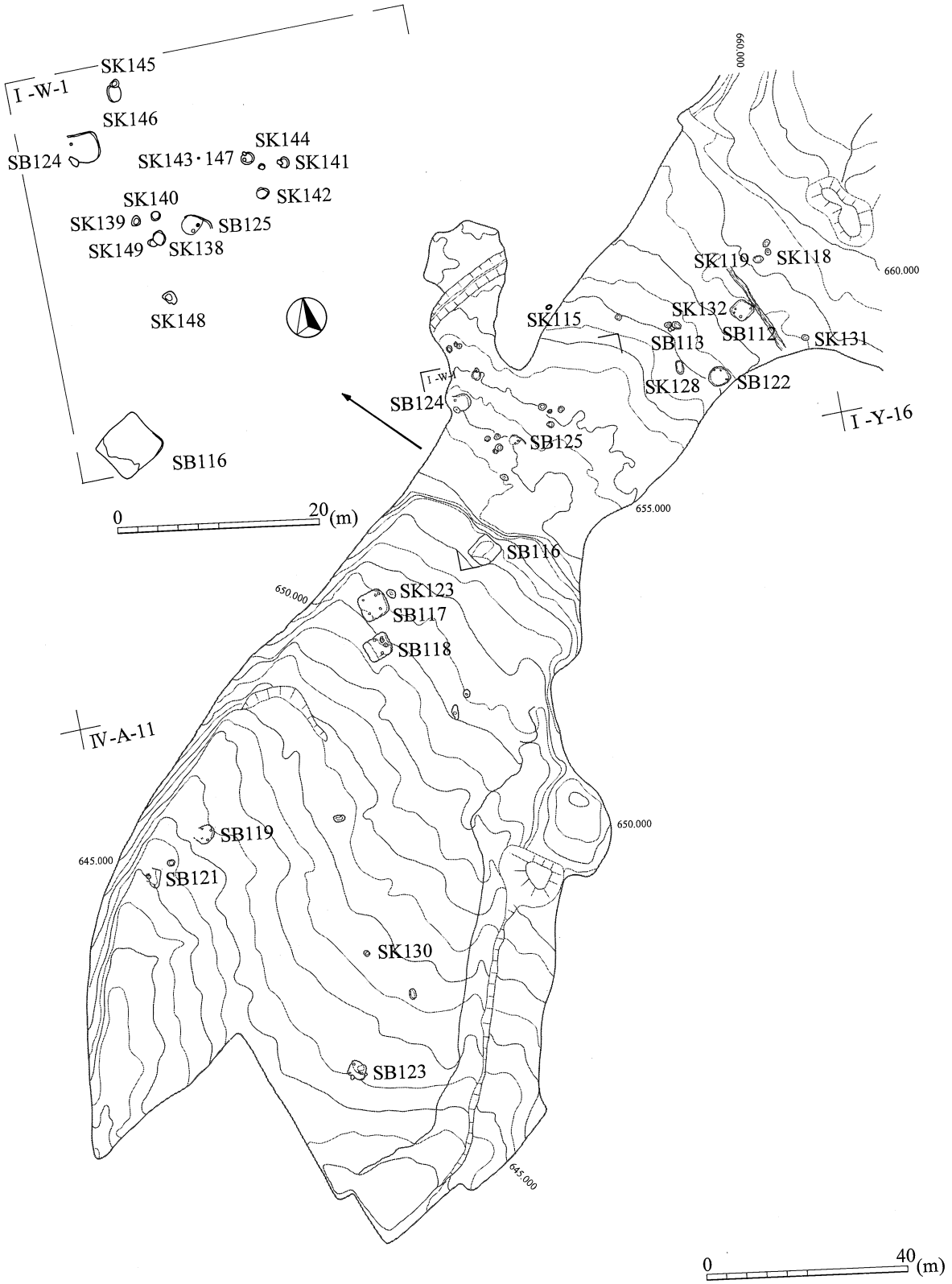
第290図　森下遺跡グリッド



第291図　森下遺跡　溝ＳＤ101～104・基本土層



第292図　森下遺跡遺構配置(1)



第293図　森下遺跡遺構配置(2)

第３節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡と土器

(1)　縄文時代

ＳＢ109（第294図）　　位置Ⅱ－Ｕ－17・22

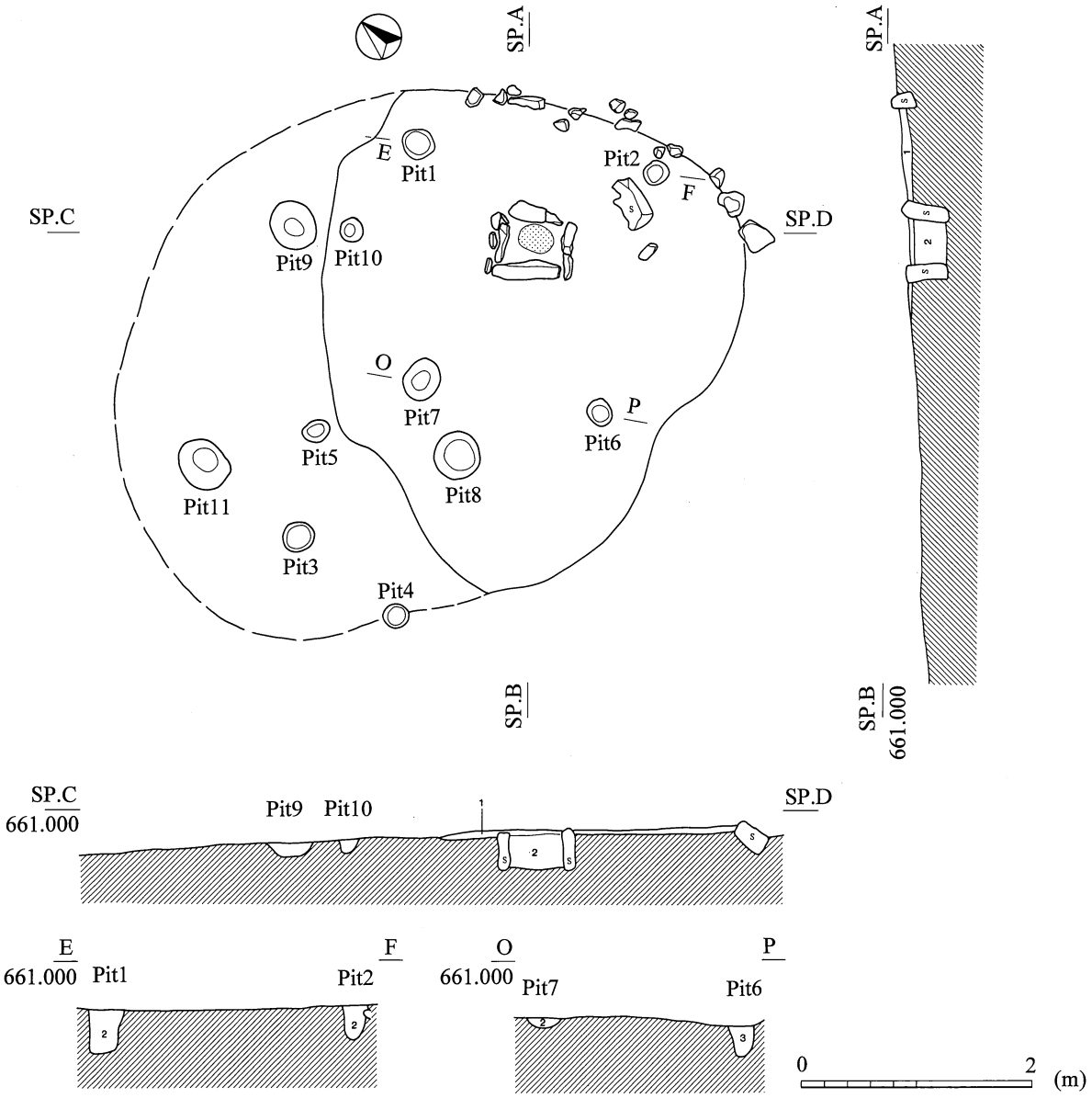
検　出　表土（Ⅰ層・耕作土）除去後、土器片および石囲炉を検出。住居跡と判断したが、水田耕作のため削平が著しく、床面は明確には分からなかった。

構　造　規模、平面形はわからない。東側に平石や角礫が弧状に連続する部分があり、住居跡の範囲とも考えられる。石囲炉を囲む４基（Pit１・２・６・７）が柱穴と考えられる。

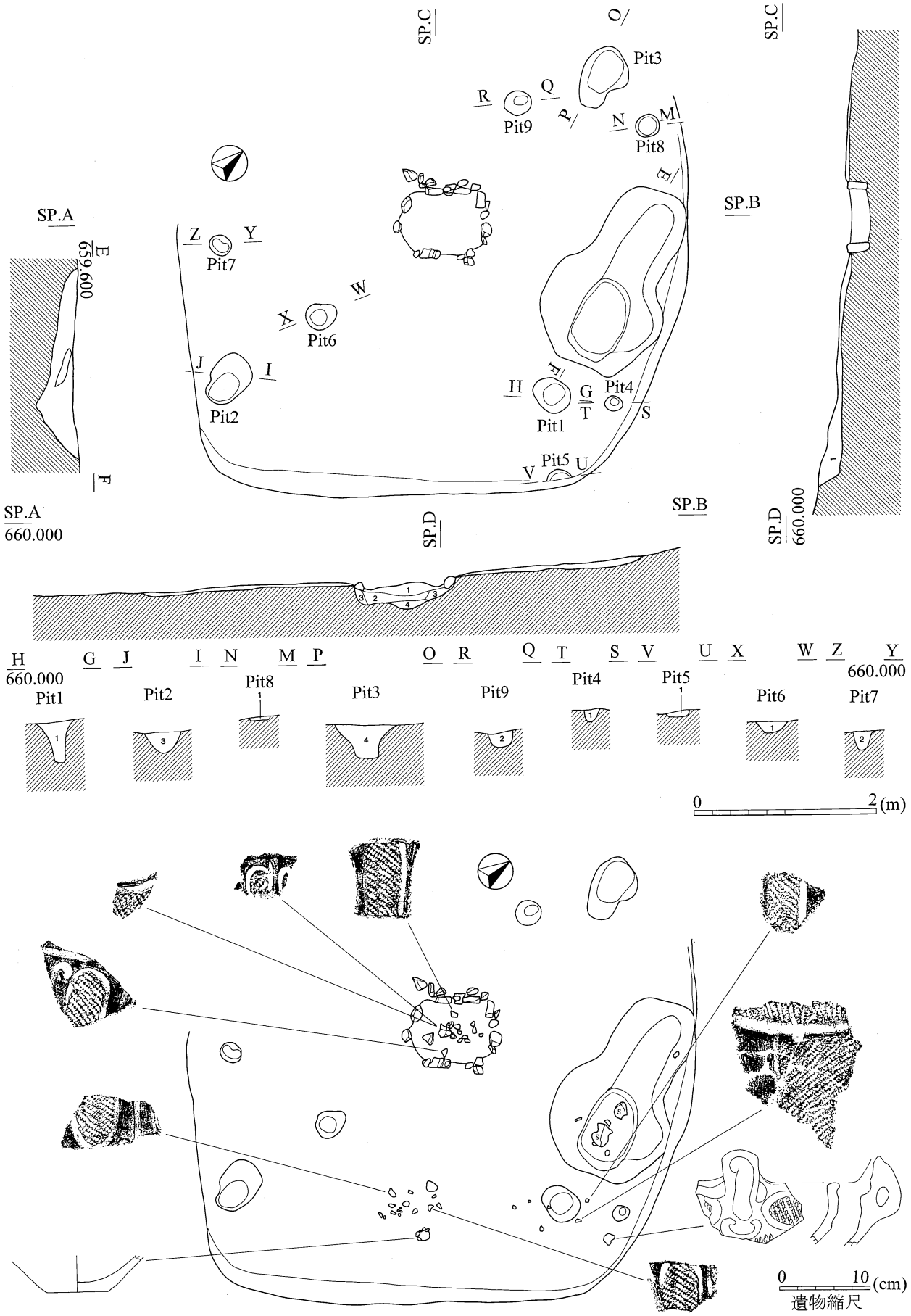
炉　北西―南東に軸を持つ0.6×0.3ｍ石囲炉。炉内側に形0.3ｍの焼土が認められた。

遺　物　検出段階で中期後葉加曽利Ｅ式が出土したという。

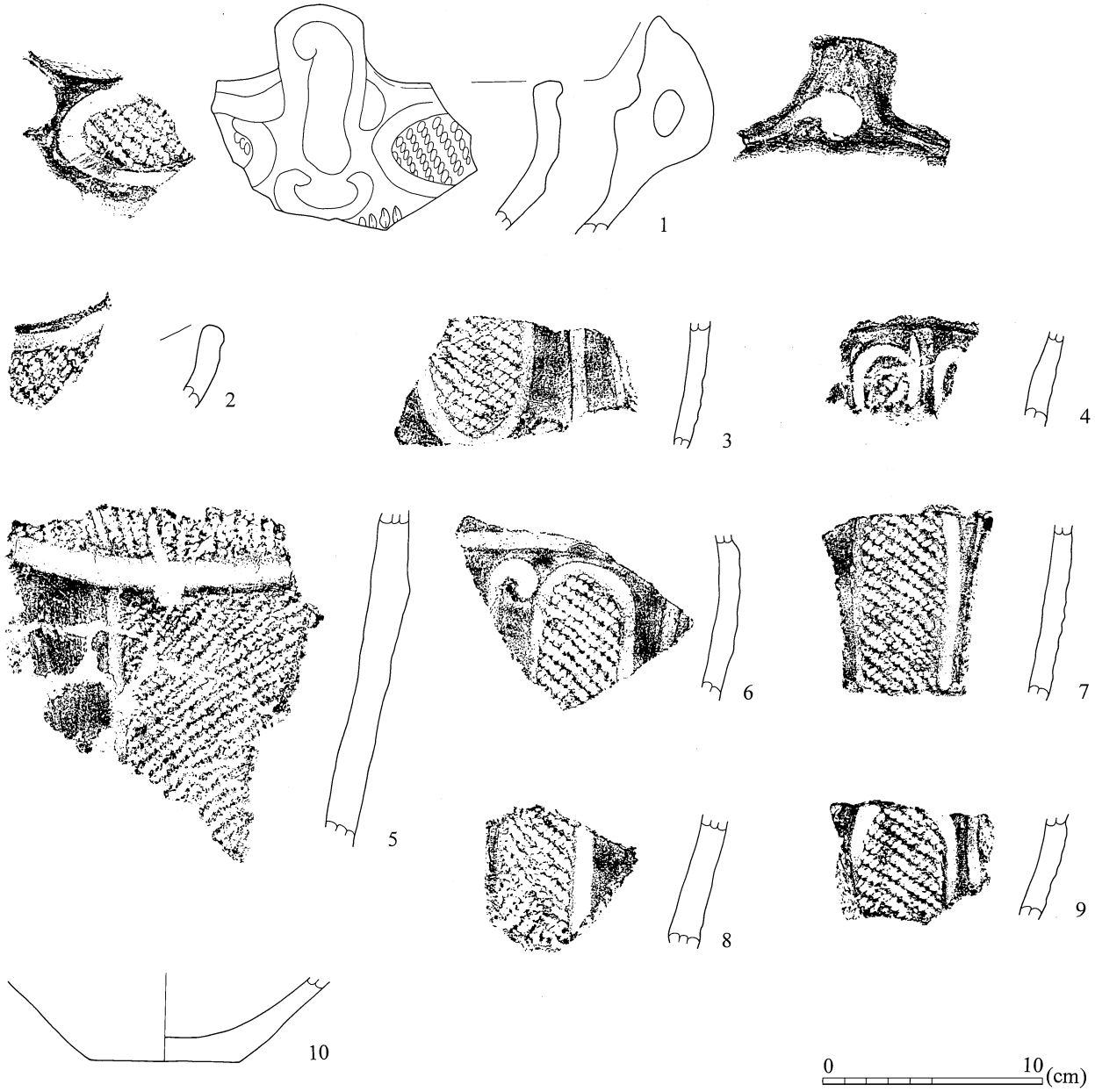
時　期　縄文時代中期後葉か



第294図　竪穴住居跡　ＳＢ109



第295図　竪穴住居跡　ＳＢ110・土器出土状況



第296図　竪穴住居跡　ＳＢ110出土土器

ＳＢ110（第295・296図）　　位置Ｉ－Ｙ－20・25

検　出　表土（Ｉ層）除去後、土器片および石囲炉を検出。住居跡と判断し、石囲炉を中心に土層観察用のトレンチを十字に設定。床面は明瞭ではなかったが、南東から北東側の立ち上がりが確認された。

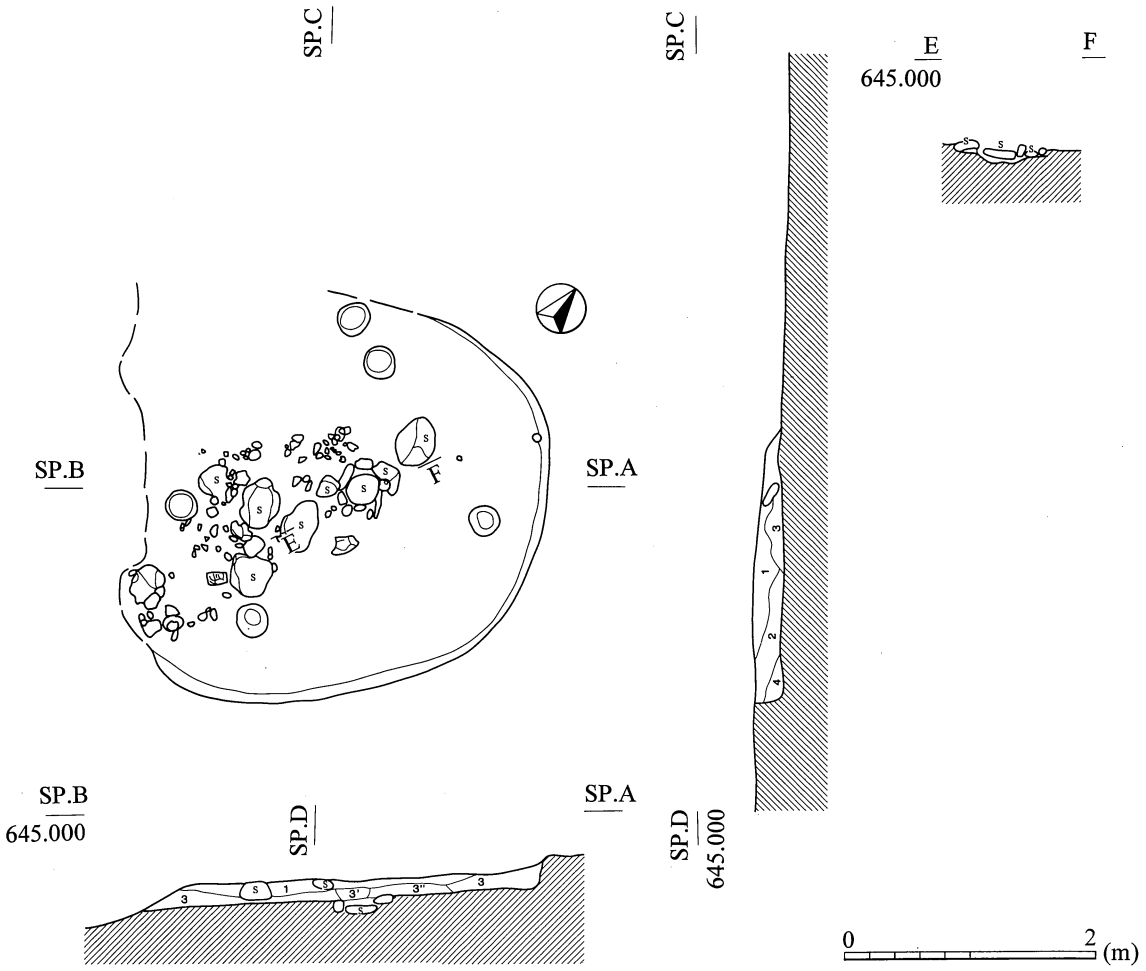
構　造　床面、立ち上がりは不明瞭だが平面形は隅丸の方形か。石囲炉を囲むPit１・２・９が柱穴。

炉　一辺0.8ｍ前後の方形。本来の主な炉石は抜き取られているようである。炉内からも縄文土器が出土。

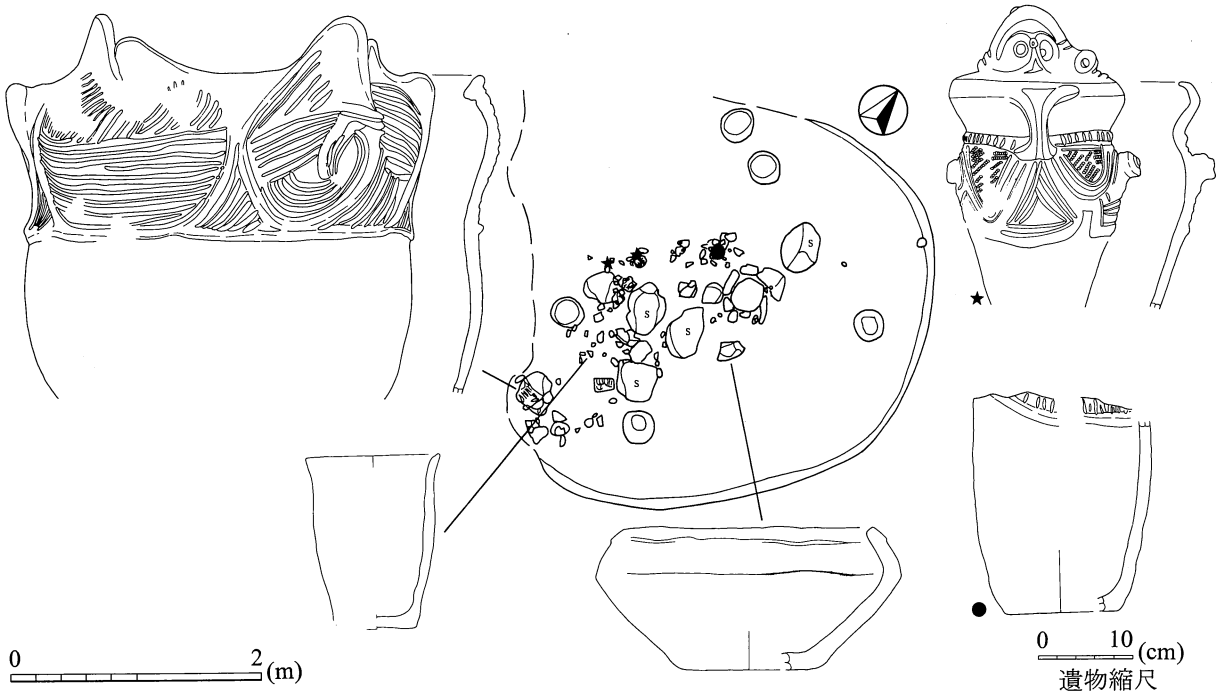
遺　物　１～10中期後葉の加曽利Ｅ式。１・５のように口縁部に楕円区画文、胴部は縦位磨消縄文が施される。加曽利Ｅ式の新相（Ｅ３式）。１は口縁部の橋状把手。石器は粘板岩製スクレイパー（第354図66）、安山岩製磨石（第355図78）、凹石（同85）が出土。

時　期　縄文時代中期後葉　加曽利Ｅ式

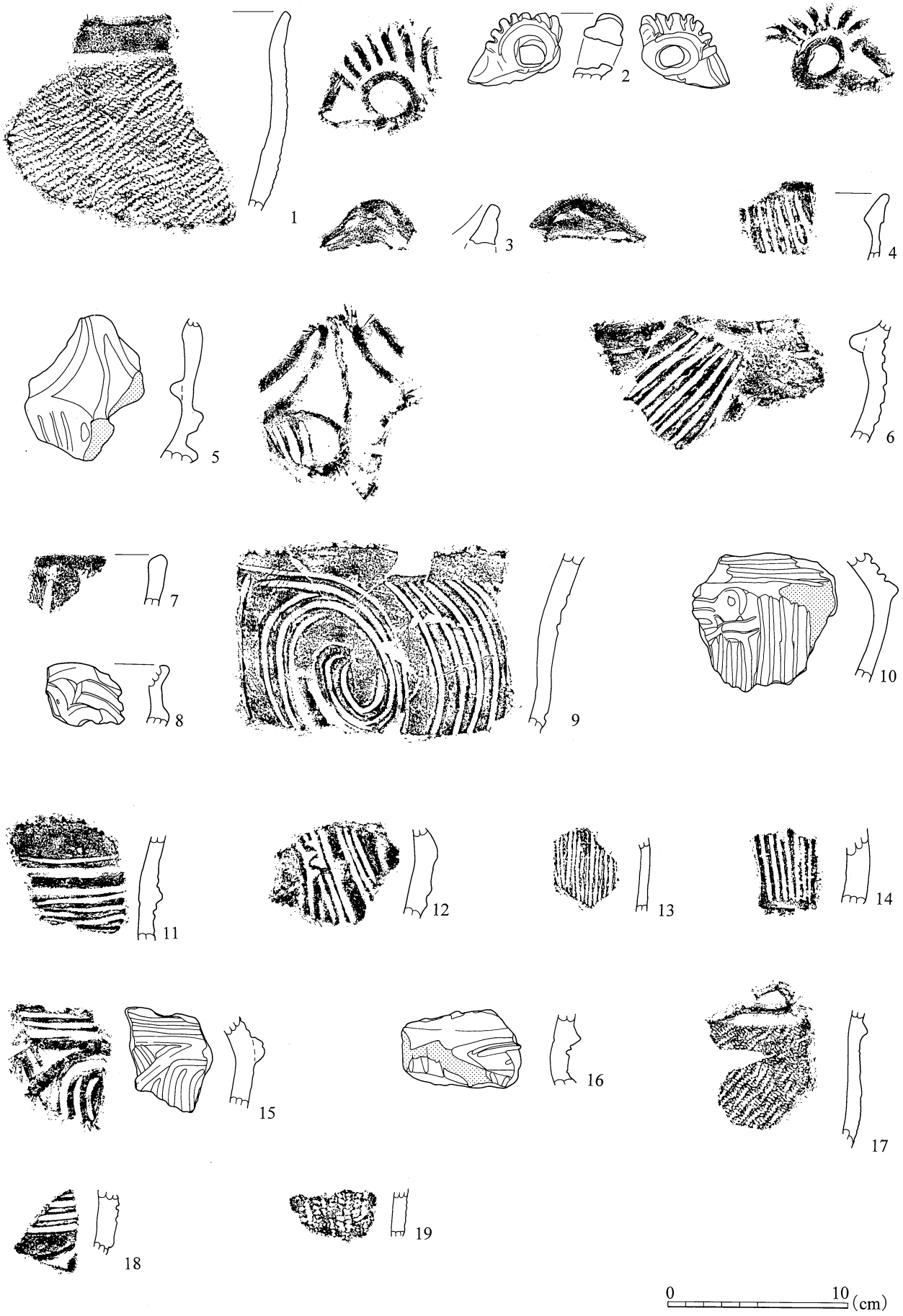
ＳＢ119（第297～300図）　　位置Ⅳ－Ｆ－３



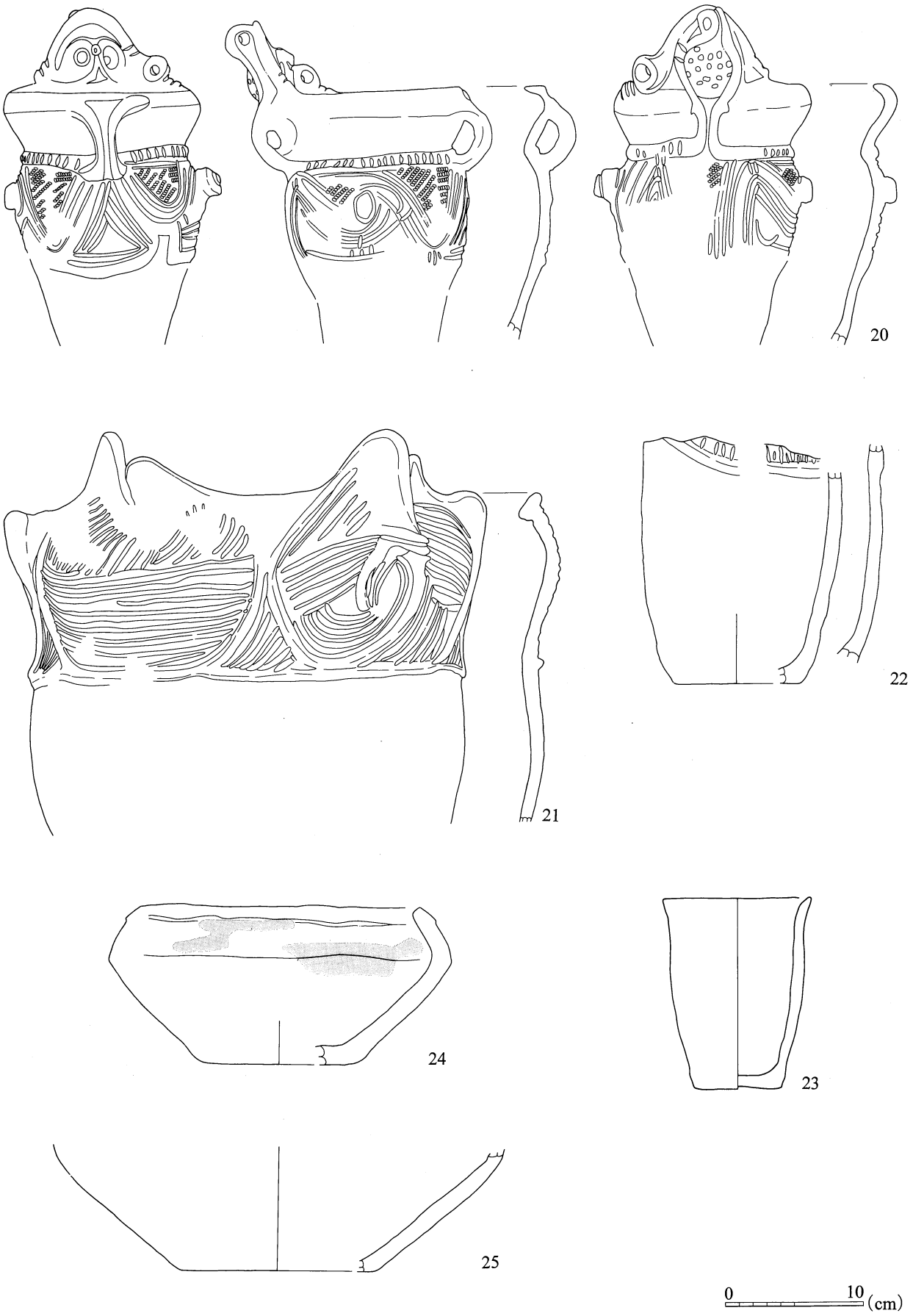
第297図　竪穴住居跡　ＳＢ119



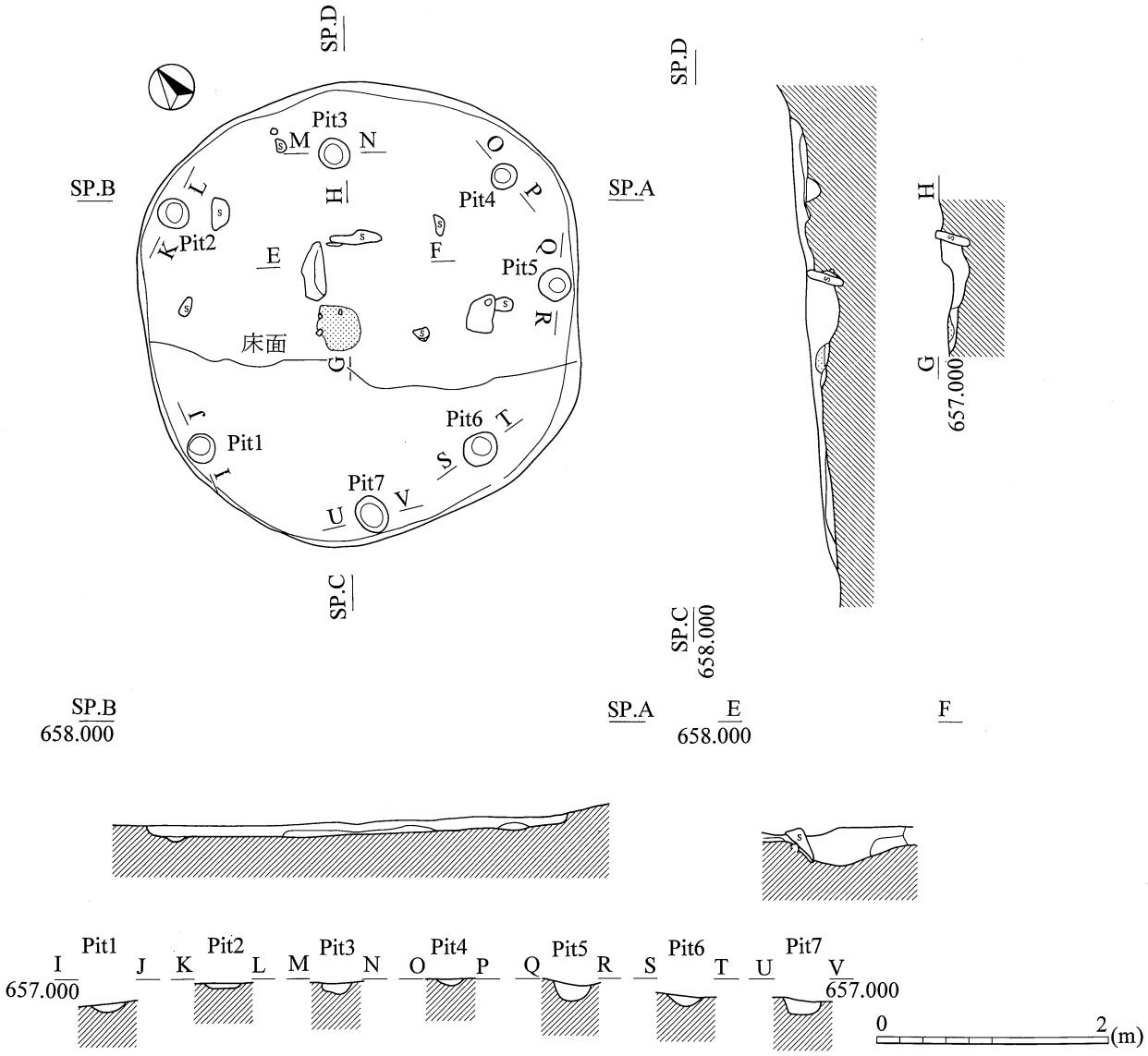
第298図　竪穴住居跡　ＳＢ119土器出土状況



第299図　竪穴住居跡　ＳＢ119出土土器(1)



第300図　竪穴住居跡　ＳＢ119出土土器(2)



第301図　竪穴住居跡　ＳＢ122

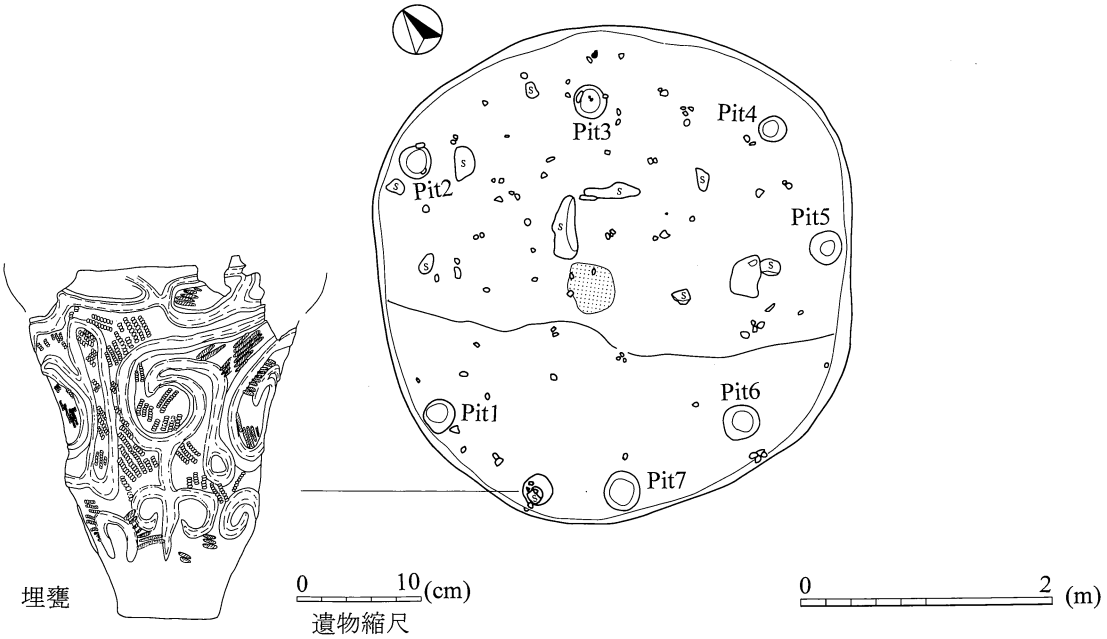
構　造　北東―南西に軸を持つ3.2ｍ前後の楕円形。立ち上がり、床面は削平が著しく不明確。住居跡長軸にそってPitが５基検出された。柱穴と考えられる。ローム面直上から土器や礫がまとまって出土。

炉　焼土が若干集中する部分があり、炉と思われるが明瞭ではない。地床炉か。

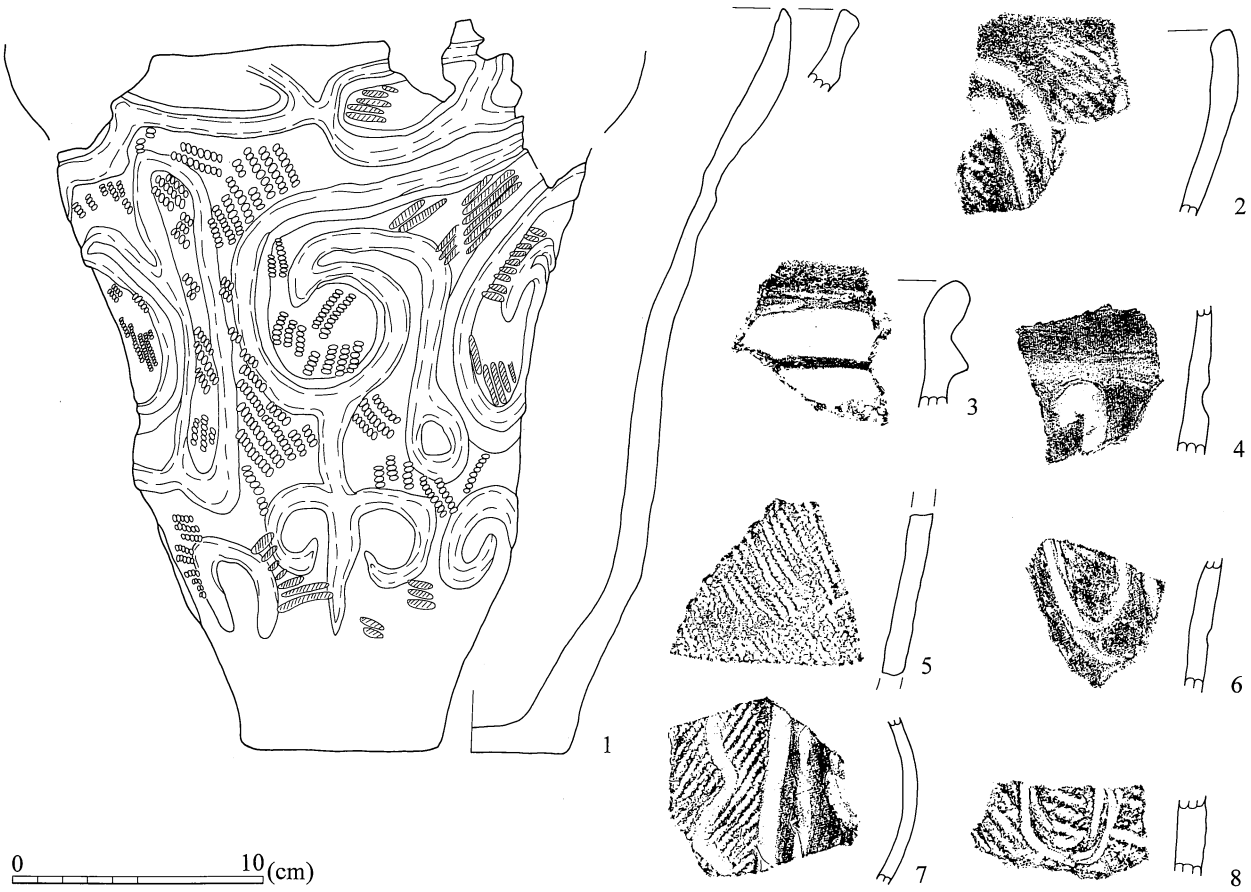
遺　物　５・６・10・11・21・22は断面三角形などの隆帯を貼付し、隆帯脇ないし、隆帯区画内をヘラ状工具による沈線文を施す。１・17・19・20縦位回転縄文ＲＬを地文とし、沈線や隆帯を施す。20口縁部に人面形象の突起が付く。この突起の裏面（外面）には列点刺突文、突起直下および対面の口縁部に粘土紐をＸ字状にした把手が付けられる。21胴部上半の幅広の口縁部文様帯に断面三角形の隆帯で区画し、ヘラ状工具による沈線を充塡。波頂部直下には剝離しているがおそらくコイル状突起が施されていたことが伺える。22小型の深鉢。低隆帯貼付後、ヘラ状工具による短沈線が施される。24「く」字状に屈曲する精製浅鉢。外面に赤彩が施される。23小型無文深鉢。石鏃（第352図14）、石錐（49）が出土。

時　期　縄文時代中期中葉

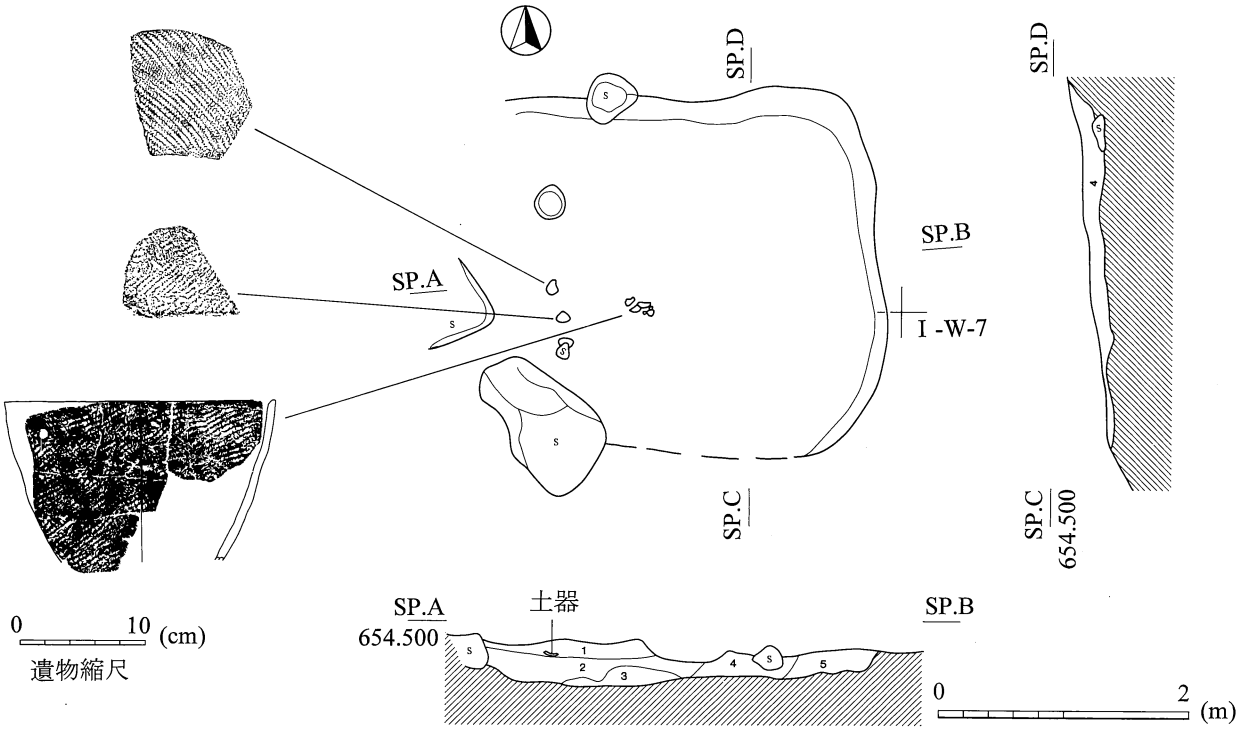
ＳＢ122（第301～303図）　　位置　Ｉ－Ｘ－７



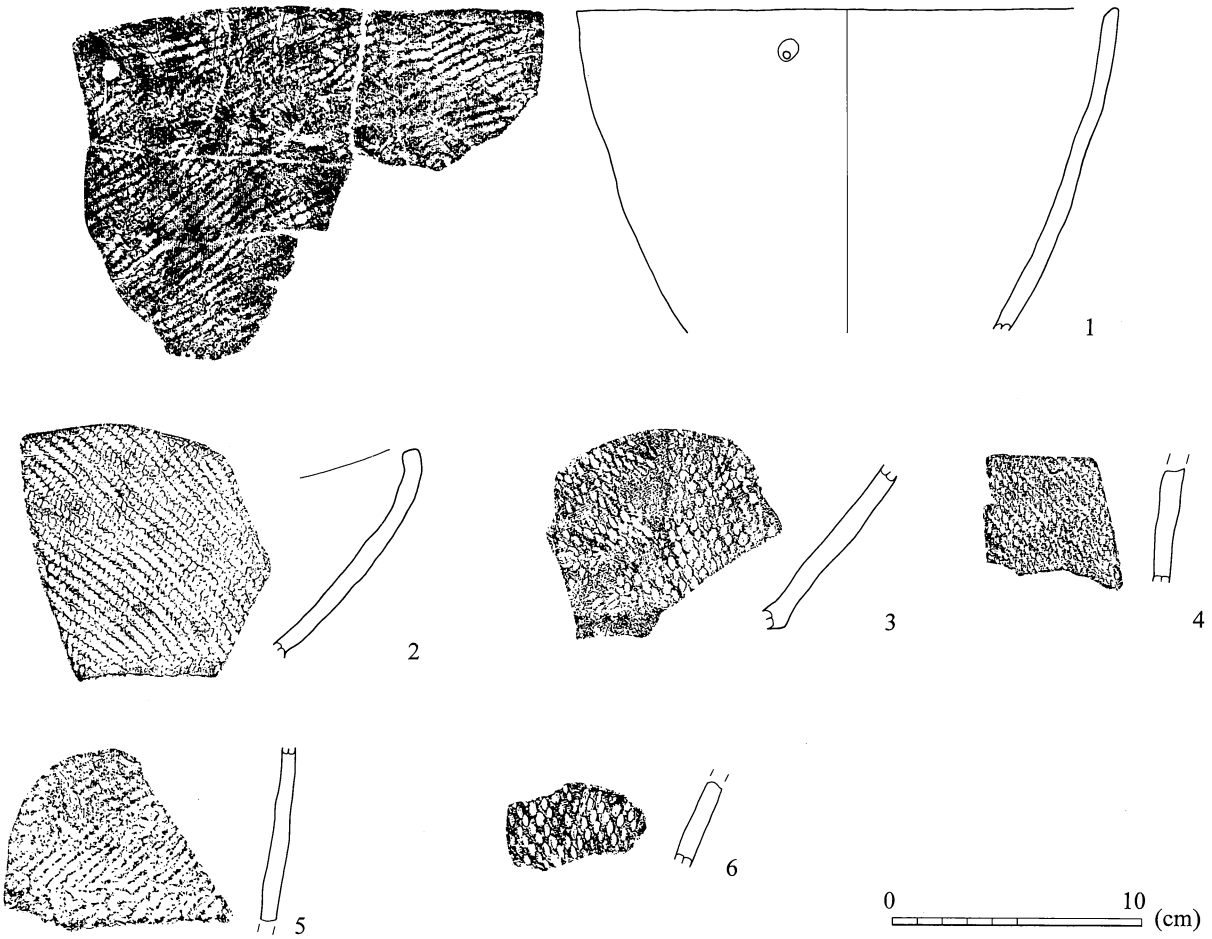
第302図　竪穴住居跡　ＳＢ122土器出土状況



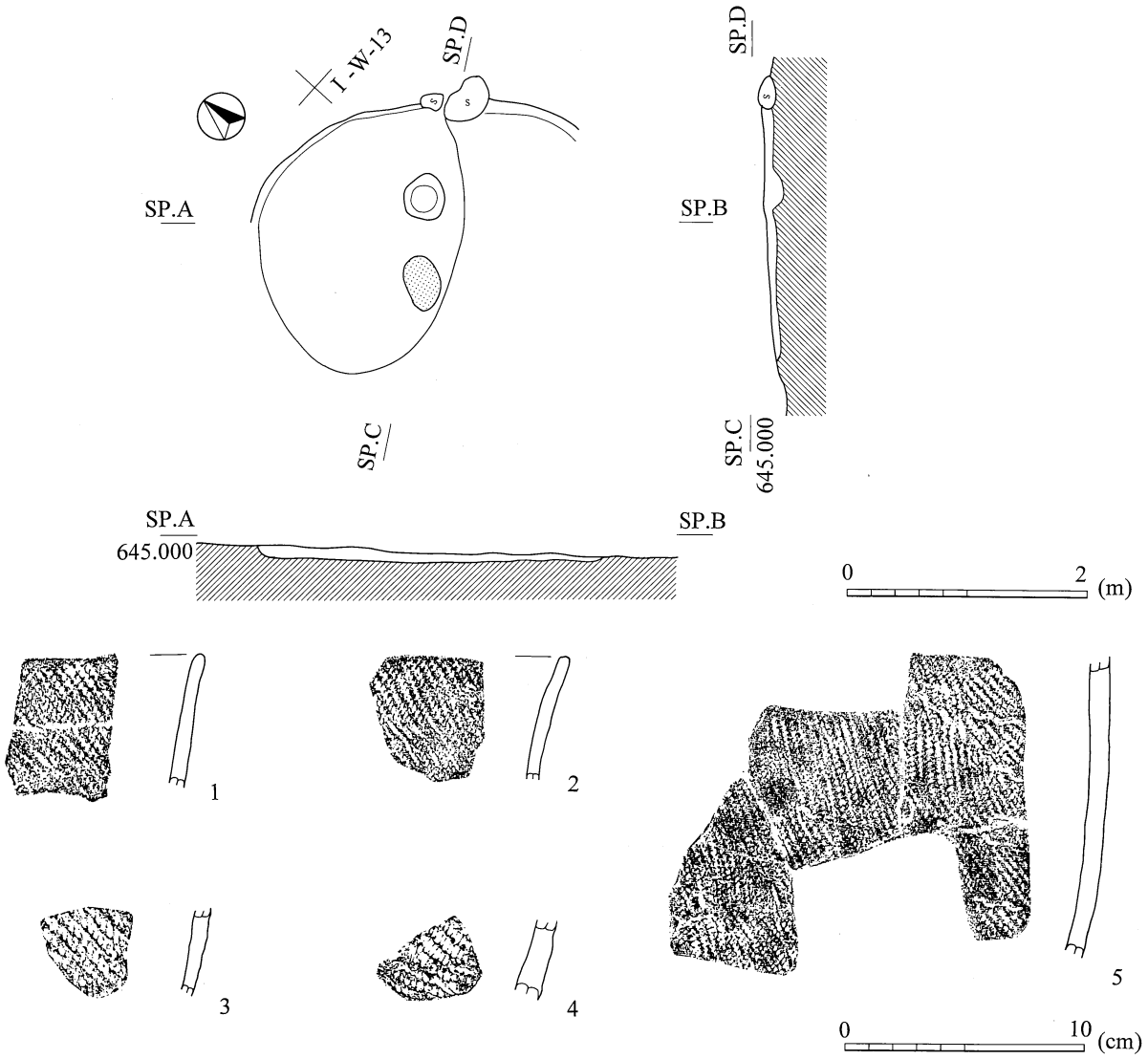
第303図　竪穴住居跡　ＳＢ122出土土器



第304図　竪穴住居跡　ＳＢ124・土器出土状況



第305図　竪穴住居跡　ＳＢ124出土土器



第306図　竪穴住居跡　ＳＢ125・出土土器

検　出　表土（Ｉ層）除去後、黄褐色ローム層上面を精査したところ、ほぼ円形の黒褐色土の落ち込みと土器のちらばりが検出された。土層観察用のトレンチを十字に設定し掘り下げたところ、床面と考えられる堅緻面と立ち上がりを確認した。

構　造　軸を北東―南西に持つ3.8×4.0ｍの楕円形。住居跡北半には堅い床面が残存する。７基の小土坑が検出された。径25～30cmで掘り込みも浅いが、柱穴と考えられる。

炉　北と西側に炉石が残る石囲炉。西炉石内面には被熱して赤化した跡が残る。また炉内部には焼土はなく、炉西側に焼土集中が認められた。

埋　甕　南西壁際に順位の埋設土器が検出された。土器の中に、径10cmの円礫と土器片が出土。

遺　物　１埋甕、隆帯貼付後、回転縄文ＲＬないしＬ充塡。２・７・８いずれも回転縄文施文後、沈線文が施される。

時　期　縄文時代中期後葉　加曽利Ｅ式

ＳＢ124（第304・305図）　　位置　Ｉ－Ｗ－１・６

検　出　表土（Ｉ層）および砂礫混シルト（II層）除去後、遺物包含層（III層）を精査中に縄文土器が集中

する部分が認められたので、土層観察用ベルトを残して掘り下げたところ、平坦面とわずかに立ち上がりが認められたので、住居跡と推定した。

構　造　一辺約３ｍの不整形な遺構。平坦面が広がるが、堅くはない。小土坑が１基検出された。柱穴か。

遺　物　１～６いずれも横位単節縄文施文。胎土に繊維は含まれない。チャート製石匙（第353図53）出土。

時　期　縄文時代前期後葉　諸磯ａ式

ＳＢ125（第306図）　　位置　Ｉ－Ｗ－12・13

検　出　表土（Ｉ層）および砂礫混シルト（II層）除去後、遺物包含層（III層）を精査し、掘り下げていたところ、略円形の黒褐色土の落ち込みが認められた。よって土層観察用のトレンチを十字に設定、掘り下げると平坦面、立ち上がり、焼土集中部が検出され、住居跡と推定した。

構　造　径数ｍ程度の略円形か。かろうじて、一部の床面ローム層（Ｖ層）が露出し、立ち上がりが認められた。柱穴は不明。

炉　中央に焼土が集中する部分があり、地床炉か。ただし掘り込みは分からない。

遺　物　１～５いずれも横位単節縄文施文。胎土に繊維は含まれない。黒曜石製石鏃（第352図６）出土。

時　期　縄文時代前期後葉　諸磯ａ式

(2)　古墳時代

ＳＢ116（第307・308図）　　位置　Ｉ－Ｗ－21・22

構　造　北東―南西に軸を持つ5.1×4.9ｍの長方形。住居跡北半には立ち上がりが、中央部には床面が検出された。また、床面直上からは炭化材が出土しているが、炭化材の出土位置から考えて垂木材と考えられる。炉、カマドは検出されていない。

遺　物　１～８土師器。２器台脚か。３壺ないし器台か。４～８壺ないし甕。６底部に広葉樹の葉痕。

時　期　古墳時代前期後葉

ＳＢ117（第309図）　　位置　Ⅳ－Ｂ－３・４

構　造　北西―南東に軸を持つ一辺5.4ｍの略方形。Pit１～４は柱穴。Pit５・６は石を伴う炉か。

遺　物　１～17土師器。１土製円盤。２手捏土器。３坏。４～10ミガキ調整が施された小型壺。11・12器台か。13～15ケズリないしハケ目調整の甕。17甑。磨石が２点（第355図79・90）出土。

時　期　古墳時代前期後葉

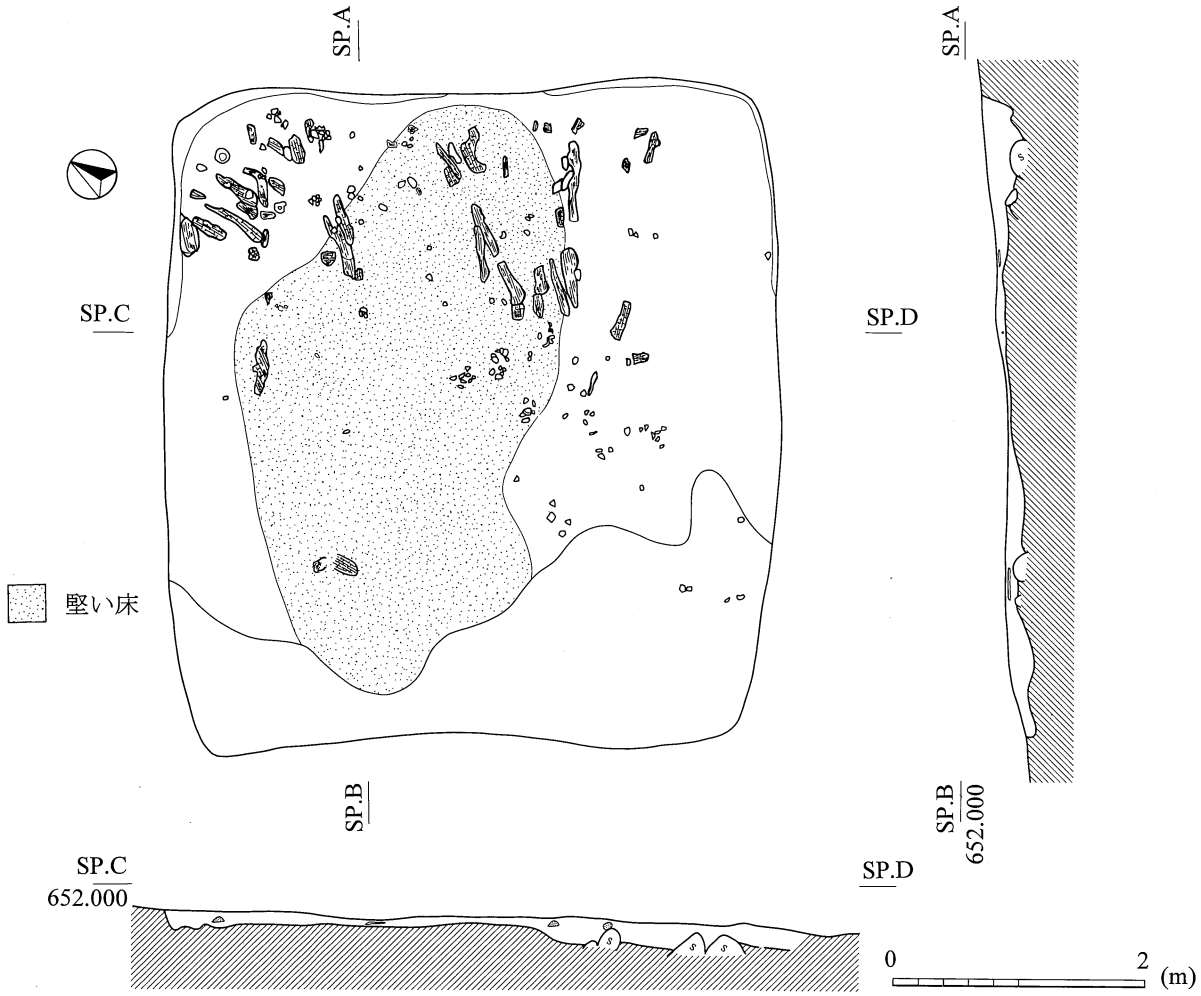
ＳＢ123（第310図）　　位置　Ⅳ－Ｋ－10ほか

構　造　北東―南西に軸を持つ3.3×3.1ｍの略方形。柱穴は２基検出されている。また住居内東側に堅緻な床面および立ち上がりが検出されている。

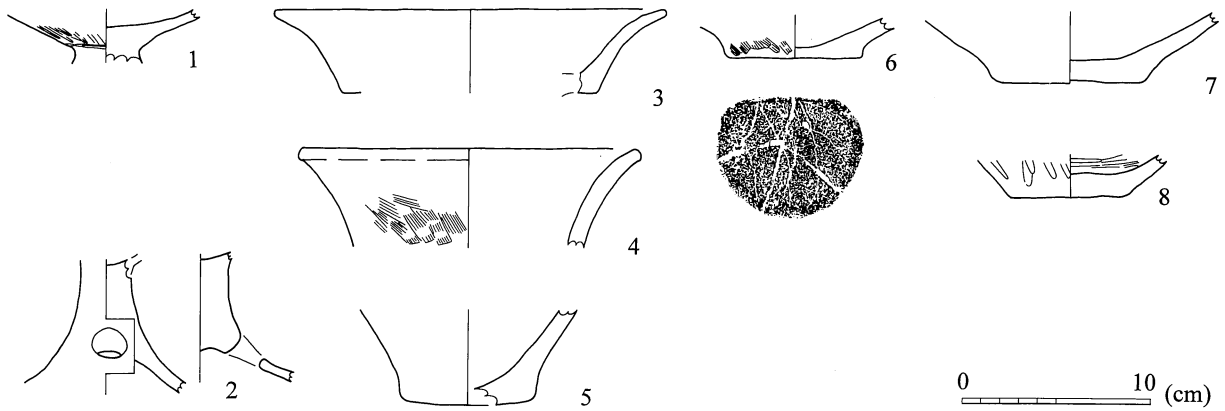
炉　住居跡中央やや東よりに焼土集中部分があり、炉か。

遺　物　１～３土師器。１坏。２器台。３甑。

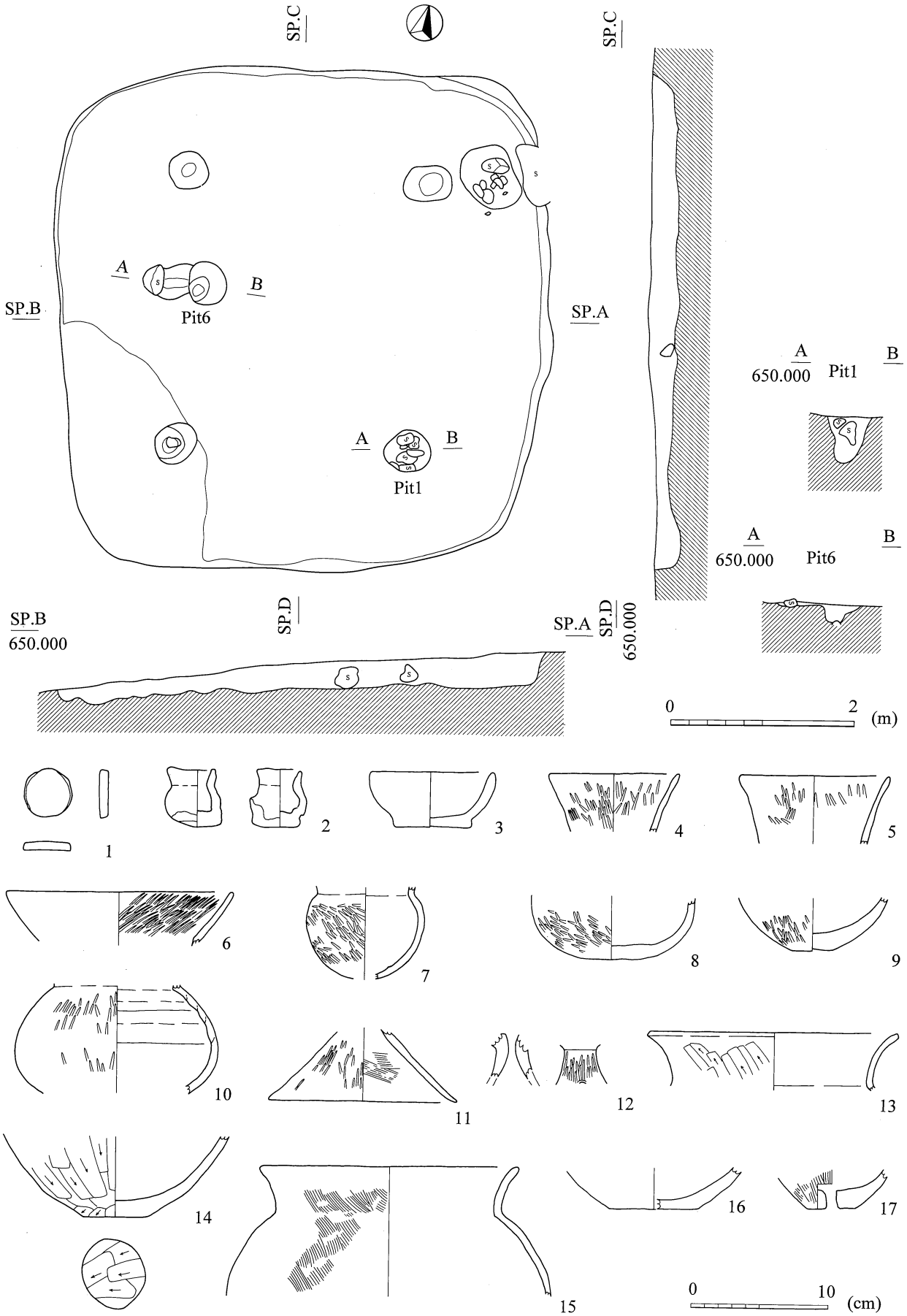
時　期　古墳時代前期後葉か



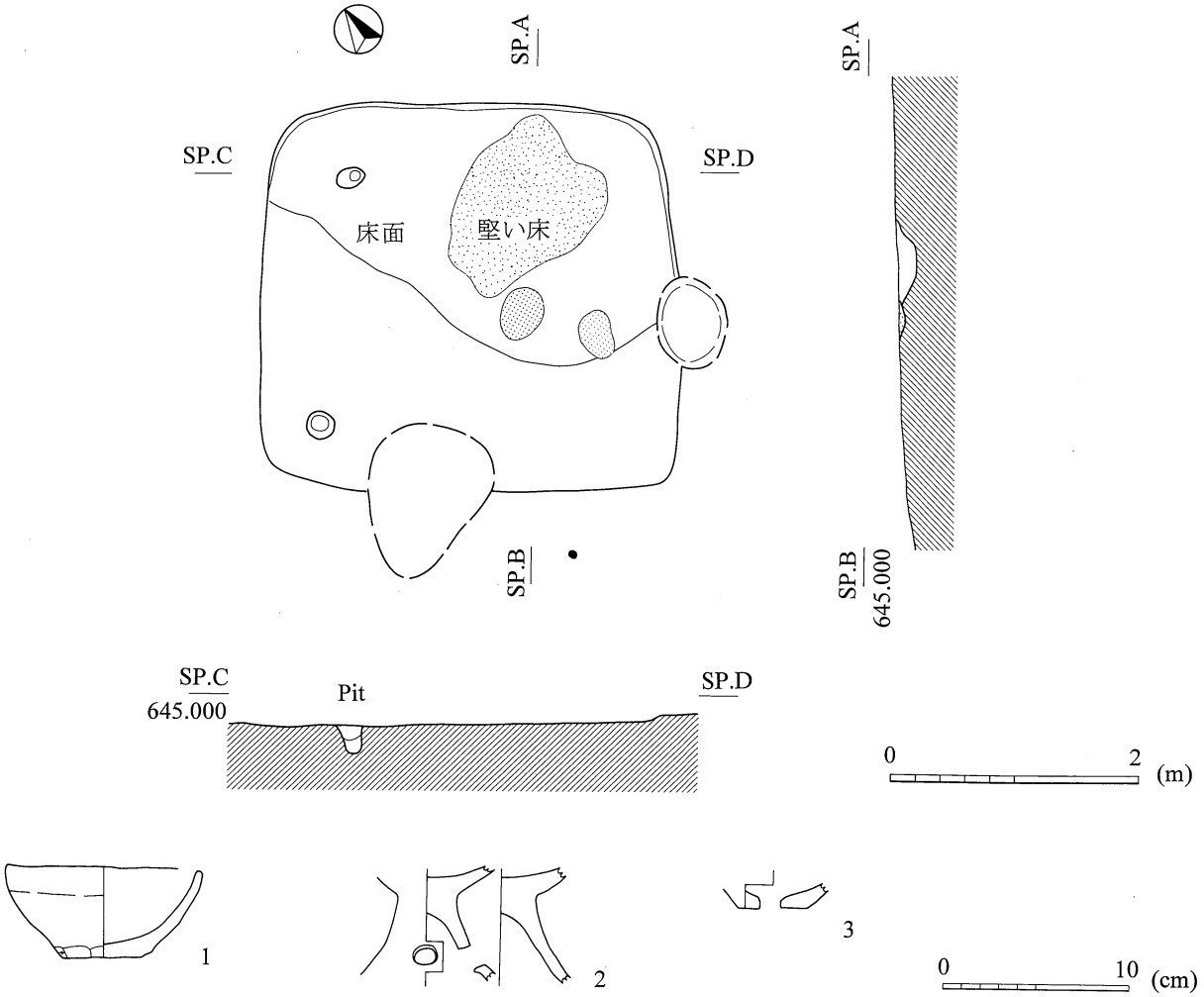
第307図　竪穴住居跡　ＳＢ116



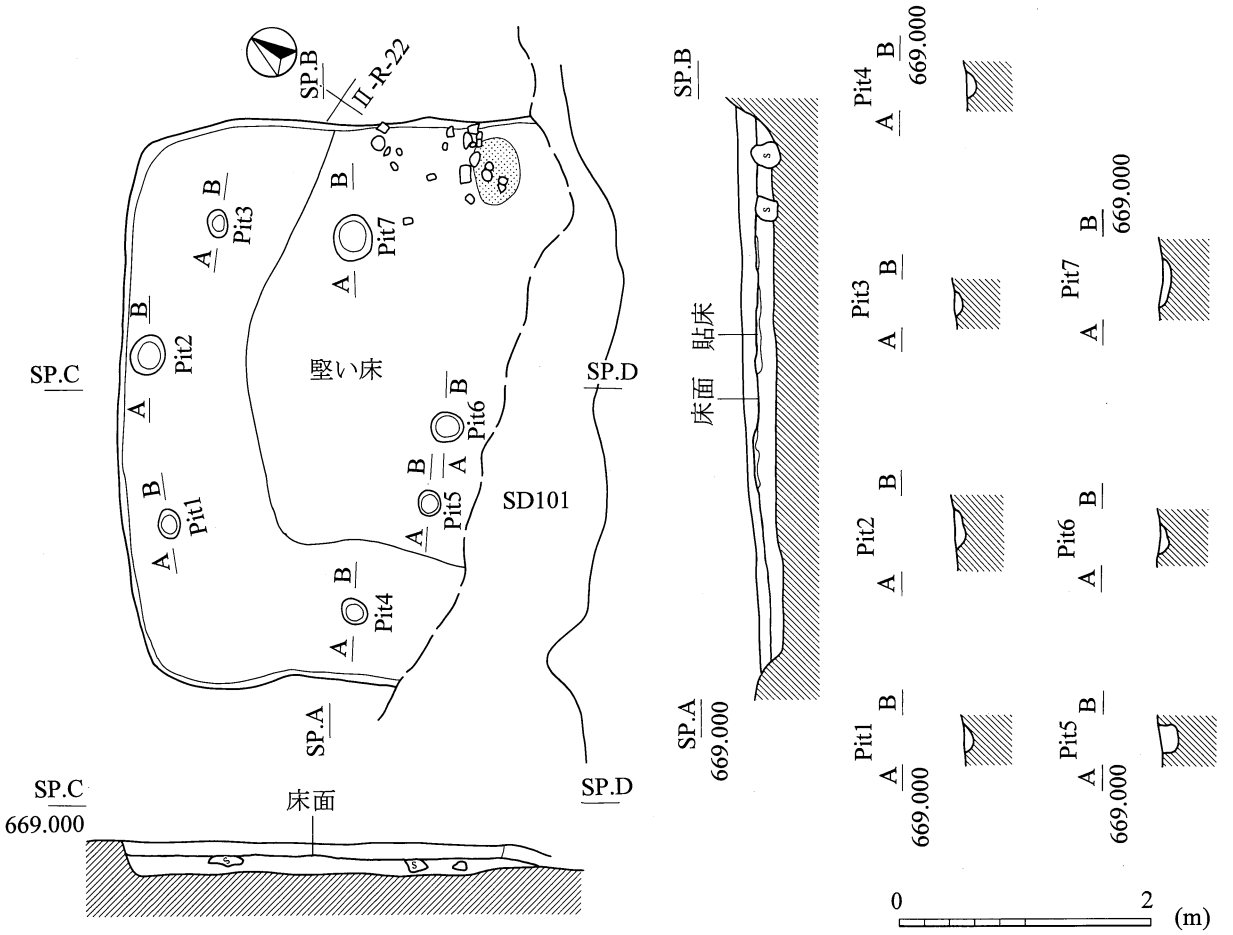
第308図　竪穴住居跡　ＳＢ116出土土器

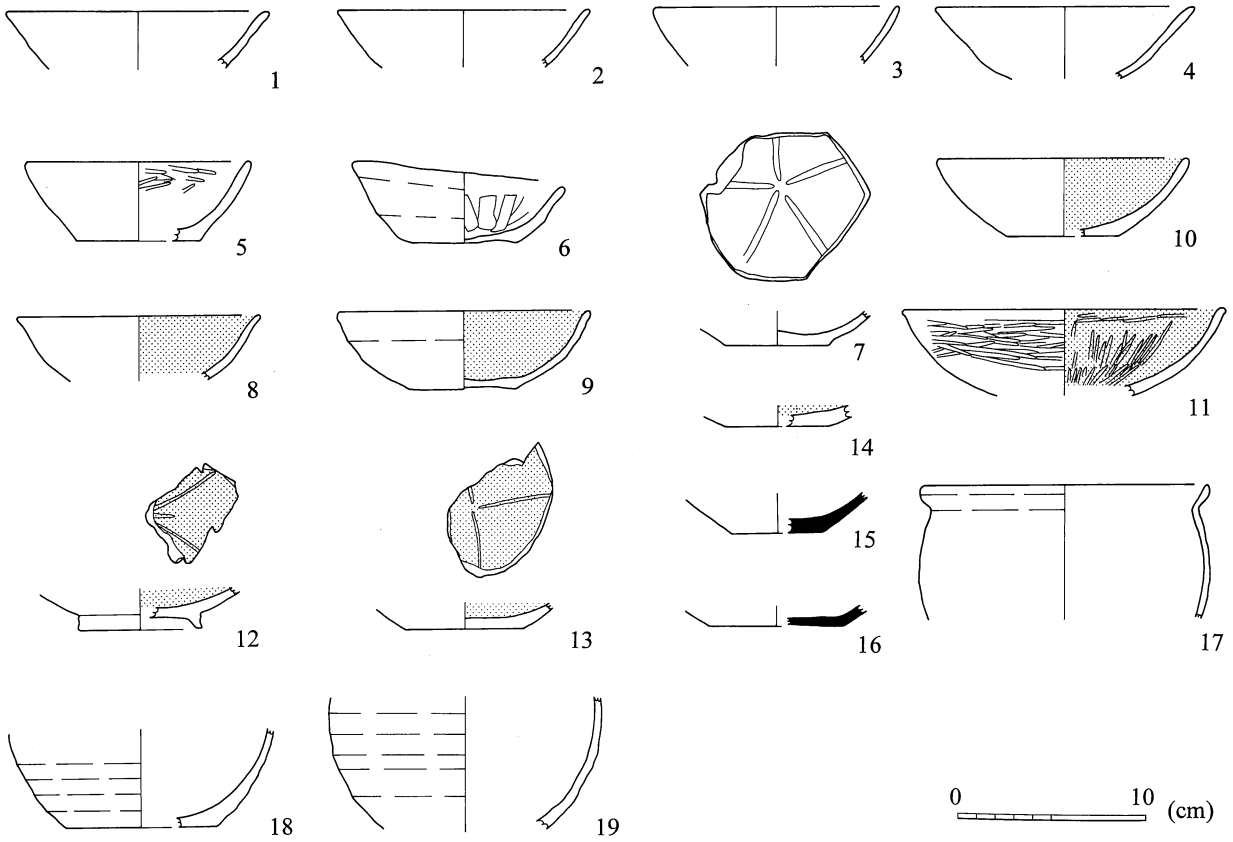


第309図　竪穴住居跡　ＳＢ117・出土土器

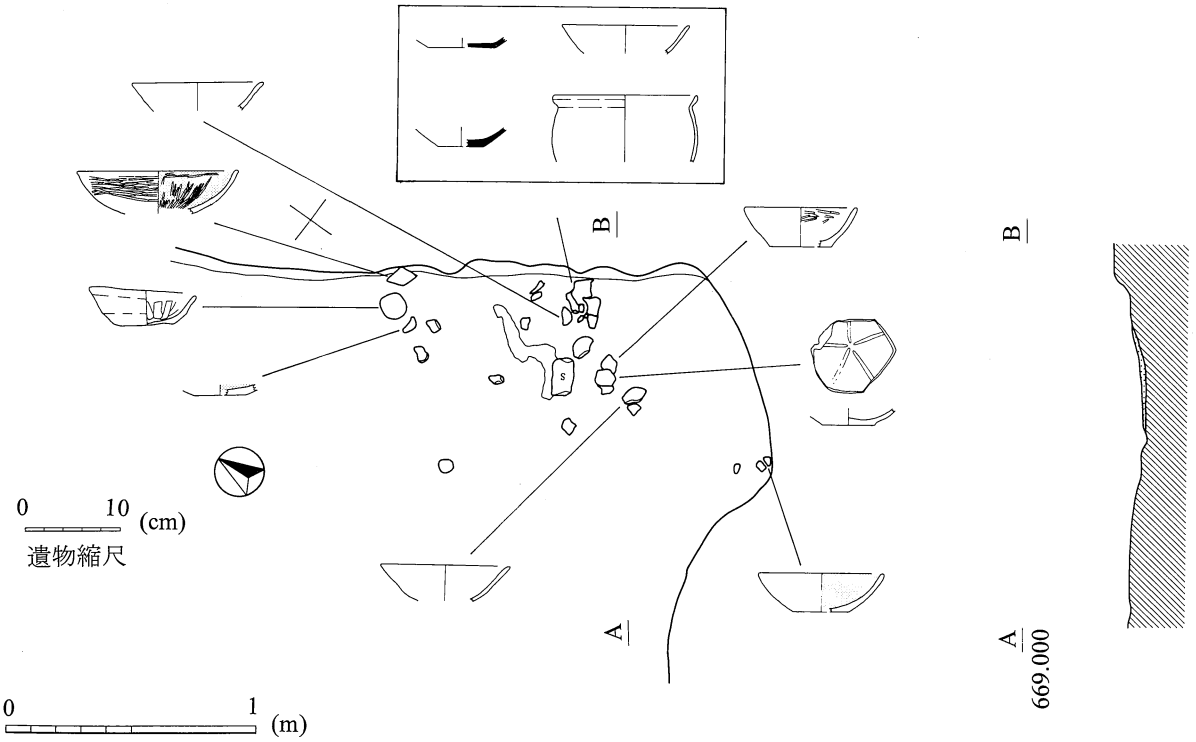


第310図　竪穴住居跡　ＳＢ123・出土土器





第311図　竪穴住居跡　ＳＢ101・出土土器



第312図　竪穴住居跡　ＳＢ101カマド・土器出土状況

(3) 古代

ＳＢ101（第311・312図）　　位置　Ⅱ－Ｒ－16ほか

検　出　耕作土（Ⅰ層）除去後、ローム層（Ⅴ層）直上で、ほぼ方形の黒色土を検出。土層観察用トレンチを住居跡の軸に合わせて設定し、掘り下げたところ、床面および立ち上がりが確認され、さらにＳＤ101に切られていることがわかった。

構　造　北東―南西に軸を持つ4.4×(3.5)ｍの長方形。住居跡東側から中央部にかけて暗赤褐色土の堅緻な床面が認められる。小土坑が７基検出された。このなかに柱穴も含まれるものと思われる。

カマド　東辺南よりに焼土集中部とカマド構築材（袖石）が検出された。このカマド付近に土器が集中。

遺　物　１～７土師器坏。８～14黒色土器。12椀か。12以外は坏。15・16須恵器坏。17～19土師器甕。ロクロ成形。

時　期　平安時代中期　佐久編年10段階前後

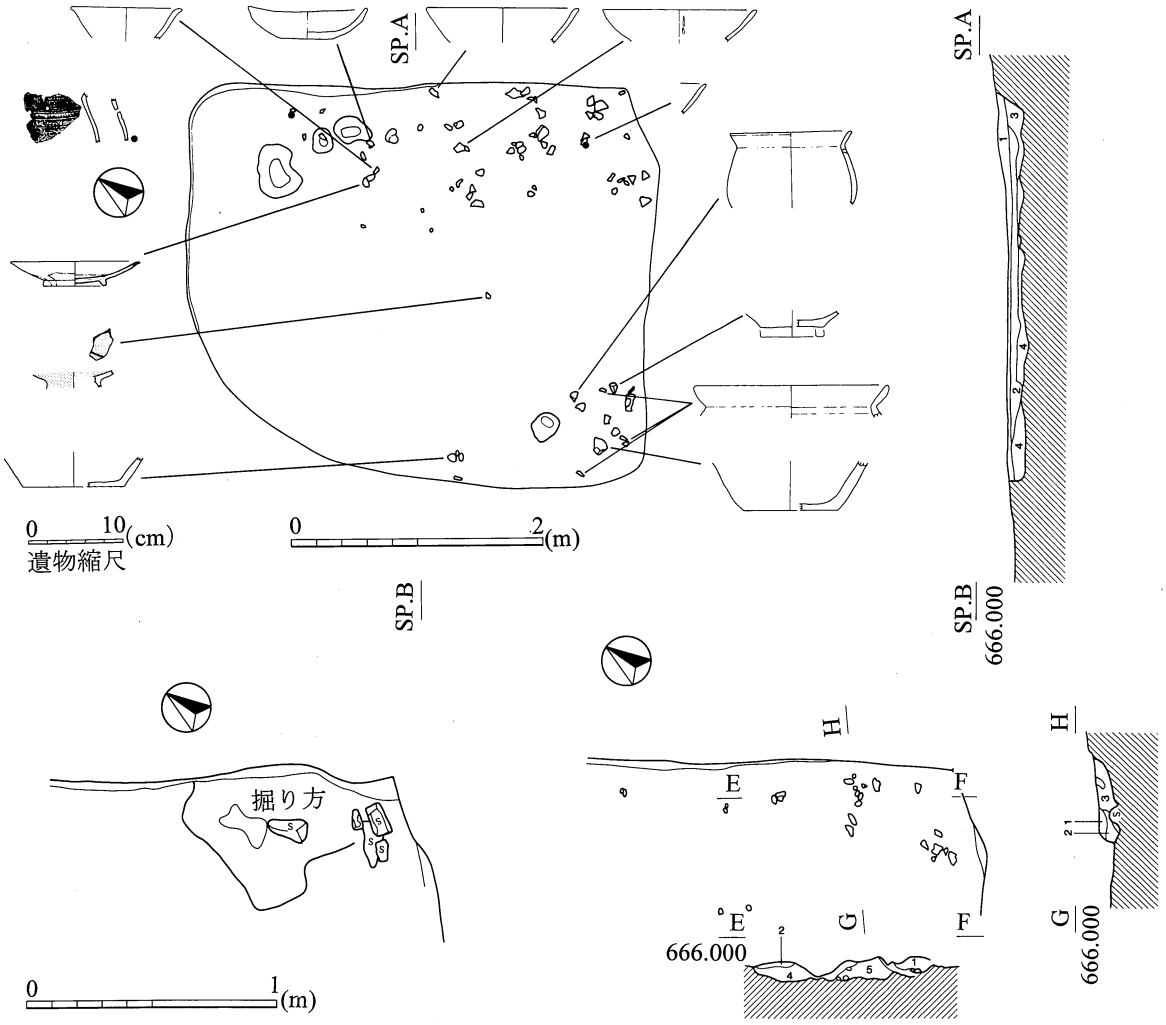
ＳＢ102（第313・314図）　　位置　Ⅱ－Ⅴ－３

構　造　北西―南東に軸をもつ現存(3.7)×3.2ｍの方形。住居跡北東隅に焼土集中や構築材と思われる石材が分布している。かろうじて床面が検出できたが西半分の削平が著しい。

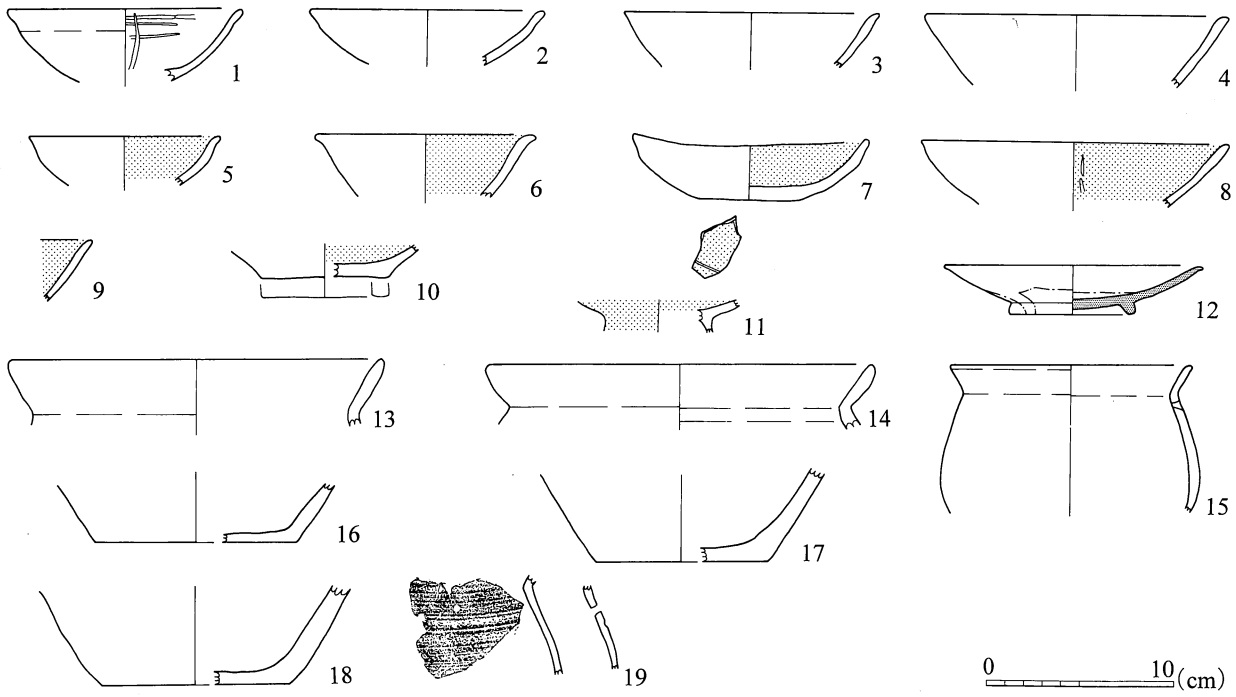
カマド　北東辺の東隅にカマドの焼土および構築材と思われる石材が残存している。

遺　物　１～４土師器坏。５～11黒色土器、５～９坏か、10・11椀。12灰釉陶器皿。13～19土師器甕。いずれもロクロ成形。

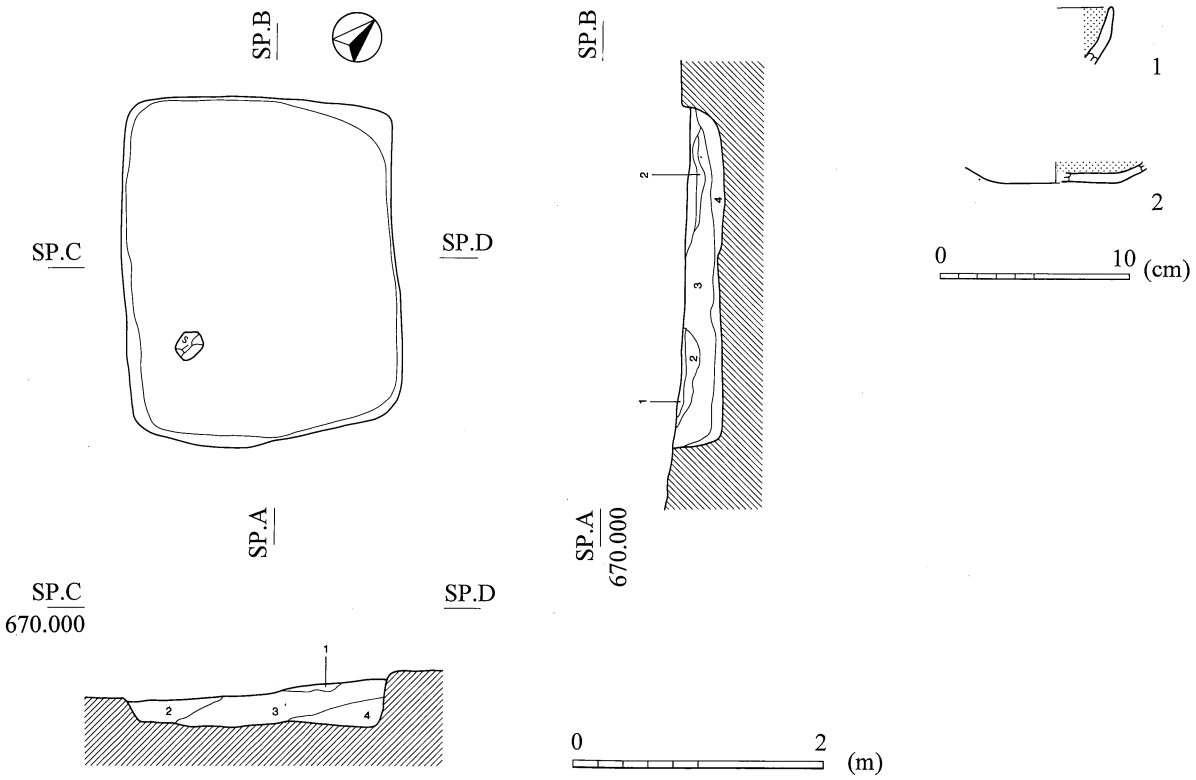
時　期　平安時代中期　佐久編年10段階前後



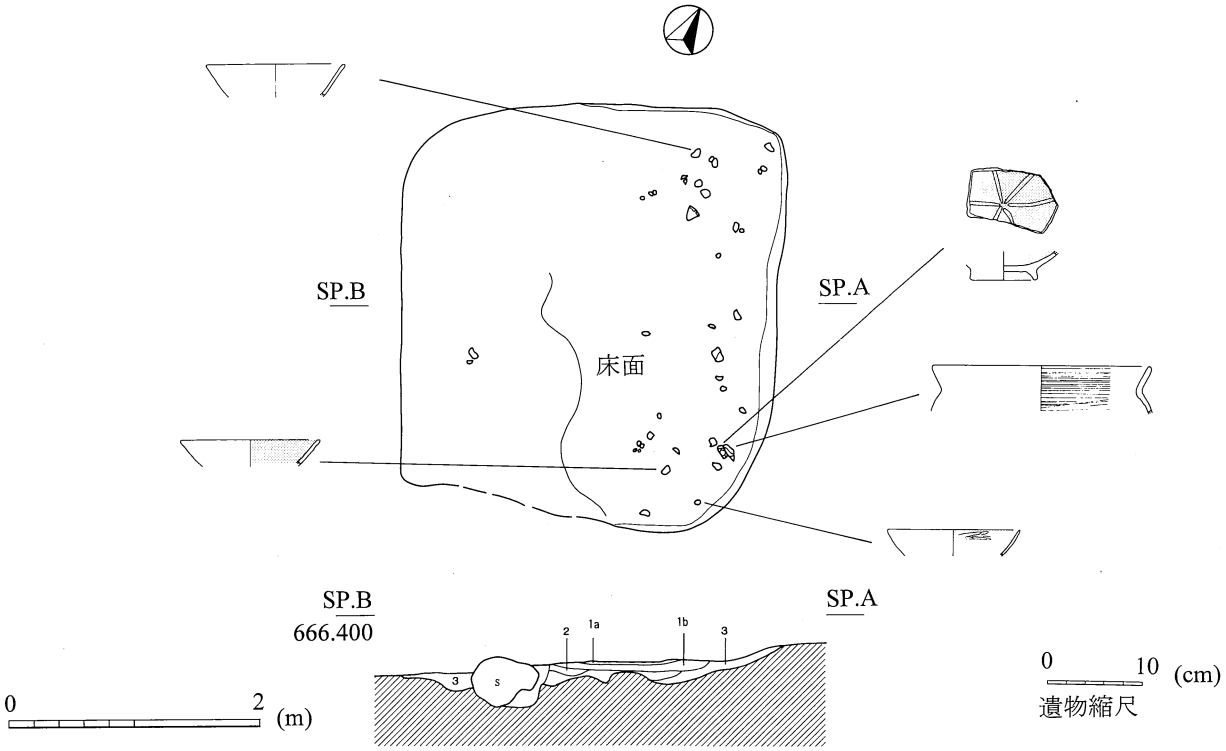
第313図　竪穴住居跡　ＳＢ102・カマド



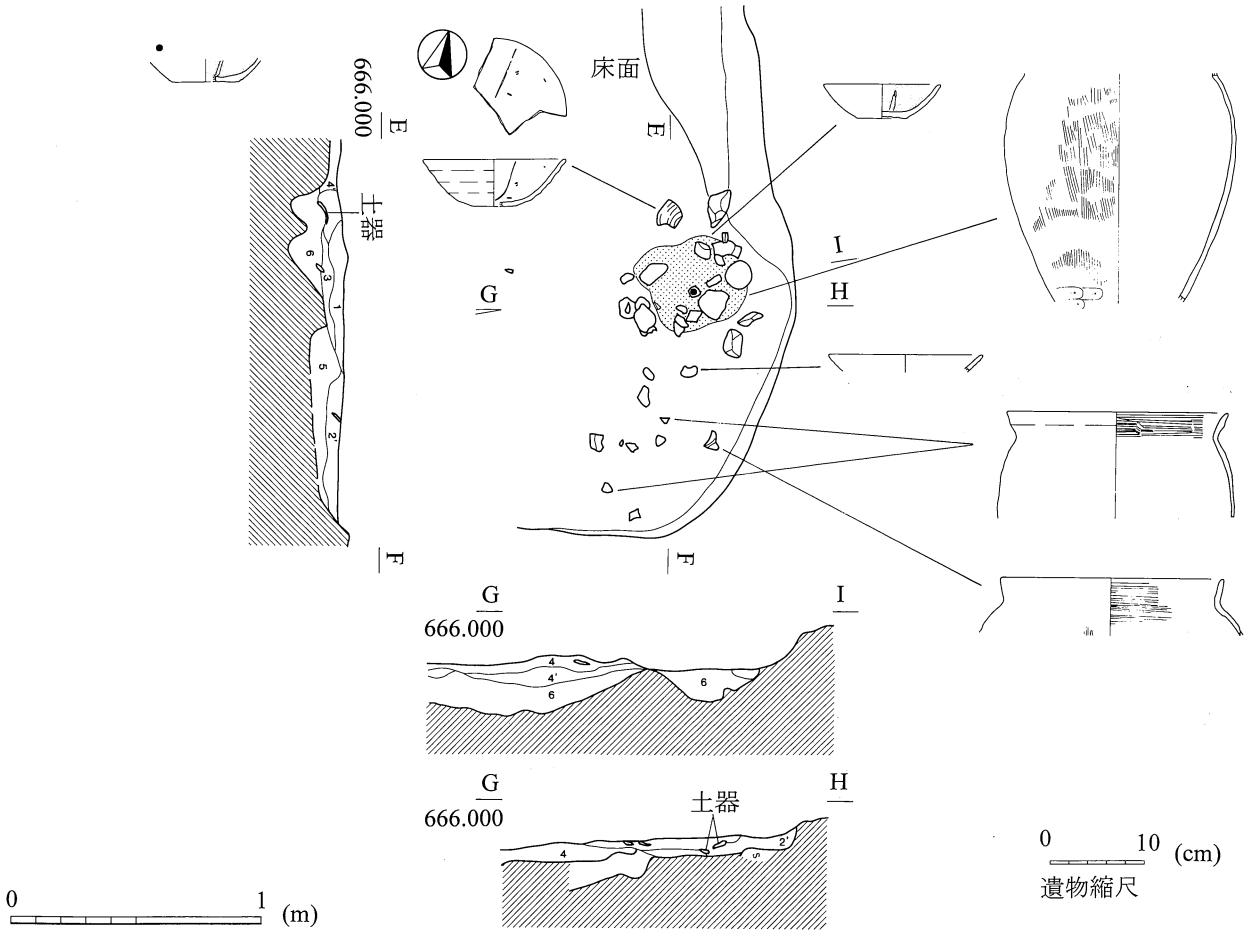
第314図　竪穴住居跡　ＳＢ102出土土器



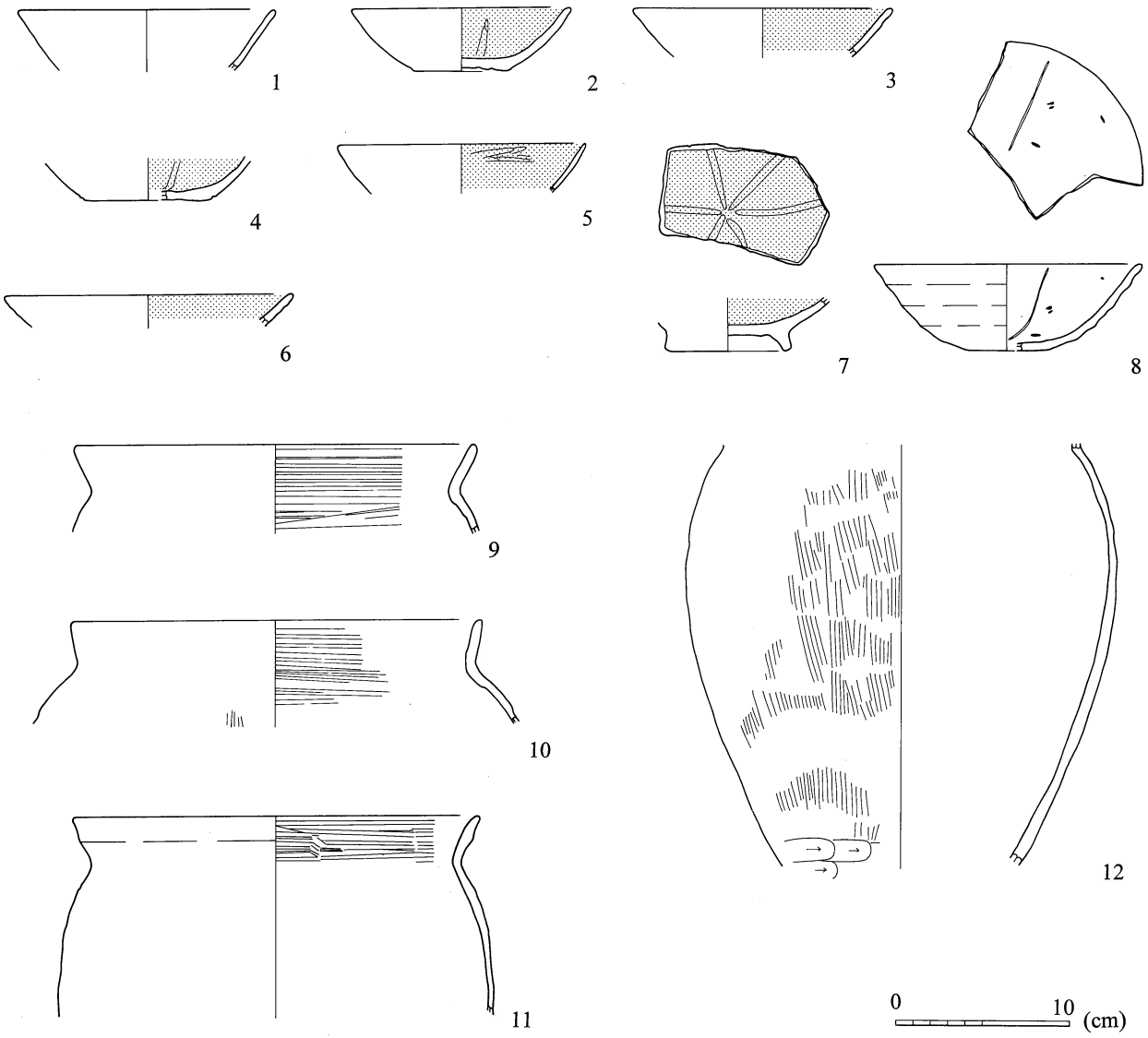
第315図　竪穴住居跡　ＳＢ103・出土土器



第316図　竪穴住居跡　ＳＢ105・土器出土状況



第317図　竪穴住居跡　ＳＢ105カマド・土器出土状況



第318図　竪穴住居跡　ＳＢ105出土土器

ＳＢ103（第315図）　　位置　Ⅱ－Ｑ－10

検　出　表土除去後、ローム層直上での精査で、黒色土の落ち込みが見られた。先行トレンチを設定して掘り下げたところ、堅緻ではないが平坦面と直な立ち上がりが確認された。

構　造　北西―南東に軸をもつ2.7×2.1ｍの長方形。床面は平坦で、地山のローム層が露出している。カマドや柱穴は検出されなかったが、床面、立ち上がり、規模から建物跡と判断した。

遺　物　１・２黒色土器坏。

時　期　平安時代

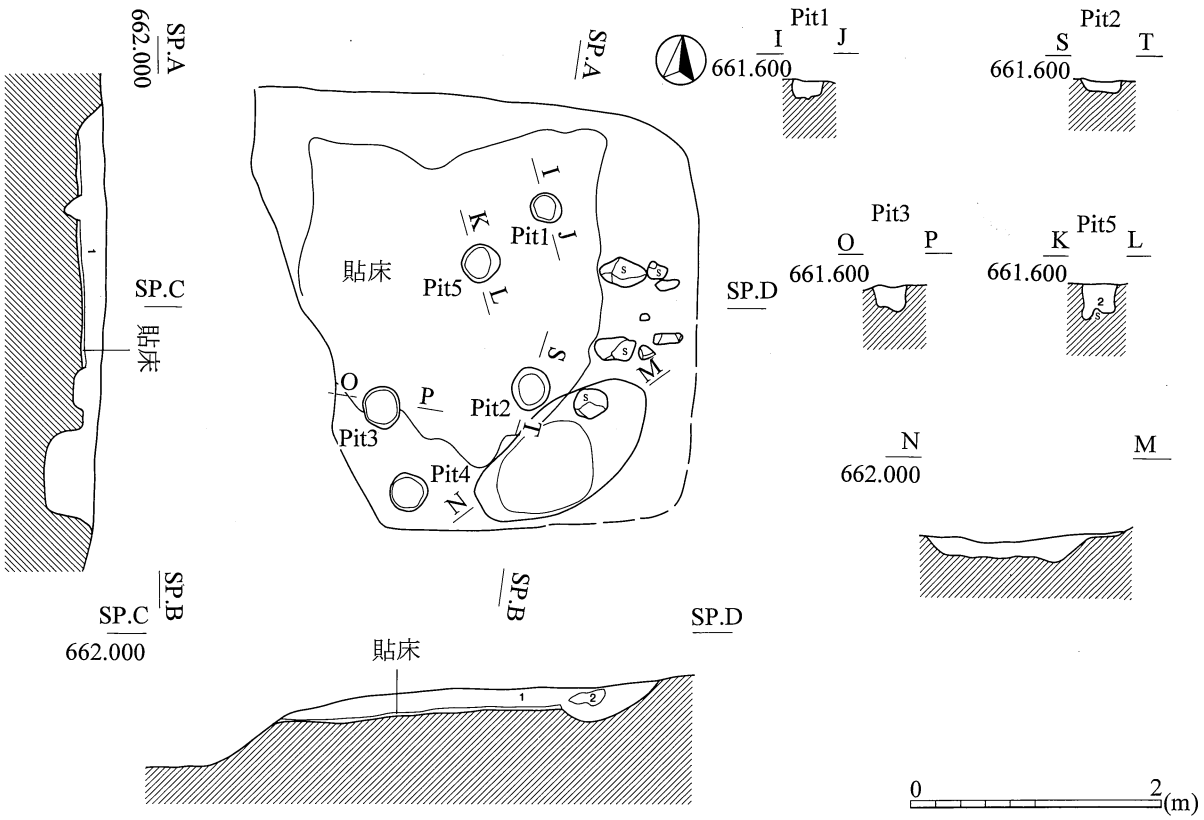
ＳＢ105（第316～318図）　　位置　Ⅱ－Ｑ－12・13

構　造　北西―南東に軸をもつ3.3×3.0ｍの長方形。西側の削平が著しい。床面はあまり平坦ではない。

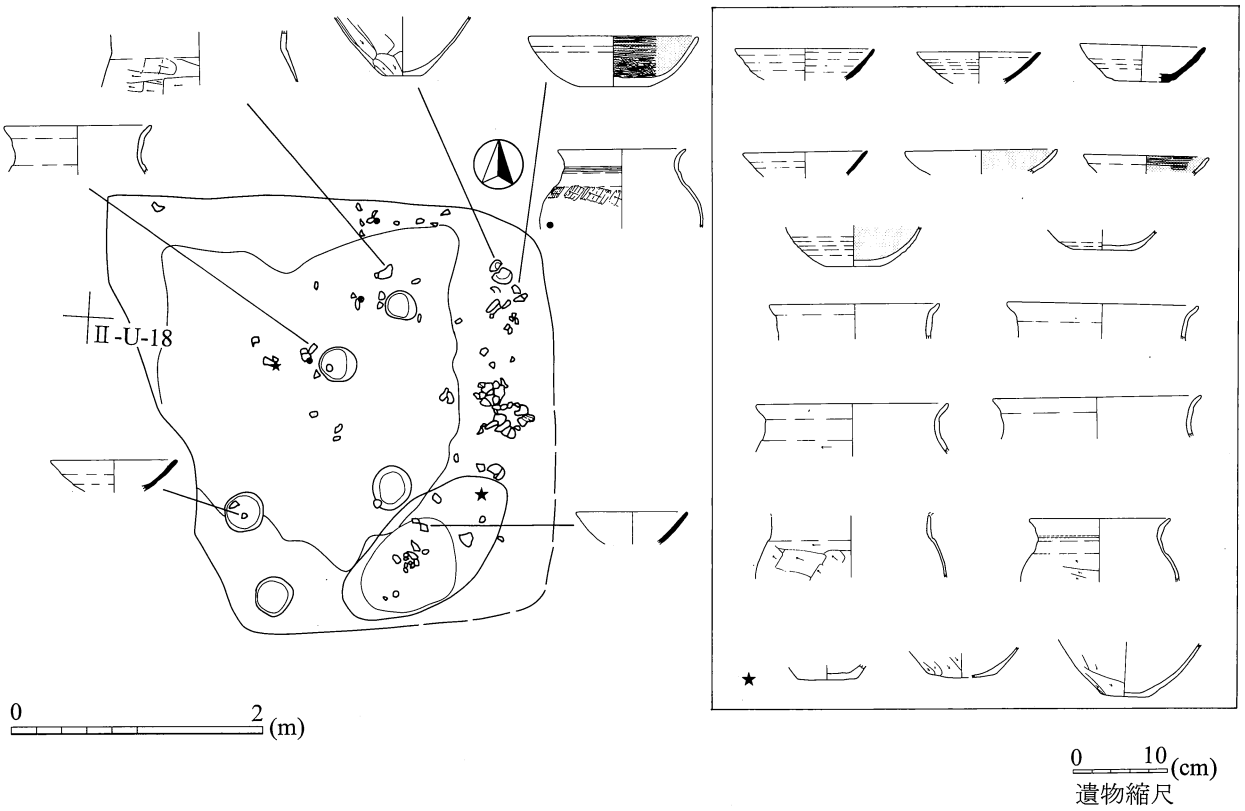
カマド　東隅に土器、焼土、構築材と思われる石が集中する。

遺　物　１・８土師器坏。２～７黒色土器坏ないし椀。９～12土師器甕。９～11口縁部内面に回転ハケ目調整を施す。12外面縦位ハケ目調整、底部付近は横位ケズリ調整を施す。

時　期　平安時代中期　佐久編年10段階前後



第319図　竪穴住居跡　ＳＢ106



第320図　竪穴住居跡　ＳＢ106・ＳＫ土器出土状況